

四国縦貫自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
32

荒川遺跡
第1分冊

2005

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団

四国縦貫自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
32

荒川遺跡
第1分冊

二〇〇五

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団

四国縦貫自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
32

荒川遺跡
第1分冊

2005

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団



調査地遠景（南より）



調査区遠景（南より）



包含層出土繩文土器 (中期)



包含層出土縄文土器（後期前葉）



包含層出土縄文土器（後期前葉～中葉）



SK1033 出土遺物



裝飾品



包含層出土遺物



包含層出土遺物



SK1189 一括出土遺物



SP11347 一括出土遺物

序 文

本書は四国縦貫自動車道（美馬～井川間）の建設に伴い、平成8年度と平成9年度に調査を実施した美馬市美馬町に所在する荒川遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。

当遺跡は吉野川中流域北岸、讃岐山脈南麓に位置しており、古代を除く縄文時代から江戸時代にかけての遺構・遺物が確認され、鎌倉・室町時代を主体とする複合遺跡であることが判明しました。縄文時代では遺構数が少ないものの、県内でも有数の縄文土器の出土量が認められ、また弥生時代では後期を主体とする住居、古墳時代後期の墳墓、鎌倉・室町時代では大量の鑄造遺物が出土した集落跡などが確認されました。

その中で特に注目されるものとして、60,000点にも及ぶ縄文時代中期～後期の土器の出土をあげることができます。包含層からの出土が大半を占めますが、出土量は徳島市矢野遺跡に匹敵し、徳島県の縄文時代を考える上で重要な資料といえます。本書が調査研究の一資料として活用され、埋蔵文化保護の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査の実施および報告書作成に当たり、日本道路公団をはじめとして関係諸機関並びに地元の皆様に多大の御援助、御協力を頂き、また研究者の方からは重要な御教示を賜りました。ここに深く感謝の意を表すと共に、今後とも御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成17年9月

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

理事長 佐藤 勉

例 言

1. 本書は四国縦貫自動車道建設に伴い、平成8年(1996)度から平成9年(1997)度にかけて調査を実施した荒川遺跡(美馬市美馬町所在)の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は日本道路公団四国支社から徳島県が委託を受け、徳島県からの委託により、財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。

3. 発掘調査及び報告書作成についての実施期間は次の通りである。

・発掘調査期間	試掘一次	平成 7年 9月18日	～	平成 7年 9月28日
	試掘二次	平成 8年 6月17日	～	平成 8年 7月 1日
	試掘三次	平成 9年 4月15日・9月18日・12月25日		
	一次調査	平成 8年 4月 3日	～	平成 9年 3月21日
	二次調査	平成 8年 7月22日	～	平成 9年 2月27日
	三次調査	平成 9年 9月11日	～	平成10年 1月30日
・報告書作成期間		平成12年11月 1日	～	平成16年10月31日

4. 遺構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による記号を用いた。

凡例

SA 掘立柱建物	SB 竪穴住居	SK 土抗	SO 窯
SP 柱穴	SQ 灰原	ST 墓	SX 不明遺構

5. 方位は国土座標第、IV系の北、高さは東京湾標準潮位(T.P.)を表す。

6. 本書で用いた土層及び土器の色調は小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』1996年度版によった。

7. 遺物番号は全て通し番号とし、本文・挿図・表・図版と一致する。

8. 第3図の地形図は建設省国土地理院発行の1/50,000の地形図「脇町」「池田」を転載使用したものである。

9. 調査に当たっては、次の機関の指導・協力を得た。

徳島県教育委員会 日本道路公団四国支社 同池田工事事務所 同脇工事事務所
徳島県土木部縦貫道推進局 同中央事務所 美馬町

10. 本報告書の土器実測図で、断面白抜きは縄文土器・弥生土器・土師質土器、網掛けは瓦器、黒塗りは須恵器・陶器・磁器を表す。

11. 出土遺物の自然科学分析は、土器付着物の分析をバリノ・サーヴェイ株式会社に、赤色物質付着土器・ガラス製品の分析を(財)徳島県埋蔵文化財センター 植地岳彦氏に依頼した。

12. 遺物の掲載サイズは、縄文土器は1/4、他の土器は基本的に1/3(大型の場合、随時大きさを1/4に変更)である。ガラス玉・勾玉などの装飾品は1/1、土錘などの土製品および銭貨は2/3、鉄器・鉄滓は1/2で掲載している。石器は石鏃・石錐・楔形石器などが2/3、その他の石器は大きさによって1/2~1/8で掲載している。

遺構は基本的に遺物出土状況図は1/20(遺構が大きいものは1/40)、柱穴は1/20、土坑は1/20・1/40、竪穴住居・掘立柱建物は1/60もしくは1/80、溝の断面図は1/40で掲載している。

13. 断面図における遺物のドットは、●は土器を、△は石を、■はその他(銭貨・鉄製品等)を、□は炭化物を表す。

14. 掘立柱建物の計測部位に関しては、次のように行った。

- ・ 相対的に長さの短い方を梁間、長い方を桁行とする。
- ・ 柱間寸法は柱穴掘り方の中心間の距離を計測し、最大値・最小値を表した。
- ・ 主軸方向は、桁行の方向を主軸とする。計測に関しては両端の梁間の柱間寸法をそれぞれ二等分し、その点を通る直線と真北との角度を計測した。

15. 本書の執筆はⅠ・Ⅰを菅原康夫が、Ⅱを鶴岡久代が、その他を大北和美が担当し、全体の編集は大北が行った。写真は遺物を植地岳彦が、遺構はそれぞれの調査担当者が撮影した。

本文目次

I 調査の経緯	1
1 調査に至る経緯	
2 調査の経過	
(1) 調査の経過	5
(2) 発掘調査の方法	5
(3) 調査日誌抄	8
3 報告書作成業務の経過	9
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	10
2 歴史的環境	11
III 調査成果	
1 基本層序	16
2 遺構と遺物	
(1) 縄文時代	24
土坑	
柱穴	
不明遺構	
(2) 弥生時代	61
竪穴住居	
溝	
土坑	
柱穴	
集石遺構	
(3) 古墳時代	90
古墳	
(4) 鎌倉・室町時代	103
掘立柱建物	
土坑	
炉	
柱穴	
集石遺構	
不明遺構	
(5) 包含層出土遺物	224

縄文時代
 弥生時代
 古墳時代
 鎌倉・室町時代

IV 自然科学分析

荒川遺跡の土器付着物分析	450
荒川遺跡出土の赤色物質付着土器の調査	457
荒川遺跡出土ガラス製品の調査	462

挿 図 目 次

第1分冊

第 1 図 調査区位置図	6	第26図 SP1237・1505遺構図・出土遺物	39
第 2 図 グリッド配置図	7	第27図 SP1516・1524・2047遺構図・出土遺物	41
第 3 図 荒川遺跡周辺地形分類図	10	第28図 SX1007遺物出土状況図	42
第 4 図 荒川遺跡周辺の遺跡分布図	12	第29図 SX1007遺構図	43
第 5 図 基本土層図(1)	17	第30図 SX1007出土遺物(1)	44
第 6 図 5-4・5区 土層図	18	第31図 SX1007出土遺物(2)	45
第 7 図 基本土層図(2)	19	第32図 SX1008遺構図・出土遺物	46
第 8 図 1区 北壁斜面・ベルト土層図	20	第33図 3区 集石・遺物検出状況図	47
第 9 図 3区 土層図	21	第34図 3区 遺構面エレベーション	49
第10図 基本土層図(3)	22	第35図 3区 遺物出土状況図(1)	52
第11図 遺構配置図(縄文～古墳)	25	第36図 3区 遺物出土状況図(2)	53
第12図 SK1021遺構図・出土遺物	27	第37図 3区 集石・遺物集中地点出土遺物(1)	54
第13図 SK1022遺構図・出土遺物	28	第38図 3区 集石・遺物集中地点出土遺物(2)	55
第14図 SK1023遺構図・出土遺物	29	第39図 3区 集石・遺物集中地点出土遺物(3)	56
第15図 SK1023出土遺物(1)	30	第40図 3区 集石・遺物集中地点出土遺物(4)	57
第16図 SK1023出土遺物(2)	31	第41図 3区 集石・遺物集中地点出土遺物(5)	58
第17図 SK1078・1105遺構図・出土遺物	31	第42図 3区 集石・遺物集中地点出土石器(1)	59
第18図 SK1111遺構図	32	第43図 3区 集石・遺物集中地点出土石器(2)	60
第19図 SK1111出土遺物	33	第44図 SB1001遺構図	62
第20図 SK1112遺構図・出土遺物	33	第45図 SB1001遺構図・出土遺物	63
第21図 SK1113遺構図・出土遺物	34	第46図 SB1001出土遺物(1)	64
第22図 SP1050・1062遺構図・出土遺物	35	第47図 SB1001出土遺物(2)	65
第23図 SP1062出土遺物	37	第48図 SB1002遺構図	67
第24図 SP1126・1164遺構図・出土遺物	37	第49図 SB1002遺構図・出土遺物	68
第25図 SP1186・1202・1222遺構図・出土遺物	38	第50図 SB1003遺構図・出土遺物	69

第129図	SP11347遺物出土状況図(1)	167	第168図	SX2003出土遺物(9)	215
第130図	SP11347遺物出土状況図(2)	168	第169図	SX2003出土遺物(10)	216
第131図	SP11347出土遺物	169	第170図	SX2004遺構図	217
第132図	SP11474・11479・11483・11490・11496遺構図・出土遺物	171	第171図	SX2005～2010遺構配置図	219
第133図	SP11505・11520遺構図・出土遺物	172	第172図	SX2005遺構図・出土遺物	220
第134図	SP2193・2263・2275遺構図・出土遺物	174	第173図	SX2005出土遺物	221
第135図	SP出土遺物(1)	176	第174図	SX2006・2007遺構図	222
第136図	SP出土遺物(2)	177	第175図	SX2008～2010遺構図	223
第137図	SP出土遺物(3)	178	第176図	1区 包含層出土縄文土器(1)	225
第138図	SU1002遺構図	179	第177図	1区 包含層出土縄文土器(2)	230
第139図	SU1002出土遺物	181	第178図	1区 包含層出土縄文土器(3)	231
第140図	SX1001遺構図	183	第179図	1区 包含層出土縄文土器(4)	232
第141図	SX1002・1005遺構図	184	第180図	1区 包含層出土縄文土器(5)	233
第142図	SX1006・1009遺構図	185	第181図	1区 包含層出土縄文土器(6)	235
第143図	SX1010遺構図(1)	186	第182図	1区 包含層出土縄文土器(7)	236
第144図	SX1010遺構図(2)	187	第183図	1区 包含層出土縄文土器(8)	237
第145図	SX1010 EK・EP遺構図・出土遺物	188	第184図	1区 包含層出土縄文土器(9)	238
第146図	SX1011・1012遺構図・出土遺物	189	第185図	1区 包含層出土縄文土器(10)	239
第147図	SX1013遺構図	191	第186図	1区 包含層出土縄文土器(11)	241
第148図	SX1013出土遺物	192	第187図	1区 包含層出土縄文土器(12)	242
第149図	SX1014・1015遺構図	192	第188図	1区 包含層出土縄文土器(13)	243
第150図	SX1016遺構図・出土遺物	194	第189図	1区 包含層出土縄文土器(14)	244
第151図	SX1017遺構図・出土遺物	195	第190図	1区 包含層出土縄文土器(15)	245
第152図	SX1018遺構図・出土遺物	196	第191図	1区 包含層出土縄文土器(16)	246
第153図	SX1019遺構図	198	第192図	1区 包含層出土縄文土器(17)	247
第154図	SX1020・1021遺構図・出土遺物	199	第193図	1区 包含層出土縄文土器(18)	248
第155図	SX1022遺構図	200	第194図	1区 包含層出土縄文土器(19)	249
第156図	SX2001遺構図	201	第195図	1区 包含層出土縄文土器(20)	250
第157図	SX2002遺構図	202	第196図	1区 包含層出土縄文土器(21)	251
第158図	SX2003遺構図	203	第197図	1区 包含層出土縄文土器(22)	252
第159図	SX2003遺構図・出土遺物	205	第198図	1区 包含層出土縄文土器(23)	254
第160図	SX2003出土遺物(1)	207	第199図	1区 包含層出土縄文土器(24)	255
第161図	SX2003出土遺物(2)	208	第200図	1区 包含層出土縄文土器(25)	257
第162図	SX2003出土遺物(3)	209	第201図	1区 包含層出土縄文土器(26)	258
第163図	SX2003出土遺物(4)	210	第202図	2区 包含層出土縄文土器(1)	260
第164図	SX2003出土遺物(5)	211	第203図	2区 包含層出土縄文土器(2)	261
第165図	SX2003出土遺物(6)	212	第204図	3区 包含層出土縄文土器(1)	263
第166図	SX2003出土遺物(7)	213	第205図	3区 包含層出土縄文土器(2)	264
第167図	SX2003出土遺物(8)	214	第206図	3区 包含層出土縄文土器(3)	265

第207図	3区 包含層出土縄文土器(4)	266	第246図	3区 包含層出土縄文土器(43)	308
第208図	3区 包含層出土縄文土器(5)	267	第247図	3区 包含層出土縄文土器(44)	309
第209図	3区 包含層出土縄文土器(6)	269	第248図	3区 包含層出土縄文土器(45)	310
第210図	3区 包含層出土縄文土器(7)	270	第249図	3区 包含層出土縄文土器(46)	311
第211図	3区 包含層出土縄文土器(8)	271	第250図	3区 包含層出土縄文土器(47)	313
第212図	3区 包含層出土縄文土器(9)	272	第251図	3区 包含層出土縄文土器(48)	314
第213図	3区 包含層出土縄文土器(10)	273	第252図	3区 包含層出土縄文土器(49)	315
第214図	3区 包含層出土縄文土器(11)	274	第253図	3区 包含層出土縄文土器(50)	316
第215図	3区 包含層出土縄文土器(12)	275	第254図	3区 包含層出土縄文土器(51)	317
第216図	3区 包含層出土縄文土器(13)	276	第255図	3区 包含層出土縄文土器(52)	318
第217図	3区 包含層出土縄文土器(14)	277	第256図	3区 第2包含層出土縄文土器(1)	320
第218図	3区 包含層出土縄文土器(15)	278	第257図	3区 第2包含層出土縄文土器(2)	321
第219図	3区 包含層出土縄文土器(16)	279	第258図	5-1~3区 包含層出土縄文土器	323
第220図	3区 包含層出土縄文土器(17)	280	第259図	5-5区 包含層出土遺物状況図	324
第221図	3区 包含層出土縄文土器(18)	281	第260図	5-5区 遺物出土状況図	325
第222図	3区 包含層出土縄文土器(19)	282	第261図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(1)	326
第223図	3区 包含層出土縄文土器(20)	283	第262図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(2)	327
第224図	3区 包含層出土縄文土器(21)	284	第263図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(3)	328
第225図	3区 包含層出土縄文土器(22)	285	第264図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(4)	329
第226図	3区 包含層出土縄文土器(23)	286	第265図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(5)	330
第227図	3区 包含層出土縄文土器(24)	287	第266図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(6)	331
第228図	3区 包含層出土縄文土器(25)	288	第267図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(7)	332
第229図	3区 包含層出土縄文土器(26)	289	第268図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(8)	333
第230図	3区 包含層出土縄文土器(27)	291	第269図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(9)	334
第231図	3区 包含層出土縄文土器(28)	292	第270図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(10)	335
第232図	3区 包含層出土縄文土器(29)	293	第271図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(11)	336
第233図	3区 包含層出土縄文土器(30)	294	第272図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(12)	337
第234図	3区 包含層出土縄文土器(31)	295	第273図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(13)	338
第235図	3区 包含層出土縄文土器(32)	296	第274図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(14)	340
第236図	3区 包含層出土縄文土器(33)	297	第275図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(15)	341
第237図	3区 包含層出土縄文土器(34)	299	第276図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(16)	342
第238図	3区 包含層出土縄文土器(35)	300	第277図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(17)	343
第239図	3区 包含層出土縄文土器(36)	301	第278図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(18)	344
第240図	3区 包含層出土縄文土器(37)	302	第279図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(19)	345
第241図	3区 包含層出土縄文土器(38)	303	第280図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(20)	346
第242図	3区 包含層出土縄文土器(39)	304	第281図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(21)	347
第243図	3区 包含層出土縄文土器(40)	305	第282図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(22)	348
第244図	3区 包含層出土縄文土器(41)	306	第283図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(23)	350
第245図	3区 包含層出土縄文土器(42)	307	第284図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(24)	352

第285図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(25)	……353	第324図	包含層出土土器(古墳) (1)	…………… 396
第286図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(26)	……354	第325図	包含層出土土器(古墳) (2)	…………… 397
第287図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(27)	……355	第326図	包含層出土土器(古墳) (3)	…………… 398
第288図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(28)	……356	第327図	包含層出土土器(古墳) (4)	…………… 399
第289図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(29)	……357	第328図	包含層出土土器(中世) (1)	…………… 401
第290図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(30)	……358	第329図	包含層出土土器(中世) (2)	…………… 402
第291図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(31)	……359	第330図	包含層出土土器(中世) (3)	…………… 403
第292図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(32)	……360	第331図	包含層出土土器(中世) (4)	…………… 404
第293図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(33)	……361	第332図	1区 包含層出土石器(1)	…………… 406
第294図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(34)	……362	第333図	1区 包含層出土石器(2)	…………… 407
第295図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(35)	……363	第334図	1区 包含層出土石器(3)	…………… 408
第296図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(36)	……364	第335図	1区 包含層出土石器(4)	…………… 409
第297図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(37)	……365	第336図	1区 包含層出土石器(5)	…………… 410
第298図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(38)	……366	第337図	1区 包含層出土石器(6)	…………… 411
第299図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(39)	……367	第338図	1区 包含層出土石器(7)	…………… 412
第300図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(40)	……368	第339図	1区 包含層出土石器(8)	…………… 413
第301図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(41)	……369	第340図	2区 包含層出土石器	…………… 414
第302図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(42)	……370	第341図	3区 包含層出土石器(1)	…………… 415
第303図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(43)	……372	第342図	3区 包含層出土石器(2)	…………… 417
第304図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(44)	……373	第343図	3区 包含層出土石器(3)	…………… 418
第305図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(45)	……374	第344図	3区 包含層出土石器(4)	…………… 419
第306図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(46)	……375	第345図	3区 包含層出土石器(5)	…………… 420
第307図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(47)	……376	第346図	3区 包含層出土石器(6)	…………… 421
第308図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(48)	……377	第347図	3区 包含層出土石器(7)	…………… 422
第309図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(49)	……378	第348図	3区 包含層出土石器(8)	…………… 423
第310図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(50)	……379	第349図	3区 包含層出土石器(9)	…………… 424
第311図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(51)	……380	第350図	3区 包含層出土石器(10)	…………… 425
第312図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(52)	……381	第351図	3区 包含層出土石器(11)	…………… 426
第313図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(53)	……382	第352図	3区 包含層出土石器(12)	…………… 427
第314図	5-4・5区 包含層出土縄文土器(54)	……383	第353図	3区 包含層出土石器(13)	…………… 428
第315図	5-4・5区 第2包含層出土縄文土器(1)	…385	第354図	3区 包含層出土石器(14)	…………… 429
第316図	5-4・5区 第2包含層出土縄文土器(2)	…387	第355図	5区 第1包含層出土石器(1)	…………… 430
第317図	5-4・5区 第2包含層出土縄文土器(3)	…388	第356図	5区 第1包含層出土石器(2)	…………… 431
第318図	5区 トレンチ出土縄文土器	…………… 389	第357図	5区 第1包含層出土石器(3)	…………… 432
第319図	7・9・10区 包含層出土縄文土器	…… 390	第358図	5区 第1包含層出土石器(4)	…………… 433
第320図	8区 包含層出土縄文土器	…………… 391	第359図	5区 第1包含層出土石器(5)	…………… 434
第321図	97-1区 包含層出土縄文土器	…………… 392	第360図	5区 第1包含層出土石器(6)	…………… 435
第322図	包含層出土土器(弥生) (1)	…………… 394	第361図	5区 第2包含層出土石器(1)	…………… 436
第323図	包含層出土土器(弥生) (2)	…………… 395	第362図	5区 第2包含層出土石器(2)	…………… 437

第363図	7区 包含層出土石器(1)	438
第364図	7区 包含層出土石器(2)	439
第365図	7区 包含層出土石器(3)	440
第366図	8区 包含層出土石器(1)	441
第367図	8区 包含層出土石器(2)	442
第368図	8区 包含層出土石器(3)	443
第369図	9区 包含層出土石器	443
第370図	10区 包含層出土石器(1)	444
第371図	10区 包含層出土石器(2)	445
第372図	10区 包含層出土石器(3)	446
第373図	97-1区 包含層出土石器	447
第374図	97-2区 包含層出土石器	447
第375図	表土・側溝出土石器	449
第376図	白色付着物のX線回析図	452

第377図	No.5399白色付着物の蛍光X線スペクトル	453
第378図	黒色付着物の赤外線吸収スペクトル	454
第379図	白色物・黒色物付着土器	456
第380図	赤色物質付着土器	458
第381図	スペクトル図	461
第382図	濃緑青色の蛍光X線スペクトル	466
第383図	青色の蛍光X線スペクトル	466
第384図	緑青色の蛍光X線スペクトル	466
第385図	青紺色の蛍光X線スペクトル	466
第386図	濃緑青色の蛍光X線スペクトル	467

第2分冊

第387図	石器部立模式図	471
-------	---------	-----

表 目 次

第1分冊

第 1表	四国縦貫自動車道(美馬～川之江) 埋蔵文化財調査地一覧表	4
第 2表	出土縄文土器一覧表(1)	226
第 3表	出土縄文土器一覧表(2)	228
第 4表	No.5399白色付着物の化学組成	455
第 5表	調査結果一覧表	465

第2分冊

第 6表	検出遺構一覧表 堅穴住居	472
第 7表	検出遺構一覧表 堅穴住居内周壁溝	473
第 8表	検出遺構一覧表 堅穴住居内土坑	473
第 9表	検出遺構一覧表 堅穴住居内炉	473
第10表	検出遺構一覧表 堅穴住居内柱穴	473
第11表	検出遺構一覧表(第一遺構面) 溝	475
第12表	検出遺構一覧表(第二遺構面) 溝	476

第13表	検出遺構一覧表(第一遺構面) 土坑	476
第14表	検出遺構一覧表(第二遺構面) 土坑	485
第15表	検出遺構一覧表(第一遺構面) 石垣	487
第16表	検出遺構一覧表(第一・二遺構面) 炉	487
第17表	検出遺構一覧表(第一遺構面) 水利施設	487
第18表	検出遺構一覧表(第一遺構面) 古墳	487
第19表	検出遺構一覧表(第一遺構面) 墓	487
第20表	検出遺構一覧表(第一遺構面) 集石遺構	487
第21表	検出遺構一覧表(第一遺構面) 柱穴	488
第22表	検出遺構一覧表(第二遺構面) 柱穴	528
第23表	検出遺構一覧表(第一遺構面) 不明遺構	535

第24表	検出遺構一覧表(第二遺構面)		
	不明遺構	538	
第25表	出土遺物観察表(縄文)	539	
第26表	出土遺物観察表(弥生)	685	
第27表	出土遺物観察表(古墳)	688	
第28表	出土遺物観察表(中世)	690	
第29表	出土遺物観察表(鉄製品)	710	
第30表	出土遺物観察表(銅製品)	710	
第31表	出土遺物観察表(耳環)	711	
第32表	出土遺物観察表(銅釧)	711	
第33表	出土遺物観察表(ガラス玉)	711	
第34表	出土遺物観察表(勾玉)	712	
第35表	出土石器観察表(石鏃)	713	
第36表	出土石器観察表(石錐)	713	
第37表	出土石器観察表(楔形石器)	714	
第38表	出土石器観察表(石錘)	715	
第39表	出土石器観察表(削器・石匙)	716	
第40表	出土石器観察表(石庖丁)	717	
第41表	出土石器観察表(石斧)	717	
第42表	出土石器観察表(石鋤)	717	
第43表	出土石器観察表(礫器)	718	
第44表	出土石器観察表(石棒)	718	
第45表	出土石器観察表(台石)	718	
第46表	出土石器観察表(石皿)	718	
第47表	出土石器観察表(砥石)	718	
第48表	出土石器観察表(石核)	719	
第49表	出土石器観察表(基石)	719	
第50表	出土石器観察表(剥片)	719	
第51表	出土石器観察表(敲石)	721	
第52表	出土石器観察表(磨石)	723	
第53表	出土石器観察表(凹石)	723	

図 版 目 次

第1分冊

卷頭図版1	(1) 調査地遠景(南より)	卷頭図版4	SK1033 出土遺物
	(2) 調査区遠景(南より)	卷頭図版5	(1) 装飾品
卷頭図版2	包含層出土縄文土器(中期)		(2) 包含層出土 須恵器
卷頭図版3	(1) 包含層出土縄文土器(後期前葉)	卷頭図版6	(1) SK1189 一括出土遺物
	(2) 包含層出土縄文土器 (後期前葉～中葉)		(2) SP11347 一括出土遺物

第2分冊

図版 1	(1) 調査前風景	725	(3) SK1023 遺物出土状況(北から)
	(2) 2・3・5・6区 完掘状況(北より)		図版 7
図版 2	(1) 7区 完掘状況(東より)	726	(1) SK1113 遺物出土状況(北から) ..
	(2) 1・8区 完掘状況(南より)		(2) SP1237 完掘状況(南から)
図版 3	(1) 9区 完掘状況(西より)	727	(3) SX1007 遺物出土状況(北から)
	(2) 10-1・2区 完掘状況(南より)		図版 8
図版 4	(1) 10-3区 完掘状況(北より)	728	(1) SX1007 完掘状況(北から)
	(2) 11区 完掘状況(西より)		(2) SB1001 遺物出土状況(西から)
図版 5	(1) 97-1区 完掘状況(北より)	729	図版 9
	(2) 97-2区 完掘状況(西より)		(1) SB1001 完掘状況(東から)
図版 6	(1) SK1021 完掘状況(西から)	730	(2) SB1002 完掘状況(北から)
	(2) SK1022 遺物出土状況(東から)		図版10
			(1) SB1003 完掘状況(東から)
			(2) SB1004 遺物出土状況(東から)
			図版11
			(1) SB1004 完掘状況(東から)
			(2) SB1005 完掘状況(東から)

- 図版12 (1) SB1006 完掘状況(西から) …… 736
(2) SB1007 完掘状況(南から)
- 図版13 (1) SB2001 完掘状況(東から) …… 737
(2) SD1005 完掘状況(北から)
- 図版14 (1) SK1027 完掘状況(西から) …… 738
(2) SK1028 完掘状況(西から)
(3) SU1001 集石出土状況(西から)
- 図版15 (1) SK1033 遺物出土状況(東から) …… 739
(2) SK1033 遺物出土状況(南から)
- 図版16 (1) SK1033 完掘状況(南から) …… 740
(2) SM1001 遺物出土状況(北から)
- 図版17 (1) SM1001 遺物出土状況(北から) …… 741
(2) SM1001 遺物出土状況(北から)
- 図版18 (1) SM1001 完掘状況(北から) …… 742
(2) SM1002 遺物出土状況(北から)
- 図版19 (1) SM1002 完掘状況(北から) …… 743
(2) SA2001 完掘状況(東から)
- 図版20 (1) SD1006 完掘状況(北から) …… 744
(2) SH1001 完掘状況(南から)
(3) SH2001 焼土検出状況(東から)
- 図版21 (1) SH2001 完掘状況(南から) …… 745
(2) SH2002 炭化物検出状況(北から)
(3) SH2002 焼土検出状況(南から)
- 図版22 (1) SH2002 被熱面検出状況(北から) 746
(2) SH2002 土層堆積状況(北から)
(3) SH2003 焼土検出状況(東から)
- 図版23 (1) SH2004 焼土検出状況(東から) …… 747
(2) SH2005 炭化物検出状況(東から)
(3) SH2007 完掘状況(北から)
- 図版24 (1) SH2008 完掘状況(西から) …… 748
(2) SH2009 土層堆積状況(西から)
(3) SH2010 遺物出土状況(東から)
- 図版25 (1) SJ1001 遺物出土状況(西から) …… 749
(2) SK1001 遺物出土状況(北から)
- 図版26 (1) SK1167 遺物出土状況(西から) …… 750
(2) SK1189 遺物出土状況・1回目(北から)
(3) SK1189 遺物出土状況・3回目(北から)
- 図版27 (1) SK1189 遺物出土状況・3回目(東から) 751
(2) SK1189 遺物出土状況(近景)
- (3) SK1189 完掘状況(北から)
- 図版28 (1) SK1200 遺物出土状況(西から) …… 752
(2) SK1210 遺物出土状況(西から)
(3) SK1215 遺物出土状況(南から)
- 図版29 (1) SP11063 遺物出土状況(北から) …… 753
(2) SP11238 遺物出土状況(南東から)
(3) SP11289 遺物出土状況(南から)
- 図版30 (1) SP11314 遺物出土状況(南から) …… 754
(2) SP11347 遺物出土状況・1回目(南から)
(3) SP11347 遺物出土状況・1回目(近景)
- 図版31 (1) SP11347 遺物出土状況・4回目(西から) 755
(2) SP11347 遺物出土状況・5回目(北から)
(3) SP11347 遺物出土状況・5回目(近景)
- 図版32 (1) SP11347 遺物出土状況・6回目(南から) 756
(2) SP11347 遺物出土状況・7回目(南から)
(3) SP11347 遺物出土状況・7回目(近景)
- 図版33 (1) SP11347 遺物出土状況・9回目(南から) 757
(2) SP11347 完掘状況(南から)
(3) SP11483 遺物出土状況(南から)
- 図版34 (1) SP2263 遺物出土状況(北から) …… 758
(2) SU1002 完掘状況(北から)
(3) SX1001 完掘状況(西から)
- 図版35 (1) SX1010 完掘状況(北から) …… 759
(2) SX1017 完掘状況(南から)
(3) SX1021 完掘状況(南から)
- 図版36 (1) SX2001 完掘状況(東から) …… 760
(2) SX2003 遺物出土状況(南から)
(3) SX2005 遺物出土状況・1回目
- 図版37 (1) SX2005 遺物出土状況・2回目(北から) 761
(2) SX2005 遺物出土状況・3回目(南から)
(3) 1区土層断面(南から)
- 図版38 (1) SK1021 出土遺物 …… 762
(2) SK1022 出土遺物
- 図版39 SK1023 出土遺物 …… 763
- 図版40 (1) SK1111 出土遺物 …… 764
(2) SK1113 出土遺物
(3) SP1015 出土遺物
- 図版41 (1) SP1062 出土遺物 …… 765
(2) SX1007 出土遺物(1)

図版42	(1) SX1007 出土遺物(2) …………… 766	(5) SU1002 出土遺物(1)
	(2) SX1007 出土遺物(3)	図版61 (1) SU1002 出土遺物(2) …………… 785
	(3) 3区 集石・遺物集中地点出土遺物(1)	(2) SX2005 出土遺物
図版43	3区 集石・遺物集中地点出土遺物(2) .. 767	(3) SX2003 出土遺物(1)
図版44	3区 集石・遺物集中地点出土遺物(3) .. 768	図版62 SX2003 出土遺物(2) …………… 786
図版45	3区 集石・遺物集中地点出土遺物(4) .. 769	図版63 1区 包含層出土遺物(縄文) …………… 787
図版46	3区 集石・遺物集中地点出土遺物(5) .. 770	図版64 1区 包含層出土遺物(縄文) …………… 788
図版47	3区 集石・遺物集中地点出土遺物(6) .. 771	図版65 1区 包含層出土遺物(縄文) …………… 789
図版48	(1) SB1001 出土遺物 …………… 772	図版66 1区 包含層出土遺物(縄文) …………… 790
	(2) SB1002 出土遺物	図版67 1区 包含層出土遺物(縄文) …………… 791
	(3) SB1004 出土遺物	図版68 1区 包含層出土遺物(縄文) …………… 792
図版49	(1) SB1006 出土遺物 …………… 773	図版69 1区 包含層出土遺物(縄文) …………… 793
	(2) SB1007 出土遺物	図版70 (1) 1区 包含層出土遺物(縄文) …… 794
図版50	(1) SD1005 出土遺物 …………… 774	(2) 2区 包含層出土遺物(縄文)
	(2) SK1027 出土遺物	図版71 3区 包含層出土遺物(縄文) …………… 795
	(3) SK1028 出土遺物	図版72 3区 包含層出土遺物(縄文) …………… 796
図版51	SK1033 出土遺物(1) …………… 775	図版73 3区 包含層出土遺物(縄文) …………… 797
図版52	(1) SK1033 出土遺物(2) …………… 776	図版74 3区 包含層出土遺物(縄文) …………… 798
	(2) SM1001 出土遺物	図版75 3区 包含層出土遺物(縄文) …………… 799
図版53	(1) SD1012 出土遺物 …………… 777	図版76 3区 包含層出土遺物(縄文) …………… 800
	(2) SD1014 出土遺物	図版77 3区 包含層出土遺物(縄文) …………… 801
	(3) SD2001 出土遺物	図版78 3区 包含層出土遺物(縄文) …………… 802
	(4) SG1001 出土遺物	図版79 3区 包含層出土遺物(縄文) …………… 803
図版54	(1) SH2002 出土遺物 …………… 778	図版80 3区 包含層出土遺物(縄文) …………… 804
	(2) SH2008 出土遺物	図版81 3区 包含層出土遺物(縄文) …………… 805
	(3) SK1189 出土遺物(1)	図版82 3区 包含層出土遺物(縄文) …………… 806
図版55	(1) SK1189 出土遺物(2) …………… 779	図版83 3区 包含層出土遺物(縄文) …………… 807
	(2) SK1215 出土遺物	図版84 3区 包含層出土遺物(縄文) …………… 808
図版56	(1) SP11149 出土遺物 …………… 780	図版85 (1) 3区 第2包含層出土遺物(縄文) …809
	(2) SP11238 出土遺物	(2) 3区 包含層出土遺物(縄文)
	(3) SP11256 出土遺物	(3) 5区 包含層出土遺物(縄文)
	(4) SP11347 出土遺物(1)	図版86 5区 包含層出土遺物(縄文) …………… 810
図版57	SP11347 出土遺物(2) …………… 781	図版87 5区 包含層出土遺物(縄文) …………… 811
図版58	SP11347 出土遺物(3) …………… 782	図版88 5区 包含層出土遺物(縄文) …………… 812
図版59	SP11347 出土遺物(4) …………… 783	図版89 5区 包含層出土遺物(縄文) …………… 813
図版60	(1) SP2263 出土遺物 …………… 784	図版90 5区 包含層出土遺物(縄文) …………… 814
	(2) SP11521 出土遺物	図版91 5区 包含層出土遺物(縄文) …………… 815
	(3) SP2193 出土遺物	図版92 5区 包含層出土遺物(縄文) …………… 816
	(4) SP1583 出土遺物	図版93 5区 包含層出土遺物(縄文) …………… 817

図版 94	5区 包含層出土遺物(縄文)	818
図版 95	5区 包含層出土遺物(縄文)	819
図版 96	(1) 5区 第2包含層出土遺物(縄文)	820
	(2) 8区 包含層出土遺物(縄文)	
	(3) 7・8・9・10-3区包含層出土遺物(縄文)	
図版 97	包含層出土遺物(弥生)	821
図版 98	包含層出土遺物(古墳)	822
図版 99	包含層出土遺物(古墳)	823
図版100	包含層出土遺物(中世)	824
図版101	包含層出土遺物(中世)	825
図版102	包含層出土遺物(中世)	826
図版103	1区 包含層出土遺物(石器)	827
図版104	1区 包含層出土遺物(石器)	828
図版105	1区 包含層出土遺物(石器)	829
図版106	(1) 1区 包含層出土遺物(石器)	830
	(2) 2区 包含層出土遺物(石器)	
図版107	3区 包含層出土遺物(石器)	831
図版108	3区 包含層出土遺物(石器)	832
図版109	3区 包含層出土遺物(石器)	833

図版110	(1) 3区 包含層出土遺物(石器)	834
	(2) 5区 包含層出土遺物(石器)	
図版111	5区 包含層出土遺物(石器)	835
図版112	(1) 5区 包含層出土遺物(石器)	836
	(2) 5区 第2包含層出土遺物(石器)	
図版113	(1) 5区 第2包含層出土遺物(石器)	837
	(2) 7区 包含層出土遺物(石器)	
図版114	7区 包含層出土遺物(石器)	838
図版115	8区 包含層出土遺物(石器)	839
図版116	8区 包含層出土遺物(石器)	840
図版117	(1) 9区 包含層出土遺物(石器)	841
	(2) 10-1区 包含層出土遺物(石器)	
	(3) 10-2区 包含層出土遺物(石器)	
図版118	(1) 10-2区 包含層出土遺物(石器)	842
	(2) 97-1・2区 包含層出土遺物(石器)	
	(3) 97-2区 包含層出土遺物(石器)	
図版119	(1) 97-2区 包含層出土遺物(石器)	843
	(2) 遺構出土 銭貨	
図版120	包含層出土 銭貨	844

写真目次

写真1	作業風景	8
写真2	Hgが検出された縄文土器(104)	459
写真3	ベンガラ塗彩の縄文土器(4017)	459
写真4	口縁端部が赤彩されている(4017)	459
写真5	ベンガラ塗彩(2857外面)	460
写真6	ベンガラ塗彩(2857内面)	460
写真7	ベンガラ付着の様子(1976)	460
写真8	ベンガラ付着の様子(2709)	460
写真9	外面の一部に赤彩が見られる(144)	460
写真10	144の拡大写真	460
写真11	ベンガラ付着の様子(4960)	460
写真12	やや赤茶色い土器(1955)	460
写真13	青色のガラス玉(No.19)	467
写真14	青紺色のガラス玉(No.25)	467
写真15	青紺色のガラス玉(No.20)	467
写真16	X線画像 木口面	468
写真17	X線画像 側面	468

付図目次

1	5区・6区・7区 遺構配置図	4	97-2区 第一遺構面
2	1区・2区・3区・8区・9区・97-1区・97-2区 遺構配置図	5	10区 第一遺構面
3	97-2区・10区・11区 遺構配置図		

I 調査の経緯

1 調査にいたる経緯

四国縦貫自動車第10次区間(脇～美馬)の路線延長は11.7kmで、昭和63年5月18日施工命令が出され、昭和63年6月17日に路線発表された。当該区間については県教育委員会文化課(現文化財課、以下県教育委員会と呼ぶ)が昭和62・63年度に分布調査を実施し、15遺跡106,000㎡を調査対象として、平成4年4月23日付けで日本道路公団高松建設局(現四国支社、以下JHと呼ぶ)と埋蔵文化財の取り扱いに関する協議(文化庁協議)を終えた。平成4年度は第7次区間(徳島～脇)の調査最終年度と重なったが、用地交渉が開始され、当年度末より一部地点において試掘調査に着手し、6年度より本調査を開始した。

第11次区間(美馬～川之江)の路線延長は42.3kmで、平成2年11月19日施工命令が出され、平成3年1月21日に路線発表された。当該区間は県教育委員会が平成4年度に分布調査を実施し、39遺跡323,195㎡を調査対象として、平成5年9月24日付けで文化庁協議を終えた。平成6年度試掘調査に着手し、7年度より本調査を開始した。

この区間は平成9年度に第10次区間、10年度に第11次区間のうち美馬～井川池田の供用目標が設定された。県教育委員会は6年度に第7次区間の調査実施(調査班数16.5班、調査対象68遺跡360,000㎡に対して実調査面積133,464㎡遺跡、実掘率37%)を勘案して、当該区間に必要な調査班数を12班(1班構成、研究員2・調査補助員2)と算出した。4・5年度は用地取得状況にも顕著な進捗はなく、そのため第10次区間の一部において本調査が実施されたにすぎない。

6年度は全区間で用地取得が進み、10次区間の5カ所で本調査が実施したのをはじめ、両区間の21ヶ所で試掘調査を展開した。県教育委員会はセンターから提出された6年度の試掘調査結果や用地取得状況を基に、7年度を10次区間3班、11次区間6班の計9班体制で調査することを決定した。しかしこれは、10年度中の供用時期を前提としたJHの調査人員配置要望(10次区間必要班数11班・11次区間必要班数16班、7年度要望班数15班)とは大きな懸隔を生じた。

さらに人員確定後に試掘調査が行われた美馬町薬師遺跡・坊僧遺跡では調査対象区域外に遺跡が拡がる見込みとなり、約22,000㎡の追加調査の必要性が生じた。併せて第11次区間の用地取得が進捗した。そのため10次区間の調査を優先させると、11次区間は試掘調査を実施するにとどまり、本調査に着手できない状況が懸念された。このためJHから県教育委員会に対して度重なる増班要請がなされた。

7年度は県立埋蔵文化財総合センター開設に伴い、調査関係は一課二係制が二課四係制に改正され、調査第二課調査第一係がJH事業を担当することになった。県教育委員会は年度早々に必要班数を見直して26.5班と修正し、第二課内の事業の調整にとどまらず第一課事業も割愛し、調査班の捻出に向けての調整をセンターに要請した。その結果、7年度を当面12班で対応することとなった。

7年度は第10次区間の調査を概成させ、第11次区間については試掘調査を先行させる方針により、調査班の配置を変更したため、全体の実掘面積は当初計画よりも減少したものの、調査計画が大幅に変動した。また11次区間で本調査を実施した三野町丸山遺跡では約8,500㎡の追加調査が必要となったのをはじめ、一部の調査において大幅な遅延を生じたため、さらに事業調整を行い休日まで研究員を投入する事態となったが、さほどの効果を上げるまでには至らなかった。

第 51 図	SB1003出土遺物	70	第 90 図	SD1014・1015遺構図・出土遺物	117
第 52 図	SB1004遺構図・出土遺物	71	第 91 図	SD1016遺構図	118
第 53 図	SB1004出土遺物	73	第 92 図	SD1017遺構図	119
第 54 図	SB1005遺構図	75	第 93 図	SD2001・2002遺構図・出土遺物	120
第 55 図	SB1006遺構図	77	第 94 図	SD2003遺構図	121
第 56 図	SB1006出土遺物	78	第 95 図	SG1001遺構図・出土遺物	122
第 57 図	SB1007遺構図・出土遺物	79	第 96 図	SH1001遺構図	124
第 58 図	SB2001遺構図	81	第 97 図	SH遺構配置図(第2遺構面)	125
第 59 図	SD1005遺構図・出土遺物	83	第 98 図	SH2001・2002遺構図・出土遺物	126
第 60 図	SK1027遺構図・出土遺物	84	第 99 図	SH2003~2007遺構図	127
第 61 図	SK1028遺構図・出土遺物	85	第100 図	SH2008遺構図・出土遺物	129
第 62 図	SP1069・1184遺構図・出土遺物	86	第101 図	SH2009~2011遺構図・出土遺物	130
第 63 図	SU1001遺構図・出土遺物	87	第102 図	SJ1001遺構図・出土遺物	132
第 64 図	SK1033遺構図	90	第103 図	SK1001遺構図・出土遺物	133
第 65 図	SK1033遺物出土状況図	91	第104 図	SK1014遺構図・出土遺物	134
第 66 図	SK1033ガラス玉・勾玉出土状況図	92	第105 図	SK1017・1029遺構図・出土遺物	135
第 67 図	SK1033完掘状況図	93	第106 図	SK1031・1068遺構図	137
第 68 図	SK1033出土遺物(1)	94	第107 図	SK1162・1167遺構図・出土遺物	138
第 69 図	SK1033出土遺物(2)	95	第108 図	SK1172・1173・1178遺構図・出土遺物	139
第 70 図	SM1001周辺地形図	96	第109 図	SK1179・1181遺構図・出土遺物	140
第 71 図	SM1001遺物出土状況図	97	第110 図	SK1189遺構図(1)	141
第 72 図	SM1001骨片出土状況拡大図	98	第111 図	SK1189遺構図(2)	142
第 73 図	SM1001出土遺物	99	第112 図	SK1189出土遺物	143
第 74 図	SM1002周辺地形図	100	第113 図	SK1190・1194・1203遺構図・出土遺物	144
第 75 図	SM1002遺構図(1)	101	第114 図	SK1199・1200・1204遺構図・出土遺物	146
第 76 図	SM1002遺構図(2)	102	第115 図	SK1210・1211・1213遺構図・出土遺物	148
第 77 図	SM1002出土遺物	103	第116 図	SK1215遺構図・出土遺物	149
第 78 図	遺構配置図(中世)	104	第117 図	SK1216・1234・1236・1213遺構図・出土遺物	150
第 79 図	SA2001遺構図	106	第118 図	SK2026・2047遺構図・出土遺物	152
第 80 図	SD1001~1003遺構図	107	第119 図	SK2053遺構図	153
第 81 図	SD1004遺構図・出土遺物	108	第120 図	SP1205・1542遺構図・出土遺物	154
第 82 図	SD1006遺構図	109	第121 図	SP1732・1847・1933・1934・1953遺構図・出土遺物	155
第 83 図	10-3区 溝状遺構配置図	110	第122 図	SP1967・1970・1992遺構図・出土遺物	157
第 84 図	SD1007・1008断面図・出土遺物	112	第123 図	SP11009・11010・11030遺構図・出土遺物	158
第 85 図	SD1009断面図	112	第124 図	SP11042・11061・11063遺構図・出土遺物	159
第 86 図	SD1010遺構図・出土遺物	113	第125 図	SP11074・11096・11148・11149・11193・11217・11218遺構図・出土遺物	161
第 87 図	SD1011断面図・出土遺物	114	第126 図	SP11238・11256・11259・11287・11288遺構図・出土遺物	163
第 88 図	SD1012遺構図・出土遺物	115	第127 図	SP11289・11296・11314遺構図・出土遺物	165
第 89 図	SD1013遺構図	116	第128 図	SP11322・11347遺構図・出土遺物	166

加えて試掘調査の結果、美馬町荒川遺跡、吉水遺跡、三好町土井遺跡、大柿遺跡などでは、当初見込みを上回る調査面積が確実に became ため、県教育委員会は工事工程上、調整可能な調査箇所を平成8年度に先送りすることを決めた。こうしたことから、必然的に平成8年度が事業ピークを迎える見込みになった。JHと次年度体制について協議を進めていた県教育委員会は、年末までに8年度を35班体制で臨むことを決定し、不足人員を若干の専門職員採用と30数名の教員派遣で対応することを決定した。

この大量の教員派遣計画に対して、平成8年2月10日付文化財保存全国協議委員会から徳島県知事・徳島県教育長宛「四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査及び文化財保護行政の適正化を求める要望書」、同年3月6日付考古学研究会から「四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の調査体制に関する質問書」、同年3月28日付日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会から「四国縦貫自動車道建設に伴う文化財保護行政ならびに埋蔵文化財発掘調査に関する要望書」が提出された。

これに対し県教育委員会は県教育長名で考古学研究会に同年3月22日付、日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会には同年4月15日付で回答している。

8年度は調査体制が一新された。県教育委員会に埋蔵文化財担当参事(センター常務理事兼事務局長)を設置し、文化財課の埋蔵文化財担当係の強化を図ると共に、前年度に続いてセンターの組織改正が行われた。調査関係では7年度の事務分掌が全面的に改正され、三好町に埋蔵文化財センター西部事務所が設置された。調査第二課調査第一係は西部事務所勤務となり、8年度は新設の所長(センター常務理事兼次長)以下143名、9年度は95名体制、8年度最大稼働時35班(通年28.5班)、9年度最大稼働時24班(通年20.5班)、計49班で事業に対応することとなった。

第1表に年次ごとの進捗状況を示した。8年度は、第11次区間美馬～井川池田間の調査に目途をたてることを最大の主眼とした。8年度前半に10次区間及び前年度からの継続調査の完了、用地の取得がまとまった11次区間の中規模遺跡の概成、後半での大規模遺跡への効果的稼働を目指した。

荒川遺跡は分布調査の結果に基づき、18,000㎡を調査対象地とすることが決定していたが、7年度調査対象地域の試掘調査の結果を受けて、8年度に調査対象範囲全域のうち未調査部分を含む10,850㎡が本調査面積として確定した。また調査対象地が平野古墳に隣接することから、別途協議を行い、谷部分の調査面積を振り替えて平野古墳前の土地の調査を実施することとなった。

家屋残存などの土地の取得状況により、調査対象地は分割調査を実施せざるを得ない状況となり、8年度15,350㎡、9年度1,900㎡、試掘面積を含む総面積は17,782㎡になる。

調査組織及び整理体制は以下である。

総括

所長	筒井 豊祐(平成7～9年度)	寒川 光明(平成10～12年度)
	本浄 敏之(平成13～15年度)	浦上 純二(平成16年度)
事務局長	柴田 広(平成6・7年度)	庄野 徳保(平成8・9年度)
	細川 靖夫(平成10・11年度)	伊丹 康裕(平成12・13年度)
	西村 和博(平成14・15年度)	河野 幸一(平成16年度)

総務課長	小林 敬治(平成6・7年度)	長江 仁(平成8・9年度)
	井後 伸一(平成10・11年度)	高野 明(平成12・13年度)
	山本 高史(平成14・15年度)	古川 哲朗(平成16年度)
総務係長	福本 紀美子(平成12～14年度)	坂尾 俊一(平成15・16年度)
主 事	三木 和文(平成6・7年度)	西木 未香(平成7～9年度)
	集堂 正士(平成8～11年度)	佐藤 真紀(平成10・11年度)
	田所 政儀(平成12・13年度)	布川 純子(平成14・15年度)
	鈴木 智栄(平成14～16年度)	川口 治代(平成16年度)
技 師	青木 雅和(平成7～9年度)	笠井 達雄(平成8年度)
調査課長	紀伊 司郎(平成6年度)	
調査第二課長	島巡 賢二(平成7年度)(第一係長兼務)	
主査兼調整係長	島巡 賢二(平成6年度)	

西部事務所

所長(常務理事兼事務局次長兼務)	谷 一郎(平成8・9年度)
次長(調査第二課長兼務)	菅原 康夫(平成8・9年度)
縦貫担当係長(調査第二課第一係長兼務)	南 信義(平成8年度)
	松永 雅行(平成9年度)

調査担当

・試掘調査担当

研 究 員	石井 伸夫(平成7年度)	中南 弘史(平成7年度)
	佐野 耕市(平成8年度)	宮本 和明(平成8年度)

・発掘調査担当

研 究 員	佐野 耕市(平成8・9年度)	大北 恭宏(平成8年度)
	寒川 芳裕(平成8年度)	松永 雅行(平成8年度)
	宮本 和明(平成8年度)	吉田 千恵(平成8年度)
	瀬部 雄一(平成9年度)	

調査報告書作成業務

整理普及課長	島巡 賢二(平成12～16年度)	
整理係長	西谷 泰幸(平成12年度)	貞野 保仁(平成13・14年度)
	貞野 雅巳(平成15・16年度)	

調査報告書作成担当

研 究 員	下窪 光俊(平成12年度)	烏野 美子(平成13年度)
	久保脇 美朗(平成14年度)	小泉 信司(平成15年度)
	大北 和美(平成13・16年度)	

第1表 四国縦貫自動車道(美馬～川之江)埋蔵文化財調査地一覧表

番号	遺跡名	所在地	表 面 積 (㎡)							備考	
			実掘面積	4年度	5年度	6年度	7年度	8年度	9年度		10年度
1	原(Ⅰ)	美馬郡脇町北庄	380		380						報告書 第41集所収
2	原(Ⅱ)	美馬郡脇町北庄	1,560		1,560						報告書 第41集所収
3	鶴射	美馬郡脇町北庄	1,544		240	1,304					報告書 第41集所収
4	佐城(Ⅰ)	美馬郡脇町脇町	565	165	400						報告書 第41集所収
5	佐城(Ⅱ)	美馬郡脇町脇町	779	89	70	620					報告書 第41集所収
6	佐城(Ⅲ)	美馬郡脇町脇町	146	146							報告書 第41集所収
7	田上(Ⅰ)	美馬郡脇町田上	891			873	18				報告書 第27集所収
8	田上(Ⅱ)	美馬郡脇町西田上	9,258			4,610	4,478	170			報告書 第27集所収
9	田上(Ⅲ)	美馬郡脇町西田上	6,062		150	1,822	4,090				報告書 第27集所収
10	井口	美馬郡脇町井口	150		150						報告書 第41集所収
11	薬師(薬師)	美馬郡美馬町芝坂	9,335			330	9,005				報告書 第34集所収
12	薬師(芝坂)	美馬郡美馬町芝坂	6,937			41	4,613	2,283			報告書 第34集所収
13	坊僧(坊僧)	美馬郡美馬町坊僧	12,455		750	56	11,649				報告書 第34集所収
14	坊僧(中黒)	美馬郡美馬町坊僧	229			154	75				報告書 第34集所収
15	坊僧(東段)	美馬郡美馬町坊僧	5,850			116	5,734				報告書 第34集所収
16	坊僧(西段)	美馬郡美馬町坊僧	63			63					報告書 第34集所収
17	池ノ浦	美馬郡美馬町池ノ浦	26			26					報告書 第41集所収
18	滝ノ宮	美馬郡美馬町滝ノ宮	2,563	350	500		1,713				報告書 第41集所収
19	下突出	美馬郡美馬町中横尾	2,600				2,600				報告書 第41集所収
	脇～美馬		61,393	750	4,200	10,015	43,975	2,453			
20	荒川	美馬郡美馬町荒川	17,782				202	15,530	2,060		本報告所収
21	吉水	美馬郡美馬町吉水	3,820				120	3,700			報告書 第39集所収
22	西屋敷	美馬郡美馬町中西	288				288				報告書 第58集所収
23	中山	美馬郡美馬町中山	172				172				報告書 第58集所収
24	西大佐古	美馬郡美馬町突落	153				108	45			報告書 第58集所収
25	清水	三好郡三野町清水	10,692			692		10,000			報告書 第58集所収
26	塚塚	三好郡三野町清水	2,332			310	72	1,950			報告書 第58集所収
27	加茂野宮(Ⅱ)	三好郡三野町加茂野宮	300			300					報告書 第58集所収
28	加茂野宮(Ⅰ)	三好郡三野町加茂野宮	340			340					報告書 第58集所収
29	大谷尻	三好郡三野町北原	4,595			95	4,500				報告書 第53集所収
30	丸山	三好郡三野町勢力	14,760				11,110	3,650			報告書 第45集所収
31	花園	三好郡三野町太刀野	3,456				356	3,100			報告書 第42集所収
32	太刀野山(Ⅱ)	三好郡三野町アマダ堂	157			103	54				報告書 第42集所収
33	太刀野山(Ⅰ)	三好郡三野町アマダ堂	450			450					報告書 第42集所収
34	台	三好郡三野町足代	1,203					1,203			報告書 第42集所収
35	宮ノ岡(Ⅱ)	三好郡三野町足代	345					345			報告書 第42集所収
36	宮ノ岡(Ⅰ)	三好郡三野町足代	898					898			報告書 第42集所収
37	東原	三好郡三野町足代	16,365			217	323	15,825			報告書 第50集所収
38	西原	三好郡三野町足代	10,853			157	616	8,153	1,927		報告書 第51集所収
39	円通寺	三好郡三野町足代	42,453				808	30,375	11,270		報告書 第28集所収
40	土井	三好郡三野町昼間	35,630			140	378	19,520	15,592		報告書 第38集所収
41	大柿	三好郡三野町昼間	53,012				1,562	22,960	28,490		報告書 第37集所収
42	八幡	三好郡三野町八幡	1,250				20	1,230			報告書 第29集所収
43	井内	三好郡三野町西井川	277					277			報告書 第29集所収
44	井出上	三好郡三野町西井川	6,336				30	6,306			報告書 第52集所収
45	相知	三好郡三野町西井川	15,500				120	15,380			報告書 第59集所収
46	坊	三好郡三野町西井川	420					120	300		報告書 第29集所収
47	須賀	三好郡三野町西井川	3,869					689	3,180		報告書 第29集所収
48	末	三好郡三野町西井川	240					240			報告書 第29集所収
49	お塚	三好郡池田町トウゲ	5,314			354	1,238	3,722			報告書 第58集所収
50	供養地	三好郡池田町クヤウジ	1,811			111	1,700				報告書 第58集所収
51	山田(Ⅱ)	三好郡池田町ヤマダ	1,515			285	1,230				報告書 第58集所収
52	山田(Ⅰ)	三好郡池田町ヤマダ	703			53		650			報告書 第58集所収
53	馬路	三好郡池田町馬路	970						320	650	報告書 第58集所収
54	源氏岡	三好郡池田町源氏岡	175							175	報告書 第58集所収
55	林	三好郡池田町佐野	130						130		報告書 第58集所収
56	和田	三好郡池田町佐野	1,220					1,220			報告書 第58集所収
57	森常	三好郡池田町初草	90						90		報告書 第58集所収
58	高毛	三好郡池田町高毛	25						25		報告書 第58集所収
	美馬～川之江		259,901			3,607	25,007	167,088	63,374	825	
	計		321,294	750	4,200	13,622	68,982	169,541	63,374	825	

2 調査の経過

(1) 調査の経緯

荒川遺跡は分布調査により、18,000㎡が調査対象地とされた。調査対象地の用地取得状況等から試掘調査は3回に分けて行われることになり、試掘一次調査は平成7年9月17日～9月28日に、試掘二次調査は平成8年6月17日～7月1日に、試掘三次調査は平成9年4月15日、9月18日、12月25日の三日間にそれぞれ実施した。試掘二次および三次調査では、本調査と併行して実施している。

重機掘削によるトレンチ掘りで試掘一次調査では対象面積8,676㎡につき202㎡を、試掘二次調査では6,692㎡につき180㎡を、試掘三次調査では3,938㎡につき150㎡の調査を行った。試掘二次および三次調査では、本調査と併行して試掘を実施した。

試掘一次調査では調査対象地の東側区域が用地買収未完了であることから、主に西側を中心に試掘を行った。その結果、中世の包含層および遺構面と考えられる自然堆積層をほぼ全面で確認した。また調査地の一部で遺構面を二面確認している。また未買収用地内に、地元で「お塚」と呼ばれるマウンド状の地形が存在し、平野古墳に隣接することから古墳の可能性が考えられた。よって試掘調査が行えなかったものの、周辺の土層堆積状況と鑑みて調査対象地としている。試掘二次調査は未買収用地を除くすべての区域で試掘を行い、試掘一次調査で確認された中世の遺構面の拡がりの把握に務めた。試掘終了後は、そのまま二次調査に移行した。試掘三次調査では、残りの未買収用地である畑地と宅地の二ヶ所の試掘を行った。その結果、宅地は攪乱が著しく本調査の必要はないと判断し、畑地では隣接する調査区と同様の土層堆積状況が認められ、遺構面も確認できたことから三次調査へ移行した。調査対象地18,000㎡のうち、17,250㎡を本調査対象地として絞り込み、3班で調査にあたることとなった。

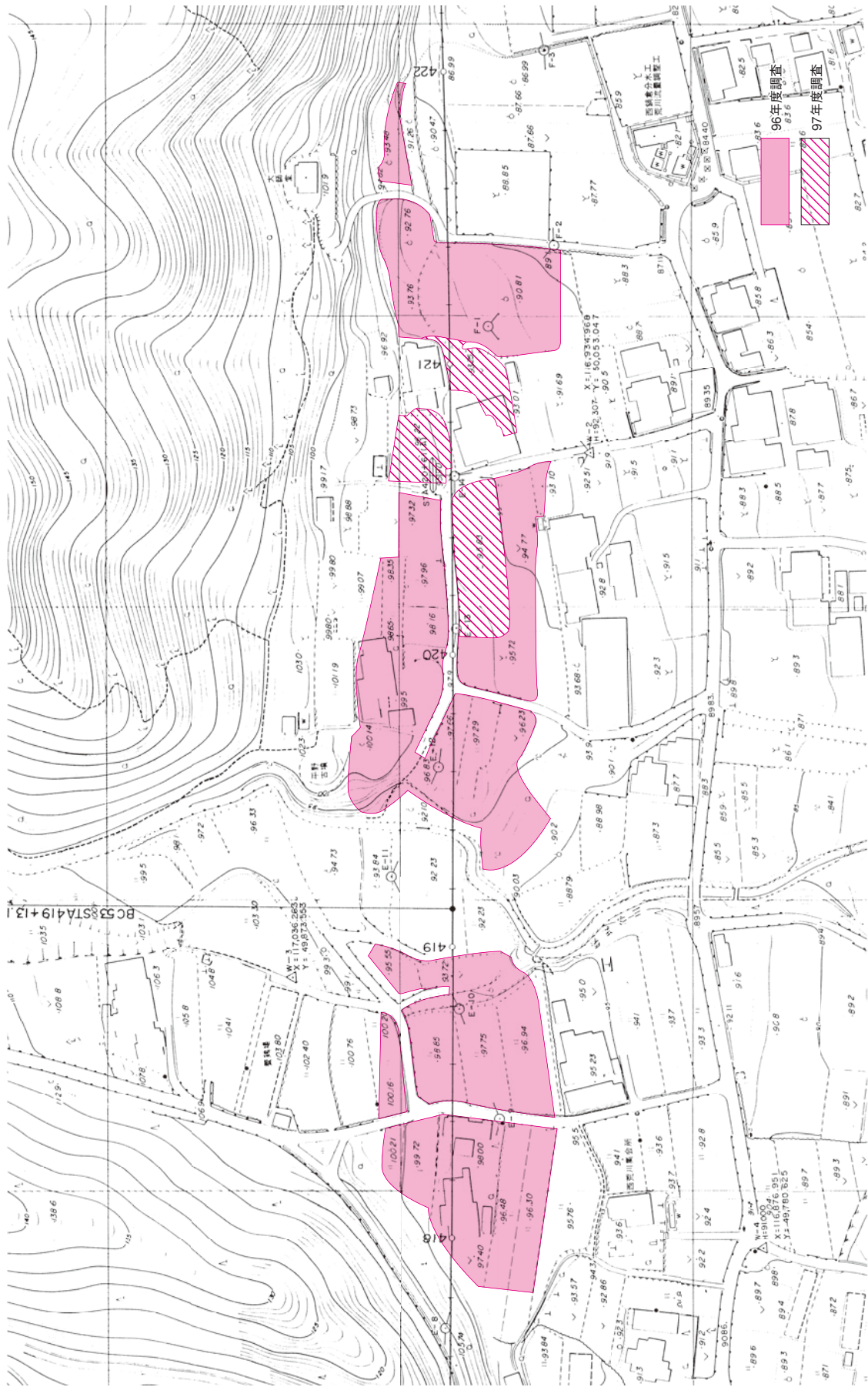
一次調査は平成8年4月3日から始まり、平成9年3月21日に終了した。調査対象面積17,250㎡のうち、宅地および未買収用地を除く10,850㎡が調査範囲である。二次調査は平成8年7月22日に開始し、平成9年2月27日に終了した。調査面積は4,500㎡である。三次調査は平成9年9月11日に開始し、平成10年1月30日に終了した。調査面積は1,900㎡である。一～三次調査における本調査期間は1年4ヶ月にわたり、実掘総面積は17,250㎡となる。

(2) 発掘調査の方法

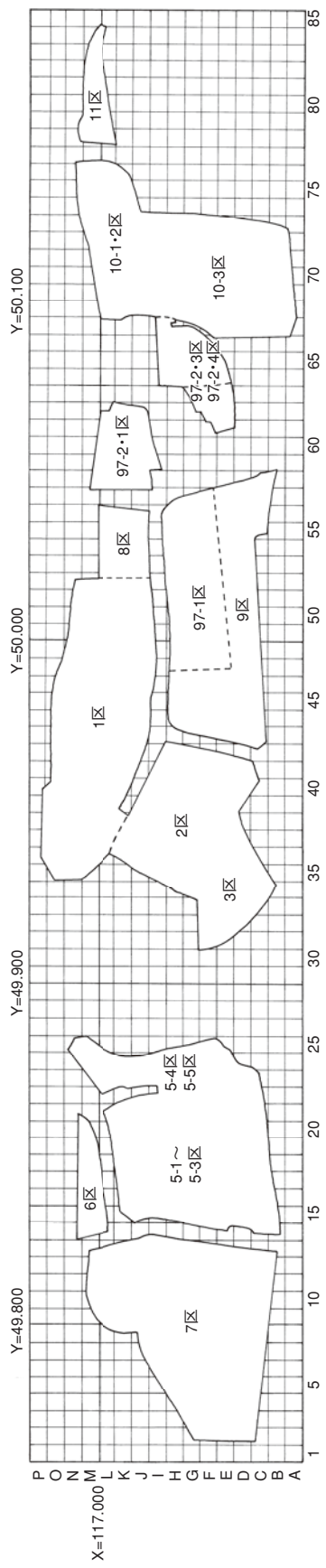
調査を始めるにあたり、グリッドの配置を発掘調査統一基準にならい次のように設定した。第Ⅳ系国土座標を基準とし、5mメッシュを1グリッドとして調査対象地を包み込み、南西隅を基準として北にA、B、C…、東に1、2、3…の順に記号・番号を振り、その組み合わせで各グリッドを表すこととした。

調査対象地が広範囲にわたるため、調査区の設定はその間を横切る道路や水路などの保守の必要性があるもの、および地形を考慮した上で、便宜上田畑・宅地などの現地割りのまとまりごとに96年度では第1調査区から第11調査区、97年度では第1調査区から第2調査区とした。

遺構記号・番号は検出時に決定し、掘削後に遺構の確実性が乏しいと判断されたものは欠番とした。これは遺構記号・番号の変更による混乱を避ける目的であり、変更は必要最低限にとどめた。なお同時進行で調査が行われていたために、各調査区ごとにそれぞれ遺構番号が付与されており、同一の遺構番



第1図 調査区位置図



第2図 グリッド配置図

号をもつものが各調査区で重複することになった。そこで整理の段階で、すべての遺構に対して遺構番号を新たに振り直すことにした。

(3) 調査日誌抄

96年度調査

4月15日 現場準備。
4月18日 挨拶回り・打ち合わせ。
4月22日 調査準備。
5月 7日 機械掘削開始。
5月 8日 資料整理・写真撮影。
5月 9日 機械掘削・トレンチ掘り。
5月13日 機械掘削・5m杭打ち。
5月14日 機械掘削・側溝掘削。
5月22日 人力掘削・5m杭打ち。
6月19日 人力掘削・遺構面精査。
7月 4日 人力掘削と併行して、遺構掘削開始。
7月 5日 人力・遺構掘削と併行して、
機械掘削開始。
7月22日 第二分割準備・打ち合わせ。
7月25日 人力掘削・遺構掘削。
11区機械掘削開始。
7月26日 10区機械掘削開始。
8月 7日 9区機械掘削開始。
8月20日 10区人力掘削開始。
8月21日 11区人力掘削開始。
9月 2日 11区遺構掘削開始。
10月 2日 9区人力掘削開始。11区遺構掘削。
10月 7日 10-1区遺構掘削開始。
10月 7日 10-2区人力掘削開始。
10月15日 10-3区人力掘削開始。
10月25日 10-3区遺構掘削。9区、11区空中写真
撮影。9区確認トレンチ。
11月28日 2～7区・10-3区空中写真撮影。
12月 3日 10-2区第二遺構面検出。
12月11日 10-2区第二包含層掘削開始。
12月12日 8区機械掘削。

12月16日 10-2区遺構掘削開始。
12月20日 8区包含層掘削開始。
1997年
1月20日 8区人力掘削。
1月29日 8区遺構検出。
1月30日 8区遺構掘削開始。
2月20日 7区、10-1・2区空中写真撮影。
3月12日 1区、8区空中写真撮影。
3月21日 調査終了。遺物をセンターに搬入。



写真1 作業風景

97年度調査

10月 1日 1区人力掘削。
10月 9日 1区第一遺構面遺構検出。
10月13日 1区遺構掘削開始。
11月 4日 1区空中写真撮影。
11月 5日 2区機械掘削開始。
11月 7日 2区側溝掘削開始。
11月11日 2-1区人力掘削開始。
11月18日 2-1区遺構掘削。

	2-3区人力掘削開始。	1998年	
12月 4日	2-1区第二包含層掘削開始。	1月 6日	2-4区第一包含層掘削開始。
12月 5日	2-3区遺構掘削開始。	1月13日	2-4区遺構掘削開始。
12月12日	2-1区第二遺構面遺構検出。	1月26日	物品、センターに搬入。
12月19日	2-1区遺構掘削開始。	1月27日	2-1、2-3、2-4区空中写真撮影。
12月22日	2-2、2-4区機械掘削。	1月30日	調査終了。

3 報告書作成業務の経過

四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査が一段落した平成10年度(1998年)から、第10次区間(脇～美馬)・第11次区間(美馬～川之江)で調査が行われた58遺跡、総計8,700箱(1,569,988点)を数える出土遺物の整理が開始された。平成18年度(2006年)までの年次別整理実施計画案が作成され、それを受けて8班/年体制で整理業務を実施する運びとなった。しかし平成13(2001)年、日本道路公団民営化の方針が決定され、当初の報告書作成業務計画案の大幅な見直しが求められた。これにより改めて計画を見直し検討した結果、四国縦貫自動車道および四国横断自動車道関連の整理業務は平成16年度末(2004年)までに完了、平成17年度(2005年)は報告書印刷業務のみ実施することになった。

第11次区間(美馬～川之江)で大柿遺跡に次ぐ遺物の出土量が認められた荒川遺跡の整理は、上記の状況変化により、平成12年度(2000年)から5カ年計画1班体制で開始されることとなった。年度別の主な整理概要を述べていくと、次のようになる。

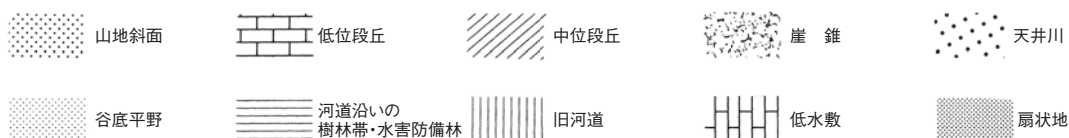
平成12年度は最も出土量の多い縄文土器を除き、弥生～中近世遺物を中心に基礎整理を行い、中近世遺物の抽出・実測作業を行った。平成13年度は凶面の整理・縄文土器の洗浄を、平成14年度は縄文土器および弥生～古墳時代に属する遺物の実測を中心に行った。平成15年度は前年度に実測できなかった縄文土器の残りを実測し、1～3区包含層出土縄文土器の分類およびトレース・レイアウトを行っている。分類にあたっては、当時センター職員であった幸泉満男が行った。16年度は、報告書に掲載する遺構および遺物の選別、再実測を行い、トレース・凶版組み等を行った。前年度に約半数以上の縄文土器の分類およびレイアウトを行っているため、それに準拠するかたちで残り5～10区出土の縄文土器の分類・レイアウトを実施した。

Ⅱ 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

四国東部に位置する徳島県は、全面積の8割余りを山地が占め、平地は僅か2割弱しかない。県の北方をほぼ西から東に流れる吉野川は、その源を高知県土佐郡にある瓶ヶ森に発し、紀伊水道に注いでいる。また吉野川に沿うように、西南日本を二分する中央構造線と呼ばれる大きな断層が走り、その北側を和泉層群、南側を三波川帯と地質が大きく異なる。和泉層群は主に砂岩と泥岩からなる地層で、三波川帯は主に結晶片岩からなる地層である。また中央構造線と平行にいくつかの断層線が走り、その間を北から讃岐山脈(阿讃山脈)、四国山地、剣山地、海部山地の東西性山地が並走している。

荒川遺跡は、美馬市美馬町に所在する。美馬町は徳島県の北西部に位置し、東部で美馬市脇町、西部で三好郡三野町、南部で美馬郡つるぎ町(旧貞光町)と半田町、北部で香川県香川郡塩江町と同県綾歌郡琴南町と接する。地形は、讃岐山脈の最高峰となる竜王山(標高1059.5m)をはじめとする山地が全面積の6割余りを占めており、残りの平地もそのほとんどが扇状地である。地質は砂岩・泥岩からなる和泉層群で、比較的軟弱な性質のため、風化、崩壊による岩石、礫の流出が著しい。また、讃岐山脈の南斜



第3図 荒川遺跡周辺 地形分類図

面に源を發する吉野川の支流が数多く存在し、南北に流路をとって吉野川に注いでいる。そして、それらのほとんどが幼年谷であり、流長・流域面積が小さく河床勾配も急で、河川への掃流力が小さいといった性質を持つ。

本遺跡は美馬町の南西部に位置し、嫁坂谷川兩岸の標高92～100mの山麓台地上に展開する。台地は比較的標高が高く、平坦面を形成しており、今から1万年以上前の洪積世の地層からなるため洪積台地と呼ばれる。そのほとんどは、讃岐山脈の竜王山系から流出する野村谷川や鍋倉谷川・中野谷川などによって形成された扇状地が、相対的隆起で再び台地化した隆起扇状地である⁽¹⁾。本遺跡においても東に鍋倉谷川が、西には中野谷川が流れており扇状地を形成してきた。その後、西の谷川、轟谷川、吉田谷川、玉振谷川、枳穀谷川、姥ヶ谷川、猿ヶ谷川、嫁坂谷川、黒谷川、舟屋谷川などによって、台地の一部が開析され変貌している。また、本遺跡の西北西に「荒川衝上」⁽²⁾といったおしかぶせ断層がみられるように、中央構造線の活動が地形に大きく関わってきたことが伺われる。現況は畑と宅地とからなり、南へ緩やかに傾斜した地形である。全体的に削平をうけている調査区が多く、特に97年度の1区、2区においては、人為的な地形の改変がみられる。

2. 歴史的環境

美馬町では、国指定史跡である「段の塚穴」や「郡里廃寺」といった他にも、数多くの遺跡が確認されている。ここでは、これらの中から本遺跡に関連すると思われるものについて、時代を追ってみたい。

縄文時代

縄文時代の遺物、遺構が確認された遺跡としては、吉水遺跡、坊僧遺跡(坊僧地区・東段地区)、薬師遺跡(薬師地区・芝坂地区)があげられる。吉水遺跡は、中野谷川西側の標高115m前後の段丘上に位置し、包含層から僅かに石器が出土している。次に、野村谷川と鍋倉谷川に挟まれた緩やかな隆起扇状地上に位置する坊僧遺跡では、標高150m付近の坊僧地区において、草創期に属する有茎尖頭器が包含層から出土している。また、谷を一つ挟んだ西側の標高145m前後の東段地区からは、旧石器時代のブロックと共に縄文時代の石鏃関連ブロックが検出されている。最後に、野村谷川西側の標高120m前後の緩やかな中位河岸段丘上に位置する薬師遺跡では、野村谷川に面した薬師地区から縄文時代後期の屋外炉2基を検出し、その内の1基からは縄文時代後期中葉の遺物が出土している。また、薬師地区の西隣にあり、一段高い尾根部分の芝坂地区と薬師地区の境に小規模な谷状地形を検出し、そこに堆積した砂礫層の中から、多量の晩期の縄文土器および石器が出土している。

吉野川対岸のつるぎ町(旧貞光町)に所在する貞光前田遺跡においても、縄文時代の遺物、遺構が確認されている。貞光川下流の西河岸段丘上に位置する貞光前田遺跡では中期、後期の土器が多数出土しており、縄文時代後期の竪穴住居跡が検出された。また縄文時代早期の土器も、1点のみ出土している。

弥生時代

弥生時代においては、下突出遺跡、吉水遺跡があげられる。鍋倉谷川西側の標高130m前後の隆起扇状地



- | | | | | |
|---------------|----------------|----------------|----------------|---------------|
| 1 天神塚古墳・天神前遺跡 | 23 松ノ花遺跡 | 34 願勝寺一号墳 | 45 坊僧塚跡群 | 56 別所遺跡 |
| 2 大塚古墳 | 24 吉水遺跡 | 35 西人塚 | 46 高畑塚跡群 | 57 田上遺跡 (III) |
| 3 中村経塚 | 25 海原古墳 | 36 西山古墳 | 47 兼師遺跡 (芝坂地区) | 58 岩倉城跡 |
| 4 稲塚古墳 | 26 平野古墳 | 37 貞光前田遺跡 | 48 兼師遺跡 (秦師地区) | 59 田上遺跡 (II) |
| 5 加茂桑里 | 27 荒川遺跡 | 38 江ノ脇古墳 | 49 野村古墳 | 60 鴨地遺跡 |
| 6 七人塚古墳 | 28 荒川古墳 | 39 真鍋塚古墳 | 50 小星南遺跡 | 61 田上遺跡 (I) |
| 7 銅鏡出土伝世地 | 29 下突出遺跡 | 40 段の塚穴 (棚塚) | 51 小星遺跡 | 62 脇城跡 |
| 8 加茂神社古墳群 | 30 滝ノ宮遺跡 | 41 段の塚穴 (太鼓塚) | 52 野村八幡古墳 | 63 城山遺跡 |
| 9 丹田古墳 | 31 滝ノ宮経塚 | 42 坊僧遺跡 (東段地区) | 53 井口東遺跡 | 64 佐城遺跡 (II) |
| 10 岡田林塚一号墳他 | 32 井川塚 | 43 丸山塚跡群 | 54 国中古墳 | 65 鶴射遺跡 |
| 11 お塚さん古墳他 | 33 郡里庵寺跡 (立光寺) | 44 坊僧遺跡 (坊僧地区) | 55 上ノ原遺跡 | 66 上野城跡 |

第4図 荒川遺跡周辺の遺跡分布図

に位置する下突出遺跡では、包含層からサヌカイト製石鏃などの石器類が出土している。吉水遺跡では、調査区北部中央(中央高台)と南西部において、竪穴住居や掘立柱建物跡を検出し、僅かではあるが、弥生時代後期の土器と石鏃等の石器が出土している。また高瀬谷川と中野谷川に挟まれた河岸段丘上にある松ノ花周辺において、サヌカイト製石鏃などの石器が多量に出ており、弥生時代後期の土器も出土している⁽³⁾。

古墳時代

古墳時代においては、町内で多くの古墳が確認され、そこから遺物も出土している。それらを地域ごとに4つのグループに分けて東から、宗重古墳群、立光寺古墳群、荒川古墳群、八幡古墳群と名付けている。これらの古墳群は古墳時代後期以降に築造されたものが多く、前期の古墳として立光寺古墳群の七人塚、中期の古墳として同古墳群の井川塚があげられる。

古墳時代後期の代表的な古墳として、宗重古墳群の段の塚穴(太鼓塚・棚塚)をあげることができる。段の塚穴は、四国最大の横穴式石室(全長13.10m)を持つ太鼓塚と、墳丘裾間で約27m程離れた北西に位置する棚塚の2基の円墳から成り立つ。段の塚穴の石室は、太鼓状に胴の張った形と穹窿式の天井を持つ独特の構造から成り立ち、段の塚穴型石室と呼ばれる。棚塚においては、玄室奥に厚さ15cmの結晶片岩の板石から成る1枚の石棚を有する。また美馬町を中心に同じ型式を持つ古墳が幾つも存在することから、この地域を一つのまとまりとする一大勢力圏が存在したと考えられる。段の塚穴型石室を持つ最も古い古墳として、八幡古墳群の大国魂古墳があげられる。

この頃、朝鮮半島より須恵器が伝えられると、いろいろな器種の須恵器が横穴式石室に副葬されることとなる。段の塚穴からも多量の須恵器が出土しており、そのうち最も新しい須恵器が、徳島県最古の寺院である郡里廃寺と型的に引き次ぐことから、段の塚穴に被葬された首長が郡里廃寺を建立したと考えられる。また、それらの須恵器を焼いたとされる窯跡が、坊僧池から丸山山麓及び蕨草にかけての山麓部にみられる。そのほとんどが郡里廃寺に関するものだが、美馬郷土博物館に展示されている蕨草からの出土品に古墳時代に遡るものも確認されている。

本遺跡から最も近い所に、荒川古墳群があり、荒川古墳、平野古墳、海原古墳といった3基の古墳が集中している。いずれも古墳時代後期の古墳で、段の塚穴型石室の築造法を取り入れている。荒川古墳と海原古墳においては、石棚が確認されている。海原古墳は、玄室を仕切り石で区切ることや、玄門部に扉石を持つなど段の塚穴型石室にはあまり例がない特徴を持つ。また玄室床一面に敷石を有するのは、海原古墳だけである。平野古墳は、嫁坂谷川東岸上の讃岐山脈の南山麓に位置し、本遺跡に一番近い。残り2基の古墳も、本遺跡を中心とする直径100m内のところに確認される。

古代・中世

飛鳥時代に入り、仏教の伝来や大化の薄葬令などにより古墳がしだいに築造されなくなると、古墳築造にかわって寺院建立へと変化していく。先にも述べたが、白鳳時代には国指定史跡である郡里廃寺(立光寺)が創建され、東に塔、西に金堂を配する法起寺式伽藍配置(塔と金堂の配置が法隆寺式伽藍配置と逆)をもつ、東西94m、南北120mに広がる大寺院であったことが知られている。その後の郡里の寺院の興隆から考えると、遅くとも平安の中期頃には廃絶したものと推定される。また郡里廃寺では、主に瓦・須恵器・土師器・青銅器片などが出土している。

平安時代中期頃から、武士の台頭により貴族政治が衰退してゆく。そのうえ火災や地震・疫病などの天

変地異が多発する中で、仏の教えがだんだんと廃れ消滅してゆく時代へと入っていく。そこで、仏法滅亡を憂えた人々により、瓦に経文を書いた瓦経や銅製の経筒に経文を納めたもの、また経筒を更に陶磁製の壺に納めたものを埋めることで経文を後世に残し伝えようとした。その後鎌倉時代に入り、極楽往生や現世利益を求める供養的なものに変化していく。美馬町においても県指定史跡である滝の宮経塚で、鎌倉時代初期の銅製の経筒及び経筒外甕、和鏡、合子、刀剣、土製壺などが出土している。また、その北側に位置する標高約130mの段丘西端部の滝ノ宮遺跡からは、中世の遺構が検出された。

薬師遺跡(芝坂地区)では平安時代の木炭焼成窯跡、鎌倉時代の土師質土器焼成窯跡、室町時代の掘立柱建物跡、また薬師遺跡(薬師地区)では、室町時代の集落跡を検出した。吉水遺跡では中世の掘立柱建物跡、炭窯、土坑を検出し、土器・磁器・瓦・銅銭・輪宝などが出土している。また、多量の瓦や県内では初めての「輪宝」の出土により、吉野川中流域北岸の中世寺院に関する重要な資料となった。

平安時代中期から鎌倉時代にかけて、末法思想と浄土教の成立により、副明寺、天台宗真如寺が創建され、その後これらの寺を継承して真言宗願勝寺、浄土真宗安楽寺が成立した。願勝寺においては、南北朝時代の築造とされる四国最古の池泉式枯山水の庭園があり、滝の岩組みが京都の天竜寺庭園と同一手法であることから、中央との交流があったと考えられている。また安楽寺では、県下五大門の一つに数えられている丹塗の重層門(江戸時代建立)が存在する。このように、両寺とも時の領主や守護から厚い保護を受け、栄えたことが知られている。その他にもいくつかの中世寺院の存在が、「慶長検地帳」から写し取ったと思われる記録や、「重清村誌」や「阿波志」に明記されている。

鎌倉時代末期に築城されたと考える重清城跡が、標高94~100mに位置する美馬町字城の河岸段丘の西端に存在する。また標高235mに位置する郡里字滝宮の北部の小山には、戦国時代に築城されたと考える郡里城跡がある。近年、重清城跡を調査する中で土塁と堀の存在が確認され⁽⁴⁾、15世紀代の瀬戸焼の小皿片・土師質土器羽釜や播鉢、青磁片が出土した。

近世・近現代

文化十年(1813年)の高都帳によると町域は、郡里村・郡里山・重清村の二村一山で構成されている。明治二十二年(1889年)に郡里村と重清村の2ヶ村が成立する。その後、吉野川の川中島である中島地区が重清村に編入し、郡里村が町制に施行した。そして、昭和三十二年(1957年)に郡里町と重清村が合併し、現在の美馬町が成立する。ちなみに本遺跡の所在する荒川は、重清地区に属していた。

〈脚注〉

- (1) 第3図において開析扇状地と呼ばれ、各支流ごとに区分して、中流部で最も広く分布するものを低位段丘(I)とした。そして、これより地形面の高度が高く古くて開析の進んでいるものを中位段丘とし、低位段丘(I)より低くて新しいものを低位段丘(II)とした。(吉野川流域水害地形分類図(2)による)
- (2) 荒川衝上とは、高さ40m、南北幅250mの大露頭である。また、古い地層が新しい地層に乗り上げた逆転現象が起こっており、中央構造線の活動が水平成分より垂直成分のほうが大きいということの一つの根拠になっている。(地学のガイドによる)
- (3) 美馬町史による
- (4) 平成十五年度の「指定史跡等保存活用事業」として、徳島県埋蔵文化センターが2ヶ月に渡り調査を行った。(調査成果報告会資料「重清城跡」による)

《参考文献》

- 美馬町史編集委員会 『美馬町史』 美馬町 1989年
- 奥村 清・西村 宏・村田 守・小澤 大成 『徳島 自然の歴史』 コロナ社 1998年
- 三好 昭一郎監修 『徳島の地名 日本歴史地名大系大37巻』 平凡社 2000年
- 天羽 利夫・岡山真知子 『徳島の遺跡散歩（徳島市民双書19）』 徳島市立図書館 1985年
- 徳島県地学のガイド編集委員会編 『徳島県 地学のガイド 徳島県の地質とのおいたち』 コロナ社 2001年
- 寺戸 恒夫 『徳島の地理－地域からのメッセージ－』 徳島地理学会 1995年
- 徳島県史編さん委員会 『徳島県史 第1巻』 徳島県 1994年
- 岩崎 正夫 『徳島の自然 地質1』 徳島市中央公民館 1979年
- 中川 衷三 『徳島の自然 地質2』 徳島市中央公民館 1981年
- 『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol4』 (財)徳島県埋蔵文化財センター 1992年
- 『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol5』 (財)徳島県埋蔵文化財センター 1993年
- 下窪 光俊ほか 『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第34集
四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書17 薬師遺跡・坊僧遺跡』
(財)徳島県埋蔵文化財センター他 2001年
- 泊 強 『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第35集
貞光前田遺跡－西部テクノスクール建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
(財)徳島県埋蔵文化財センター他 2001年
- 横田 温生ほか 『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第39集
四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書20 吉水遺跡』
(財)徳島県埋蔵文化財センター他 2001年
- 金森 映人ほか 『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第41集
四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書21 試掘調査総括 下突出遺跡・滝ノ宮遺跡』
(財)徳島県埋蔵文化財センター他 2001年
- 前田 綾博 『2004埋蔵文化財移動展 美馬展関連 調査成果報告会資料 重清城跡』
(財)徳島県埋蔵文化財センター他 2004年

Ⅲ 調査成果

1 基本層序

本遺跡は前述の通り、標高92～100mの山麓台地上に位置する調査対象地は、南に向かって緩やかに傾斜する平地で、南流する嫁坂谷川を挟んで調査区が東西方向に展開する。

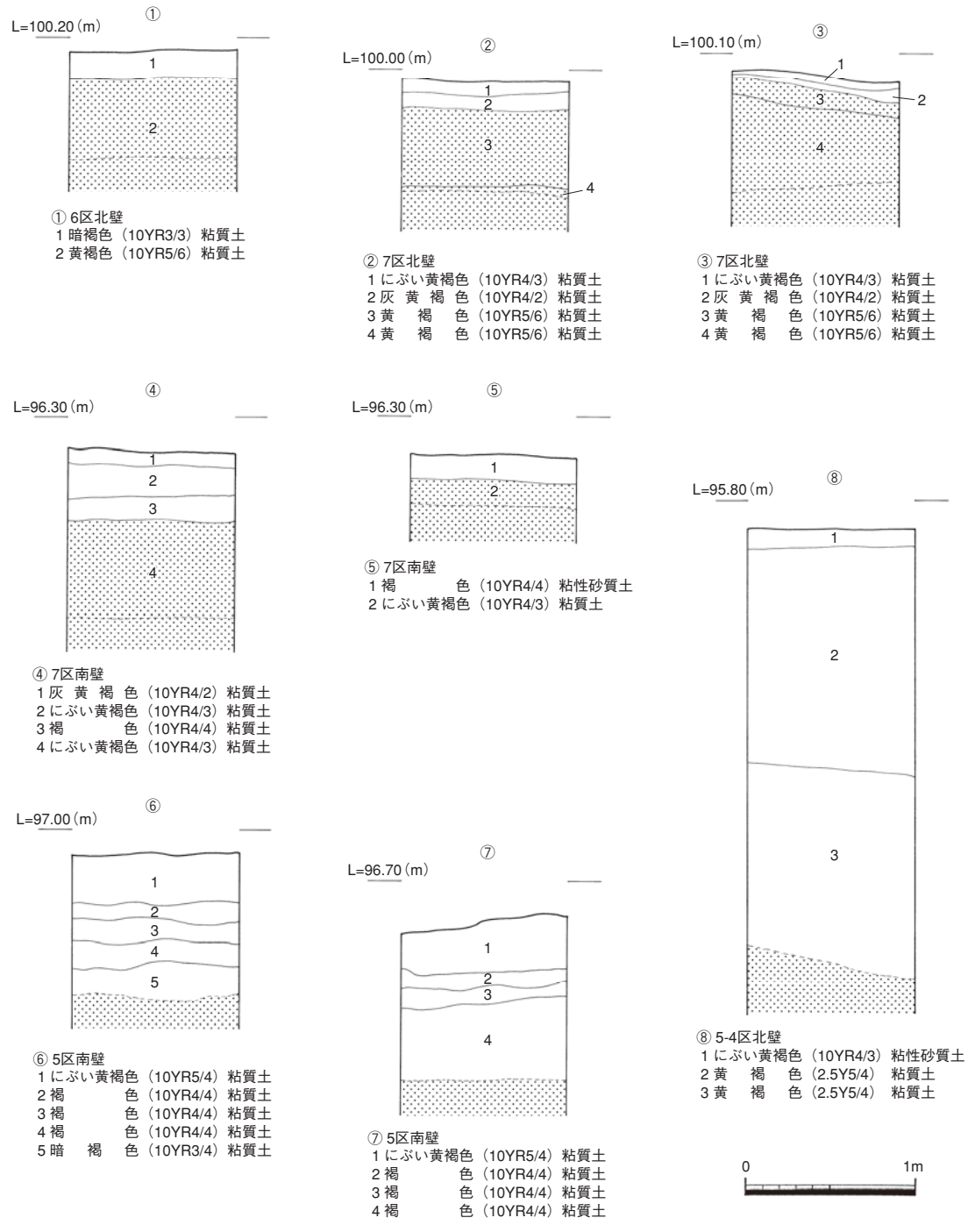
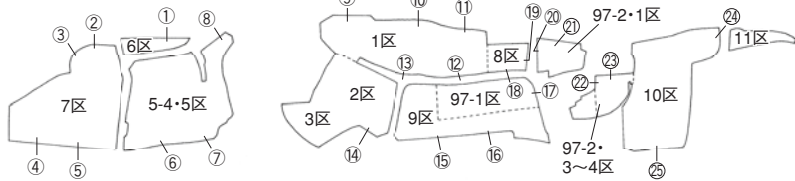
台地を東西に横断するような形で調査区が設定され、東端の11区から西端の7区までの総延長距離は4kmを越える。調査区は讃岐山脈の山裾に位置し、調査前は宅地および田畑である。緩やかに傾斜してはいるものの、田畑および宅地造成に伴う削平もしくは盛土などの土地改変が行われており、各調査区ごとに包含層や遺構の残存状況は異なる。また調査範囲が広範囲にわたるため、調査地点が異なれば土層堆積にも相違が認められるものの、基本的には表土・盛土・遺構面として捉えた自然堆積層となる。

本遺跡の土層堆積の観察は、基本的に各調査区の四壁について行った。しかし各調査区によって土層断面の記録方法は異なり、全面記録もしくは東西または南北の任意の壁での記録にとどめている調査区もある。報告にあたっては、これらの記録から各調査区での平均的な土層堆積をもとに柱状模式図を作成し、各調査区ごとの基本層序について述べる。(第5～10図)

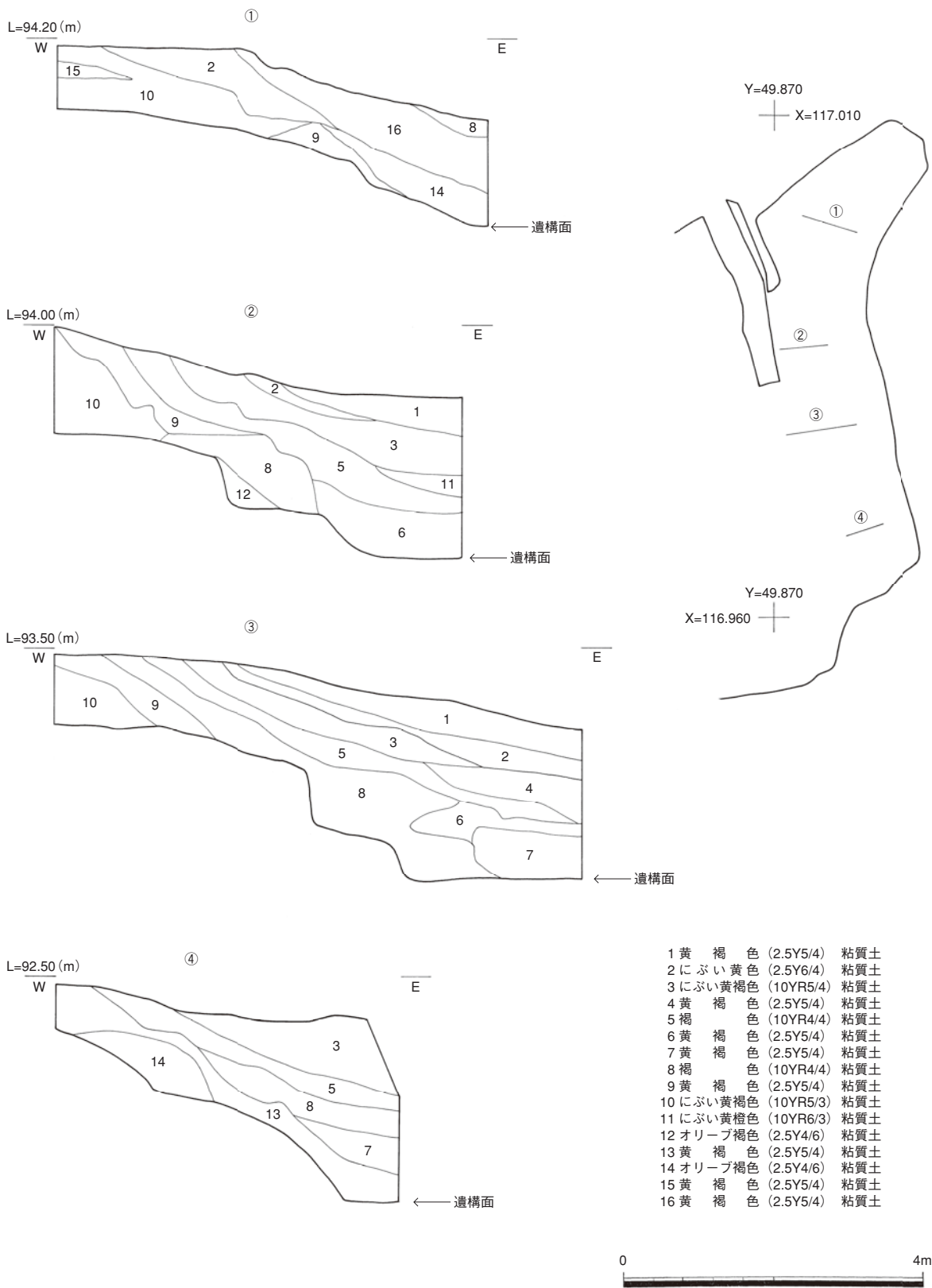
嫁坂谷川の西側に位置する5～7区は、現況は宅地および田畑である。強弱はあるものの、田畑に伴う土地改変をそれぞれ受ける。5区の東側は、嫁坂谷川の開析により急な勾配を呈し、南壁では0.90m、北壁の東側部分では約2.30m程の盛土及び斜面堆積土が認められる。5～7区の基本土層は、概ね表土直下は直径10cm前後の礫を多量に含む黄褐色粘質土の自然堆積層となり、この層上で縄文時代・弥生時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代の遺構を検出した。また5-4・5区では、土層堆積状況を調べるために調査区の四壁以外に4本ベルトを残して掘り下げを行っている。それを表したのが第6図で、土層図の一番下の太いラインが遺構面とした自然堆積層である。土層は各地点でそれぞれ6～10層に分層でき、黄褐色、にぶい黄色、にぶい黄褐色、褐色、にぶい黄橙色、オリーブ褐色を呈し、全般的に直径10cm弱の礫を含む。なかでも6・7・10・11～13・15層は直径10cm前後の礫を多量に含み、7・11・13層は10cm以上の礫を、15層は小礫を極めて多量に含む。また、ベルト①の2・8・16層、ベルト②～④層の1～3層・11層から弥生時代～中世に属する遺物が、それより下層に縄文土器の出土が認められた。

嫁坂谷川の東側に位置する1～3区、8～11区、97-1区、97-2区のうち、1区の現況は宅地だが、その他の調査区は田畑である。それぞれの調査区において、宅地および田畑造成に伴う土地改変を受けるが、2・3区が特に著しい。遺構面として捉えた自然堆積層は含有物は異なるものの、97-2・1区の⑳までは褐色を呈し、97-2・3、2・4区、10区の㉒～㉓はにぶい黄褐色を呈する。また97-2・1区、10区の一部で、第二遺構面が確認された。この第二遺構面とした自然堆積層と、他の調査区で確認した遺構面が同一面となる。またこの二つの調査区で確認された第一遺構面の拡がりは、隣接する調査区では確認されていない。これらの調査区では、縄文時代～古墳時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代の遺構を検出した。嫁坂谷川の西側では弥生時代の遺構は土坑や柱穴を主体とするが、東側では竪穴住居8棟を検出した。また、西側では認められなかった古墳時代の墳墓も確認している。

1区の㉑では、遺構面とした自然堆積層の標高が調査区内では一番高く、その地点を頂点として東および南側に向かって緩やかに傾斜する。また嫁坂谷川のある西側に向かっては、勾配のきつい斜面とな

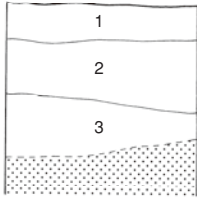


第5図 基本土層図 (1)



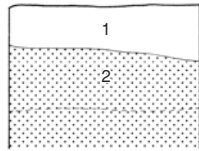
第6図 5-4・5区土層図

⑨ L=100.80 (m)



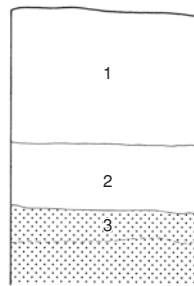
- ⑨ 1区北壁
 1 暗褐色 (10YR3/4) 粘性砂質土
 2 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土
 3 褐色 (10YR4/6) 粘性砂質土

⑩ L=99.60 (m)



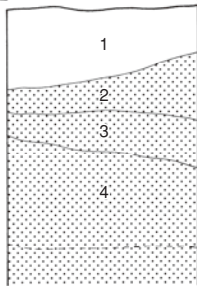
- ⑩ 1区北壁
 1 褐色 (10YR4/6) 粘質土
 2 褐色 (10YR4/4) 粘性砂質土

⑪ L=99.00 (m)



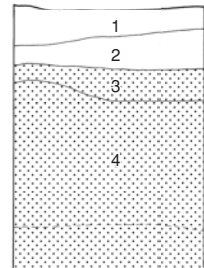
- ⑪ 1区北壁
 1 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土
 2 褐色 (10YR4/4) 粘質土
 3 褐色 (10YR4/4) 粘質土

⑬ L=98.10 (m)



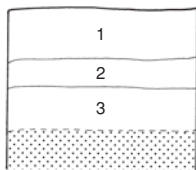
- ⑬ 1区南壁
 1 暗褐色 (10YR3/4) 粘質土
 2 黄褐色 (10YR5/8) 粘質土
 3 褐色 (10YR4/6) 粘性砂質土
 4 褐色 (10YR4/6) 粘質土

⑫ L=97.40 (m)



- ⑫ 1区南壁
 1 褐色 (10YR4/4) 粘質土
 2 褐色 (10YR4/4) 粘質土
 3 褐色 (10YR4/4) 粘質土
 4 褐色 (10YR4/4) 粘性砂質土

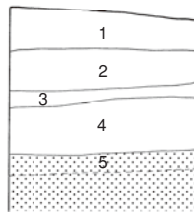
⑭ L=96.00 (m)



- ⑭ 2区南壁
 1 褐色 (10YR4/4) 粘質土
 2 褐色 (10YR4/4) 粘質土
 3 にぶい黄褐色 (10YR4/6) 粘性砂質土

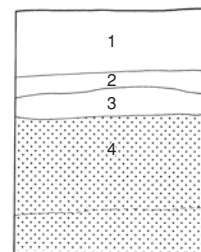


⑮ L=95.60 (m)



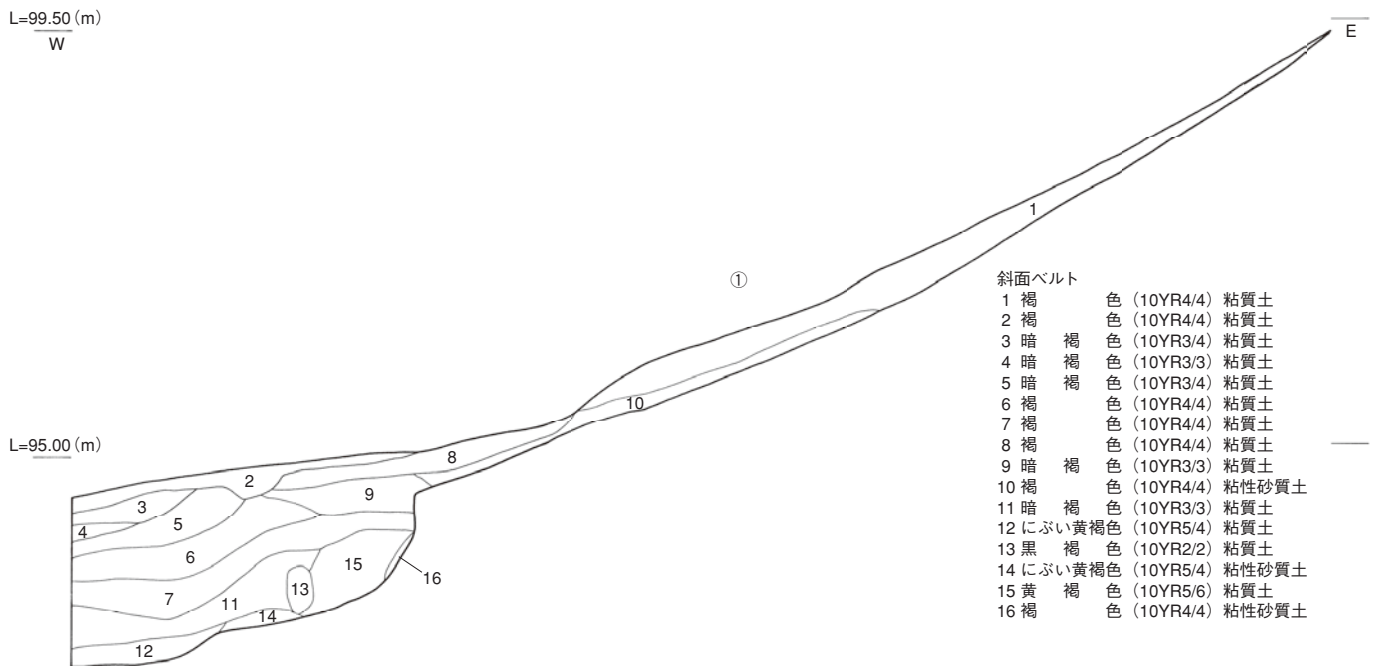
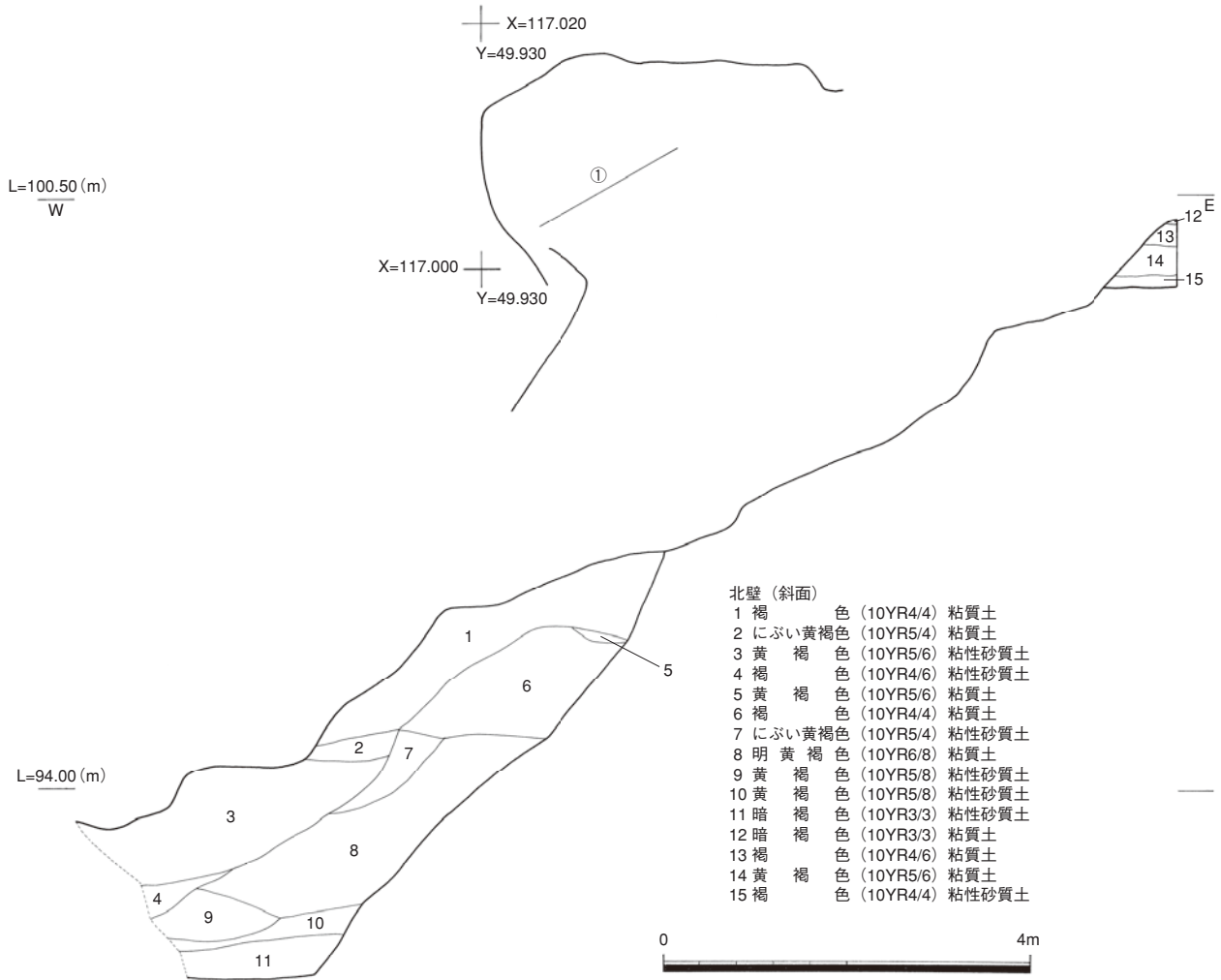
- ⑮ 9区南壁
 1 暗褐色 (10YR3/4) 粘質土
 2 暗褐色 (10YR3/4) 粘性砂質土
 3 暗褐色 (10YR3/3) 粘性砂質土
 4 褐色 (10YR4/4) 粘性砂質土
 5 褐色 (10YR4/6) 粘質土

⑯ L=94.80 (m)

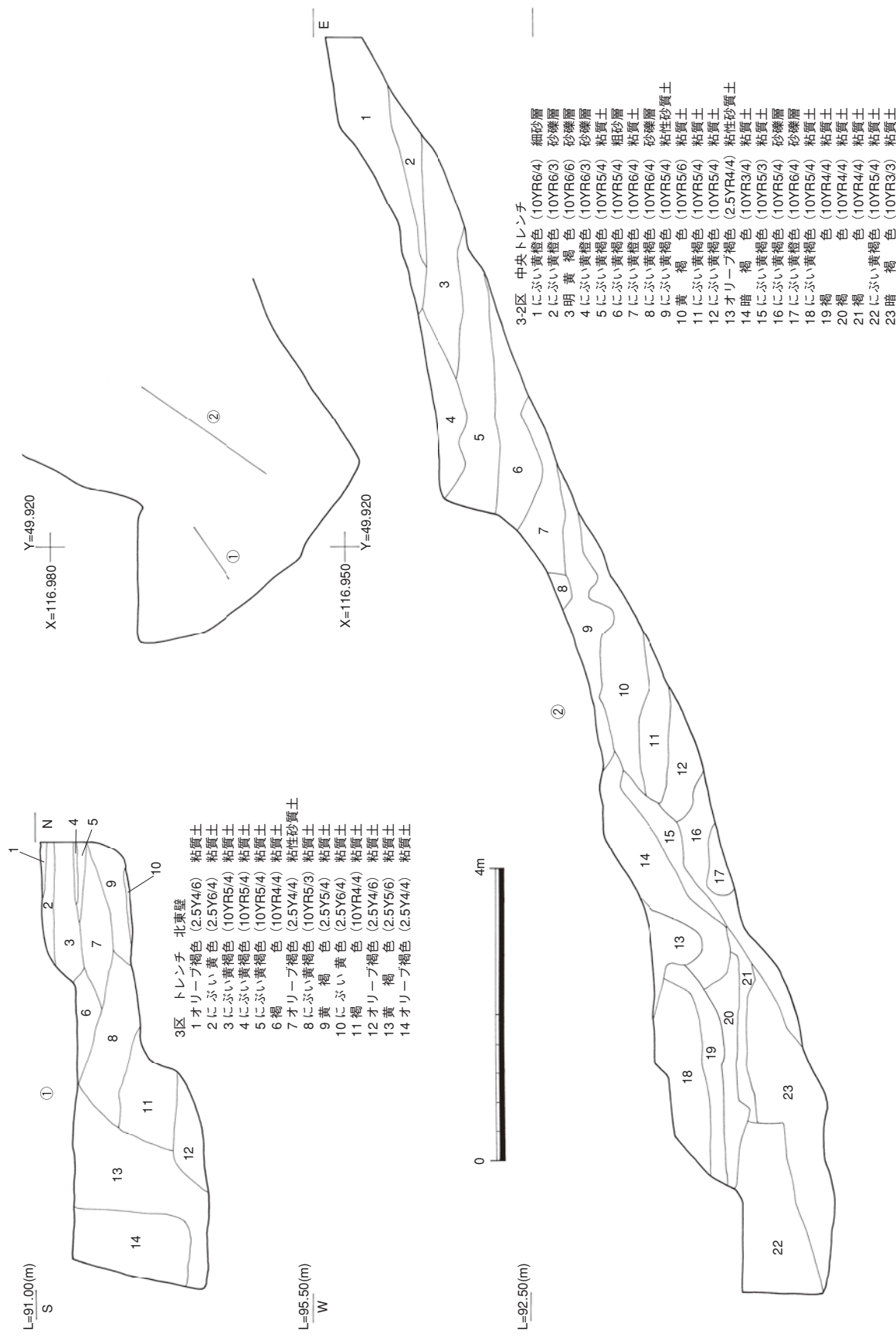


- ⑯ 9区南壁
 1 暗褐色 (10YR3/4) 粘質土
 2 褐色 (10YR4/4) 砂質土
 3 褐色 (10YR4/4) 砂質土
 4 褐色 (10YR4/6) 砂礫層

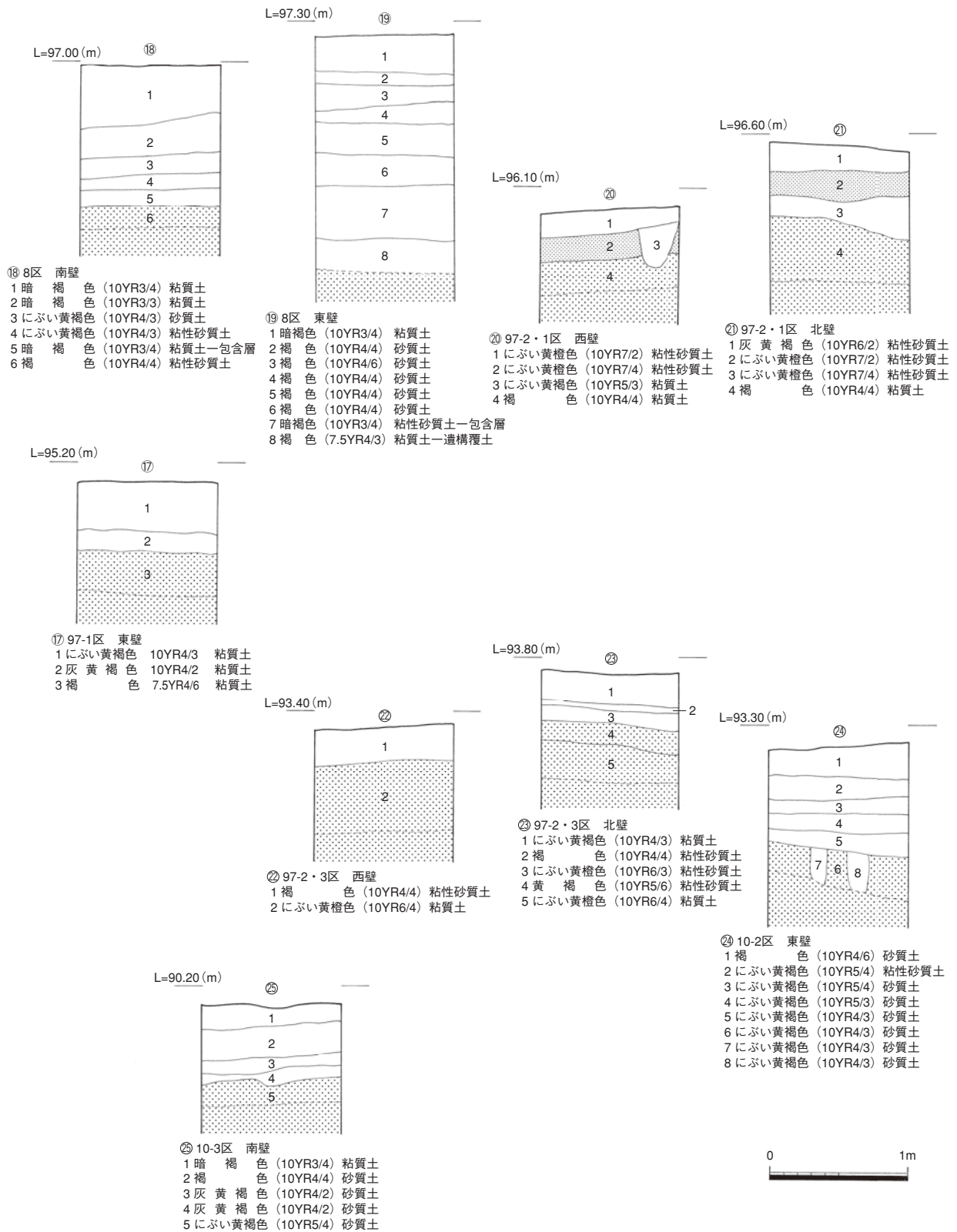
第7図 基本土層図 (2)



第8図 1区北壁斜面・ベルト土層図



第9図 3区土層図



第10図 基本土層図 (3)

る。この斜面部の高低差は、調査区内で約7mを測る。またこの斜面上に、土層堆積状況を調べるためにベルト1本を設定して掘り下げを行っている。北壁とベルトの土層堆積状況は、第8図に表している。北壁の斜面部は11層に分層でき、それぞれ褐色・にぶい黄褐色・黄褐色・明黄褐色を呈し、一般的に直径10cm前後の礫を多く含む。その中の7層では、小礫を特に多く含む。また、1・2層で土器片が認められた。ベルト①は16層に分層でき、それぞれ褐色・暗褐色・にぶい黄褐色・黒褐色を呈する。一般的に直径10cm前後の礫を含み、1・3・6・7・11・14層では特に多く認められる。また6～8層では、土器片が出土した。1区から出土した縄文土器は、すべてこの西壁際のさらに落ち込みを呈する斜面から出土した。これらの縄文土器は、小礫を多量に含む遺構面直上で確認されている。1区内の表土は宅地撤去の際に削平され、自然堆積層の上層は盛土のみが残る。この盛土はそれぞれ暗褐色・黄褐色・褐色を呈し、東側の厚いところでは約1mを測る。

2区は表土直下は0.40m程の盛土で、その下に遺構面を確認した。3区では壁面での観察はできなかったものの、ベルト2本を設定して土層堆積状況の観察を行っている。それは、第9図に表した。①は14層に分層でき、オリーブ褐色・にぶい黄色・にぶい黄褐色・褐色・黄褐色を呈する。14層のうち7層以外は粘質土で、一般的に小礫を含む。5層では小礫を多量に含み、3・4層では直径10cm大の礫を多く含む。14層では、土器片が認められた。また13層と遺構面との境に砂礫層が認められ、炭化物を含む。②は23層に分層でき、にぶい黄橙色・明黄褐色・にぶい黄褐色・黄褐色・オリーブ褐色・暗褐色・褐色を呈する砂礫層あるいは粘質土である。6層は、直径30cm大の礫を含む。7・19層は直径10cm前後の礫を、9・22・23層は小礫を多量に含み、なかでも22層は極めて多い。1～12・16・17層は自然堆積層であり、13～15層・18～23層が包含層となる。縄文土器は包含層の中でも下層の22・23層を中心に出土し、この層から時代の異なる遺物の混入は認められなかった。

道路を挟んで2区に隣接する9区で確認した遺構面である自然堆積層は、直径5～20cm前後の礫を含み、西側では砂質土だったのが東側では砂礫層となる。97-1区でも同様に、表土・盛土の下に褐色を呈する遺構面を確認した。1区の東隣にある8区では、包含層を確認した。8区以外に包含層を確認した調査区は、8区と道路を挟んで東側に隣接する97-2・1区と10区のみである。8区では、表土から包含層までの間は約0.40～0.80m程の盛土である。東側へ行くにつれて、盛土は厚くなる。

97-2・1区では、遺構面を2面確認した。耕作土直下は第一遺構面であり、にぶい黄橙色を呈する。第二遺構面として捉えた層は褐色を呈し、西側では第一遺構面直下に、東側では第二包含層と考えられるにぶい黄橙色粘性砂質土の直下に確認できた。

97-2・97-3、2・4、4区と10区では、ほぼ表土直下はにぶい黄褐色、あるいはにぶい黄橙色を呈する遺構面である。部分的に盛土が認められ、褐色、にぶい黄橙色およびにぶい黄褐色を呈する。また10区では部分的に包含層が認められ、②⑤では灰黄褐色の、②④ではにぶい黄褐色を呈する。

1 遺構と遺物

平成8(1996)年度、平成9(1997)年度の調査で確認した遺構の配置については、第11・78図に示すとおりである。調査区は緩傾斜地上に拡がり、遺構密度に違いはあるものの全調査区において遺構・遺物を確認した。造成に伴う削平を受けるものの、前述のように部分的に包含層が残存する。

今回の調査で確認された遺構・遺物の所属時期は、縄文時代中期～後期・弥生時代後期・古墳時代後期・鎌倉時代・室町時代・江戸時代と時代幅が広く、そのため記述に際しては各時代ごとに項目立てることとした。また江戸時代に関しては、諸事情から割愛することとした。

(1) 縄文時代

縄文時代の遺構は嫁坂谷川を挟んだ両岸に展開し、97-1区が東限になる。第二遺構面が確認された8区では、遺構の残存状況は良好である。遺構総数は、土坑15基、柱穴26基、不明遺構2基で、時期は縄文時代後期を主体とする。遺構数はそう多く確認していないものの、嫁坂谷川への斜面部で60,000点にも及ぶ縄文時代中期～晩期に至る土器片が出土している。吉野川を挟んだ対岸のつるぎ町(旧貞光町)に貞光前田遺跡が所在し、縄文時代晩期の土坑や土器等が確認されている。遺構から出土した土器の時期は貞光前田遺跡と異なるものの、荒川遺跡が所在した段丘上に縄文時代の遺跡の拡がりを想定できる。

土坑

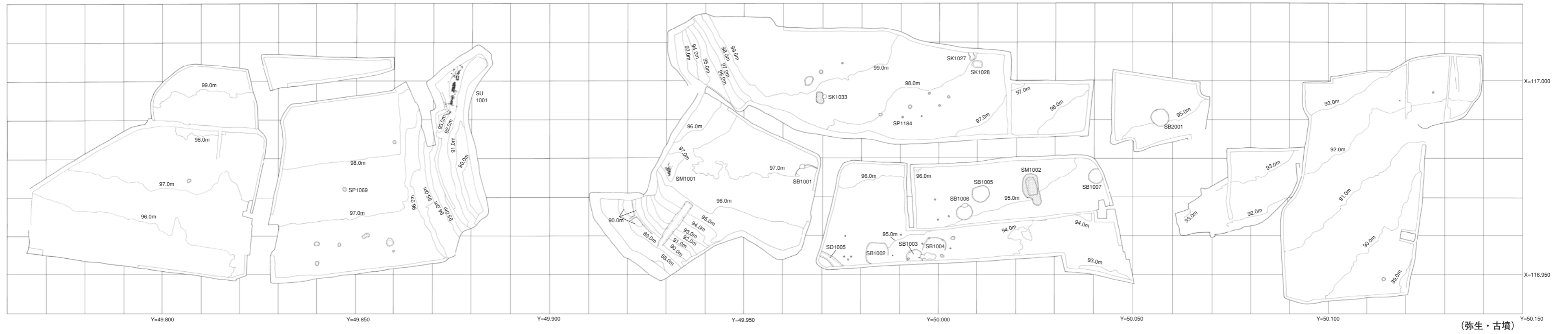
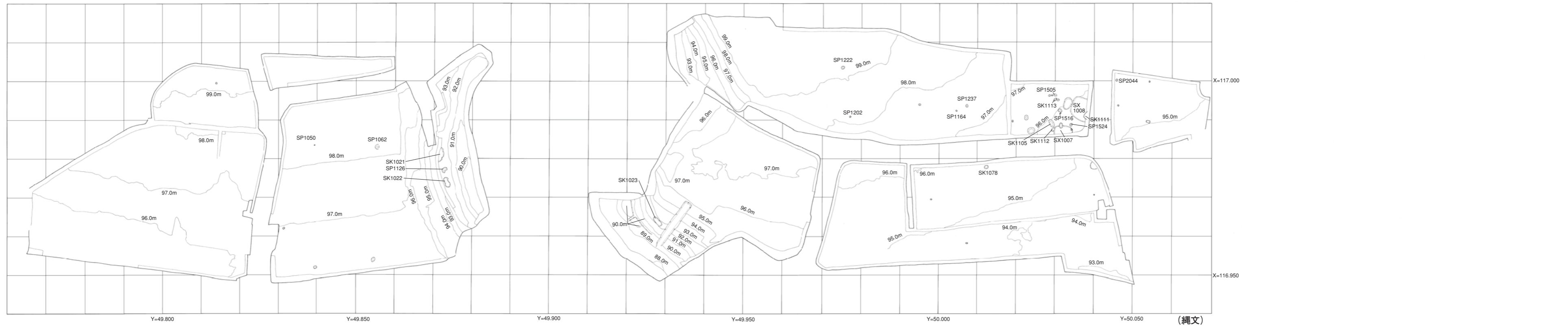
土坑21号 (SK1021) (第12図)

5-5区 H・I-25で遺構の西半分を調査区側溝に切られた状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は不整な逆台形を呈し、長軸3.68m、最大幅1.30m、最大深度0.38mを測る。また平面形態の不整形さから、何基かの土坑の切り合い関係を想定したが、土層堆積からそれを裏付けることはできなかった。覆土は暗褐色粘質土で、含有物から2層に分層できる。下層は、砂岩礫を多く含む。

出土遺物のうち図化できたのは、福田KⅡ式に比定できる深鉢片2点(1・2)、縁帯文成立期深鉢1点(3)、後期無文深鉢4点(4～7)、中期後半と思われる有文の浅鉢1点(8)、福田KⅡ式の浅鉢1点(9)、無文浅鉢3点(10～12)、無文底部2点(13・14)、打欠石錘(S1)、斑糲岩製の磨石(S2)である。無文深鉢のうち、5のみ口縁端部に直刻目を施す。底部のうち、13は深鉢で平底Aに、14は浅鉢で平底Bに分類できる。中期の遺物が出土しているものの、遺構の所属時期は縄文時代後期前葉と思われる。

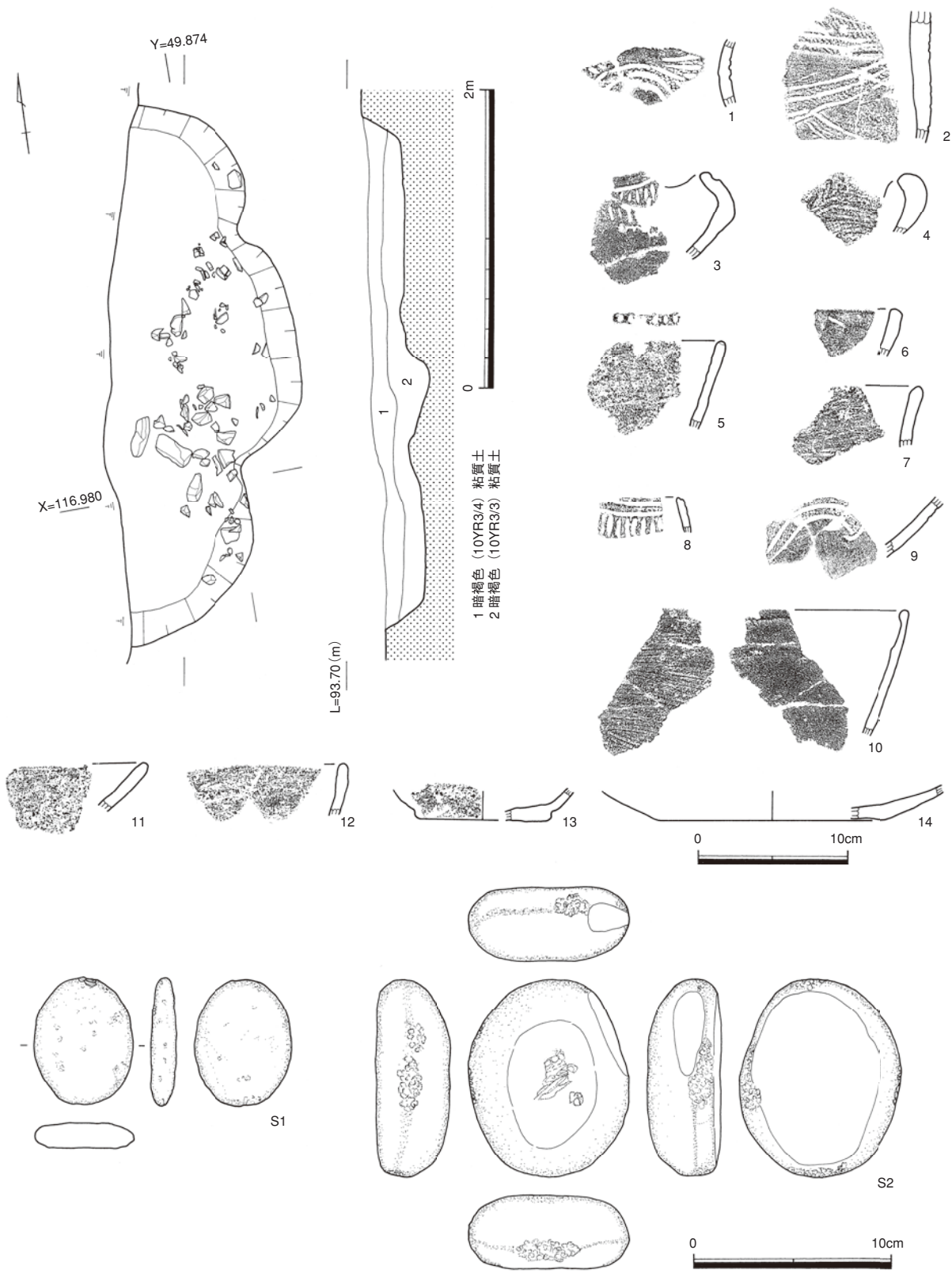
土坑22号 (SK1022) (第13図)

5-5区 G-25で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は不整な船底形を呈し、長軸2.73m、最大軸1.40m、最大深度0.13mを測る。不整な平面形態から何基かの遺構の切り合い関係を想定したが、土層堆積からそれを裏付けることはできなかった。覆土は褐色粘質土で、小礫を大量に含

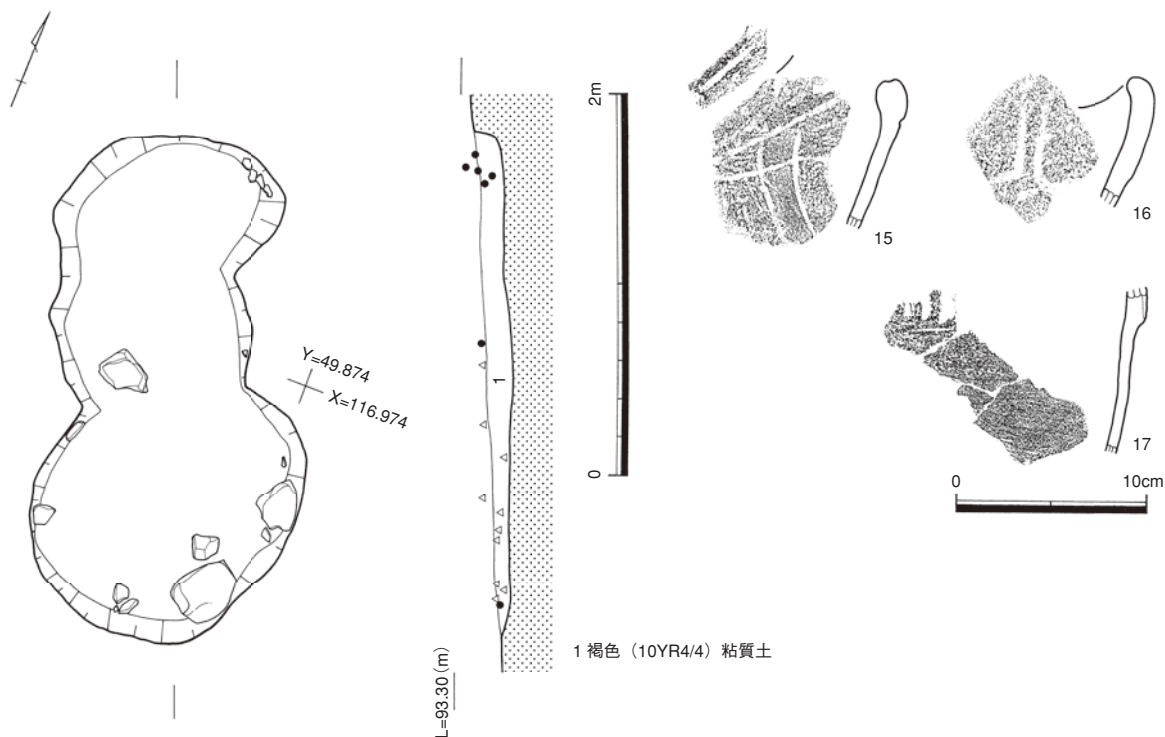


第11図 遺構配置図（縄文～古墳）

スクリーントーン - 古墳時代の遺構



第12図 SK1021 遺構図・出土遺物



第13図 SK1022 遺構図・出土遺物

む。

出土遺物のうち図化できたのは、中津式・福田KⅡ式・縁帯文の深鉢3点(15～17)である。出土遺物から、遺構の所属時期を縄文時代後期前葉に比定できる。

土坑23号 (SK1023) (第14～16図)

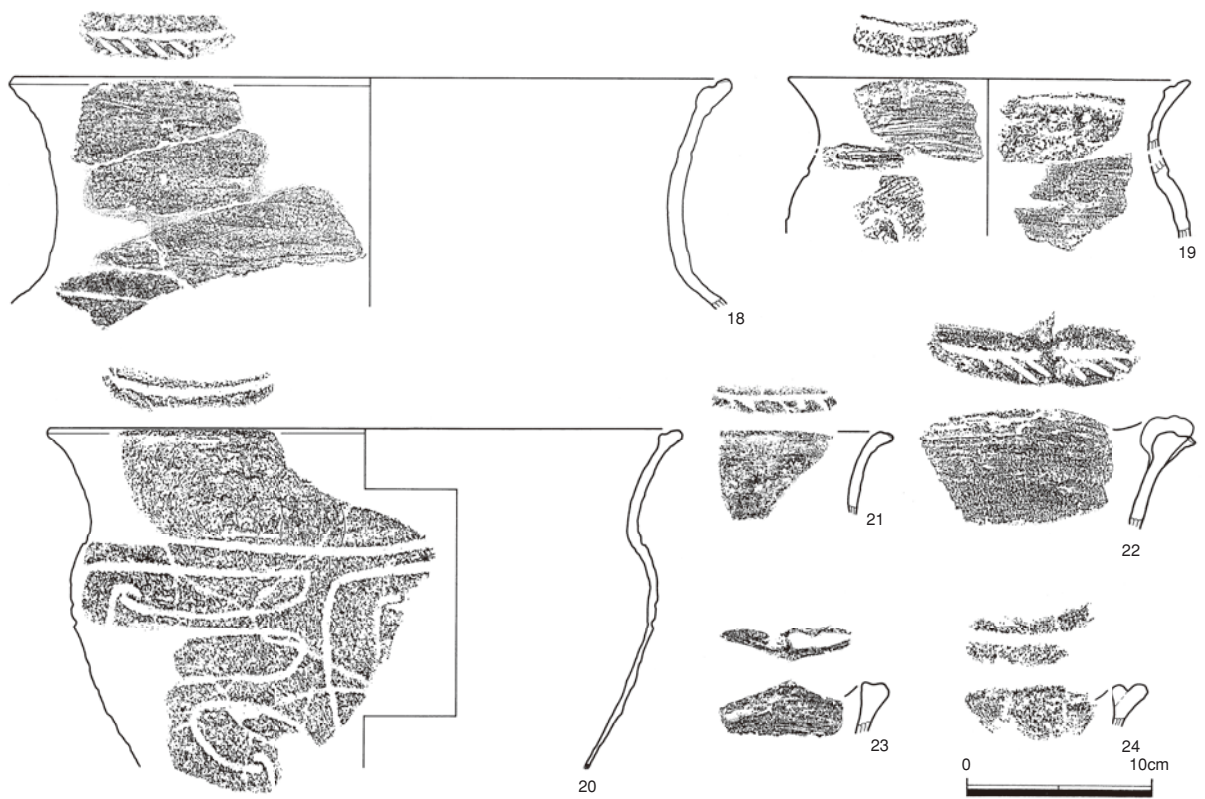
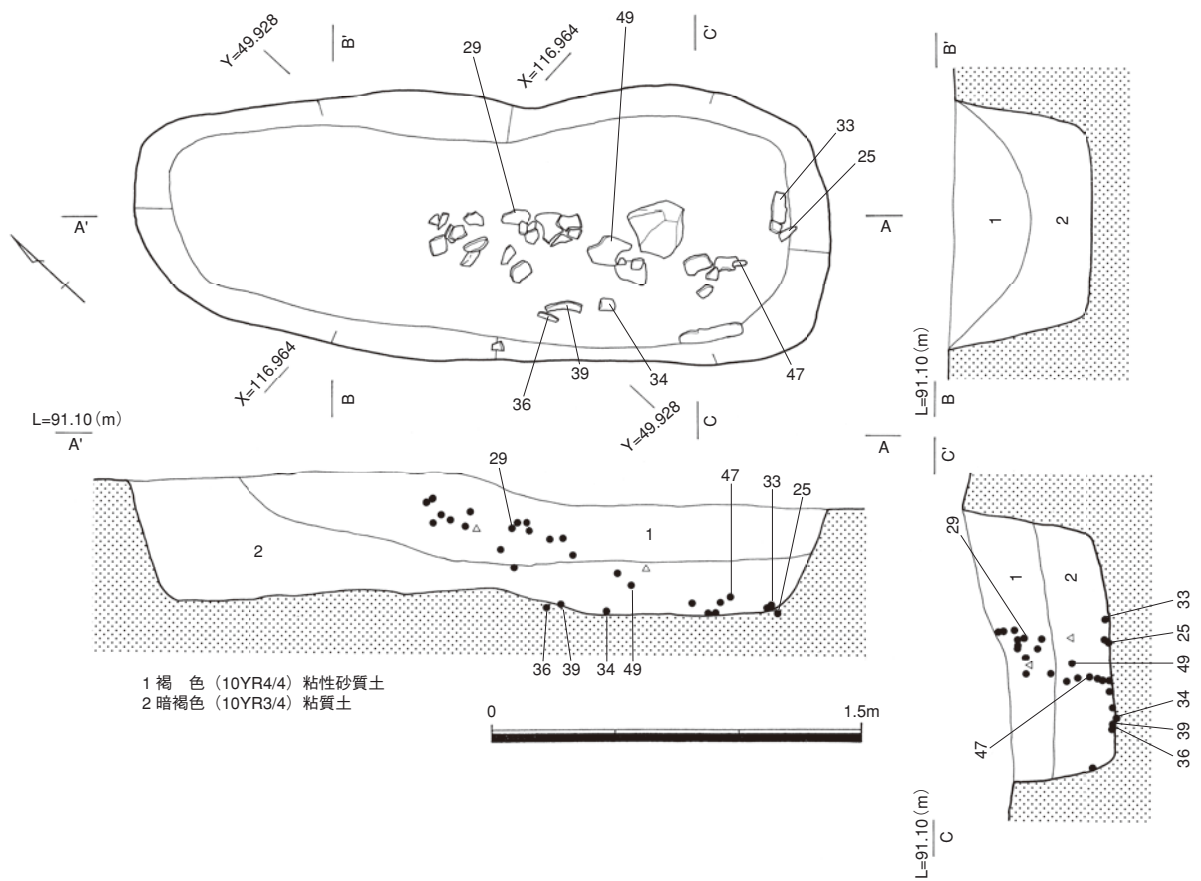
3区 E-35で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈する。長軸2.86m、短軸1.14m、最大深度0.56mを測る。覆土は2層に分層でき、上層は褐色粘性砂質土で小礫を多く含み、下層は暗褐色粘質土で炭化物を若干含む。

出土遺物のうち、有文深鉢12点(18～29)、無文深鉢10点(30～39)、浅鉢5点(40～44)、壺1点(45)、底部7点(46～52)が図化できた。深鉢の多数が縁帯文成立期に属する。無文深鉢のうち、30のみ口唇部に斜め方向の刻目を持つ。浅鉢のうち、40は福田KⅡ式、41は縁帯文、42は集約沈線文、43・44は沈線文に属する。図化できた底部のうち49以外は深鉢の底部で、平底A(46・47・51)・平底B(50)・凹底(48・52)に分類できる。49は、縁帯文に比定できる浅鉢の底部である。出土遺物から、遺構の所属時期は縄文時代後期前葉に比定できる。

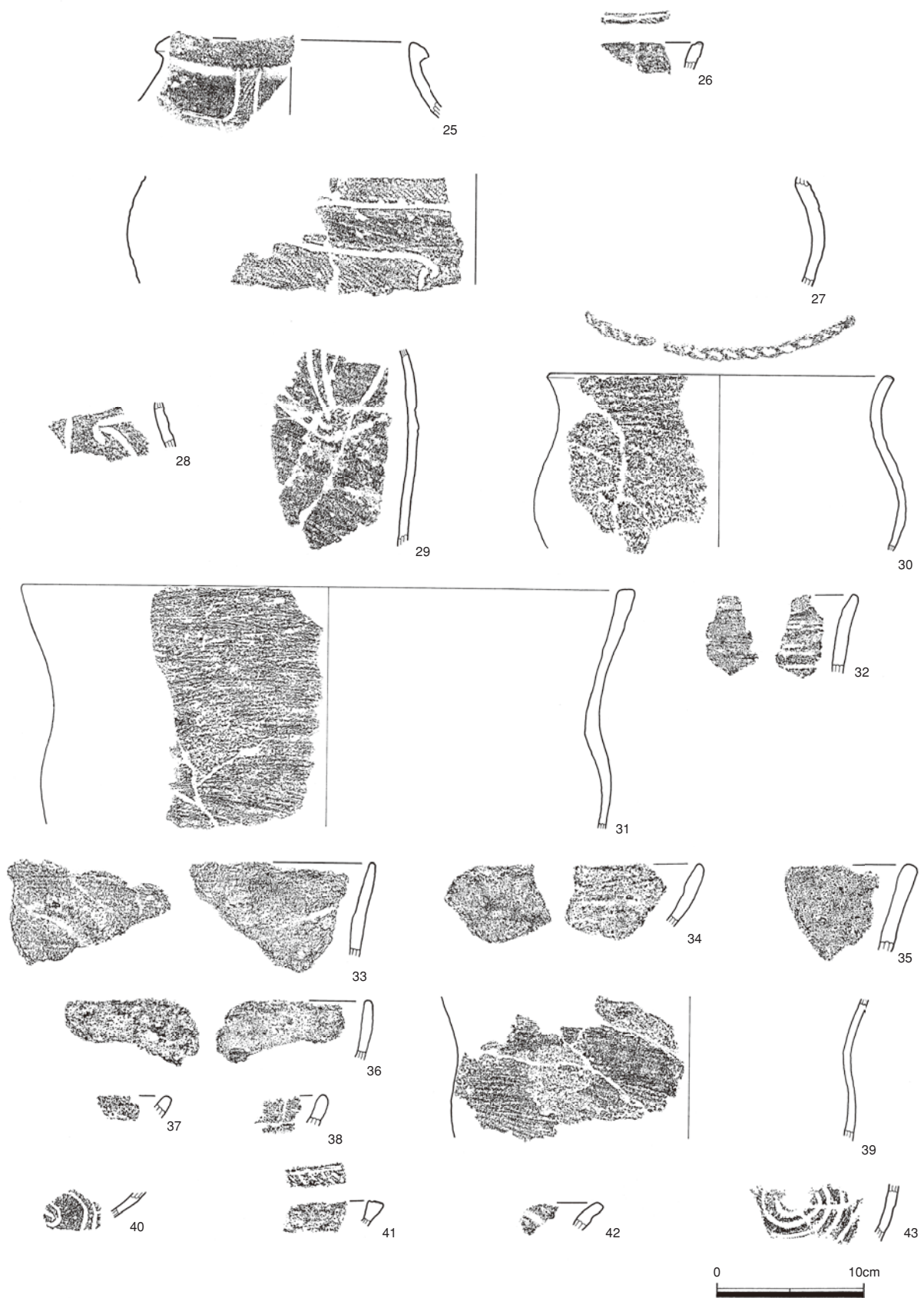
土坑78号 (SK1078) (第17図)

97-1区 E-51で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈する。長軸0.93m、短軸0.83m、最大深度0.18mを測り、覆土は褐色粘性砂質土でしまりが弱い。

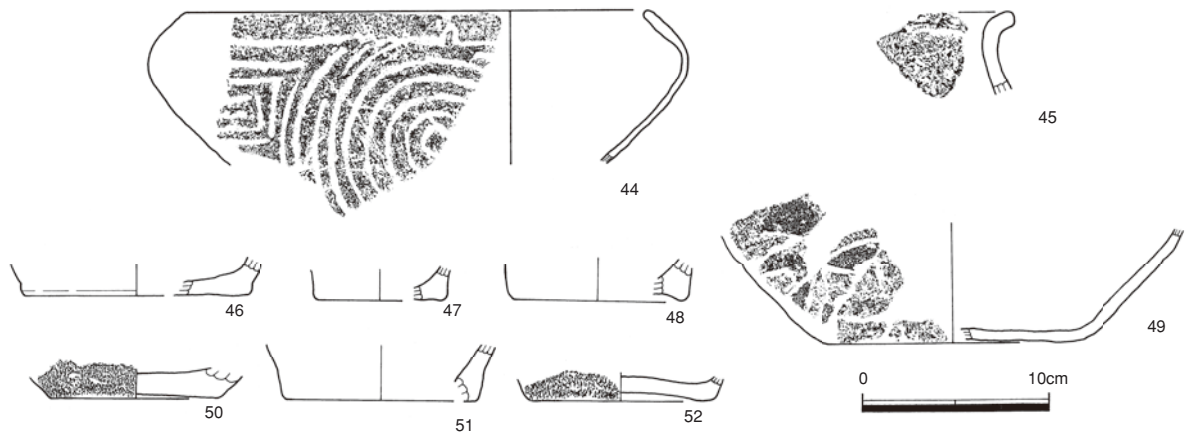
出土遺物のうち、内外面に条痕が認められる無文深鉢(53)のみ図化できた。出土遺物から、遺構の所



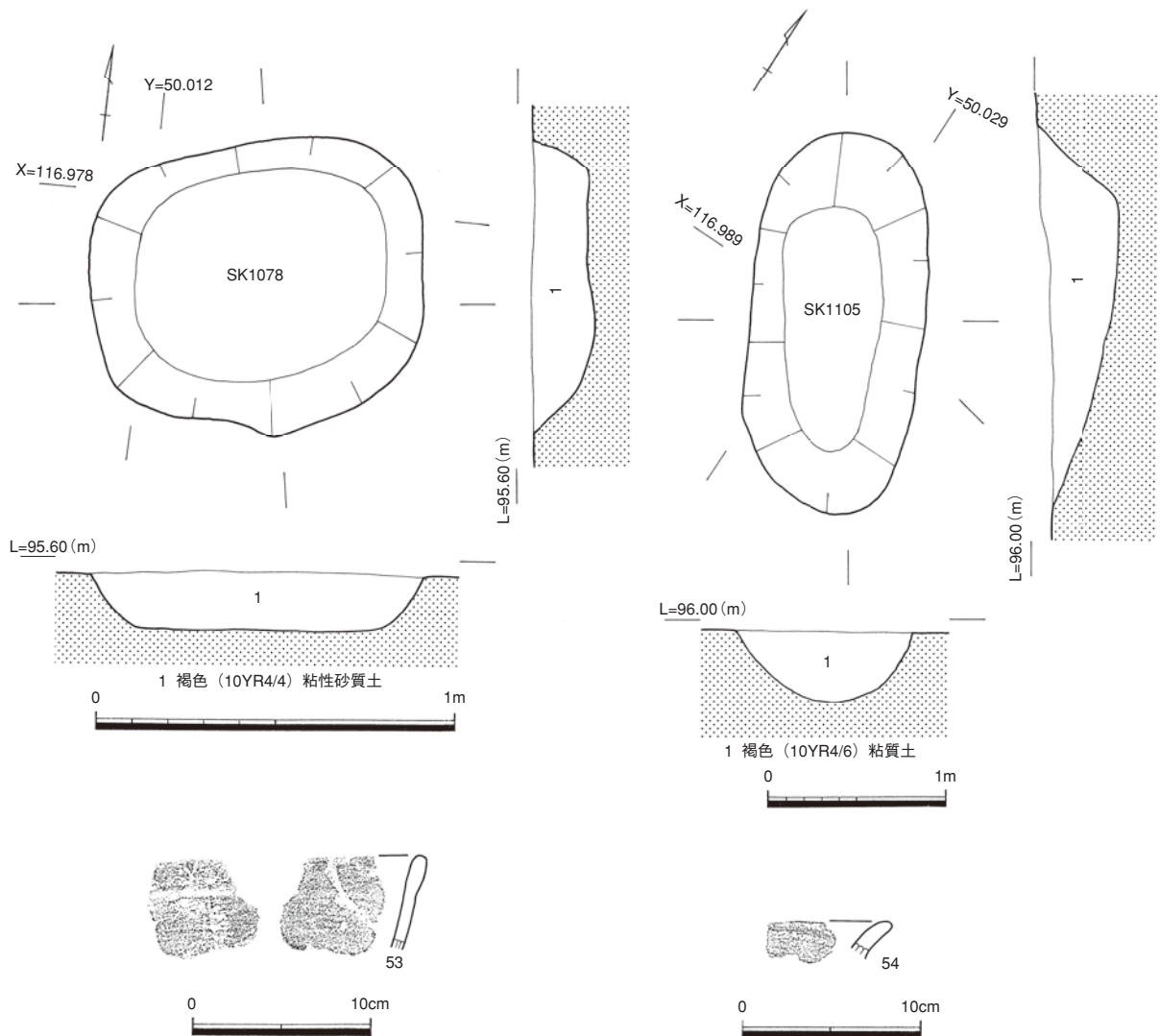
第14図 SK1023 遺構図・出土遺物



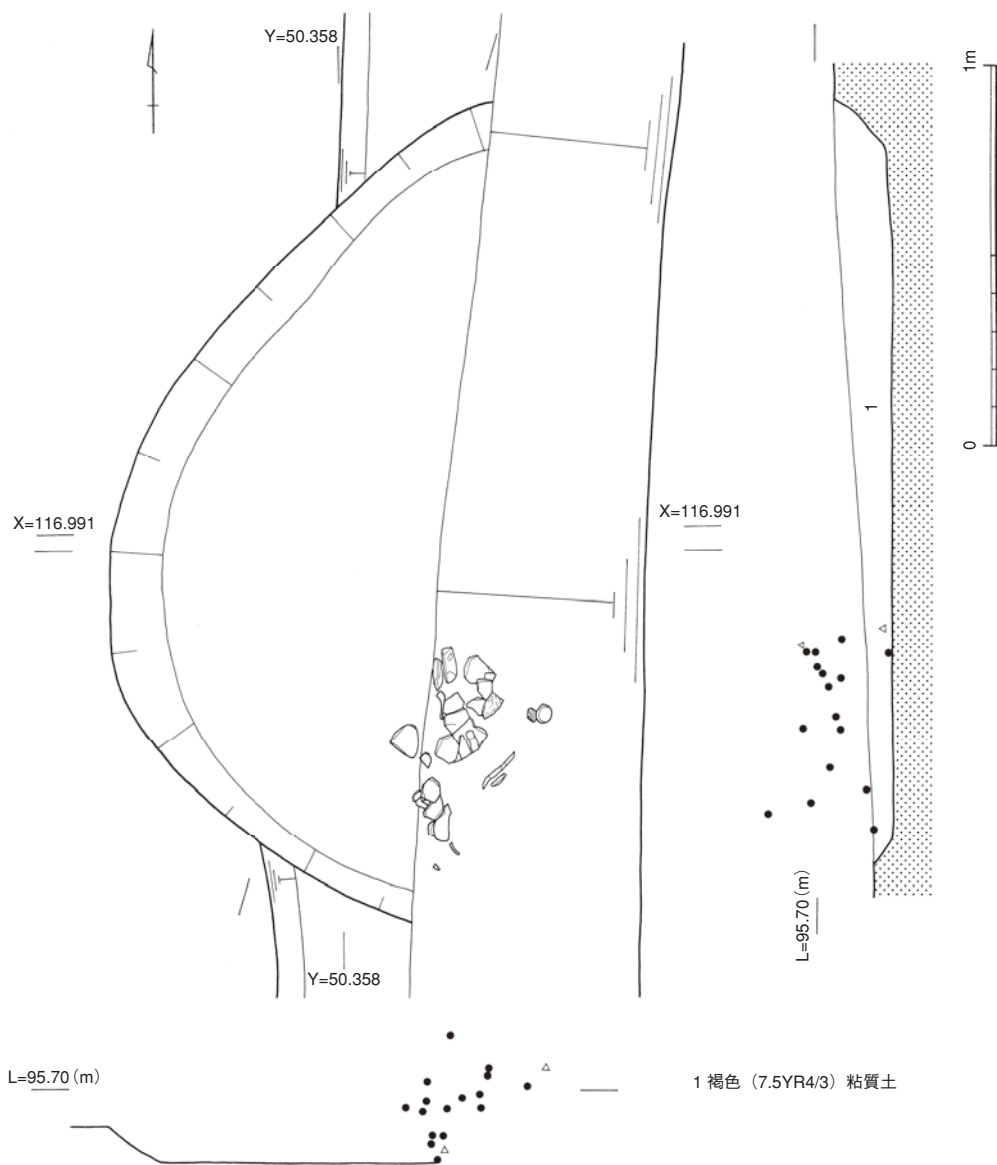
第15图 SK1023 出土遺物 (1)



第16図 SK1023 出土遺物 (2)



第17図 SK1078・1105 遺構図・出土遺物



第18図 SK1111 遺構図

属時期は縄文時代後期前葉に比定できる。

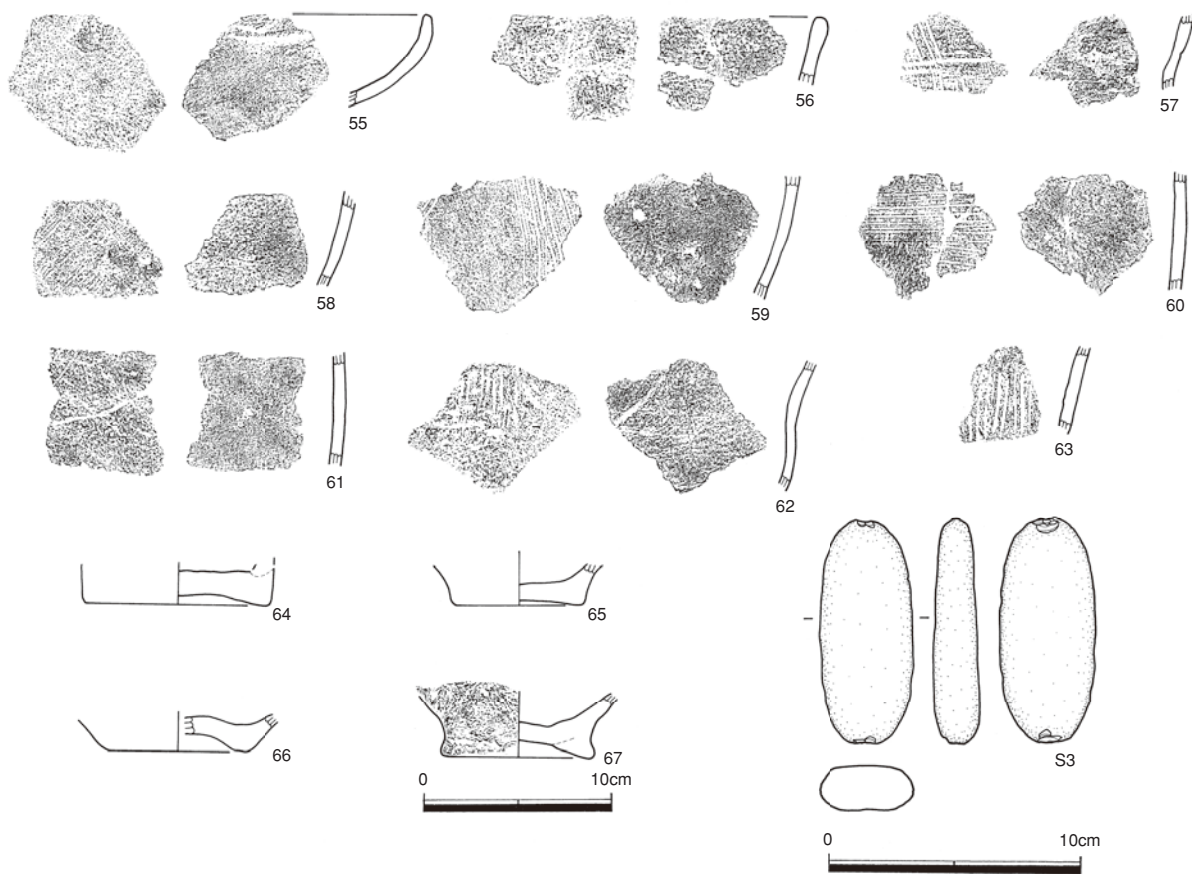
土坑105号 (SK1105) (第17図)

8区 E-51で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は舟底形を呈する。長軸2.14m、短軸0.98m、最大深度0.44mを測る。覆土は褐色粘質土1層で、炭化物を若干含む。

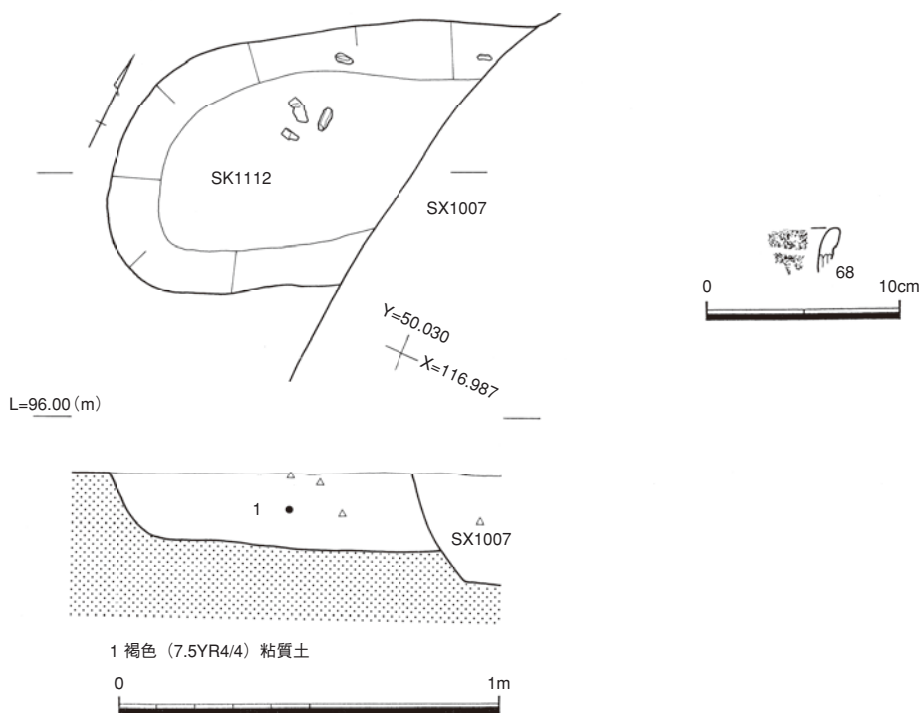
出土遺物のうち、内外面ともにミガキを施す無文浅鉢(54)のみ図化できた。出土遺物から、遺構の所属時期は縄文時代後期前葉に比定できる。

土坑111号 (SK1111) (第18・19図)

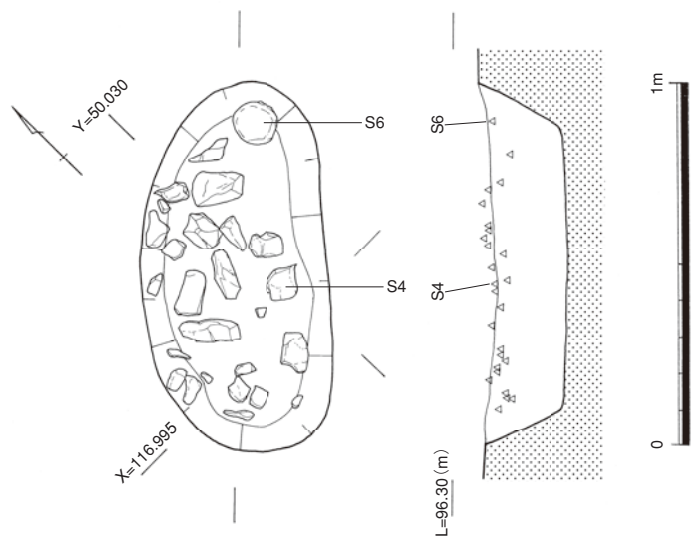
8区 K-58で遺構の約半分が調査区東側溝に切られる状態で確認された土坑。遺構はさらに、調査区外



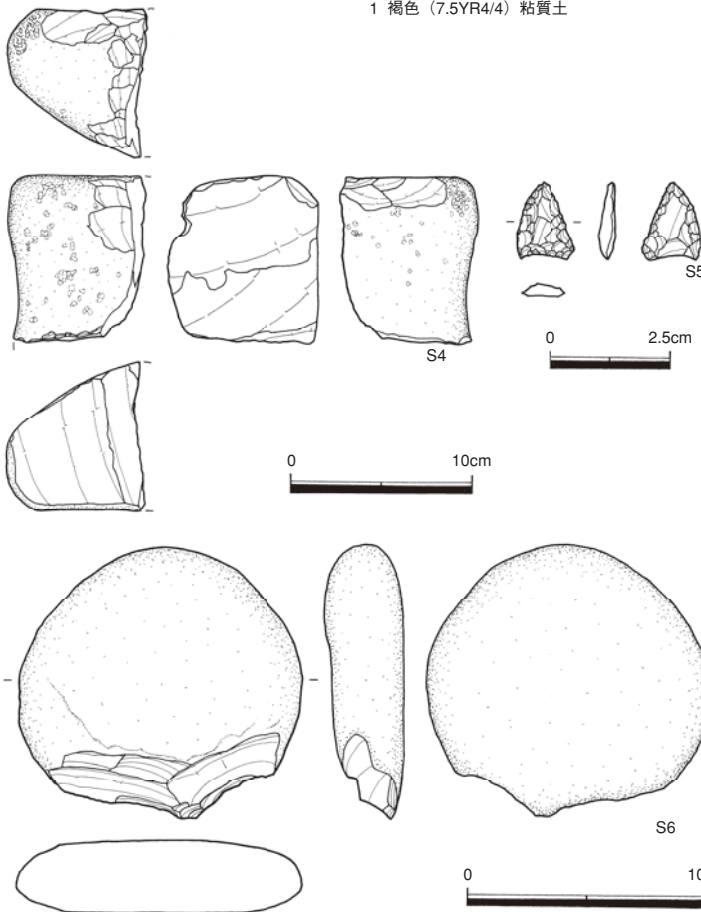
第19図 SK1111 出土遺物



第20図 SK1112 遺構図・出土遺物



1 褐色 (7.5YR4/4) 粘質土



第21図 SK1113 遺構図・出土遺物

軸1.03m、短軸0.52m、最大深度0.24mを測る。覆土は褐色粘質土1層で、上層に石器とともに直径10～20cm大の礫を多く含む。

出土遺物は、縄文土器片・凹基式サヌカイト製石鏃(S5)、砂岩製台石(S4)、砂質片岩礫器(S6)各1点

に延びる。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈すると推測できる。長軸2.18m、最大幅0.87m、最大深度0.13mを測る。壁面に遺物が認められ、かつ出土地点为上端より高いところから、本来の遺構面はもう少し高かったものと思われる。覆土は褐色粘質土1層で、炭化物を若干含む。

出土遺物のうち、無文浅鉢1点(55)、深鉢8点(56～63)、底部4点(64～67)、打欠石錘1点(S3)が図化できた。深鉢のうち56は無文、57～63は縁帯文期に属する。底部4点ともに深鉢であり、凹底である。

出土遺物から、遺構の所属時期は縄文時代後期前葉に比定できる。

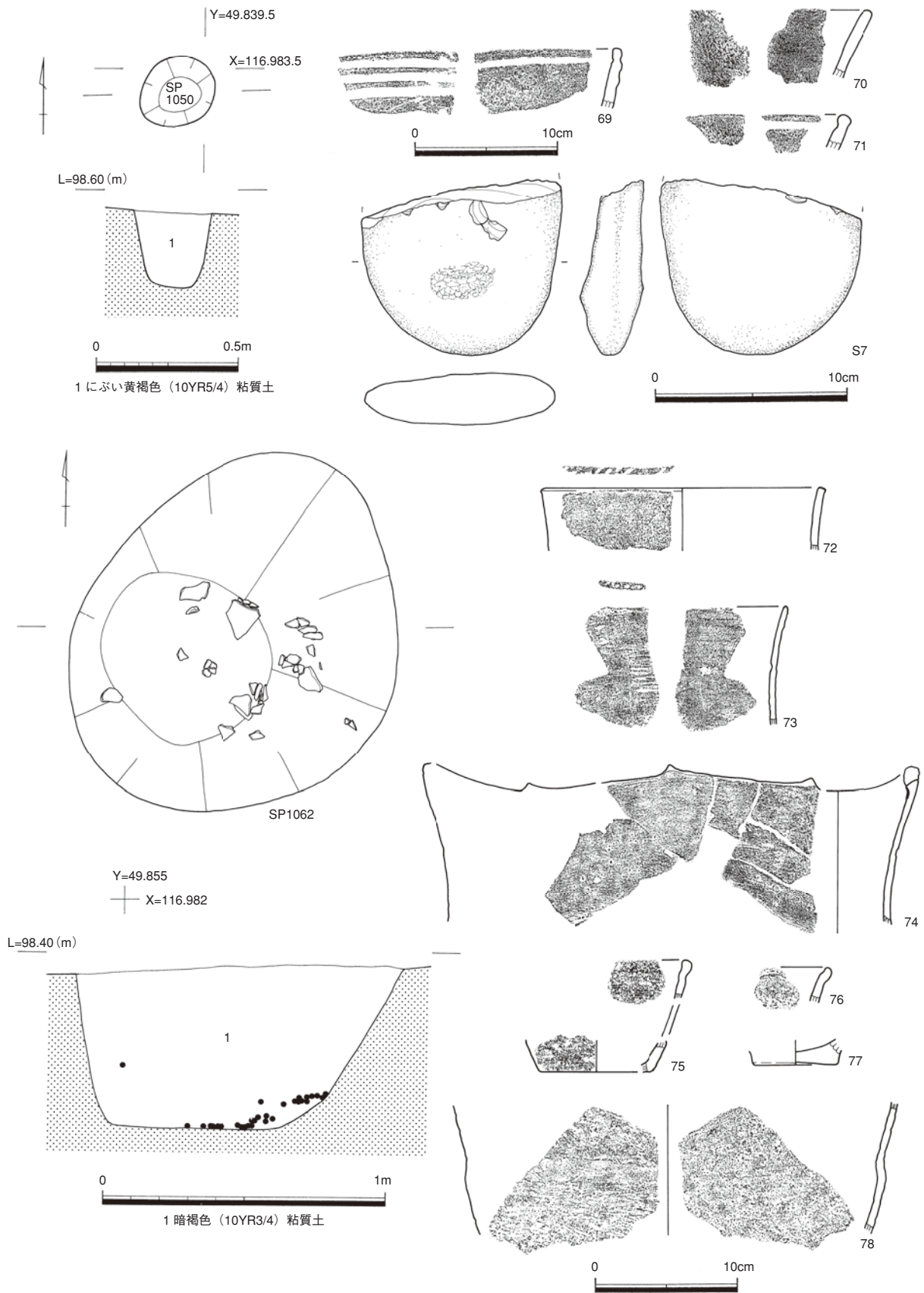
土坑112号 (SK1112) (第20図)

8区 J-56でSX1007に切られた状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈していたと思われる。最大長0.80m、短軸0.68m、最大深度0.20mを測る。覆土は褐色粘質土1層で、炭化物を若干含む。

出土遺物のうち、無文浅鉢1点(68)のみ図化できた。出土遺物から、遺構の所属時期は縄文時代後期前葉に比定できる。

土坑113号 (SK1113) (第21図)

8区 K・L-56・57で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈する。長



第22図 SP1050・1062 遺構図・出土遺物

が出土し、石器のみ図化できた。S6は片刃である。遺構の所属時期を縄文時代として捉えたが、弥生時代の可能性も考えられる。

柱穴

柱穴50号 (SP1052) (第22図)

5区 I-18で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.26m、短軸0.25m、最大深度0.27mを測る。覆土はにぶい黄褐色粘質土1層で、直径4cm前後の小礫を多量に含む。

出土遺物のうち、深鉢3点(69～71)・凹石1点(S7)が図化できた。深鉢3点のうち凹線文2点(69・71)、無文1点(70)に分類できた。S7は砂質片岩製で、上半分が欠損しているものの表面に凹痕が認められる。

出土遺物から、遺構の所属時期は縄文時代後期後葉に比定できる。

柱穴62号 (SP1062) (第22・23図)

5区 I-22で確認された柱穴。平面形態はやや不整な楕円形、底面形態は円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.35m、短軸1.11m、最大深度0.58mを測る。覆土は暗褐色粘質土1層で、下層に土器片を含む。遺物は、土師質土器杯、弥生土器甕・高坏、縄文土器深鉢・浅鉢・縄文土器片が出土した。下層で認められた土器は縄文土器であり、土層堆積から確認はできなかったものの、時代の異なる遺物は検出できなかった遺構に属するものと思われる。

出土遺物のうち無文深鉢9点(72～80)、無文浅鉢3点(81・83・84)、無文壺1点(82)が図化できた。後期に属する縄文土器片が出土しているものの、遺構の所属時期は縄文時代晚期中葉に比定できる。

柱穴126号 (SP1126) (第24図)

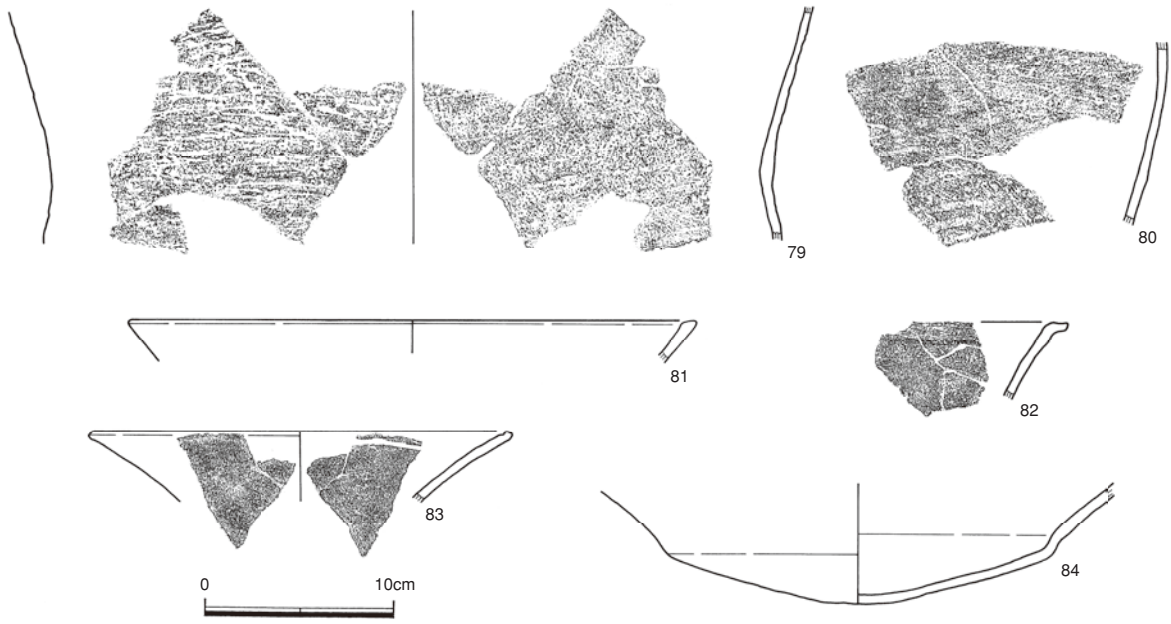
5区 H-25で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.33m、短軸1.17m、最大深度0.36mを測る。覆土は4層に分層でき、土層堆積状況から2基の土坑が切り合い関係を持つ。1～3層は東側の、4層は西側の土坑の覆土であり、東側が後出する。東側の覆土は大きく2層に分層でき、上層(1層)は褐色粘質土、下層(2・3層)は暗褐色粘質土である。下層は直径10cm大の砂岩礫をやや多く含み、土器片をわずかに含む。西側の覆土はにぶい黄褐色粘質土1層で、小礫と土器片が多量に出土した。

出土遺物のうち中津式の深鉢体部片(86)と無文深鉢(85)の2点が図化でき、遺構の所属時期は縄文時代後期前葉と思われる。

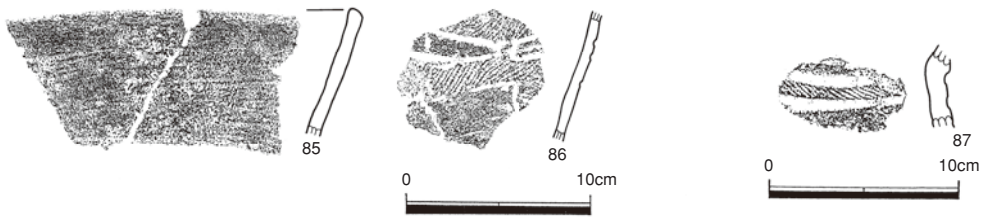
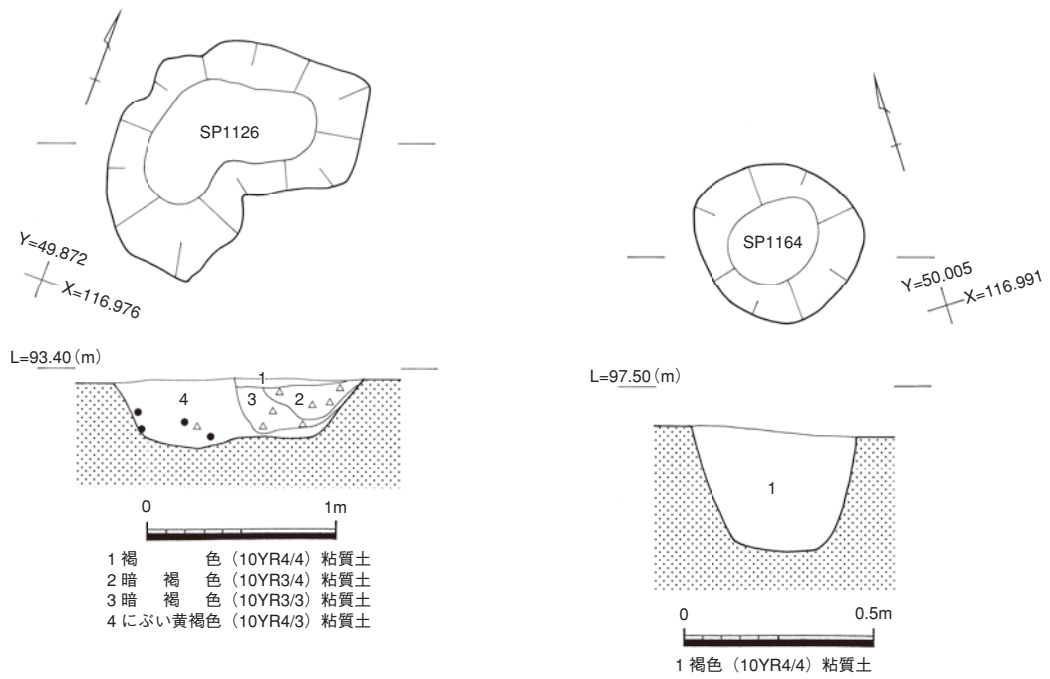
柱穴164号 (SP1164) (第24図)

1区 K-51で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.46m、短軸0.41m、最大深度0.31mを測る。覆土は褐色粘質土1層で炭化物を若干含み、下層に礫がやや多く認められる

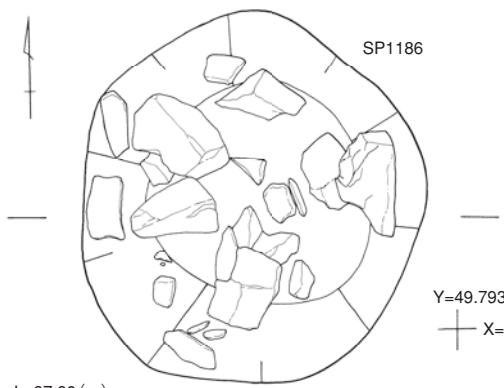
出土遺物のうち、縁帯文成立期の深鉢体部片(87)のみ図化できた。出土遺物から、遺構の所属時期を



第23図 SP1062 出土遺物

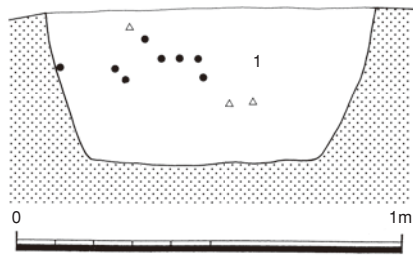


第24図 SP1126・1164 遺構図・出土遺物

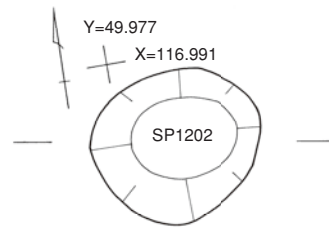
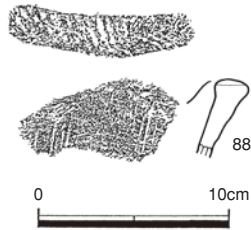


Y=49.793
X=116.993

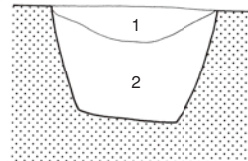
L=97.90 (m)



1 褐色 (10YR4/4) 粘性砂質土

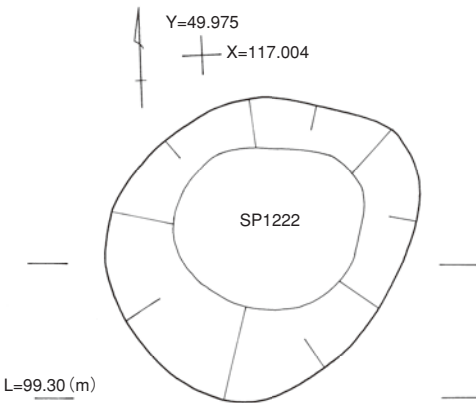


L=98.30 (m)

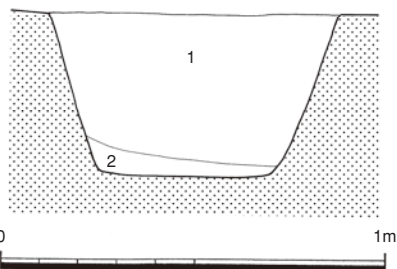


0 0.5m

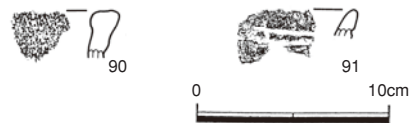
1 暗褐色 (10YR3/4) 粘質土
2 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土



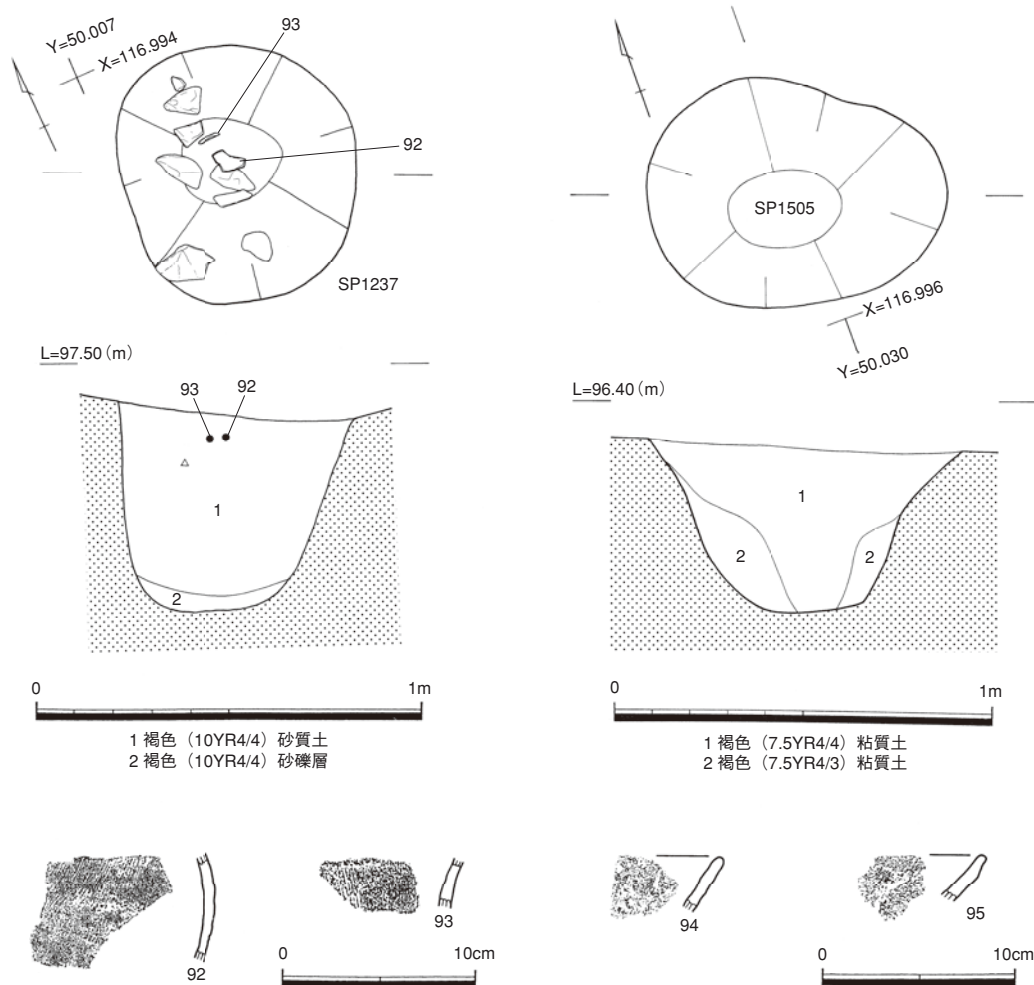
L=99.30 (m)



1 褐色 (10YR4/4) 粘質土
2 褐色 (10YR4/4) 粘質土



第25図 SP1186・1202・1222 遺構図・出土遺物



第26図 SP1237・1505 遺構図・出土遺物

縄文時代後期前葉に比定できる。

柱穴186号 (SP1186) (第25図)

1区 K-49で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.98m、短軸0.90m、最大深度0.41mを測る。覆土は褐色粘性砂質土1層で、直径20cm前後の砂岩礫が上位～中位に認められる。

遺物は、弥生土器片と型式不明な有文深鉢(88)が出土した。88は、縄文時代後期か。縄文時代の項で掲載したが、遺構の所属時期は弥生時代の可能性が強い。

柱穴202号 (SP1202) (第25図)

1区 K-46で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.41m前後、最大深度0.31mを測る。覆土は2層に分層でき、上層は暗褐色粘質土で炭化物を含む。下層は黄褐色粘質土で、小礫をやや多く含む。

出土遺物のうち、型式不明な有文深鉢(89)のみ図化できた。遺構の所属時期は、縄文時代後期か。

柱穴222号 (SP1222) (第25図)

1区 M-45・46で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.87m、短軸0.73m、最大深度0.44mを測る。覆土は褐色粘質土だが、含有物によって2層に分層できる。1層は2層と比較して、炭化物および小礫をやや多く含む。

出土遺物のうち、沈線文が認められる有文深鉢(91)と無文深鉢(90)の2点が図化できた。遺構の所属時期は、縄文時代後期か。

柱穴237号 (SP1237) (第26図)

1区 K-46で確認された柱穴。平面形態および底面形態は楕円形、断面形態はU字形を呈し、長軸0.68m、短軸0.62m、最大深度0.52mを測る。覆土は2層に分層でき、上層は褐色粘性砂質土で炭化物・土器片を含む。下層は褐色砂礫層で、遺構面である自然堆積層である。

出土遺物のうち、無文深鉢(92・93)の体部片2点が図化できた。遺構の所属時期は、縄文時代後期と思われる。

柱穴505号 (SP1505) (第26図)

8区 L-56・57で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.78m、短軸0.58m、最大深度0.43mを測る。覆土は褐色粘質土で、含有物から2層に分層できる。2層は1層と比較して、礫をやや多く含む。

出土遺物のうち、無文浅鉢(94・95)2点が図化できた。遺構の所属時期は、縄文時代後期と思われる。

柱穴516号 (SP1516) (第27図)

8区 K-57で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.32m、短軸0.27m、最大深度0.19mを測る。覆土は、褐色粘質土1層である。

出土遺物のうち、無文深鉢(96)のみ図化できた。遺構の所属時期は、縄文時代中期か。

柱穴524号 (SP1524) (第27図)

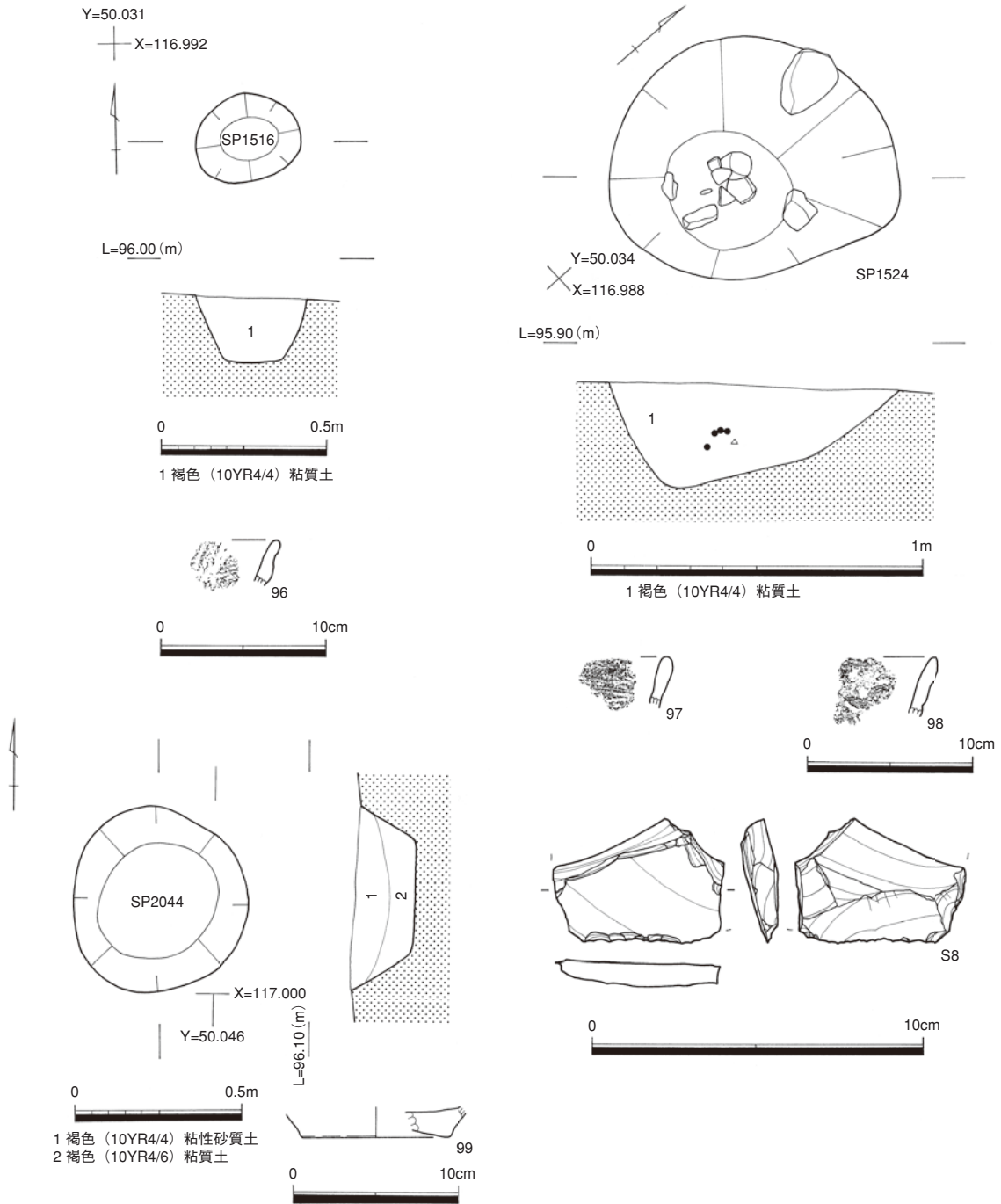
8区 J-57で確認された柱穴。平面形態は楕円形、底面形態は円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.87m、短軸0.73m、最大深度0.32mを測る。覆土は褐色粘質土1層で、炭化物を若干含む。

出土遺物のうち、無文深鉢2点(97・98)、サヌカイト製削器(S8)が図化できた。遺構の所属時期は、縄文時代後期か。

第二遺構面

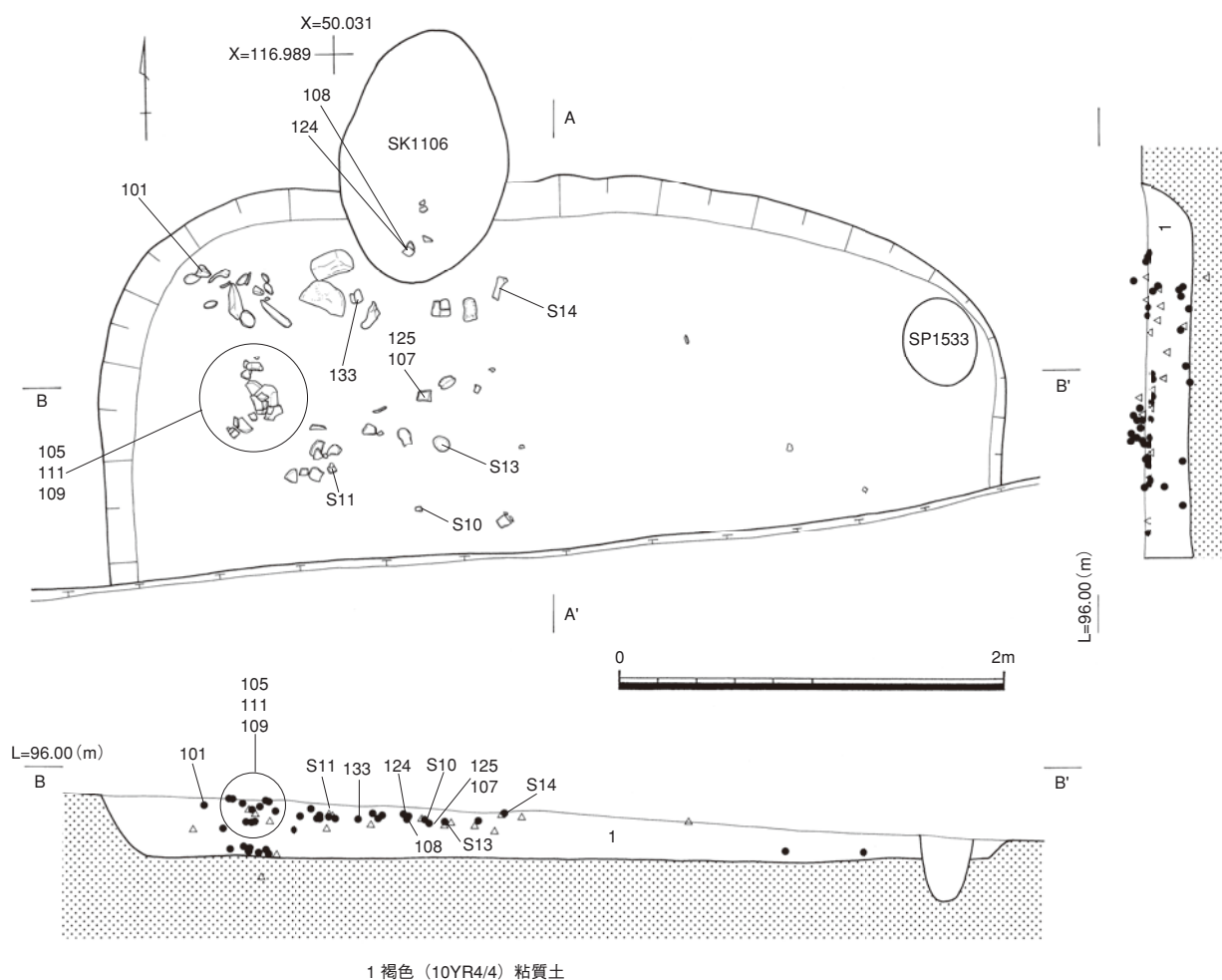
柱穴44号 (SP2044) (第27図)

97-2区 M-60で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.55m前後、最大深度0.18mを測る。覆土は褐色を呈し、含有物から2層に分層できる。上層は炭化物を若干含み、下層は小礫を多量含む。



第27図 SP1516・1524・2044 遺構図・出土遺物

出土遺物のうち、深鉢底部(99)のみ図化できた。欠損しているものの、凹底である。



第28図 SX1007 遺物出土状況図

不明遺構

出土遺物から、縄文時代に属する性格不明遺構を2基確認した。遺構の形態から住居跡を想定したが、炉跡が確認されなかったこと、および住居として積極的に判断する根拠が認められなかったため不明遺構として報告する。

不明遺構7号 (SX1007) (第28～31図)

8区 J-57でSK1106、SP1533、調査区南側溝に切られた状態で検出された不明遺構。遺構は、さらに調査区南側に延びる。調査区内での検出状況から、この遺構の平面形態および底面形態は方形あるいは長方形、断面形態は逆台形と想定できる。規模は長軸4.64m、最大幅2.00m、最大深度0.30mを測る。覆土は褐色粘質土1層で、炭化物を若干含む。

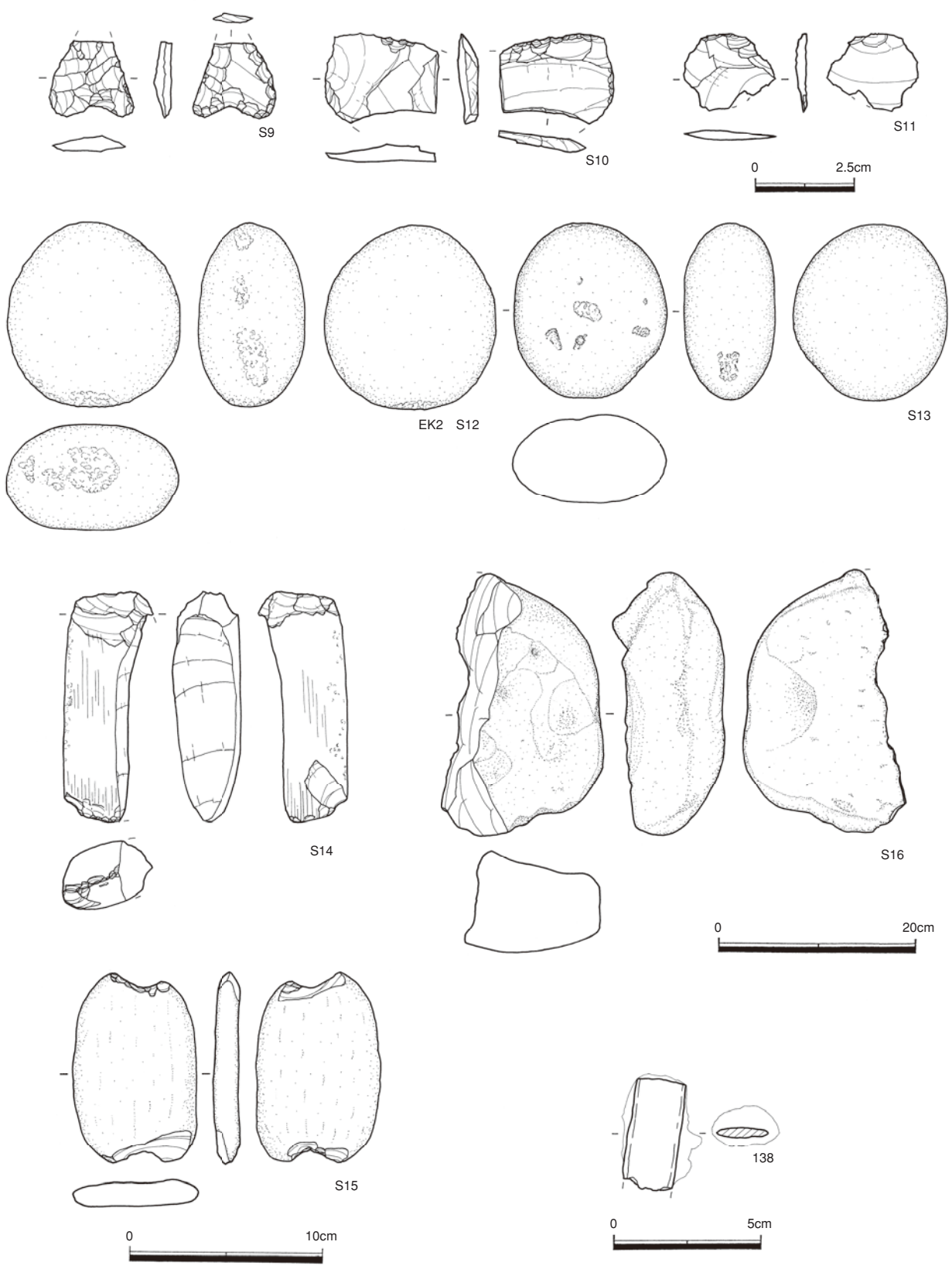
覆土除去後、床面に柱穴9基、土坑2基を検出した。これらの柱穴がSX1007に伴うかどうかは不明だが、併せて報告する。各柱穴の覆土は褐色粘質土を主体とし、土色および含有物からそれぞれ分層できる。



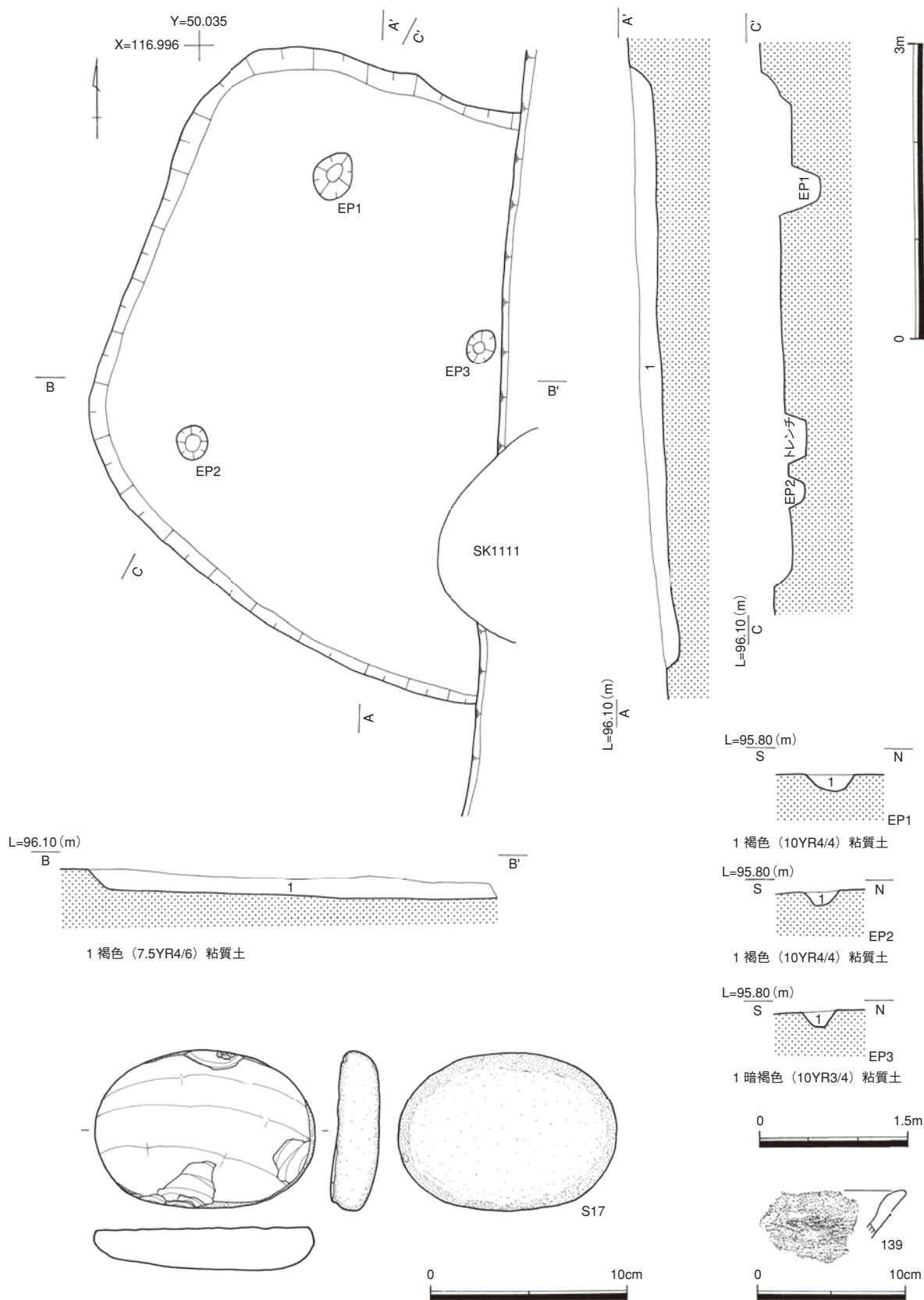
第30図 SX1007 出土遺物 (1)

柱穴は円形あるいは楕円形を呈し、規模は直径・長軸0.16～0.35m、短軸0.15～0.32m、最大深度0.10～0.36mを測る。遺物は、EP1から縁帯文深鉢(136)が、EP5・EP8から炭化物が出土した。土坑はともに平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、規模は長軸0.71～0.80m、短軸0.59～0.63m、最大深度0.10～0.22mを測る。EK1は2層に分類でき、1層はにぶい黄褐色粘質土で炭化物を若干含む。2層は褐色粘質土で、小礫を大量に含む。遺物は、縁帯文深鉢体部片(137)が出土した。EK2は褐色粘性砂質土1層で、黄褐色土をブロック状に混入する。

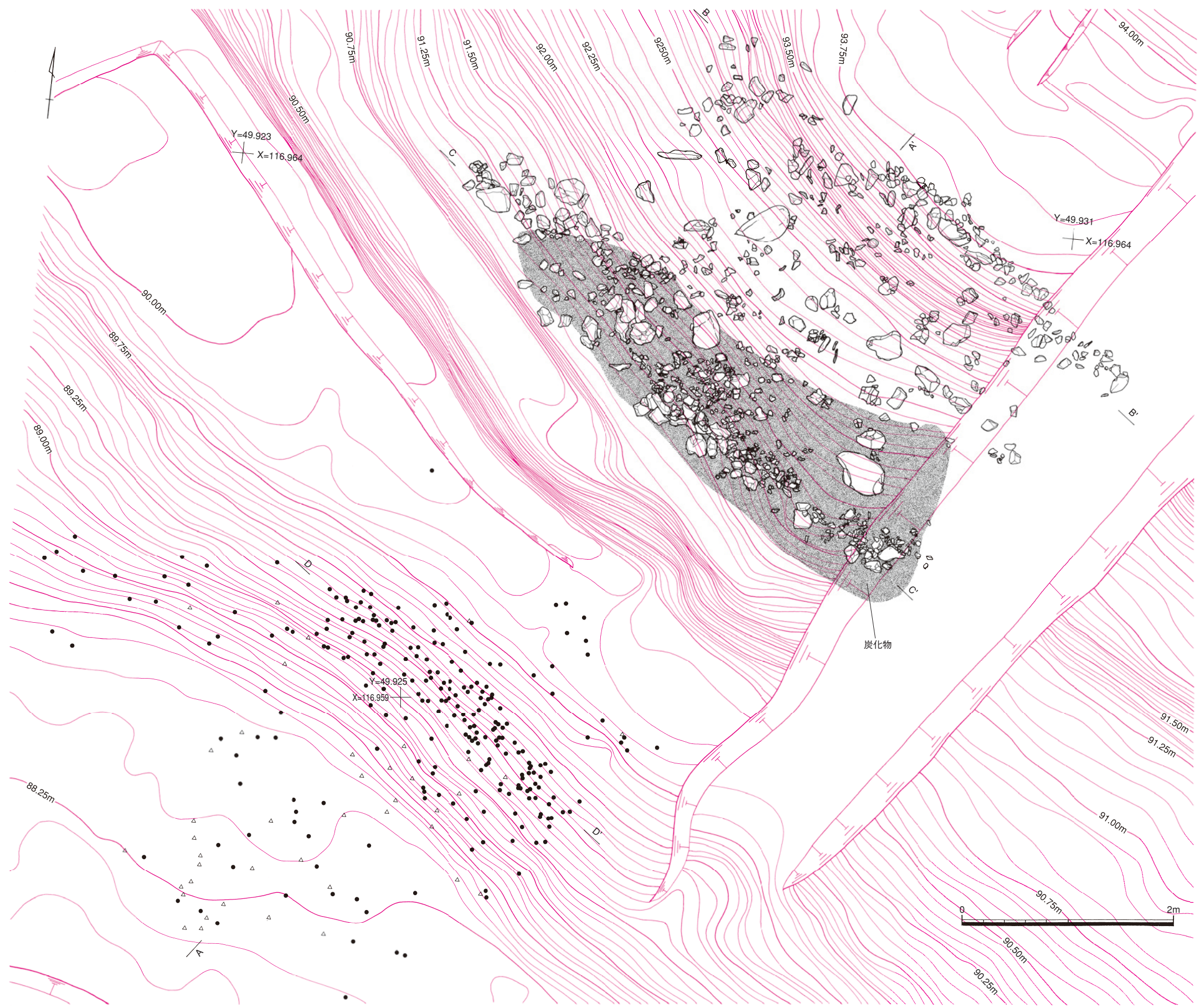
遺物は162点出土し、そのうちの46点が図化できた。縄文土器片38点、サヌカイト製石鏃(S9)・楔形石器(S10)・剥片(S11)・敲石(S12)・凹石(S13)、磨製石斧(S14)・石錘(S15)・石皿(S16)各1点である。縄文土器の内訳は、深鉢26点(100～124・134)、浅鉢7点(125～130・135)、鉢2点(131・132)、壺1点



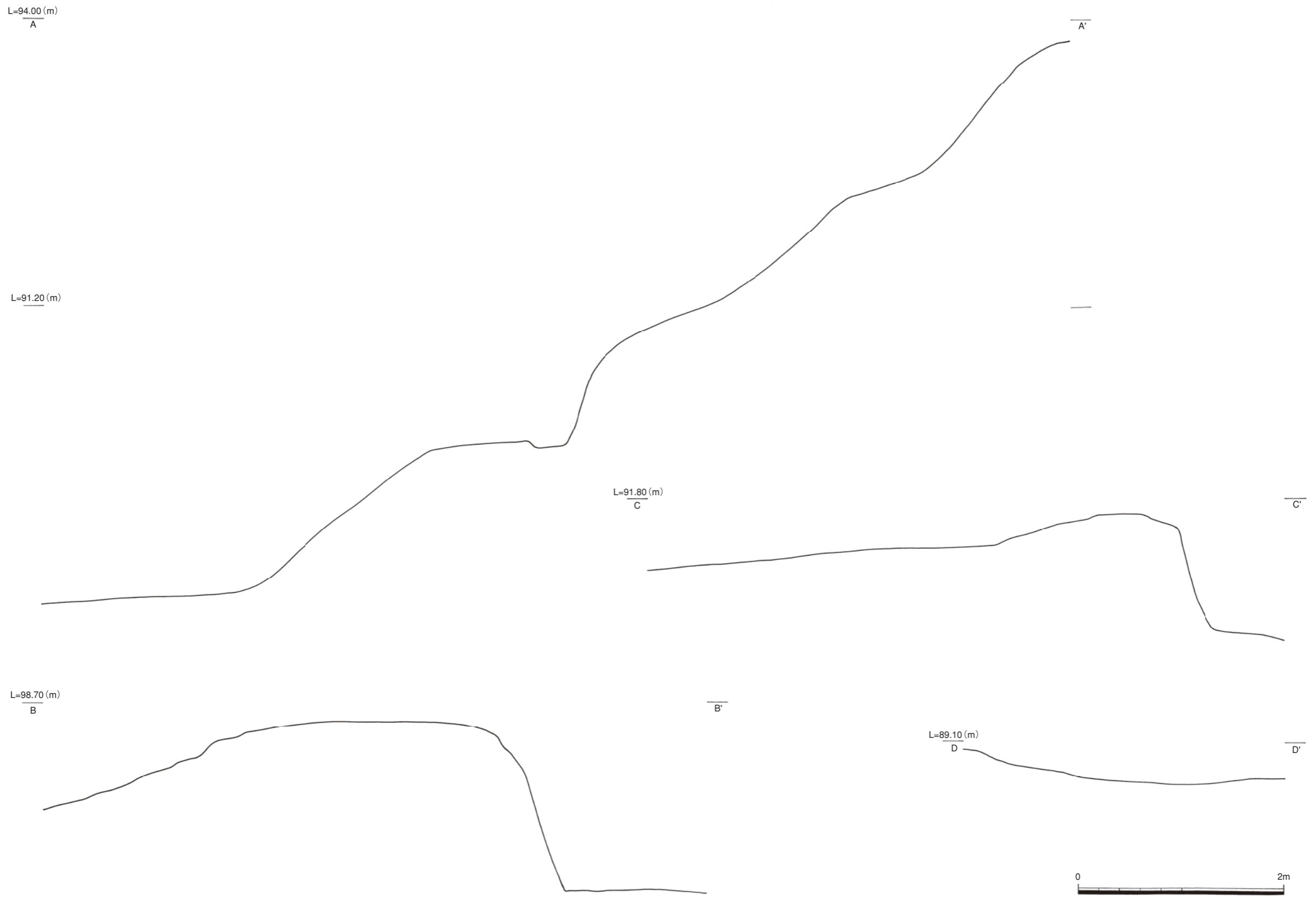
第31図 SX1007 出土遺物 (2)



第32図 SX1008 遺構図・出土遺物



第33図 3区 集石・遺物検出状況図



第34図 3区 遺構面エレベーション

(133)で、深鉢は有文沈線文系(100)、縁帯文(101~112)、無文(113~119)、素縄文系(120)、型式不明4点(121~124)に分類できる。浅鉢・鉢は、すべて無文である。底部2点のうち、134は凹底、135は平底に分類できる。

S9の形態は、無茎凹基式である。S12はEK2から出土した閃緑岩製敲石で、敲打痕が右側面と下面の二ヶ所に認められる。S13は砂質片岩製凹石で、表面に凹痕が、右側面に敲打痕が認められる。S14は右半分を欠損した凝灰岩製磨製石斧、S15は砂質片岩を用いた打欠石錘、S16は左半分を欠損した砂岩製石皿である。138は、不明鉄製品である。

S14は上面からの出土であり、138の出土地点は不明だが、この2点は混入物の可能性が考えられる。縄文時代中期の土器が出土しているものの、土器の出土量の多さから、遺構の所属時期を縄文時代後期前葉に想定できる。

不明遺構8号 (SX1008) (第32図)

8区 J~L-57・58で調査区東側溝、SK1111に切られた状態で検出された不明遺構。遺構は、さらに調査区東側へ延びる。調査区内での検出状況から、この遺構の平面形態および底面形態は方形あるいは長方形、断面形態は逆台形と想定できる。長軸2.98m、最大幅1.98m、最大深度0.12mを測る。覆土は褐色粘質土1層で、炭化物を若干含む。また、にぶい黄褐色土をブロック状に混入する。

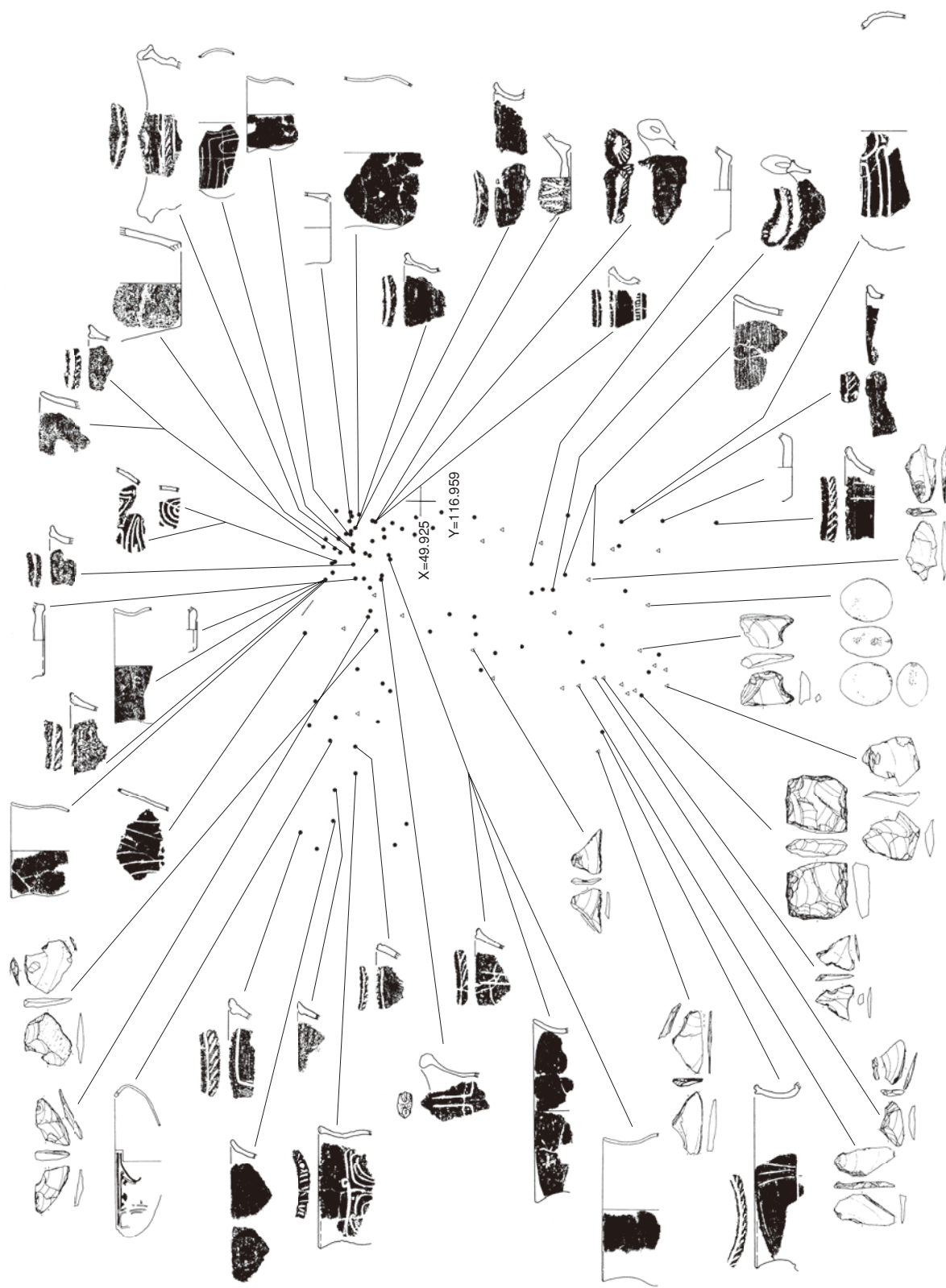
覆土除去後、床面に柱穴3基を検出した。これらの柱穴がSX1008に伴うかどうかは不明だが、併せて報告する。各柱穴の覆土は、褐色粘質土1層である。EP1およびEP3では、炭化物を若干含む。柱穴は円形あるいは楕円形を呈し、規模は直径・長軸0.35~0.50m、短軸0.30~0.39m、最大深度0.13~0.16mを測る。出土遺物は、認められなかった。

出土遺物は少なく、無文浅鉢(139)と斑礫岩製の打欠石錘(S17)の2点のみである。139の内面の調整は不明だが、外面に巻貝条痕が認められる。出土遺物から、遺構の所属時期は縄文時代後期に比定できる。

集石・遺物集中地点 (第33~43図)

3区 D・E-35~37で包含層掘削中に確認された。3区は2区に隣接し、調査区の大半が高低差7mを測る斜面部である。平坦面は、調査区南側と斜面部に部分的に認められるのみである。この調査区では、傾斜がやや緩やかなところで土坑1基(SK1023)のみが検出された。この土坑が検出された区域を中心に、集石と遺物が集中する。集石はSK1023の上面を中心に、東西に約5.8m、南北に約3.5mの範囲で確認され、ほぼ等高線のラインに沿うような形で出土した。また遺物の方は、集石部分から2m程南側の斜面部と調査区南側に広がる平坦面に認められる。遺物は縄文土器と石器で、土器が大半を占める。また平坦部より、斜面部に密集する。これらの遺物は出土地点の高さが不明だが、1m程離れた東側で土層堆積を調べるためにベルトを設定して掘り下げを行っており(第9図ベルト②)、23層に土器片の出土が認められたことから、この層中から出土した可能性が考えられる。

出土した遺物のうち109点が図化でき、縄文土器94点、石器15点を数える。縄文土器の内訳は、深鉢26点(100~124・134)、浅鉢7点(125~130・135)、鉢2点(131・132)、壺1点(133)で、深鉢は有文沈線文系(100)、縁帯文(101~112)、無文(113~119)、素縄文系(120)、型式不明4点(121~124)に分類できる。浅鉢・鉢は、すべて無文である。底部2点のうち、134は凹底、135は平底に分類できる。140・141は船元Ⅱ式もしくは加曽利E式と思われ、中期末に比定できる。



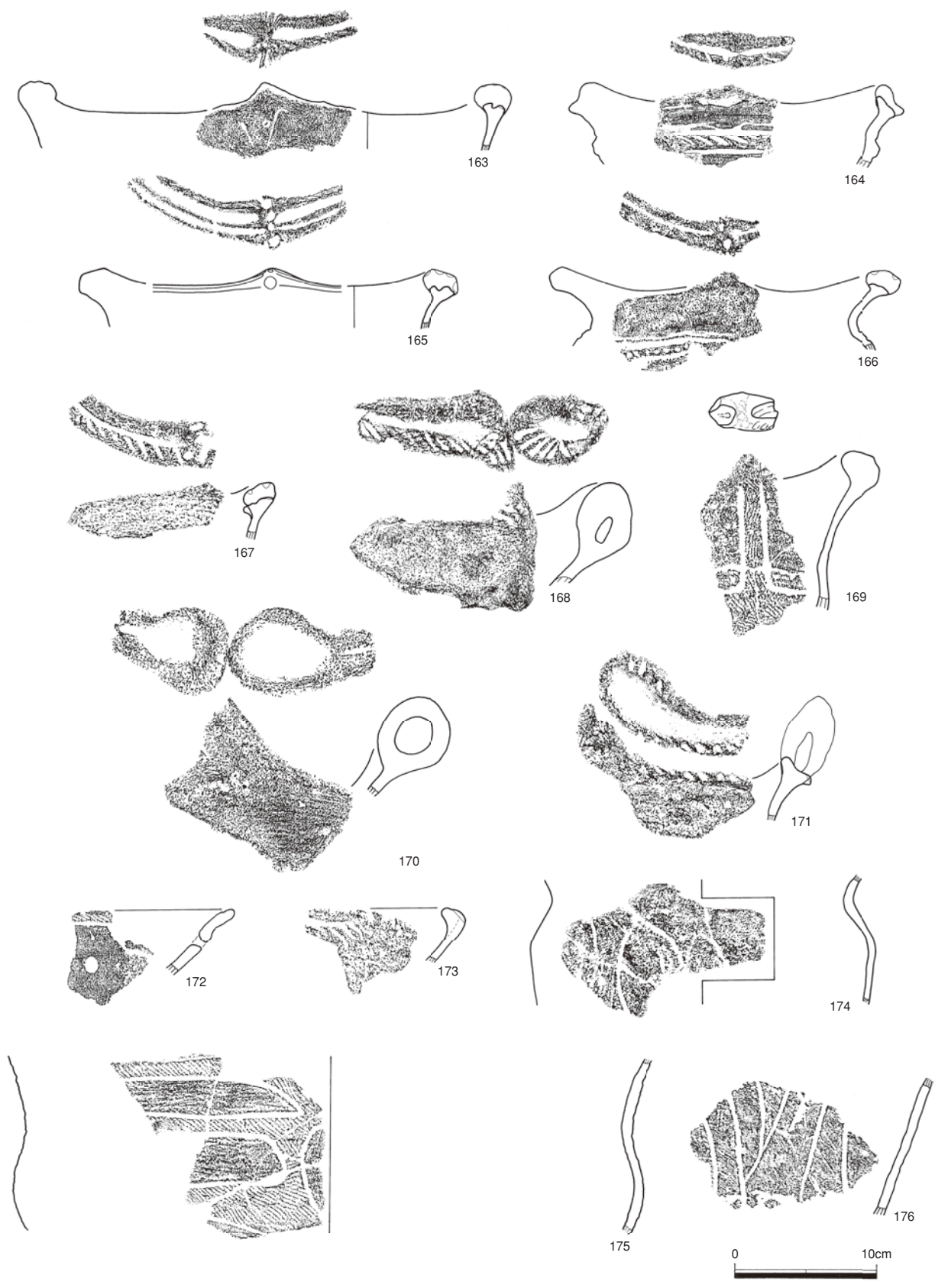
第35图 3区 遺物出土状況图 (1)



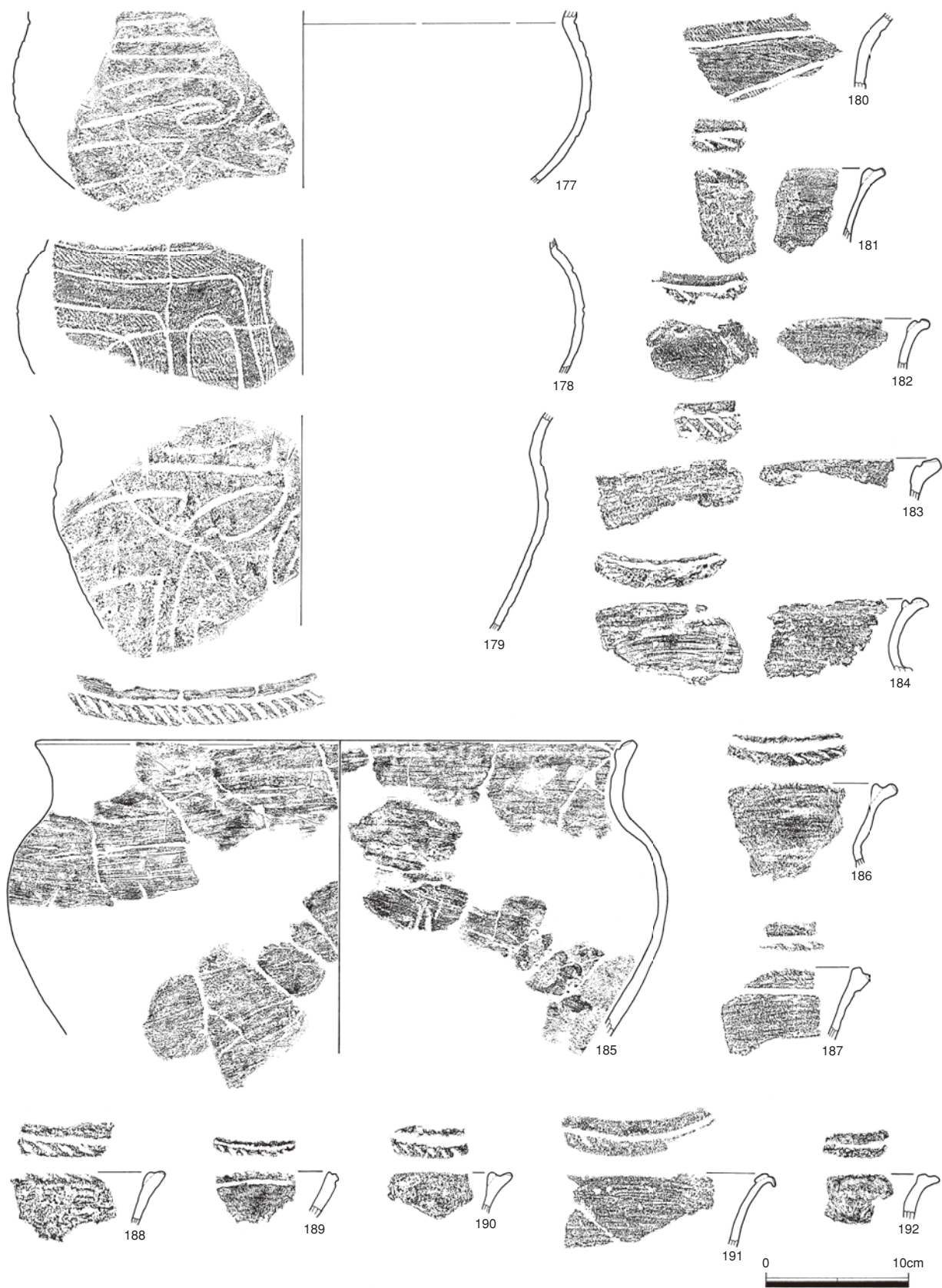
第36图 3区 遺物出土状況图 (2)



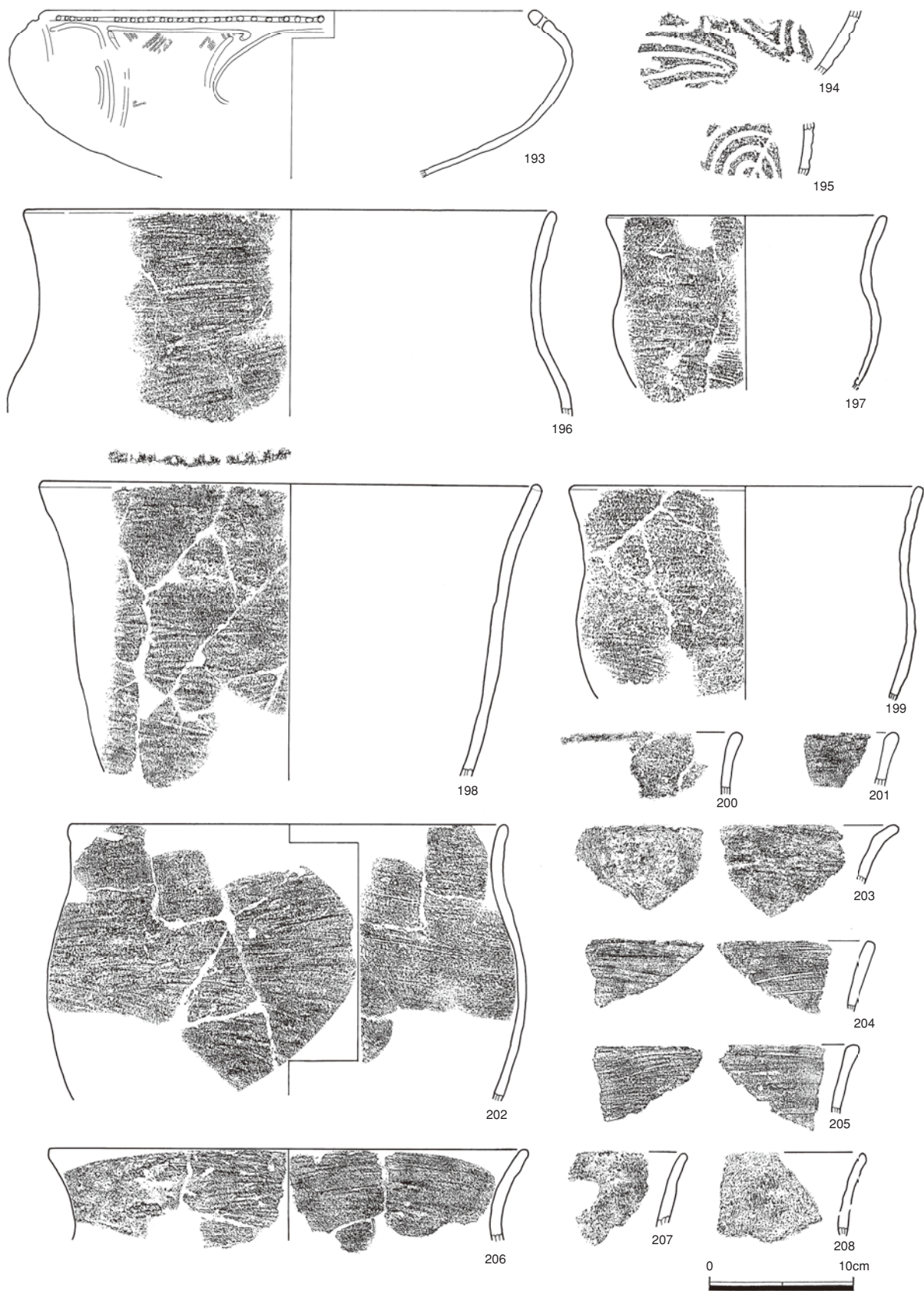
第37图 3区 集石・遺物集中地点 出土遺物 (1)



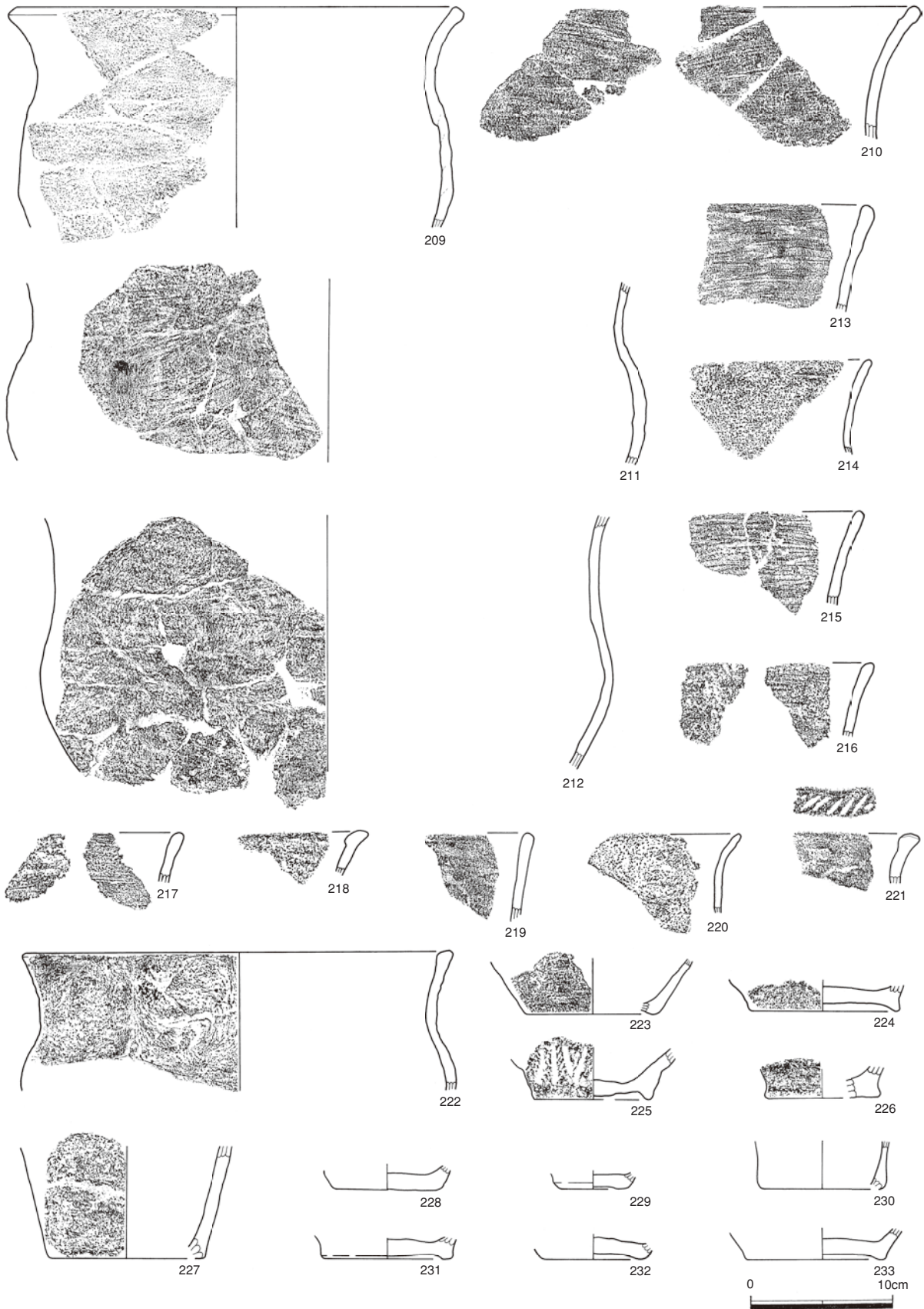
第38图 3区 集石・遺物集中地点 出土遺物 (2)



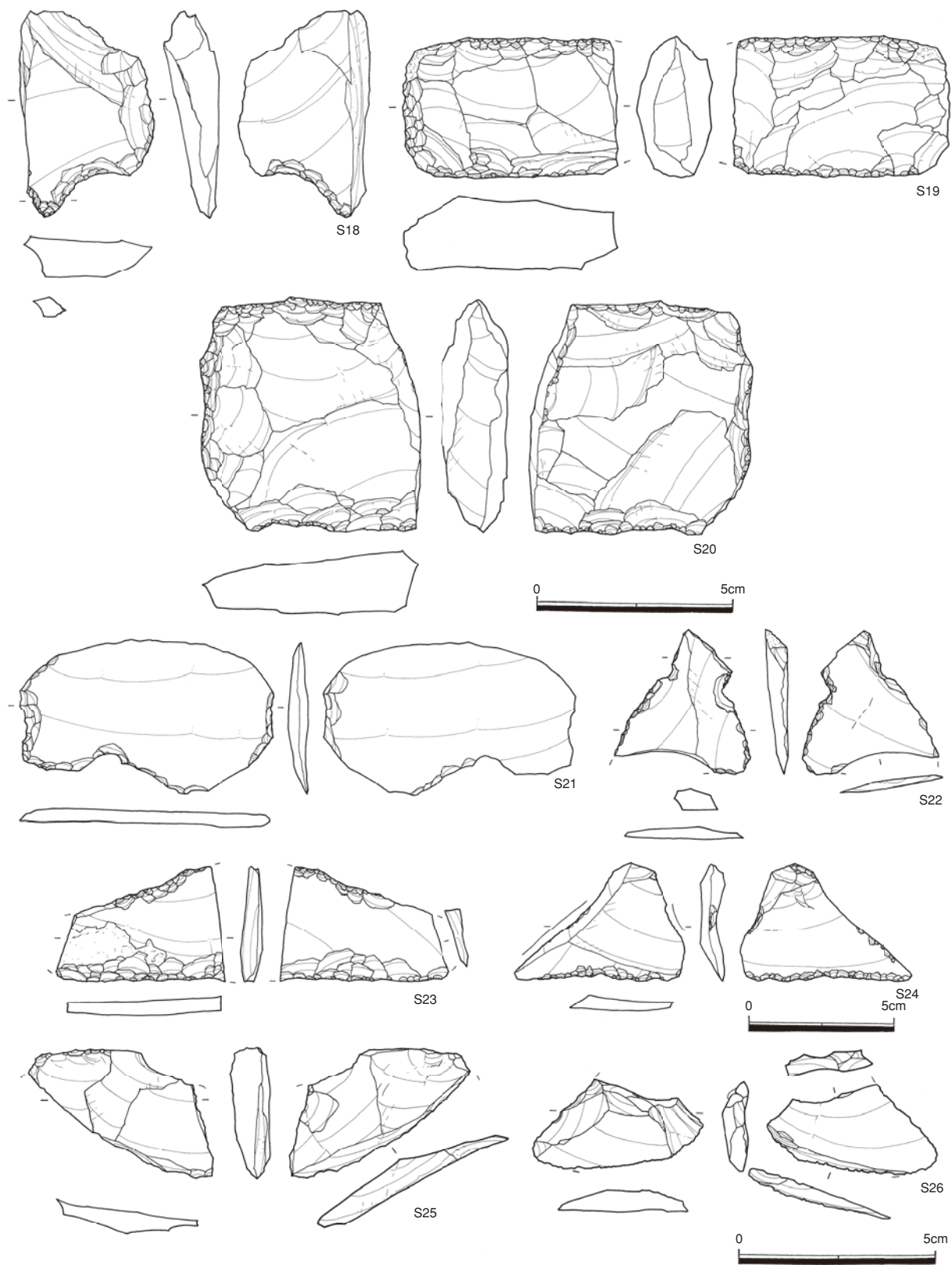
第39图 3区 集石・遺物集中地点 出土遺物 (3)



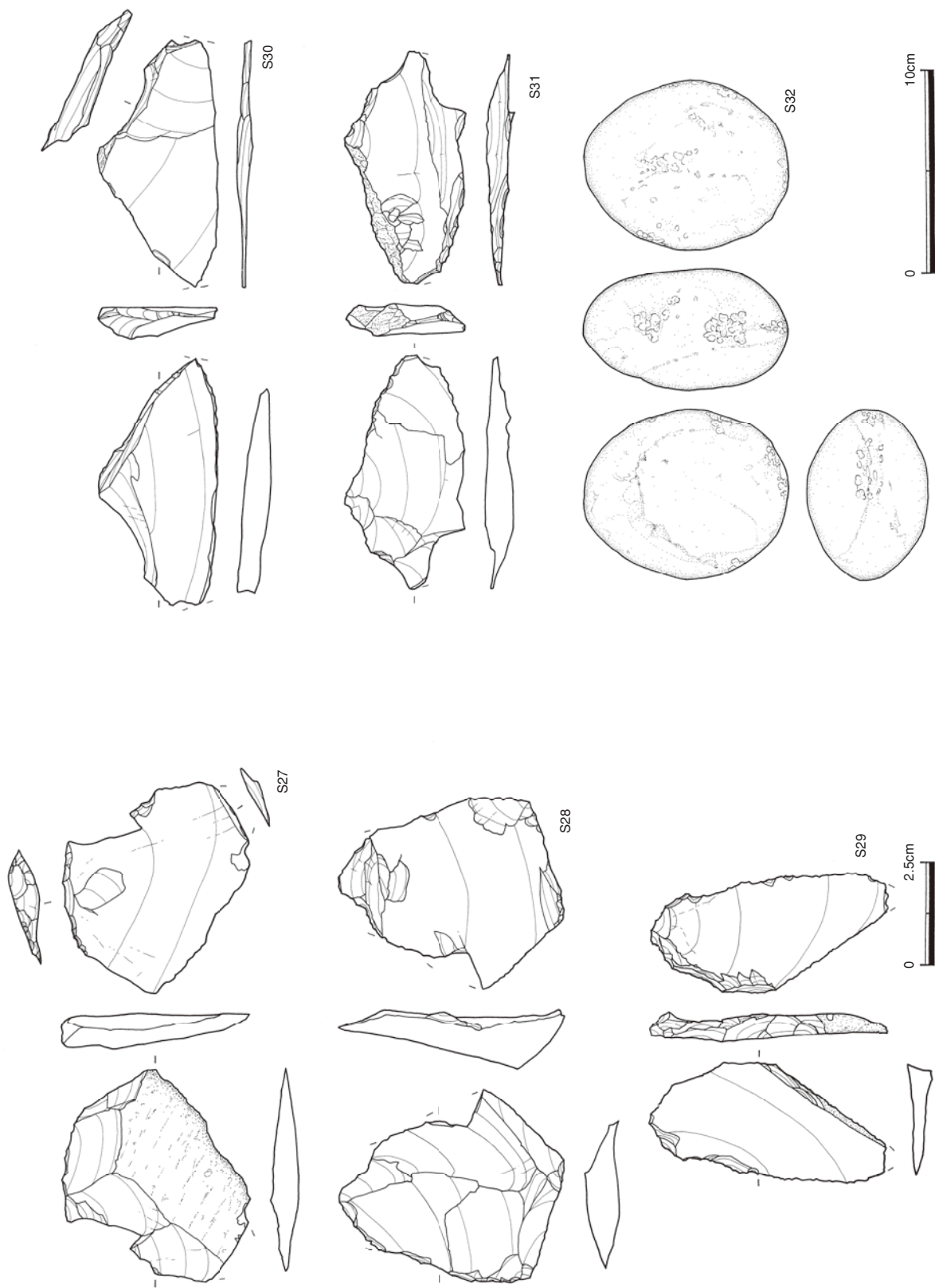
第40図 3区 集石・遺物集中地点 出土遺物 (4)



第41図 3区 集石・遺物集中地点 出土遺物 (5)



第42図 3区 集石・遺物集中地点 出土石器 (1)



第43图 3区 集石・遺物集中地点 出土石器 (2)

石器のうち図化できたのは、石錐1点(S18)・楔形石器2点(S19・20)・削器4点(S21～24)・剥片7点(S25～31)・敲石1点(S32)である。敲石は斑礫岩を、削器のS21のみ砂質片岩を、その他の石器はサヌカイトを用いる。楔形石器は2点ともに右裁断面を持ち、三方向に打面を持つ。削器のうちS21は凹刃をもち、横型石匙の可能性もある。S22～24は平刃で、S23のみ複刃を持つ。敲石は完形で、裏面・下側面・右側面の三方向に敲打痕が認められる。

縄文時代中期の土器が出土しているものの、土器の出土量の多さから、遺構の所属時期を縄文時代後期前葉に想定できる。

(2) 弥生時代

弥生時代の遺構は、主に嫁坂谷川東側の2区・9区・97-1区・97-2区で確認した(第11図)。遺構総数は、竪穴住居跡8軒、土坑2基、溝1条で、時期は弥生時代後期を主体とする。

竪穴住居

調査時において竪穴住居として検出した数は9軒だが、検討の結果、住居として不適切なものがあり、よってこの竪穴住居の項目で報告できる住居数は、8軒である。

竪穴住居1号 (SB1001) (第44～47図)

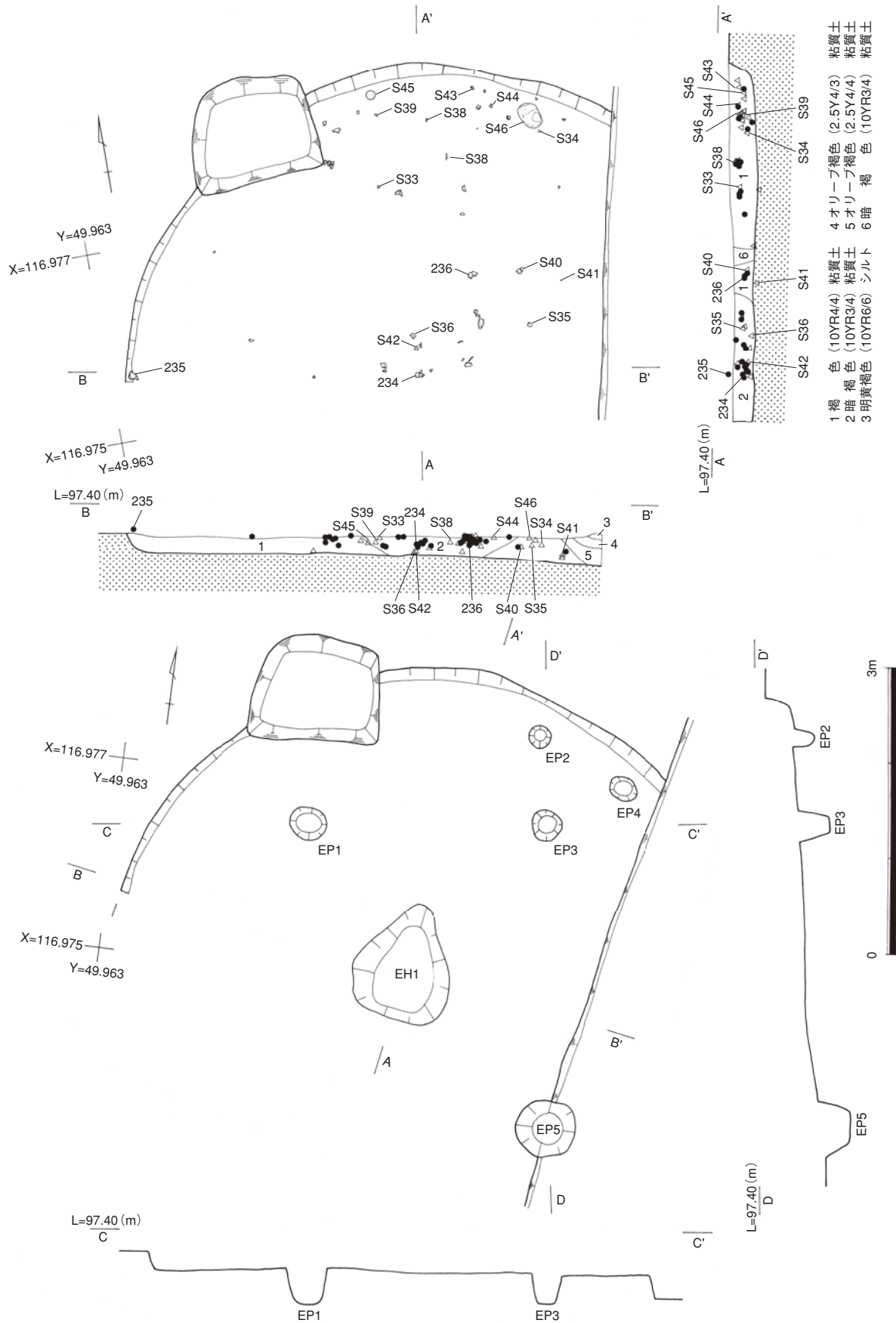
位置・構造

2区 H-43・44で一部攪乱と東側溝に切られた状態で確認された竪穴住居。また遺構の南側1/2は土地改変に伴う削平を受け、東側1/3は調査区外に延びる。検出した範囲から、この住居の平面形態・底面形態は円形、断面形態は逆台形と推定できる。最大長4.90m、最大深度0.30m、検出部分の床面積24.67㎡を測る。

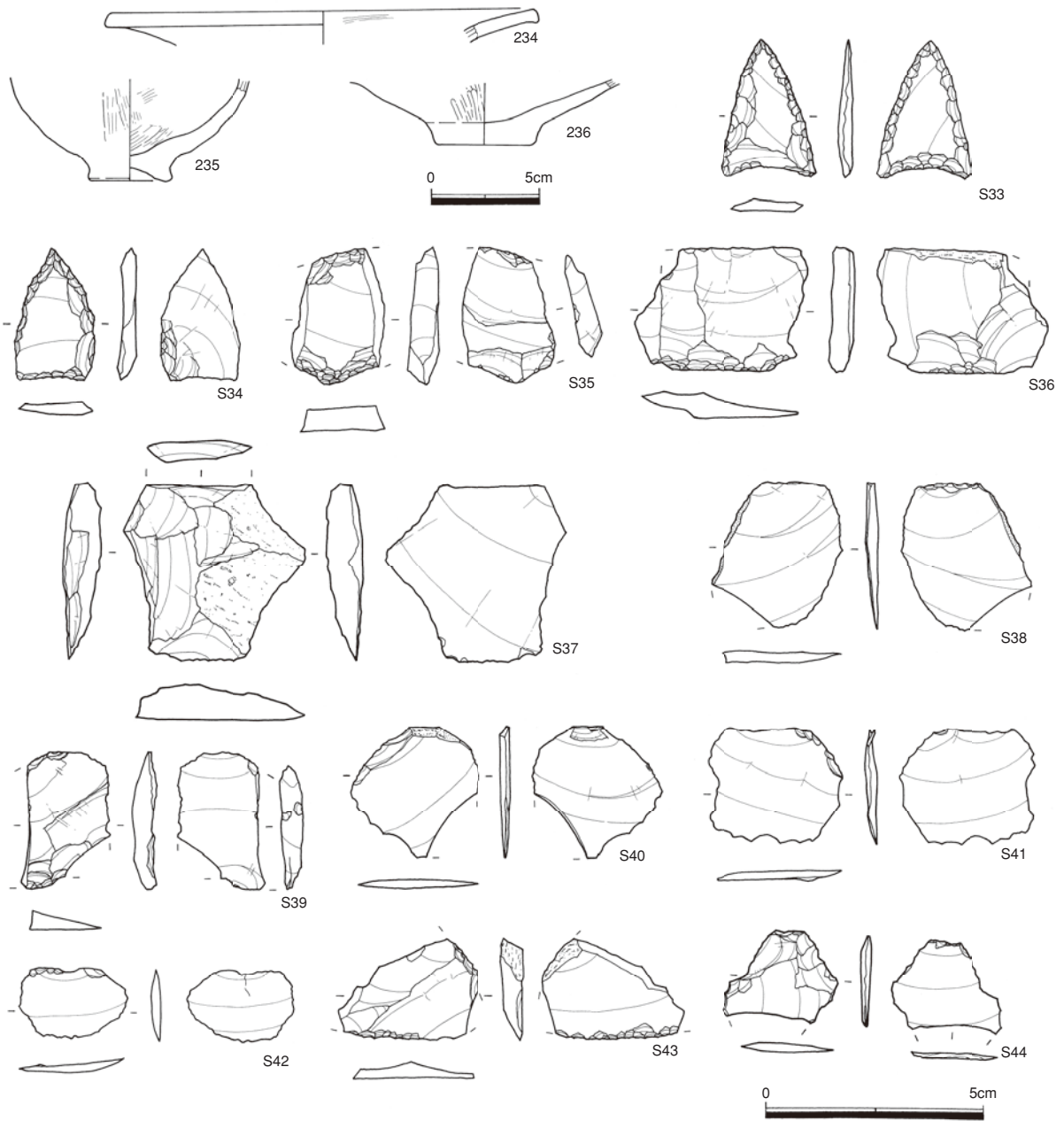
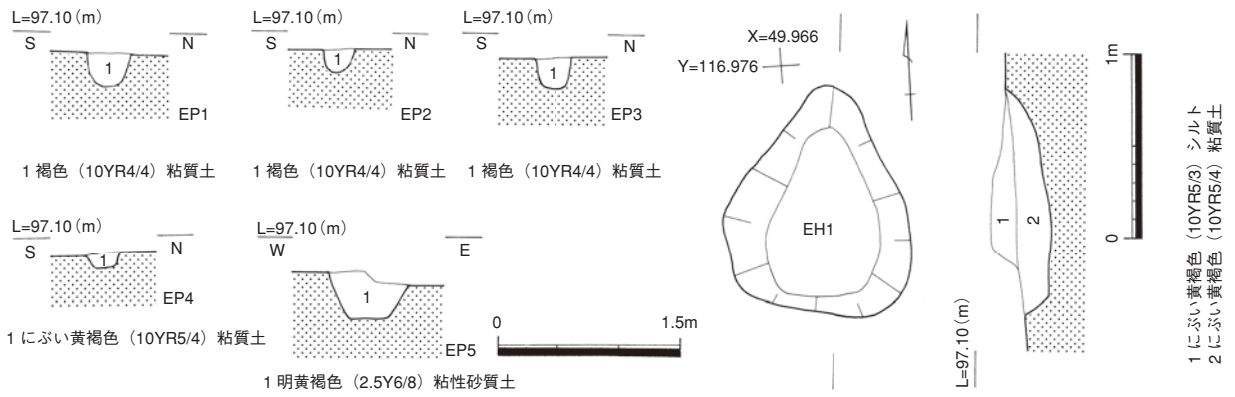
覆土除去後、床面に柱穴5基、炉1基を検出した。主柱穴としてEP1・3・5の3基が該当すると思われる、4本柱構造の可能性もある。残り1基の主柱穴は、土地改変に伴い削平されたと思われる。また住居内において、周壁溝や貼床など他の施設は確認できなかった。

土層

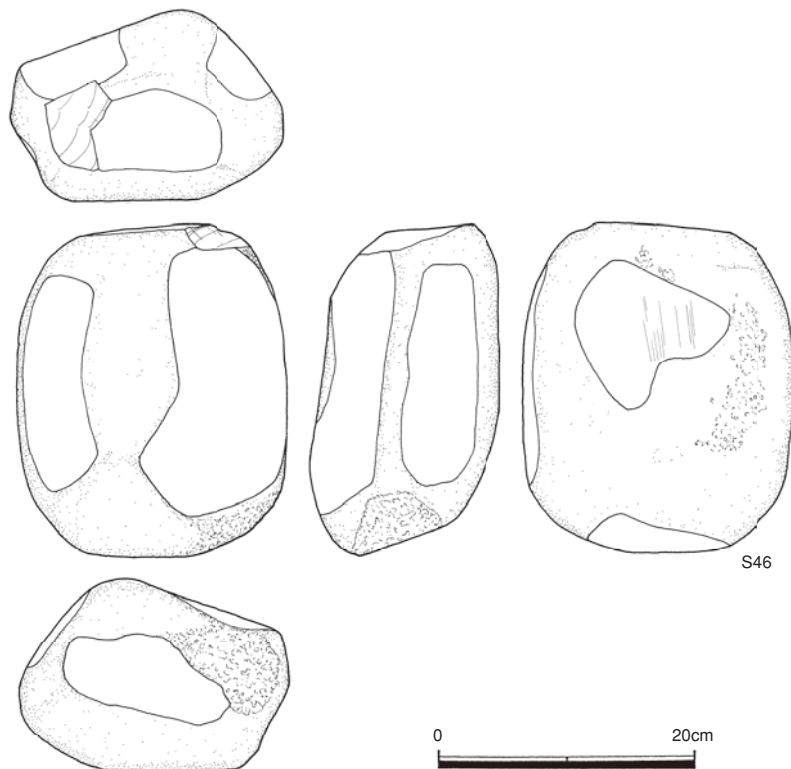
土質および含有物から覆土は6層に分層でき、3～5層は攪乱土である。覆土の色調は暗褐色を主体とし、全般的に含有物は少ない。6層は炭化物を多く含み、その土層堆積状況から検出時に確認できなかった別遺構(柱穴)の可能性もある。構築面としての床面は概ね砂礫層で、貼床と考えられる層の確認には至らなかった。



第44図 SB1001 遺構図



第45図 SB1001 遺構図・出土遺物



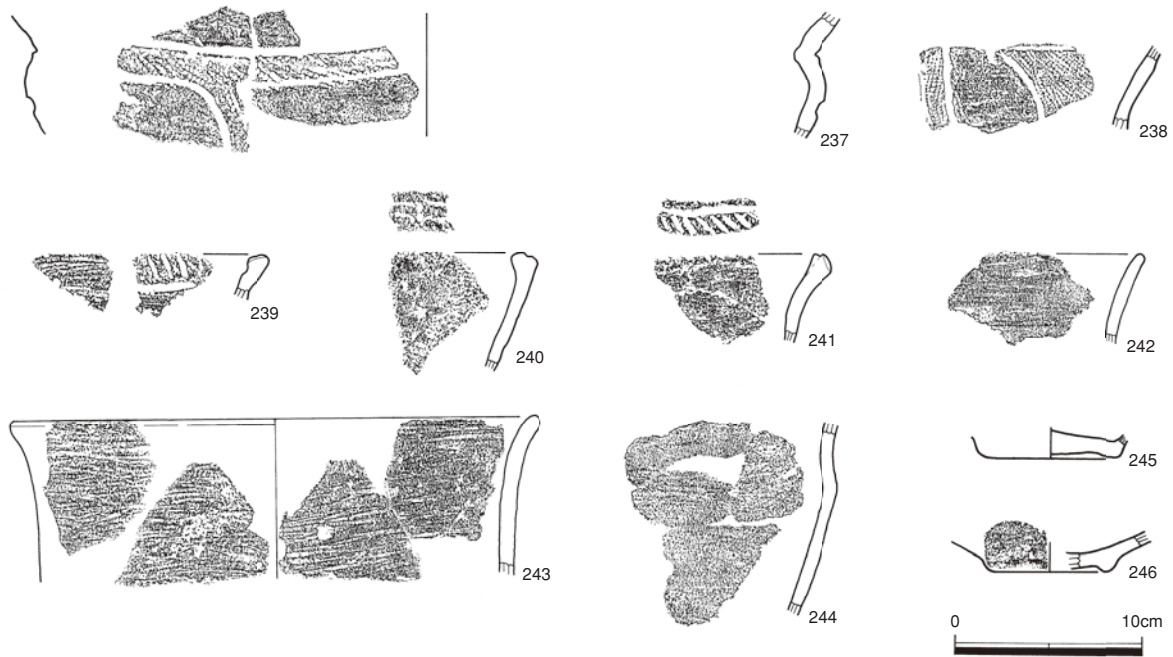
第46図 SB1001 出土遺物 (1)

柱穴・土坑 (第45図)

柱穴は全部で5基検出され、そのうちのEP1・3・5の3基を主柱穴として捉えた。主柱穴は直径0.32～0.56m、最大深度0.38～0.55mを測る。柱穴間距離の最大は3.25m (EP3・5間)、最小は2.50m (EP1・3間)である。各柱穴の覆土は1層で、概ね褐色を主体とする。主柱穴以外の柱穴2基は直径0.24～0.30mの円形で、最大深度0.27～0.38mを測る。各柱穴からの出土遺物は、認められなかった。

炉 (第45図)

平面形態・底面形態は不整な楕円形、断面形態は舟底形を呈し、上層の一部が削平を受ける。長軸



第47図 SB1001 出土遺物 (2)

1.24m、短軸1.00m、最大深度0.33mを測る。底面はほぼ平坦である。炉は、住居のほぼ中央部、支柱穴間のやや西よりに作り付けられている。

覆土はにぶい黄褐色を呈し、含有物から2層に分層できる。1層は2層と比較して粒子が細かく、焼土・炭化物を含む。2層は粘質土で、直径10~20cm大の礫を小数含む。炉内からの出土遺物は、認められなかった。

出土遺物 (第45~47図)

壺形土器・鉢形土器・体部片25点、縁帯文成立期有文深鉢・鉢、後~晩期を主体とする無文深鉢・浅鉢、赤彩無文注口土器、サヌカイト製石鏃・楔形石器・剥片、砂質片岩製敲石、閃緑岩製砥石が出土した。これらの遺物は散在した状態で出土し、そのほとんどが床面から浮いた状態である。砥石S46のみ、床面直上からの出土である。出土遺物のなかで図化可能な遺物は、壺(234)、鉢(235・236)、サヌカイト製石鏃(S33・34)・楔形石器(S35・36)・剥片(S37~44)、敲石(S45)、砥石(S46)、縄文土器(237~246)の27点である。

出土土器の中で、弥生土器は3点、縄文土器は10点図化できた。縄文土器は縁帯文成立期を中心とする後期前葉の土器が多いが、無文土器では後~晩期に属するものが出土している。

石鏃のうち、S33は無茎凹基、S34は平基三角である。楔形石器は、S35が左右に裁断面が認められる。打面構成としてS35は四方向の可能性があり、S36は二方向である。図化できた剥片8点のうち、S43のみ二次加工痕が認められる。敲石S45は、全面に敲打痕および擦痕が認められる。S46は、左側縁をのぞいた5面に研面が認められる。また下側面に、敲打痕が認められる。

時期

この遺構の所属時期は、出土遺物から弥生時代後期と推測できる。

2号竪穴住居 (SB1002) (第48・49図)

位置・構造 (第48図)

9区 C・D-47・48で南側溝に切られた状態で確認された竪穴住居。住居の東肩の一部は検出できず、また南方の一部は調査区外に延びる。住居の平面形態・底面形態は方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸の最大幅5.20m、短軸5.30m、最大深度0.44m、検出部分の床面積24.91㎡を測る。

覆土除去後、床面に柱穴15基、土坑3基を検出した。主柱穴は配置からEP2・6・9・12と思われ、四本柱構造と推測できる。ただEP2・9が壁際に近いことから、EP3・6・8・12が主柱穴になる可能性もある。また住居内において、周壁溝や貼床など他の施設は確認できなかった。

土層

覆土は褐色を呈し、色調・土質の違いにより2層に分層できる。上層は直径5～10cm大の礫を多量に含み、下層は上層と比較して粘性が強く、礫の含有量は少ない。

構築面としての床面は砂礫層で、貼床と考えられる層は確認できなかった。

柱穴・土坑 (第48・49図)

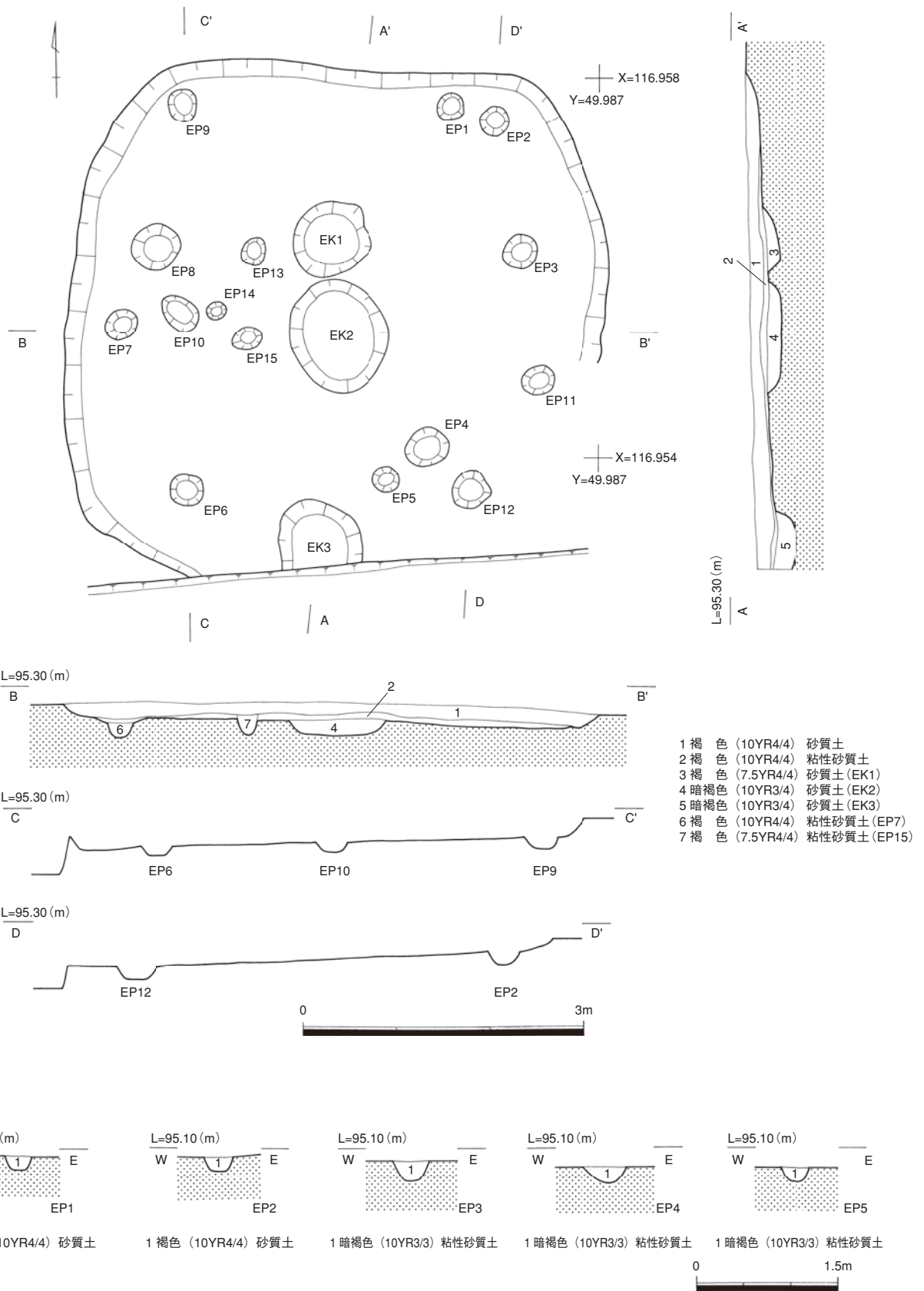
柱穴は全部で15基検出できたが、主柱穴と思われる4基は直径0.32～0.42mの円形、最大深度0.10～0.13mを測る。主柱穴間距離の最大は4.15m (EP6・9間)、最小は3.0m (EP6・12間)を測る。覆土は4基とも単層であり、褐色を呈する。主柱穴以外の柱穴11基のうち9基は直径0.22～0.49mの円形で、最大深度0.05～0.19mを測る。残り2基は長軸0.33～0.48m、短軸0.24～0.32m、最大深度0.15～0.22mの楕円形を呈する。各柱穴とも主柱穴を同じく単層であり、褐色ないしは暗褐色を呈する。検出した柱穴すべてに柱痕は確認できず、遺物はEP10から炭化物が出土したのみである。

土坑は、調査区内で3基検出できた。そのうちのEK3は南側側溝に遺構の約半分を切られ、調査区外に延びる。EK1は平面形態はやや不整な円形、底面形態は円形、断面形態は逆台形を呈し、一辺0.80m前後、最大深度0.20mを測る。覆土は褐色砂質土1層である。EK2は平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.22m、短軸1.03m、最大深度0.15mを測る。覆土は暗褐色砂質土1層で炭化物を若干含み、砂岩製台石が床面から浮いた状態で出土している。EK3は調査区外に延びるために全容は不明だが、平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形と推測できる。最大長0.72m、最大幅0.85m、最大深度0.18mを測る。覆土は暗褐色砂質土で、直径5～10cm第の礫を多く含む。

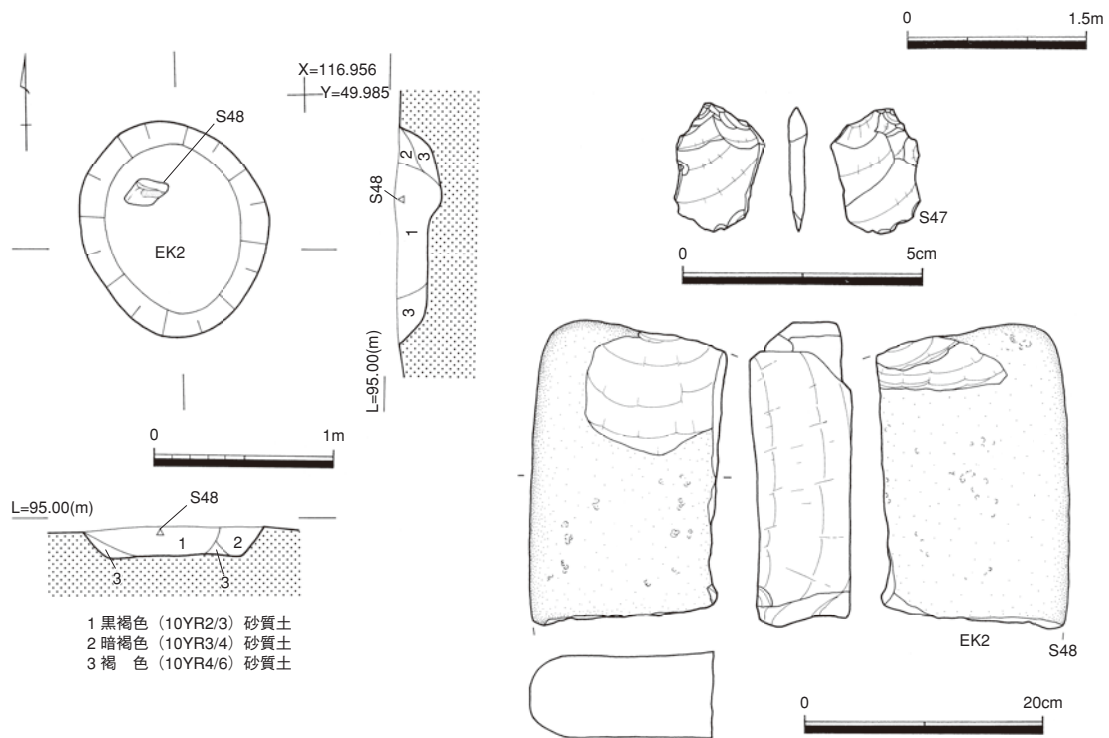
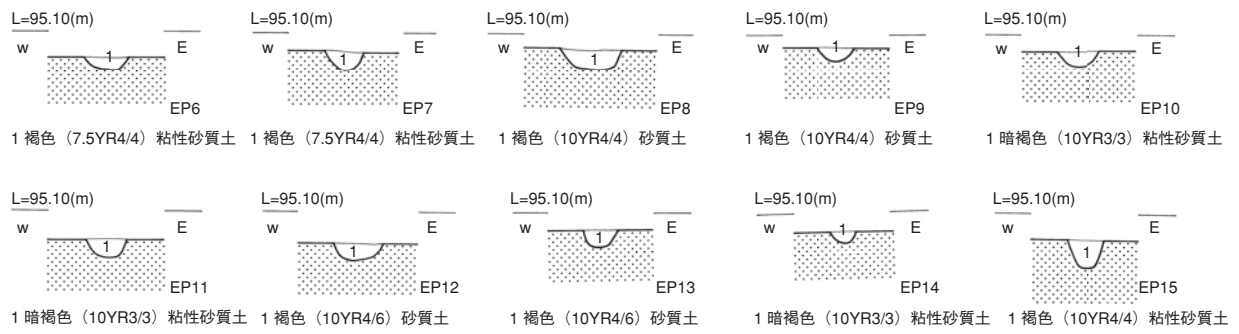
遺物は、EK1から弥生土器片が、EK2では弥生土器片・右および下側縁部が欠損した台石 (S48) が出土した。EK3では、出土遺物は認められなかった。

炉

主柱穴とした柱穴の配置と住居内の位置から、EK2が炉の可能性が高いと考えた。しかし土層堆積状況からそれを裏付けることはできず、またEK1・3も同様のことがいえ、住居内で炉を確定するには至らなかった。



第48図 SB1002 遺構図



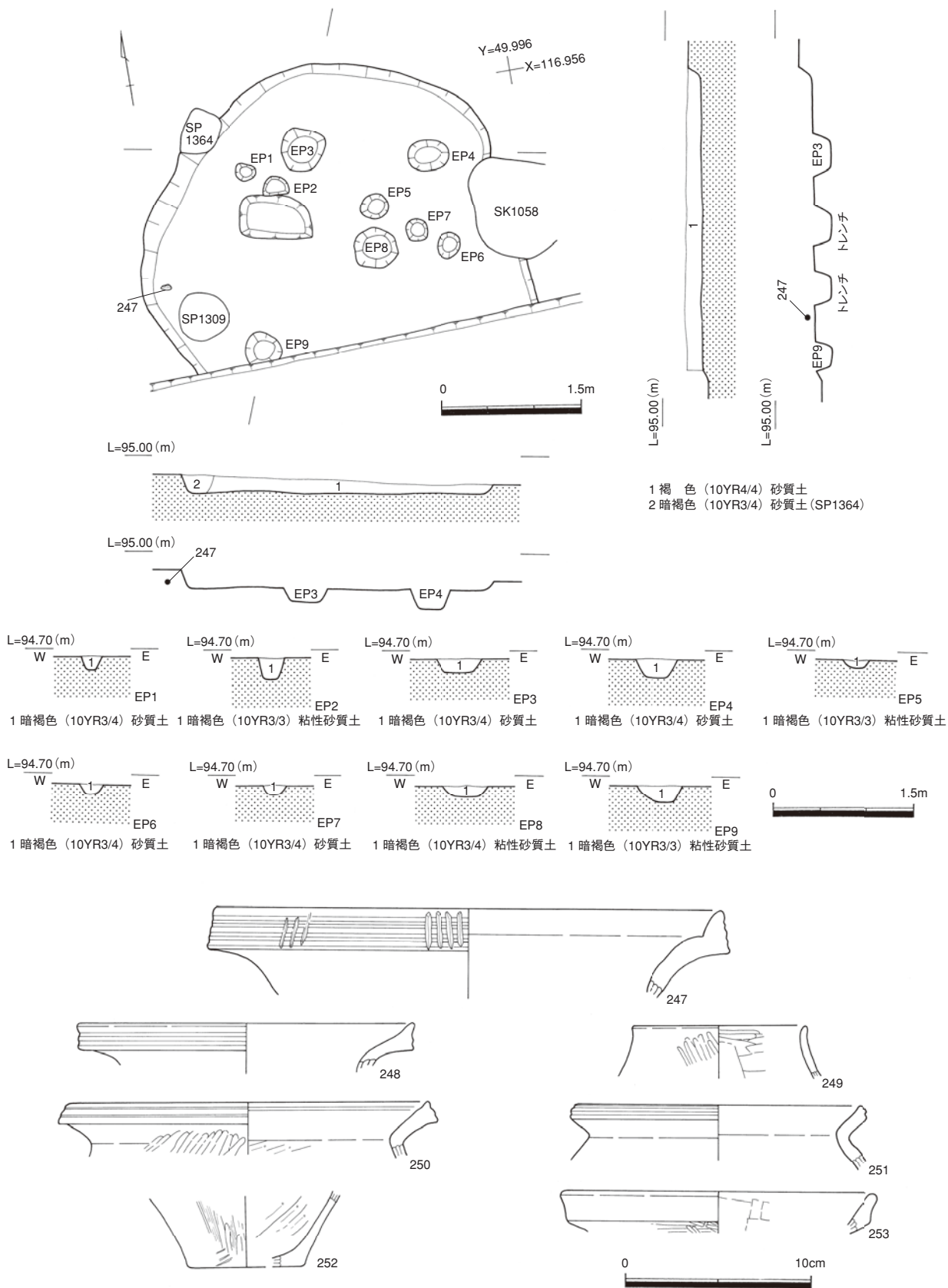
第49図 SB1002 遺構図・出土遺物

出土遺物 (第49図)

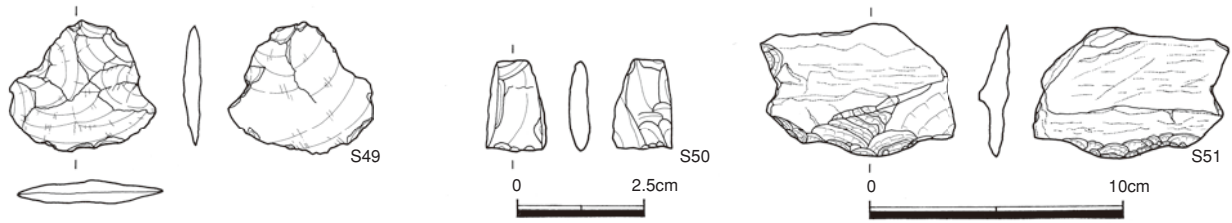
甕形土器1点・体部片20点、サヌカイト剥片1点を含む総点数22点を出土した。そのなかで図化可能な遺物は、サヌカイト剥片(S47)のみである。

時期

出土遺物から、弥生時代後期と思われる。



第50図 SB1003 遺構図・出土遺物



第51図 SB1003 出土遺物

3号竪穴住居 (SB1003) (第50・51図)

位置・構造

9区 C・D-48・49でSP1309・1364、SK1058と一部攪乱に切られた状態で確認された竪穴住居。遺構の南側約1/3は南側溝に切られ、調査区外に延びる。最大長3.64m、最大幅3.06m、最大深度0.33m、検出部分の床面積9.47㎡を測り、住居の平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈する。

覆土除去後、床面に柱穴9基を検出した。土坑および炉は、調査区内での検出に至らなかった。主柱穴はEP3・4・9と思われ、四本柱構造と推測できる。EP4南側の主柱穴は、調査区外に存在すると推測できる。また住居内において、周壁溝や貼床など他の施設は確認できなかった。

土層

覆土は褐色砂質土1層で、2層は堆積状況から検出できなかった柱穴と推測できる。構築面としての床面は砂礫層だが、貼床と考えられる層の確認には至らなかった。

柱穴・土坑 (第50図)

柱穴は全部で9基検出され、そのうちのEP3・4・9の3基が主柱穴と考えられる。主柱穴は長軸・直径0.33～0.50mの円形および楕円形、最大深度0.13～0.19mを測る。柱穴間距離の最大は2.20m (EP3・9間)、最小は1.35m (EP3・4間) である。主柱穴は単層であり、暗褐色を呈する。

主柱穴以外の柱穴6基のうち5基は、直径0.20～0.46mの円形で、最大深度0.08～0.13mを測る。残り1基は長軸0.30m、短軸0.20m、最大深度0.20mの楕円形を呈する。主柱穴と同じく各柱穴も単層であり、暗褐色を呈する。これらの柱穴は主柱穴とともに、直径5cm弱の礫を大量に含む。また柱痕は確認できなかった。EP8のみ、直径10～20cm大の礫を多く含む。

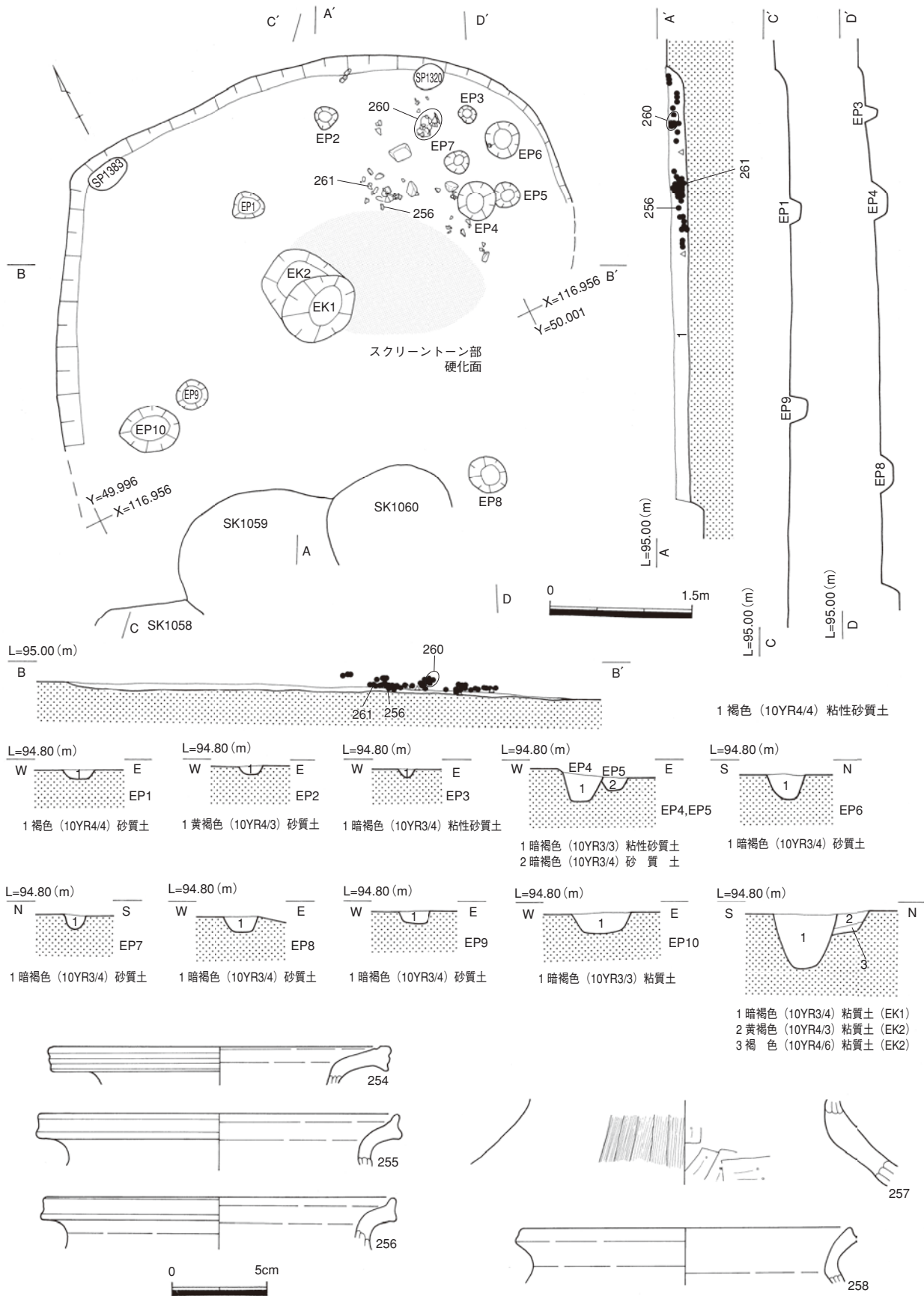
図化できなかったものの、柱穴からの出土遺物は、EP6から出土した口縁部端面に凹線が施された壺形土器と体部片のみである。

炉

調査対象地で検出した住居内で、炉と想定できる遺構を確認できなかった。

出土遺物 (第50・51図)

壺形土器4点、甕形土器3点、高坏形土器1点、体部片34点、サヌカイト製楔形石器・剥片各1点、結晶片岩製石庖丁1点の総数44点が出土した。図化可能な遺物は、そのうちの10点である。広口壺 (247・248)・無頸壺 (249)、甕 (250～252)、高坏 (253)、サヌカイト製剥片 (S49・S50)、砂質片岩製石庖丁



第52図 SB1004 遺構図・出土遺物

(S51)である。無頸壺をのぞく壺・甕では、口縁端部を上方あるいは上下方向に拡張し、端面に2ないしは4条の凹線を施す。247では、凹線の後に刻目が施される。また石庖丁S51は凸刃を持ち、単刃である。

時期

出土遺物から、弥生時代後期前葉である。

竪穴住居4号 (SB1004) (第52・53図)

位置・構造

9区 D-50・51でSP1320・1383、SK1058～1060に切られた状態で確認された竪穴住居。住居の南肩および東肩の大半を検出することができなかったものの、平面形態・底面形態ともにやや不整な方形、断面形態は逆台形を呈すると思われる。最大長5.61m、最大幅3.51m、最大深度0.55m、検出部分の床面積16.74㎡を測る。

覆土除去後、床面に柱穴11基、土坑2基を検出した。また周壁溝や貼床などの他の施設を確認することはできなかった。出土遺物は遺構の遺存状態に影響を受けてはいるものの、住居の北東でやや密集した状態で出土しているのを確認した。

土層

覆土は褐色粘性砂質土1層で、構築面としての床面は砂礫層である。貼床と考えられる層の確認には至らなかったが、EK1・2の東側を中心に、床面が踏み固められ硬化している。

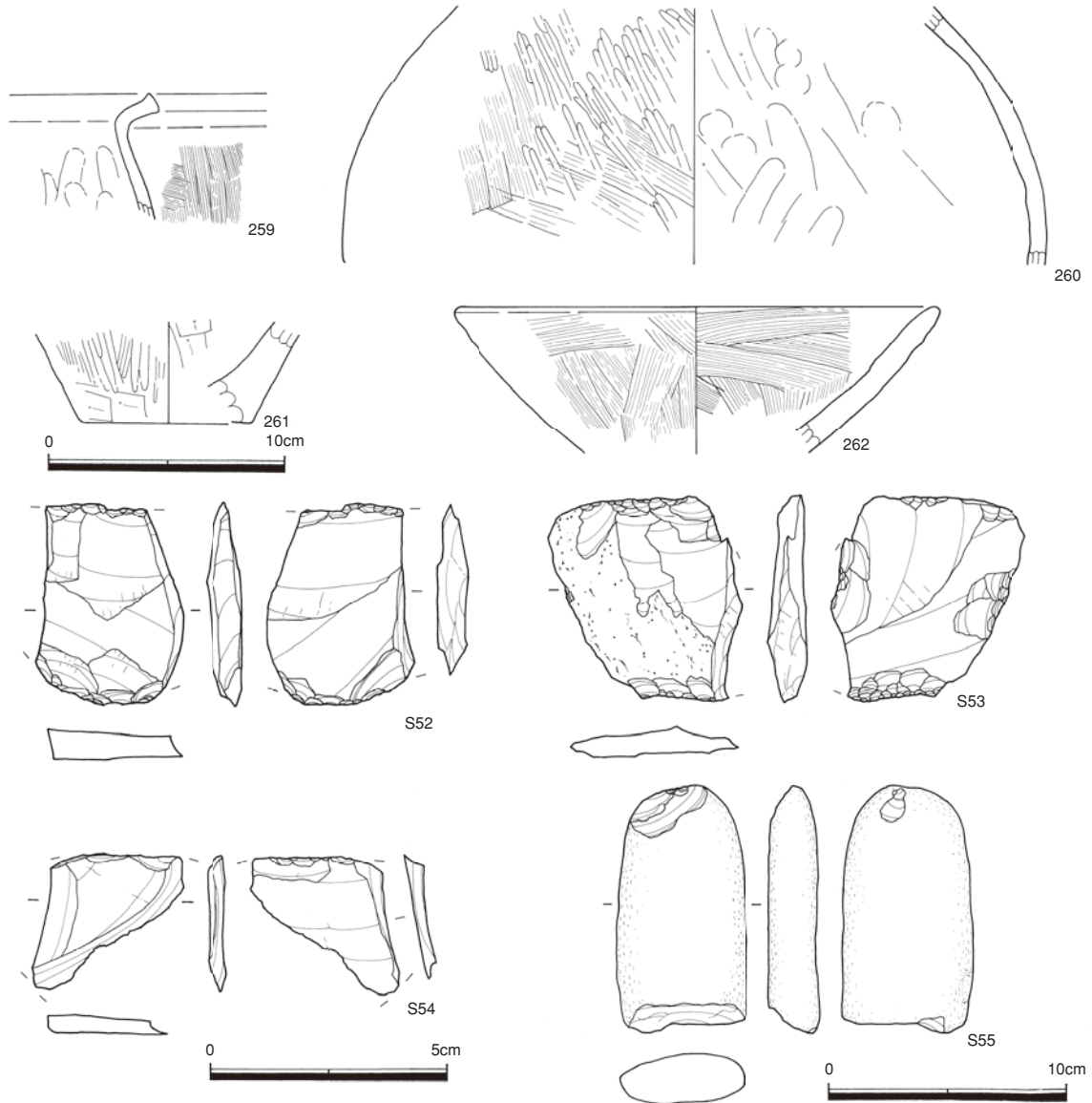
柱穴・土坑 (第52図)

柱穴は、全部で11基検出できた。住居の平面形態から4本柱構造と考えられ、EP1・4・8・9の4基が主柱穴の可能性が考えられる。主柱穴4基は概ね楕円形を呈し、直径・長軸0.20～0.45m、短軸0.25～0.38m、最大深度0.10mを測る。主柱穴以外の柱穴7基のうち、平面形態が円形を呈する柱穴は6基で、直径0.18～0.40m、最大深度0.09～0.25mを測る。平面形態が楕円形を呈する柱穴は1基で、長軸0.63m、短軸0.48m、最大深度0.20mを測る。各柱穴の覆土はそれぞれ単層で、概ね暗褐色を主体とする。EP4・5では、直径1cm大の小礫を多量に含む。これらの柱穴で、柱痕および出土遺物を確認することはできなかった。

土坑は、住居内で2基検出できた。EK1は平面形態がやや不整な楕円形、底面形態は楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.83m、短軸0.65m、最大深度0.55mを測る。覆土は褐色粘質土1層で、炭化物を若干含む。EK2はEK1に切られているものの、平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈すると思われる。最大長0.35m、短軸0.75m、最大深度0.20mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は黄褐色粘質土、2層は褐色粘質土である。遺物はEK1から壺形土器・体部片が出土したが、図化できるものはなかった。

炉

主柱穴とした柱穴の配置と住居内の位置から、EK1・2が炉の可能性が高いと考えた。しかし土層堆積状況からそれを裏付けることができず、住居内で炉を確定するには至らなかった。



第53図 SB1004 出土遺物

出土遺物 (第52・53図)

壺形土器4点、甕形土器3点、体部片128点、サヌカイト製剥片1点、焼土塊、土師質土器片、須恵質土器片が出土し、そのうち壺 (254～257)、甕 (258～261)、鉢 (262)、サヌカイト製楔形石器 (S52・S53)・剥片 (S54)、結晶片岩製石錘 (S55) が図化できた。

図化できた壺は、口縁端部を上方あるいは下方向に拡張する。口縁部端面に254では凹線が、255・256では擬凹線が認められる。甕では、258のみに凹線が認められる。鉢は262のみで、体部は外上方へ直線的に立ち上がる。楔形石器2点はともに右側面に裁断面が認められ、打面構成はS52が上下、S53が四方向となる。S55は砂質片岩製で、打欠石錘である。

時期

出土遺物から、弥生時代後期前葉と推測できる。

竪穴住居5号 (SB1005) (第54図)

位置・構造

97-1区 E・F-52でSK1091に切られた状態で確認された竪穴住居。また、住居の南肩は削平を受けて深度が浅い。この住居の平面形態・底面形態ともにほぼ円形、断面形態は逆台形を呈し、規模は直径4.20m前後、最大深度0.15m、床面積10.83㎡を測る。

覆土除去後、床面に柱穴6基、土坑1基、周壁溝1条を検出した。主柱穴はEP1・4～6と思われ、四本柱構造と推測できる。出土遺物は、認められなかった。

土層

覆土は褐色砂質土1層で、直径3cm弱の礫を多量に含む。

柱穴・土坑

柱穴は全部で6基検出でき、そのうちのEP1・4～6の4基が主柱穴と考えられる。主柱穴は直径0.40m前後の円形2基と、長軸0.33～0.47m、短軸0.28～0.40mの楕円形2基から成り、最大深度0.14～0.26mを測る。柱穴間距離の最大は1.75m (EP1・4間)、最小は1.35m (EP1・6間)である。主柱穴4基ともに単層で、にぶい黄褐色を呈する。主柱穴以外の柱穴2基は、直径0.35m前後の円形で最大深度0.10～0.17mを測り、覆土は褐色を呈する。検出した柱穴6基では遺物の出土は認められず、また柱痕も確認できなかった。

土坑は、住居内で1基検出できた。EK1は平面形態・底面形態ともにやや不整な方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.25m、短軸1.15m、最大深度0.29mを測る。覆土は褐色砂質土1層で、5cm大の礫をやや多く含む。出土遺物は、認められなかった。

炉

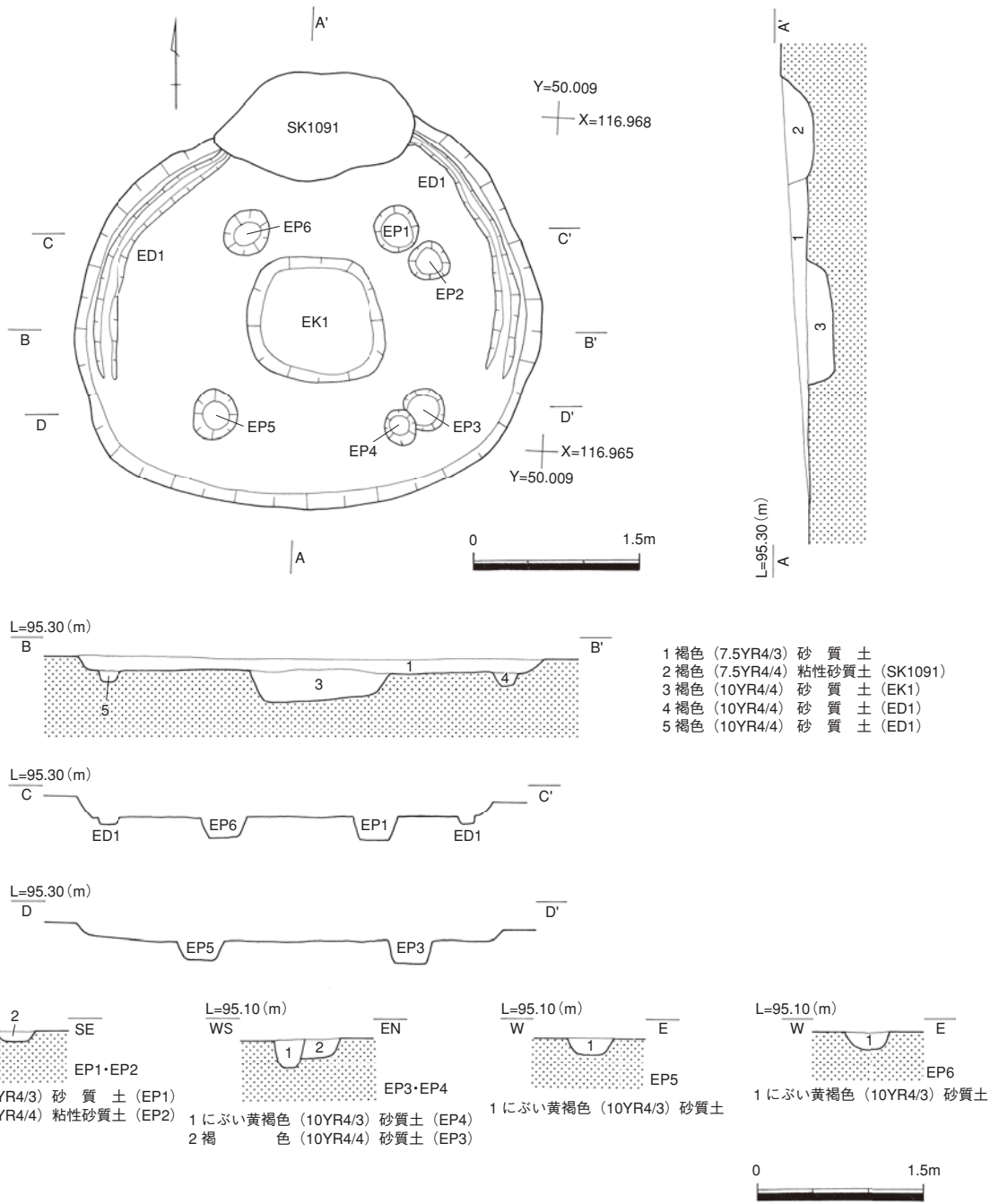
主柱穴とした柱穴の配置と住居内の位置から、EK1が炉の可能性が高い。しかし土層堆積状況からそれを裏付けることができず、炉と認定するには至らなかった。

周壁溝

SK1091に一部切られているものの、溝は住居の約2/3程をめぐる。最大深度は0.10mを測り、褐色砂質土1層である。出土遺物は認められなかった。

時期

遺物の出土が認められなかったために時期は不明だが、近隣の竪穴住居の配置から弥生時代後期前葉の可能性が考えられる。



第54図 SB1005 遺構図

竪穴住居6号 (SB1006) (第55・56図)

位置・構造

97-1区 F・G-52・53で確認された竪穴住居。また、住居の南肩は削平を受けて遺構深度が浅くなる。この住居の平面形態・底面形態ともにほぼ円形、断面形態は逆台形を呈し、規模は直径4.20m前後、最大深度0.20m、床面積13.23㎡を測る。

覆土除去後、床面に柱穴13基、土坑1基、周壁溝1条を検出した。主柱穴はEP1・4・6・12の4基と思われる、4本柱構造と推測できる。

土層

覆土は暗褐色粘性砂質土1層で、直径5cm弱の礫をやや多く含む。

柱穴・土坑

柱穴は全部で13基検出でき、そのうちのEP1・4・6・12の4基が主柱穴と考えられる。主柱穴は直径0.33m前後の円形3基と、長軸0.48m、短軸0.28mの楕円形1基から成り、最大深度0.12～0.18mを測る。柱穴間距離の最大は2.20m (EP6・12間)、最小は1.7m (EP1・4間)である。主柱穴4基は概ね単層で、褐色を主体とする。主柱穴以外の柱穴9基のうち、4基が直径0.30m前後の円形を呈し、残り5基が長軸0.33～0.51m、短軸0.27～0.44mの楕円形を呈する。また最大深度は、0.12～0.18mを測る。覆土はEP3・7・12・13を除く9基が単層で、概ね褐色を呈する。検出した柱穴13基では遺物の出土は認められず、また柱痕も確認できなかった。

土坑は、住居内で1基検出できた。EK1は平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.18m、短軸0.58m、最大深度0.18mを測る。覆土は褐色砂質土1層で、5cm大の礫をやや多く含む。

出土遺物は、認められなかった。

炉

EK1が炉の可能性が高いものの、土層堆積状況からそれを裏付けることができず、炉と認定するには至らなかった。

周壁溝

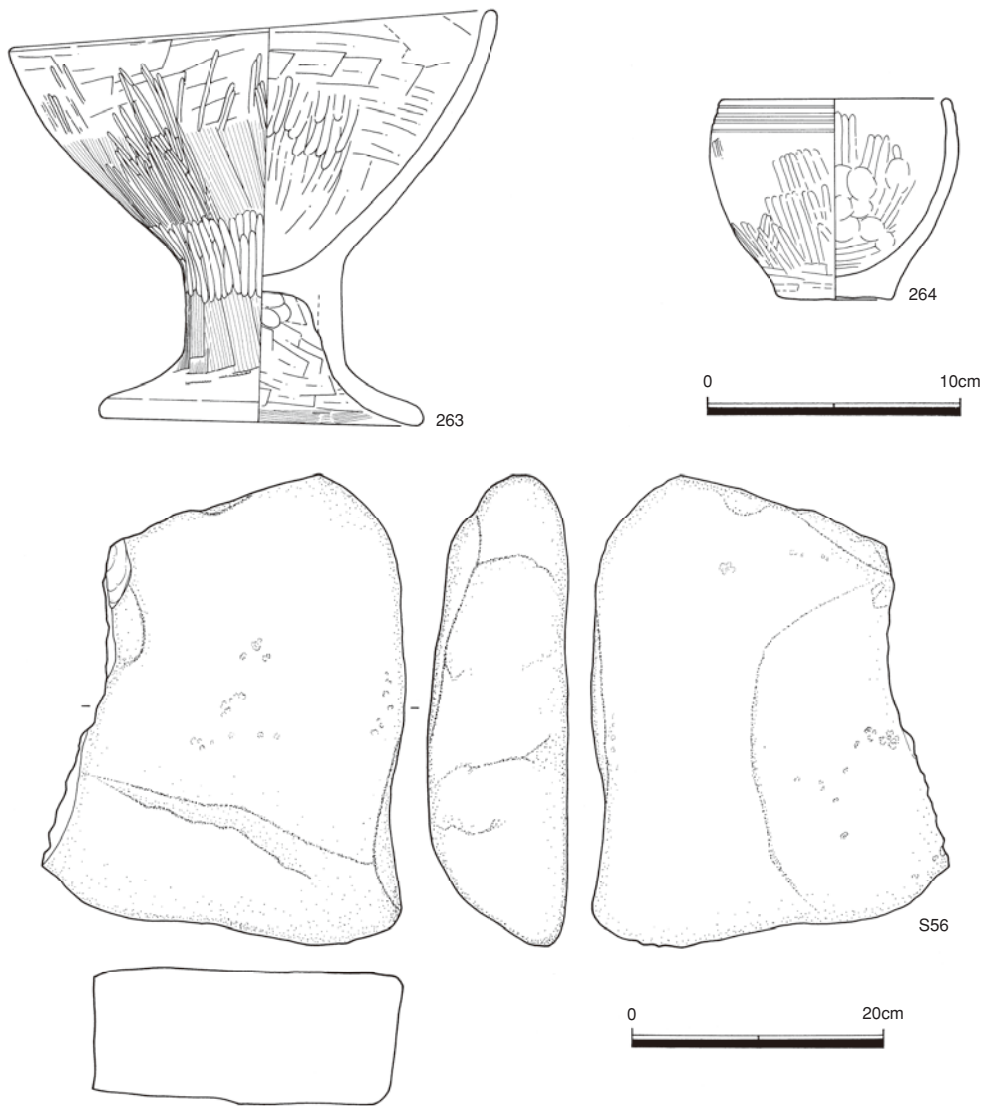
溝は、住居の約1/2程の北側をめぐる。最大深度は0.10mを測り、褐色砂質土1層である。出土遺物は認められなかった。

出土遺物 (第56図)

出土遺物は少なく、高坏形土器(263)・鉢形土器(64)、砂岩製台石(S56)の3点のみである。高坏は、住居の北側で床面から浮いた状態で出土した。鉢は、口縁部に凹線状沈線が4条認められる。台石は、左側縁部が欠損する。

時期

出土遺物から、弥生時代後期前葉と思われる。



第56図 SB1006 出土遺物

竪穴住居7号 (SB1007) (第57図)

位置・構造

97-1区 G・H-58・59でSU1002と南側溝に切られた状態で確認された竪穴住居。また住居の東肩は、調査区外に延びる。この住居の平面形態・底面形態は円形、断面形態は逆台形を呈し、直径3.90m前後、最大深度0.33m、遺存部で床面積9.39㎡を測る。

覆土除去後、床面に柱穴9基、周壁溝1条を検出した。調査範囲内では、土坑および炉を確認することはできなかった。支柱穴はEP3・5・8・7の4基と思われ、4本柱構造と推測できる。遺物は、床面直上で出土した磨石(S57)のみである。

土層

覆土は2層に分層できるものの、概ね褐色粘性砂質土1層といえる。礫を多く含む。

柱穴

柱穴は全部で9基検出でき、そのうちのEP3・5・7・8の4基が主柱穴と考えられる。主柱穴は直径0.40～0.57m前後のややいびつな円形3基と、長軸0.54m、短軸0.41mの楕円形1基から成り、最大深度0.10～0.14mを測る。柱穴間距離の最大は1.43m (EP5・7間)、最小は1.33m (EP3・8間)である。主柱穴4基は単層で、褐色あるいはにぶい黄褐色を呈する。主柱穴以外の柱穴5基のうち、4基が直径0.30～0.60m前後の円形を呈し、残り1基が長軸0.38m、短軸0.31mの楕円形を呈する。また最大深度は、0.10～0.23mを測る。覆土はEP1を除き単層で、褐色あるいはにぶい黄褐色を呈する。検出した柱穴9基では遺物の出土は認められず、また柱痕も確認できなかった。

炉

主柱穴とした柱穴の配置と住居内の位置から、EP4が炉の可能性を考えた。しかし土層堆積状況からそれを裏付けることができず、炉と認定するには至らなかった。

周壁溝

東側溝に切られてはいるが、溝は住居の約2/3程をめぐると思われる。最大深度は0.05mを測り、褐色砂質土1層である。出土遺物は認められなかった。

出土遺物

緑泥片岩製磨石 (S57) のみの出土である。S57では敲打痕が下側縁部に、砥面が表裏面の二ヶ所に認められる。

時期

土器の出土が認められなかったために、詳細な時期は不明である。近隣の竪穴住居の配置から、弥生時代後期前葉か。

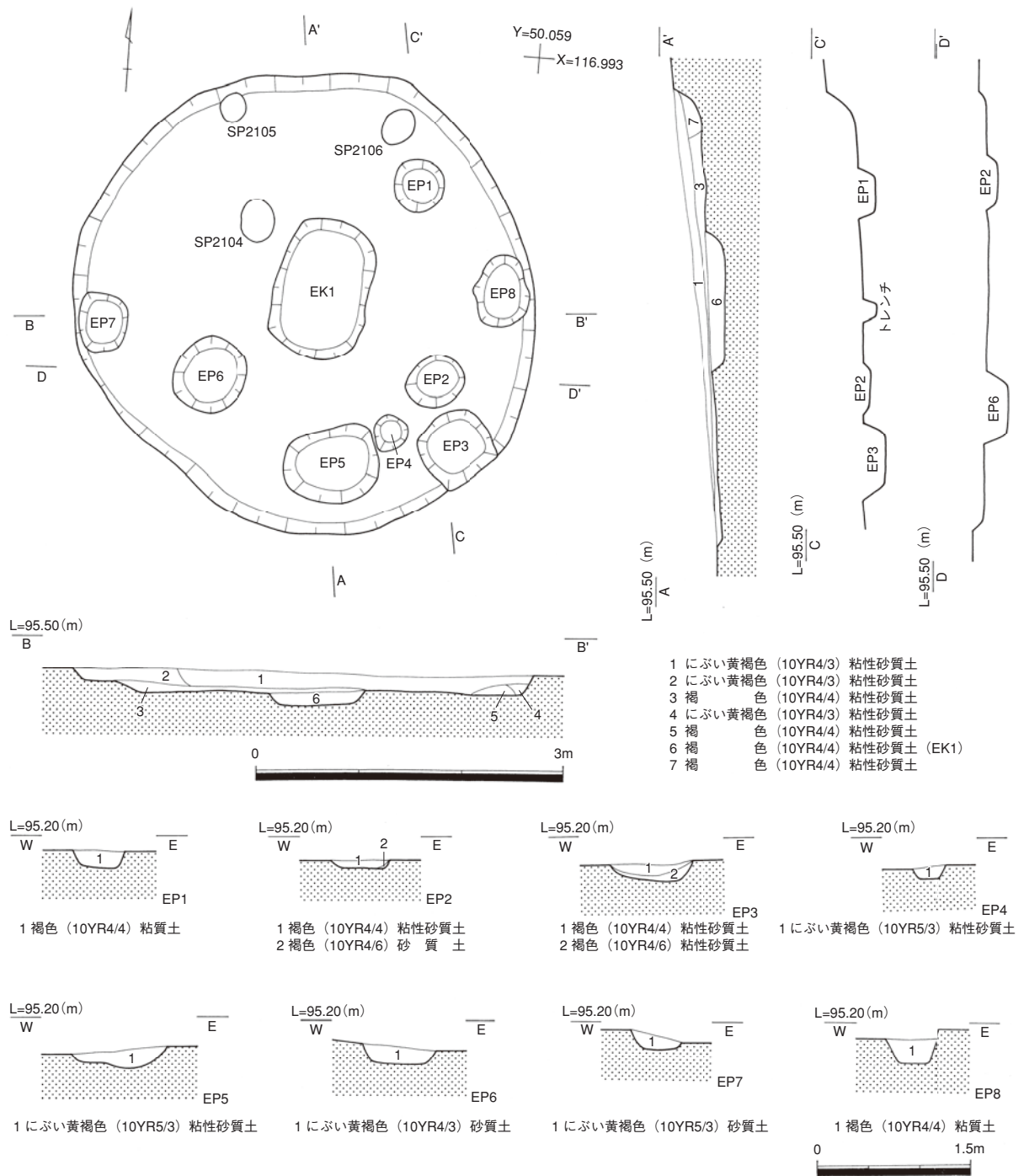
第二遺構面

竪穴住居1号 (SB2001) (第58図)

位置・構造

97-2区 J・K-61・62でSP2104～2106に切られた状態で確認した竪穴住居。この住居の平面形態・底面形態は円形、断面形態は緩やかな舟底形で、直径4.45m前後、最大深度0.46m、床面積13.82㎡を測る。

覆土除去後、床面に柱穴8基、土坑1基を検出した。主柱穴はEP1・2・6の3基と思われる。EP1の西側において主柱穴に比定できる柱穴が存在しないものの、見落とした可能性も考えられることから、4本柱構造の可能性もある。周壁溝などの他の施設を確認することはできず、また遺物の出土も認められなかった。



第58図 SB2001 遺構図

土層

覆土は土色および含有物から7層に分層できるものの、大きく上層(1・2層)、下層(3~7層)に分けることができる。上層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、1層は炭化物を若干含む。下層は概ね褐色粘性砂質土である。

柱穴・土坑

柱穴は全部で8基検出でき、そのうちのEP1・2・6の3基が主柱穴と考えられる。主柱穴は直径0.50m前後の円形と、長軸0.56～0.74m、短軸0.48～0.68mの楕円形2基から成り、最大深度0.09～0.17mを測る。柱穴間距離の最大は2.20m (EP2・6間)、最小は1.83m (EP1・2間)である。覆土は3基ともに単層で、褐色およびにぶい黄褐色を呈する。主柱穴以外の柱穴5基のうち、1基が直径0.35m前後の円形を、残り4基が長軸0.45～0.94m、短軸0.36～0.73mの楕円形を呈する。また最大深度は、0.10～0.20mを測る。覆土はEP3を除き単層で、褐色あるいはにぶい黄褐色を呈する。検出した柱穴8基では遺物の出土は認められず、また柱痕も確認できなかった。

土坑は1基検出でき、平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.36m、短軸0.91m、最大深度0.14mを測る。覆土は褐色粘質土1層である。出土遺物は、認められなかった。

炉

住居および主柱穴間のはぼ中央に位置することから、EK1が炉である可能性を考えた。しかし土層堆積状況からそれを裏付けることができず、炉と認定するには至らなかった。

時期

土器の出土が認められなかったために、詳細な時期は不明である。近隣の竪穴住居の配置から、弥生時代後期前葉か。

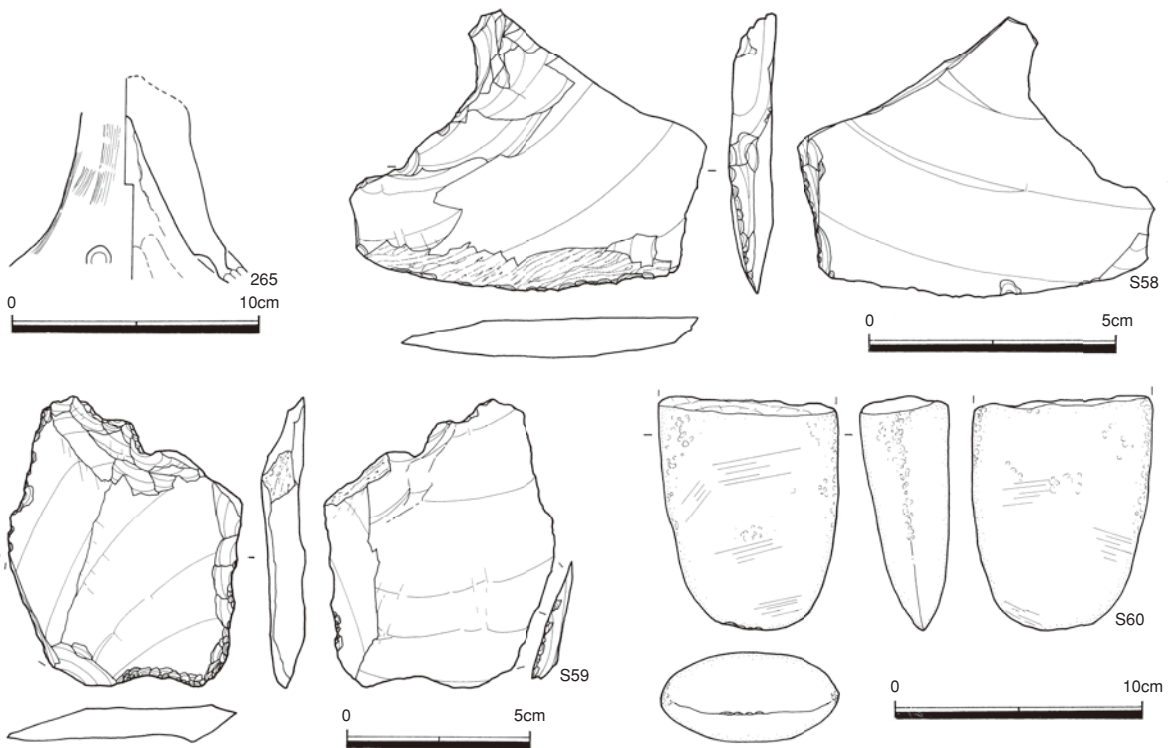
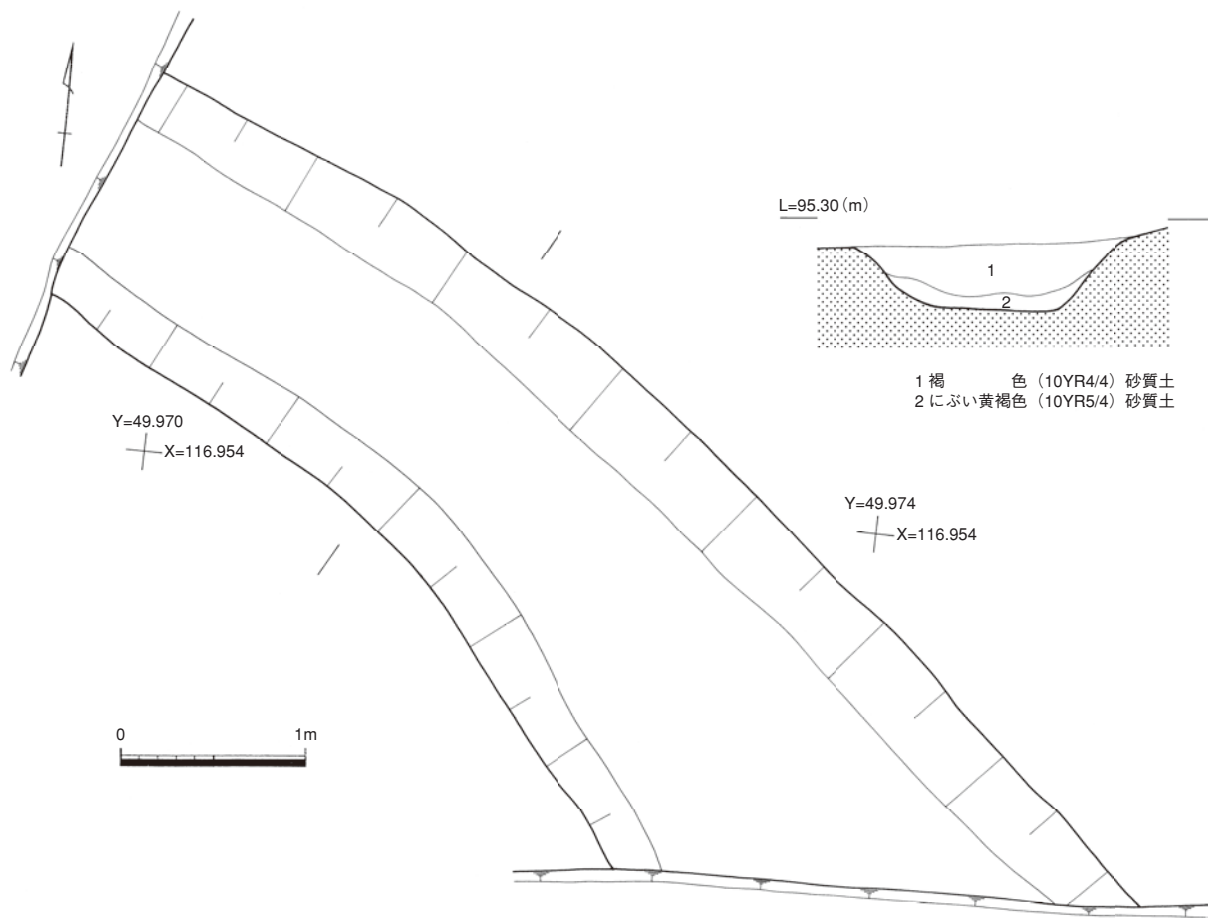
溝

溝5号 (SD1005) (第59図)

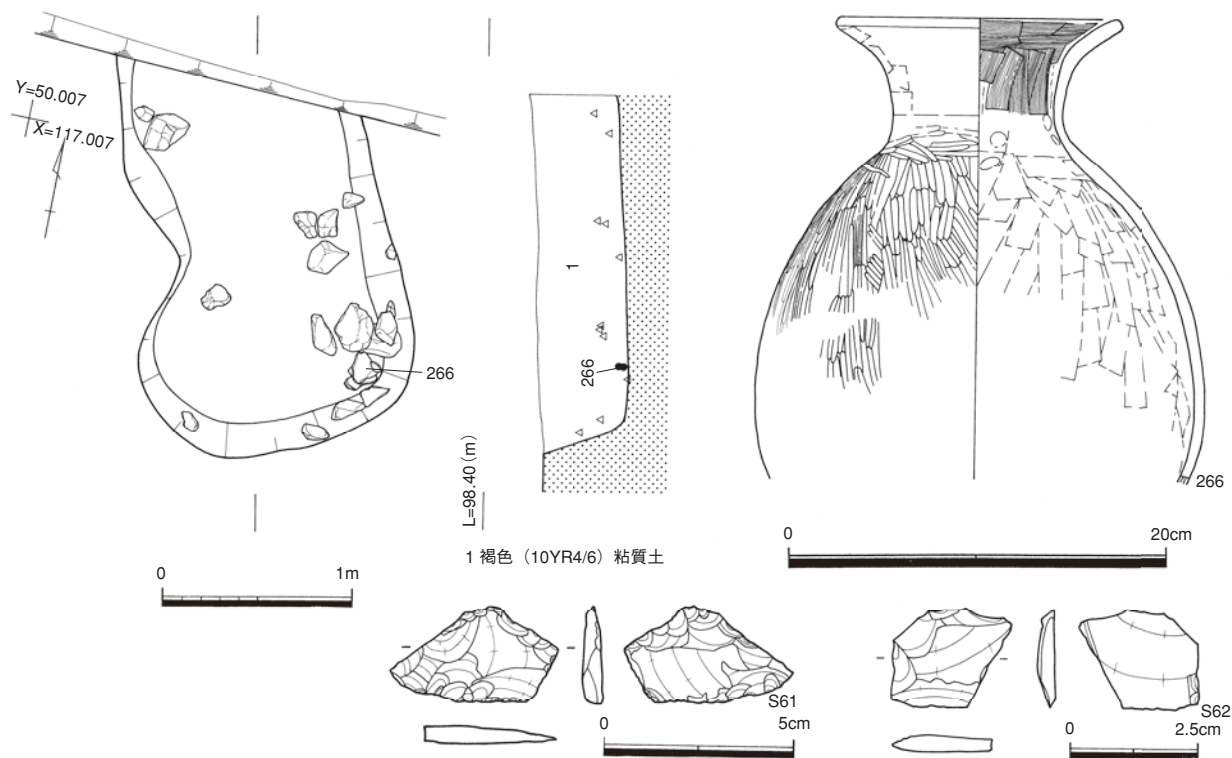
9区 C・D-44・45で確認された溝状遺構。9区で検出されたのは溝の一部であり、検出状況から調査区の北西および南東方向にさらに延びると推測できる。ただ道路を挟んで9区の西隣にある2区では、この溝状遺構の続きを検出できず、未調査部分で溝の西端が終わりになるか、溝がカーブを描いて2区の南側を走る可能性がある。調査区内での最大長約6.00m、最大幅1.80m、最大深度0.33mを測り、断面形態は逆台形を呈する。

覆土は2層に分層することができ、1層は褐色砂質土で直径5cm大の礫を多量に含む。遺物は、この層から出土した。2層はにぶい黄褐色粘質土である。

遺物は高坏形土器、土師質土器羽釜・土師質土器片、サヌカイト製削器・剥片、砂岩製磨製石斧が出土し、そのうち図化できたのは、高坏脚部(265)・削器(S59)・剥片(S58)・磨製石斧(S60)の4点である。265の円形透孔は、未穿孔である。S58は二次加工を有し、S59は平刃・凹刃の複刃を持つ。S60は、基部側の上半部を欠損する。



第59図 SD1005 遺構図・出土遺物



第60図 SK1027 遺構図・出土遺物

土坑

土坑27号 (SK1027) (第60図)

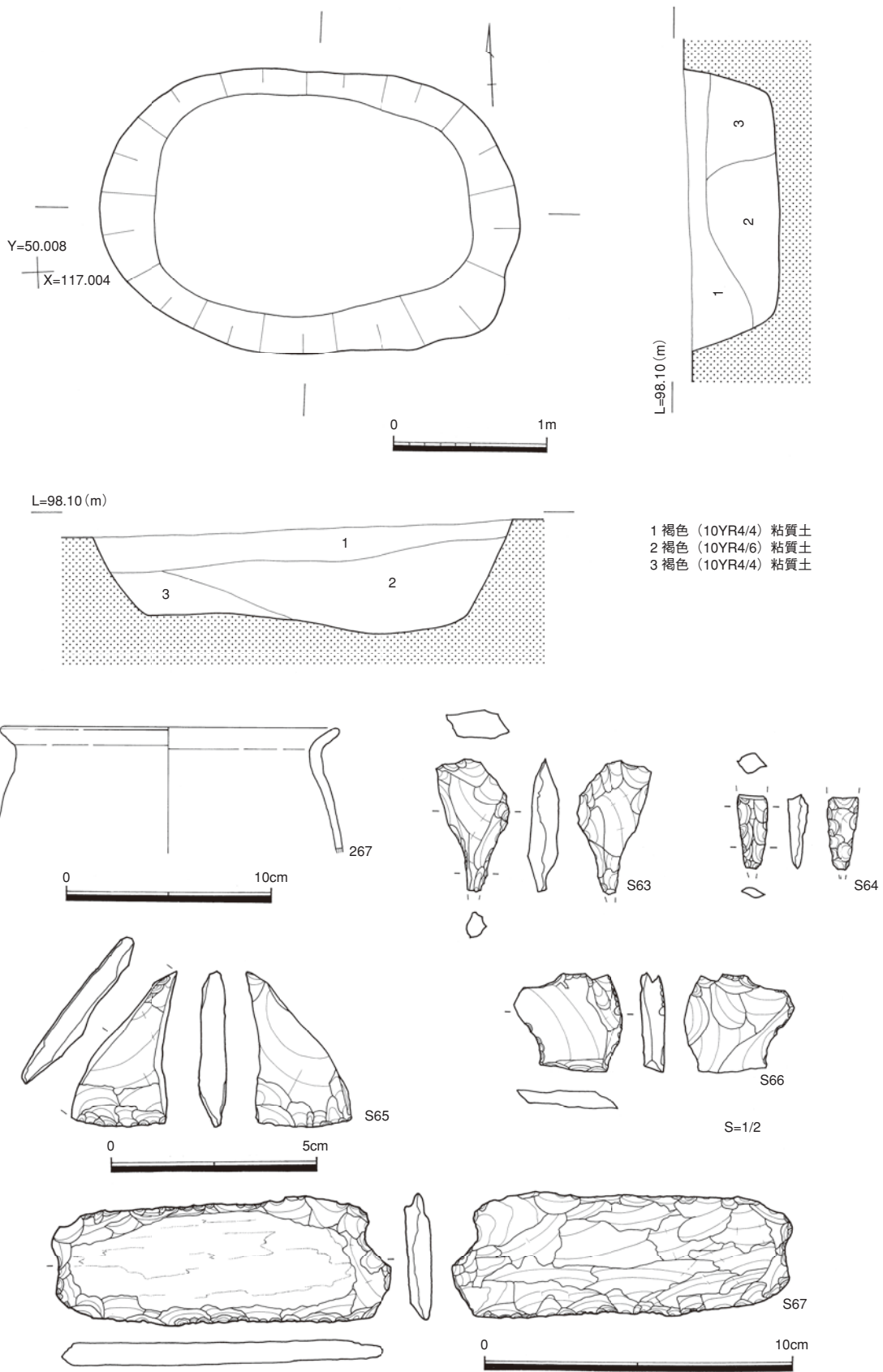
1区 N-52で北側側溝に切られた状態で確認された土坑。調査区北側にさらに拡がる可能性がある。平面形態・底面形態ともに不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、最大長1.98m、最大幅1.46m、最大深度0.35mを測る。覆土は褐色粘質土1層で、炭化物および直径10~20cm大の結晶片岩・砂岩を含む。

遺物は壺形土器(266)、サヌカイト製削器(S61)・剥片(S62)が出土した。266は口縁部を下に向け、倒立した状態で床面直上から出土している。削器は、平刃で単刃を持つ。出土遺物から、弥生時代後期前半に属する。

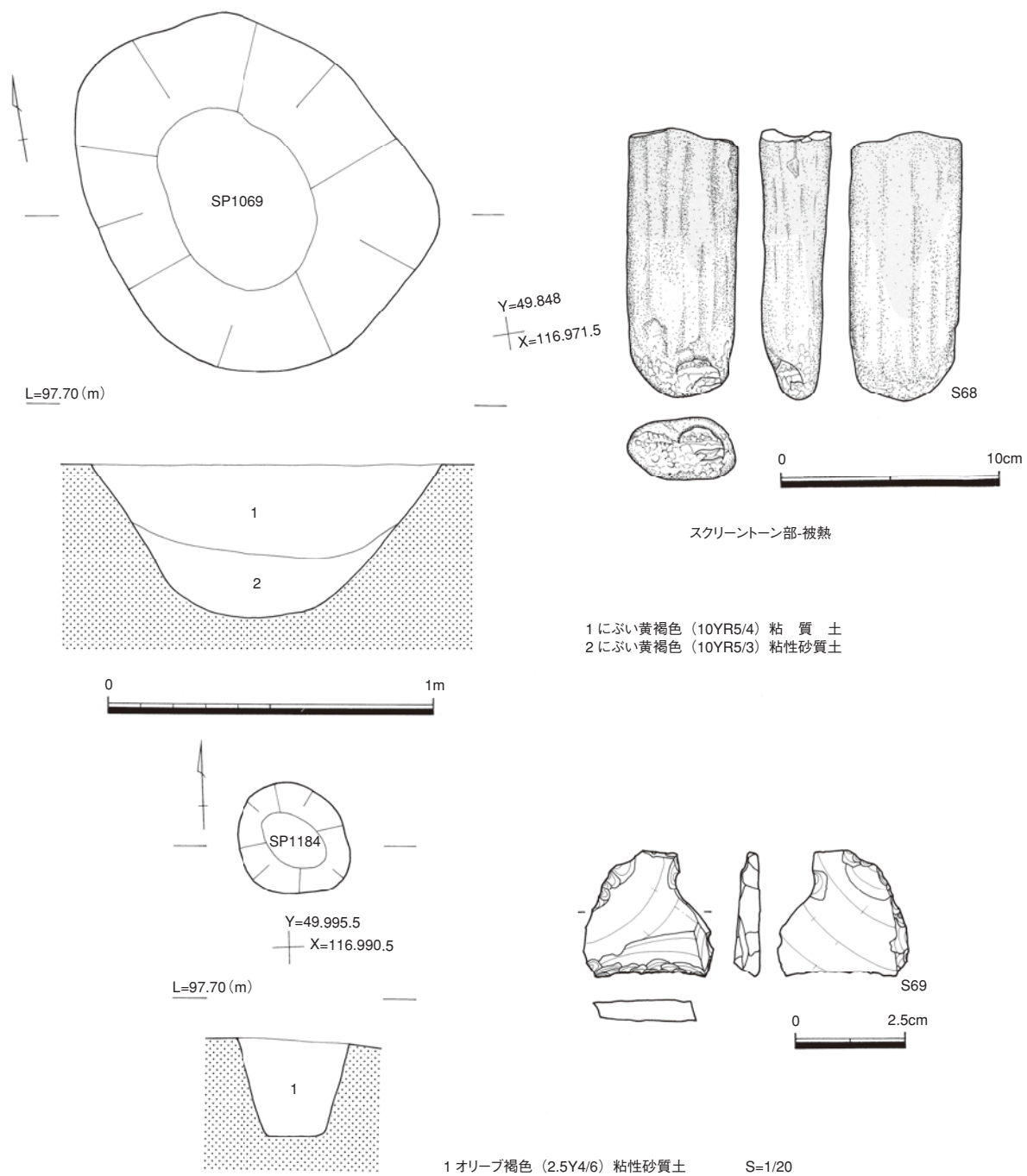
土坑28号 (SK1028) (第61図)

1区 M・N-52・53で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸2.72m、短軸1.84m、最大深度0.70mを測る。覆土は褐色を呈し、含有物から3層に分層できる。1層は、炭化物をやや多く含む。2・3層は小礫を多く含み、2層が直径5cm前後の小礫が主体なのに対し、3層はさらに小さい礫が主体となる。

遺物は、甕形土器(267)・体部片、縄文土器深鉢片、粘土塊、サヌカイト製石錐(S63・S64)・楔形石器(S65)・削器(S66)、砂質片岩製打製石庖丁(S67)が出土した。S67は横長剥片を用い、平刃で複刃をもつ。



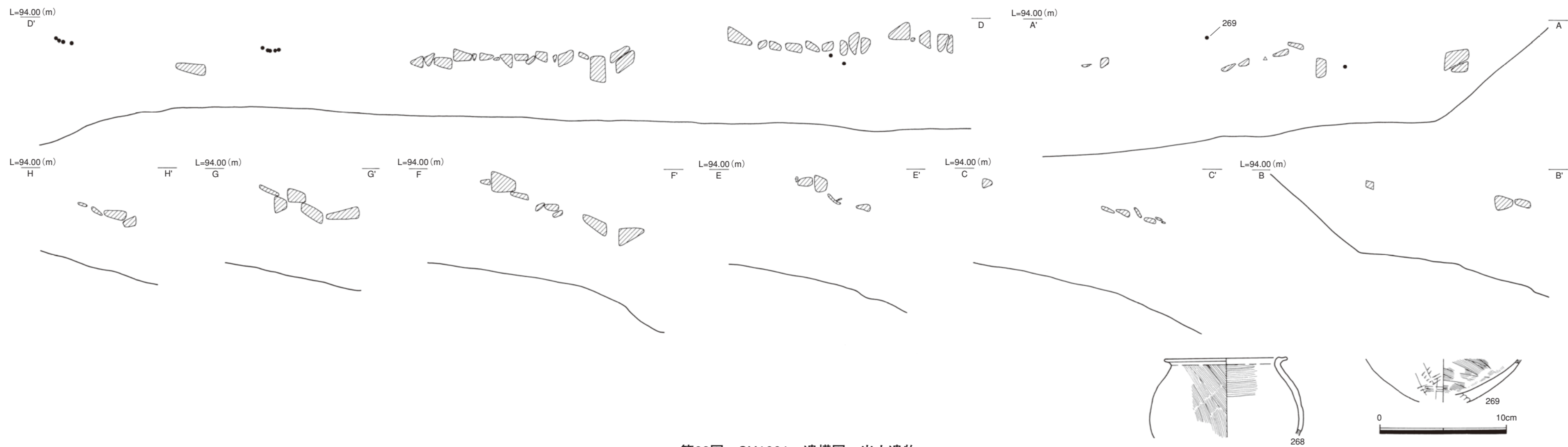
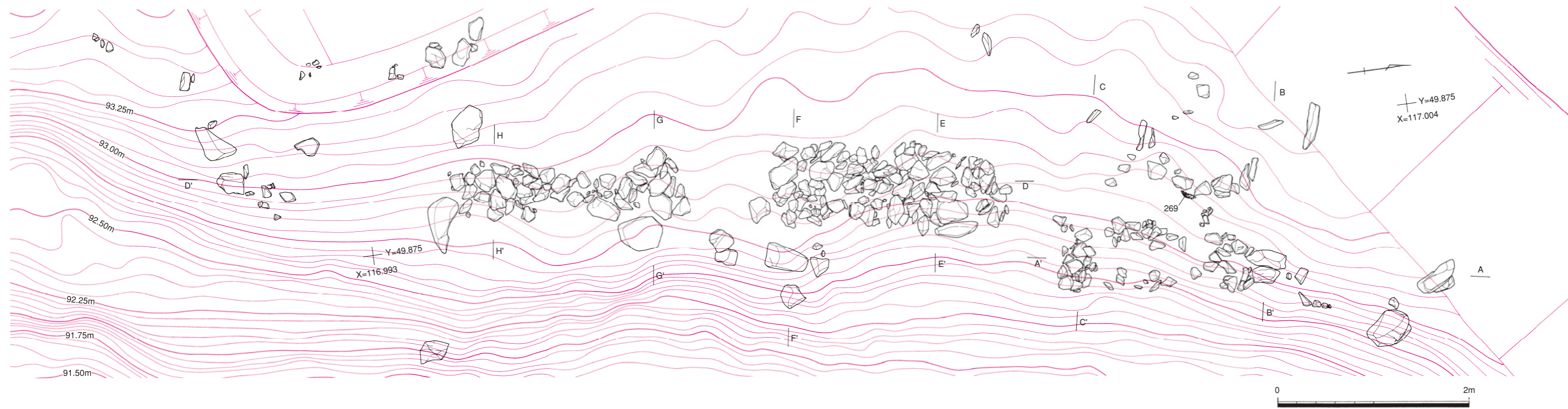
第61図 SK1028 遺構図・出土遺物



第62図 SP1069・1184 遺構図・出土遺物

柱穴内出土遺物

弥生時代の柱穴は、31基確認できた。これらの柱穴は掘立柱建物を構成するには至らず、それらのなかから遺物の出土状況および出土遺物が資料化可能なものについて述べることにする。



第63図 SU1001 遺構図・出土遺物

柱穴

柱穴69号 (SP1069) (第62図)

5区 G-20で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.20m、短軸1.05m、最大深度0.46mを測る。覆土はにぶい黄褐色を呈し、含有物から2層に分層できる。覆土に含まれる礫は、上層の方が大きい。出土遺物は、結晶片岩製敲石(S68)1点のみである。S68は上半部が欠損し、遺存部の上半分に被熱痕跡が認められる。

柱穴184号 (SP1184) (第62図)

1区 K-50で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.32m前後、最大深度0.30mを測る。オリブ褐色粘性砂質土1層で、上層に炭化物を含む。遺物はサヌカイト製楔形石器(S69)のみで、右側縁部の上半分が欠損する。

集石遺構

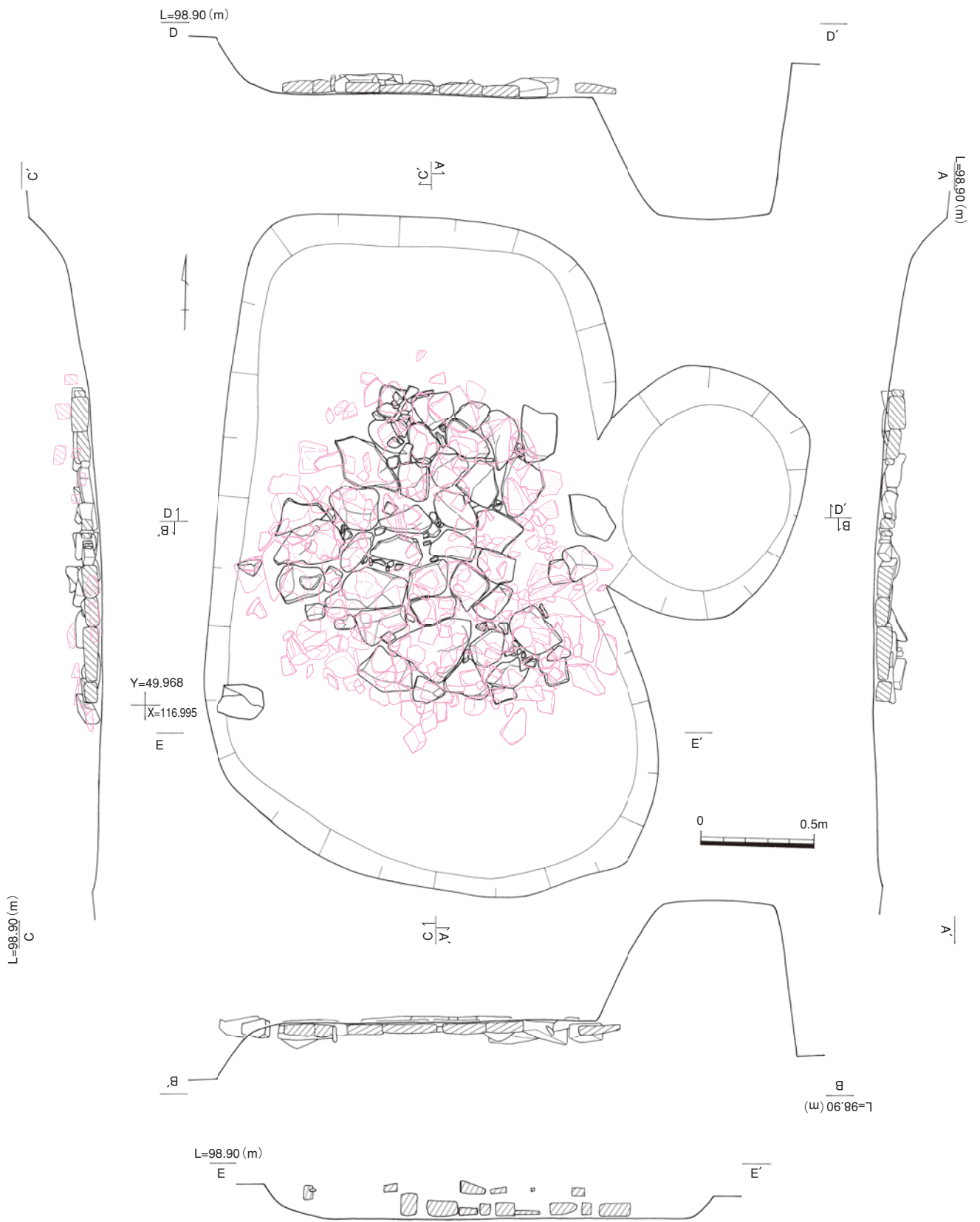
集石遺構1号 (SU1001) (第63図)

5区 K~M-75・76で確認された集石遺構。この集石遺構の明確な平面プランは、検出できなかった。集石は大きく3つのブロックに分かれるものの、これらを合わせた規模は、最大長14.50m、最大幅3.07mを測る。集石は平坦面を形成する緩傾斜地上と急傾斜地との境に拡り、上面の高さはある程度揃う。集石の上面から遺構面とした自然堆積層までの深度は、深いところで1.10m、浅いところで0.47mを測る。

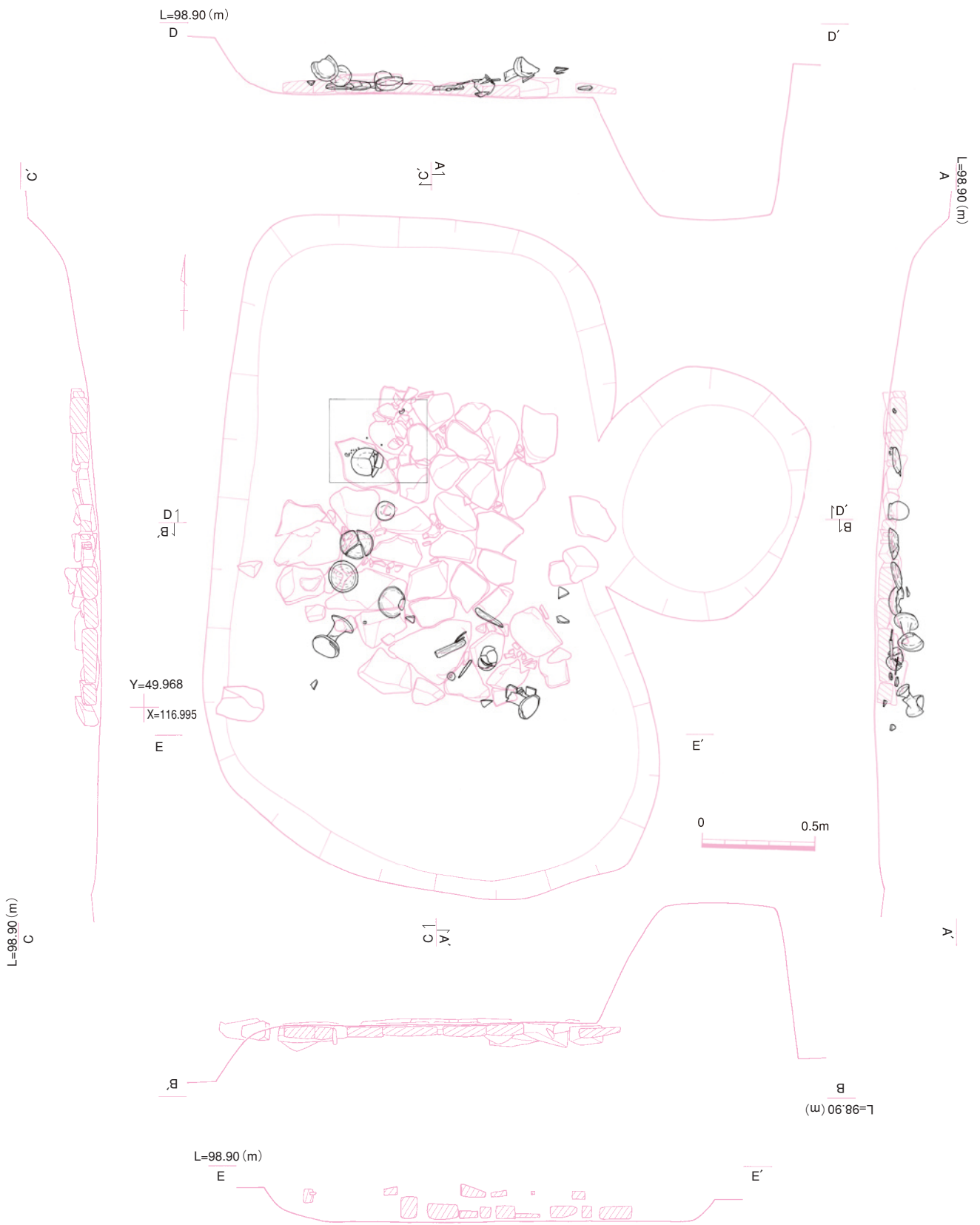
集石を確認した場所は5区の中でも5-4・5区と呼ばれ、包含層中から多量の縄文土器が出土した地点である。また包含層から、縄文土器以外にも弥生土器、土師質土器、須恵質土器、瓦器、瓦質土器、青磁、陶磁器、鉄滓など、時代幅のある遺物が出土している。縄文土器とそれ以外の時代の土器は混入することはなく、集石内に設けられた第6図ベルト①では、2・8・16層から弥生時代以降の遺物が認められた。この土層と集石を対応させると、集石は2層あるいは16層中に位置する。

集石に伴う遺物として、甕形土器、鉢形土器、体部片、晩期の縄文土器が取り上げられている。これらの土器片は、集石の下部あるいは上面と同じレベルで出土している。そのうち図化できたのは、甕(268)とタタキ成形の鉢(269)の2点のみである。

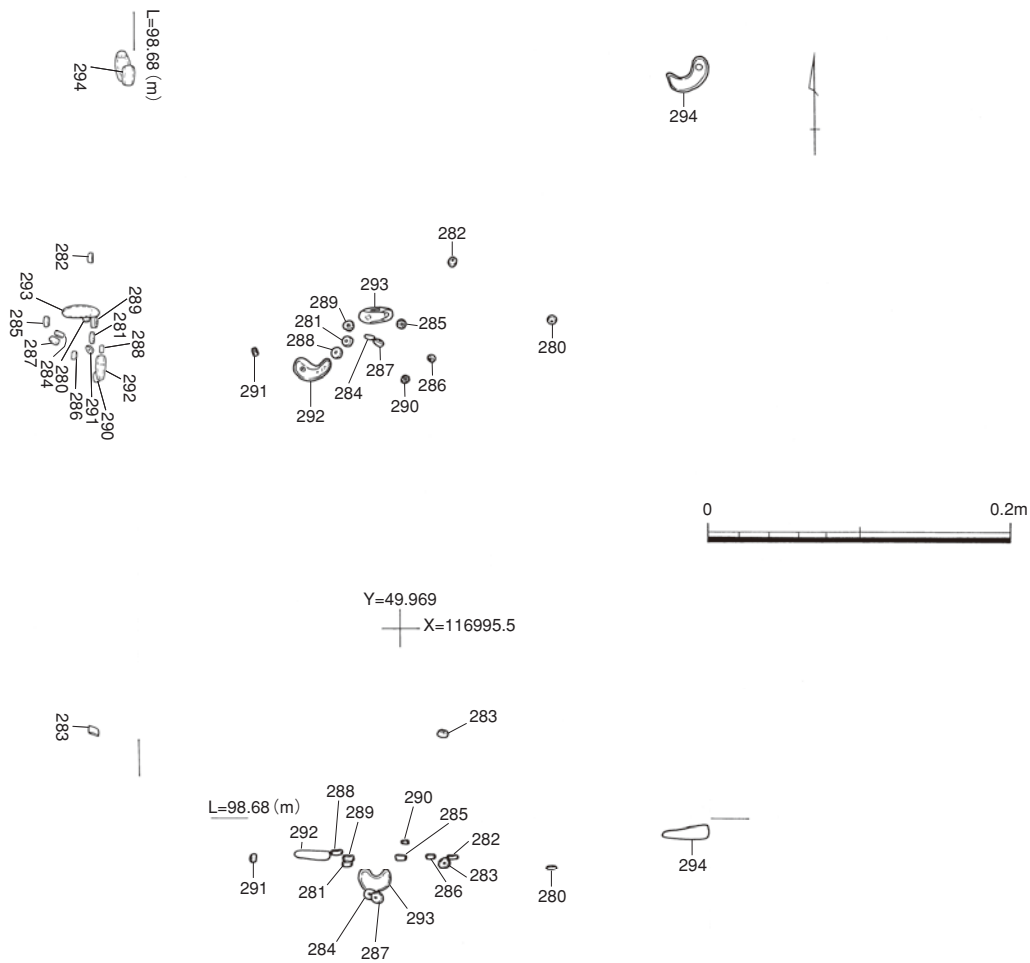
中世遺物も混じる包含層中に集石が築かれていることから、弥生時代の項目で掲載しているが、集石の築造年代は中世以降となる。



第64図 SK1033 遺構図



第65図 SK1033 遺物出土状況図



第66図 SK1033 ガラス玉・勾玉出土状況図

(3) 古墳時代

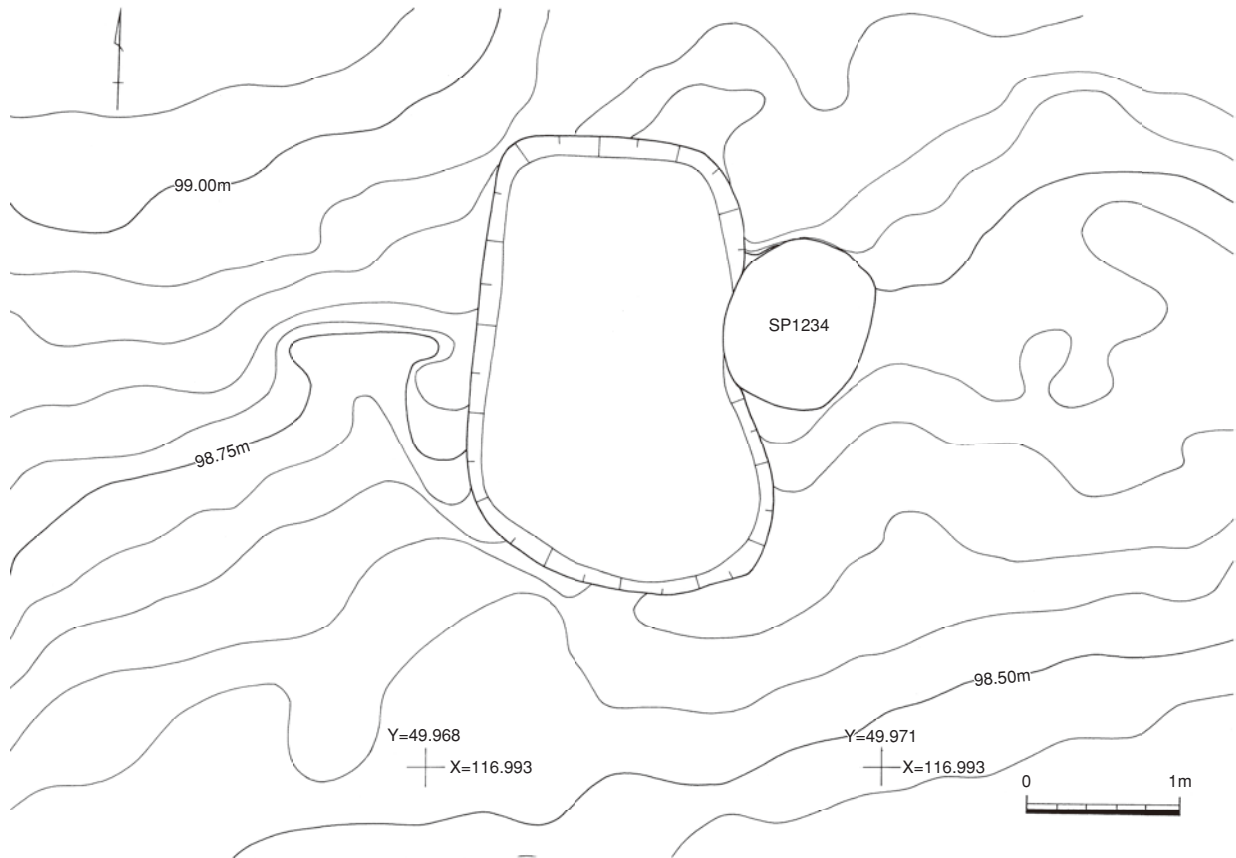
古墳時代の遺構は、主に嫁坂谷川東岸の1区・2区・97-1区で確認した（第11図）。遺構総数は、土坑1基、墳墓2基を数えるのみである。土坑とした遺構も、後述するが墓の可能性が高い。西岸にある5・7区では、遺構は検出できなかった。

土坑

土坑33号（SK1033）（第64～69図）

1区 K・L-44・45でSP1234に切られた状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸3.00m、短軸1.70m、最大深度0.24mを測る。また、土坑の主軸はN-0.5° -Wを測り、ほぼ真北となる。

遺構面精査時に直径5～20cm大の砂岩・結晶片岩からなる集石が確認され、集石除去後、直径10～30cm大の砂岩を用いて面をほぼ平坦に仕上げた礫床の一部が検出された。礫床は土坑のほぼ中央部にみに遺存した状態で、床面上に抜き取り穴などの痕跡の有無は不明である。1区は調査前は宅地であり、



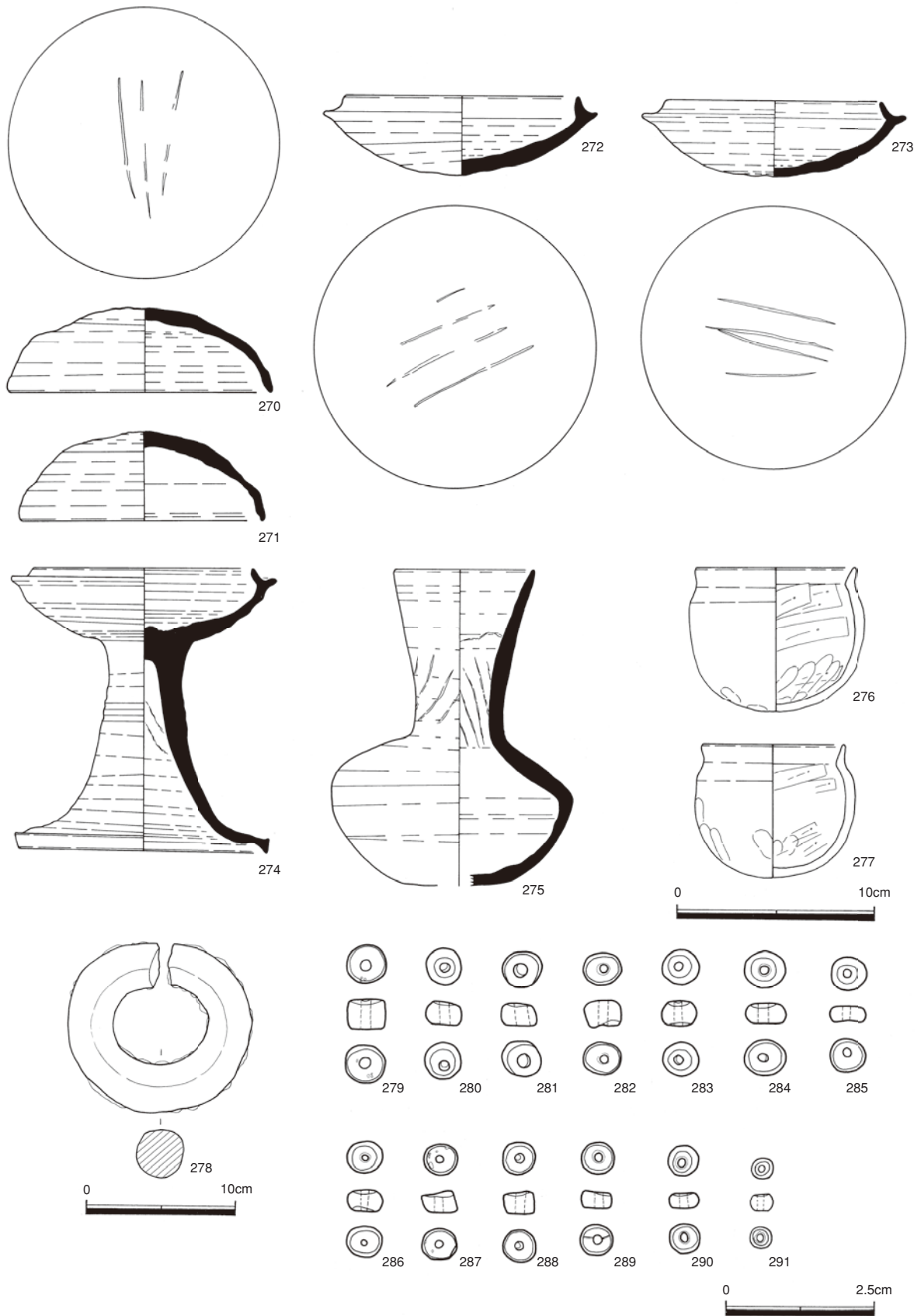
第67図 SK1033 完掘状況図

宅地造成に伴う削平によって壁体および上部構造は消失したと考えられる。土杭の掘り方は北側に立ち上がりを見せ、南側は立ち上がりがあり認められずに床面と遺構面がつながる。以上のことから、石室墓でなく南側に開口する横穴式石室の可能性も考えられる。

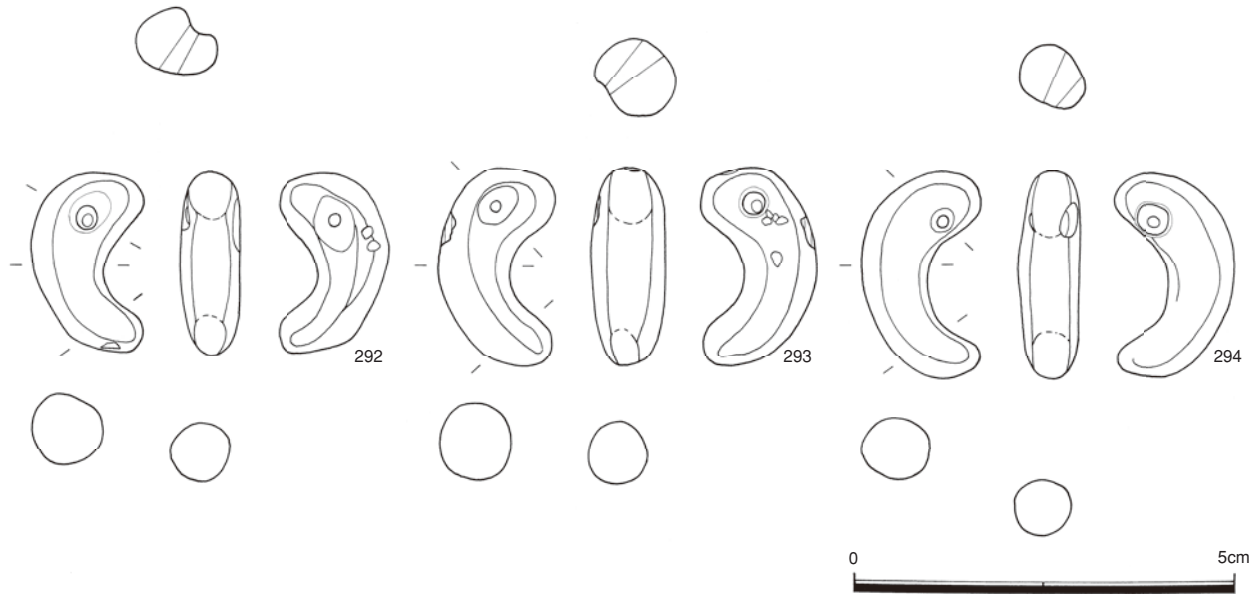
遺物は、須恵器坏蓋2点(270・271)・坏身2点(272・273)・高坏1点(274)・長頸壺1点(275)、土師器2点(276・277)、装飾品は耳環1点(278)、ガラス玉11点(279～281・283～287・289～291)、土玉2点(282・288)、勾玉3点(292～294)が出土した。これらの遺物は、礫床上面を中心に集石と混在した状態で出土した。

270・272・273の3点には外面底部にヘラ記号が、また274では坏部内面に補修痕が認められる。土器は、横倒しあるいは逆向きに置かれていることが多い。

玉類は北壁側の床面上、口縁部を床面に向けた状態の272の下からほぼまとまって出土した(第66図)。283と294の2点は、やや離れたところから出土している。また耳環は、玉類から1m程離れた南側で出土した。ガラス玉のうち291はうすい黄緑を呈するが、残り10点は青を基調とする。280・290の2点には、表面に多くの気泡が認められる。勾玉3点のうち292・293は瑪瑙を、294は水晶を用いる。耳環は1点だがほぼ完形での出土であり、緑青が著しいものの鉄地金銅張で銀装である。



第68図 SK1033 出土遺物 (1)



第69図 SK1033 出土遺物 (2)

墳墓

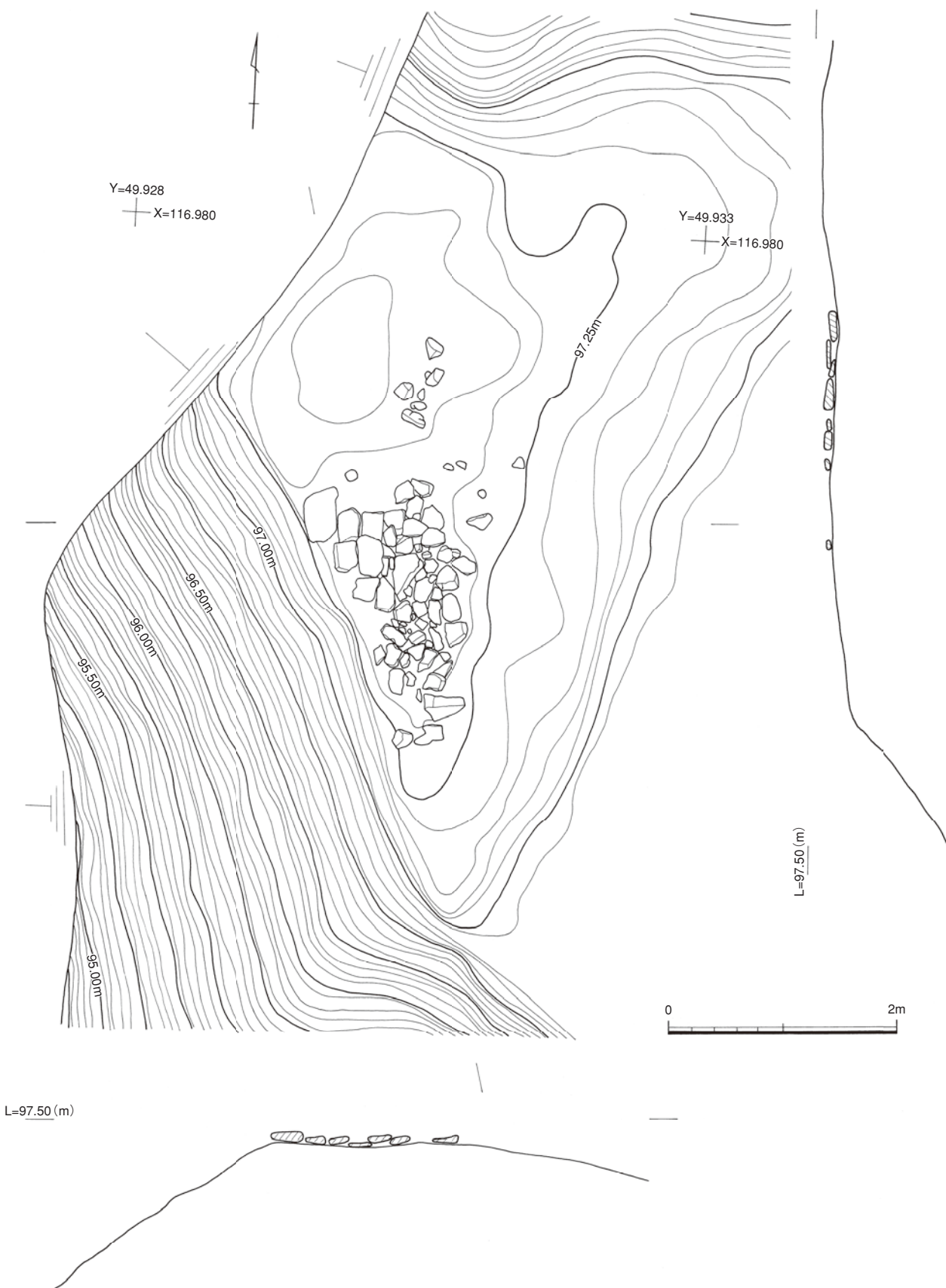
1号墳 (SM1001) (第70～73図)

2区 G～I-36・37で確認された墳墓。調査前には「お塚さん」と呼ばれ、古くから墓としての認識があったものと思われる。田畑に伴う造成により全体的に削平を受けるものの、遺構の西側はより大きく切られる。墳丘も遺存せず、約40cm程の高まりが確認されたにすぎない。

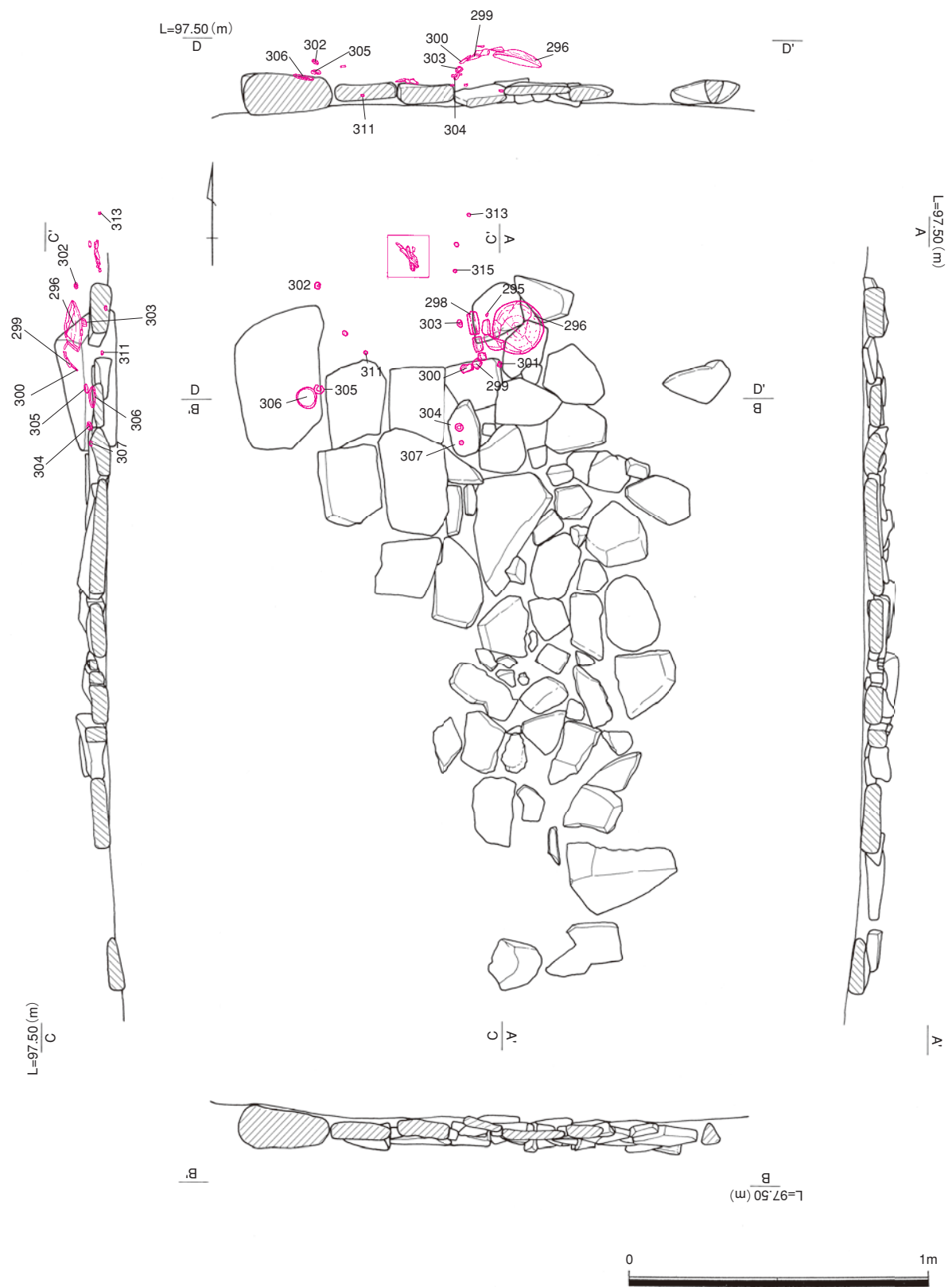
この高まりの頂部で礫床と考えられる集石を確認したが、壁体および上部構造は消失する。墓壙の確認は行われておらず、存在するかどうか不明である。削平により、石室・墓壙の主軸方向を復元することは困難だが、遺構面のエレベーションから集石が認められる部分では若干の窪みが認められ、墓壙の存在を想定できる。南北の断面ラインから、窪む度合いが北側の方が大きく、南側は立ち上がりを見せずに遺構面とつながることから、南側に石室入り口が設けられた可能性がある。集石は礫床の残存部の可能性があり、南側に開口する横穴式石室を想定できる。礫床は直径10～30cm大の砂岩を用い、面をほぼ平坦に仕上げる。

遺物は礫床上面およびそれ以外から出土し、その出土状況から遺物の多くが原位置を保っていないものと思われる。また、骨片が礫床外から鉄片と一緒に出土した。(第72図)

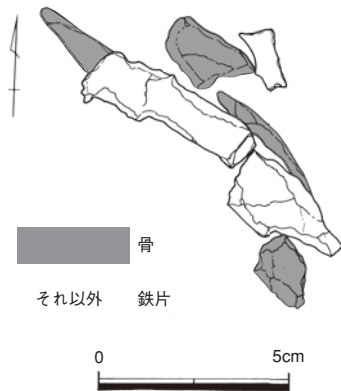
出土遺物のうち、須恵器坏蓋(295)・坏身(296)各1点、刀子(297)・直刀(298～301)各1点、装飾品は耳環4点(302～305)、銅釦1点(306)、ガラス玉7点(309～315)、白玉2点(307・308)が図化できた。296は底部を上に向け、礫床上面から浮いた状態で出土し、外面底部にヘラ記号が認められる。297は刀身が欠損するものの、鞘の部分に鹿角が遺存する。298～301は直刀の破片で、遺存状態に差はあるものの同一個体である。刃先は欠損する。299には、表面に平織りの布が遺存しており、直刀は布に巻かれた状態で副葬されたと思われる。耳環は4点ともに鉄地金銅張で、302・305は張った痕が明瞭に認められる銀装である。



第70图 SM1001 周边地形图



第71図 SM1001 遺物出土状況図



第72図 SM1001
骨片出土状況拡大図

北側を奥壁と想定した場合、玉類は奥壁寄りに出土する可能性がある。ガラス玉は全般的に青を基調とするが、309・314・315の3点は緑色が強い。314は、鑄造時の失敗の可能性があるクラックが認められる。

2号墳 (SM1002) (第74～77図)

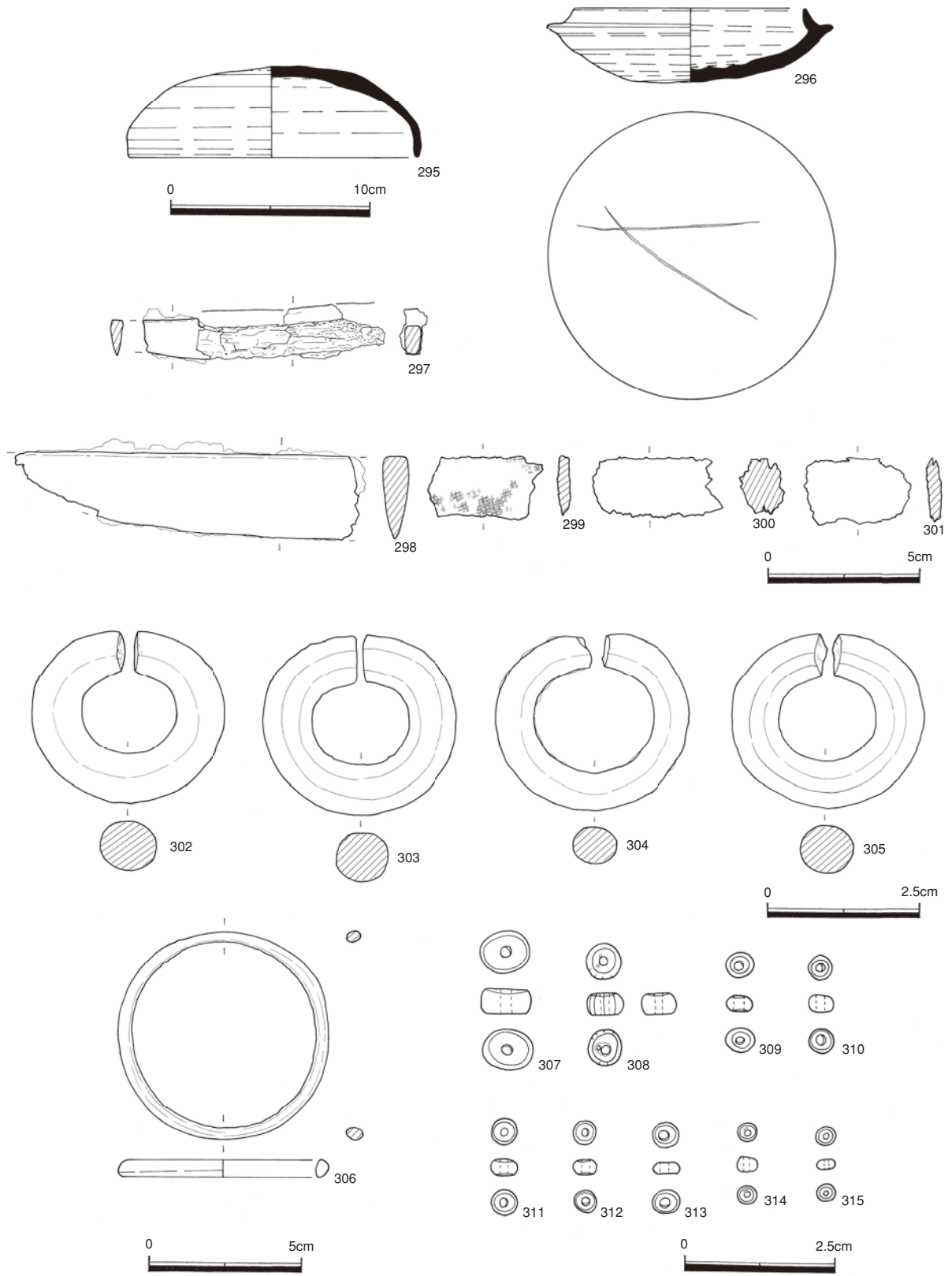
97-1区 F～H-55・56で確認された墳墓。田畑に伴う造成により大きく削平を受け、墳丘は遺存しない。遺構の平面形態・底面形態が不整な長方形で、南辺の一部に突出部が認められる。断面形態は、逆台形を呈し、突出部を含めた長軸は8.33m、最大幅4.27m、突出部の幅2.14m、主軸はN-16°-Eを測る。覆土除去後、床面上に北側のみ隅丸の長方形を呈した土杭と、その南側に柱穴3基を検出した。遺構の最大深度は0.10mを測るが、この土杭を含めた深度は0.58mとなる。

土坑の平面形態・底面形態は北側のみ隅丸の不整な長方形、断面形態は舟底形を呈し、長軸4.80m、短軸2.70m、最大深度0.40mを測る。柱穴3基は土杭の南側、突出部との境に位置する。これらの柱穴と2号墳との切り合い関係は不明で、別記号を振っているものの抜き取り穴の可能性もある。

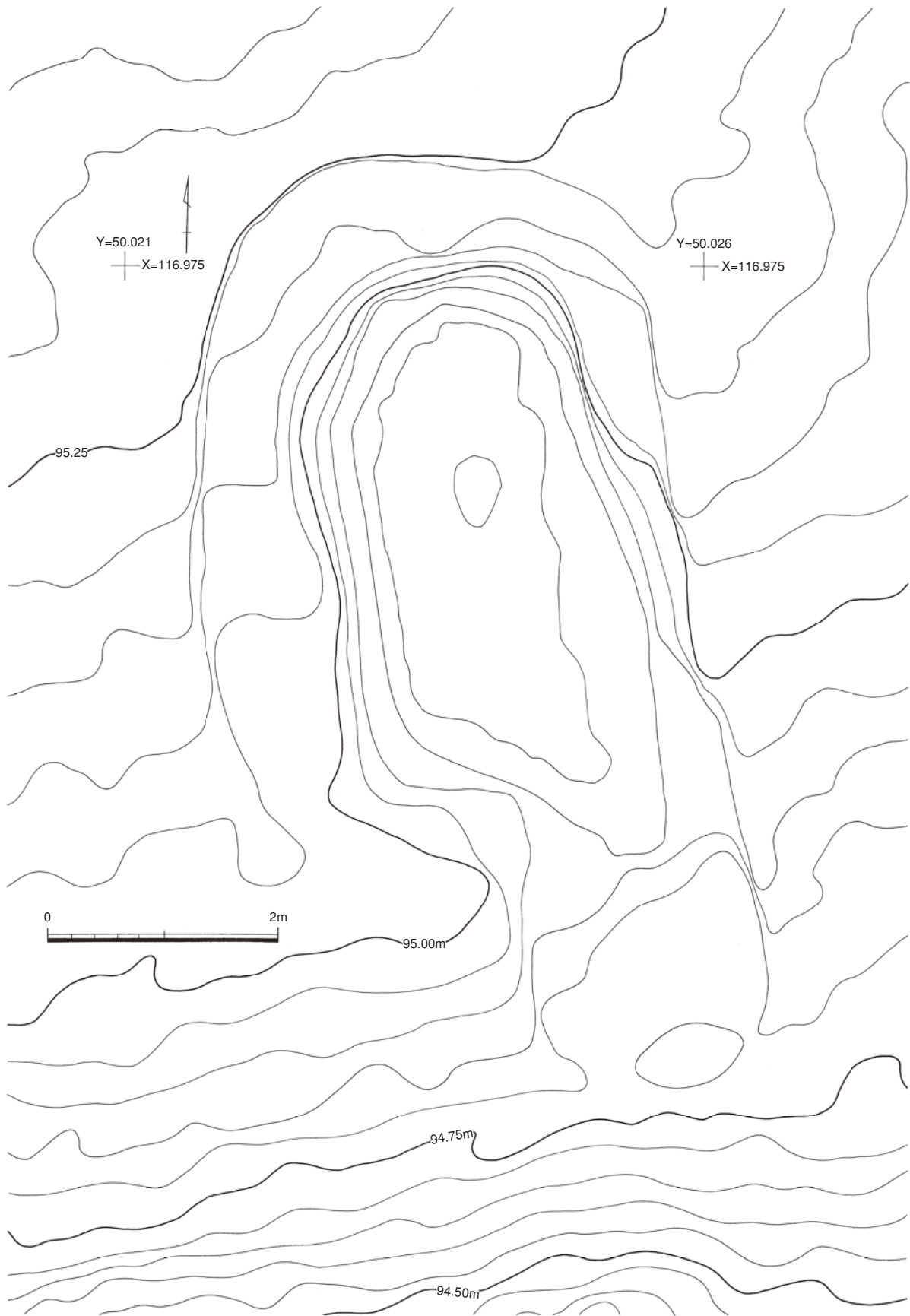
覆土は3層に分層でき、1層は褐色粘性砂質土、2層はにぶい黄褐色粘性砂質土、3層は暗褐色砂質土である。2・3層は、土杭の覆土である。1・2層を中心に直径10～40cm大の礫が多量に含まれ、主に土杭上を中心にその出土が認められる。平坦面を形成するような規則性は認められない。

この集石は直径10～20cm弱の小礫を中心とし、小礫の上に直径40cm前後の礫が散見する。小礫は礫床と思われ、直径40cm前後の礫は壁体の一部か。壁体および上部構造は、消失により不明である。遺構の平面形態から、南側に開口する横穴式石室の可能性が考えられる。

遺物は須恵器坏蓋2点(316・317)・横瓶1点(319)、土師器坏1点(318)が、出土した。316が礫に混じって1層から出土しているものの、他の3点の出土位置は不明である。319は、外面上部と頸部内に自然釉がかかる。



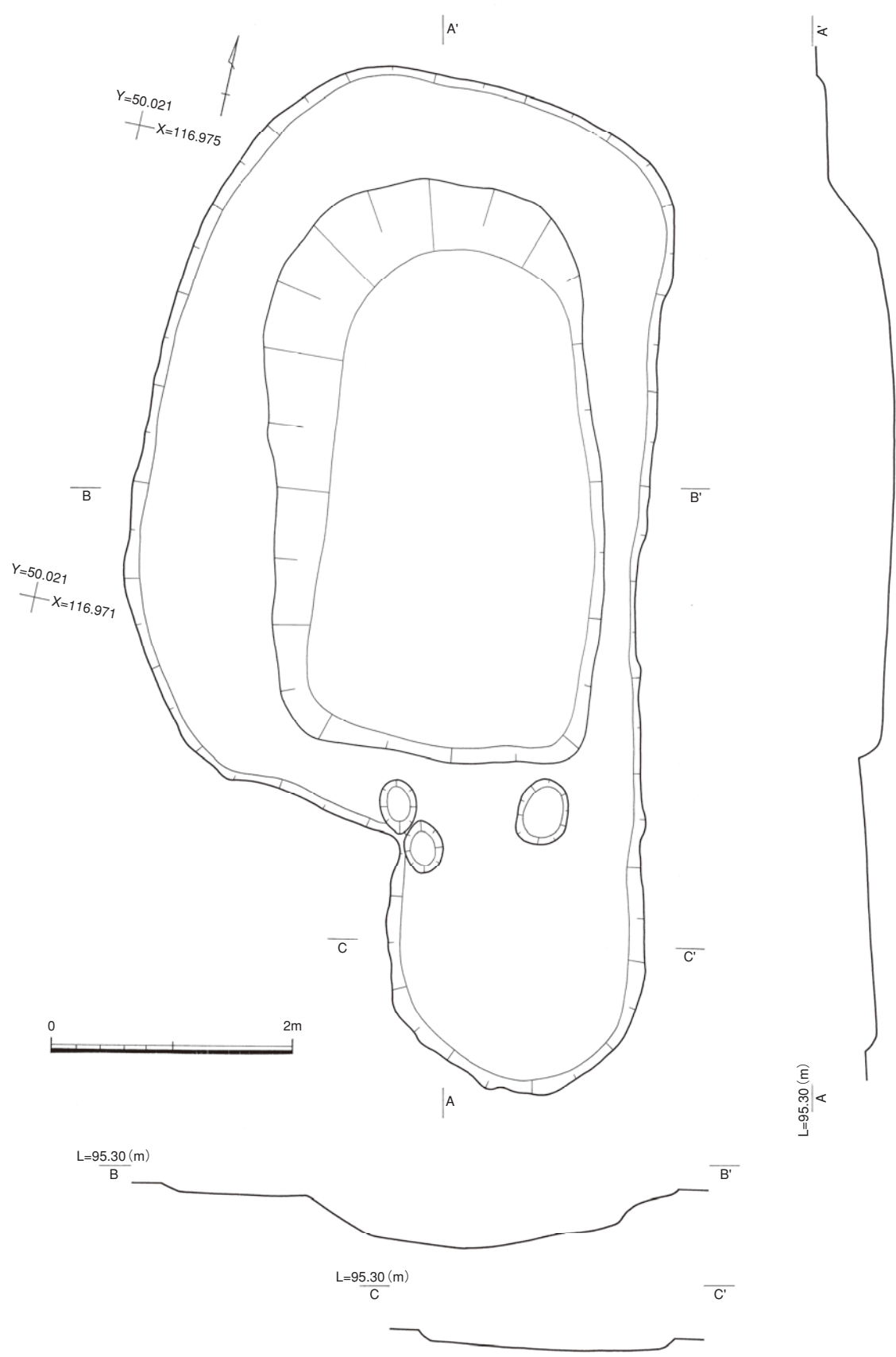
第73図 SM1001 出土遺物



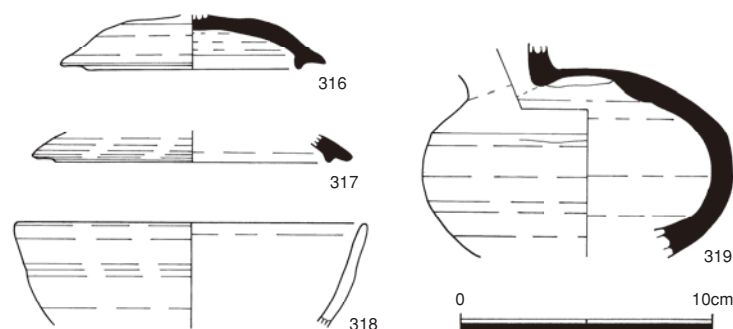
第74图 SM1002 周边地形图



第75図 SM1002 遺構図 (1)



第76図 SM1002 遺構図 (2)



第77図 SM1002 出土遺物

(4) 鎌倉・室町時代

鎌倉・室町時代の遺構は、調査区全面に展開する。検出した遺構のうち、出土遺物から所属時期をこの時期に想定できる遺構総数は、礎石建物1棟、溝10条(第二遺構面では2条)、土坑83基(第二遺構面では18基)、SJ1基、柱穴276基(第二遺構面では55基)、炉1基(第二遺構面では11基)、不明遺構15基(第二遺構面では11基)を数える。またSGの所属時期は、出土遺物から江戸時代に比定できるのだが、五輪塔が出土しているために掲載することにした。また10-2区と97-1区では遺構面数が2面存在し、出土遺物から大きな時期差は認められなかった。この第二遺構面と他の調査区の遺構面とした自然堆積層が、同一面となる。他の調査区では時期の異なる遺構が同一遺構面上に拡がることから、第二遺構面の扱いは、第一遺構面とは分けるものの遺構の所属時期によって掲載することにした。

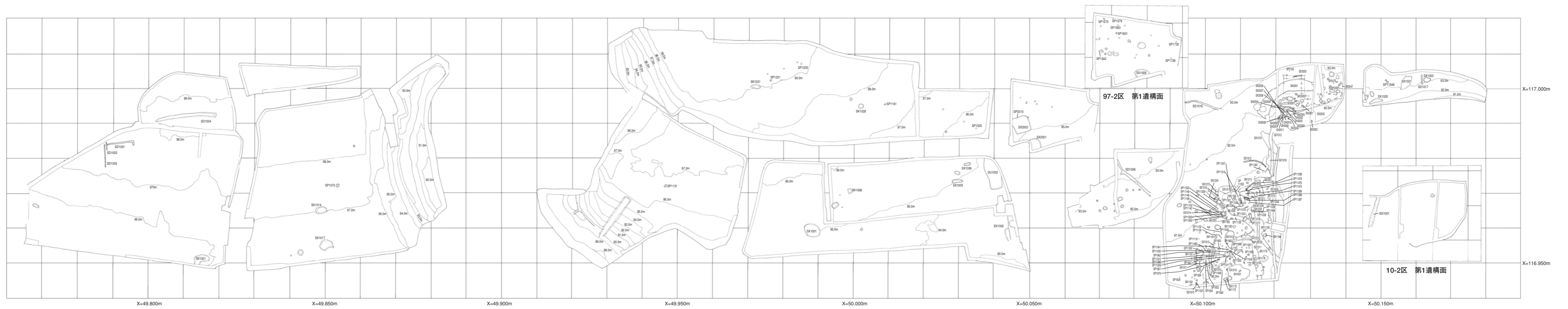
礎石建物

礎石建物1号 (SA2001) (第79図)

10-2区 L・M-75・76で確認された礎石建物。遺存状態は良好とはいえないが、直径20～60cm弱の13個の礎石を確認した。これらの礎石は、東側の南北列、北側の東西列が比較的遺存状態が良好である。この礎石を据え置いたと考えられる土坑や貼床などの存在の有無は、不明である。礎石の検出状況から、この建物はSD2003・SX2004の埋没後に建てられたと推定できる。

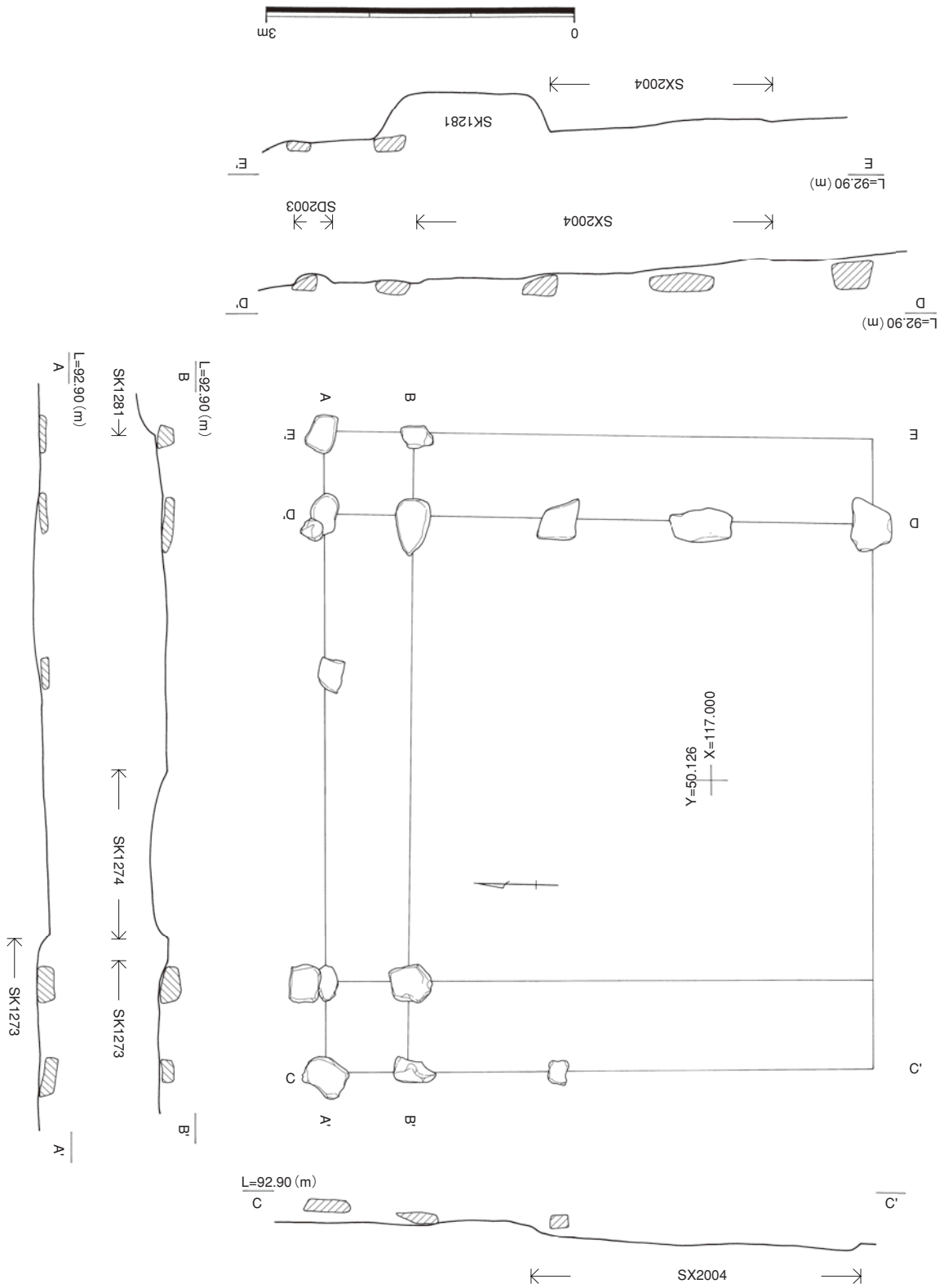
礎石の残存状況から、建物の規模は梁間3間(4.5m)、桁行3間(4.5m)、床面積20.25㎡を測り、平面形態は正方形を呈するものと思われる。柱間寸法は梁間・桁行共に1.5mを測り、ほぼ同じである。また庇は、南側を除いた三方向に認められるものの、四方向に設けられていた可能性も考えられる。庇は建物と比較して遺存状態は悪いものの、東西側で梁間4間・桁行1間、北側では梁間1間・桁行5間と推定でき、柱間寸法は0.8～0.9mを測る。底部を併せた建物の規模は、梁間4間(5.34m)、桁行5間(6.24m)、床面積33.32㎡を測る。棟方向はN-1°Eとなり、ほぼ北に主軸をとる。

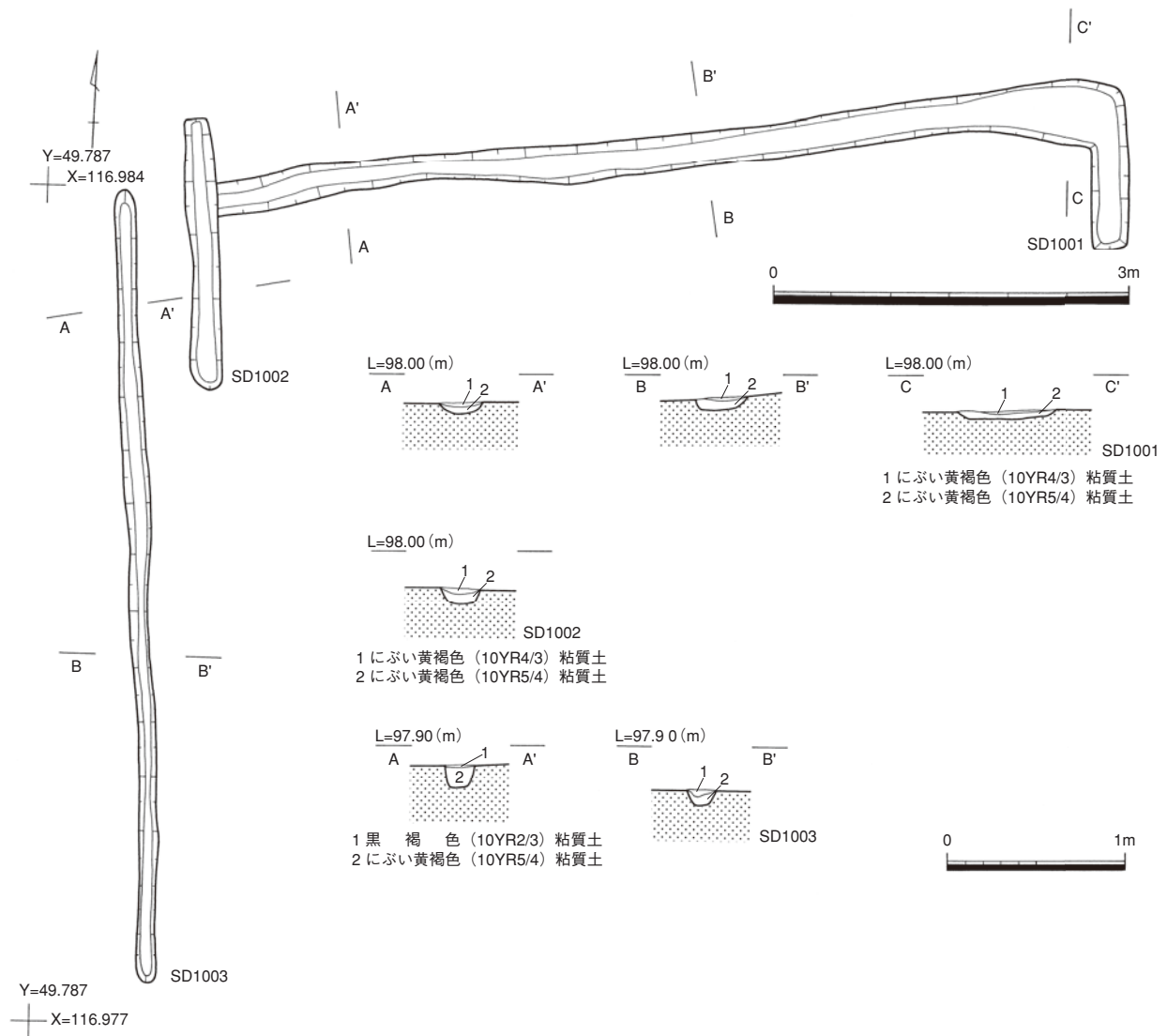
出土遺物は確認できなかったが、周辺の遺構との切り合い関係、および西側に位置するSG1001の存在から、第二遺構面上に存在するものの江戸時代の可能性も考えられる。また建物の形態から、堂の可能性を考えることができる。



第78図 遺構配置図（中世）

第79図 SA2001 遺構図





第80図 SD1001～1003 遺構図

溝

溝は10-3区を中心に検出されており、溝の遺存状態および切り合い関係がより把握しやすいように、調査区の全体図を用意した（第83図）。

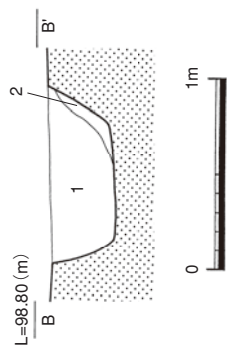
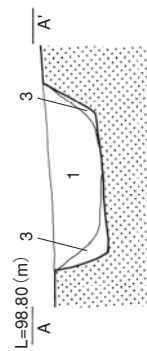
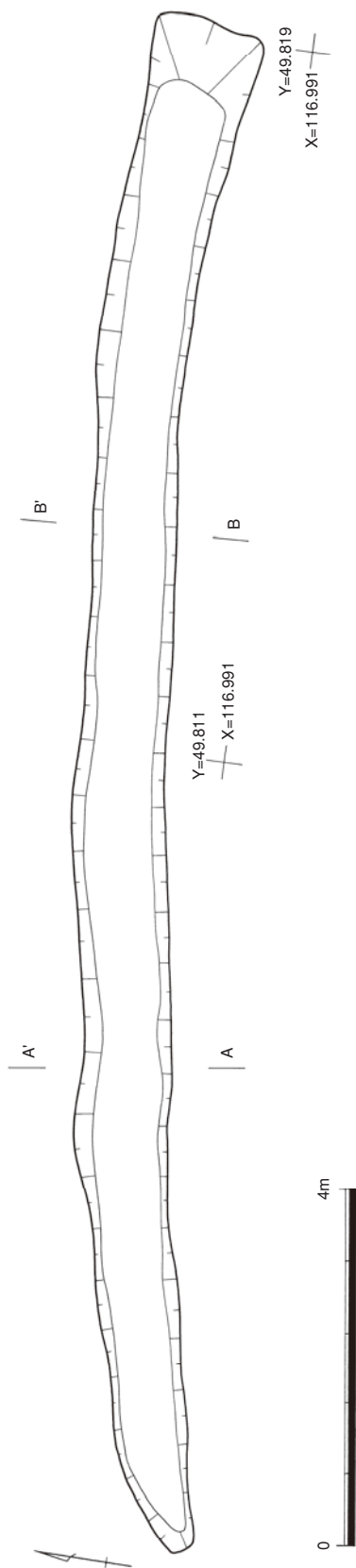
溝1号（SD1001）（第80図）

7区 I-8～10でSD1002に切られた状態で確認された溝。溝は東側で90度南側に折れ、L字形を呈する。全長9.25m、最大幅0.56m、最大深0.08mを測り、断面形態は逆台形を呈する。覆土はにぶい黄褐色を呈し、含有物から2層に分層できる。2層は黄褐色土ブロックを混入し、小礫を多量に含む。

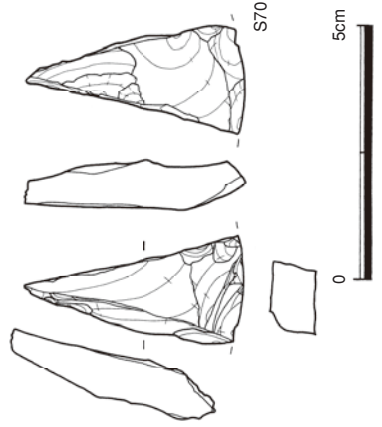
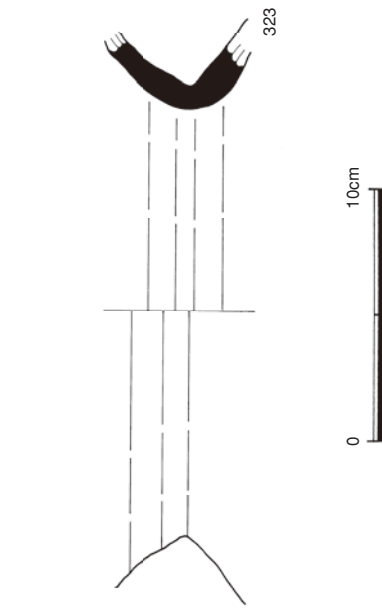
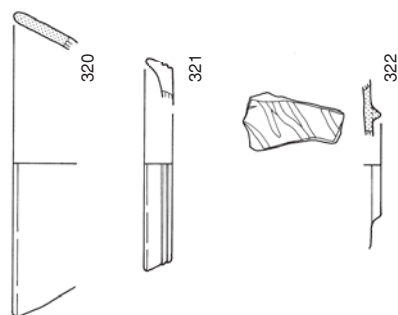
出土遺物は、認められなかった。

溝2号（SD1002）（第80図）

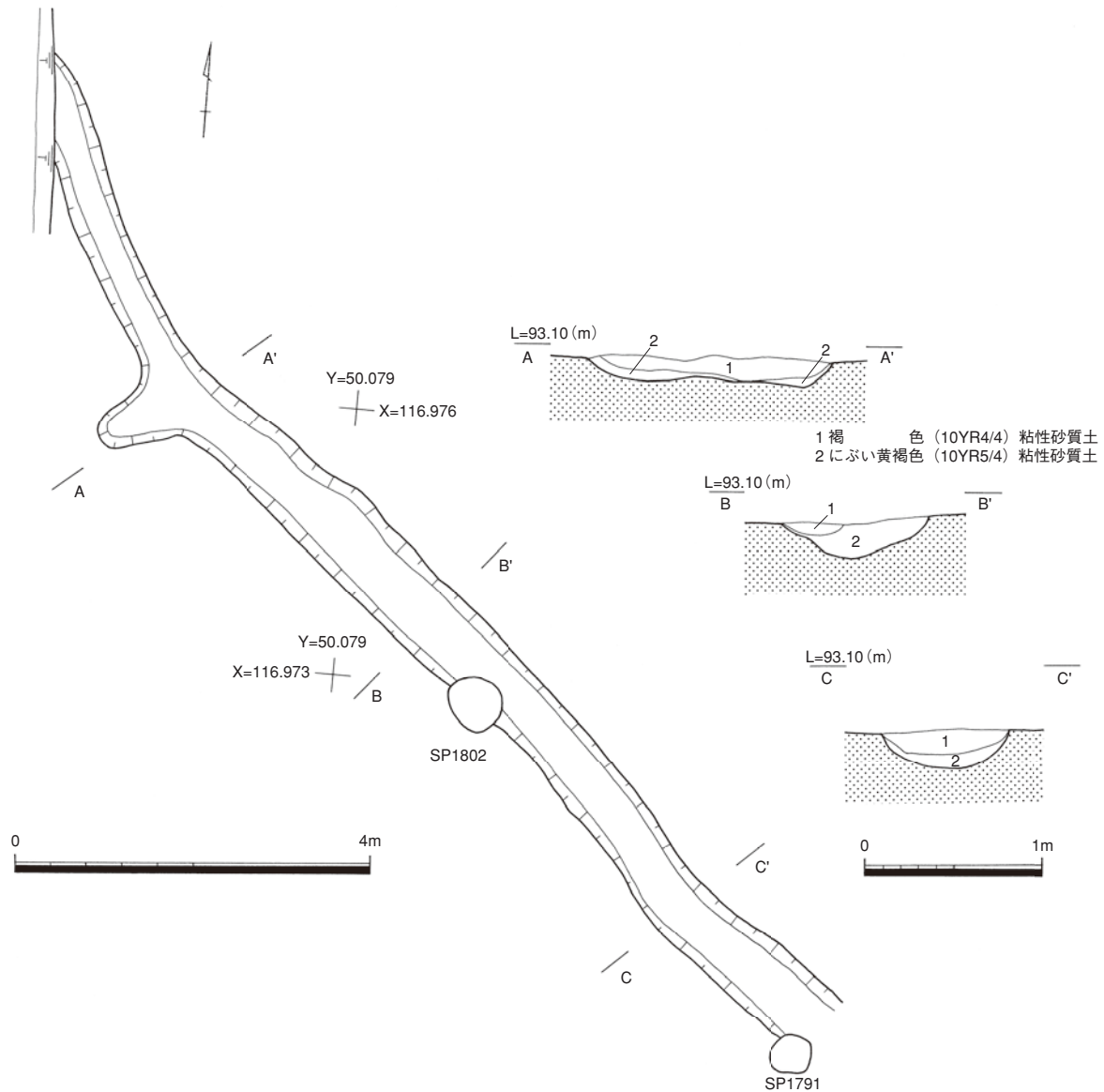
7区 I-8で確認された溝。SD1001の南に折れ曲がる部分と、0.5m西側に位置するSD1003とほぼ平行し



- 1 暗褐色 (10YR3/4) 粘質土
- 2 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土
- 3 褐色 (10YR4/6) 粘質土



第81図 SD1004 遺構図・出土遺物



第82図 SD1006 遺構図

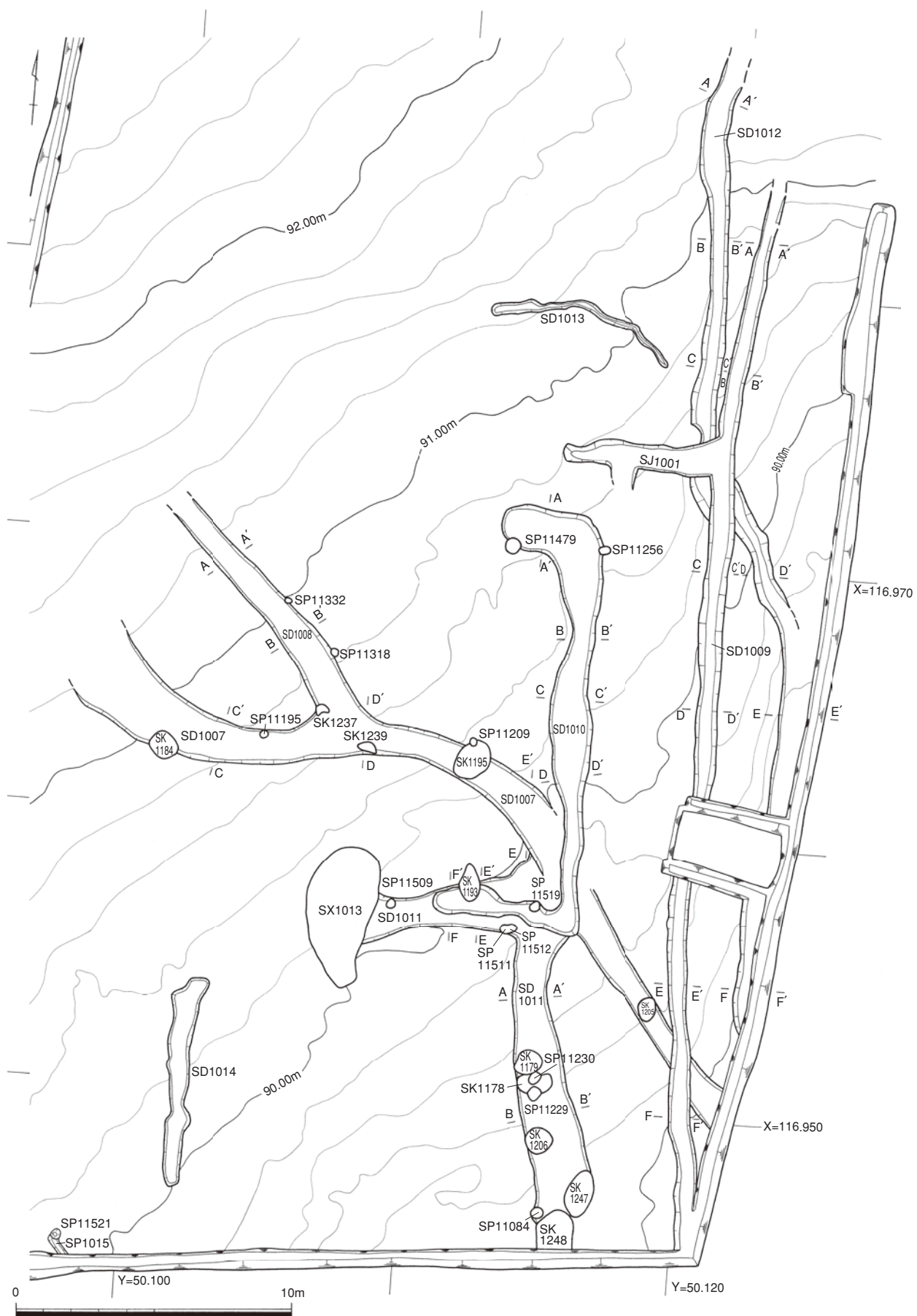
て走る。全長2.28m、最大幅0.27m、最大深0.10mを測り、断面形態は逆台形を呈する。覆土はにぶい黄褐色を呈し、含有物から2層に分層できる。2層は黄褐色土ブロックを混入し、小礫を多量に含む。

出土遺物は、認められなかった。

溝3号 (SD1003) (第80図)

7区 H・I-8で確認された溝。SD1002に対して、ほぼ平行に走る。全長6.68m、最大幅0.22m、最大深度0.14mを測り、断面形態は逆台形を呈する。覆土は2層に分層でき、上層は黒褐色粘質土、下層はにぶい黄褐色粘質土で黄褐色土ブロックを混入し、小礫を大量に含む。

出土遺物は、認められなかった。



第83図 10-3区 溝状遺構配置図

溝4号 (SD1004) (第81図)

7区 K-11～14で確認された溝。全長17.20m、最大幅1.06m、最大深度0.34mを測り、断面形態は逆台形を呈する。覆土は3層に分層でき、1層は暗褐色粘質土で褐色土ブロックを混入し、小礫を多量に含む。2層は黄褐色粘質土で、自然堆積層の可能性が高い。3層は褐色粘質土で、小礫を含む。

遺物は土師質土器椀・杯・小皿・鍋、黒色土器椀、須恵質土器椀・壺、瓦器椀、鉄釘、縄文土器片、弥生土器甕、須恵器、サヌカイト製楔形石器が出土した。そのうち図化できたのは、底部回転ヘラ切りと思われる土師質土器小皿(321)、瓦器椀(320・322)、須恵器甕(323)・体部片(324・325)、楔形石器(S70)である。

溝6号 (SD1006) (第82図)

97-2区 F～H-66・67でSP1791・1802に切られた状態で確認された溝。溝はさらに調査区北側に延び、また検出状況から、隣接する10-3区のSD1007と同一遺構の可能性もある。調査区内で全長13.40m、最大幅0.92m、最大深度0.22mを測り、断面形態は舟底形を呈する。覆土は2層に分層でき、上層は褐色粘性砂質土で小礫を多く含む。下層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、直径15cm前後の礫を多く含み、上層よりしまりが強い。

出土遺物は、認められなかった。

溝7・8号 (SD1007・1008) (第84図)

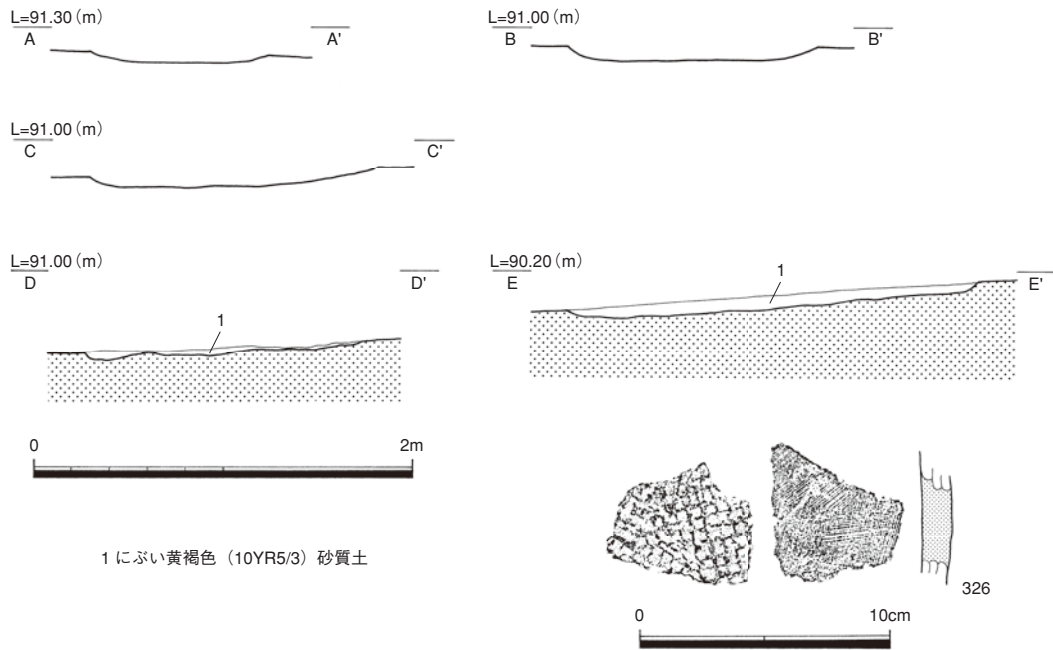
10-3区 E～G-70～72でSK4基・SD1010・SP3基に切られた状態で確認された溝。SD1007・1008の前後関係は不明で、検出状況からSD1007がさらに調査区南側に延びるものと推測できる。また2条ともにさらに北西方向に延びていたものと思われ、SD1007と隣接する97-2区のSD1006が同一遺構の可能性もある。調査区内でSD1007は全長30.0m、最大幅2.20m、最大深度0.10mを測り、断面形態は逆台形を呈する。SD1008は全長10.0m、最大幅1.40m、最大深度0.04mを測り、断面形態は逆台形を呈する。SD1008の覆土は不明だが、SD1007はにぶい黄褐色粘性砂質土1層で、小礫を多量に含む。

遺物は一括にあげており、どちらに属するか不明だが、土師質土器杯・羽釜、須恵質土器椀、瓦質土器甕、溶解炉壁が出土し、そのなかで図化できたのは瓦質土器甕の体部片(326)である。

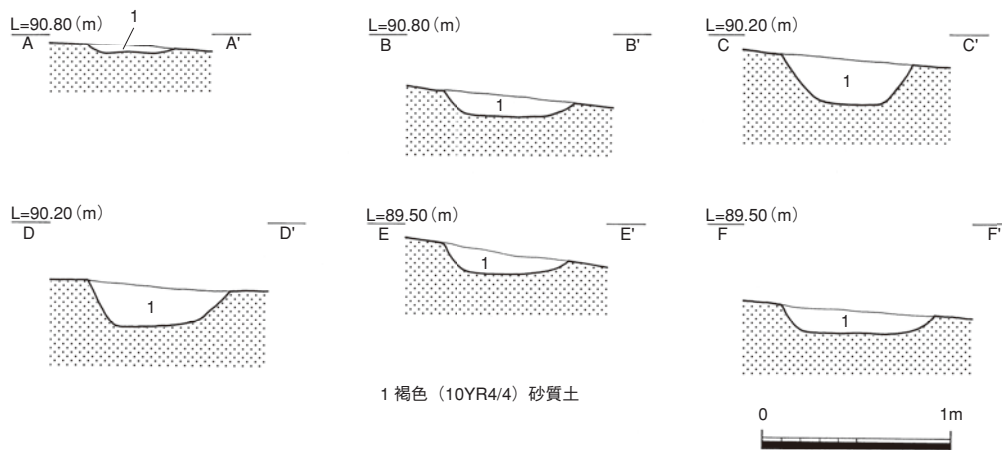
溝9号 (SD1009) (第85図)

10-3区 B～I-75で確認された溝。溝は北側で途切れるものの、調査区外南側にさらに延びる。調査区内で全長38.8m、最大幅0.90m、最大深度0.23mを測り、断面形態は舟底形を呈する。覆土は、褐色砂質土1層である。

遺物は土師質土器杯、須恵質土器片、備前産と思われる陶器甕、溶解炉壁、羽口、鉄滓、鉄片、弥生土器片が出土したものの、図化できるものはなかった。



第84図 SD1007・1008 断面図・出土遺物

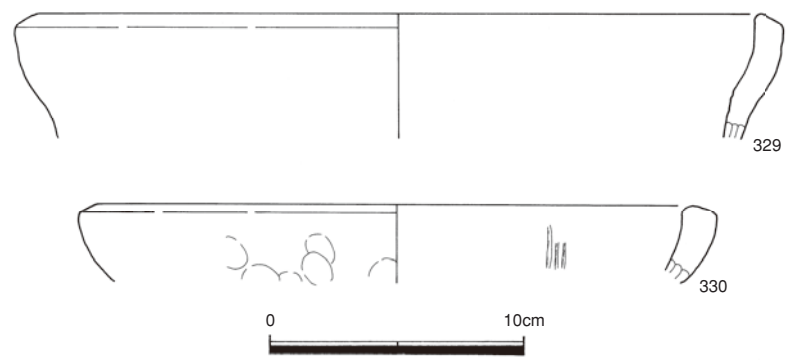
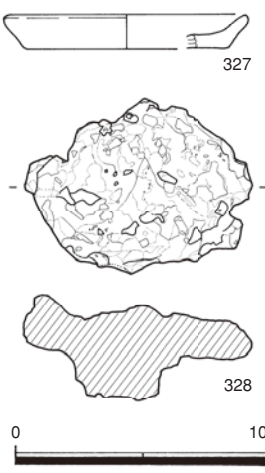
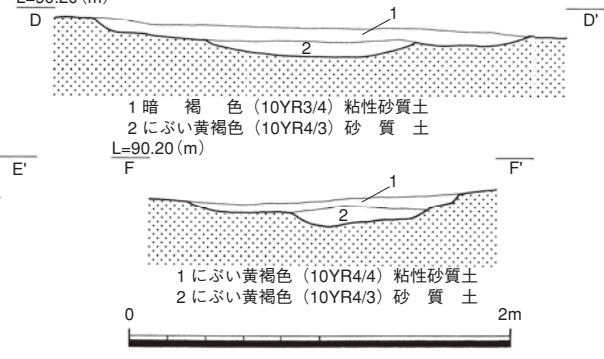
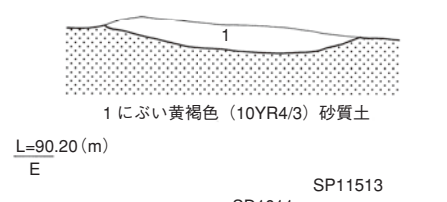
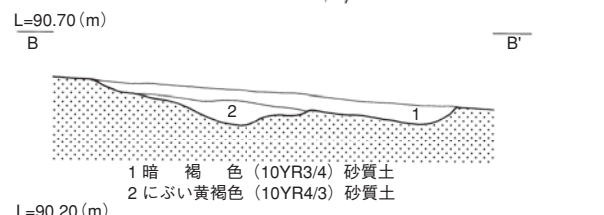
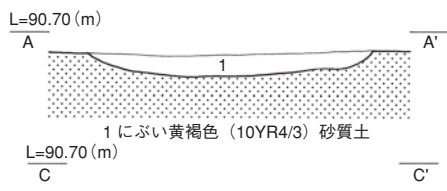
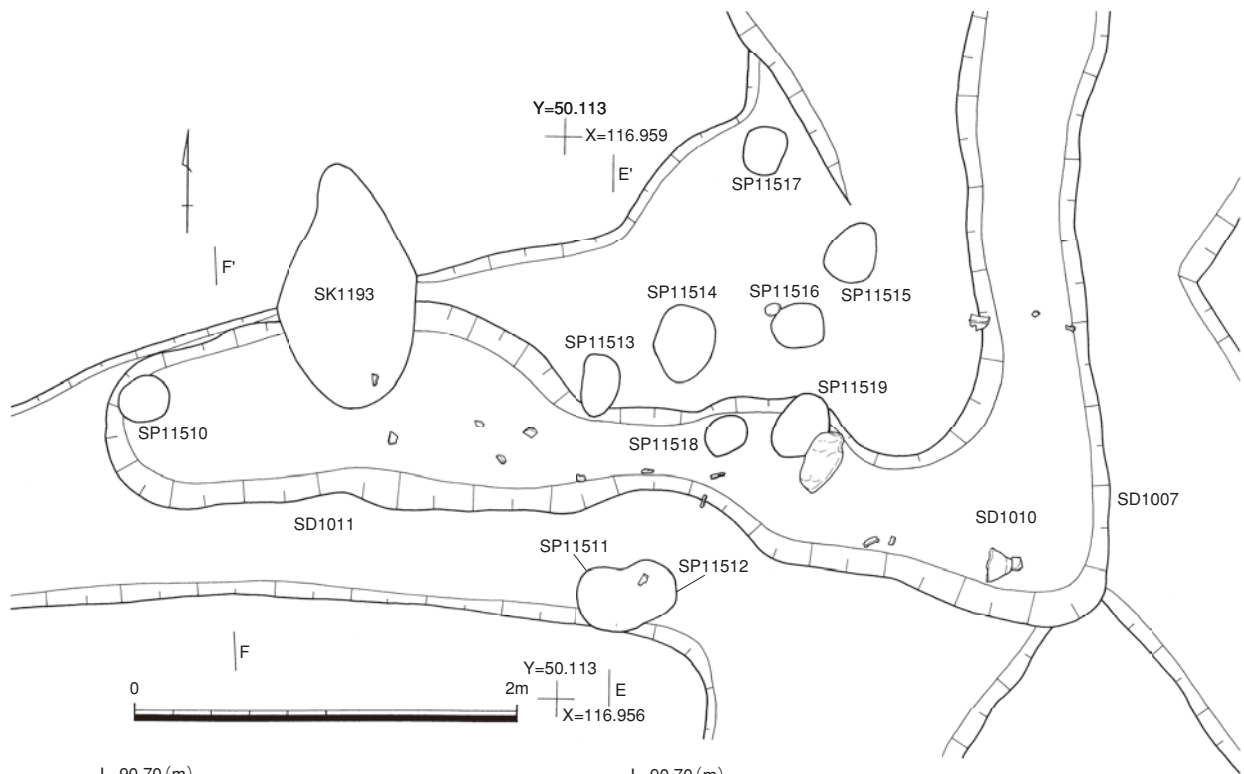


第85図 SD1009 断面図

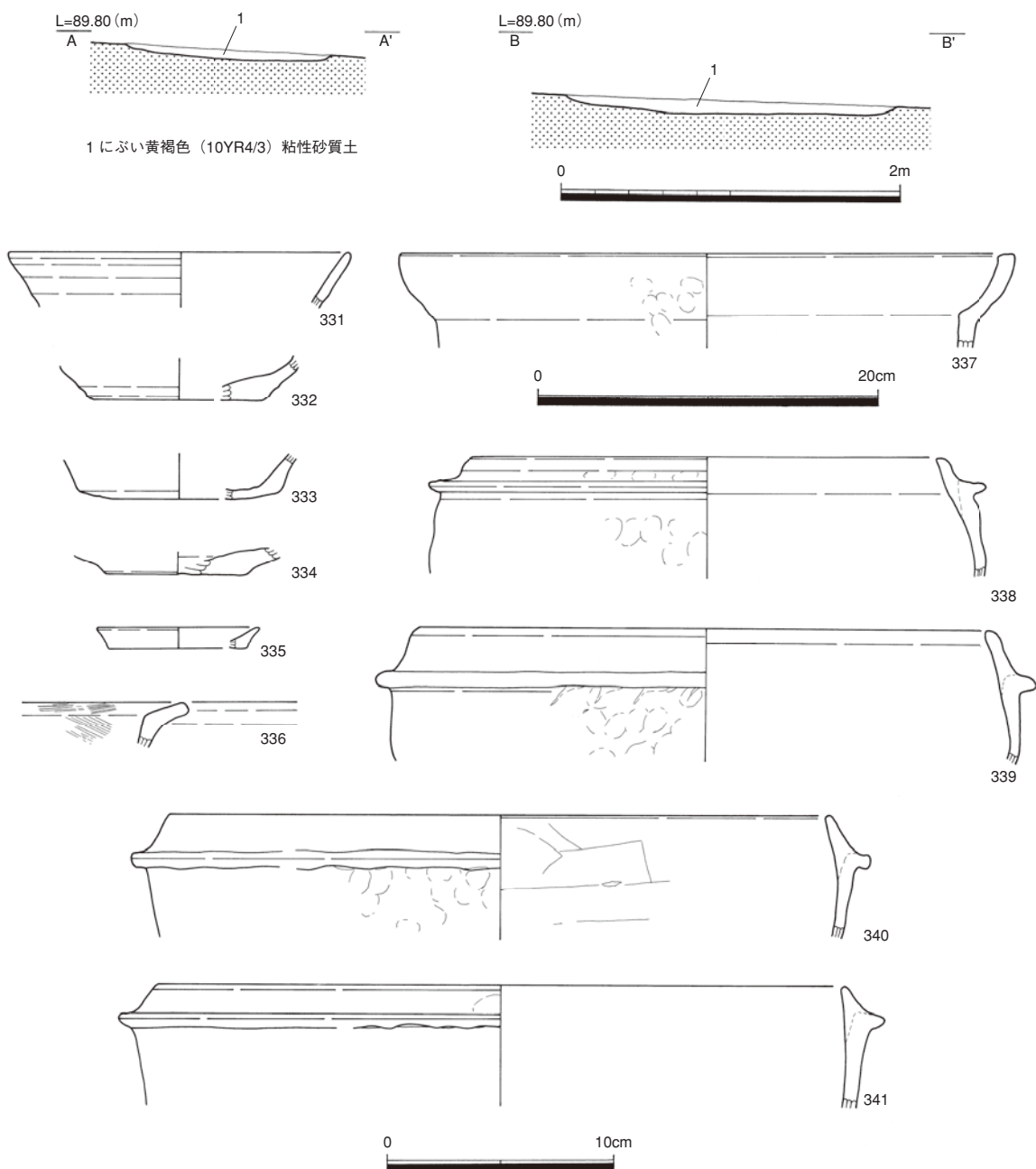
溝10号 (SD1010) (第86図)

10-3区 D~G-73・74でSD1011、SK1基、SP3基に切られた状態で確認された溝。またSD1007と切り合い関係にあるものの、前後関係は不明である。溝は不整形なコの字形を呈し、全長21.7m、最大幅1.60m、最大深度0.14mを測り、断面形態は舟底形を呈する。覆土は2層に分層できる個所もあるが主体はにぶい黄褐色砂質土1層と考えられ、炭化物と小礫を若干含む。

遺物は土師質土器杯・小皿・鍋・羽釜・脚部・播鉢、黒色土器椀、須恵質土器椀・壺、溶解炉壁、鉄滓が出土し、そのうち図化できたのは、土師質土器小皿(327)・鍋(329)・播鉢(330)、鉄滓(328)である。327の底部は、回転ヘラ切りを施す。



第86図 SD1010 遺構図・出土遺物

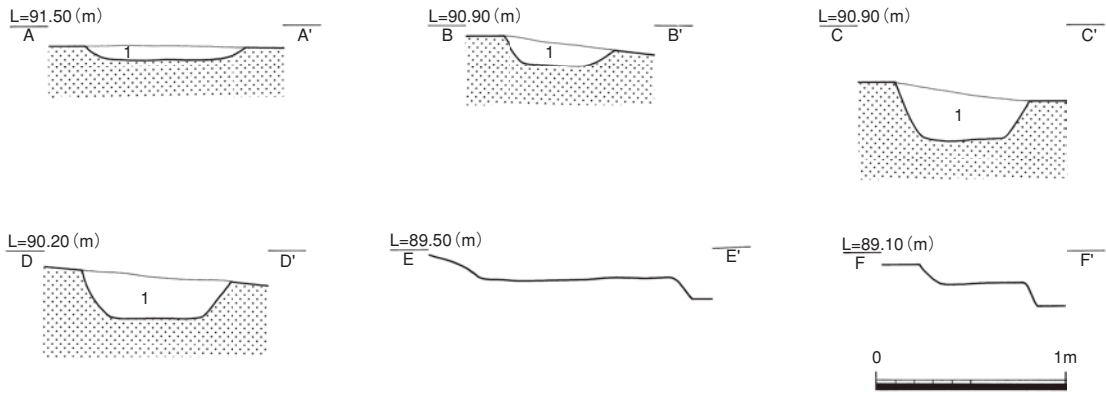


第87図 SD1011 断面図・出土遺物

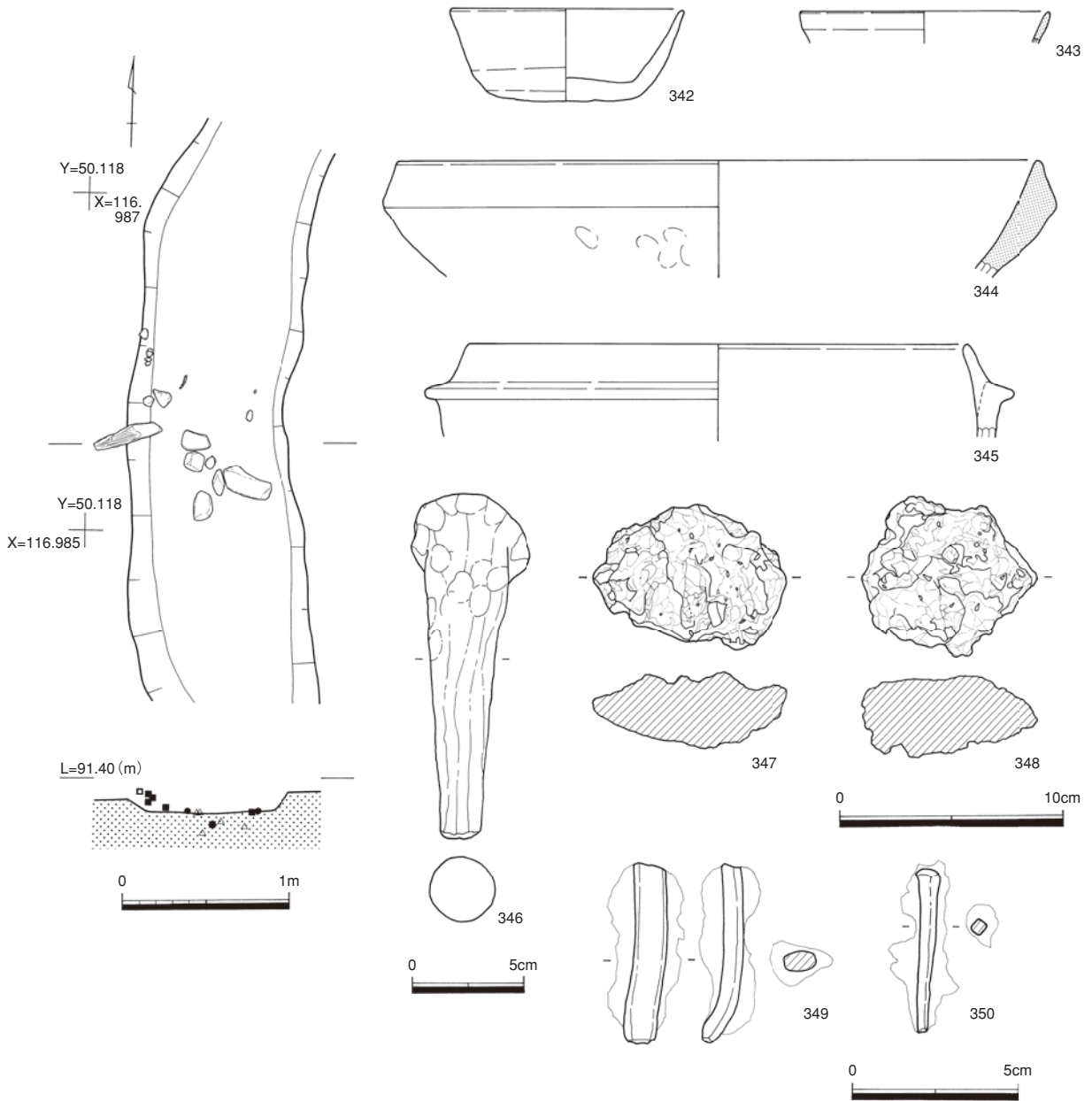
溝11号 (SD1011) (第87図)

10-3区 A~D-72~74でSK6基、柱穴11基、不明遺構1基に切られた状態で確認された溝。SD1007とも切り合い関係にあるが、前後関係は不明である。溝は逆L字形を呈し、調査区外南側にさらに延びるものと思われる。調査区内で全長18.60m、最大幅0.30~0.48m、最大深度0.28mを測り、断面形態は不整形な舟底形を呈する。覆土は、にぶい黄褐色砂質土1層である。

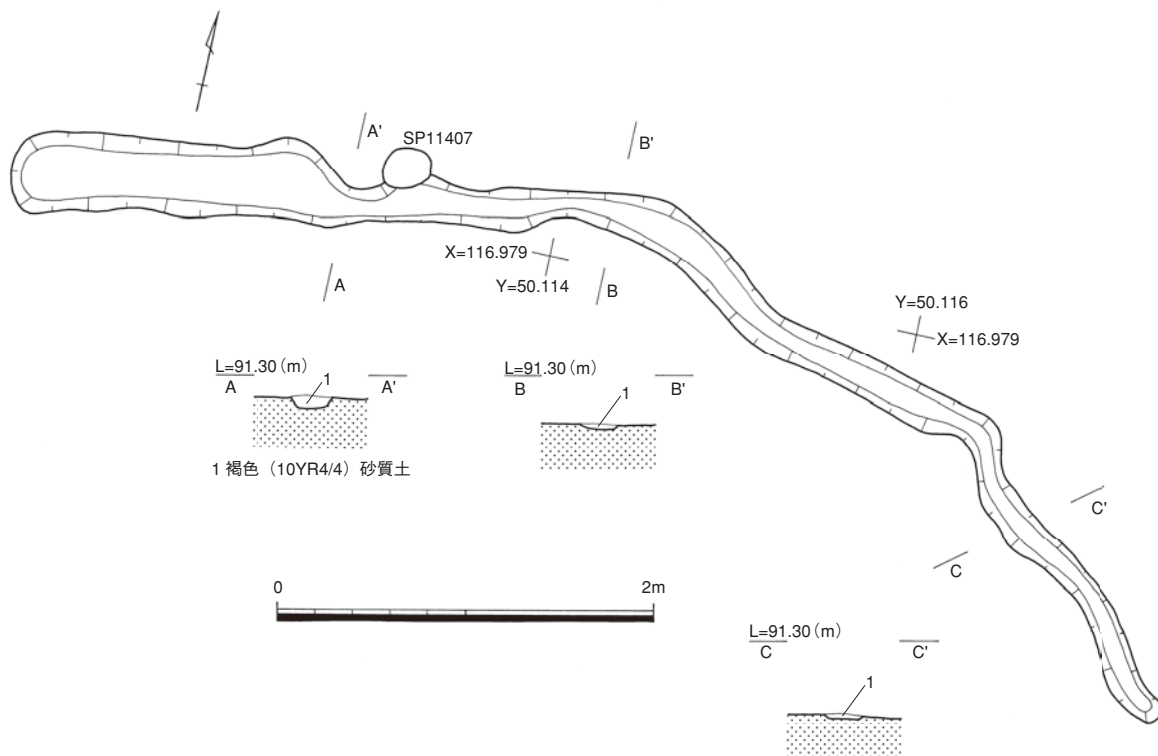
遺物は土師質土器杯・小皿・鍋・羽釜・羽釜脚部、須恵質土器椀、備前産と思われる陶器片、溶解炉壁、焼土塊、鉄滓、弥生土器片が出土した。そのうち図化できたのは、土師質土器杯(331~334)・皿(335)・鍋(336・337)、羽釜(338~341)である。杯・小皿の底部は、すべて回転ヘラ切りのあとナデを施す。小皿は、外面に多量の炭化物が付着する。羽釜のうち、340では鋳部から下位に多くの炭化物の



1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土



第88図 SD1012 遺構図・出土遺物



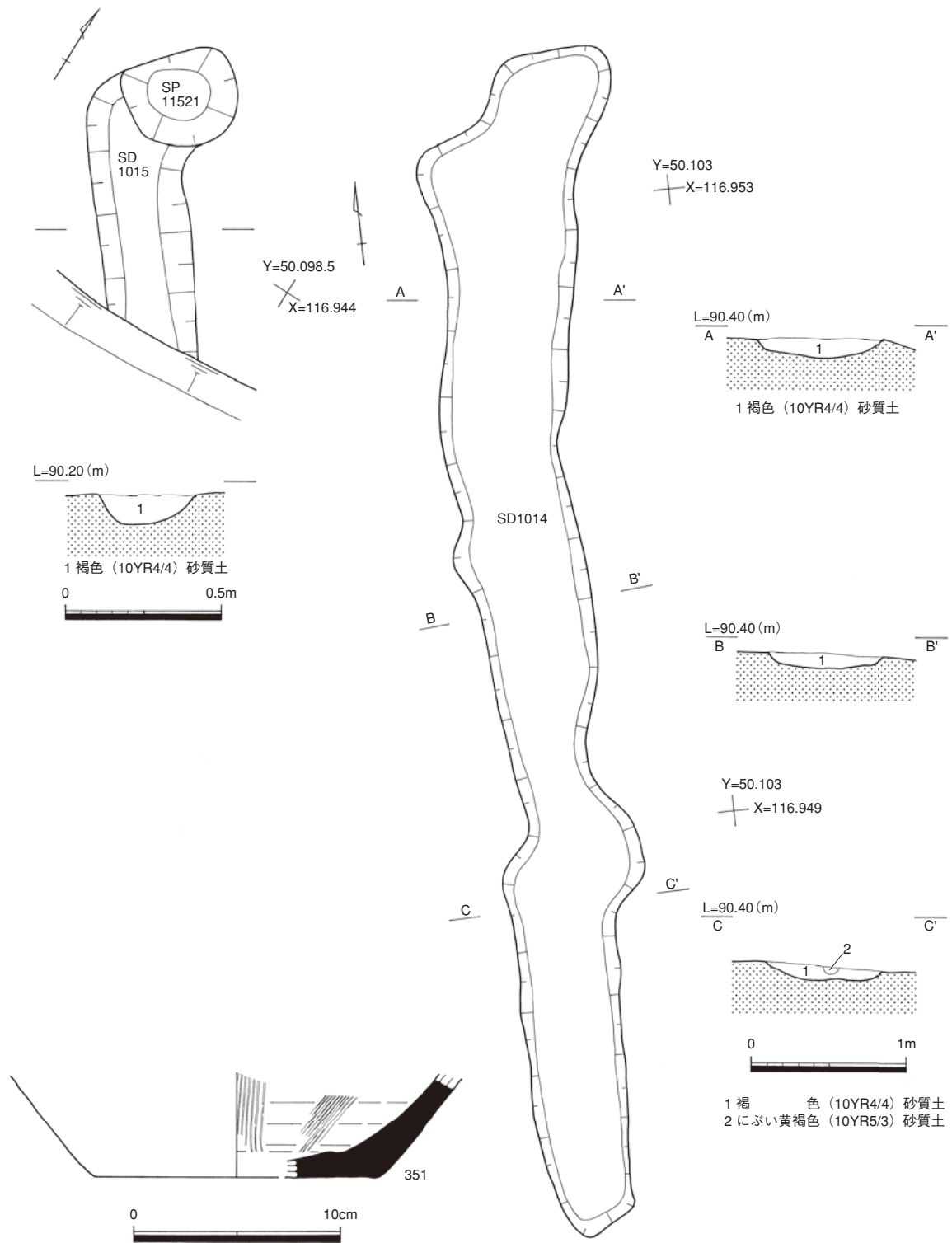
第89図 SD1013 遺構図

付着が認められる。

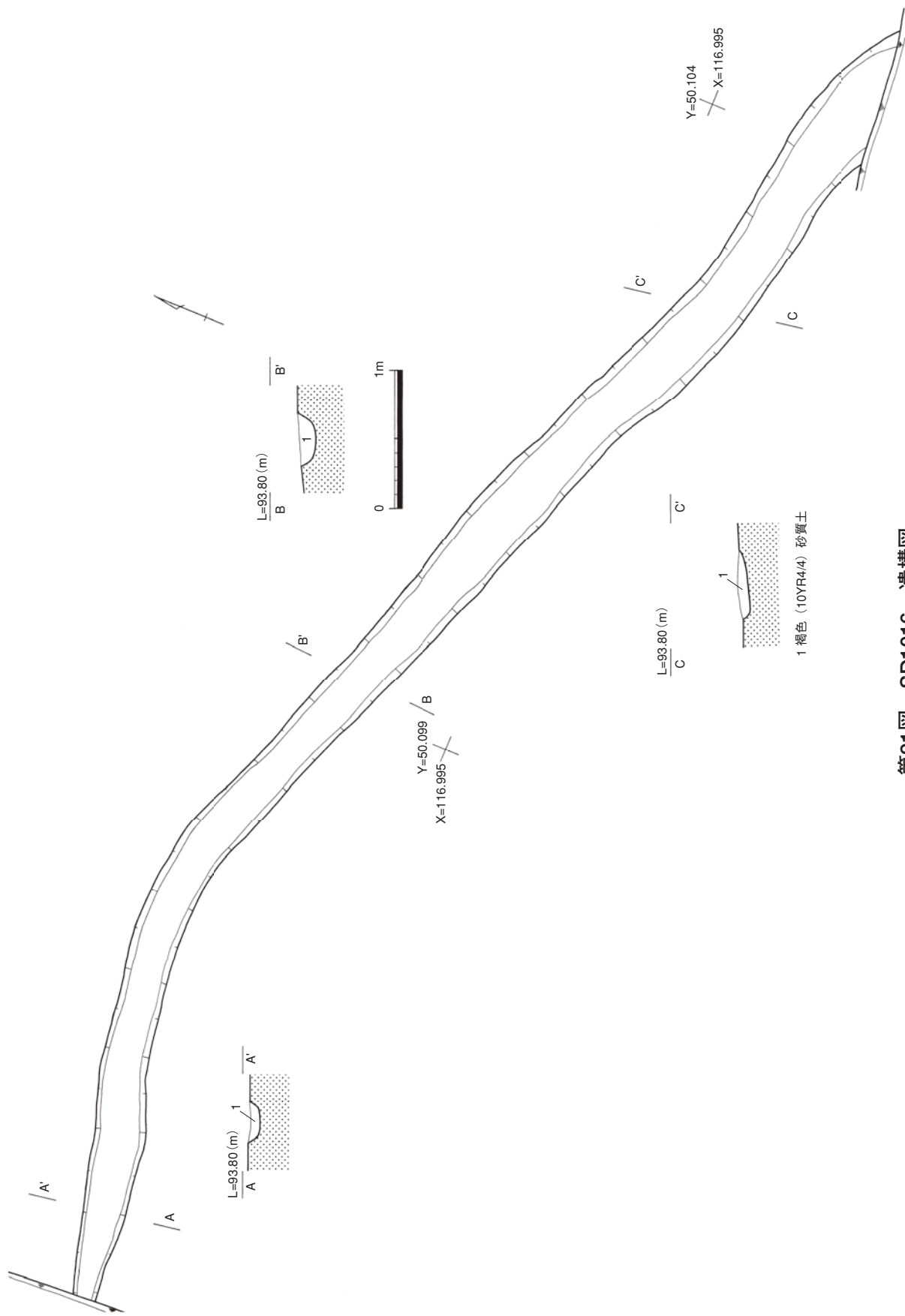
溝12号 (SD1012) (第88図)

10-3区 C~J-74・75でSD1009・SJ1001に切られた状態で確認された溝。溝は、さらに調査区南側に延びる。北側では一端途切れるものの、約1m程北に位置するSD2001とつながる可能性もある。調査区内で全長36.50m、最大幅1.00m、最大深度0.26mを測る。断面形態は主に逆台形を呈するが、ところによっては舟底形となる。覆土は、にぶい黄褐色砂質土1層である。

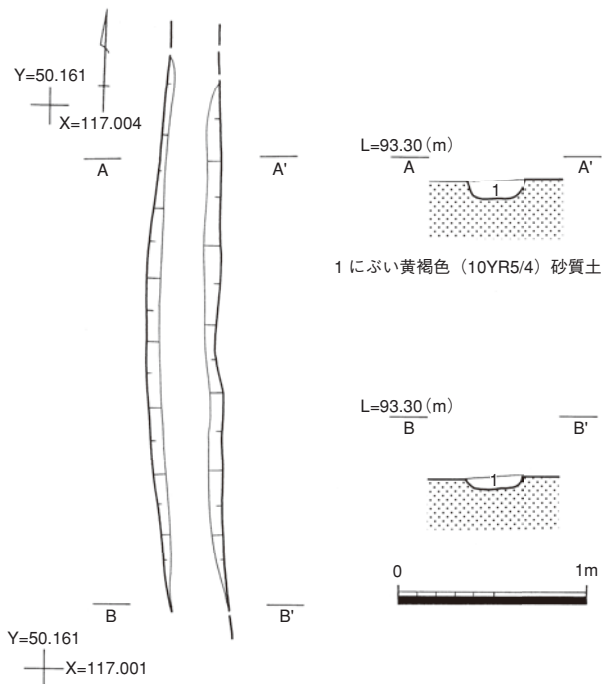
遺物は土師質土器杯・小皿・壺・羽釜・脚部、黒色土器碗、須恵質土器碗・こね鉢、瓦器碗、炭化物、溶解炉壁、鉄滓、江戸時代の陶器片が出土した。その中で図化できたのは、土師質土器杯(342)、瓦器碗(343)・こね鉢(344)、土師質土器羽釜(345)・脚部片(346)、鉋の可能性のある鉄製品(349)・鉄釘(350)、鉄滓(347・348)である。342は底部回転ヘラ切りのちナデを施す。また、内外面ともに底部の中央のみ粗い板ナデを施す。343は、内外面に鉄分が付着する。出土遺物から、13~15世紀の年代が考えられる。



第90図 SD1014・1015 遺構図・出土遺物



第91図 SD1016 遺構図



第92図 SD1017 遺構図

溝13号 (SD1013) (第89図)

10-3区 H-73・74でSP11407に切られた状態で確認された溝。全長約7.20m、最大幅0.40m、最大深度0.06mを測り、断面形態は逆台形を呈する。覆土は、褐色砂質土1層である。

出土遺物は、認められなかった。

溝14号 (SD1014) (第90図)

10-3区 B・C-71で確認された溝。全長約7.78m、最大幅0.80m、最大深度0.12mを測り、断面形態は舟底形を呈する。覆土は部分的に2層になるが、概ね褐色砂質土1層である。炭化物を多量に含み、明褐色土および黒褐色土ブロックを混入する。

出土遺物は、土師質土器杯・羽釜脚部、陶器挿鉢、壁土、鉄滓、滓が付着した石、被熱した礫である。そのうち図化できたのは、備前産と思われる陶器挿鉢(351)のみである。

溝15号 (SD1015) (第90図)

10-3区 A-70でSP11521に切られた状態で確認された溝。溝はさらに、調査区外南側へ延びる。全長約0.88m、最大幅0.30m、最大深度0.09mを測り、断面形態は舟底形を呈する。覆土は、褐色砂質土1層である。

遺物は土師質土器杯、鉄滓が出土したが、図化できるものはなかった。

溝16号 (SD1016) (第91図)

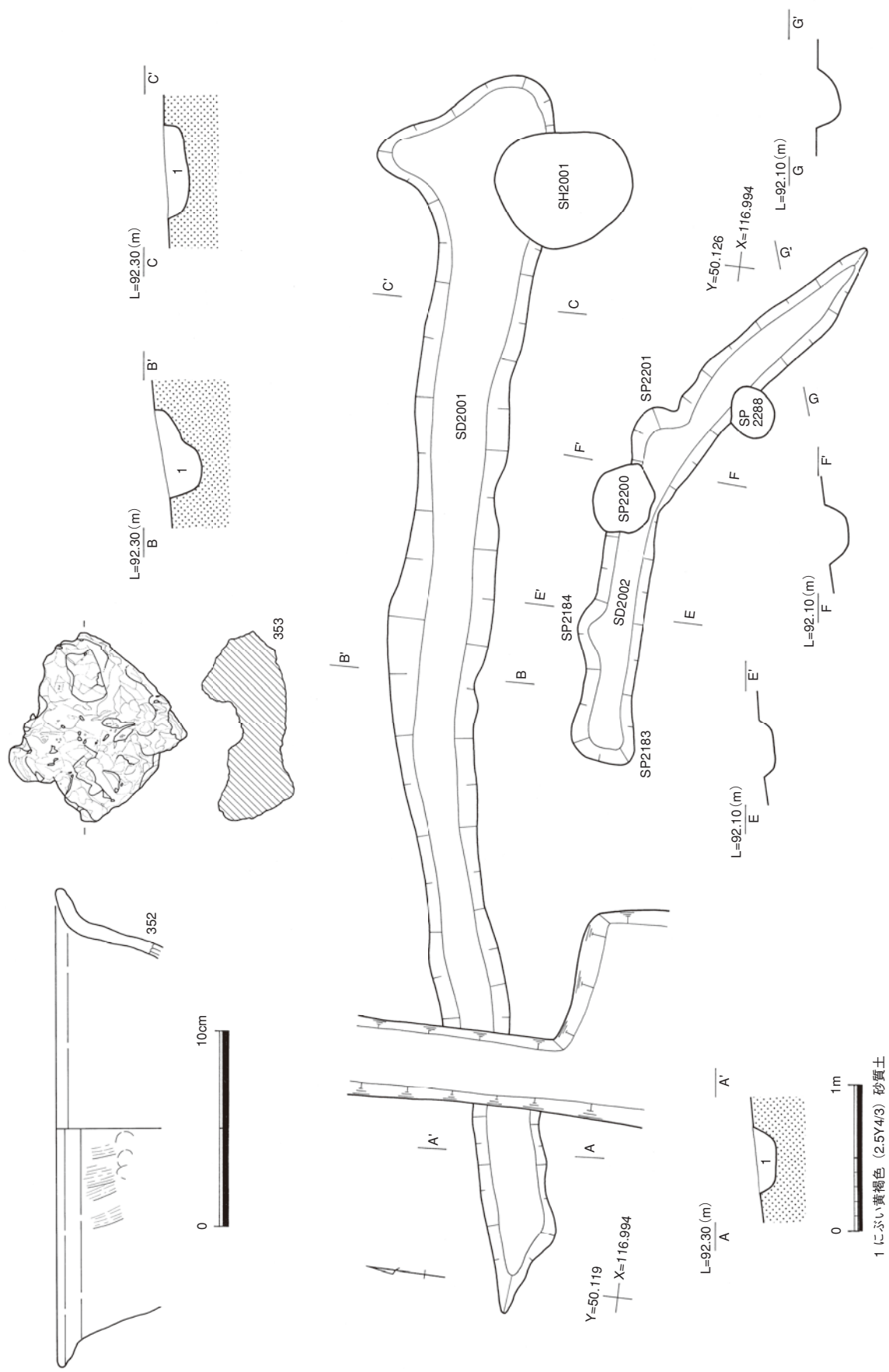
10-1区 K・L-70・71で確認された溝。溝はさらに、調査区外北西および南東方向に延びる。調査区内での全長10.80m、最大幅0.50m、最大深度0.12mを測り、断面形態は逆台形を呈する。覆土は褐色砂質土1層で、炭化物を含む。

出土遺物は認められなかった。

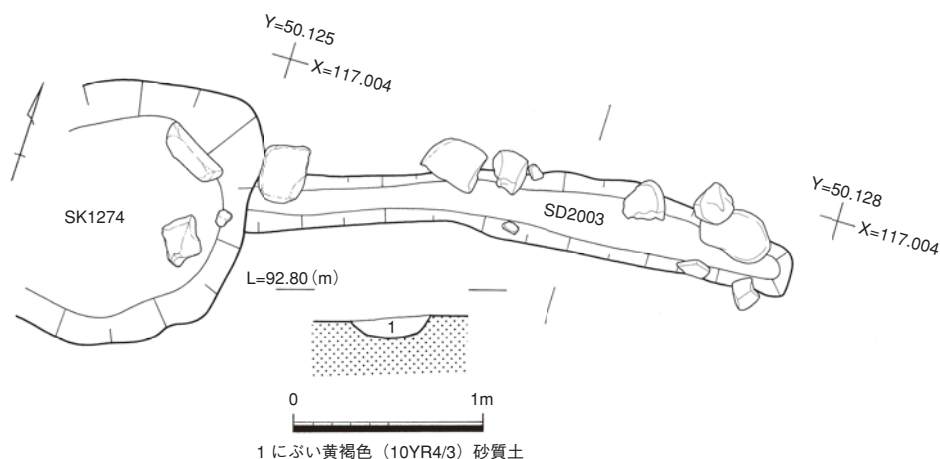
溝17号 (SD1017) (第92図)

11区 M-83で確認された溝。溝は両端が途切れるものの、本来は調査区外の南北方向にさらに延びるものと思われる。調査区内で全長3.00m、最大幅0.40m、最大深度0.10mを測り、断面形態は逆台形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土1層で、炭化物を若干含む。

遺物は土師質土器杯が出土したが、小片のために図化できなかった。



第93図 SD2001・2002 遺構図・出土遺物



第94図 SD2003 遺構図

第二遺構面

溝1号 (SD2001) (第93図)

10-2区 K・L-74～76でSH2001に切られた状態で確認された溝。途切れてはいるものの、平面形態が逆L字形になる可能性があり、SD1012と同一遺構の可能性もある。全長8.16m、最大幅0.70m、最大深度0.25mを測り、断面形態は逆台形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土1層で、炭化物を若干含む。

遺物は土師質土器杯・鍋・羽釜脚部、青磁片、羽口、鉄滓が出土した。その中で図化できたのは、土師質土器鍋(352)と鉄滓(353)である。

溝2号 (SD2002) (第93図)

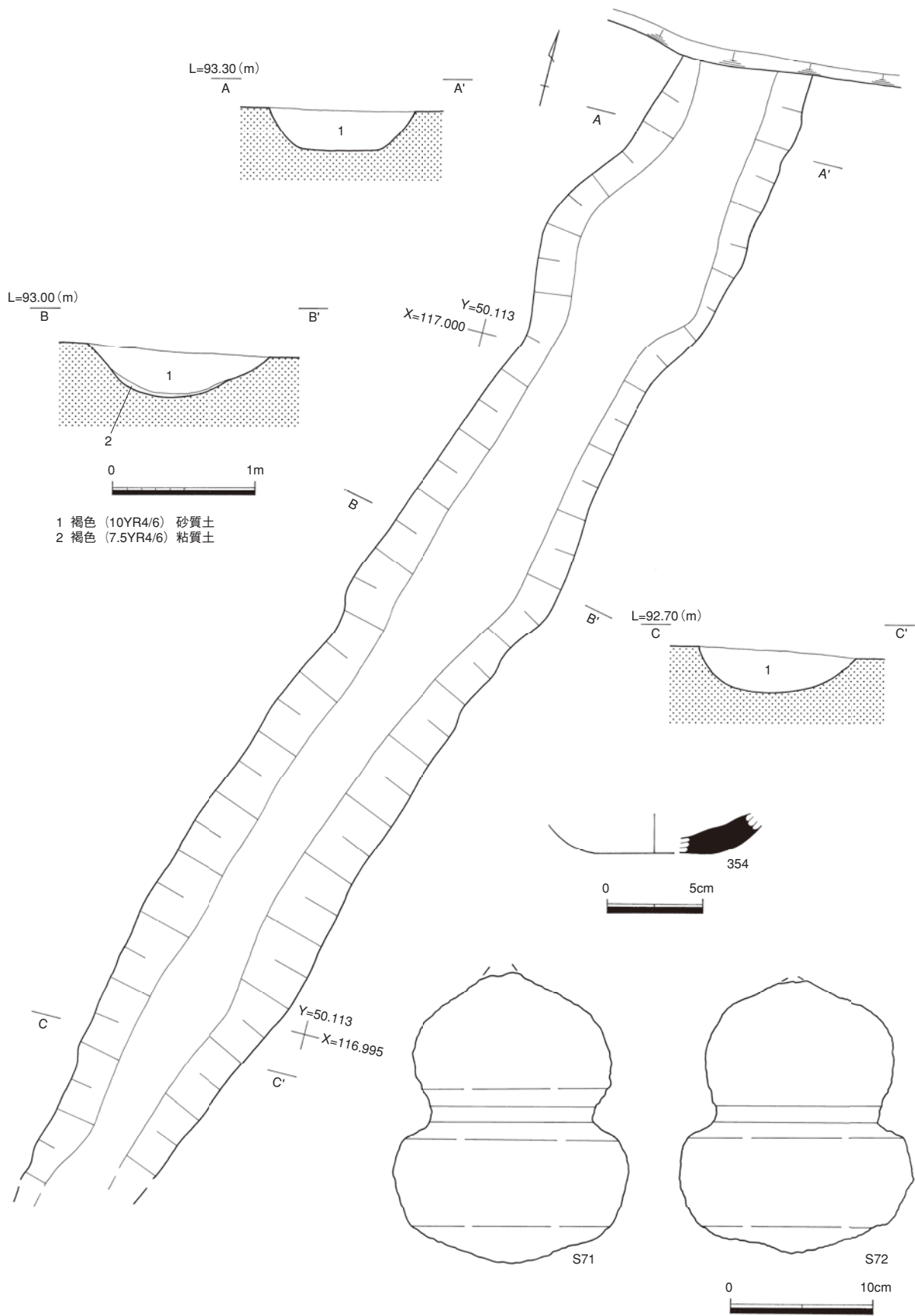
10-2区 K-75でSP2200・2288に切られた状態で確認された溝。また3基の柱穴と切り合い関係にあるが、前後関係は不明である。SD2001の約0.5m程離れた南に位置し、遺存状態は悪いがSD2001に平行して走る可能性がある。全長4.10m、最大幅0.34m、最大深度0.15mを測り、断面形態は逆台形を呈する。

遺物は土師質土器杯、鉄滓が出土したが、図化できるものはなかった。

溝3号 (SD2003) (第94図)

10-2区 M-76でSA2001・SK1274に切られた状態で確認された溝。溝はSX2004の0.5m程離れた北側に位置し、これに平行して走る可能性がある。最大長2.92m、最大幅0.40m、最大深度0.11mを測り、断面形態は舟底形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土1層で、炭化物を若干含む。

出土遺物は、認められなかった。



第95図 SG1001 遺構図・出土遺物

石垣

石垣1号 (SG1001) (第95図)

10-2区 K～M-73でSK1265を切った状態で確認された溝状遺構。調査時の見解では、暗渠あるいは石垣の基礎部分として捉えていた。遺構はさらに調査区外北側に延び、規模は調査区内での最大長8.64m、幅1.24m、最大深度0.30mを測り、断面形態は舟底形を呈する。覆土は概ね褐色砂質土1層で、部分的に2層に分層できる。また覆土中に、直径5～10cm前後の礫や瓦を多く含む

遺物は肥前系磁器碗・小皿、瀬戸美濃系陶器瓶、陶器鉢、須恵質土器甕、土師質土器片、瓦、五輪塔、羽口、鉄滓が出土し、図化できたのは、須恵質土器甕と思われる底部(354)と、凝灰岩製五輪の空・風輪部(S71・S72)あわせて3点である。S71・S72は、一石で造られている。出土遺物から遺構の所属時期は江戸時代だが、五輪塔の出土から報告することにした。

炉

炉1号 (SH1001) (第96図)

10-3区 B-73で確認された炉。調査時はSX1010に伴う土坑として検出したが、覆土中に炭化物や焼土が、また床面に被熱痕跡が認められることから炉の可能性が高いとした。前後関係は不明瞭なもの、SX1010に伴う遺構として調査が行われていたことから、SX1010が後出する可能性がある。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態はやや不整な逆台形を呈し、長軸0.73m、短軸0.54m、最大深度0.34mを測る。覆土は4層に分層でき、1層は褐色砂質土、2層は黒色粘質土で炭化物を、3層はにぶい赤褐色粘質土で焼土を、4層はにぶい黄褐色砂質土で直径5～20cm前後の礫を含む。2層は炭化物層、3層は被熱層である。

遺物は土師質土器羽釜、鉄滓が出土したが、図化できるものはなかった。

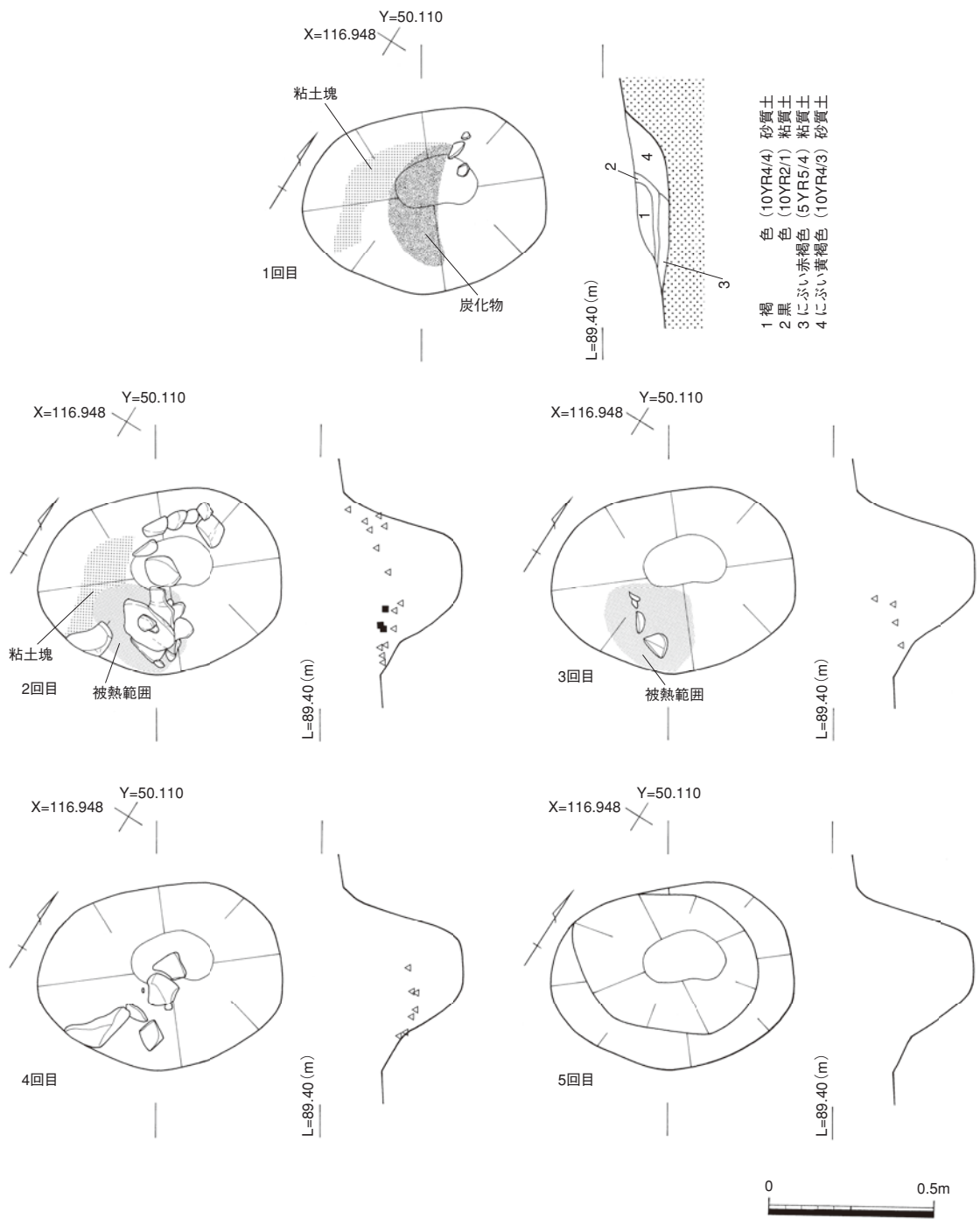
第二遺構面

第二遺構面上で確認されたSH2001～2011は、10-2区 K・L-76を中心に確認された。また鉄粒などが多量に出土したSX2006～2009も近接することから、配置が確認できるように第97図を作成した。

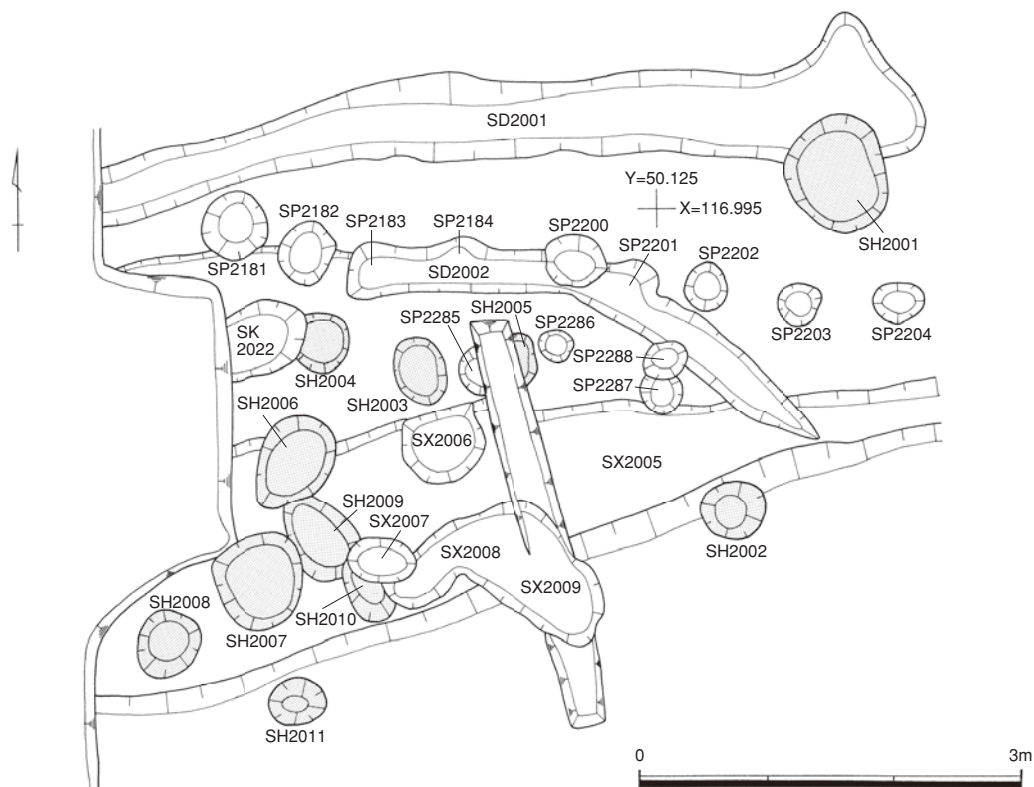
炉1号 (SH2001) (第98図)

10-2区 K・L-76でSD2001を切った状態で確認された炉。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.94m、短軸0.76m、最大深度0.14mを測る。覆土は5層に分層でき、1層は褐色砂質土で炭化物を含む。2層は灰白色砂質土で、高温によりガラス化している個所が認められる。3層はにぶい赤褐色砂質土で、焼土・炭化物を多量に含む。4層は明黄褐色砂質土、5層は灰黄褐色粘性砂質土で、直径2cm前後の礫を含む。4・5層は、壁土か。また床面上の中央からやや南側に、被熱痕跡を確認した。

遺物は土師質土器杯、格子目タタキが認められる須恵質土器片、溶解炉壁、鉄滓、直径20cm前後の礫が出土したが、図化できるものはなかった。



第96図 SH1001 遺構図



第97図 SH 遺構配置図 (第2遺構面)

炉2号 (SH2002) (第98図)

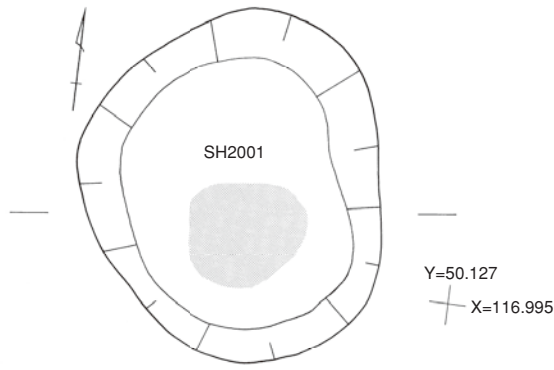
10-2区 K-76でSX2003を切った状態で確認された炉。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.69m、短軸0.54m、最大深度0.20mを測る。覆土は5層に分層でき、1層はにぶい黄橙色粘質土、2層は黒色粘質土で炭化物層である。3層は黄灰色粘質土、4層はにぶい褐色粘質土で焼土面である。5層はにぶい黄褐色粘性砂質土である。出土遺物は、主に1層からの出土である。検出時は一面炭化物に覆われた状態で(1面目)、それを取り除くと粘土を検出した(2面目)。3回目の被熱範囲は4層に、粘土塊は5層に対応する。土層堆積状況から、地面を少し掘り下げて粘土を入れ、炉を構築したと思われる。

遺物は土師質土器杯、羽口、鉄滓が出土し、羽口(355)のみ図化できた。

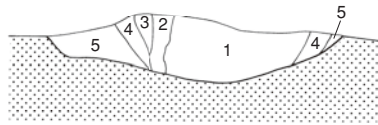
炉3号 (SH2003) (第99図)

10-2区 K-75で確認された炉。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態はやや不整な舟底形を呈し、長軸0.53m、短軸0.40m、最大深度0.10mを測る。覆土は4層に分層しているものの、3層に分けることができる。上層(1・2層)はにぶい黄褐色砂質土で、炭化物をやや多く含む。中層(3層)は黄灰色粘性砂質土、下層(4層)はにぶい褐色粘質土で、焼土である。

出土遺物は、認められなかった。



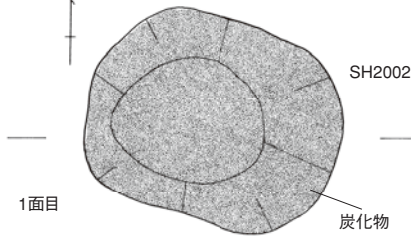
L=92.30 (m)



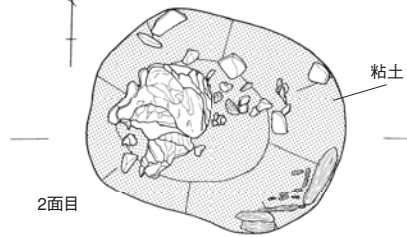
- 1 褐色 (10YR4/4) 砂質土
- 2 灰白色 (N 7 /) 砂質土
- 3 にぶい赤褐色 (5YR4/4) 砂質土
- 4 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土
- 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性砂質土



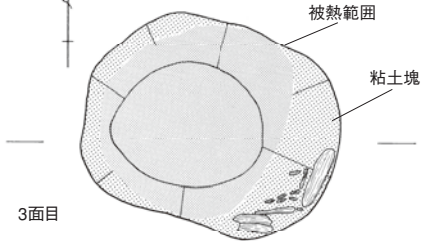
Y=50.125
X=116.993



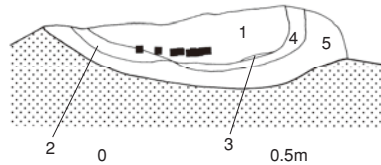
Y=50.125
X=116.993



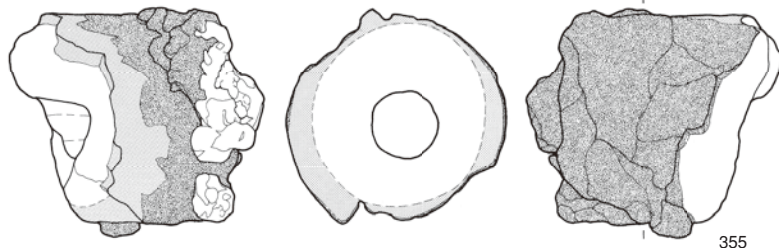
Y=50.125
X=116.993



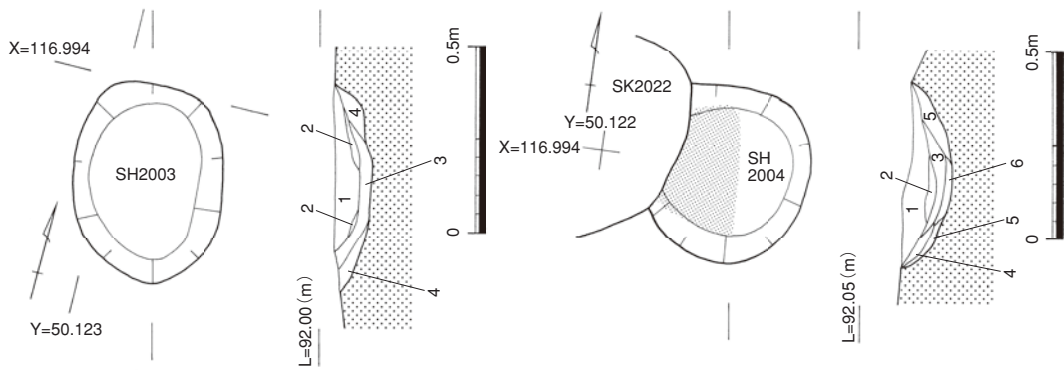
L=92.10 (m)



- 1 にぶい黄橙色 (10YR6/4) 粘質土
- 2 黒色 (10YR2/1) 粘質土
- 3 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土
- 4 にぶい褐色 (7.5YR5/3) 粘質土
- 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性砂質土

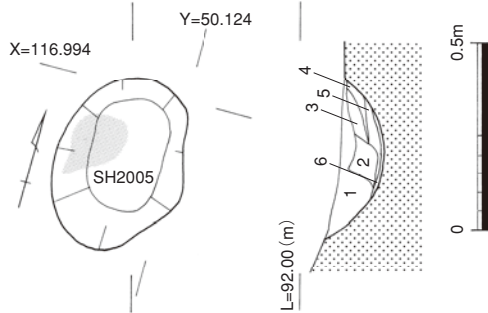


第98図 SH2001・2002 遺構図・出土遺物

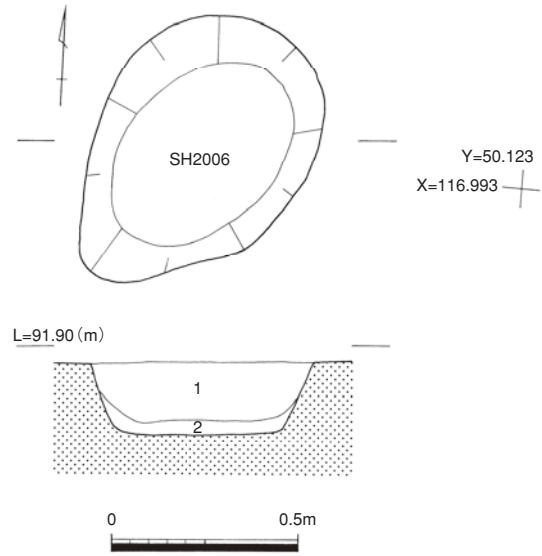


- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土
- 2 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘性砂質土
- 3 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘性砂質土
- 4 にぶい褐色 (7.5YR5/4) 粘質土

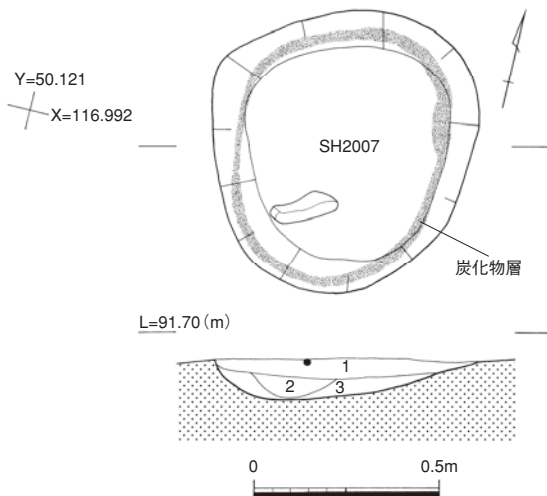
- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土
- 2 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘性砂質土
- 3 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘性砂質土
- 4 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘性砂質土
- 5 にぶい褐色 (7.5YR5/4) 粘質土
- 6 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土



- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土
- 2 褐色 (10YR4/4) 砂質土
- 3 黄灰色 (2.5Y3/1) 粘質土
- 4 褐色 (7.5YR4/3) 粘性砂質土
- 5 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘性砂質土
- 6 にぶい褐色 (7.5YR5/3) 粘質土



- 1 暗褐色 (7.5YR3/3) 砂質土
- 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土



- 1 暗褐色 (7.5YR3/3) 砂質土
- 2 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土
- 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土

第99図 SH2003~2007 遺構図

炉4号 (SH2004) (第99図)

10-2区 K-75でSK2022に切られた状態で確認された炉。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は舟底形を呈し、直径0.46m前後、最大深度0.13mを測る。覆土は6層に分層できるものの、大きく3層に分けることができる。上層(1・2層)はにぶい黄褐色砂質土で、炭化物をやや多く含む。中層(3・4・6層)のうち、3層は黄灰色粘性砂質土、4層はにぶい黄褐色粘性砂質土、6層はにぶい黄褐色粘質土である。下層(5層)はにぶい褐色粘質土で、被熱面である。被熱面は、底面の西半分に広がる。

遺物は土師質土器杯、鉄滓が出土したが、図化できるものはなかった。

炉5号 (SH2005) (第99図)

10-2区 K-75で確認トレンチに切られた状態で確認された炉。その西側に位置するSP2285との前後関係は不明である。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.48m、短軸0.35m、最大深度0.12mを測る。覆土は6層に分層でき、1層はにぶい黄褐色砂質土で、炭化物をやや多く含む。2層は褐色砂質土、3層は黄灰色粘質土、4層は褐色粘性砂質土、5層は暗灰黄色粘性砂質土である。6層はにぶい褐色粘質土で、被熱面となる。

遺物は鉄滓が出土したが、図化できなかった。

炉6号 (SH2006) (第99図)

10-2区 K-75でSX2005に切られた状態で確認された炉。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.82m、短軸0.57m、最大深度0.19mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は暗褐色砂質土で、鉄を多量に含む。また炭化物も含む。2層は、にぶい黄褐色砂質土である。被熱面は確認できなかった。

遺物は鉄滓が出土したが、図化できなかった。

炉7号 (SH2007) (第99図)

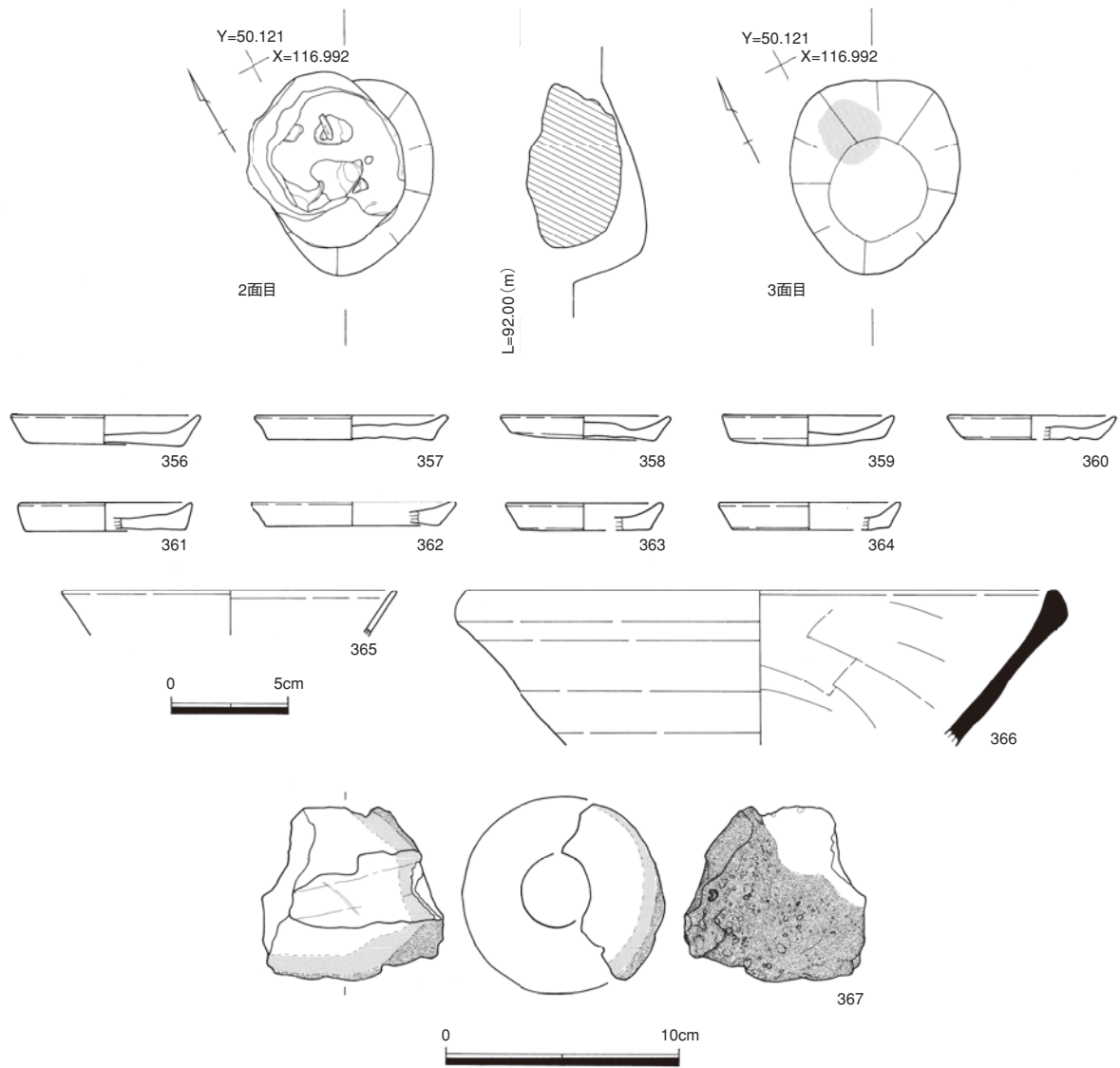
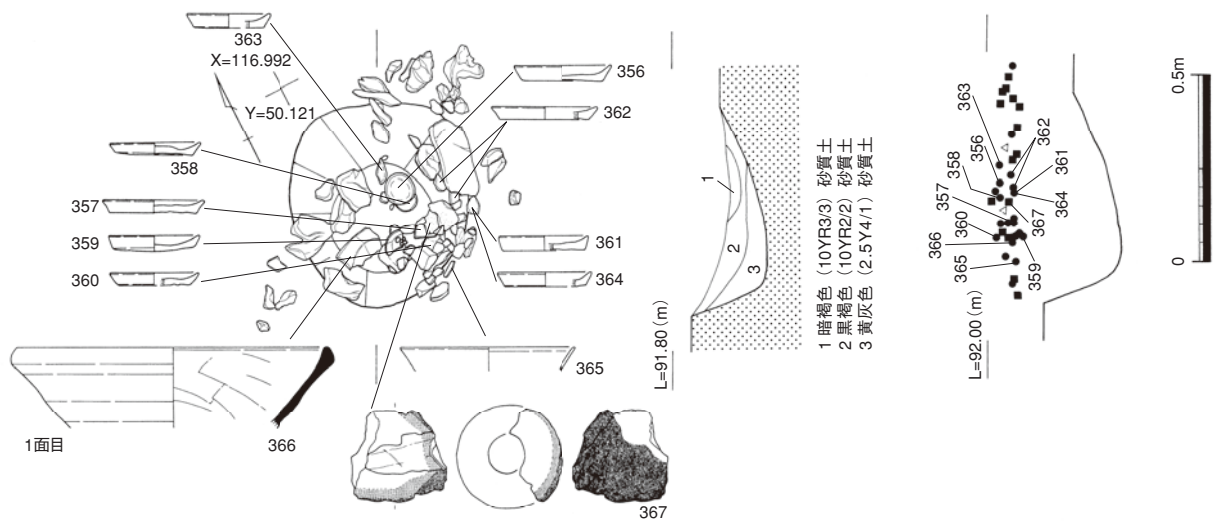
10-2区 K-75でSX2005に切られた状態で確認された炉。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.77m、短軸0.69m、最大深度0.11mを測る。覆土は3層に分層でき、1層は暗褐色砂質土で、炭化物・鉄を含む。2層は褐色粘質土、3層はにぶい黄褐色砂質土を呈する。被熱面は確認できなかったものの、遺構の検出時に輪状を呈する炭化物層を確認した。

遺物は土師質土器杯、羽口、滓、焼土塊、鉄滓が出土したが、図化できるものはなかった。

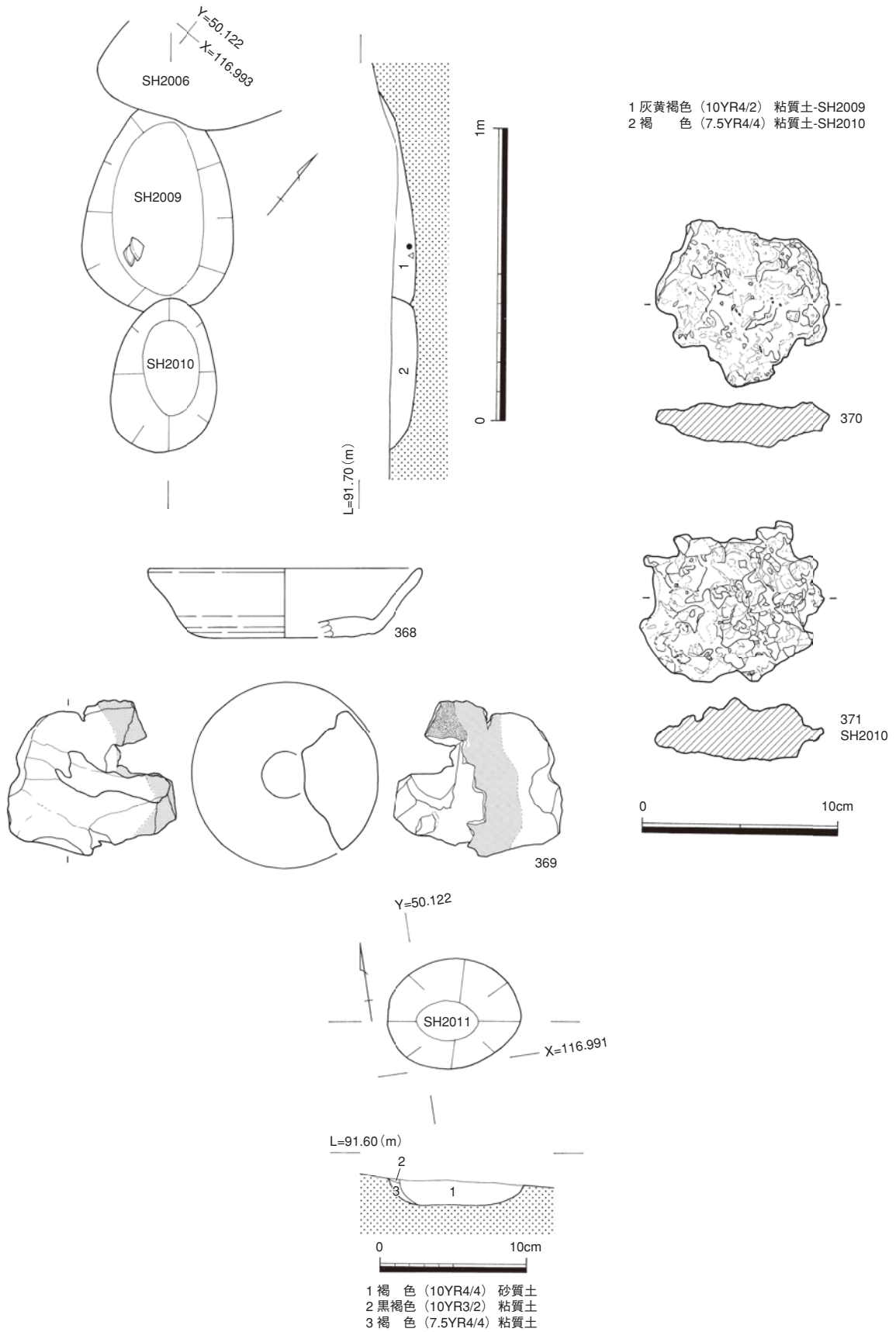
炉8号 (SH2008) (第100図)

10-2区 K-75でSX2005に切られた状態で確認された炉。遺物の出土状況から、SX2005より後出すると思われる。平面形態は楕円形、底面形態はやや不整な円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.56m、短軸0.48m、最大深度0.20mを測る。覆土は遺存部で3層に分層することができ、1層は暗褐色砂質土で、鉄を多量に含む。2層は黒褐色砂質土で、炭化物層である。3層は灰黄色砂質土で、上面が被熱により赤化する。被熱面は、底面の北側の一部で認められた。

遺物は土師質土器杯・小皿、須恵質土器こね鉢、羽口、鉄滓が出土し、その中で図化できたのは土師



第100図 SH2008 遺構図・出土遺物



第101図 SH2009~2011 遺構図・出土遺物

質土器杯(365)・小皿(356～364)、須恵質土器こね鉢(366)、羽口(367)である。当初、これらはSX2005に伴う遺物として取り上げられていたが、SX2005の中で遺物の集中する個所がSH2008上のみで、またこれらの遺物を取り除くとその下に多量の鉄と土で固まった鉄塊が出土し、位置的に重なりをもつことから、SH2008の出土遺物とした。炉の機能停止後、これらの遺物が廃棄されたと思われる。

炉9号 (SH2009) (第101図)

10-2区 K-75でSX2005・2007、SH2006・2007・2010に切られた状態で確認された炉。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、最大長0.67m、短軸0.50m、最大深度0.08mを測る。覆土は灰黄褐色粘質土1層で、炭化物を多量に含む。被熱面は確認できなかった

遺物は土師質土器杯、鉄滓が出土したが、図化できるものはなかった。

炉10号 (SH2010) (第101図)

10-2区 K-75でSX2005・2007・2008に切られた状態で確認された炉。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.53m、短軸0.36m、最大深度0.09mを測る。覆土は褐色粘質土1層で、炭化物を多量に含む。

遺物は土師質土器杯、羽口、鉄滓が出土し、そのうち底部回転ヘラ切りを施す土師質土器杯(368)、羽口(369)、鉄滓(370・371)の4点が図化できた。

炉11号 (SH2011) (第101図)

10-2区 K-75でSX2003に切られた状態で確認された炉。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.45m、短軸0.37m、最大深度0.08mを測る。覆土は3層に分層でき、1層は褐色砂質土、2層は黒褐色粘質土で炭化物層、3層は褐色粘質土で焼土をである。

遺物は焼土塊のみの出土で、図化できるものはなかった。

水利施設

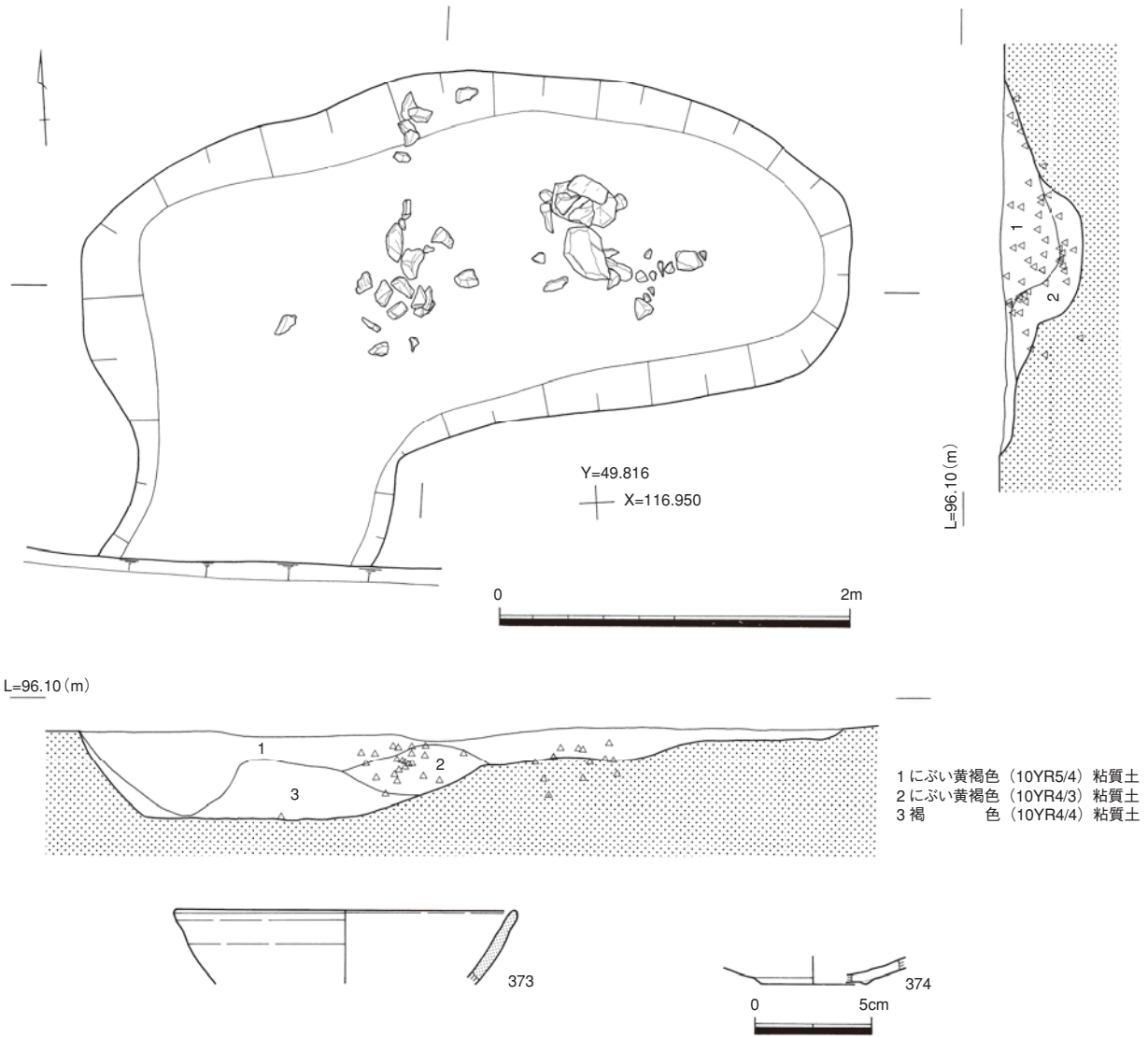
水利施設1号 (SJ1001) (第102図)

10-3区 G-73・74でSD1012を切った状態で確認された遺構。SD1009に附設するような形で検出され、平面形態から一部が南側に延びる可能性もある。また遺構内において、直径10～50cm大の砂岩・結晶片岩が床面直上および若干浮いた状態で出土した。その出土状況から、石の配置に規則性や構築面を揃えた痕跡は認められない。また床面は、SD1009に向かって緩傾斜となる。平面形態・底面形態ともに溝状、断面形態は逆台形を呈し、最大長5.64m、幅1.20m、最大深度0.24mを測る。

遺物は土師質土器小皿・煮沸具の体部片、溶解炉壁、鉄塊が出土し、図化できたのは鉄塊(372)のみである。



第102図 SJ1001 遺構図・出土遺物



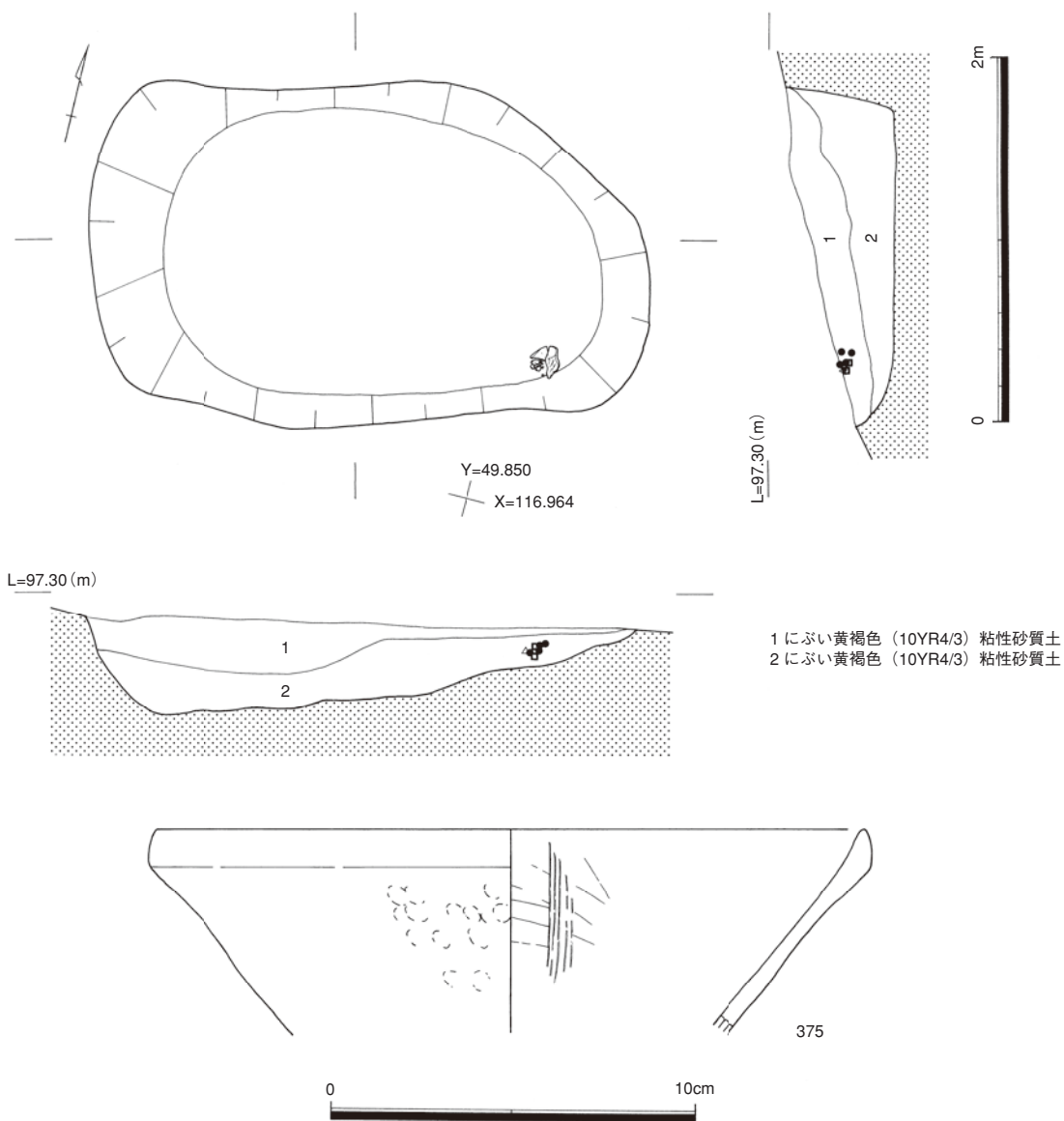
第103図 SK1001 遺構図・出土遺物

土坑

1号土坑 (SK1001) (第103図)

7区 C-13・14で確認された土坑。平面形態・底面形態はともに南と東の二方向に伸びた不整形で、南は溝により一部切られている。断面形態は不整舟底形を呈し、長軸4.34m、短軸2.05m、最大深度0.48mを測る。覆土は3層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層(1・2層)はにぶい黄褐色粘質土、下層(3層)は褐色粘質土である。3層ともに、直径5~15cm前後の礫を多量に含む。

遺物は土師質土器杯・小皿・皿・羽釜、瓦器碗、弥生土器片が出土し、図化できたのは瓦器碗(373)と土師質土器高台付皿(374)である。



第104図 SK1014 遺構図・出土遺物

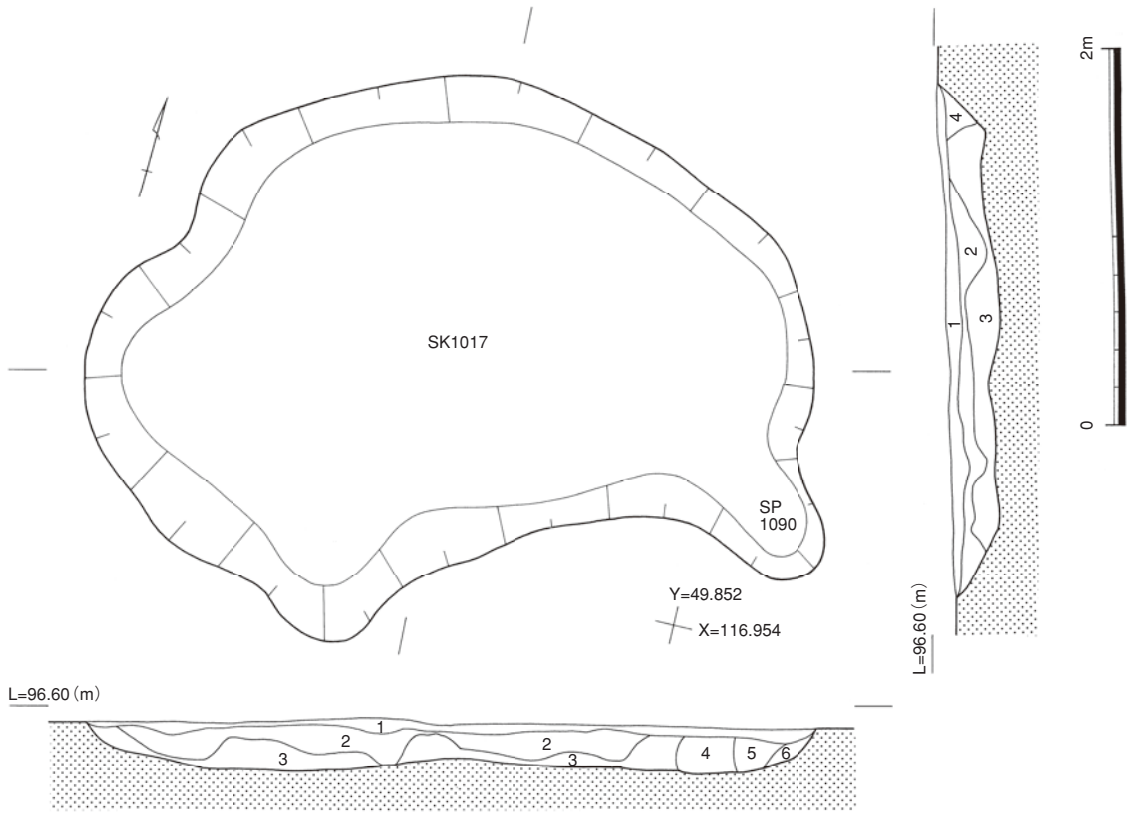
14号土坑 (SK1014) (第104図)

5区 E・F-20・21で確認した土坑。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸3.08m、短軸1.88m、最大深度0.57mを測る。覆土はにごい黄褐色を呈し、含有物から2層に分層できる。1層は、炭化物を含む。

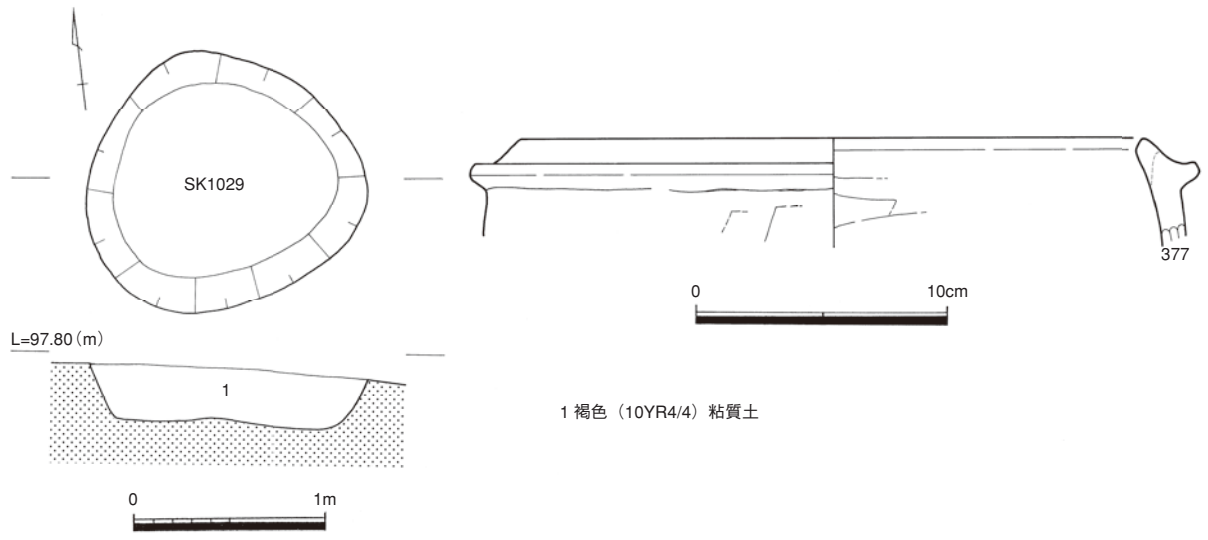
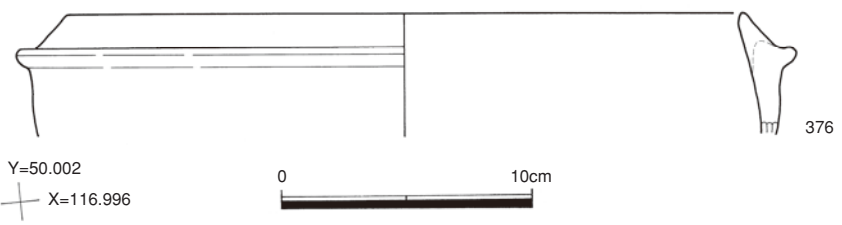
遺物は土師質土器片・羽釜・播鉢、弥生土器鉢、サヌカイト製石鏃・剥片、縄文土器が出土し、図化できたのは土師質土器播鉢(375)のみである。

17号土坑 (SK1017) (第105図)

5区 C・D-20・21で確認した土坑。SP1090と切り合い関係にあるが、その前後関係は不明である。また平面形態の不整形さから、SP1090以外の別遺構と切り合い関係にあったと思われる。平面形態・底面



- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土 3 褐色 (10YR4/4) 粘質土 5 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土
- 2 褐色 (10YR4/4) 粘質土 4 褐色 (10YR4/4) 粘質土 6 褐色 (10YR4/4) 粘質土



第105図 SK1017・1029 遺構図・出土遺物

形態はともに不整形、断面形態は逆台形を呈し、長軸3.88m、短軸2.58m、最大深度0.28mを測る。覆土は6層に分層できるが、大きく2層に分けることができる。上層(1層)は、にぶい黄褐色粘質土である。下層(2～6層)は概ね褐色を呈し、2～4・6層では直径10cm弱の礫を多量に含む。

遺物は土師質土器羽釜、弥生土器片が出土し、図化できたのは土師質土器羽釜(376)のみである。

29号土坑 (SK1029) (第105図)

1区 K・L-51で確認した土坑。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.49m、短軸1.35m、最大深度0.28mを測る。覆土は褐色粘質土1層で、多量の小礫と炭化物を含む。

遺物は土師質土器羽釜、弥生土器片が出土し、図化できたのは土師質土器羽釜(377)のみである。

31号土坑 (SK1031) (第106図)

1区 M-45で確認した土坑。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸2.78m、短軸1.21m、最大深度0.56mを測る。覆土は褐色を呈し、含有物の違いから2層に分層できる。ともに小礫を多量に含むが、2層では直径10cm以上の礫が多く含まれる。

出土遺物は、認められなかった。

68号土坑 (SK1068) (第106図)

97-1区 F・G-50で確認した土坑。平面形態・底面形態はともにやや方形に近く、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.32m、短軸1.02m、最大深度0.39mを測る。覆土は4層に分層でき、大きく2層に分けることができる。上層(1・2層)のうち1層は褐色砂質土、2層は灰黄褐色粘質土で、2cm大の炭化物や焼土を多量に含む。下層(3・4層)のうち3層はにぶい黄褐色粘質土、4層は暗褐色粘質土で、直径5～25cm大の礫を含む。また4層は、直径2～3cm大の礫や焼土を多量に含む。

遺物は壁土、鉄釘、鉄滓が出土したが、図化できるものはなかった。

162号土坑 (SK1162) (第107図)

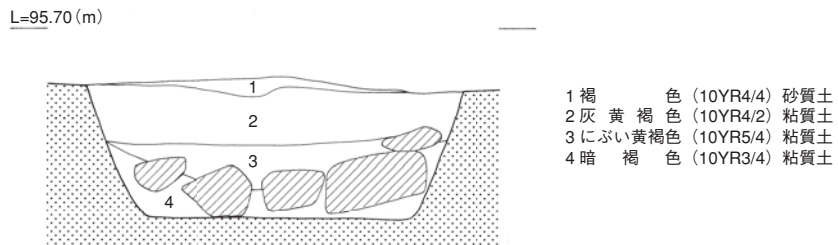
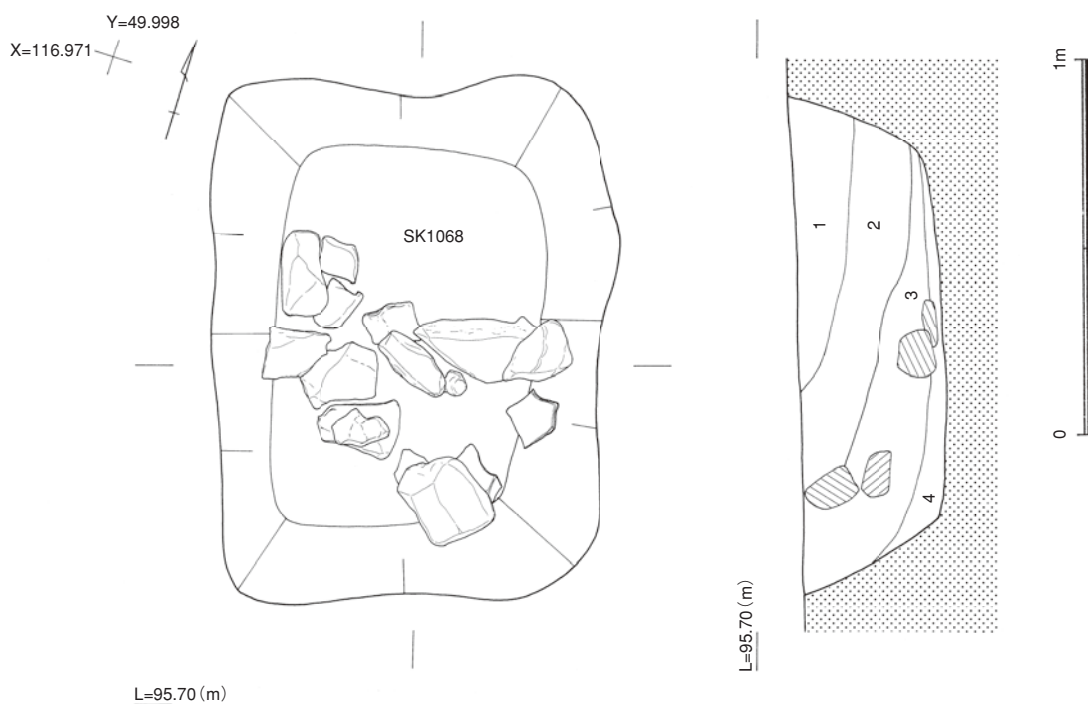
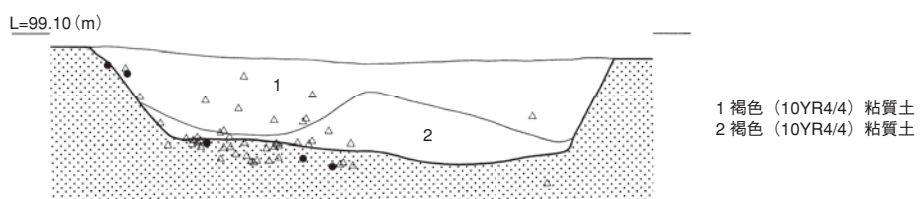
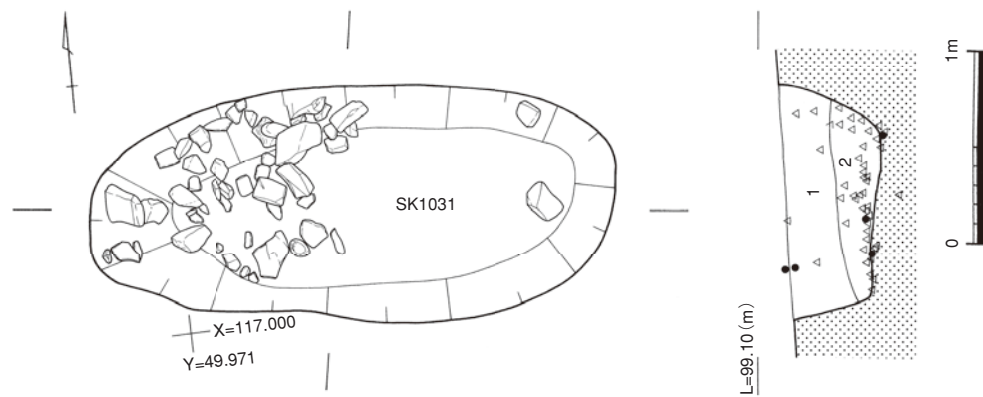
10-3区 A-70で調査区南側溝に一部切られた状態で確認した土坑。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、最大長0.60m、短軸0.65m、最大深度0.19mを測る。覆土は暗褐色砂質土1層で、炭化物をやや多く含む。

遺物は土師質土器杯・小皿・煮沸具の体部片、須恵質土器椀、鉄滓が出土し、そのうち図化できたのは、底部回転ヘラ切りを施す土師質土器小皿(378)のみである。

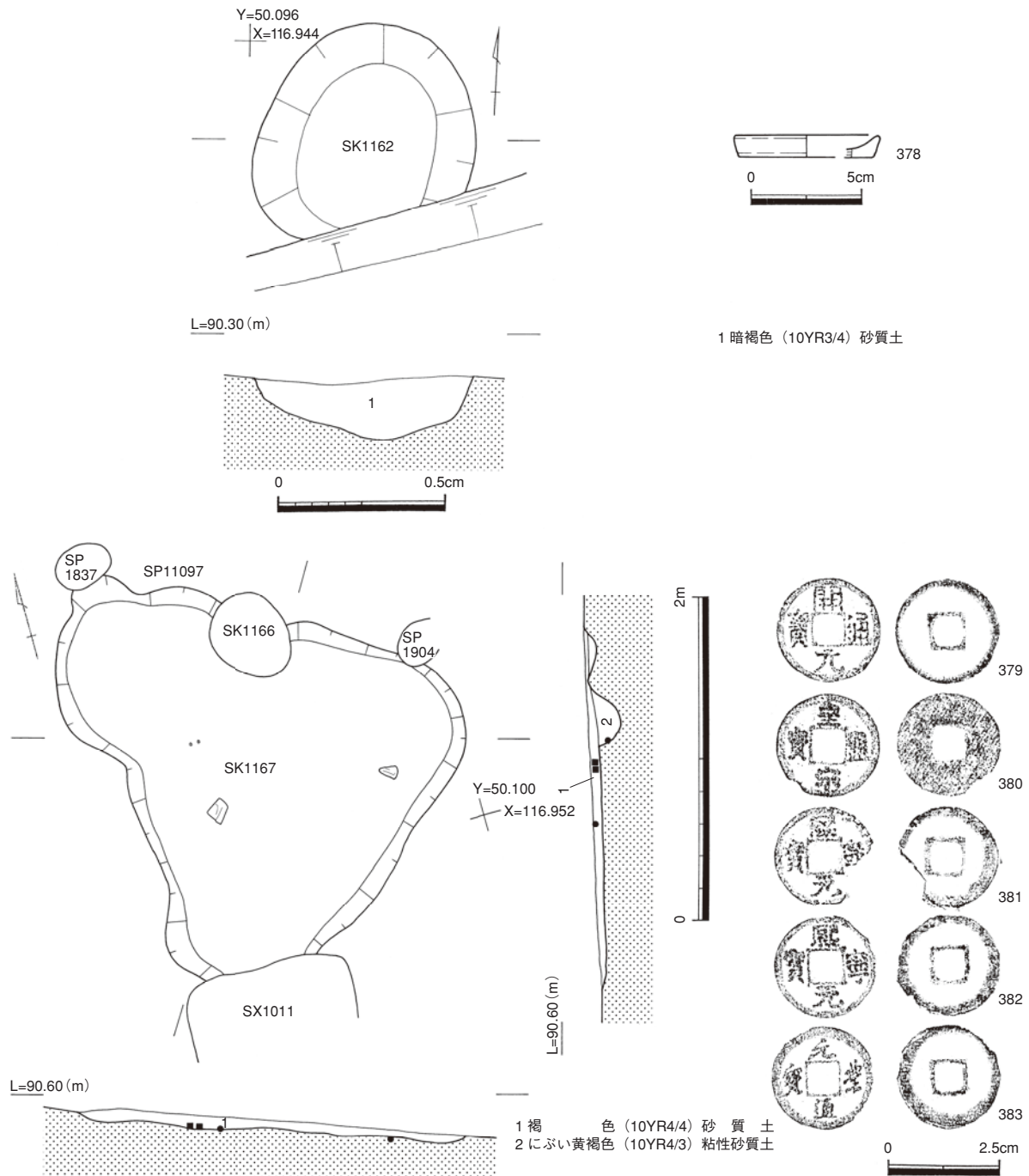
167号土坑 (SK1167) (第107図)

10-3区 C-70でSP1837・1904、S K1166、SX1011に切られた状態で確認した土坑。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は舟底形を呈し、長軸2.39m、短軸2.08m、最大深度0.20mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は褐色砂質土で、焼土ブロックや炭化物をやや多く含む。2層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、直径10～20cm大の礫を多量に含む。

遺物は土師質土器杯・煮沸具の体部片、焼土塊、備前と思われる陶器甕、砥石、銭貨が出土し、図化



第106図 SK1031・1068 遺構図

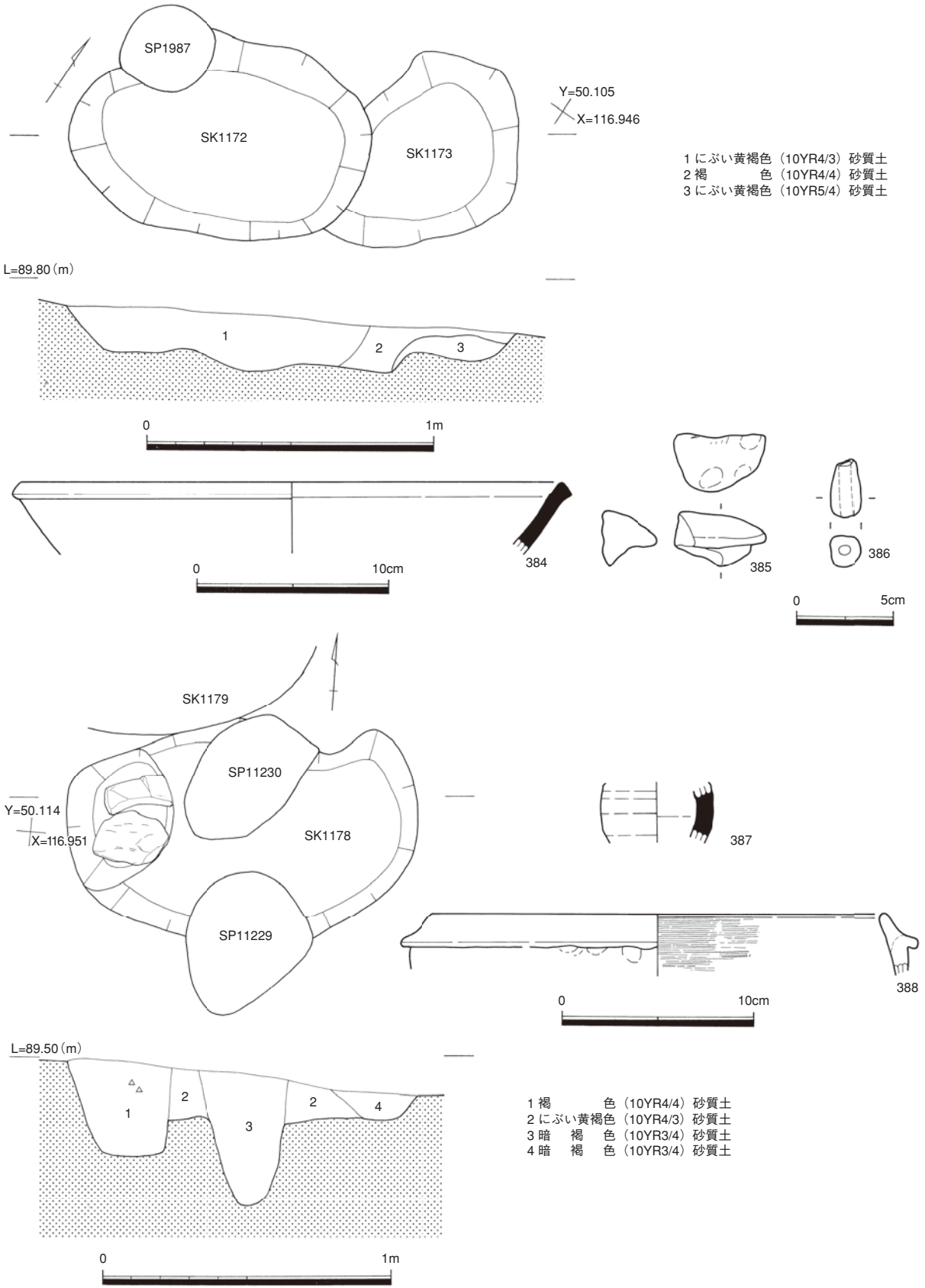


第107図 SK1162・1167 遺構図・出土遺物

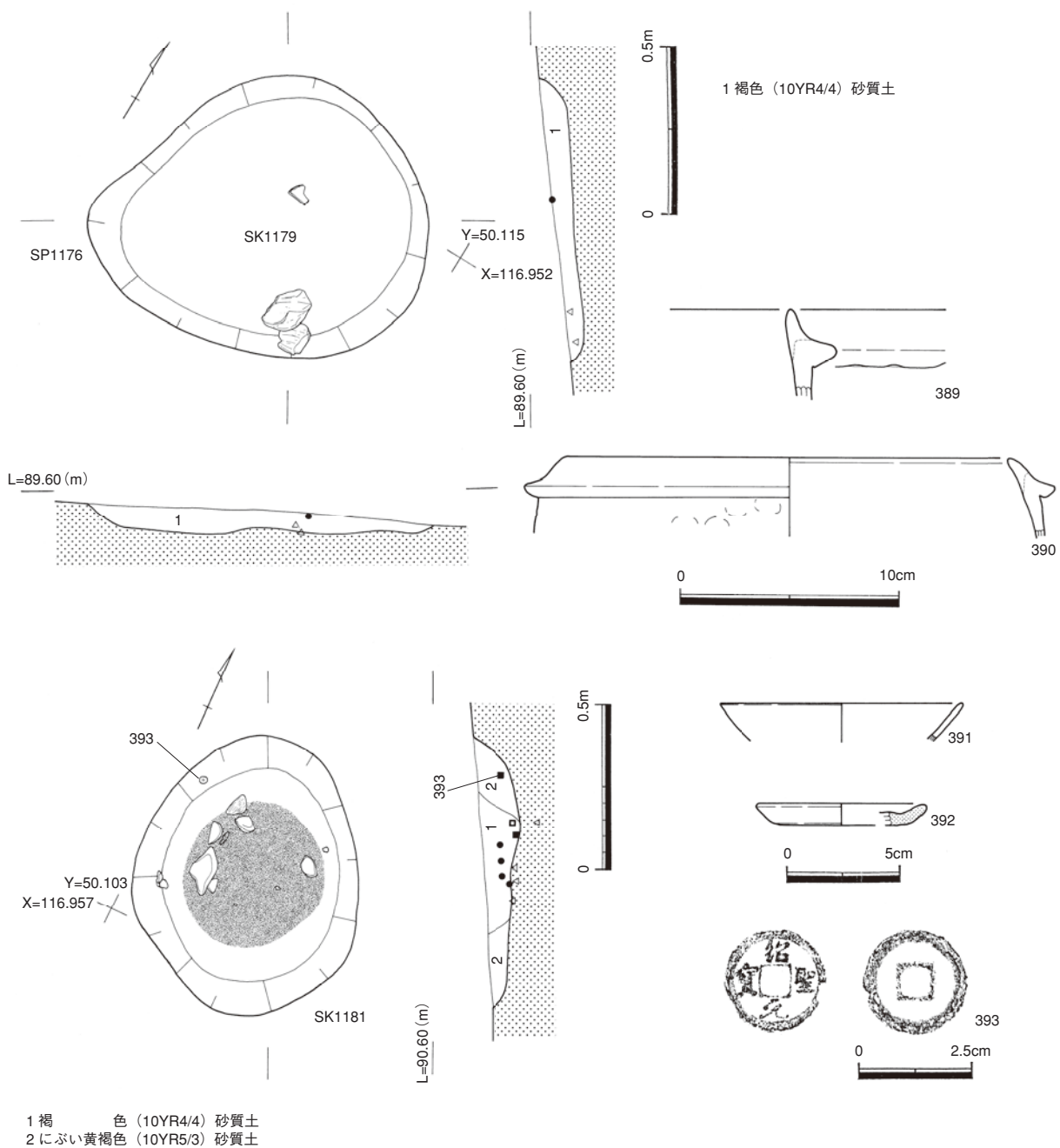
できたのは銭貨5枚(379~383)である。379は「開元通宝」、380は「皇宋通寶」、381・382は「熙寧元寶」、383は「元豊通寶」である。379を除く4枚は北宋銭である。379は、初鑄年が621年のものである。

172・173号土坑 (SK1172・1173) (第108図)

10-3区 B-72で、SK1172がSK1173を切る状態で確認した土坑。またSK1172は、SP1987に切られる。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸1.05m、短軸0.70m、最大深度0.20mを測る。SK1173は平面形態・底面形態ともにやや楕円形に近く、断面形態は舟底形を呈する。規模は長



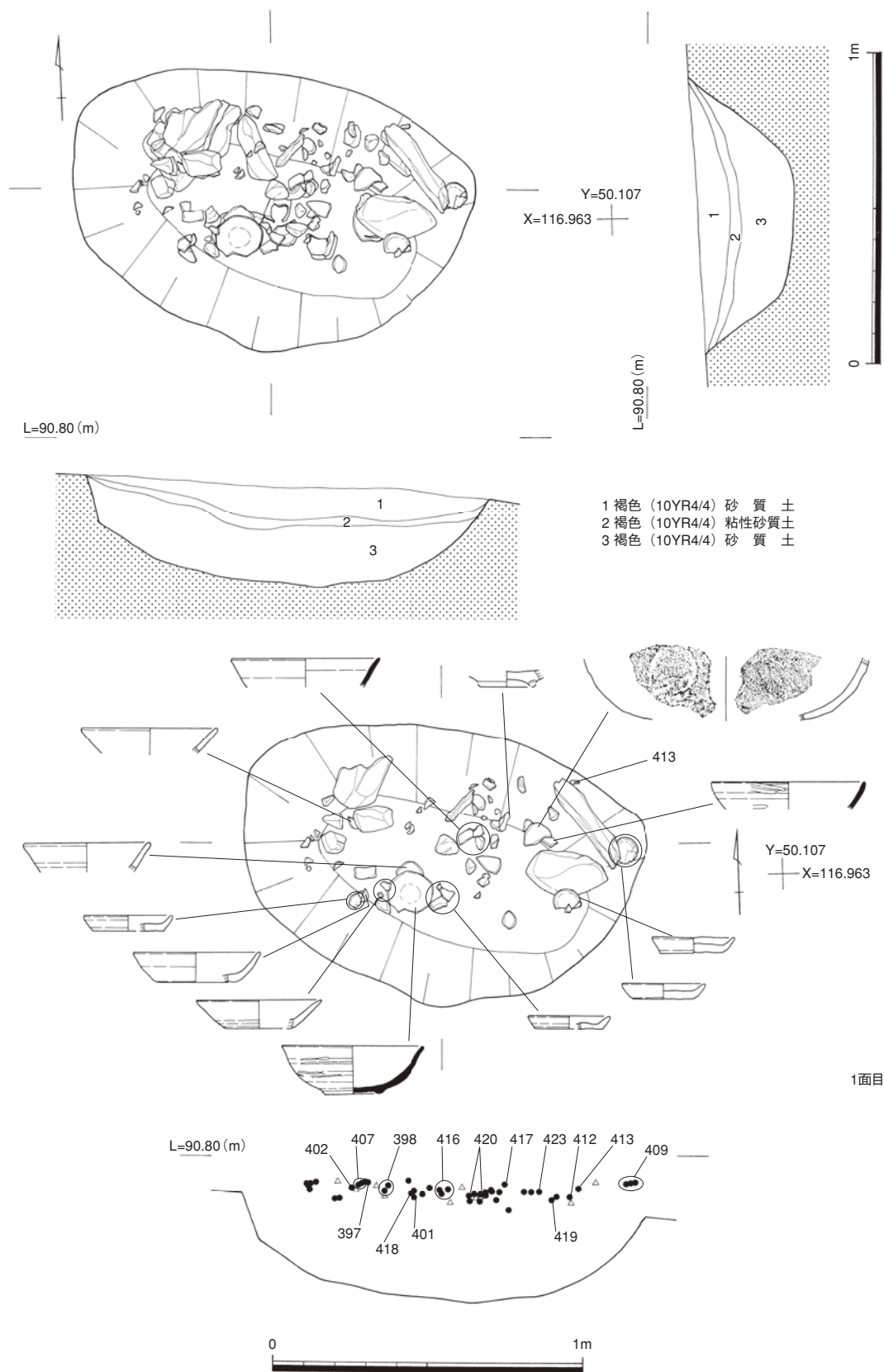
第108図 SK1172・1173・1178 遺構図・出土遺物



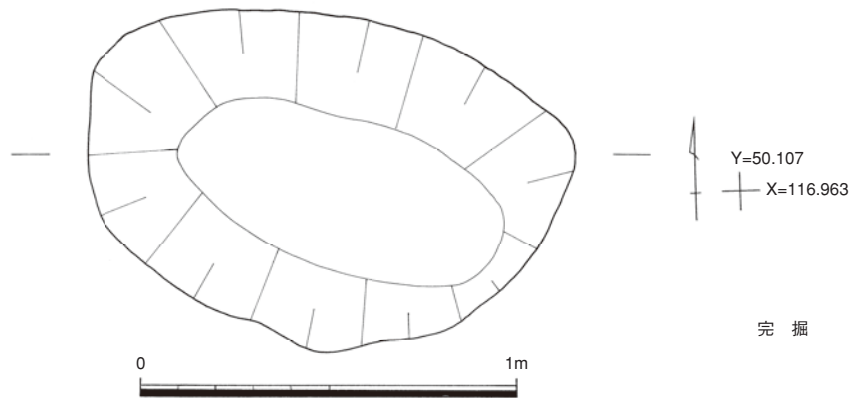
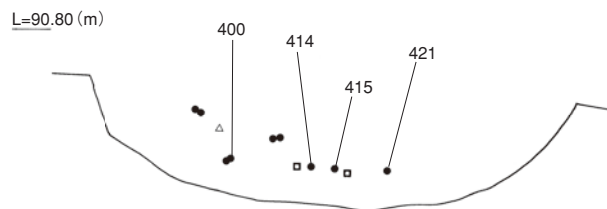
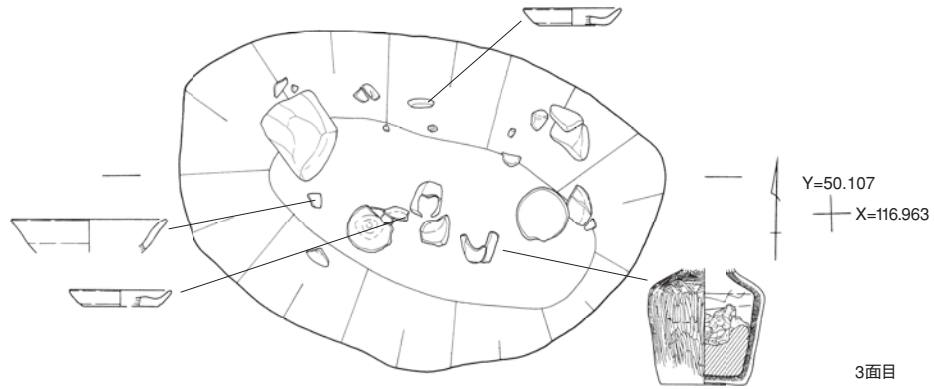
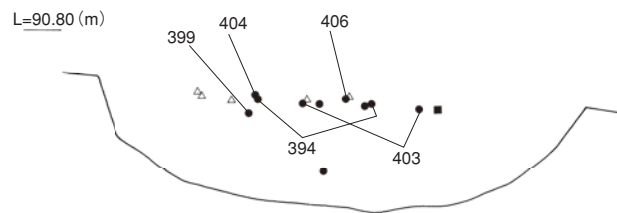
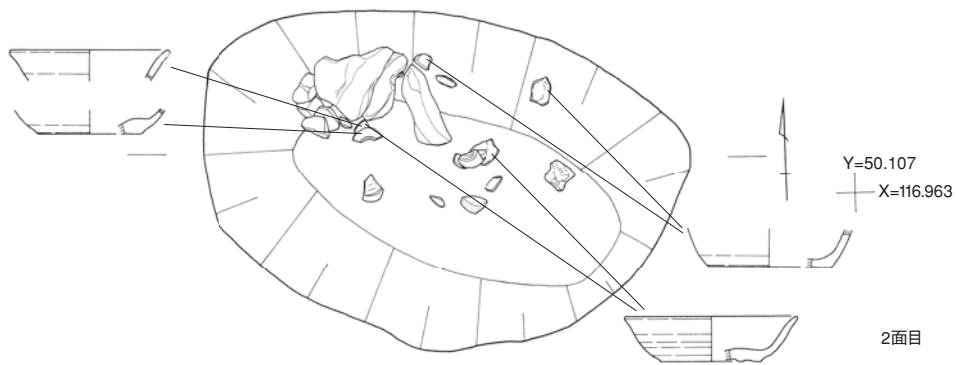
第109図 SK1179・1181 遺構図・出土遺物

軸の最大長0.54m、短軸0.65m、最大深度0.16mを測る。覆土は3層に分層でき、1層はにぶい黄褐色砂質土で炭化物をやや多く含む。SK1172の覆土である。2・3層はSK1173の覆土で、2層は褐色砂質土、3層はにぶい黄褐色砂質土を呈する。

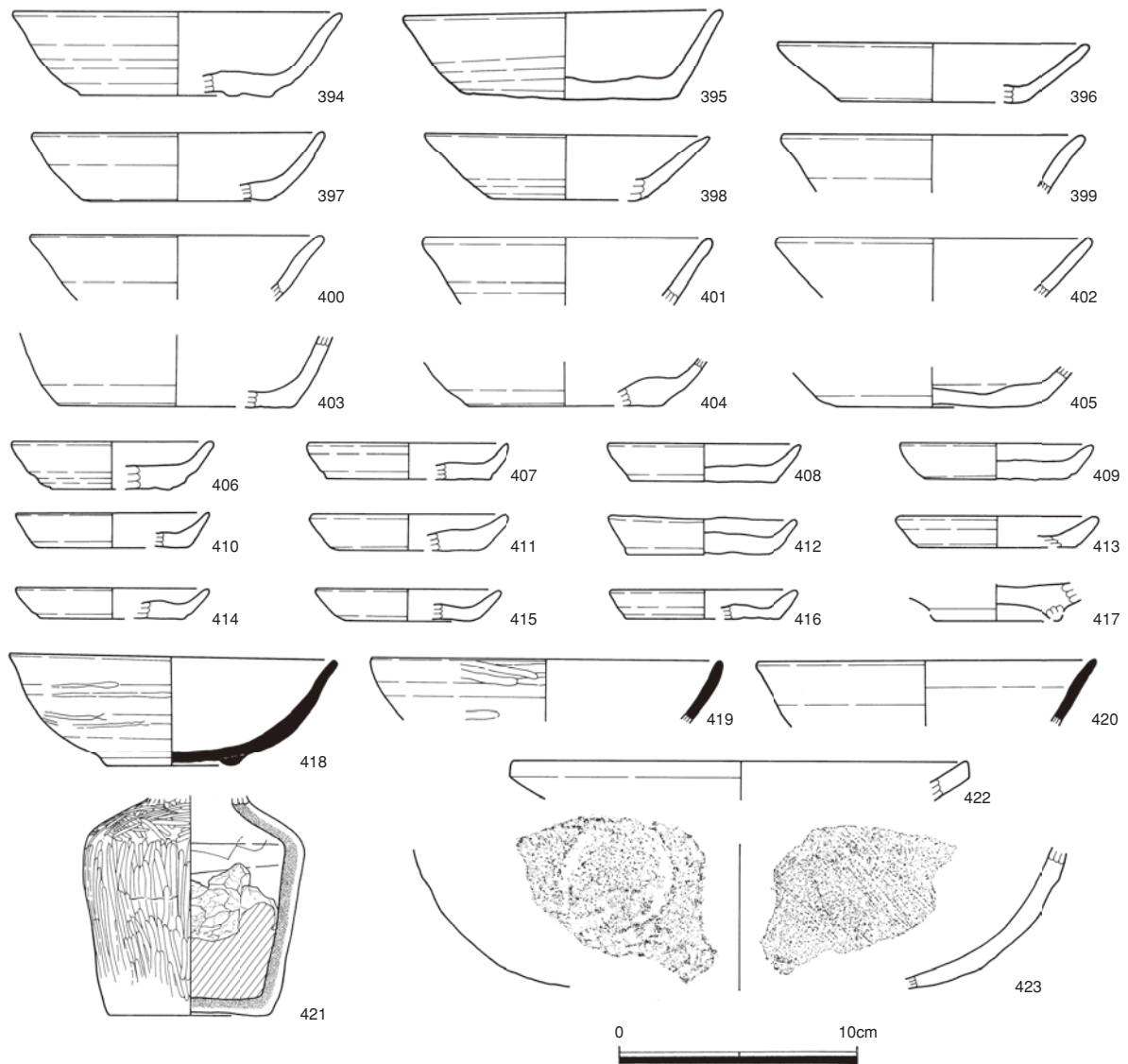
SK1172から土師質土器片、土錘が出土し、図化できたのは破損した土錘(386)のみである。SK1173では須恵質土器椀・こね鉢、焼土塊、不明土製品が出土し、図化できたのは須恵質土器こね鉢(384)と不明土製品(385)である。



第110図 SK1189 遺構図 (1)



第111図 SK1189 遺構図 (2)

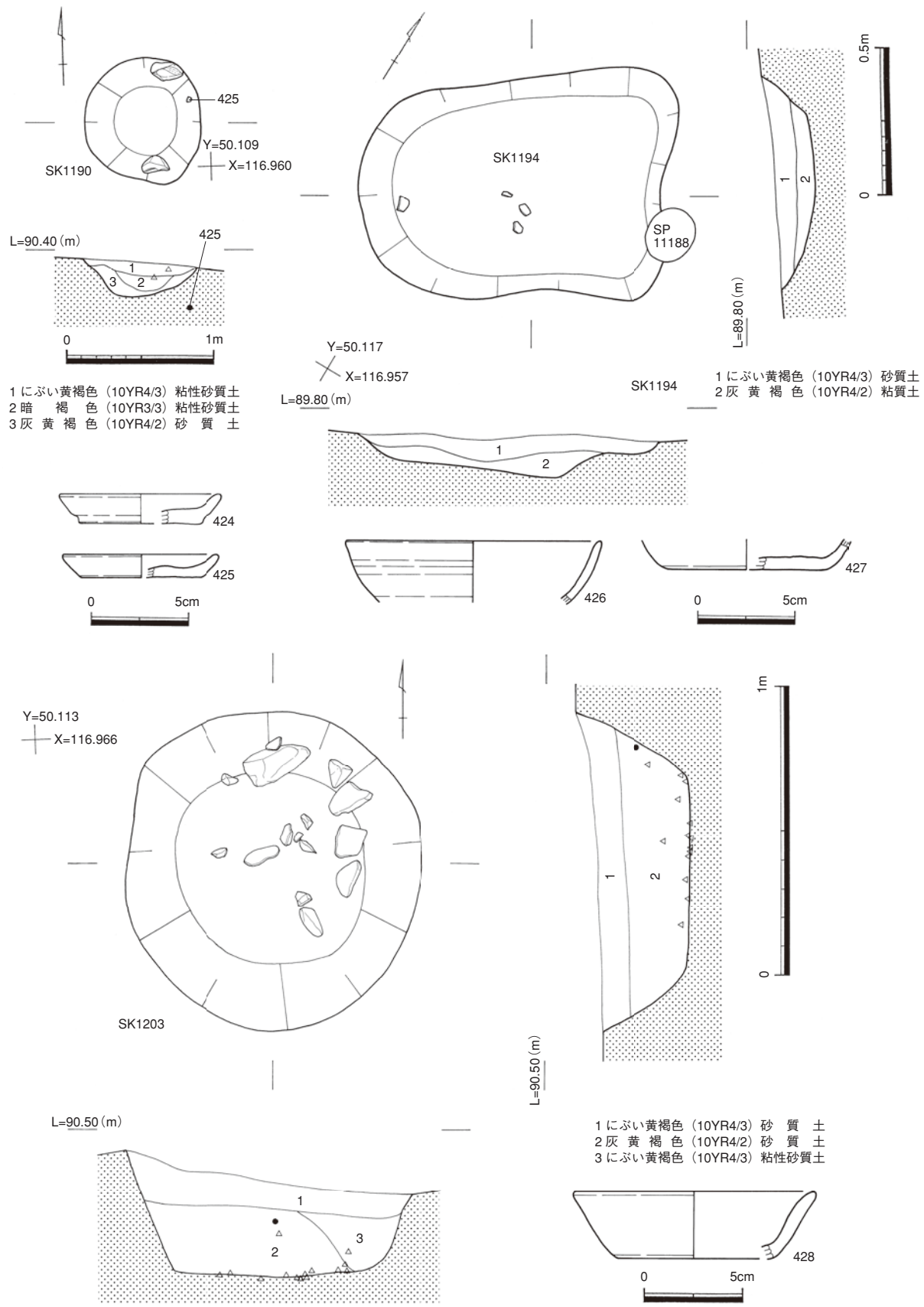


第112図 SK1189 出土遺物

178号土坑 (SK1178) (第108図)

10-3区 C-73で確認された土坑。SP11229・11230、および調査時に確認できなかったもう一基の柱穴の計3基に切られている。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈する。長軸1.23m、短軸0.72m、最大深度0.48mを測る。覆土は4層に分層されるが、1・3層は別遺構である柱穴の覆土である。土坑の覆土は2・4層で、2層はにぶい黄褐色砂質土で小礫を含み、4層は暗褐色砂質土で炭化物を少量含む。

遺物は土師質土器杯・羽釜、炭化物、羽口、炉壁、陶器瓶、鉄滓が出土し、図化できたのは土師質土器羽釜(388)、陶器瓶(387)のみである。



第113図 SK1190・1194・1203 遺構図・出土遺物

179号土坑 (SK1179) (第109図)

10-3区 C-73で確認された土坑。SP1176と切り合い関係にあるが、前後関係は不明である。平面形態・底面形態はともにやや不整な円形、断面形態は舟底台形を呈し、長軸1.05m、短軸0.85m、最大深度0.08mを測る。覆土は褐色砂質土1層で、小礫を含む。

遺物は土師質土器小皿・土師質土器片・鍋・羽釜が出土し、図化できたのは土師質土器羽釜(389・390)である。390は、内外面に炭化物の付着が多く認められる。

181号土坑 (SK1181) (第109図)

10-3区 D-71でSP11554を切った状態で確認された土坑。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.85m、短軸0.69m、最大深度0.13mを測る。覆土は2層に分層され、1層は褐色砂質土で炭化物を多量に含み、5～10cm大の礫を少量含む。2層はにぶい黄褐色砂質土で1層より少ないが炭化物を多量に含み、3～5cm大の礫も含む。

遺物は土師質土器杯・小皿・皿・釜、須恵質土器小皿、瓦質小皿、青磁片、銭貨、鉄滓、サヌカイト剥片が出土し、図化できたのは土師質土器皿(391)、瓦質小皿(392)、銭貨(393)である。391・392の底部は、回転ヘラ切りを施す。393は北宋銭である「紹聖元寶」で、金箔が認められる。

189号土坑 (SK1189) (第110～112図)

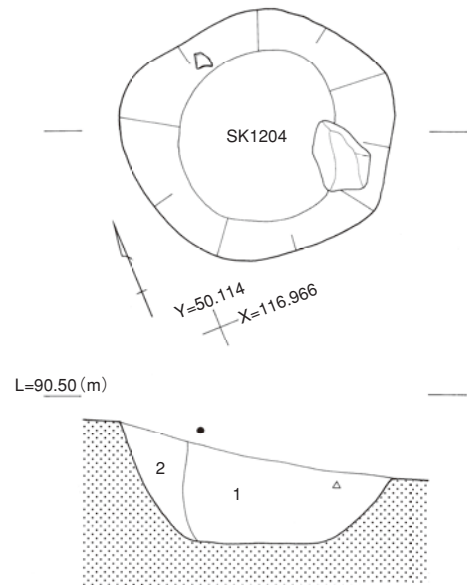
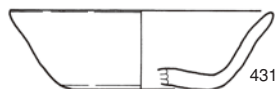
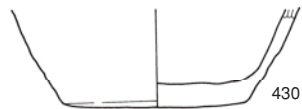
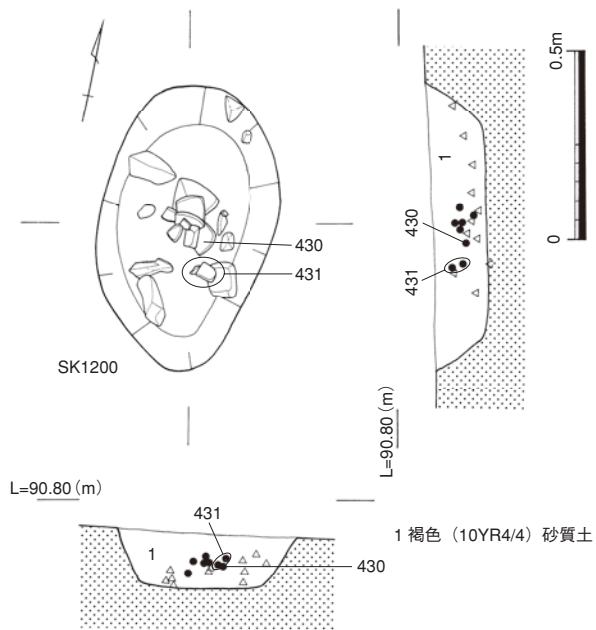
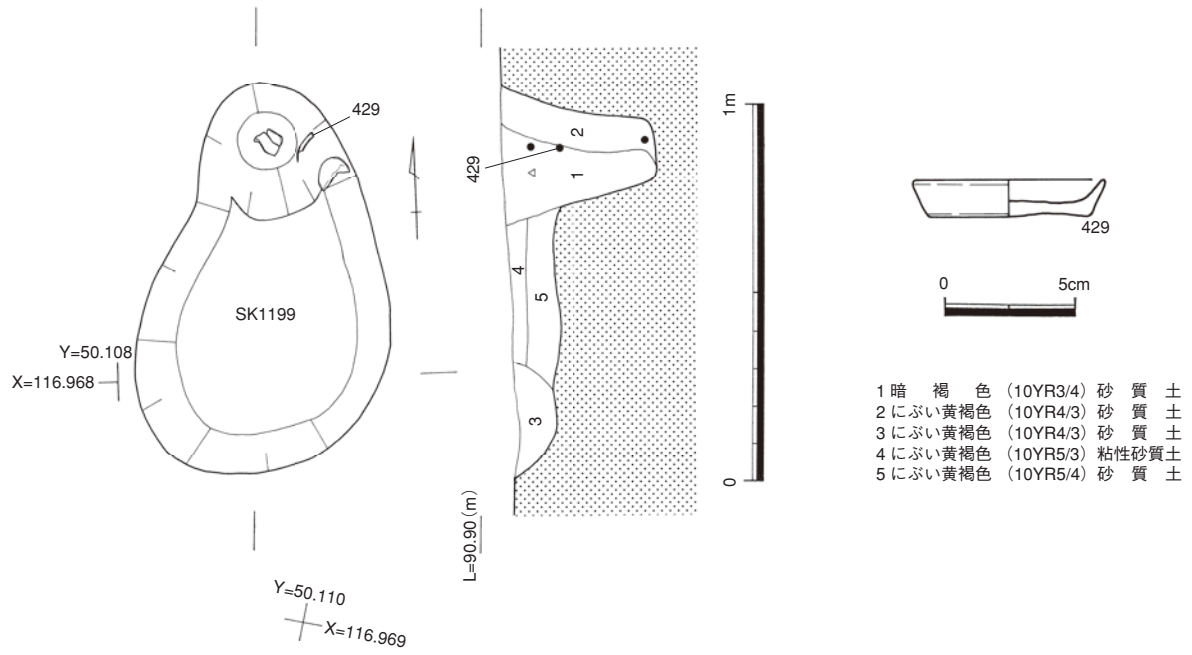
10-3区 E-72で確認した土坑。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸1.29m、短軸0.90m、最大深度0.33mを測る。覆土は褐色を呈し、含有物の違いから3層に分層できる。1層は直径20～30cm大の礫を含み、木炭状の炭化物が塊状に混ざる。2層はにぶい黄橙色土ブロックを多量に混入し、ややしまりがある。3層は1層よりやや暗く炭化物を少量含む。遺物は1・3層を中心に出土し、特に1層からの出土量が多い。

遺物は土師質土器椀・杯・皿・小皿・羽釜・こね鉢・壺、須恵質土器椀・こね鉢、炭化物、焼土塊、鉄滓が出土し、図化できたのは土師質土器椀(417)・杯(394～395、397～405)・皿(396)・壺(421)・小皿(406～416)・こね鉢(422)・羽釜(423)、須恵質土器椀(418～420)である。402・403は内外面に、394・409・412は内面に炭化物が付着する。須恵質土器椀のうち、419は内面口縁部に、420は内外面に黒色帯を認められる。421は内側に鉄塊が認められ、内面の器壁は赤化している。これは熔融状態の鉄を壺に流し込み、高温のために被熱したものと思われる。

190号土坑 (SK1190) (第113図)

10-3区 E-72で確認した土坑。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.86m、短軸0.80m、最大深度0.25mを測る。覆土は3層に分層でき、1層はにぶい黄褐色粘性砂質土。2層は暗褐色粘性砂質土で、炭化物を多く含む。3層は灰黄褐色砂質土で、炭化物を少量含む。

遺物は土師質土器杯・小皿・脚部が出土し、図化できたのは土師質土器小皿(424・425)のみである。どちらも内外面回転ナデで、底部は回転ヘラ切りのちナデを施す。



第114図 SK1199・1200・1204 遺構図・出土遺物

194号土坑 (SK1194) (第113図)

10-3区 D-74で、SP11188に切られた状態で確認された土坑。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸1.06m、短軸0.73m、最大深度0.14mを測る。覆土は2層に分層でき、1層はにぶい黄褐色砂質土で小礫をやや多く含む。2層は灰黄褐色粘質土で、炭化物を含む。

遺物は土師質土器椀・杯・小皿・鍋、須恵質土器椀、鉄滓が出土し、図化できたのは土師質土器椀(426)、土師質土器杯(427)のみである。427は、底部で回転ヘラ切りのち板ナデを施す。

199号土坑 (SK1199) (第114図)

10-3区 F-72で検出した土坑。調査時には確認できなかったが、土層堆積状況から柱穴2基に切られている。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は舟底形で、長軸1.03m、短軸0.66m、最大深度0.41mを測る。覆土は土質および含有物から5層に分層できるものの、1～3層は柱穴の覆土にあたる。4・5層が本遺構の覆土となり、にぶい黄褐色を呈する。含有物から2層に分層でき、5層は小礫を多量に含む。

遺物は土師質土器杯・小皿・釜が出土し、図化できたのは土師質土器小皿(429)のみである。429の底部は回転ヘラ切りで、部分的に板ナデを施す。

200号土坑 (SK1200) (第114図)

10-3区 F-72・73で確認された土坑。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.76m、短軸0.46m、最大深度0.15mを測る。覆土は、褐色砂質土1層から成る。

遺物は土師質土器杯・釜、須恵質土器椀が出土し、図化できたのは土師質土器杯(430・431)のみである。どちらも底部は回転ヘラ切りのちにナデを施す。

203号土坑 (SK1203) (第113図)

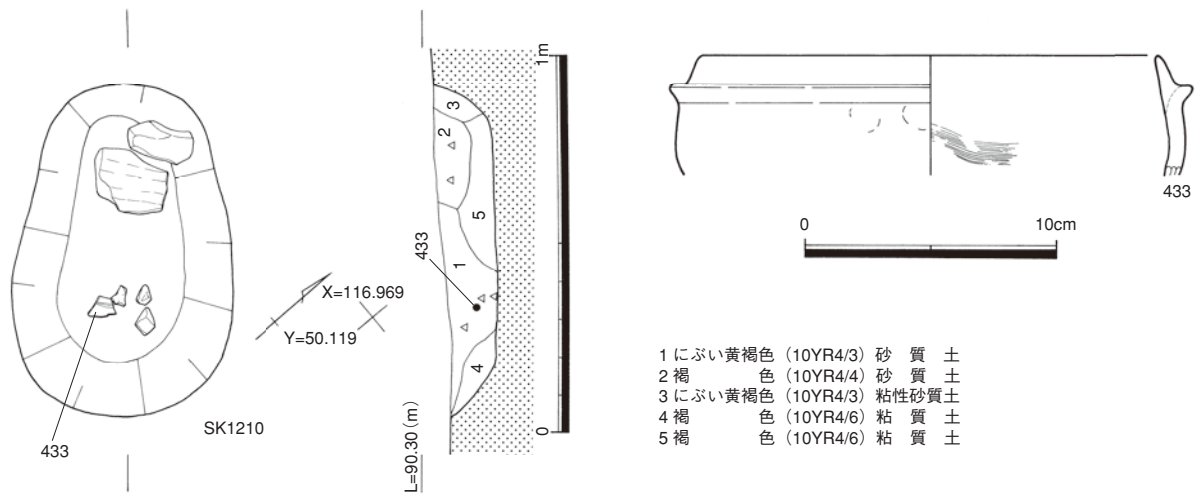
10-3区 F-73で確認された土坑。平面形態・底面形態はともに円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.10m、短軸1.03m、最大深度0.34mを測る。覆土は3層に分層でき、1層はにぶい黄褐色砂質土で3cm以下の風化砂岩を多量に含み、炭化物を少量含む。2層は灰黄褐色砂質土で直径10～20cm大の礫を含み、炭化物を少量含む。3層は、にぶい黄褐色粘性砂質土である。

遺物は土師質土器杯・体部片、鉄滓が出土し、図化できたのは土師質土器杯(428)のみである。

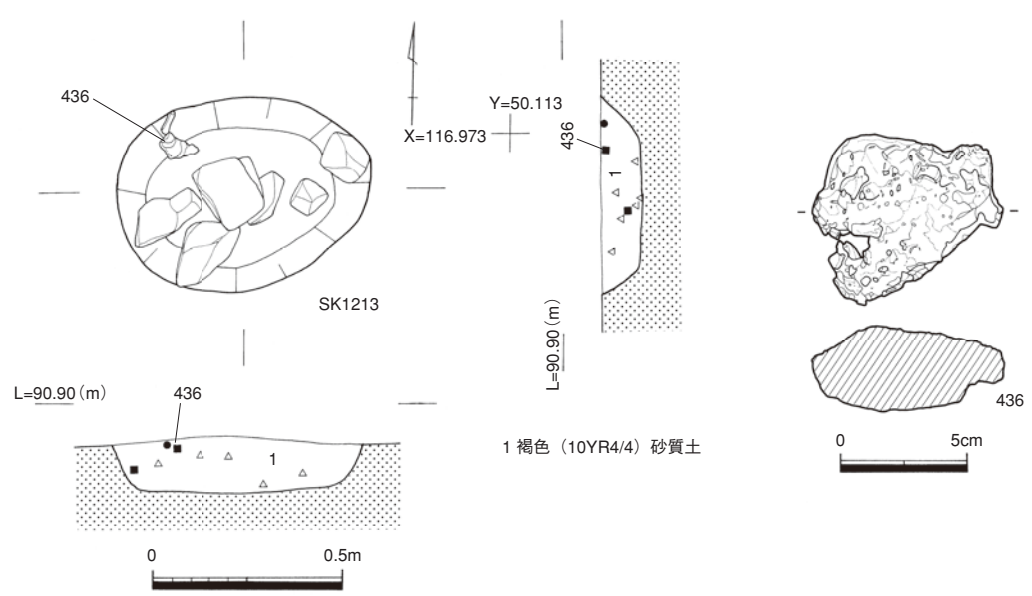
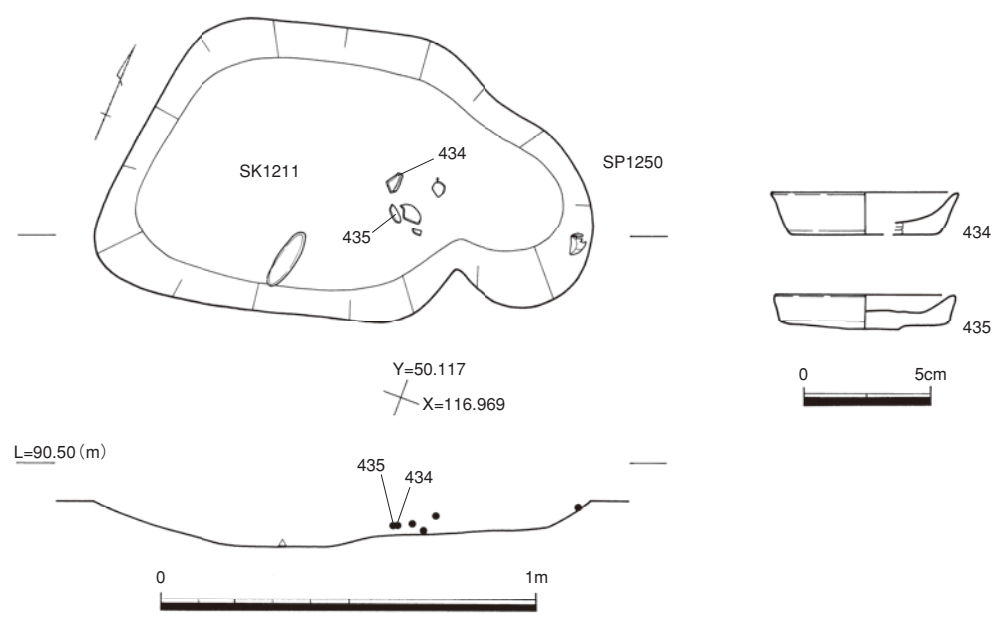
204号土坑 (SK1204) (第114図)

10-3区 F-73で確認された土坑。平面形態・底面形態はともに円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.72m、短軸0.66m、最大深度0.24mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は灰黄褐色砂質土で炭化物、直径20cm前後の礫を含む。2層はにぶい黄褐色粘性砂質土で炭化物を少量含み、10cm前後の礫を含む。

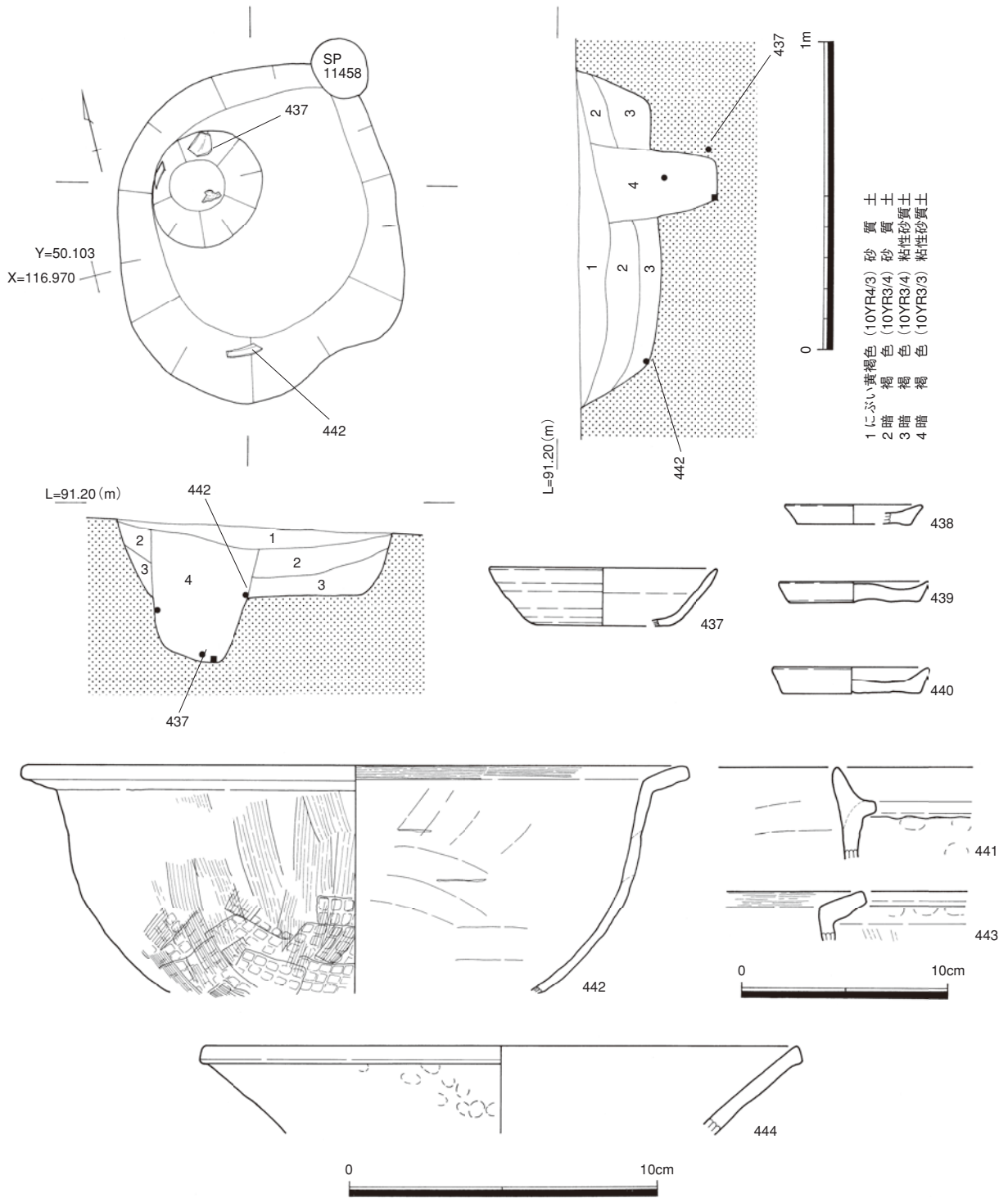
遺物は土師質土器杯・体部、黒色土器椀、須恵質土器椀、瓦器椀が出土し、図化できたのは瓦器椀(432)のみである。



- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土
- 2 褐色 (10YR4/4) 砂質土
- 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性砂質土
- 4 褐色 (10YR4/6) 粘質土
- 5 褐色 (10YR4/6) 粘質土



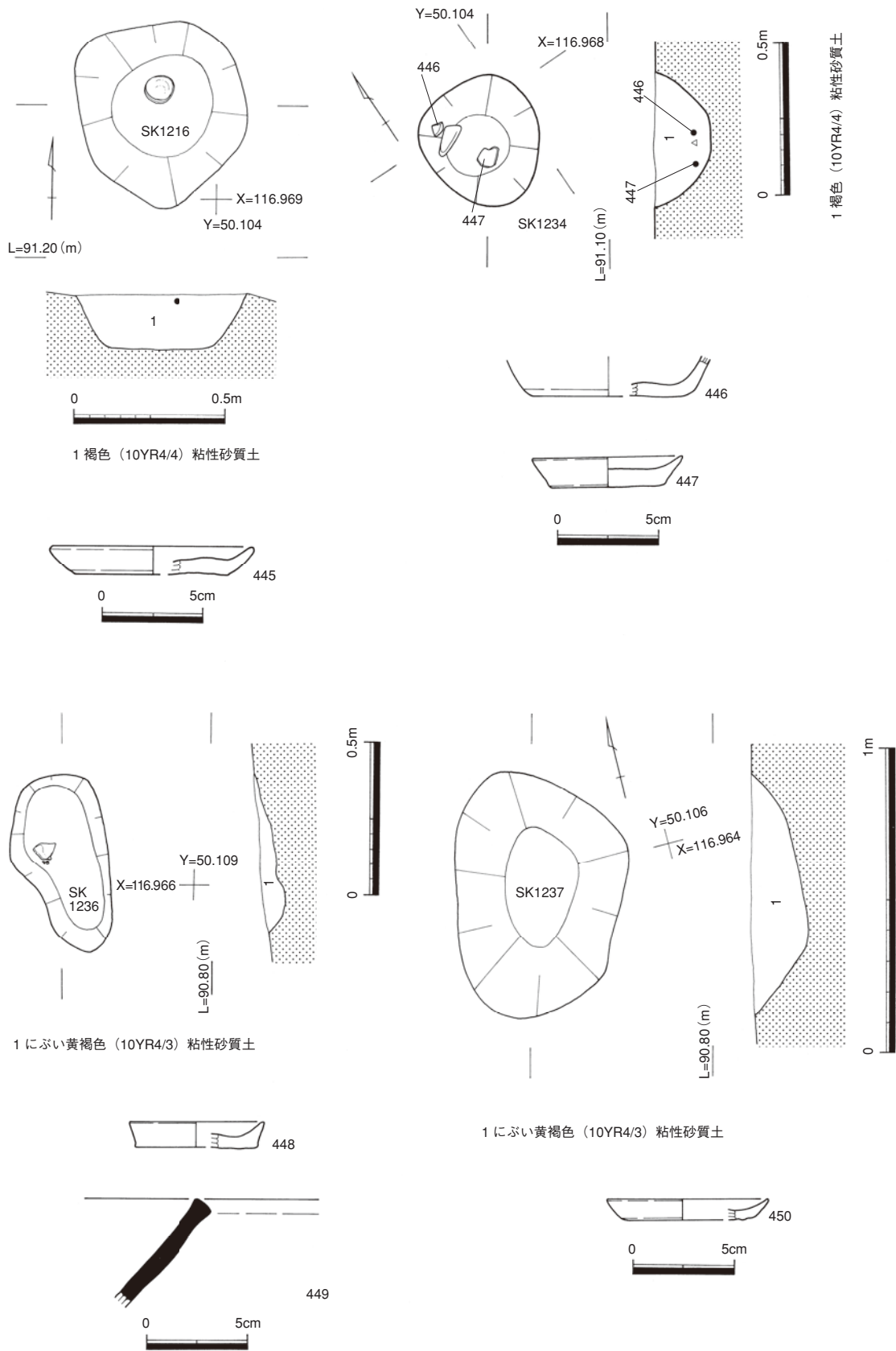
第115図 SK1210・1211・1213 遺構図・出土遺物



第116図 SK1215 遺構図・出土遺物

210号土坑 (SK1210) (第115図)

10-3区 F-74で確認された土坑。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.87m、短軸0.58m、最大深度0.15mを測る。覆土は土質および含有物から5層に分層でき、1・3層はにぶい黄褐色砂質土で1層は炭化物をやや多く含み、3層は炭化物を少量含む。2層は褐色砂質土で炭化物を少量含む。4・5層は褐色粘質土で、5層は小礫を多量に含む。



第117図 SK1216・1234・1236・1237 遺構図・出土遺物

遺物は土師質土器片・羽釜・甕、須恵質土器椀、壁土、鉄滓が出土し、図化できたのは土師質土器羽釜(433)のみである。

211号土坑 (SK1211) (第115図)

10-3区 F-74でSP1250と切り合い関係にある状態で確認された土坑。切り合いの前後関係は、不明である。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸1.32m、短軸0.79m、最大深度0.08mを測る。

遺物は土師質土器杯・小皿が出土し、図化できたのは土師質土器小皿(434・435)である。底部で434は回転ヘラ切りのちナデを、435では回転ヘラ切りのち、底部中央部の盛り上がり部分のみ板ナデを施す。

213号土坑 (SK1213) (第115図)

10-3区 G-73で確認された土坑。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.67m、短軸0.51m、最大深度0.15mを測る。覆土は褐色砂質土1層で、炭化物を少量含む。

遺物は土師質土器杯、黒色土器椀、溶解炉、鉄滓が出土し、図化できたのは鉄滓(436)のみである。

215号土坑 (SK1215) (第116図)

10-3区 F・G-71でSP11458に切られた状態で確認された土坑。また調査時に確認できなかったものの、土層堆積状況から別の柱穴にも切られることがわかった。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.08m、短軸0.92m、最大深度0.45mを測る。

遺物は土師質土器杯・小皿・鍋・羽釜・こね鉢、黒色土器椀、須恵質土器椀、青磁、鉄滓が出土し、図化できたのは土師質土器杯(437)・小皿(438～440)・鍋(442・443)・羽釜(441)・こね鉢(444)である。杯・小皿の底部は回転ヘラ切りで、439のみあとで板ナデを施す。出土状況から、437と442は柱穴に伴うと推測できる。

216号土坑 (SK1216) (第117図)

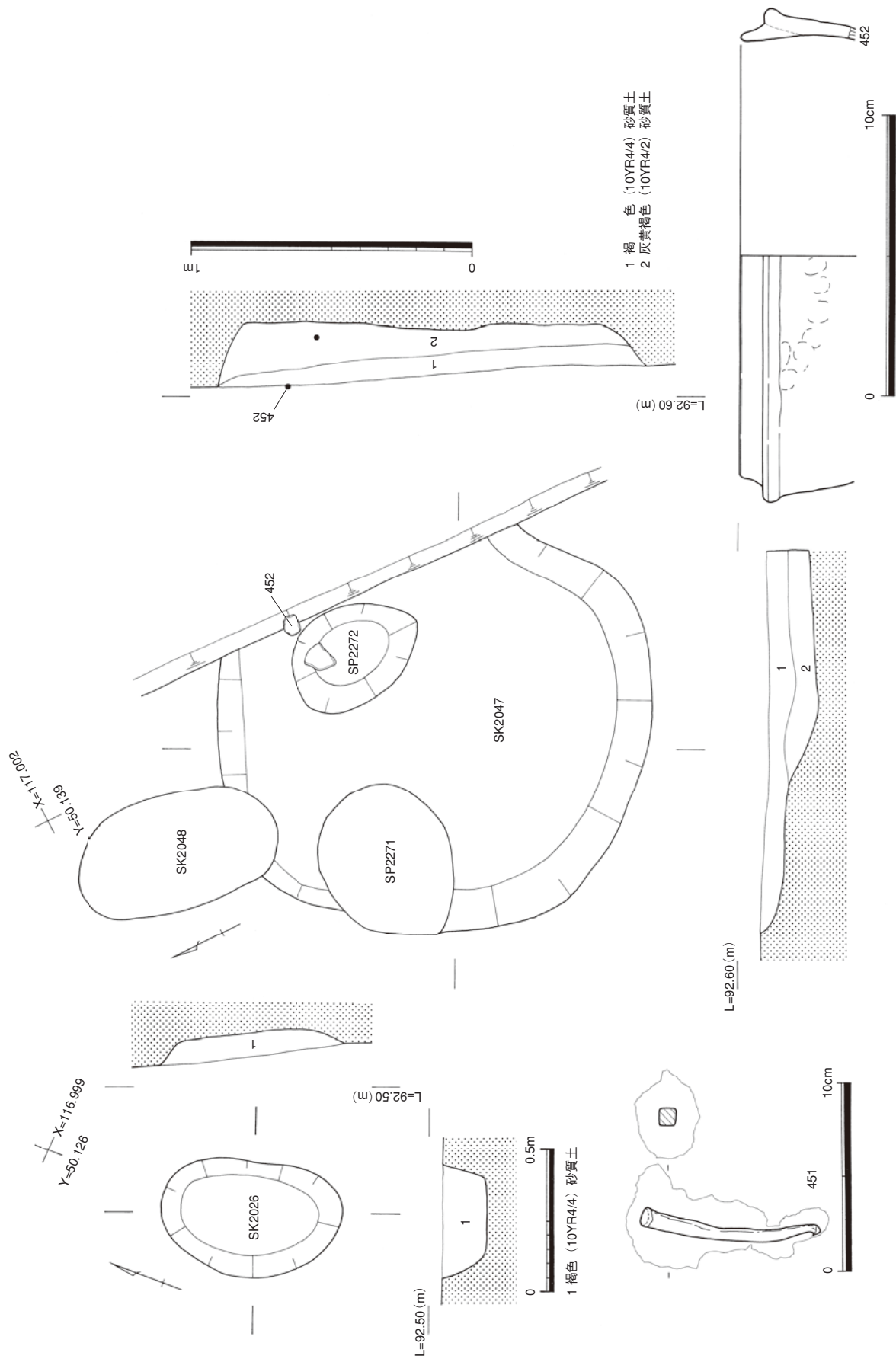
10-3区 F-71で確認された土坑。平面形態・底面形態はともに円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.60m、短軸0.55m、最大深度0.18mを測る。覆土は褐色粘性砂質土1層から成り、にぶい黄橙色粘質土をブロック状に混入する。

遺物は土師質土器杯・小皿、縄文土器片が出土し、図化できたのは土師質土器小皿(445)のみである。445の底部は、回転ヘラ切りのち部分的に板ナデを施す。

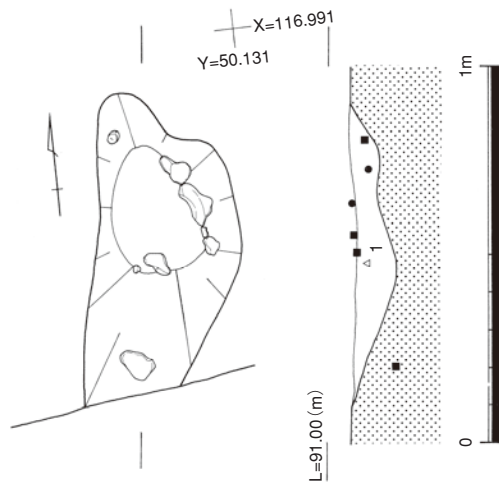
234号土坑 (SK1234) (第117図)

10-3区 F-71で確認された土坑。平面形態・底面形態は円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.43m、短軸0.39m、最大深度0.19mを測る。覆土は褐色粘性砂質土1層から成り、炭化物を少量含む。

遺物は土師質土器杯・小皿、須恵質土器椀、砂岩製磨製石斧が出土し、図化できたのは土師質土器杯(446)・小皿(447)のみである。2点ともに、底部回転ヘラ切りのちナデを施す。



第118図 SK2026・2047 遺構図・出土遺物



1 ぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土

第119図 SK2053 遺構図

遺物は土師質土器杯・小皿が出土し、図化できたのは底部回転ヘラ切りを施す土師質土器小皿(450)のみである。

第二遺構面

26号土坑 (SK2026) (第118図)

10-2区 L-76で確認された土坑。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.66m、短軸0.42m、最大深度0.15mを測る。覆土は、褐色砂質土1層である。

出土遺物は、鉄釘(451)1点のみである。

47号土坑 (SK2047) (第118図)

10-2区 K・L-76でSK2048・SP2271・SP2272に切られた状態で確認された土坑。平面形態・底面形態はともに円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.54m、最大幅1.35m、最大深度0.22mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は褐色砂質土で小礫をやや多く含む。2層は灰黄褐色砂質土である。

遺物は土師質土器羽釜・甕、鉄滓が出土し、図化できたのは土師質土器羽釜(452)のみである。452の鏝部から下位の体部には、多量の炭化物が付着する。

53号土坑 (SK2053) (第119図)

10-2区 L-77で確認された土坑。北に突出部をもつ楕円形に近い不整形で、調査区南壁で一部切られる。底面形態は楕円形、断面形態は舟底形を呈し、最大長0.80m、短軸0.38m、最大深度0.11mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土1層から成り、炭化物を多く含む。

遺物は羽口、溶解炉、鉄滓が出土したが、図化できるものはなかった。

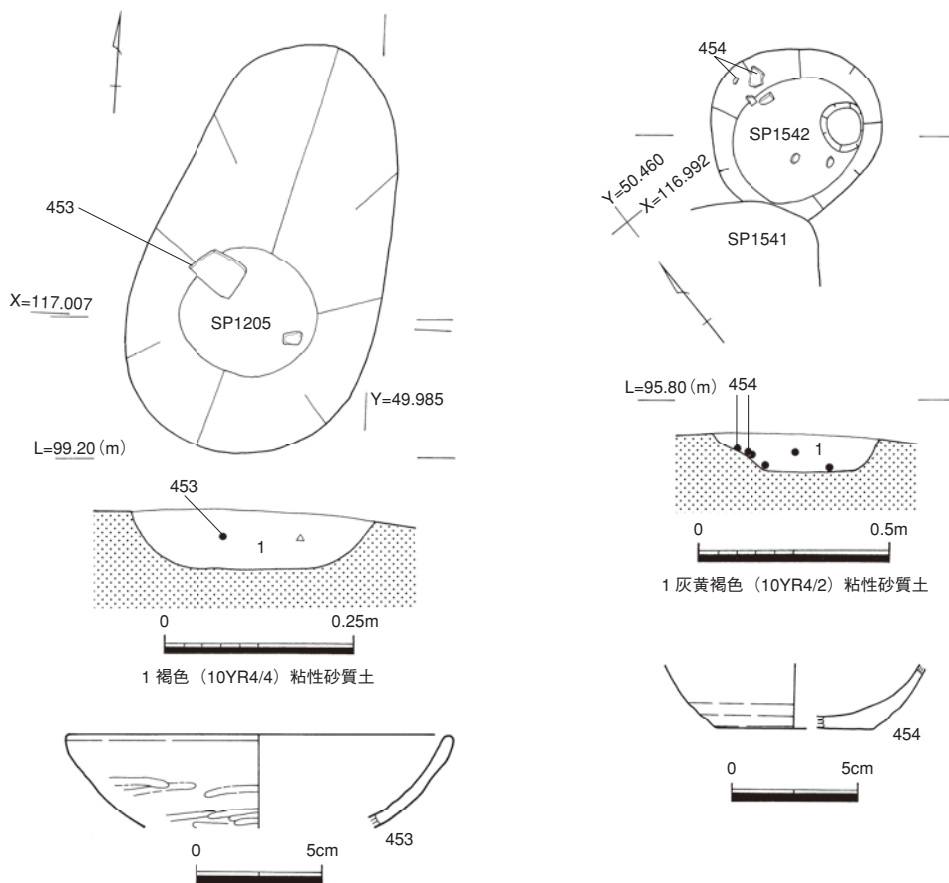
236号土坑 (SK1236) (第117図)

10-3区 F-72で確認された土坑。平面形態・底面形態はともに不整楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.59m、短軸0.29m、最大深度0.07mを測る。覆土はにぶい黄褐色粘性砂質土1層で、炭化物を少量含む。

遺物は土師質土器小皿・体部片、須恵質土器こね鉢が出土し、図化できたのは土師質土器小皿(448)、須恵質土器こね鉢(449)のみである。448の底部は、回転ヘラ切りのちナデを施す。

237号土坑 (SK1237) (第117図)

10-3区 F-72で確認された土坑。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.80m、短軸0.54m、最大深度0.18mを測る。覆土はにぶい黄褐色粘性砂質土1層で、炭化物を少量含む。



第120図 SP1205・1542 遺構図・出土遺物

柱穴内出土遺物

ここでは、掘立柱建物を構成するに至らなかった柱穴の内、遺物の出土状況および出土遺物が資料化可能なものについて述べることにする。

柱穴

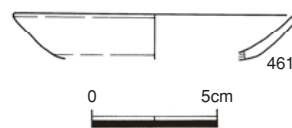
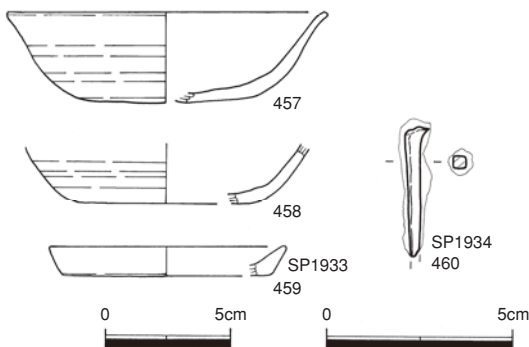
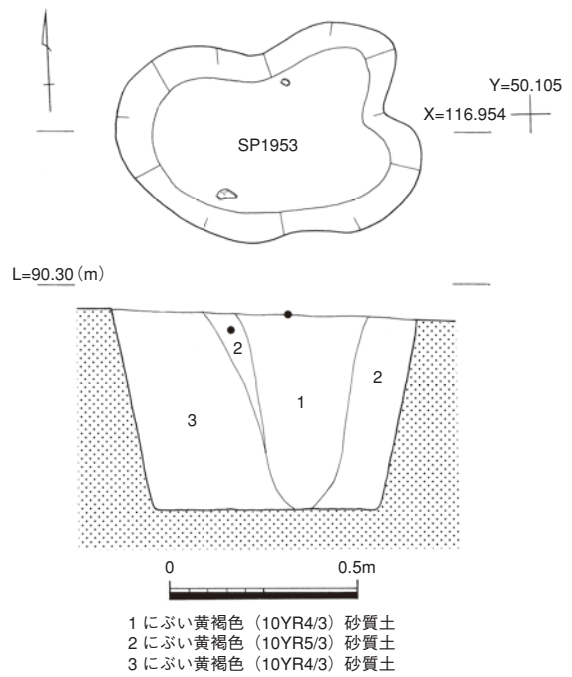
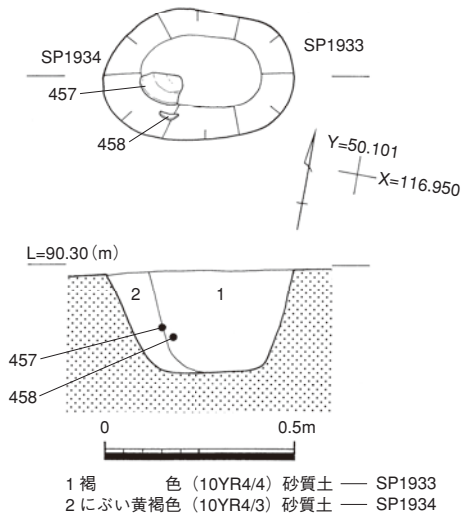
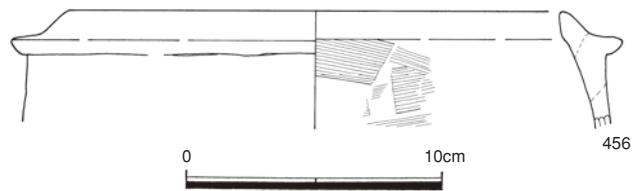
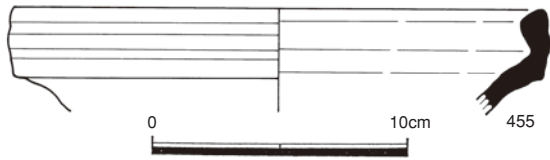
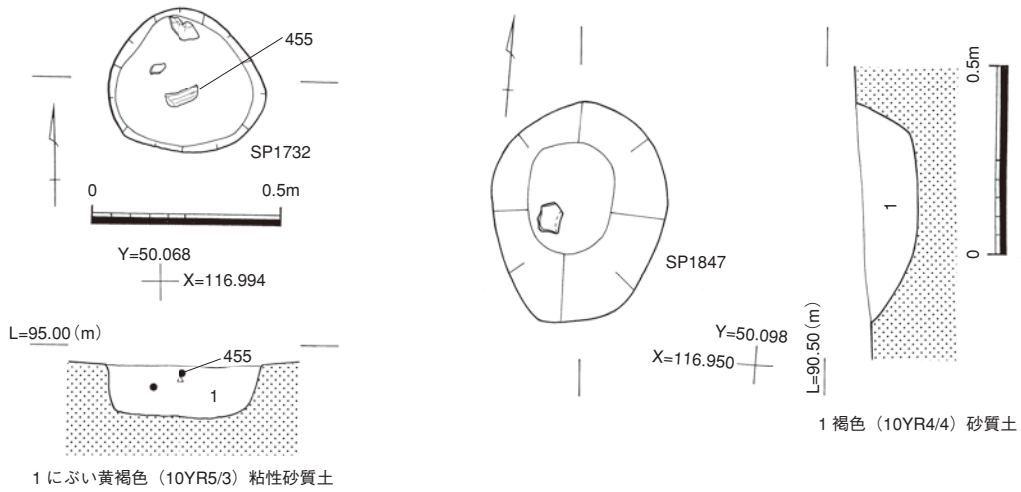
柱穴205号 (SP1205) (第120図)

1区 N-47で確認された柱穴。平面形態は楕円形、底面形態は円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.56m、短軸0.33m、最大深度0.08mを測る。覆土は褐色粘性砂質土1層で、5cm前後の礫を含む。

遺物は土師質土器椀、弥生土器片が出土し、図化できたのは内外面に炭化物が若干付着する土師質土器椀(453)である。453は回転ヨコナデの後、部分的にミガキを施す。

柱穴542号 (SP1542) (第120図)

2区 K-60でSP1541に切られた状態で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.45m前後、最大深度0.10mを測る。覆土は灰黄褐色粘性砂質土1層で、しまりは強い。遺物は、土師質土器杯片(454)が出土した。



第121図 SP1732・1847・1933・1934・1953 遺構図・出土遺物

柱穴732号 (SP1732) (第121図)

2区 K-64で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに円形、断面形態は方形を呈し、直径0.40m前後、最大深度0.14mを測る。覆土はにぶい黄褐色粘性砂質土1層で、炭化物を微量に含む。

遺物は須恵質土器壺・体部片、備前産と思われる陶器片が出土し、図化できたのは須恵質土器壺(455)のみである。455は内外面で回転ナデを施し、口縁端部に溶着を防ぐためと思われる白色物が付着する。

柱穴847号 (SP1847) (第121図)

10-3区 C-70で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.58m、短軸0.46m、最大深度0.15mを測る。覆土は、褐色砂質土1層である。

遺物は、土師質土器羽釜(456)のみの出土である。

柱穴933・934号 (SP1933・1934) (第121図)

10-3区 C-71で確認された柱穴。調査時には確認できなかったが、土層堆積からSP1933がSP1934を切る。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈する。SP1933は長軸0.37m、短軸0.30m、最大深度0.27mを、SP1934は最大幅0.34mを測る。覆土はSP1933は褐色砂質土で、炭化物を少量含む。SP1934はにぶい黄褐色砂質土で、直径5cm前後の礫を含む。

遺物は土師質土器杯・小皿・鍋・脚部、焼土塊、鉄釘が出土している。図化できたのは土師質土器杯(457・458)、土師質土器小皿(459)、断面方形を呈する鉄釘(460)である。457～459はSP1933から、460はSP1934からの出土遺物である。杯・小皿は3点ともに底部回転ヘラ切りで、457は炭化物をやや多く付着する。

柱穴953号 (SP1953) (第121図)

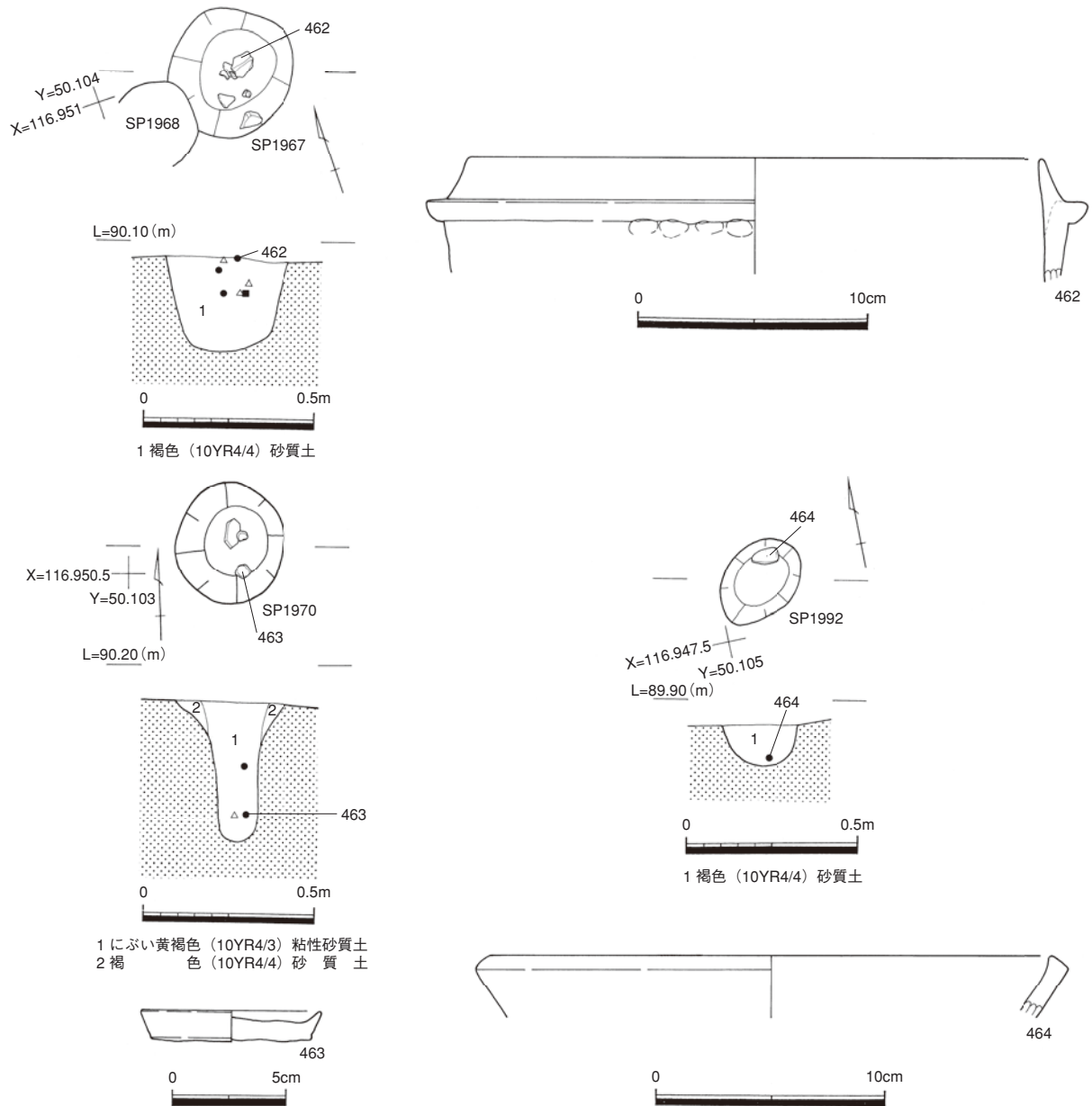
10-3区 C-71で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに不整形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.80m、短軸0.50m、最大深度0.52mを測る。平面形態および土層堆積状況から、2ないしは3基の柱穴・土坑の切り合いを想定できる。覆土はにぶい黄褐色砂質土だが、含有物の違いから3層に分層できる。1層は炭化物を含み、2層は直径5cm弱の礫を含む。

遺物は土師質土器皿・体部片、焼土塊を出土し、図化できたのは口縁部に一部煤が付着する土師質土器皿(461)である。

柱穴967号 (SP1967) (第122図)

10-3区 C-71でSP1968に切られた状態で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.37m前後、最大深度0.28mを測る。覆土は褐色砂質土1層から成る。

遺物は土師質土器羽釜、鉄滓が出土し、図化できたのは土師質土器羽釜(462)のみである。



第122図 SP1967・1970・1992 遺構図・出土遺物

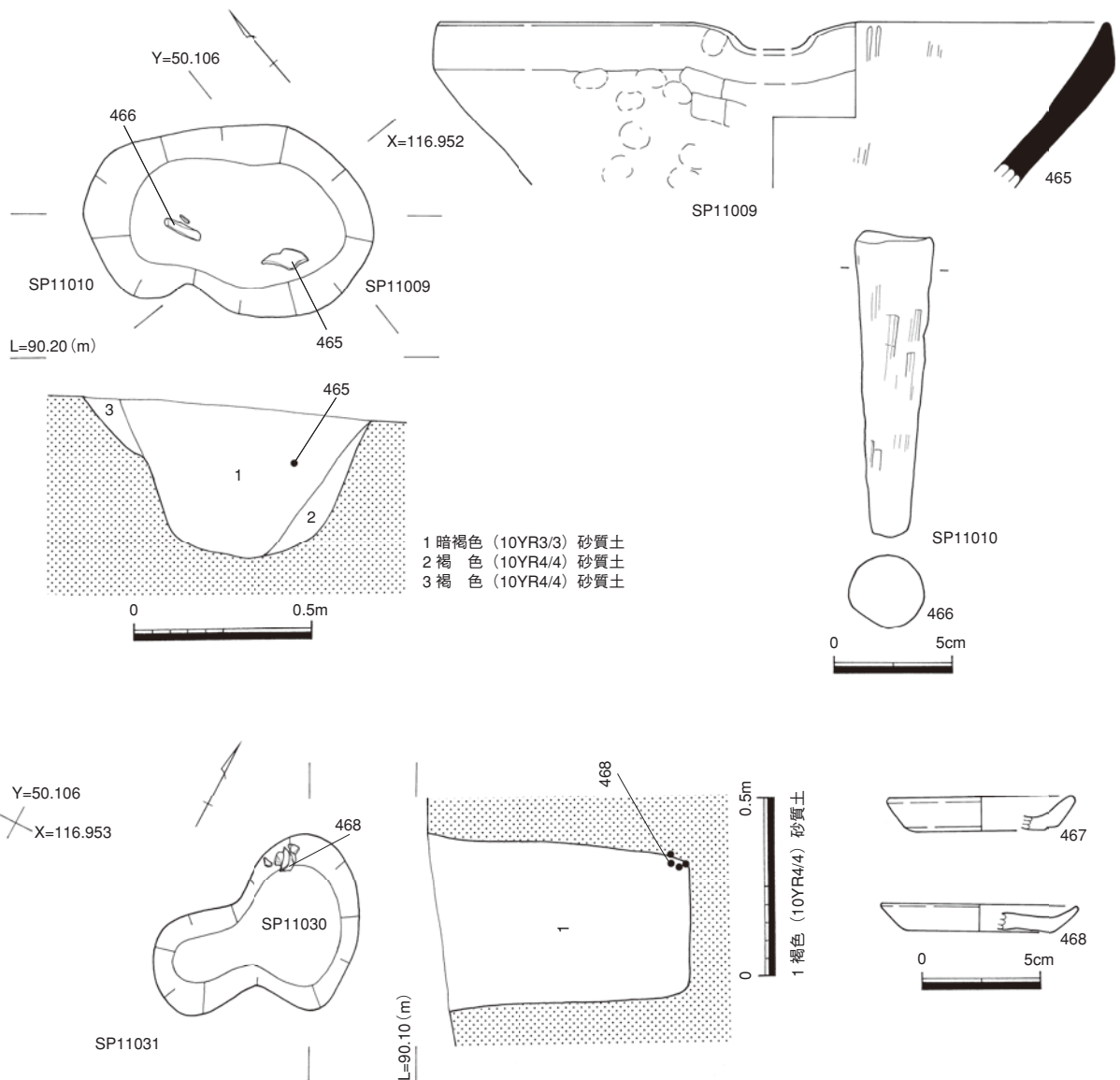
柱穴970号 (SP1970) (第122図)

10-3区 C-71で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともにやや不整な円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.34m前後、最大深度0.41mを測る。覆土は2層に分層でき、1層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、2層は褐色砂質土である。

出土遺物は、底部回転ヘラ切りの痕跡が残る土師質土器小皿1点(463)のみである。

柱穴992号 (SP1992) (第122図)

10-3区 B-72でSP1807を切る形で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.28m、短軸0.20m、最大深度0.12mを測る。覆土は褐色砂質土1層で、炭化物をわずか



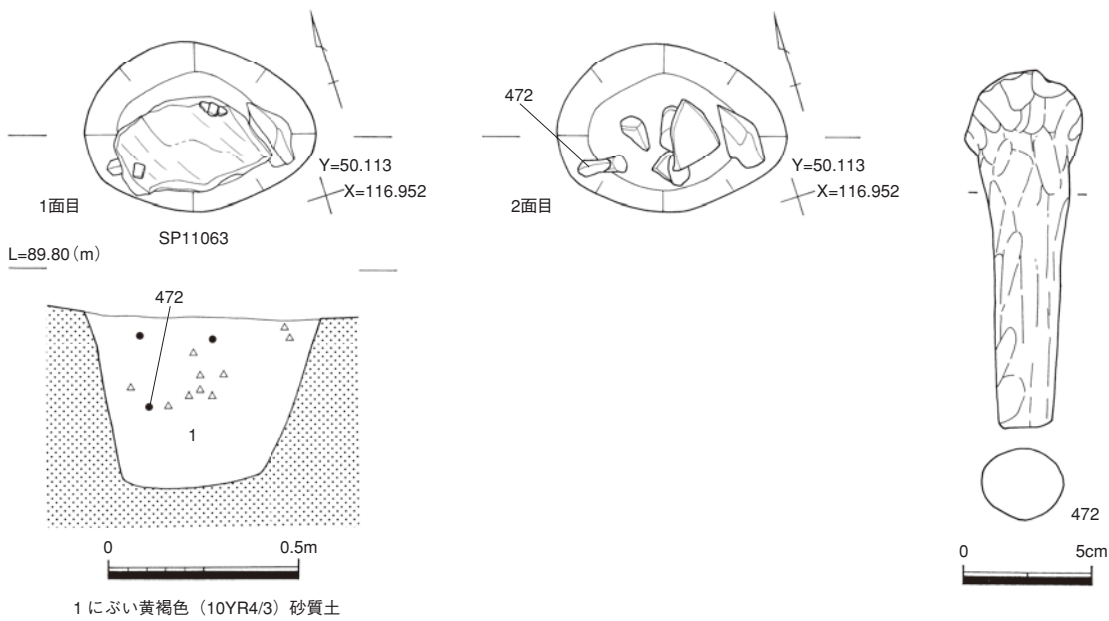
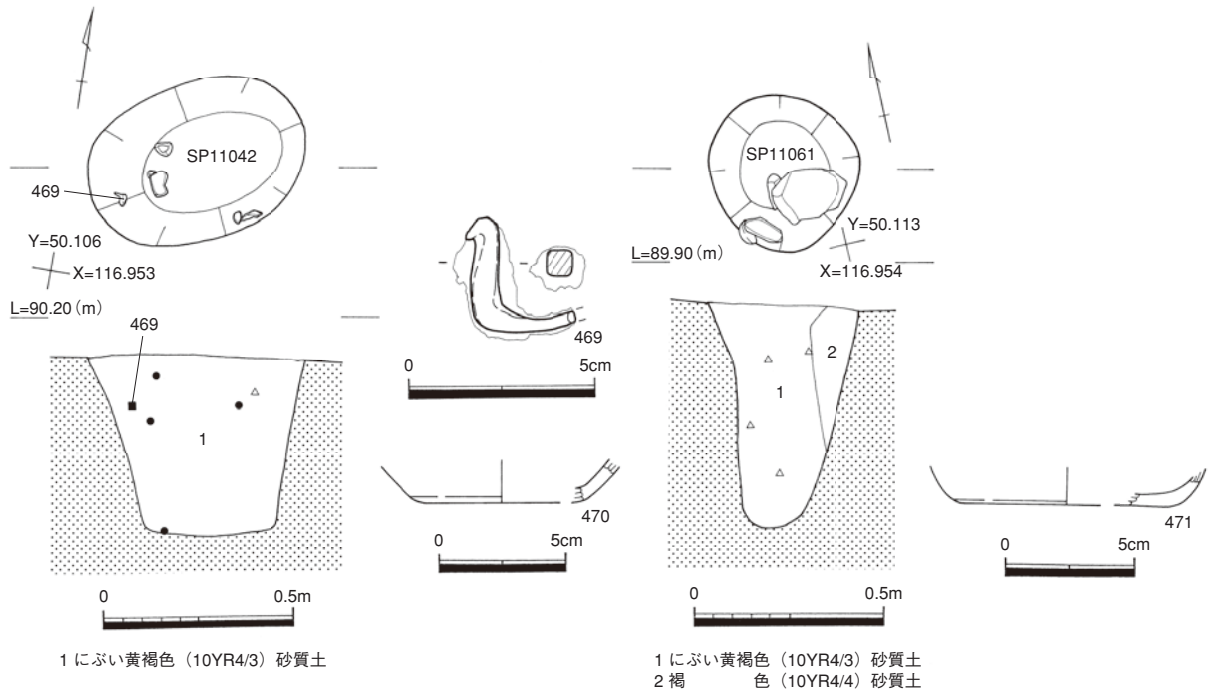
第123図 SP11009・11010・11030 遺構図・出土遺物

を含む。

遺物は土師質土器杯・体部片・こね鉢、須恵質土器こね鉢、縄文土器片を出土し、図化できたのは土師質土器こね鉢のみ(464)である。

柱穴1009・1010号 (SP11009・11010) (第123図)

10-3区 C-72で確認された柱穴。検出時には確認できなかったものの、土層堆積状況からSP11009がSP11010より後出する。SP11009は平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.53m前後、最大深度0.44mを測る。SP11010は平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.46m、最大幅0.29m、最大深度0.30mを測る。覆土は3層に分層でき、1層は暗褐色砂質土で、



第124図 SP11042・11061・11063 遺構図・出土遺物

炭化物を多く含む。2・3層は褐色砂質土で、1層よりは少ないが炭化物を含み、直径5cm大の碟を若干含む。

遺物はSP11009で土師質土器杯・羽釜・播鉢、須恵質土器播鉢、焼土塊を出土し、図化できたのは須恵質土器播鉢(465)のみである。SP11010では、土師質土器羽釜脚部(466)1点のみの出土である。

柱穴1030号 (SP11030) (第123図)

10-3区 C-72でSP11031と切り合い関係の状態を確認された柱穴。その前後関係は、不明である。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.50m、短軸0.38m、最大深度0.71mを測る。覆土は褐色砂質土1層で、炭化物をわずかに含む。

遺物は土師質土器小皿・羽釜、焼土塊、鉄滓が出土し、図化できたのは、底部回転ヘラ切りを施す土師質土器小皿(467・468)の2点である。

柱穴1042号 (SP11042) (第124図)

10-3区 C-72で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.58m、短軸0.41m、最大深度0.40mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土1層で、炭化物をわずかに含む。

遺物は土師質土器杯・羽釜、焼土塊、鉄滓、鉄釘が出土し、図化できたのは底部回転ヘラ切りを施す土師質土器杯(470)、断面方形を呈する鉄釘(469)である。

柱穴1061号 (SP11061) (第124図)

10-3区 C-73で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに円形、断面形態はU字形を呈し、直径0.41m前後、最大深度0.59mを測る。覆土は2層に分層でき、1層はにぶい黄褐色砂質土で、炭化物をわずかに含む。2層は褐色砂質土である。

遺物は土師質土器杯・皿・羽釜・羽釜脚部、須恵質土器椀を出土し、図化できたのは土師質土器杯(471)のみである。底部は、回転ヘラ切りのちナデを施す。

柱穴1063号 (SP11063) (第124図)

10-3区 C-73で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.62m、短軸0.45m、最大深度0.45mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土1層で、炭化物をわずかに含む。上位に直径40cm程の結晶片岩製平石が認められる。

遺物は土師質土器羽釜・脚部が出土し、図化できたのは土師質土器羽釜脚部(472)のみである。

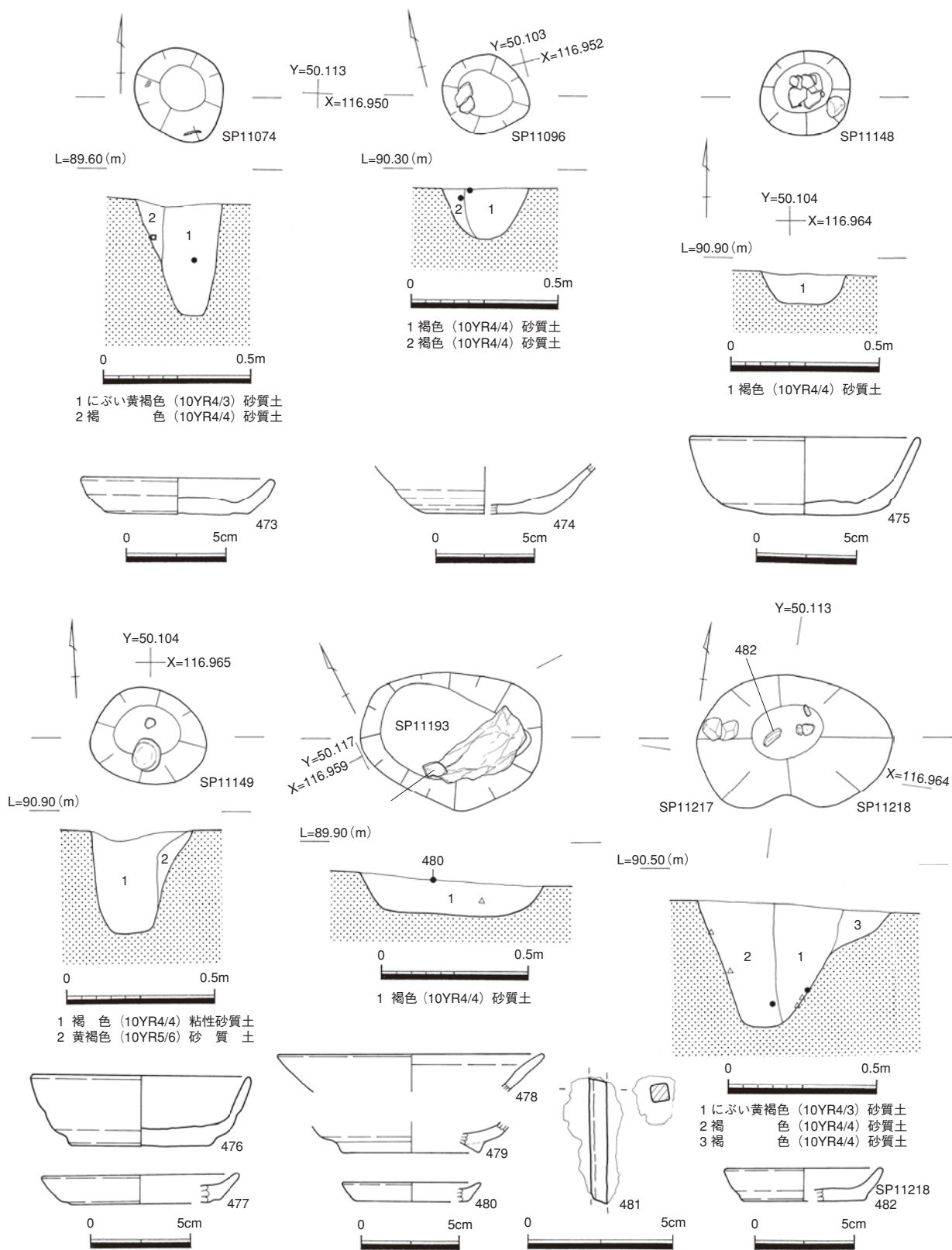
柱穴1074号 (SP11074) (第125図)

10-3区 C-73で確認された柱穴。平面形態はやや円形に近く、底面形態は円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.31m前後、最大深度0.38mを測る。覆土は2層に分層でき、1層はにぶい黄褐色砂質土で3～5cmの礫を含む。2層は褐色砂質土で2～3cmの礫を含む。

遺物は土師質土器杯・小皿・皿が出土し、図化できたのは土師質土器小皿(473)である。473の底部は、回転ヘラ切りのち粗い板ナデを施す。

柱穴1096号0 (SP11096) (第125図)

10-3区 C-71で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともにやや不整な円形、断面形態は舟底形を呈し、直径0.29m前後、最大深度0.17mを測る。覆土は褐色を呈し、含有物から2層に分層できる。1層は炭化物を含む。遺物は土師質土器杯(474)のみである。474は底部回転ヘラ切りで、内外面に炭化物がやや多く付着する。



第125図 SP11074・11096・11148・11149・11193・11217・11218 遺構図・出土遺物

柱穴1148号 (SP11148) (第125図)

10-3区 E-71で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.30m前後、最大深度0.11mを測る。覆土は褐色砂質土1層でしまりがなく、5～10cmの礫を多量に含む。

遺物は、底部回転ヘラ切りを施す土師質土器杯1点(475)のみである。底部は、回転ヘラ切りのあと粗い板ナデを施す。

柱穴1149号 (SP11149) (第125図)

10-3区 E-71で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.39m、短軸0.33m、最大深度0.32mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は褐色砂質土で10～20cm大の礫を含む。2層は黄褐色砂質土で、自然堆積層である。

遺物は、土師質土器杯(476)・小皿(477)が出土した。2点ともに底部は回転ヘラ切りで、476はヘラ切りのあとナデ、部分的に粗い板ナデを施す。

柱穴1193号 (SP11193) (第125図)

10-3区 D-74で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.63m、短軸0.47m、最大深度0.11mを測る。覆土は、褐色砂質土1層からなる。

遺物は土師質土器碗(479)・杯(478)・小皿(480)、断面方形を呈する鉄釘(481)が出土した。478・479は、結晶片岩の板石の下から出土した。

柱穴1217・1218号 (SP11217・11218) (第125図)

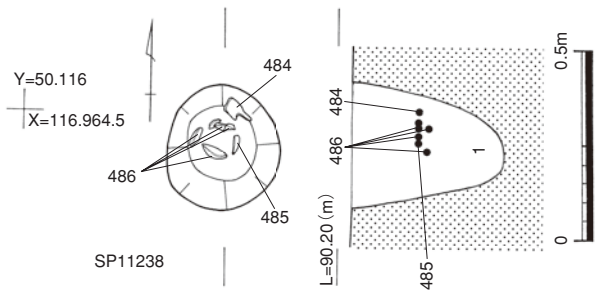
10-3区 E-73で確認された柱穴。調査時には確認できなかったが、土層堆積からSP11218がSP11217より後出すると思われる。SP11217は平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.42m、最大幅0.26m、最大深度0.42mを測る。覆土は、褐色砂質土1層である。SP11218は平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.42m、短軸0.40m、最大深度0.41mを測る。覆土は2層に分層でき、1層はにぶい黄褐色砂質土で炭化物を若干含む。2層は、褐色砂質土である。

遺物はSP11217で土師質土器片、溶解炉壁、滓が出土した。SP11218では土師質土器小皿、溶解炉壁が出土し、図化できたのは土師質土器小皿(482)のみである。482の底部は、回転ヘラ切りのち粗い板ナデを施す。

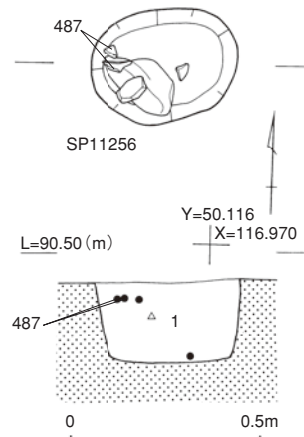
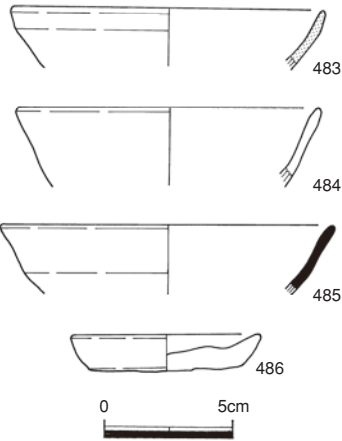
柱穴1238号 (SP11238) (第126図)

10-3区 E-74で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに円形、断面形態はU字形を呈し、直径0.31m前後、最大深度0.40mを測る。覆土は、にぶい黄褐色砂質土1層である。

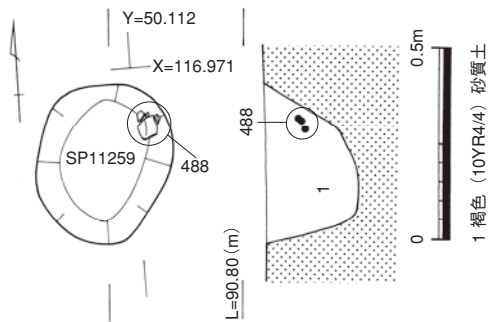
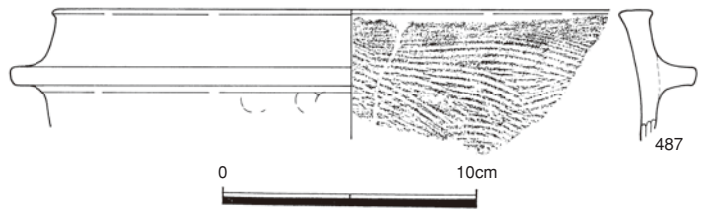
遺物は土師質土器杯・小皿・鍋、須恵質土器碗・杯、瓦器碗が覆土中位から出土し、図化できたのは須恵質土器杯(485)、瓦器碗(483)、土師質土器杯(484)、底部回転ヘラ切りを施す土師質土器小皿(486)である。483の内外面口縁部のみ、炭化物が付着する。



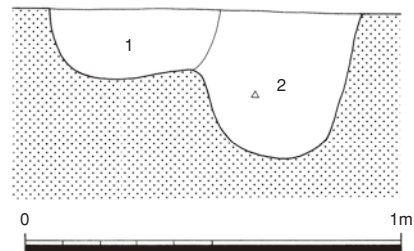
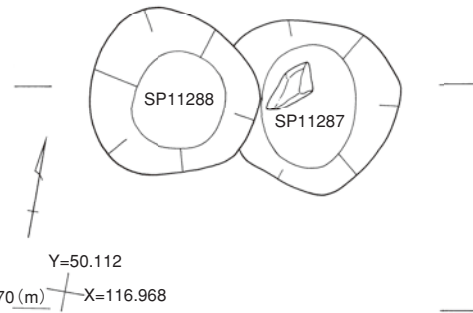
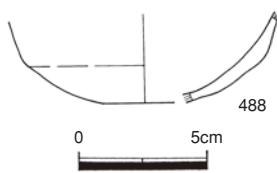
1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土



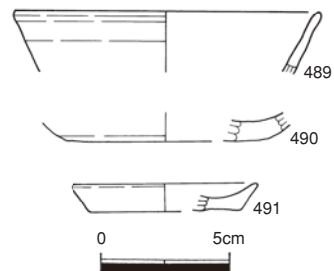
1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性砂質土



1 褐色 (10YR4/4) 砂質土



1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性砂質土
2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性砂質土



第126図 SP11238・11256・11259・11287・11288 遺構図・出土遺物

柱穴1256号 (SP11256) (第126図)

10-3区 G-74で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.39m、短軸0.31m、最大深度0.21mを測る。覆土はにぶい黄褐色粘性砂質土1層で、炭化物を若干含む。

遺物は土師質土器杯・羽釜が出土し、図化できたのは鏝部に煤状の炭化物が付着する土師質土器羽釜(487)のみである。

柱穴1259号 (SP11259) (第126図)

10-3区 G-73で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.43m、短軸0.36m、最大深度0.24mを測る。覆土は褐色砂質土1層で、炭化物を若干含む。

遺物は土師質土器杯・椀が出土し、図化できたのは土師質土器椀(488)である。

柱穴1287・1288号 (SP11287・11288) (第126図)

10-3区 F-73でSP11288がSP11287を切る形で確認された柱穴。SP11287は平面形態はやや不整な円形、底面形態は楕円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.38m前後、最大深度0.39mを測る。SP11288は平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.45m、最大深度0.18mを測る。双方共に覆土は灰黄褐色粘性砂質土1層で、SP11287は多量の炭化物と直径10～20cm大の礫を含む。

遺物はSP11287で土師質土器杯・小皿、黒色土器椀、須恵質土器杯が出土し、図化できたのは土師質土器杯(489・490)・小皿(491)である。490・491の2点共に回転ヘラ切りだが、490はヘラ切りのちナデを施す。

柱穴1289号 (SP11289) (第127図)

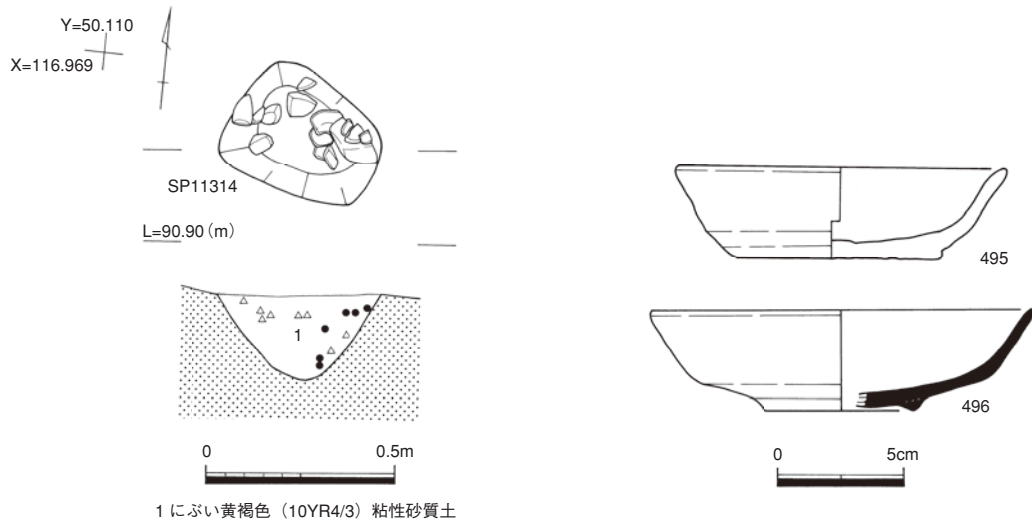
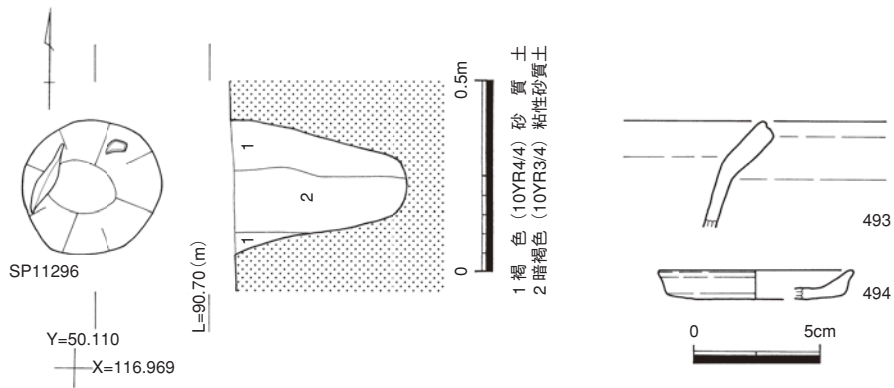
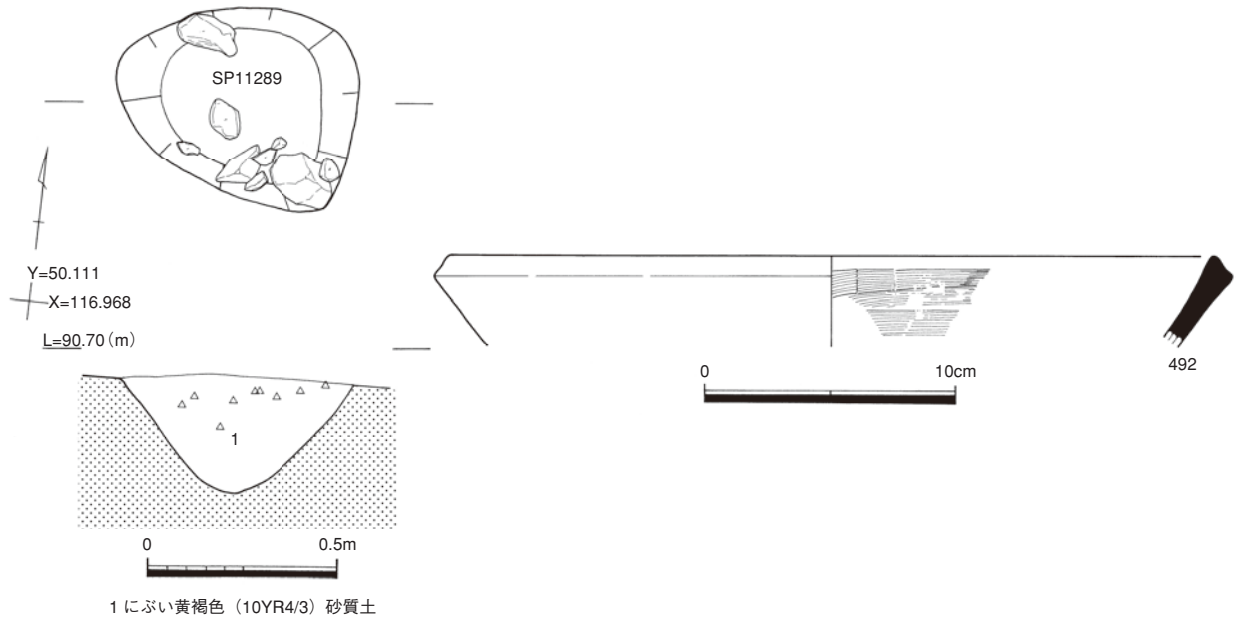
10-3区 F-73で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.63m、短軸0.50m、最大深度0.31mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土1層で、直径10～20cm大の礫を多量に含む。

遺物は土師質土器杯・小皿、須恵質土器こね鉢が出土し、図化できたのは須恵質土器こね鉢(492)である。492は、口縁部外面に黒色帯を有する。

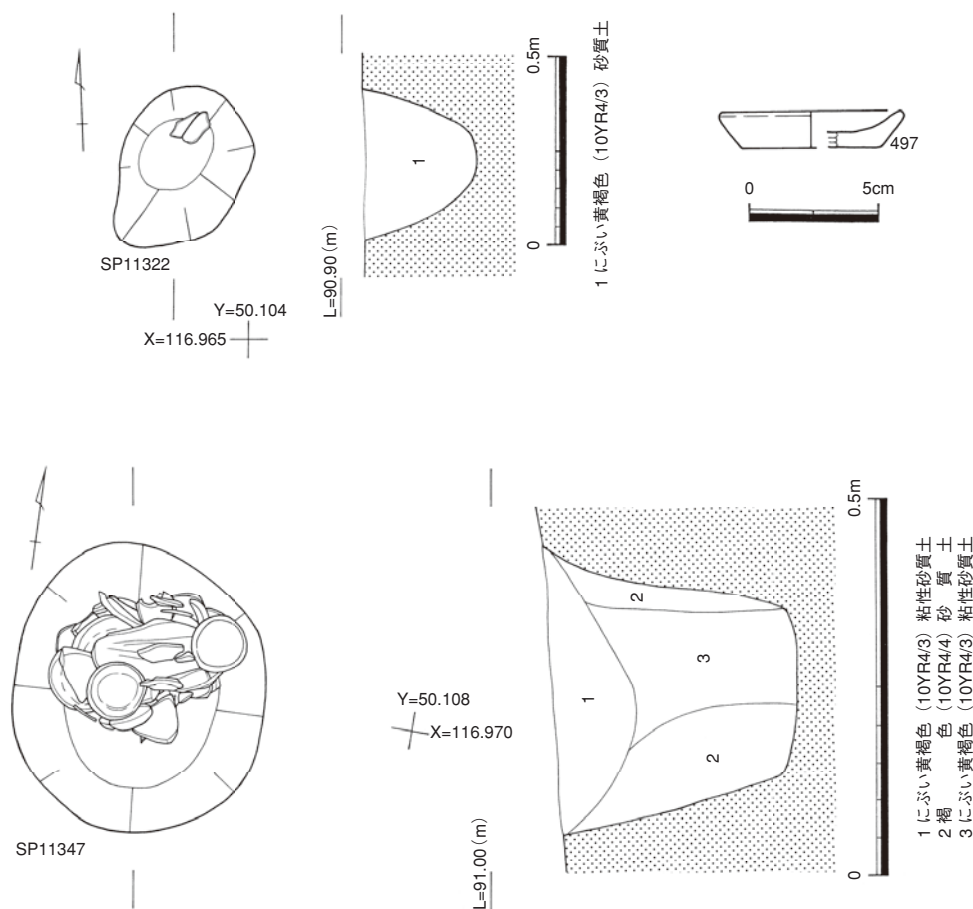
柱穴1296号 (SP11296) (第127図)

10-3区 F-73で確認された柱穴。平面形態は円形、底面形態は楕円形、断面形態はU字形を呈し、直径0.37m前後、最大深度0.46mを測る。覆土は2層に分層でき、それぞれ炭化物を若干含む。1層は褐色砂質土で土器片を含み、2層は暗褐色粘性砂質土である。

遺物は土師質土器杯・小皿・鍋、鉄滓が出土し、図化できたのは土師質土器小皿(494)・鍋(493)である。494の底部は、回転ヘラ切りのち板ナデを施す。



第127図 SP11289・11296・11314 遺構図・出土遺物



第128図 SP11322・11347 遺構図・出土遺物

柱穴1314号 (SP11314) (第127図)

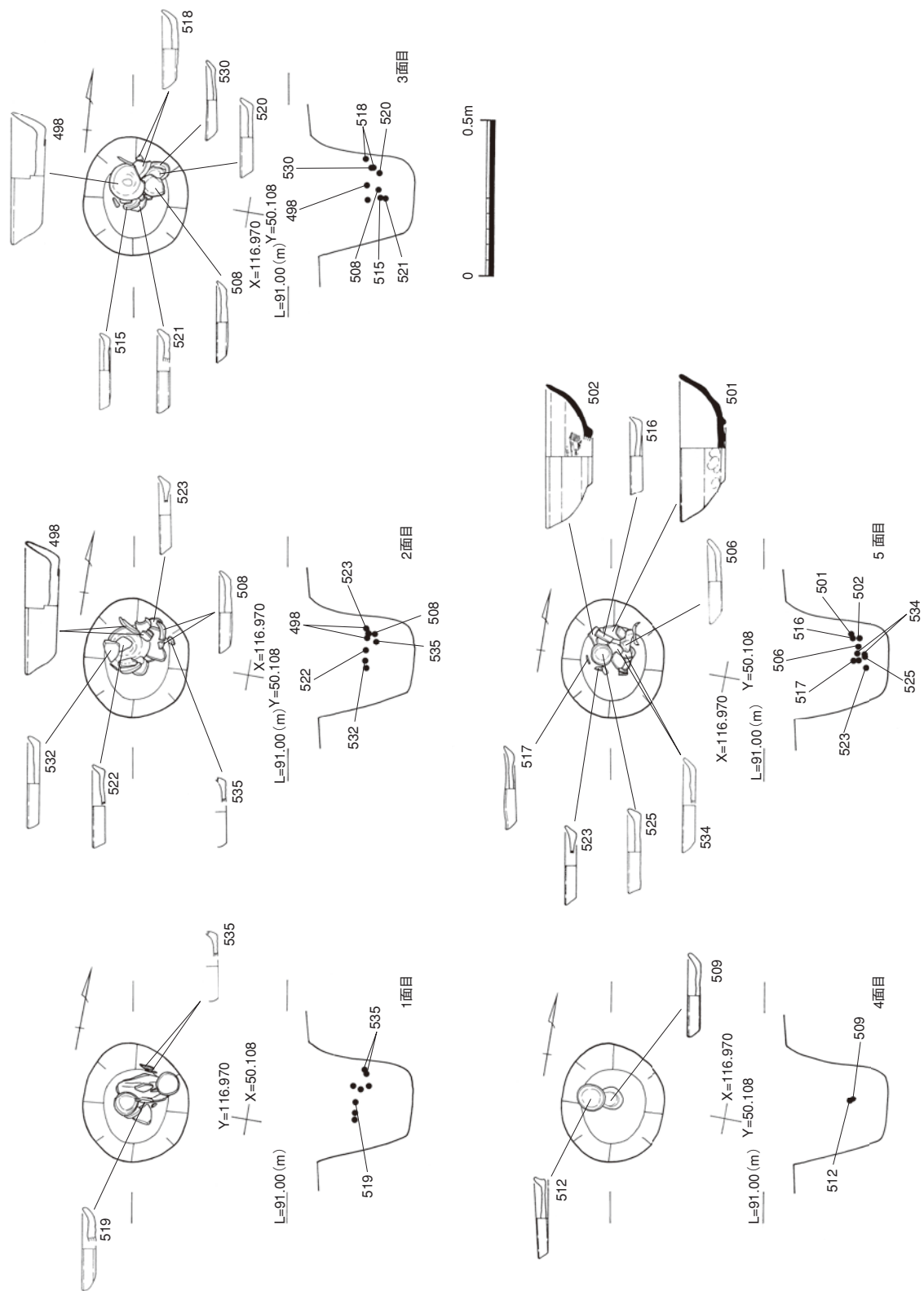
10-3区 F-72で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.43m、短軸0.35m、最大深度0.23mを測る。覆土はにぶい黄褐色粘性砂質土1層で、炭化物を若干含む。

遺物は土師質土器杯・羽釜、須恵質土器椀、黒色土器椀、焼土塊が出土し、図化できたのは土師質土器杯(495)、須恵質土器椀(496)である。495の底部は、回転ヘラ切りのちに粗い板ナデを施す。496は器表面磨滅により調整が不明瞭だが、口縁部外面に重ね焼きによる黒色帯が認められる。

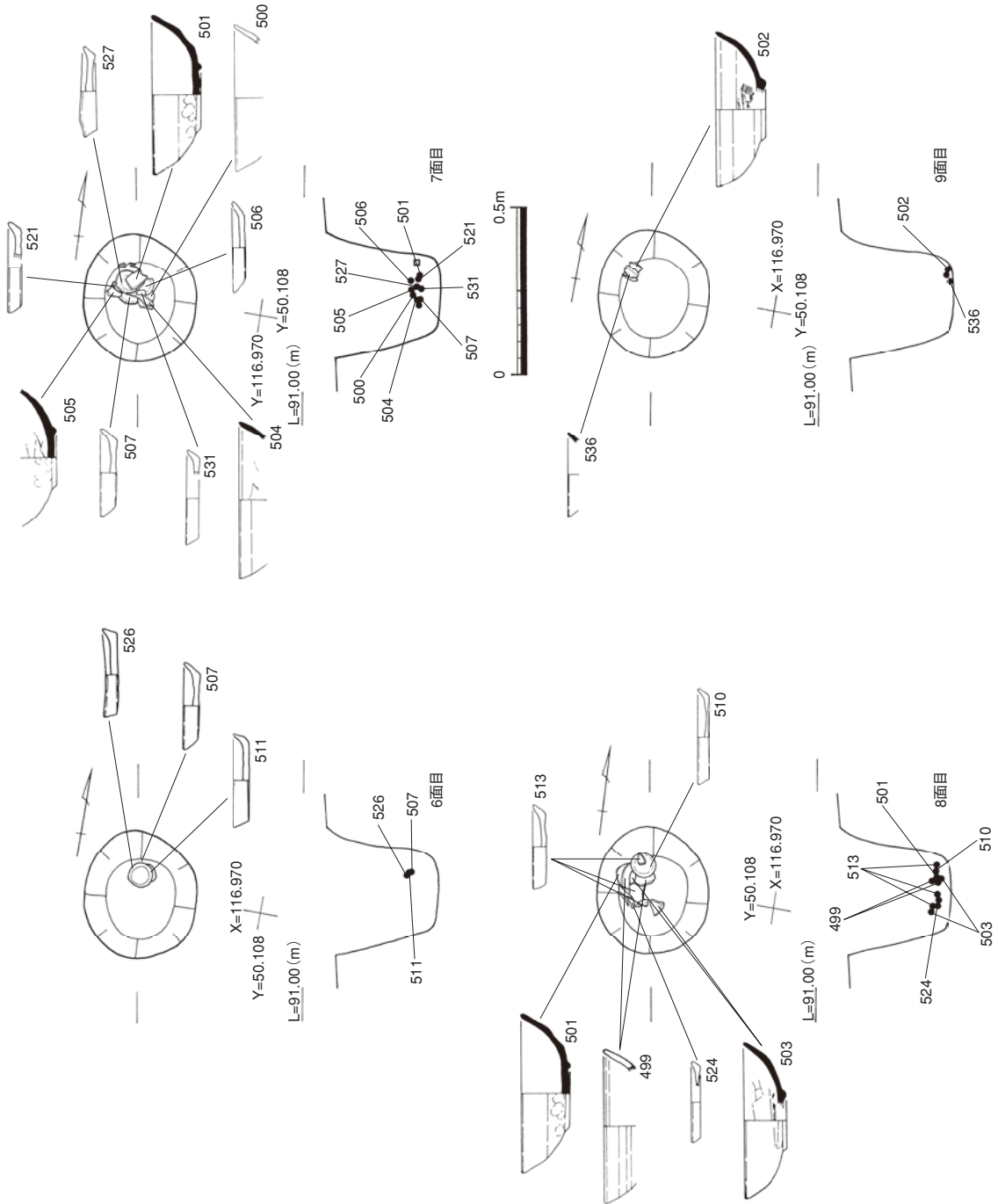
柱穴1322号 (SP11322) (第128図)

10-3区 F-71で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は半円形を呈し、長軸0.46m、短軸0.33m、最大深度0.29mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土1層で、炭化物を若干含む。

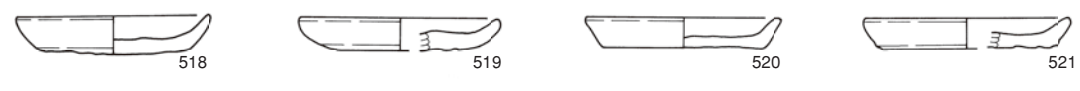
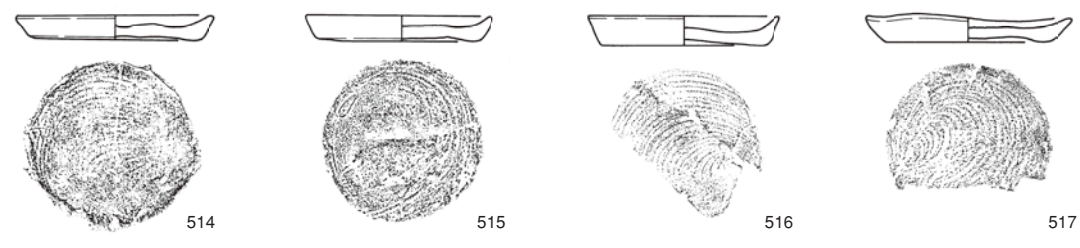
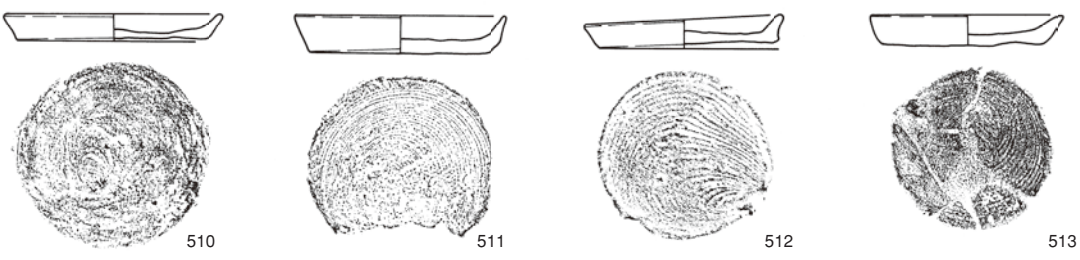
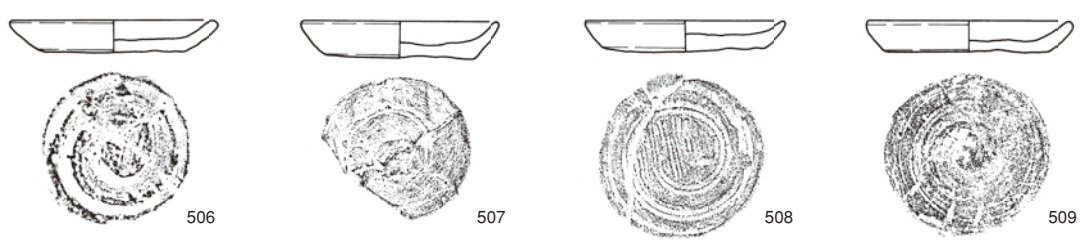
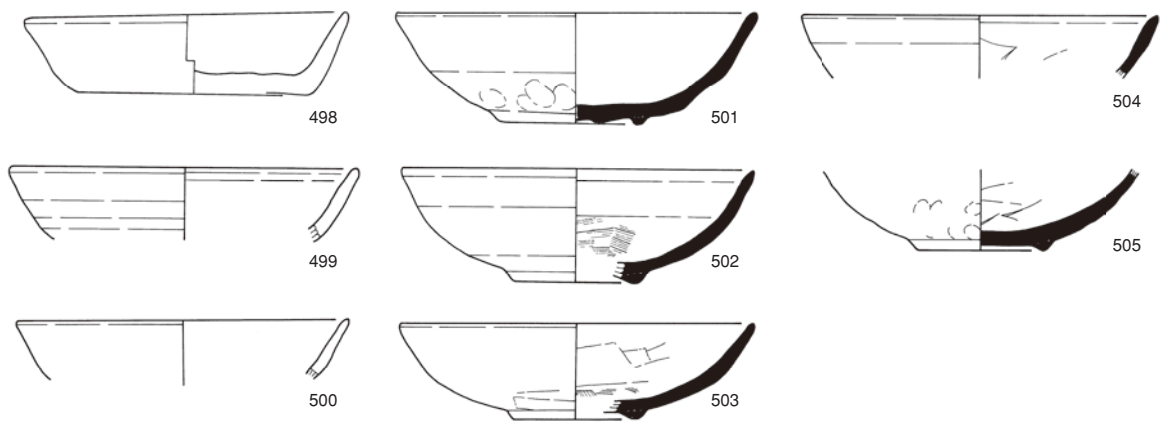
遺物は土師質土器杯・小皿、須恵質土器片が出土し、図化できたのは底部回転ヘラ切りを施す土師質土器小皿(497)のみである。



第129図 SP11347 遺物出土状況図 (1)



第130図 SP11347 遺物出土状況図 (2)



第131图 SP11347 出土遺物

柱穴1347号 (SP11347) (第128～131図)

10-3区 F・G-72で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.38m、短軸0.33m、最大深度0.33mを測る。覆土は3層に分層でき、1層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、炭化物をわずかに含む。2層は褐色砂質土、3層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、炭化物をやや多く含む。遺物は、3層の中～下位を中心として出土した。

遺物は土師質土器椀・杯・小皿・羽釜、黒色土器椀、須恵質土器椀・小皿、鉄滓、桃の種子が出土し、図化できたのは土師質土器椀(499)、外面底部に炭化物付着の土師質土器杯(498)、土師質土器小皿(506～535)、黒色土器椀(500)、須恵質土器椀(501～505)、焼成軟質な須恵質土器小皿(536)、鉄滓(537)である。出土した供膳具では底部切り離し技法が二種類認められ、底部回転糸切りは498・510～517・520・522～532・535の22個体、底部回転ヘラ切りは506～509・518・519・521・533・534の9個体である。515・517・526・527では、成形時の歪みが著しい。519は体部下半から底部にかけて、煤状の炭化物が多く付着する。535は、内面に炭化物が多く付着する。

柱穴1474号 (SP11474) (第132図)

10-3区 F-73で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.27m、最大深度0.05mを測る。覆土は2層に分層でき、1層はにぶい黄褐色粘質土で炭化物を含む。2層は褐色砂質土である。

遺物は、底部回転ヘラ切りを施す土師質土器小皿1点(538)のみである。

柱穴1479号 (SP11479) (第132図)

10-3区 G-73で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.43m前後、最大深度0.39mを測る。覆土はにぶい黄褐色粘性砂質土1層で、炭化物をわずかに含む。

遺物は土師質土器杯・小皿、溶解炉、青磁碗、鉄滓が出土し、図化できたのは土師質土器杯(539)、龍泉窯系と思われる鎬蓮弁文をもつ青磁碗の破片(540)のみである。539の底部は、回転ヘラ切りのあと板ナデを施す。

柱穴1483号 (SP11483) (第132図)

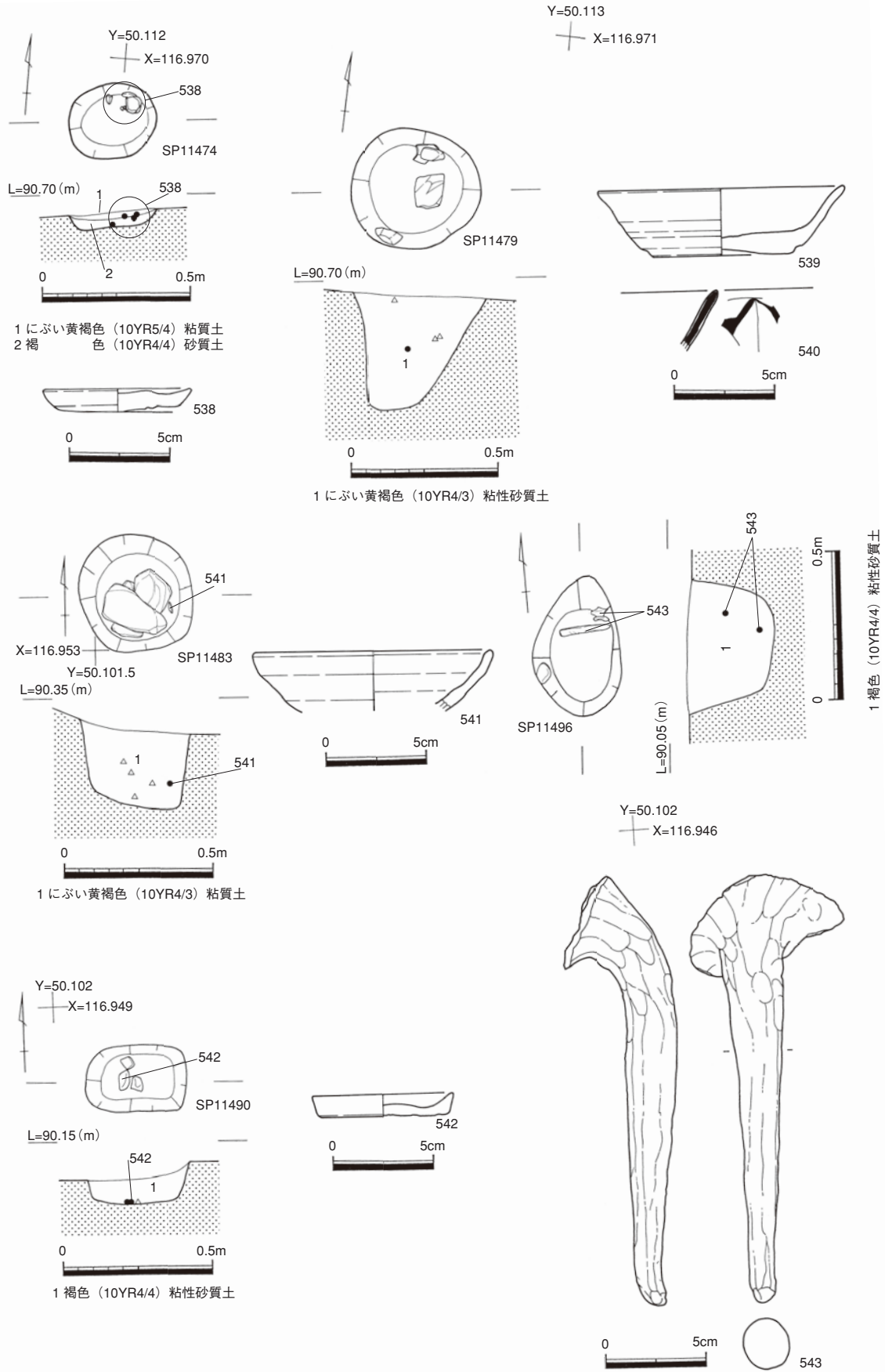
10-3区 C-71で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.38m前後、最大深度0.26mを測る。

遺物は土師質土器杯、焼土塊が出土し、図化できたのは土師質土器杯(541)のみである。

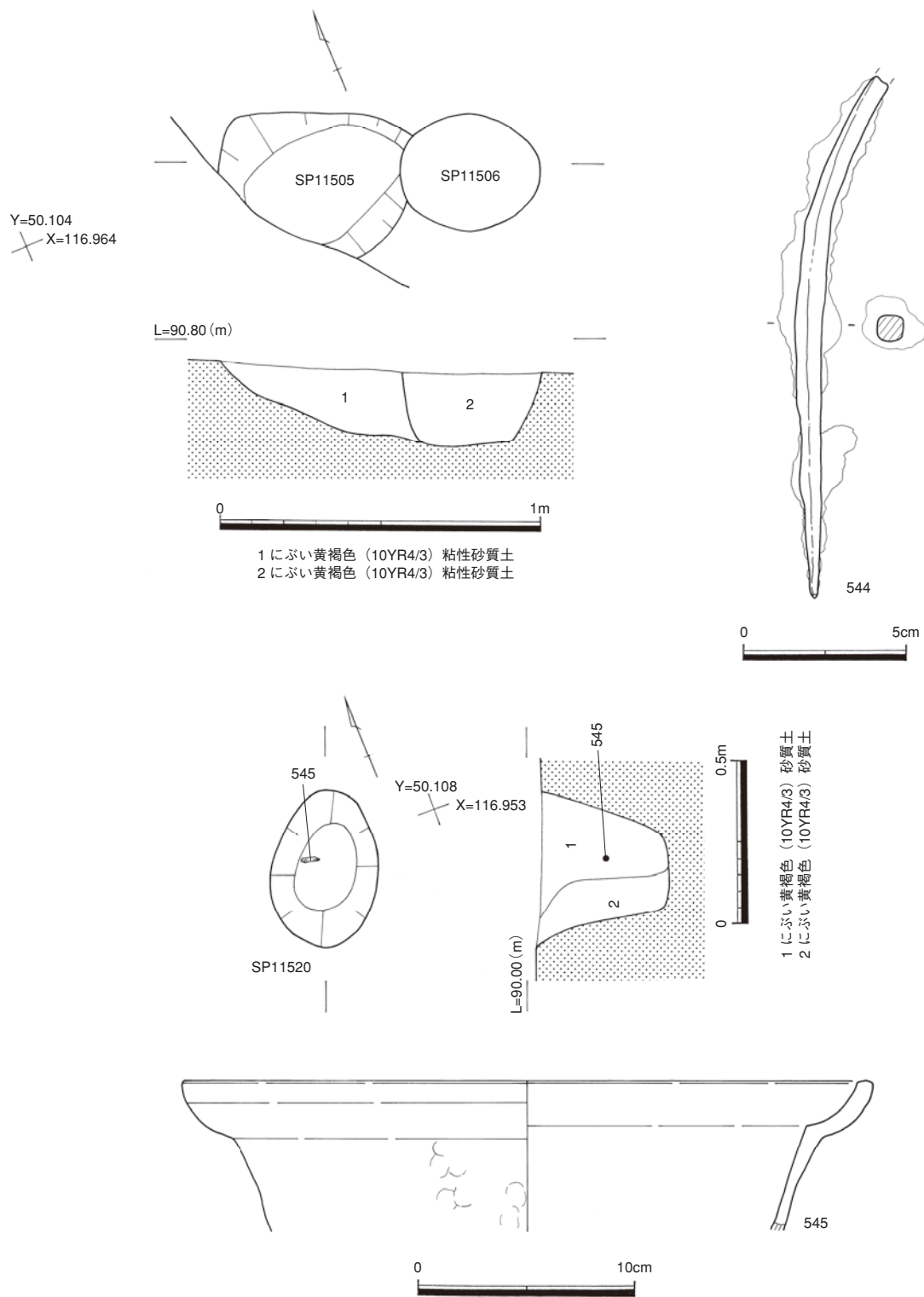
柱穴1490号 (SP11490) (第132図)

10-3区 B-71で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともにやや長方形に近く、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.34m、短軸0.23m、最大深度0.09mを測る。

遺物は土師質土器小皿・羽釜、焼土塊が出土し、図化できたのは土師質土器小皿(542)のみである。542の底部は回転ヘラ切りで、中央部のみ板ナデを施す。



第132図 SP11474・11479・11483・11490・11496 遺構図・出土遺物



第133図 SP11505・11520 遺構図・出土遺物

柱穴1496号 (SP11496) (第132図)

10-3区 B-71で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.47m、短軸0.30m、最大深度0.29mを測る。

遺物は、土師質土器羽釜脚部(543)のみの出土である。543は煤状の炭化物がやや多く付着し、特に脚部と体部の接合面と脚部の左側に多く認められる。

柱穴1505号 (SP11505) (第133図)

10-3区 E-71でSP11506 に切られた状態で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、最大長0.48m、短軸0.48m、最大深度0.20mを測る。覆土はにぶい黄褐色粘性砂質土1層で、炭化物を若干含む。2層は、SP11506の覆土である。

遺物は土師質土器杯、鉄釘が出土し、図化できたのは断面方形を呈する鉄釘(544)のみである。

柱穴1520号 (SP11520) (第133図)

10-3区 C-72で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.50m、短軸0.34m、最大深度0.40mを測る。覆土はにぶい黄褐色を呈し、含有物から2層に分層できる。1層は炭化物をわずかに含み、2層は直径10cm大の角礫を含む。

遺物は土師質土器鍋、滓が出土し、図化できたのは内外面の口縁部に煤状の炭化物が付着する土師質土器鍋(545)のみである。

第二遺構面

柱穴193号 (SP2193) (第134図)

10-2区 M・N-75で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.39m、短軸0.29m、最大深度0.16mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土1層から成る。

遺物は土師質土器羽釜、瓦が出土し、図化できたのは外面に煤が付着する土師質土器羽釜(546)のみである。

柱穴263号 (SP2263) (第134図)

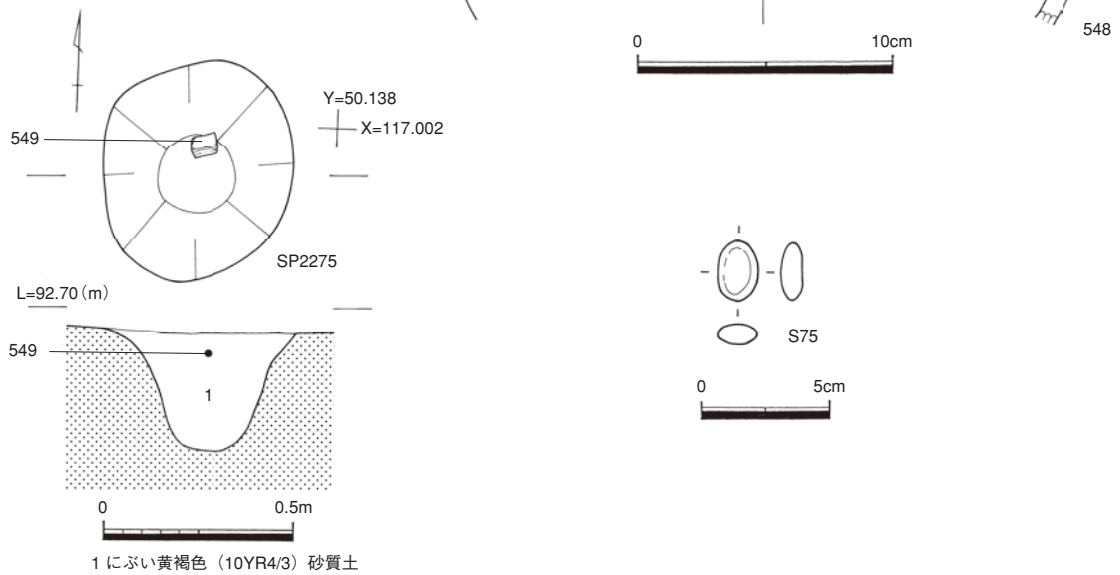
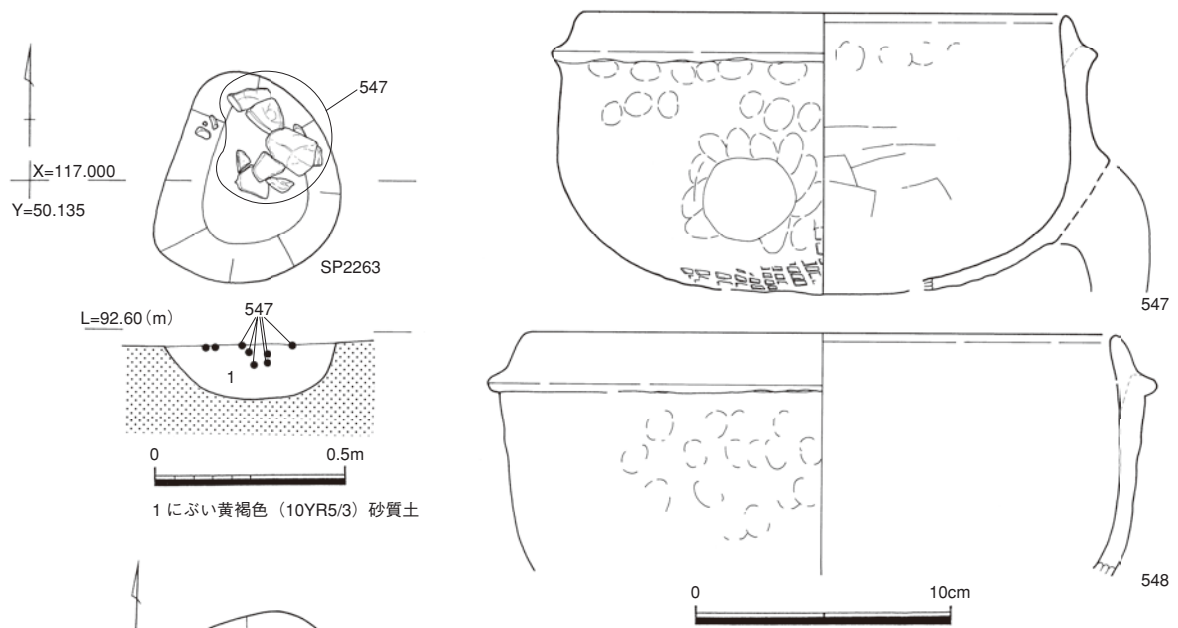
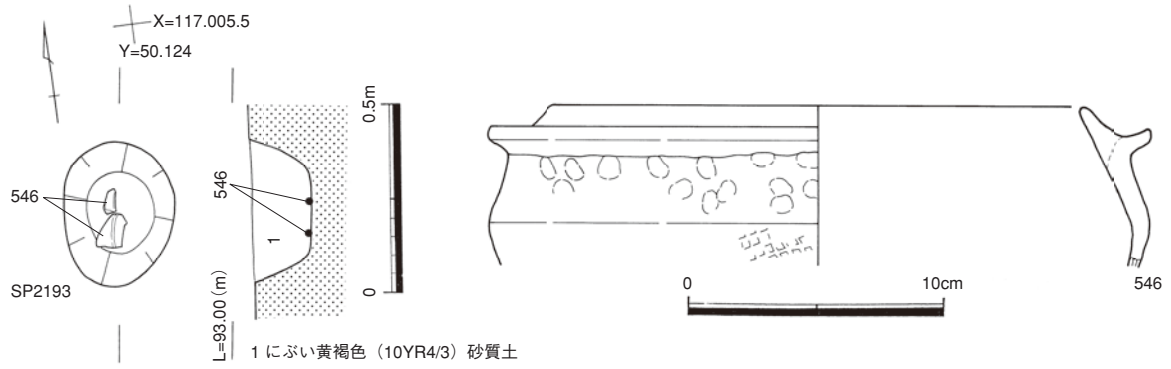
10-2区 L・M-78で確認された柱穴。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.56m、短軸0.46m、最大深度0.14mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土1層で、炭化物をわずかに含む。

遺物は土師質土器杯・羽釜、被熱した砂岩が出土し、図化できたのは土師質土器羽釜(547・548)の2点である。どちらも鏝部より下位に煤状の炭化物が多く付着する。また548は、SP2218出土の細片と接合した。

柱穴275号 (SP2275) (第134図)

10-2区 M-78で確認された柱穴。平面形態は楕円形、底面形態は円形、断面形態はU字形を呈し、長軸0.60m、短軸0.51m、最大深度0.31mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土1層で炭化物をやや多く含む。

遺物は土師質土器羽釜、基石に用いられた砂岩、鉄滓が出土し、図化できたのは土師質土器羽釜(549)



第134図 SP2193・2263・2275 遺構図・出土遺物

と基石(S75)である。549は、体部に脚部貼り付けの痕跡が認められる。

柱穴内出土遺物（第135～137図）

550～552は、8区 J-57・58で検出されたSP1525から出土した須恵質土器碗である。552は焼成が軟質で、外面口縁部に黒色帯が認められる。また、無文の縄文土器深鉢が出土した。

553・554は、10区 C-70で検出されたSP11097から出土した土師質土器小皿である。2点ともに底部回転ヘラ切りで、553はヘラ切りのち丁寧なナデを施す。554は、内面に炭化物がやや多く付着する。また弥生土器と思われる土器片が、出土した。

555・556は、10区 E-73で検出されたSP11228から出土した土師質土器杯・小皿である。556は、底部回転ヘラ切りを施す。

557・558は、10区 E-71で検出されたSP11143から出土した土師質土器杯・小皿である。558は、底部回転ヘラ切りを施す。

559・560は、10区 F-73で検出されたSP11276から出土した土師質土器小皿である。2点ともに底部回転ヘラ切りを施し、560はヘラ切りのち、ナデを施す。図化できなかったが、土師質土器鍋、青磁片、溶解炉壁が共伴する。

561・562は、10区 F・G-73で検出されたSP11476から出土した土師質土器杯・小皿である。2点ともに、底部回転ヘラ切りを施す。

563は、10区 C-71で検出されたSP1962から出土した土師質土器杯である。底部回転ヘラ切りのちに、粗い板ナデを施す。図化できなかったが、土師質土器小皿、焼土塊、鉄滓が共伴する。

564は、10区 F-74で検出されたSP11244から出土した土師質土器杯である。共伴遺物は、認められなかった。

565は、10区 A-70で検出されたSP11521から出土した土師質土器杯である。底部は回転ヘラ切りのちにナデを施すが、中央部のみ板ナデである。図化できなかったが、須恵質土器片が共伴する。

566は、10区 E-71で検出されたSP11142から出土した土師質土器杯である。共伴遺物は認められなかった。

567は、10区 C-72で検出されたSP11046から出土した土師質土器杯である。調整が不明瞭で、底部回転ヘラ切りか。567以外に、壁土の可能性のある焼土塊も出土した。

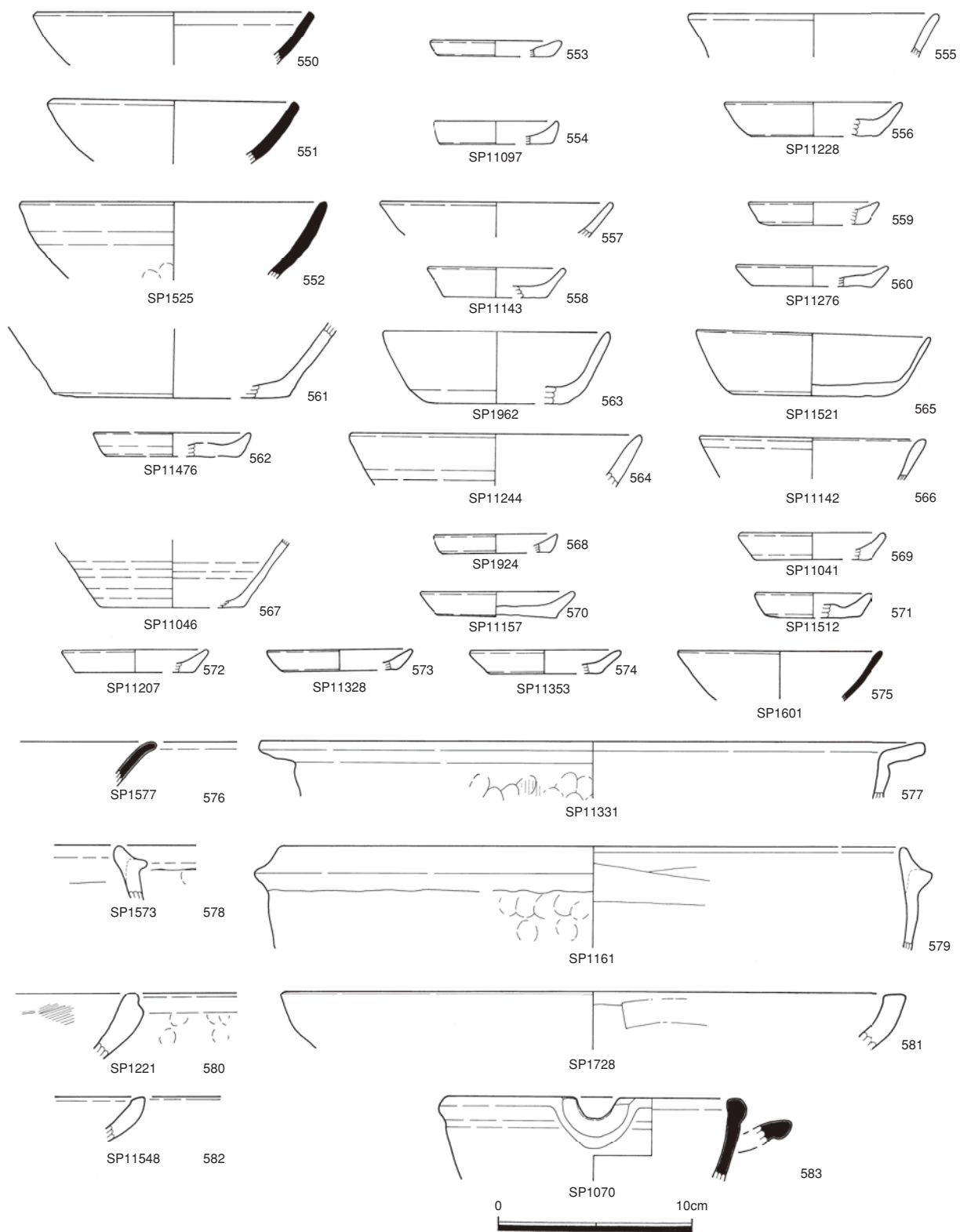
568は、10区 B-71で検出されたSP1924から出土した底部回転ヘラ切りを施す土師質土器小皿である。図化できなかったが、溶解炉壁が共伴する。

569は、10区 C-72で検出されたSP11041から出土した土師質土器小皿である。底部回転ヘラ切りのちに、ナデを施す。図化できなかったが、土師質土器杯・羽釜、焼土塊が共伴する。

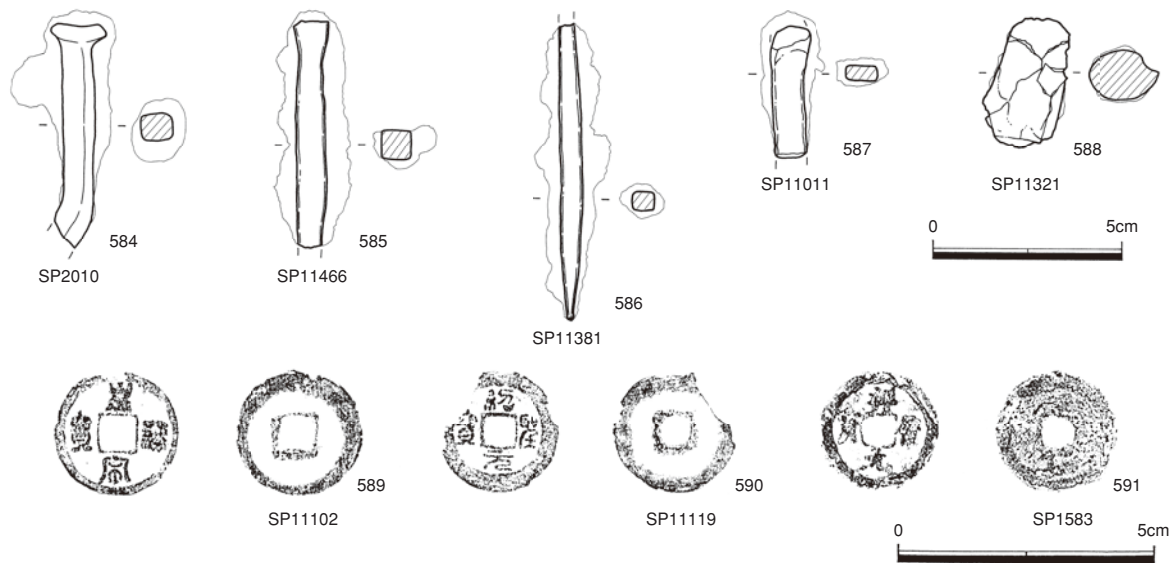
570は、10区 E-72で検出されたSP11157から出土した底部回転ヘラ切りを施す土師質土器小皿である。共伴遺物は認められなかった。また570は、南東へ約10m程離れたところに位置するSP11193から出土した土師質土器小皿と接合した。

571は、10区 D-73で検出されたSP11512から出土した土師質土器小皿である。底部回転ヘラ切りのち部分的に板ナデを施す。また図化できなかったが、土師質土器杯が共伴する。

572は、10区 E-73で検出されたSP11207から出土した底部回転ヘラ切りを施す土師質土器小皿である。共伴遺物は、認められなかった。



第135図 SP 出土遺物 (1)



第136図 SP 出土遺物 (2)

573は、10区 F-71で検出されたSP11328から出土した底部回転ヘラ切りを施す土師質土器小皿である。図化できなかったが、煮沸具の体部片が共伴する。

574は、10区 G-72で検出されたSP11353から出土した底部回転ヘラ切りを施す土師質土器小皿である。図化できなかったが、須恵質土器椀、鉄滓が共伴する。

575は、97-2区 L-61で検出されたSP1601から出土した須恵質土器椀である。外面に、火礫が認められる。稗か黍と思われる種子も出土している。

576は、97-2区 M-61で検出されたSP1577から出土した青磁碗である。共伴遺物は、認められなかった。

577は、10区 F-71で検出されたSP11331から出土した土師質土器鍋である。口縁部外面に、炭化物が若干付着する。また胎土に金雲母が認められることから、讃岐からの搬入品の可能性がある。図化できなかったが、土師質土器杯・小皿、黒色土器椀が共伴する。

578は、97-2区 M-60で検出されたSP1573から出土した土師質土器羽釜である。共伴遺物は、認められなかった。

579は、1区 L-52で検出されたSP1161から出土した土師質土器羽釜である。鏝部より下位に、煤状の炭化物が多く付着する。また図化できなかったが、粘土塊が共伴する。

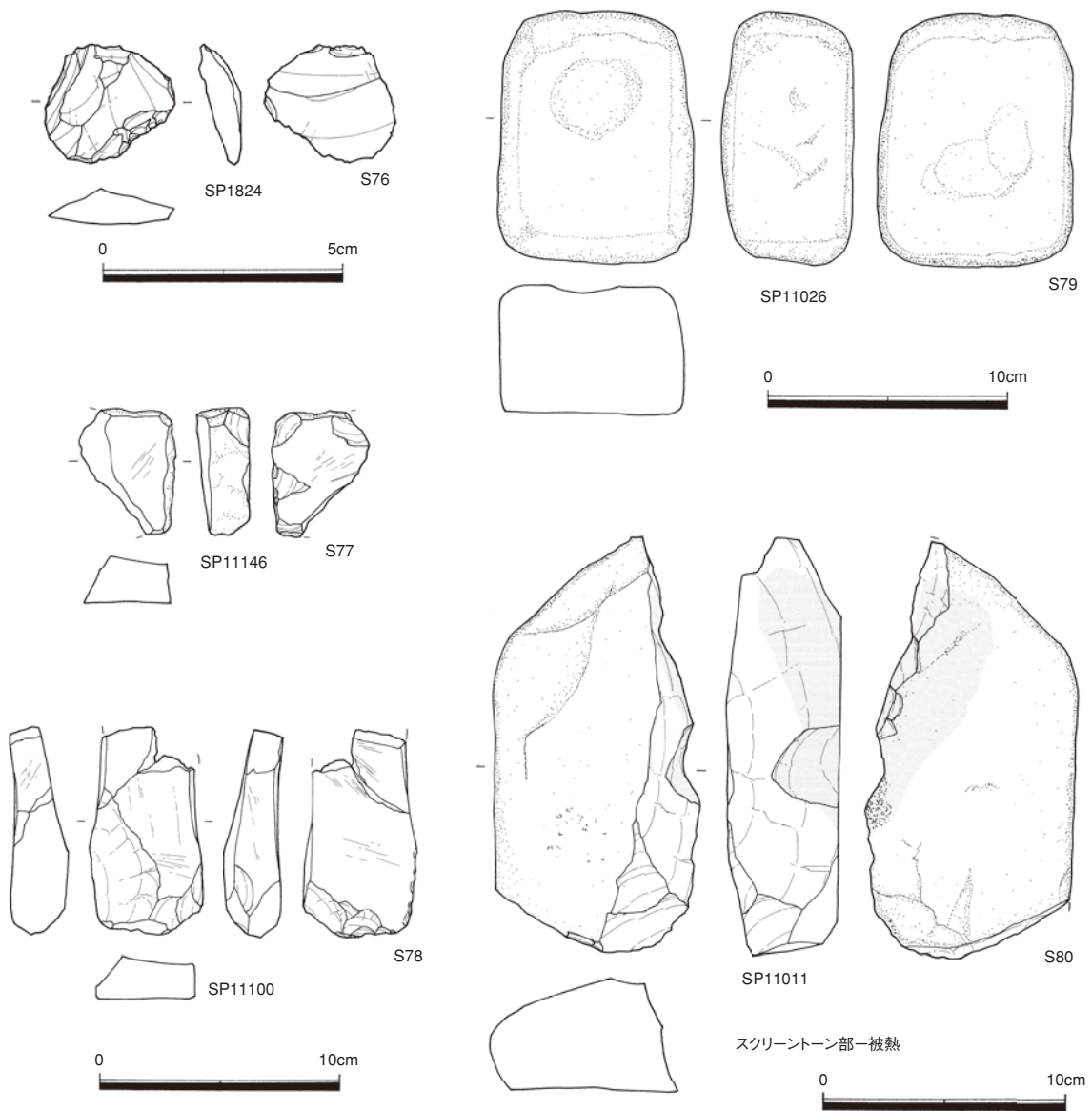
580は、1区 M-46で検出されたSP1221から出土した土師質土器こね鉢である。外面に煤状の炭化物がやや多く付着する。炭化物が出土しているものの、共伴遺物は認められなかった。

581は、97-2区 J-64で検出されたSP1728から出土した土師質土器こね鉢である。外面に煤状の炭化物が多量に付着する。共伴遺物は、認められなかった。

582は、11区 M-81で検出されたSP11548から出土した土師質土器こね鉢である。図化できなかったが、土師質土器杯が共伴する。

583は、5区 G-21で検出されたSP1070から出土した陶器鉢である。共伴遺物は、認められなかった。

584は、97-2区 K-60で検出されたSP2010から出土した断面方形を呈する鉄釘である。図化できなかったが、土師質土器片が共伴する。



第137図 SP 出土遺物 (3)

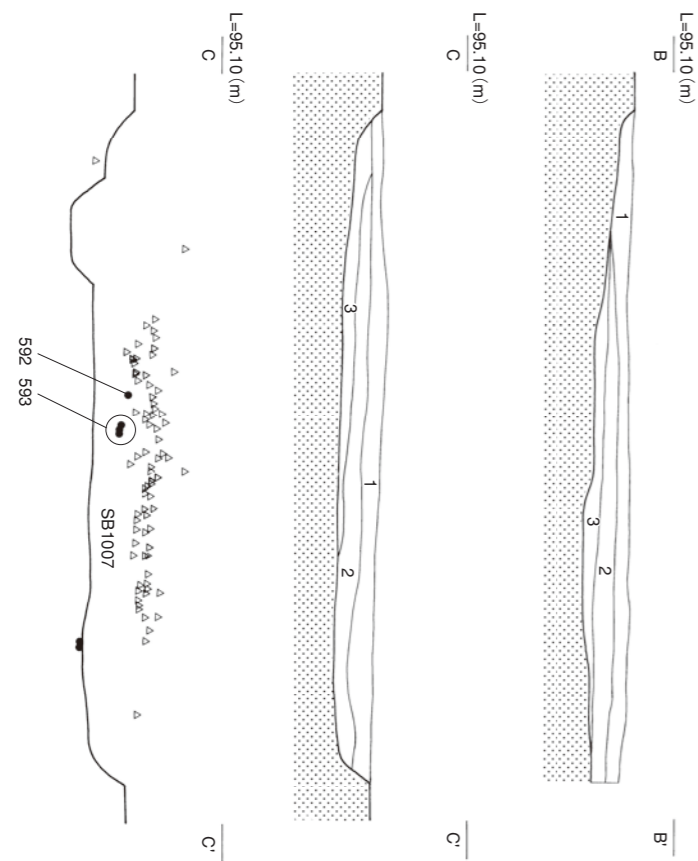
585は、10区 F-73で検出されたSP11466から出土した断面方形を呈する鉄釘である。共伴遺物は、認められなかった。

586は、10区 H-74で検出されたSP11381から出土した断面方形を呈する鉄釘である。図化できなかったが、羽口が共伴する。

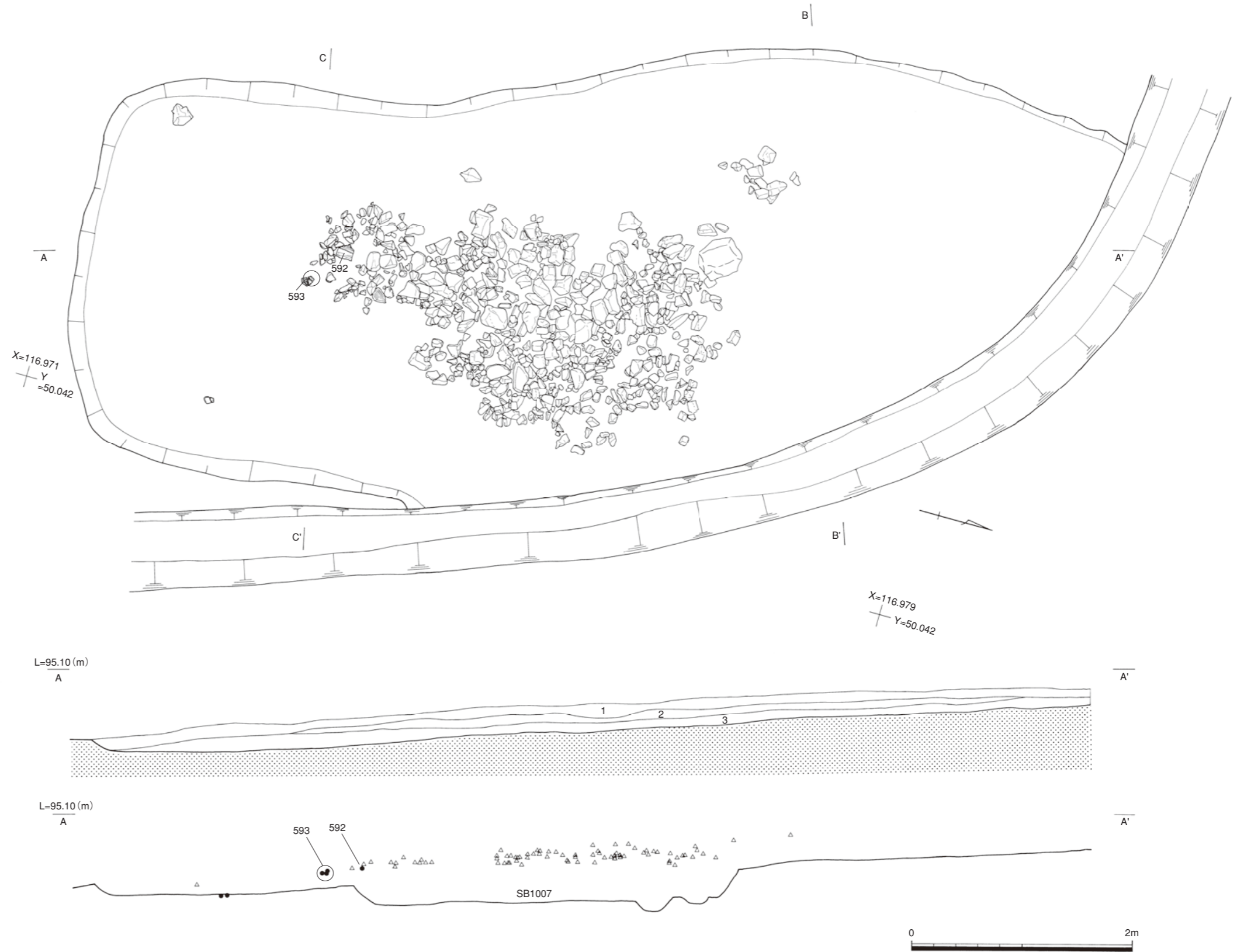
587は、10区 C-72で検出されたSP11011から出土した断面方形を呈する鉄釘である。また第137図に掲載している砂岩製台石(S80)も、この遺構からの出土遺物である。S80は右側縁部と裏面の一部に、被熱痕跡が認められる。また図化できなかったが、土師質土器杯が共伴する。

588は、10区 F-72で検出されたSP11321から出土した鉄滓である。図化できなかったが、煮沸具の体部片、須恵質土器片が共伴する。

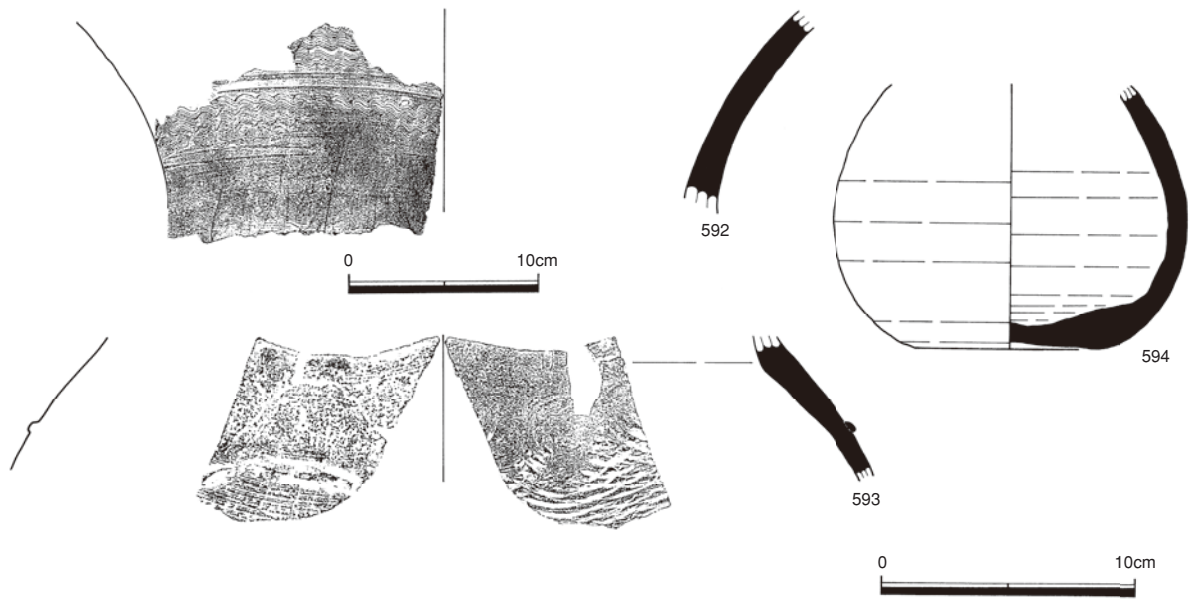
589は、10区 D-71・72で検出されたSP11102から出土した「皇宋通寶」である。共伴遺物は、認められ



- 1 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粘性砂質土
- 2 褐色 (10YR4/4) 粘性砂質土
- 3 褐色 (10YR4/4) 砂質土



第138図 SU1002 遺構図



第139図 SU1002 出土遺物

なかった。

590は、10区 D-70で検出されたSP11119から出土した「紹聖元寶」である。図化できなかったが、土師質土器片が共伴する。

591は、97-2区 L-61で検出されたSP1583から出土した「祥符元寶」である。図化できなかったが、煮沸具の体部片が共伴する。

S76は、10区 S-69で検出されたSP1824から出土したサヌカイト剥片である。共伴遺物は認められなかった。

S77は、10区 E-71で検出されたSP11146から出土した凝灰岩製砥石である。左側縁部が欠損する。図化できなかったが、土師質土器杯が共伴する。

S78は、10区 D-71で検出されたSP11100から出土した凝灰岩製砥石で、上半部が欠損する。共伴遺物は、認められなかった。

S79は、10区 C-72で検出されたSP11026から出土した砂岩製凹石である。図化できなかったが、土師質土器片・羽釜、壁土が共伴する。

集石遺構

集石遺構2号 (SU1002) (第138・139図)

97-1区 G・H-58・59でSB1007・SK1092を切った状態で確認された集石遺構。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は逆台形を呈し、最大長8.30m、最大幅3.76m、最大深度0.26mを測る。覆土は土色および含有物から3層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。I層(1層)はにぶい黄褐色砂質土で、直径5～15cm大の礫を多量に含む。II層(2・3層)は褐色を呈し、2層は粘性が強く、直径5cm弱の礫を多量に含む。3層にも礫が認められるが、3層中一番少ない。

これらの集石に混じり、1層を中心として土師質土器杯、須恵質土器片、須恵器壺、弥生土器片、縄

文土器無文深鉢片が出土した。そのうち図化できたのは、2層中から出土した須恵器壺(592～594)である。594のみ、外面に自然釉が認められる。弥生土器片および縄文土器片は、切り合い関係にある遺構からの混入物である。

不明遺構

不明遺構1号 (SX1001) (第140図)

9区 D・E-48・49でSP1270・1271の2基に切られた状態で確認された不明遺構。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸4.91m、短軸3.84m、最大深度0.22mを測る。覆土はほぼ褐色砂質土1層で、直径10cm前後の礫を多く含む。遺物は黒色土器椀、弥生土器片が出土したものの、図化できるものはなかった。

また床面上で、柱穴9基検出した。この遺構に伴うかどうか不明だが、併せて報告する。柱穴は直径0.26～0.37m前後の円形5基と、長軸0.31～0.49m、短軸0.25～0.36mの楕円形4基から成り、最大深度0.04～0.17mを測る。9基は単層で概ね褐色を主体とし、EP9では炭化物を大量に含む。検出した柱穴9基では遺物の出土は認められず、また柱痕も確認できなかった。

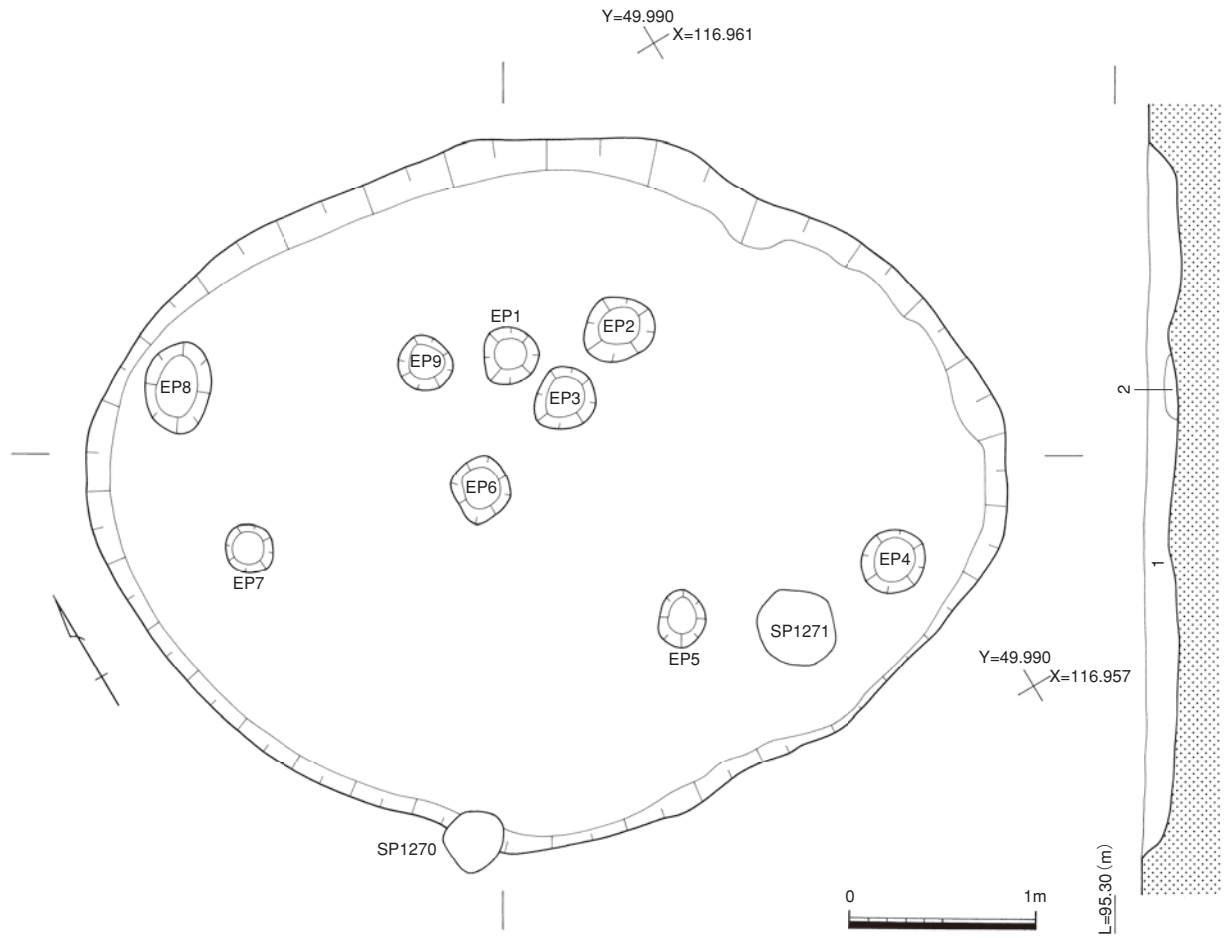
不明遺構2号 (SX1002) (第141図)

9区 D・E-59・60で調査区東側溝と試掘調査時のトレンチに切られた状態で確認された不明遺構。遺構はさらに調査区東側に延びるが、南側は削平を受ける。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は逆台形を呈するものと思われる。最大長6.00m、最大幅1.95m、最大深度0.15mを測る。覆土は褐色砂質土1層で、直径5cm前後の小礫を多量に含む。遺物は土師質土器杯、弥生土器片が出土したものの、図化できるものはなかった。

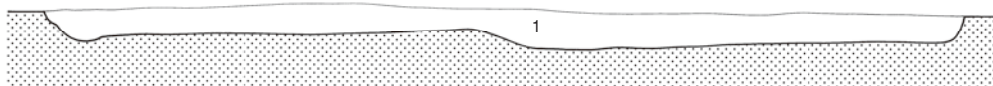
また床面上で、土坑1基を検出した。EK1としているがSX1002と別遺構の可能性もあり、その場合、SX1002が後出する。土坑の一部は調査区東側にさらに延びるが、平面形態・底面形態は楕円形、断面形態は逆台形を呈する。規模は長軸2.40m、最大幅1.36m、最大深度0.32mを測る。覆土は暗褐色粘性砂質土1層で、直径5cm前後の小礫を多量に含む。出土遺物は、認められなかった。

不明遺構5号 (SX1005) (第141図)

97-1区 G-56・57で確認された不明遺構。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は逆台形を呈し、長軸3.01m、短軸0.84m、最大深度0.10mを測る。覆土は褐色粘性砂質土1層で、直径5cm前後の小礫を多量に含む。出土遺物は、認められなかった。

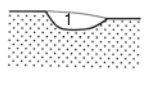


L=95.30 (m)



1 褐色 (7.5YR4/4) 砂質土
2 暗褐色 (10YR3/4) 砂質土

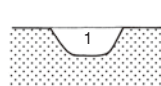
L=95.10 (m)



EP1

1 褐色 (10YR4/4) 砂質土

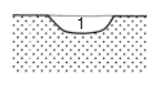
L=95.10 (m)



EP2

1 褐色 (10YR4/4) 砂質土

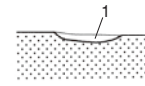
L=95.10 (m)



EP3

1 暗褐色 (10YR3/4) 砂質土

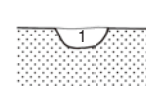
L=95.10 (m)



EP4

1 褐色 (7.5YR4/4) 粘性砂質土

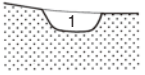
L=95.10 (m)



EP5

1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土

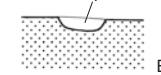
L=95.10 (m)



EP6

1 褐色 (10YR4/4) 砂質土

L=95.10 (m)



EP7

1 褐色 (10YR4/4) 砂質土

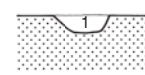
L=95.10 (m)



EP8

1 褐色 (10YR4/4) 砂質土

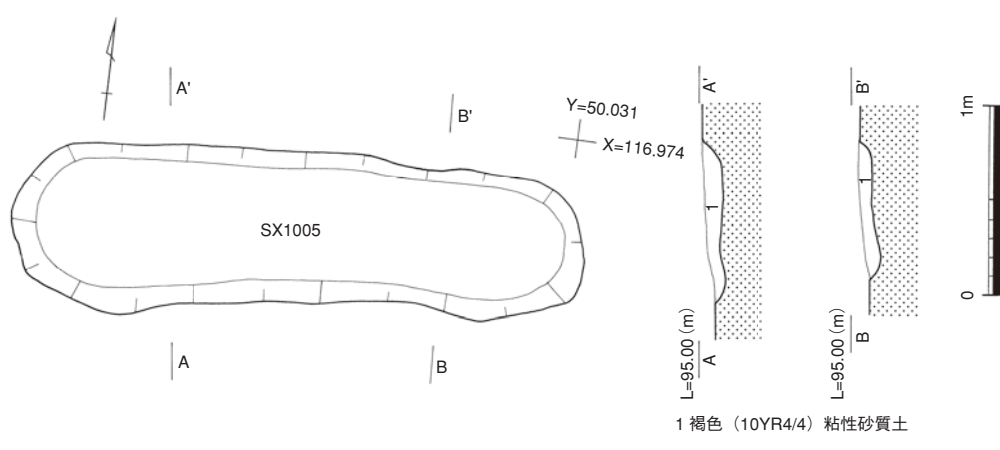
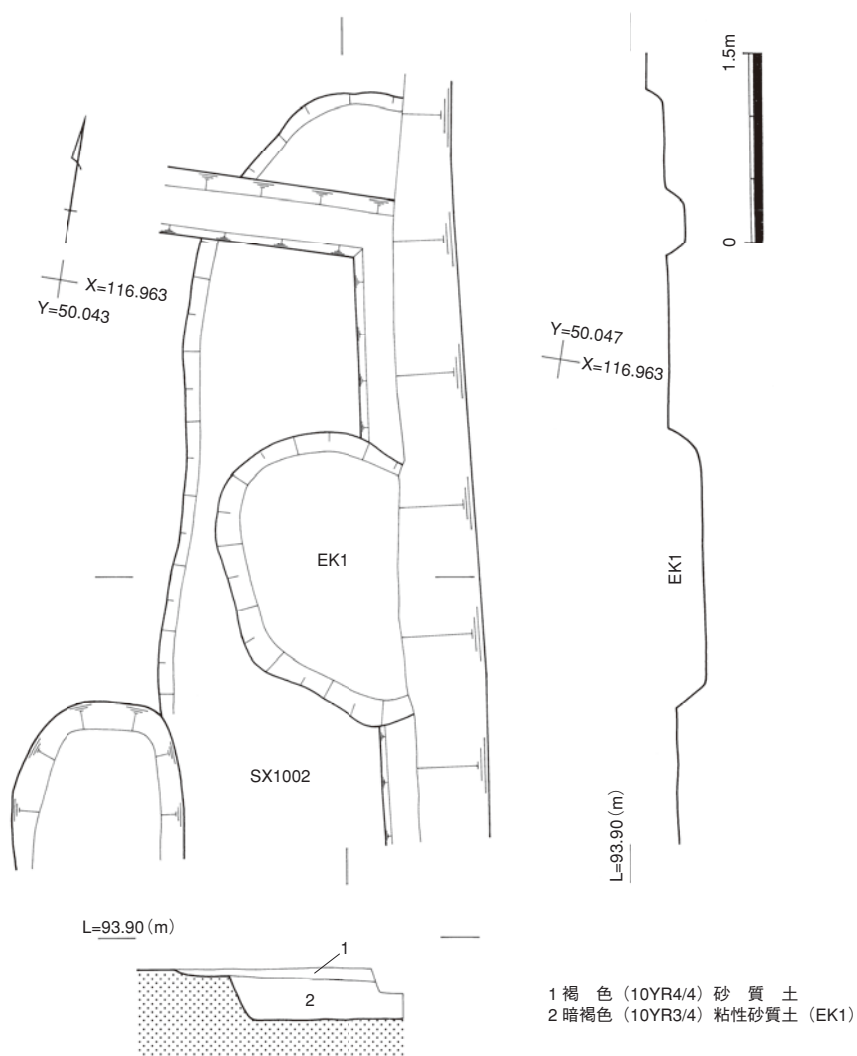
L=95.10 (m)



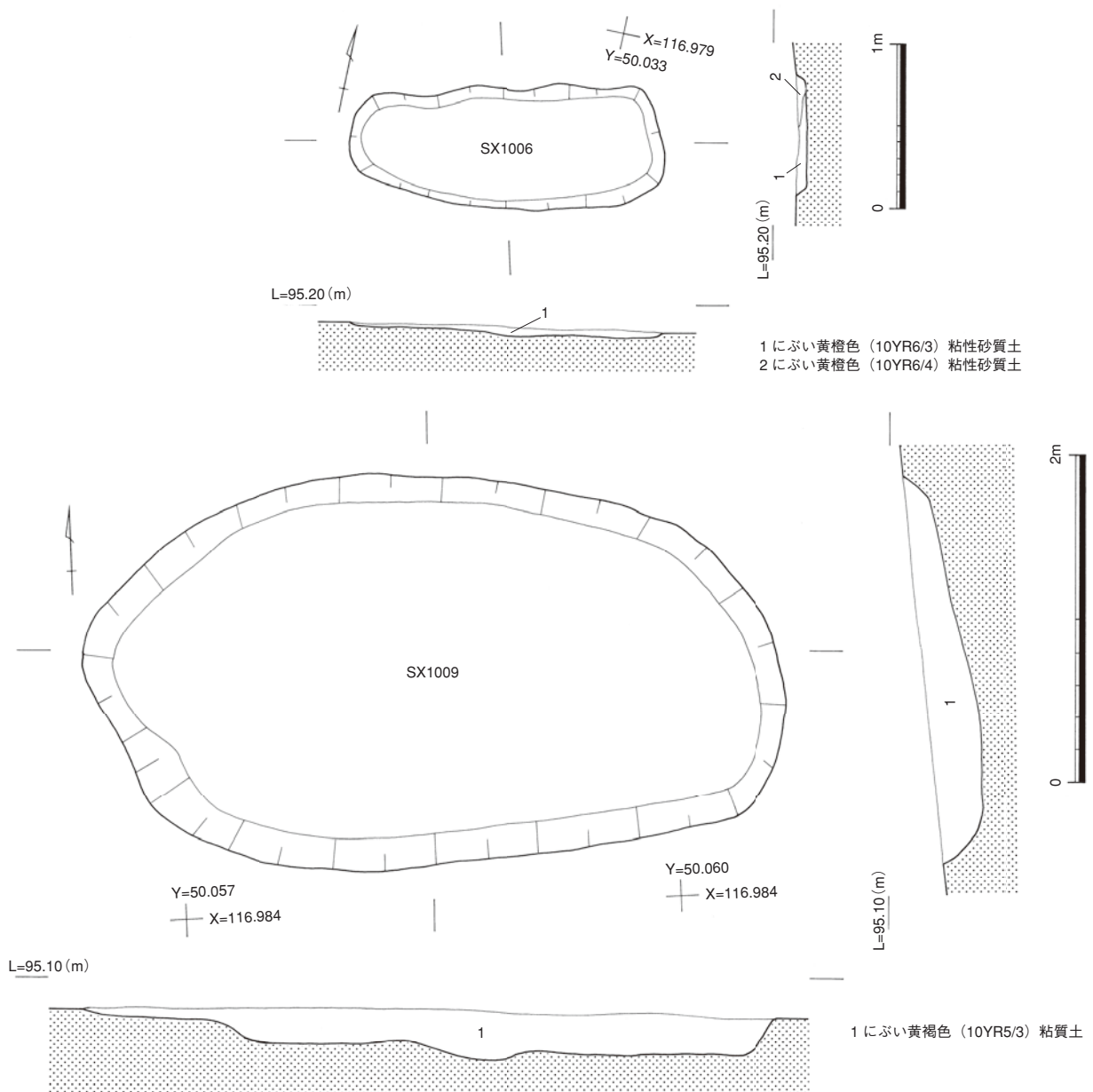
EP9

1 黒褐色 (10YR3/2) 砂質土

第140図 SX1001 遺構図



第141図 SX1002・1005 遺構図



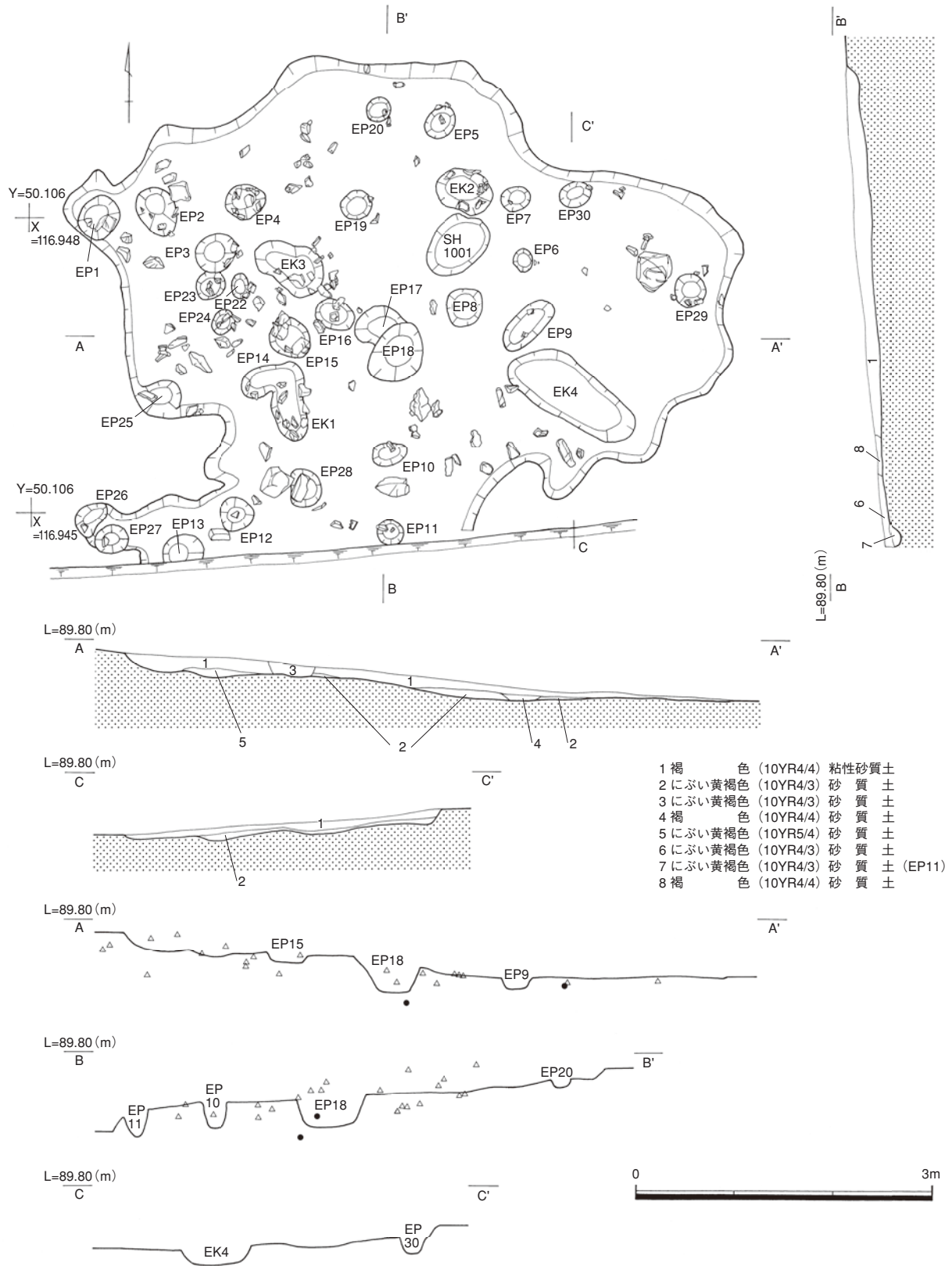
第142図 SX1006・1009 遺構図

不明遺構6号 (SX1006) (第142図)

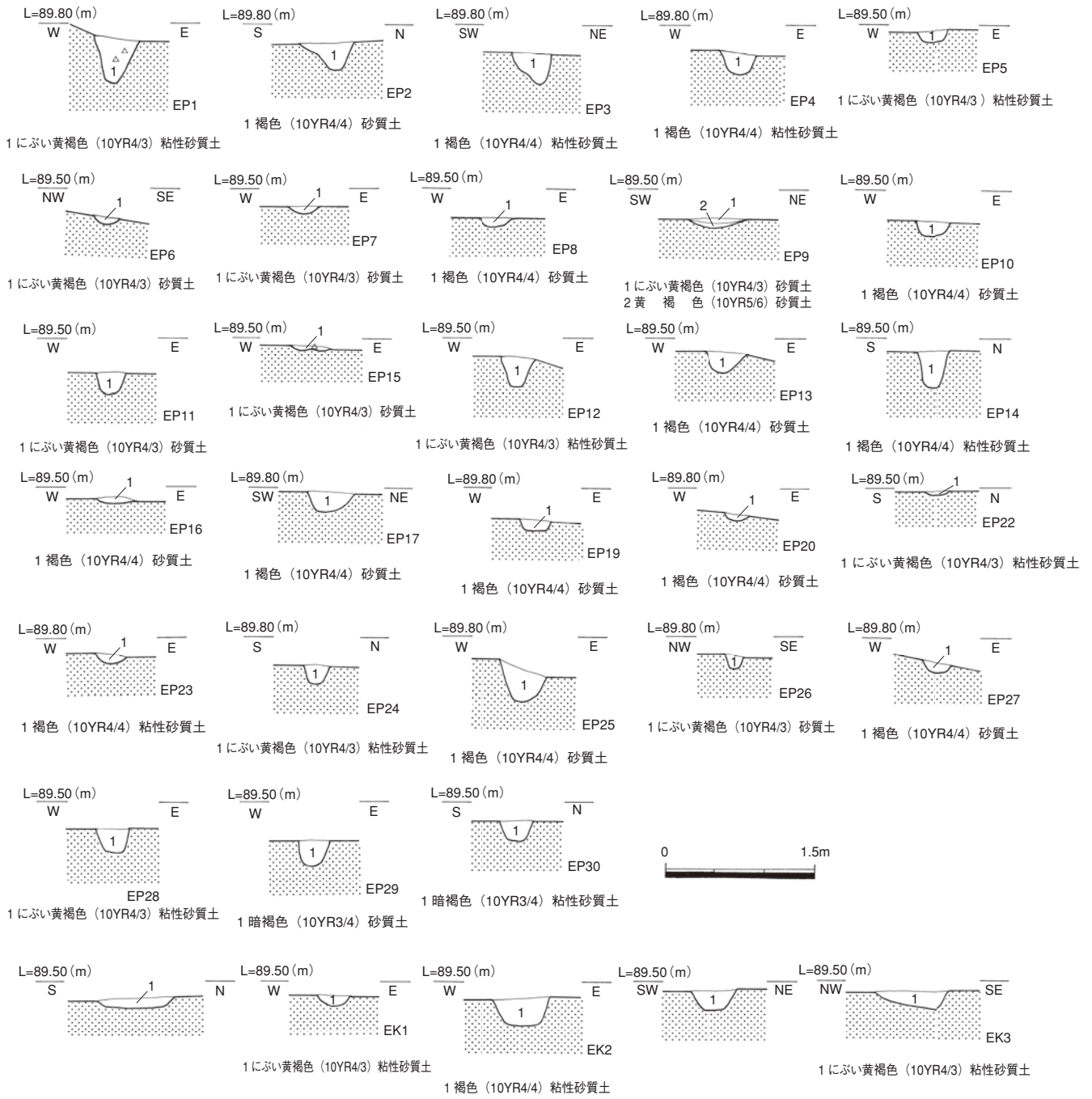
97-1区 H-57で確認された不明遺構。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は舟底形を呈し、長軸1.90m、短軸0.74m、最大深度0.06mを測る。覆土はにぶい黄橙色を呈するものの、2層に分層できる。両層ともに、直径3cm弱の礫を多量に含む。出土遺物は、認められなかった。

不明遺構9号 (SX1009) (第142図)

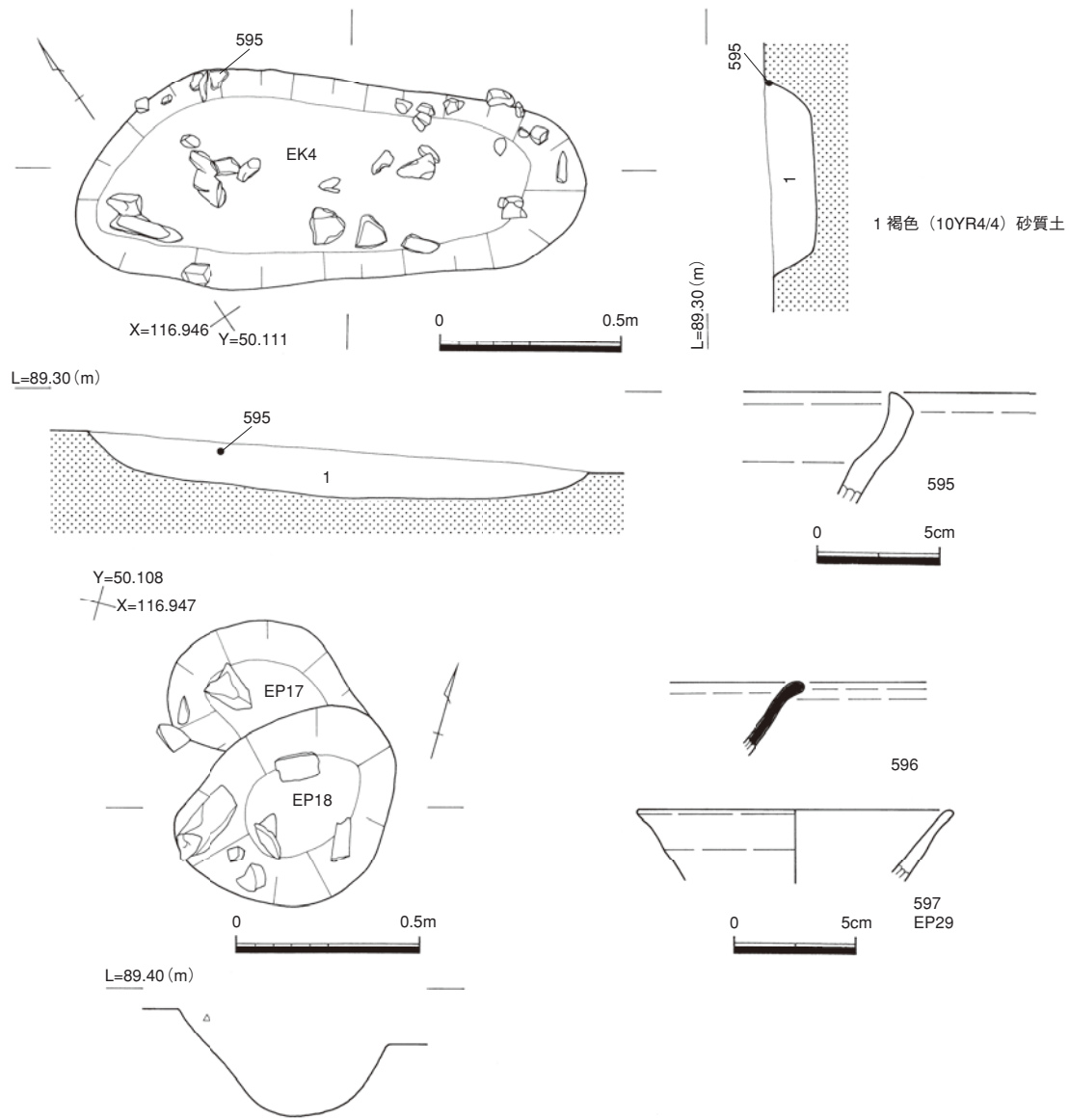
97-2区 I・J-62・63で確認された不明遺構。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は不整舟底形を呈し、長軸4.28m、短軸2.42m、最大深度0.30mを測る。覆土はにぶい黄褐色粘質土1層で、直径10cm前後の小礫を多量に含む。遺物は土師質土器杯が出土したが、図化できなかった。



第143図 SX1010 遺構図 (1)



第144図 SX1010 遺構図 (2)

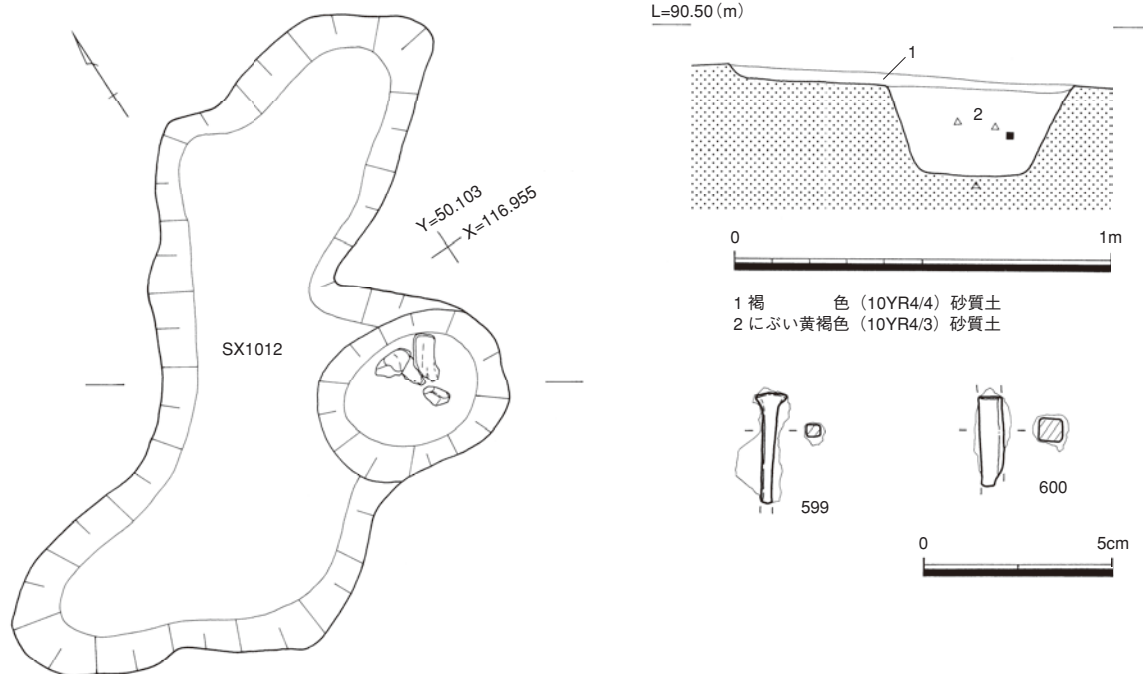
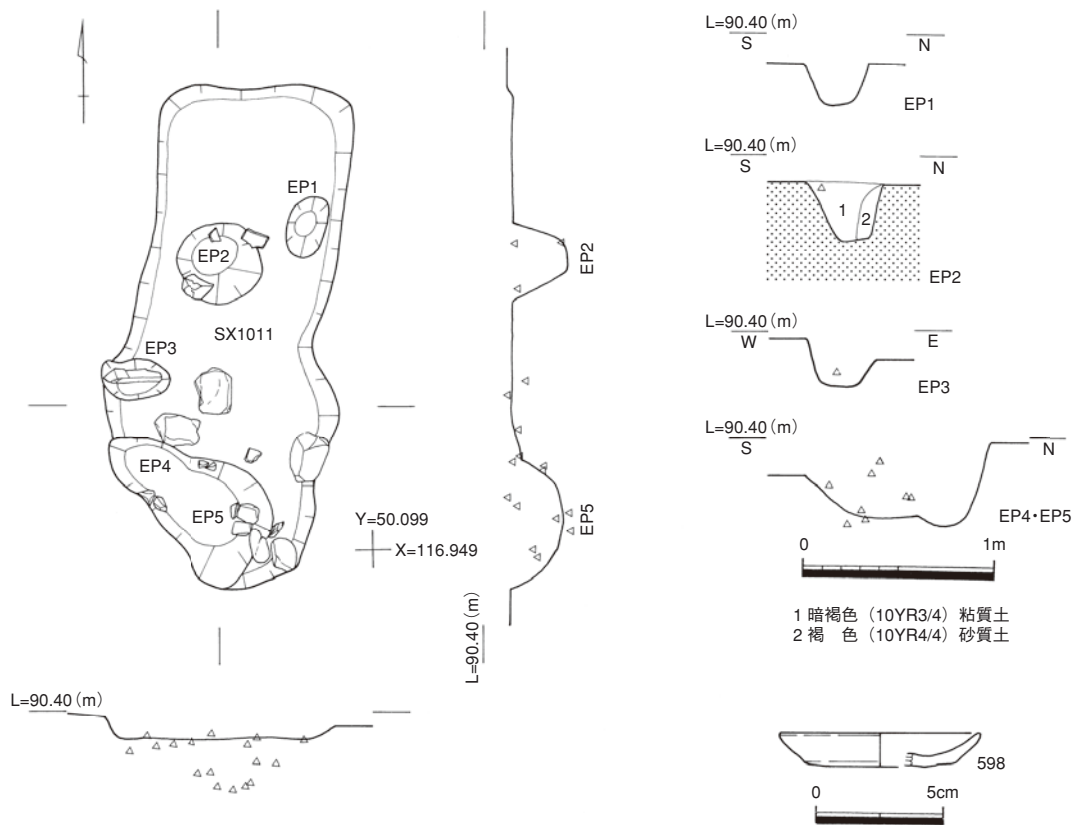


第145図 SX1010 EK・EP 遺構図・出土遺物

不明遺構10号 (SX1010) (第143~145図)

10-3区 A・B-72・73で調査区南側溝に切られた状態で確認された不明遺構。遺構はさらに、調査区南側に延びると思われる。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は不整舟底形を呈し、最大長6.15m、最大幅4.88m、最大深度0.20mを測る。覆土は褐色を主体とするが、8層に分層できる。1・4・8層は褐色砂質土、2・3・5~7層はにぶい黄褐色砂質土である。3層は炭化物を若干含み、位置的にEP15の覆土の可能性がある。遺物は土師質土器杯・小皿・羽釜脚部、須恵質土器片、青磁碗、備前産と思われる陶器片、須恵器皿、焼土塊、羽口、鉄滓、溶解炉壁、炭化物が出土し、そのうち図化できたのは青磁碗(596)だけである。

また床面上で柱穴29基、土坑4基を検出した。これらの柱穴・土坑が、SX1010に伴うのか不明だが併せて報告する。EP15に関しては、別遺構の可能性が高い。柱穴は直径0.24~0.42m前後の円形7基と、



第146図 SX1011・1012 遺構図・出土遺物

長軸0.24～0.63m、短軸0.17～0.39mの楕円形21基から成り、最大深度0.04～0.44mを測る。柱穴29基のうちEP9以外はすべて単層で、褐色あるいはにぶい黄褐色を呈する。柱痕は、確認できなかった。EP13では、焼土ブロックを混入する。全般的に覆土に炭化物が認められるが、EP9・12・13・16・19・23・25・27・29では多量に含む。また遺物は、EP4では滓、EP2・29では土師質土器杯、EP8では土師質土器小皿、EP9・25では土師質土器片、EP12では焼土塊、EP13では土師質土器片・焼土塊、EP18では土師質土器片・羽釜脚部、EP30では須恵質土器碗が出土した。

検出した土坑4基は、長軸0.60～1.39m、短軸0.35～0.54m、最大深度0.10～0.25mを測る。覆土は褐色あるいはにぶい黄褐色を呈し、単層である。また遺物は、EK1から土師質土器杯が、EK2から土師質土器小皿・煮沸具の体部片・須恵質土器碗・滓が、EK4から土師質土器片・こね鉢・鍋が出土し、そのうちEP29から出土した土師質土器杯(597)とEK4から出土した土師質土器鍋(595)のみ図化できた。

不明遺構11号 (SX1011) (第146図)

10-3区 B・C-70で確認された不明遺構。平面形態・底面形態ともに不整長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸2.66m、短軸1.24m、最大深度0.12mを測る。遺物は、直径10～20cm前後の礫とともに土師質土器杯・小皿、須恵質土器片、焼土塊、備前産と思われる陶器甕、鉄滓が出土し、図化できたのは土師質土器小皿(598)のみである。

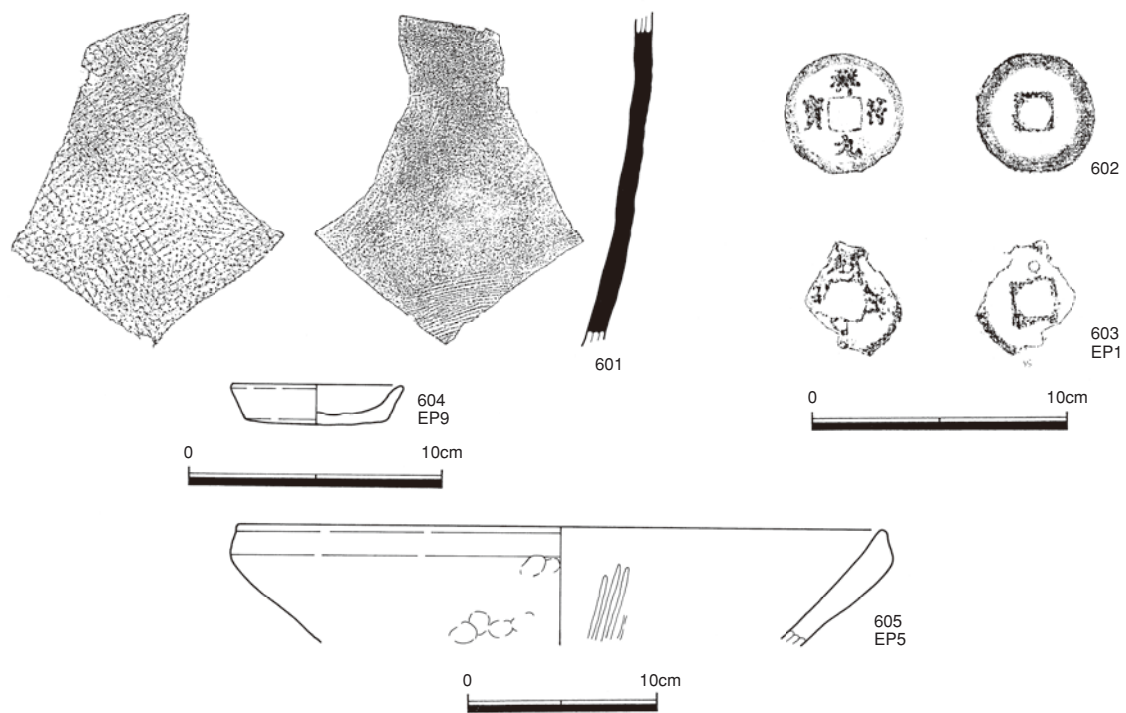
また床面上で、柱穴5基を検出した。これらの柱穴がSX1011に伴うかどうか不明だが、併せて報告する。柱穴は直径0.44m前後の円形1基と、長軸0.34～0.37m、短軸0.20～0.57mの楕円形4基から成り、最大深度0.22～0.45mを測る。EP2は2層に分層でき、1層は暗褐色粘質土で炭化物・土器片を多く含み、2層は褐色砂質土である。それ以外の柱穴の土層堆積状況は、不明である。また遺物は、EP2では備前と思われる陶器甕・焼土塊、EP4では土師質土器片、煮沸具の体部片、溶解炉壁が出土したが、図化できるものはなかった。

不明遺構12号 (SX1012) (第146図)

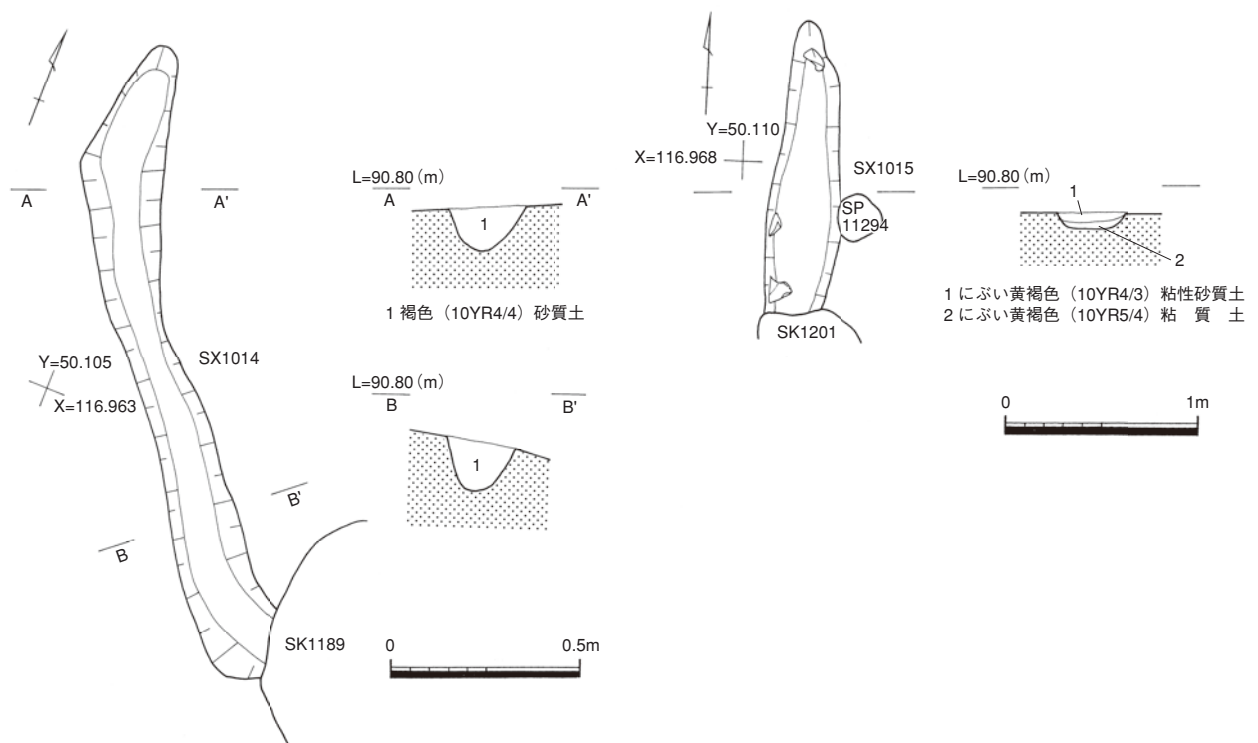
10-3区 C・D-71で確認された不明遺構。覆土除去後、床面上で土坑1基を検出した。遺構深度の浅さから包含層の部分的な残存の可能性はある。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は舟底形を呈し、長軸1.97m、短軸0.82m、最大深度0.04mを測る。覆土は褐色砂質土1層である。また土坑の平面形態・底面形態は楕円形、断面形態は逆台形を呈し、規模は長軸0.51m、短軸0.39m、最大深度0.20mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土1層で、炭化物を若干含む。遺物は土師質土器杯、溶解炉壁、鉄釘が出土し、図化できたのは断面方形を呈する鉄釘(599・600)のみである。

不明遺構13号 (SX1013) (第147・148図)

10-3区 C・D-72で確認された不明遺構。平面形態・底面形態ともに不整楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸5.12m、短軸2.50m、最大深度0.10mを測る。覆土は4層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層(1層)はにぶい黄褐色粘性砂質土で、炭化物を若干含む。下層(2～4層)は概ね暗褐色を呈し、2・3層は炭化物をやや多く含む。遺物は土師質土器杯・小皿・羽釜・播鉢、須恵質土器碗、須恵質土器片、備前と思われる陶器片、銭貨、焼土塊、溶解炉壁、鉄滓、弥生土器片が出土し、図化できたのは須恵質土器甕の体部片(601)、銭貨(602)である。602は「祥符元寶」で、北宋銭である。



第148図 SX1013 出土遺物



第149図 SX1014・1015 遺構図

また覆土除去後、床面上で柱穴10基、土坑1基を検出した。SX1013に伴うかどうかは不明だが、併せて報告する。柱穴は直径0.20～0.50m前後の円形5基と、長軸0.33～0.78m、短軸0.20～0.62mの楕円形5基から成り、最大深度0.10～0.58mを測る。覆土は概ね単層で、褐色を主体とする。またEP4では柱痕を確認できた。全般的に覆土中に炭化物が認められるが、EP10では多量に含む。また遺物は、EP1では銭貨・焼土塊が、EP5では土師質土器小皿・播鉢・煮沸具の体部片・焼土塊・溶解炉壁が、EP6では土師質土器杯・鍋・羽釜脚部・須恵質土器片が、EP7では土師質土器杯・壁土・焼土塊が、EP8では土師質土器片・煮沸具の体部片が、EP9では土師質土器杯・小皿が出土した。そのうち図化できたのは、EP1から出土した名の不明な銭貨(603)、EP5から出土した土師質土器播鉢(605)、EP9から出土した底部回転ヘラ切りを施す土師質土器小皿(604)である。

また土坑は平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.74m、短軸1.16m、最大深度0.16mを測る。覆土は褐色砂質土1層で、直径3cm前後の小礫を多量に含む。出土遺物は、認められなかった。

不明遺構14号 (SX1014) (第149図)

10-3区 E-71でSK1189に切られた状態で確認された不明遺構。平面形態・底面形態ともに溝状を呈した不整形、断面形態は舟底形を呈し、最大長1.66m、短軸0.20m、最大深度0.13mを測る。覆土は褐色砂質土1層で、炭化物を多量に含む。遺物は土師質土器杯が出土したが、図化することはできなかった。

不明遺構15号 (SX1015) (第149図)

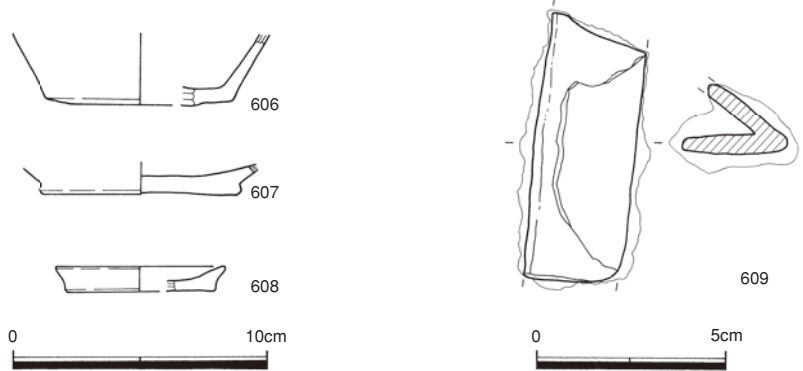
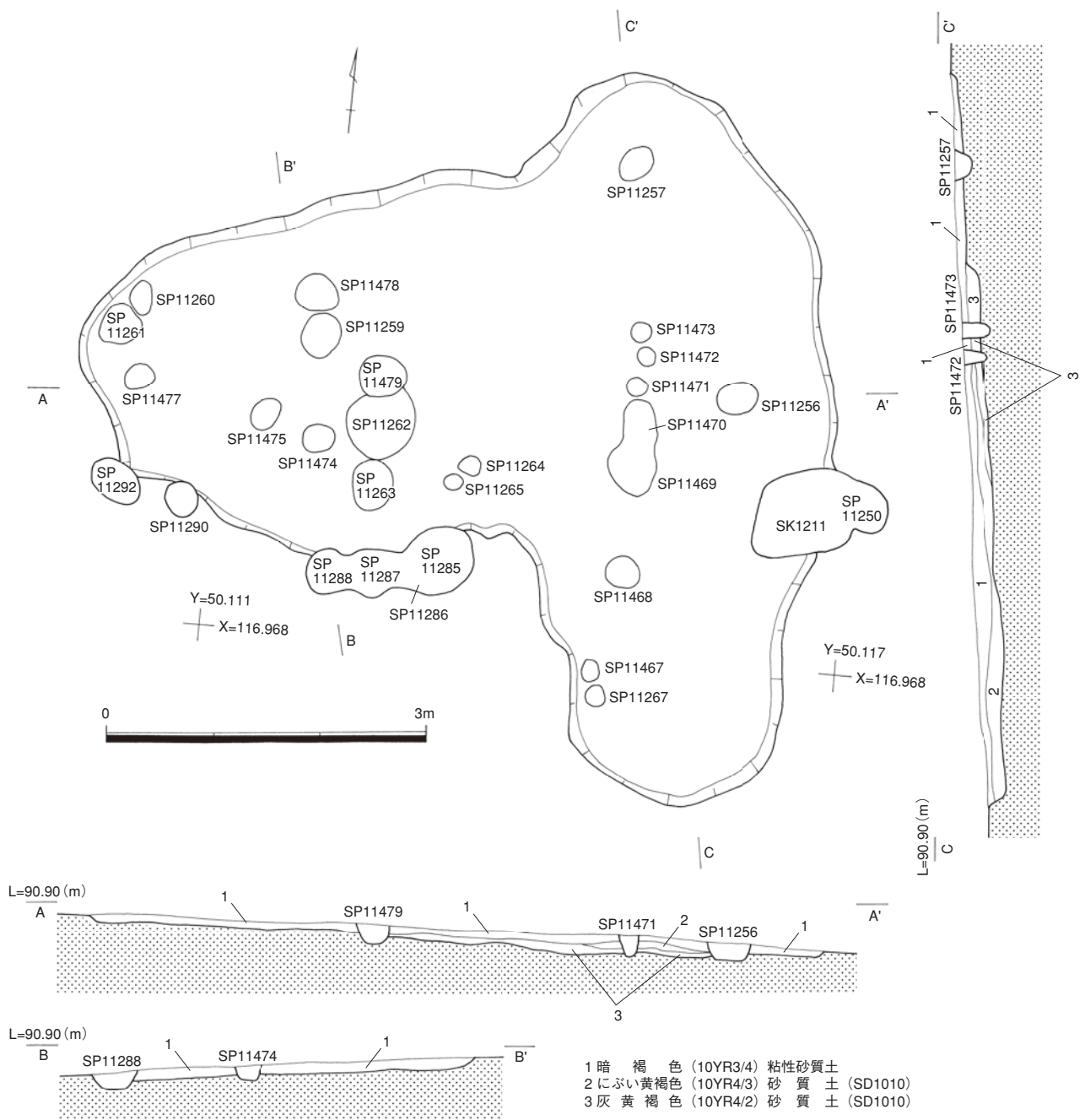
10-3区 F-73でSK1201・SP11294に切られた状態で確認された不明遺構。平面形態・底面形態ともに溝状を呈した不整形、断面形態は舟底形を呈し、最大長1.53m、短軸0.38m、最大深度0.10mを測る。覆土はにぶい黄褐色を呈し、含有物から2層に分層できる。1層は炭化物を含み、2層は粘性が強い。遺物は土師質土器杯が出土したが、図化することはできなかった。

不明遺構16号 (SX1016) (第150図)

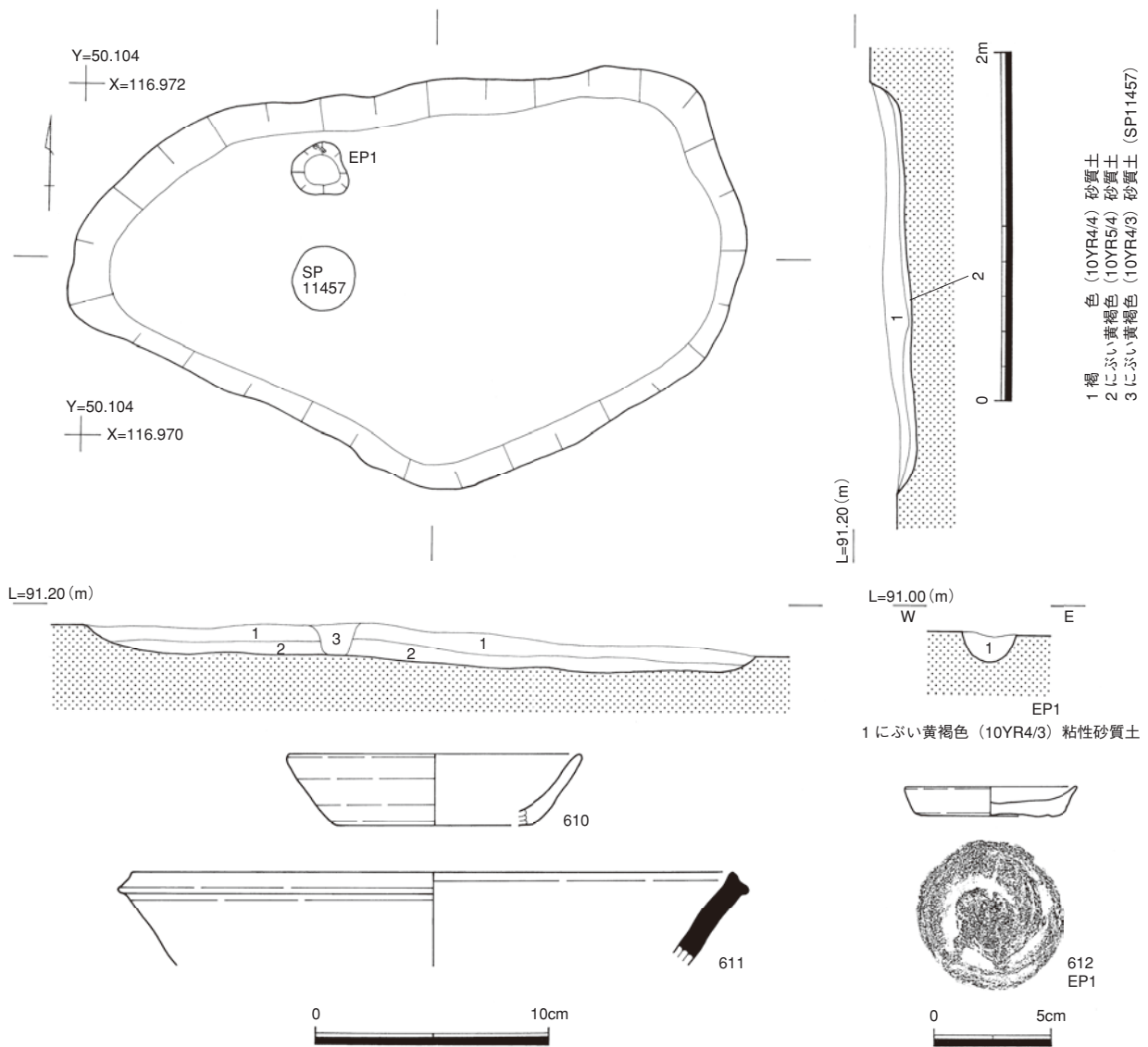
10-3区 F・G-73・74でSK1211・SP28基に切られた状態で確認された不明遺構。またSD1010と切り合い関係にあり、本遺構が後出する。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は舟底形を呈し、最大長6.95m、最大幅3.50m、最大深度0.25mを測る。覆土は3層に分層できるが、大きく2層に分けることができる。上層(1層)は暗褐色粘性砂質土で、炭化物をやや多く含む。下層(2・3層)はSD1010の覆土である。遺物は土師質土器杯・小皿・羽釜、瓦器椀、青磁碗、羽口、滓、溶解炉壁、不明鉄製品が出土し、そのうち土師質土器杯(606・607)・小皿(608)、不明鉄製品(609)が図化できた。606～608は3点ともに底部回転ヘラ切りで、606・607は回転ヘラ切りのあとに板ナデを施す。

不明遺構17号 (SX1017) (第151図)

10-3区 G-71・72でSP11457に切られた状態で確認された不明遺構。平面形態・底面形態ともに不整形楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸3.82m、短軸2.34m、最大深度0.20mを測る。覆土は3層に分層でき、3層はSP11457の覆土である。1層は褐色砂質土で、直径10～20cm前後の礫を多く含む。2層はにぶい黄褐色砂質土で、炭化物を含む。遺物は土師質土器杯・小皿、須恵質土器こね鉢、鉄滓が出土し、そのう



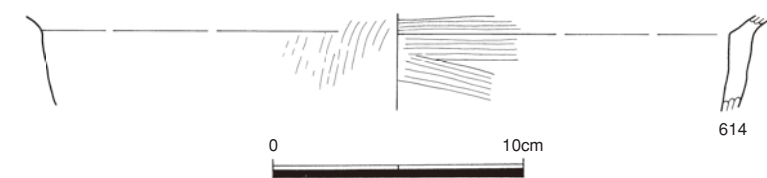
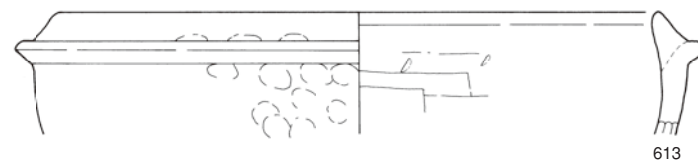
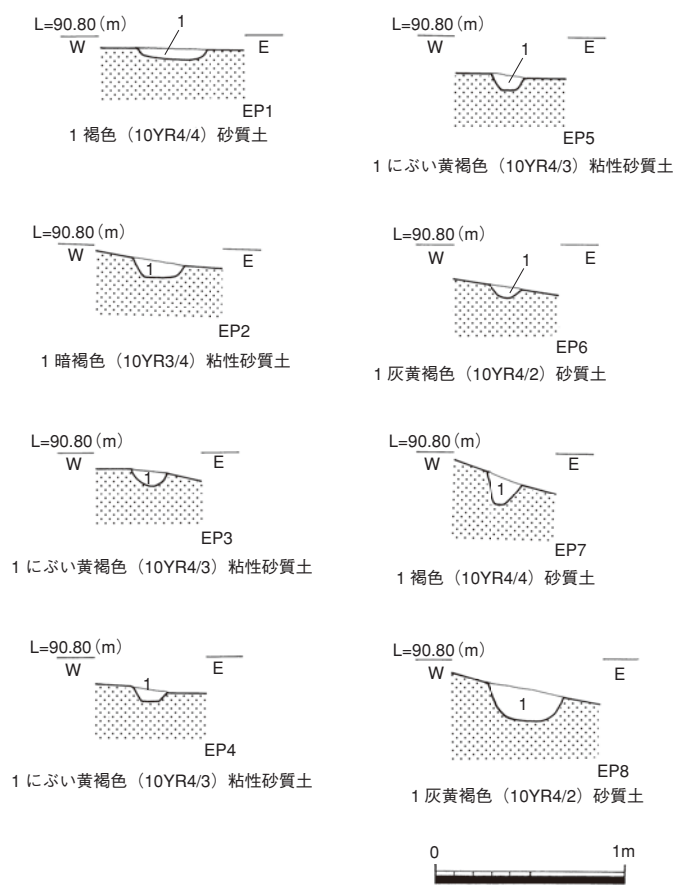
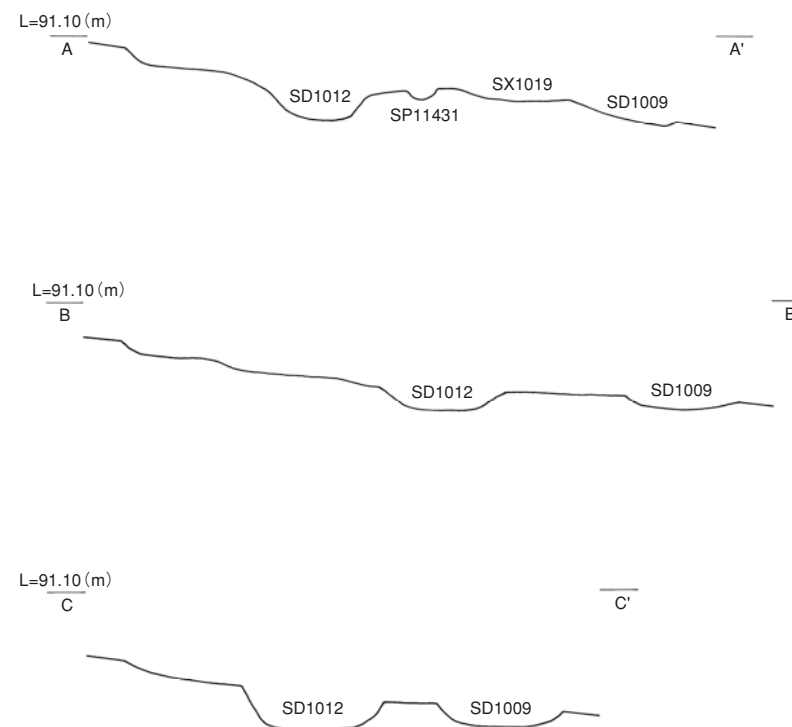
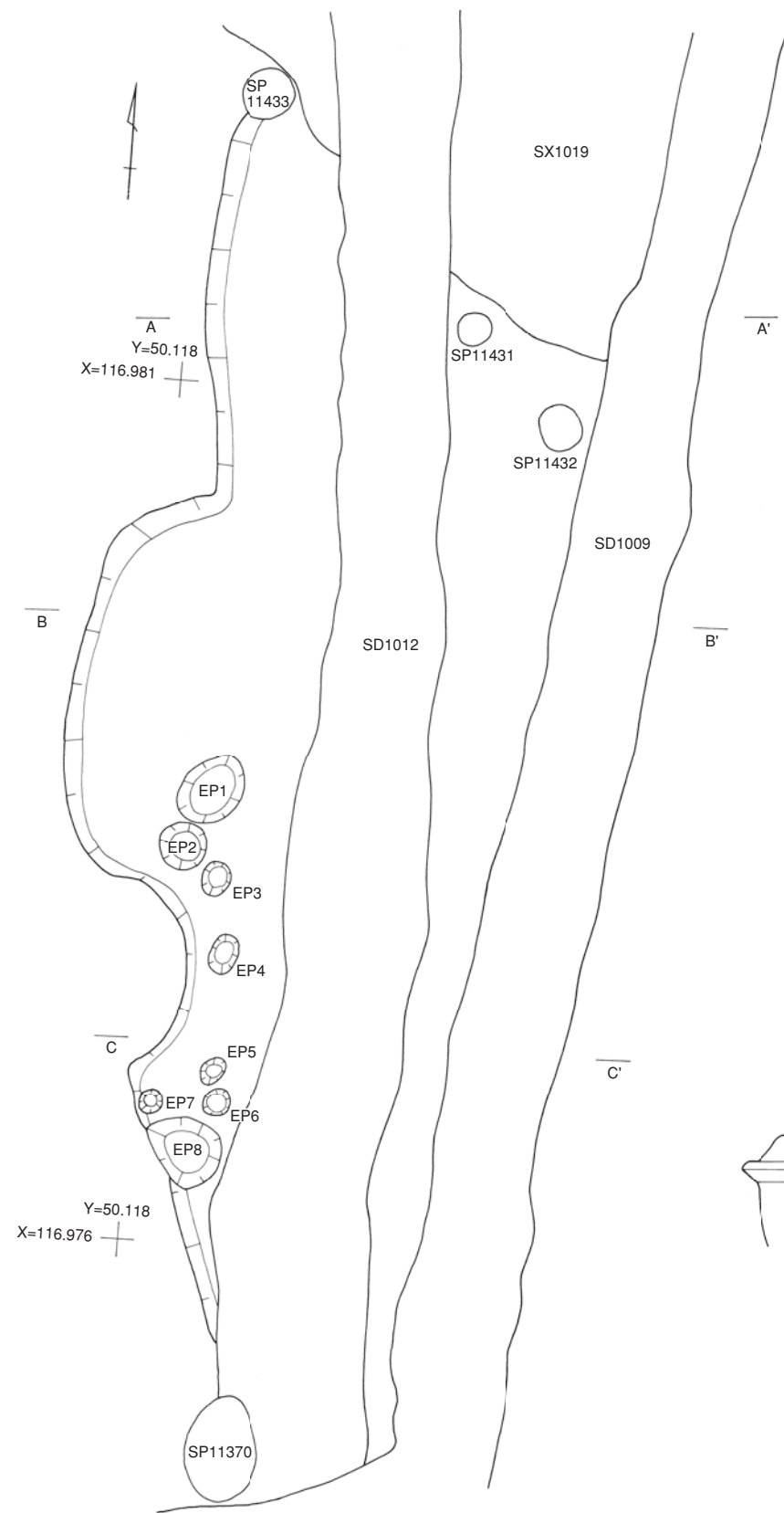
第150図 SX1016 遺構図・出土遺物



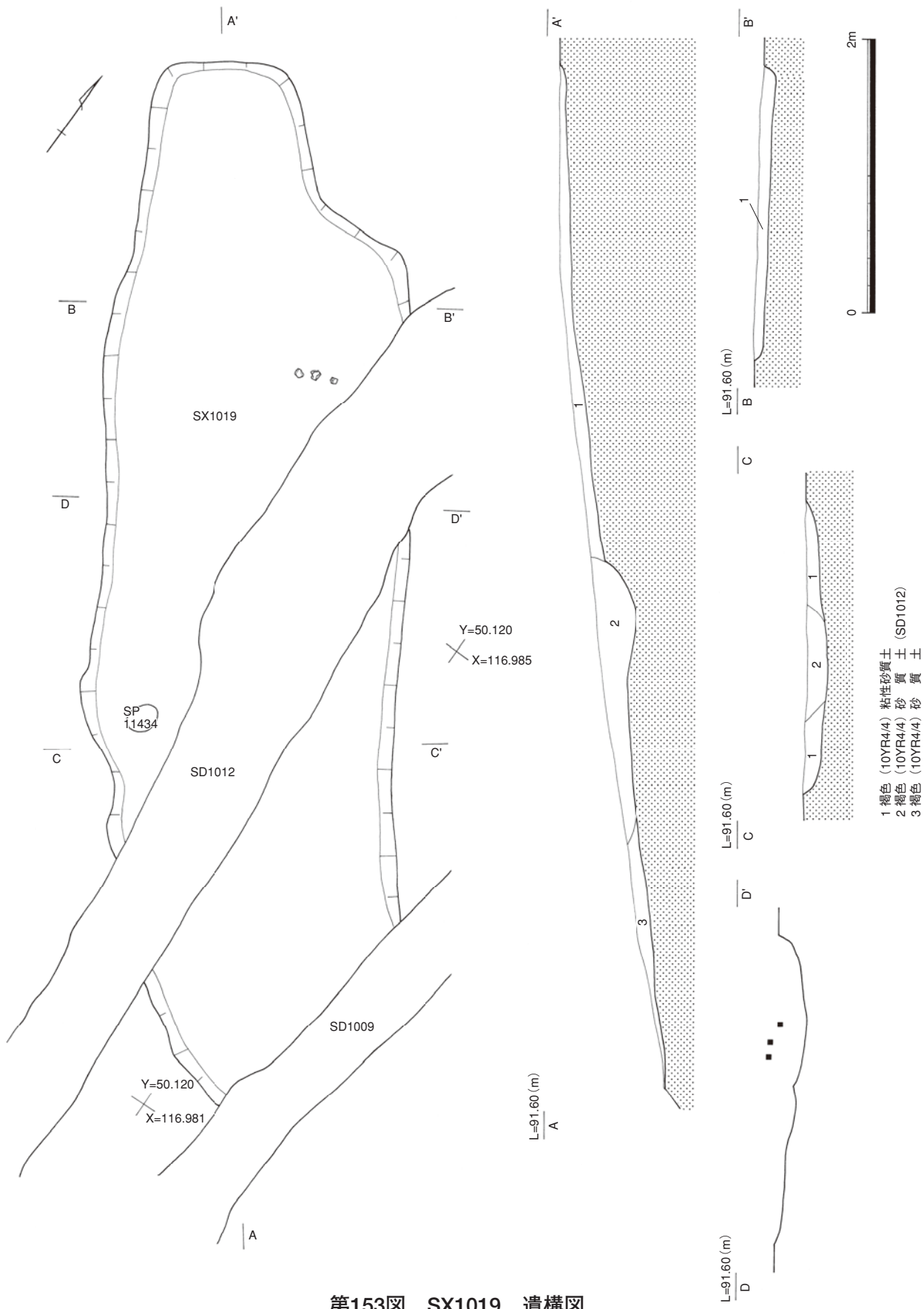
第151図 SX1017 遺構図・出土遺物

ち土師質土器杯(610)、須恵質土器こね鉢(611)が図化できた。

また床面上で、柱穴1基を検出した。平面形態・底面形態は不整円形、断面形態は舟底形を呈し、直径0.30m前後、最大深度0.16mを測る。覆土はにぶい黄褐色粘性砂質土1層で、直径10cm前後の小礫を多量に含む。遺物は、底部回転ヘラ切りを施す土師質土器小皿(612)が出土した。



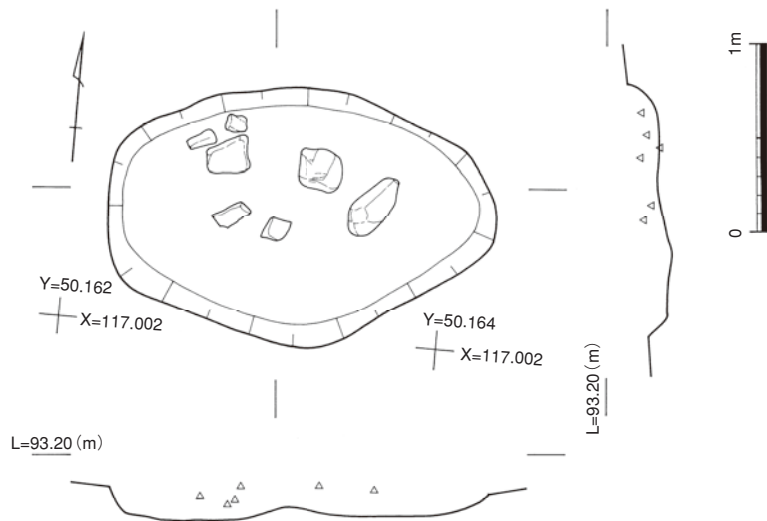
第152図 SX1018 遺構図・出土遺物



第153図 SX1019 遺構図

不明遺構18号 (SX1018)

(第152図)



10-3区 H・I-74でSD1009・1012、SP11431～11433・SX1019に切られた状態で確認された不明遺構。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は舟底形を呈し、最大長7.14m、最大幅2.64m、最大深度0.10mを測る。遺物は土師質土器杯・小皿・鍋・羽釜、須恵質土器椀、青磁片、鉄滓が出土し、そのうち土師質土器羽釜(613)・鍋(614)が、図化できた。

また覆土除去後、床面上で柱穴8基を検出した。SX1018に伴うかどうかは不明だが、併せて報告する。柱穴は直径0.17～0.29m前後の不整

第155図 SX1022 遺構図

円形4基と、長軸0.18～0.46m、短軸0.14～0.38mの楕円形4基から成り、最大深度0.05～0.16mを測る。覆土はすべて単層で、それぞれ褐色・暗褐色・にぶい黄褐色・灰黄褐色を呈し、炭化物を含む。EP1では土師質土器片が、EP8では羽口が出土したものの、図化できるものはなかった。

不明遺構19号 (SX1019) (第153図)

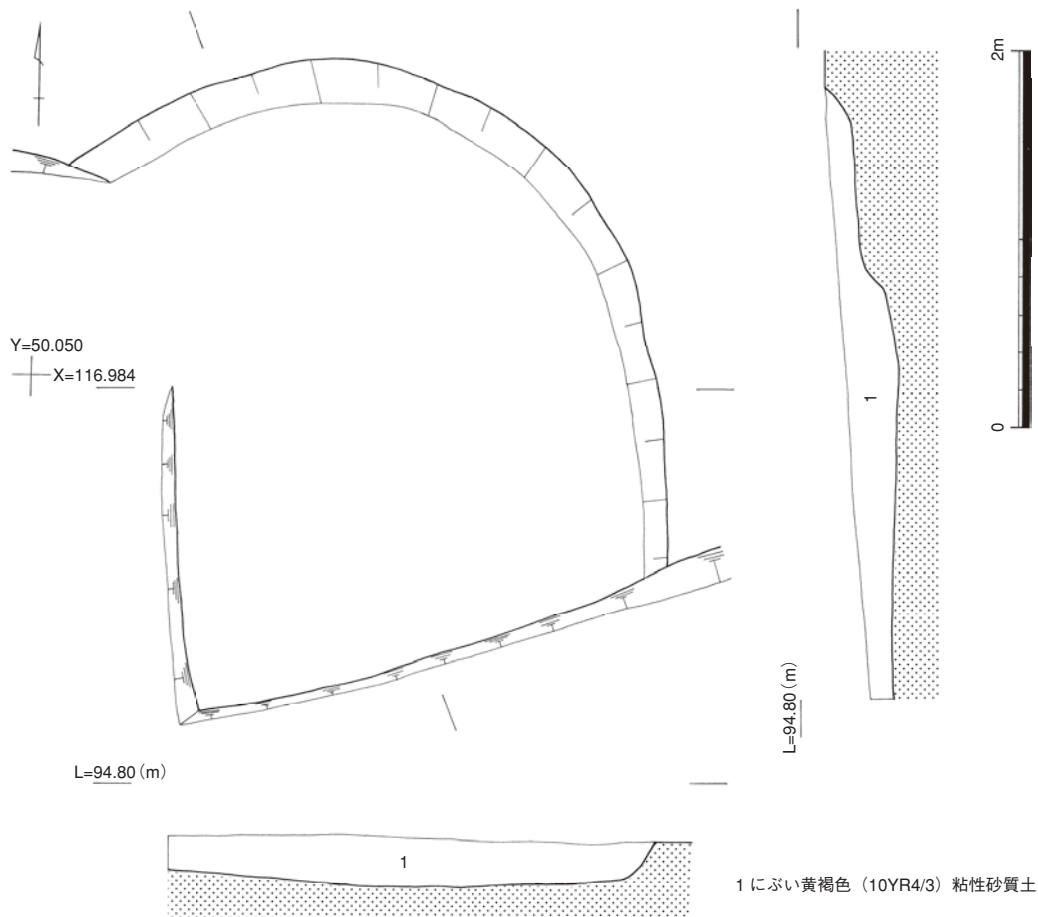
10-3区 I・J-74でSD1009・1012、SP11434に切られた状態で確認された不明遺構。遺構の検出状況から、北側に位置するSX2004と同一遺構の可能性もある。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は舟底形を呈し、最大長7.30m、短軸2.30m、最大深度0.12mを測る。覆土は3層に分層でき、2層はSD1012の覆土にあたる。本遺構の覆土は褐色を呈し、含有物から2層に分層できる。1層には認められないが、3層では直径1cm前後の小礫を多量に含む。遺物は土師質土器杯、羽口、鉄滓が床面から浮いた状態で出土したが、図化できるものはなかった。

不明遺構20号 (SX1020) (第154図)

11区 L-80・81で確認された不明遺構。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は舟底形を呈し、長軸3.96m、短軸1.10m、最大深度0.20mを測る。覆土は灰黄褐色砂質土1層で、炭化物を若干含む。遺物は土師質土器杯・小皿、須恵質土器片、溶解炉壁、鉄滓が出土し、土師質土器杯(616)・小皿(615)が図化できた。小皿は磨滅により調整不明瞭だが、杯の底部は回転ヘラ切りである。

不明遺構21号 (SX1021) (第154図)

11区 M-82でSK1298に切られた状態で確認された不明遺構。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は舟底形を呈し、長軸5.00m、短軸2.53m、最大深度0.32mを測る。直径50cm程の円形状を呈した炭化物の集積が、遺構の東方付近で認められた。遺物は土師質土器皿・小皿・煮沸具の体部片、黒色土器



第156図 SX2001 遺構図

椀、須恵質土器片、備前と思われる陶器片、鉄滓が出土し、黒色土器椀(617)のみ図化できた。

不明遺構22号 (SX1022) (第155図)

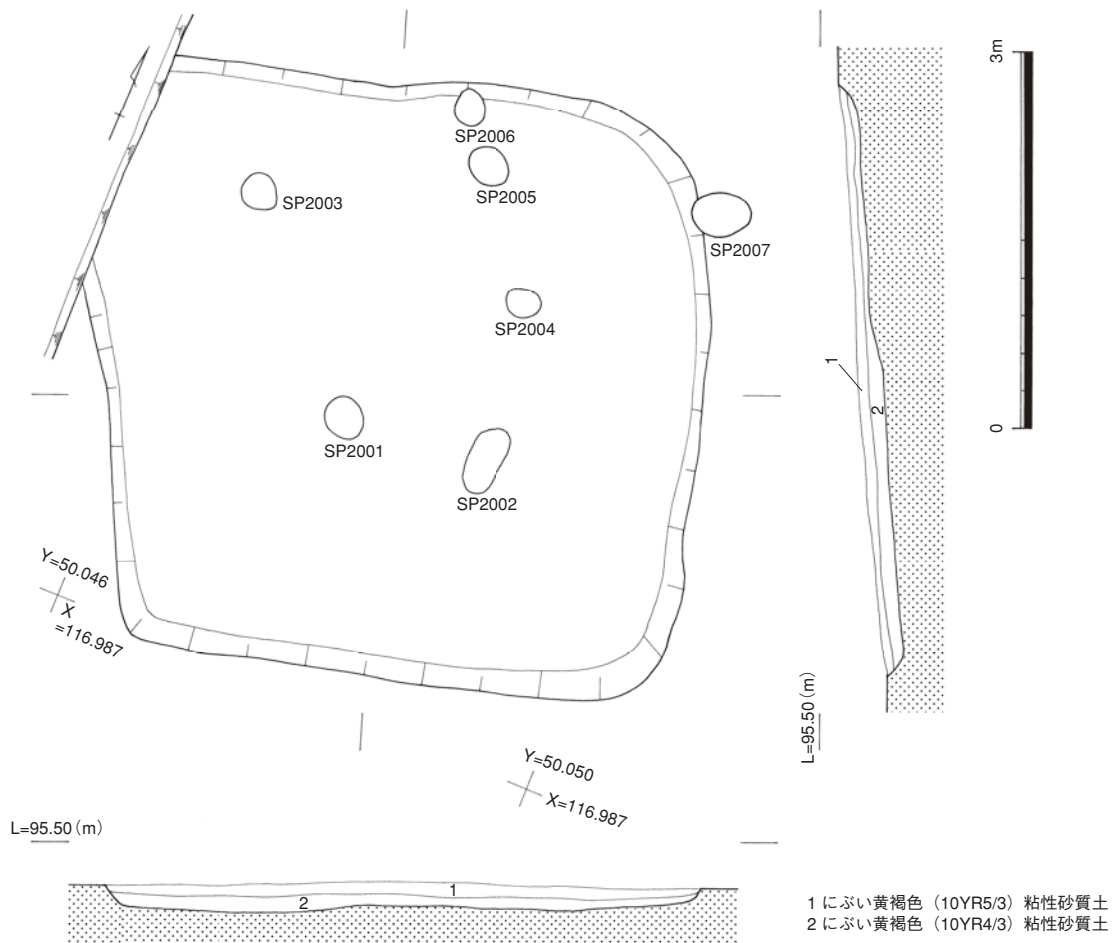
11区 M-83で確認された不明遺構。遺構の検出状況から、SX1023・SD1018に関連する可能性がある。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は不整な舟底形を呈し、長軸2.06m、短軸1.39m、最大深度0.17mを測る。覆土中に、直径5～20cm大の礫を含む。出土遺物は、認められなかった。

第二遺構面

第二遺構面上の不明遺構は、11基確認した。その中でSX2006～2010は、調査時では鋳造あるいは製練に関する廃棄土坑として捉え、SQとしていたが、遺構の性格を適切に表す記号がないために本報告ではSXとした(第171図)。

不明遺構1号 (SX2001) (第156図)

97-2区 I・J-61で調査区南側溝に切られた状態で確認された不明遺構。遺構はさらに、調査区南側および西側に拡がる。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は逆台形と推定でき、最大長3.24m、最大幅2.51m、最大深度0.28mを測る。覆土はにぶい黄褐色粘性砂質土1層で、直径10cm弱の礫を多量に含む。出土遺物は、認められなかった。



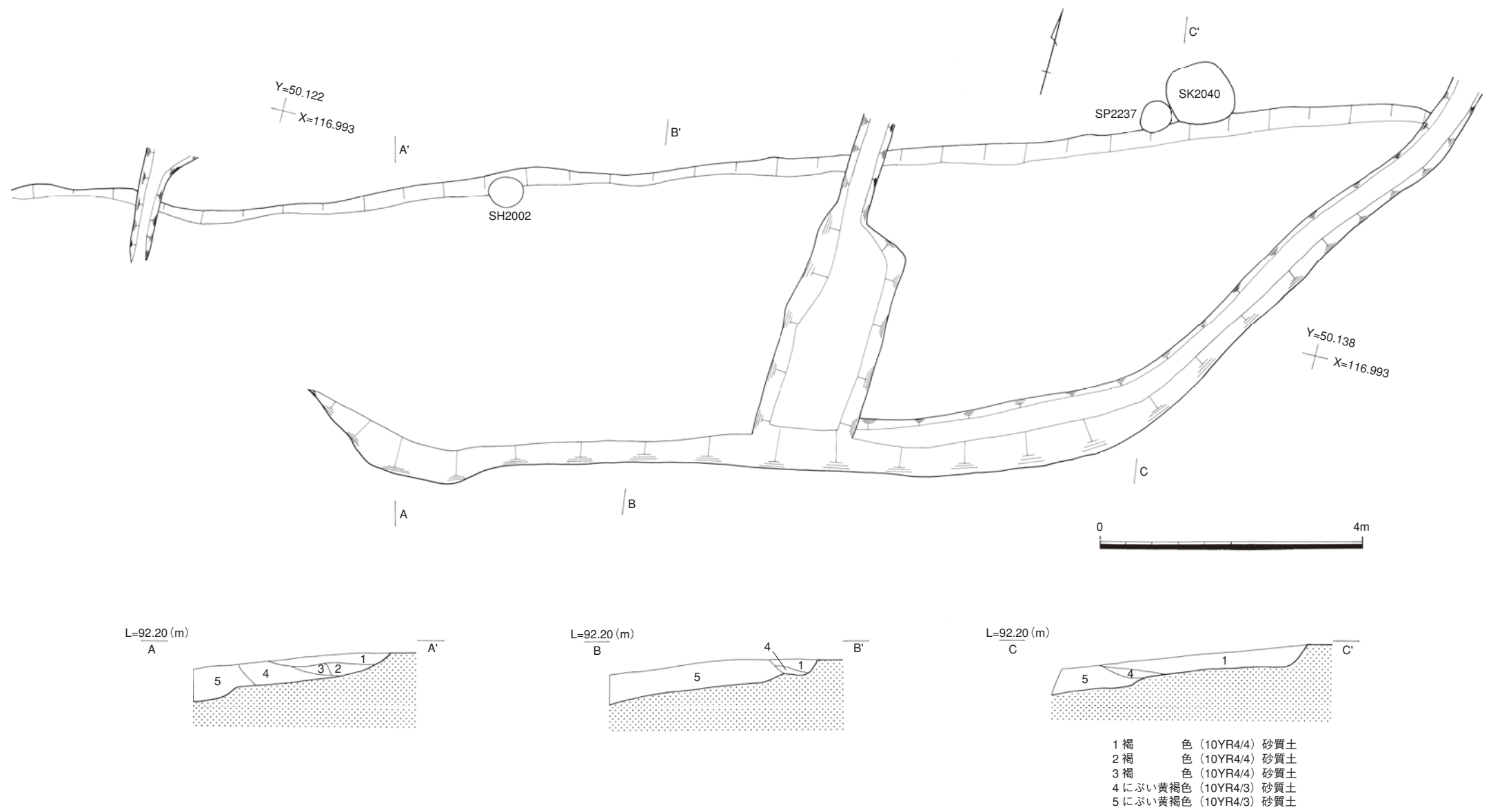
第157図 SX2002 遺構図

不明遺構2号 (SX2002) (第157図)

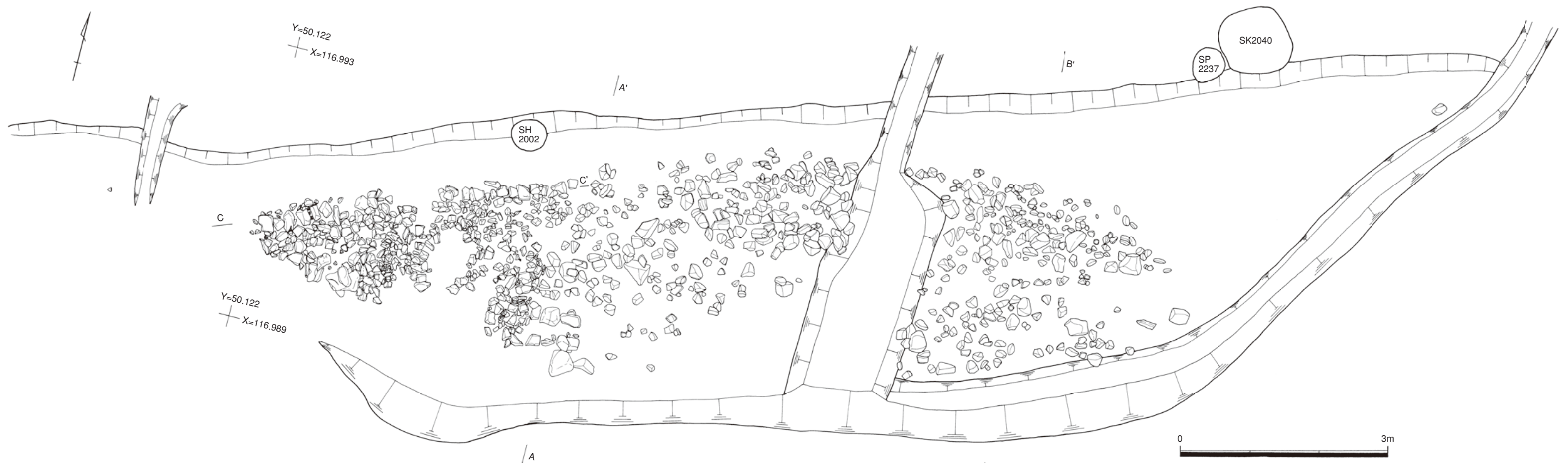
97-2区 J・K-60・61でSP2001～2007、および一部を調査区西側溝に切られた状態で確認された不明遺構。平面形態・底面形態ともに方形、断面形態は逆台形と推定でき、一辺4.70m程、最大深度0.20mを測る。覆土はにぶい黄褐色を呈し、含有物から2層に分層できる。2層ともに直径5～20cm前後の礫を多量に含み、1層では炭化物をやや多く含む。出土遺物は、認められなかった。

不明遺構3号 (SX2003) (第158～169図)

10-2区 K・L-75～77でSK2040・SH2002・SP2236に切られた状態で確認された溝状の不明遺構。同調査区内および東隣の11区では、この遺構の続きは検出されていない。平面形態・底面形態は不整形、断面形態は舟底形を呈し、最大長22m、最大幅5m、最大深度0.46mを測る。覆土は土色および含有物から5層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。I層(1～3層)は褐色を呈し、1層は直径5cm前後の礫を多量に含み、2層は炭化物を多く含む。3層は明黄褐色土ブロックを若干混入する。II層(4・5層)はにぶい黄褐色を呈し、5層は直径30cm大の礫および炭化物を多量に含む。覆土除去後、直径



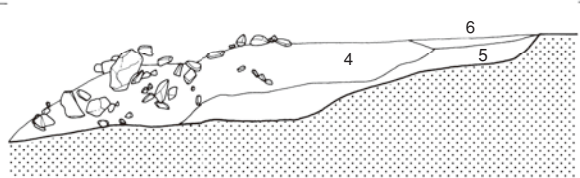
第158図 SX2003 遺構図



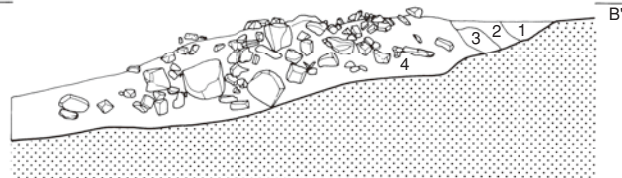
L=92.00 (m)
C



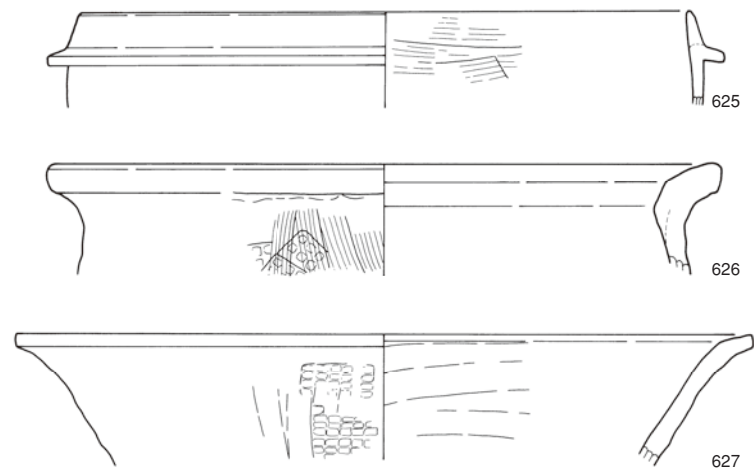
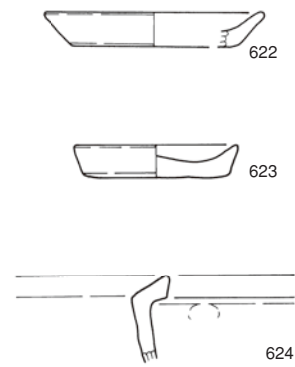
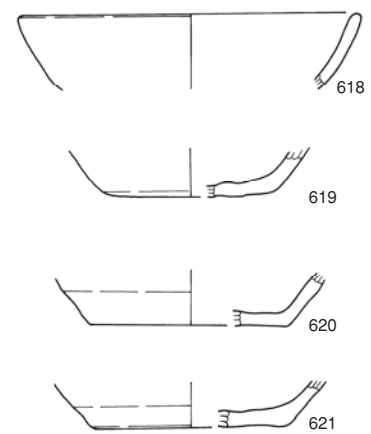
L=92.00 (m)
A



Y=50.132
X=116.989
L=92.00 (m)
B

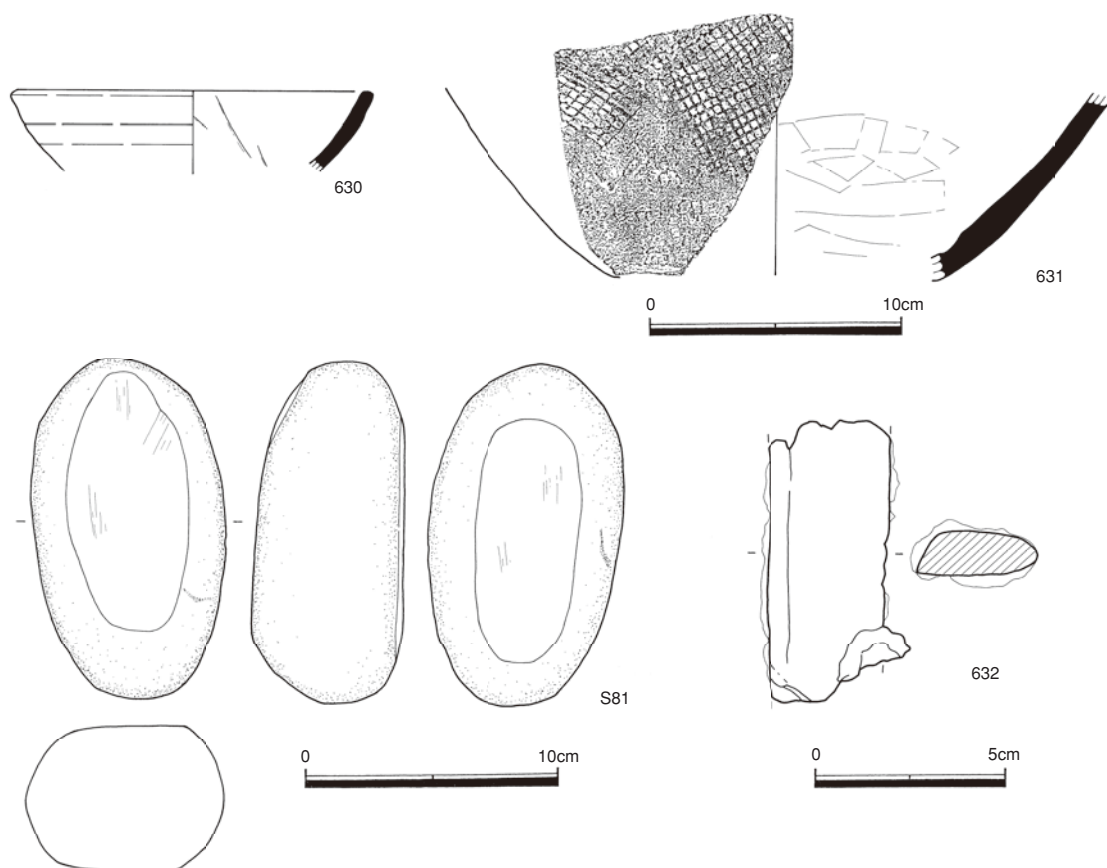


- 1 褐色 (10YR4/4) 砂質土
- 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土
- 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土
- 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土
- 5 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粘質土
- 6 褐色 (10YR4/4) 砂質土



0 10cm

第159図 SX2003 遺構図・出土遺物

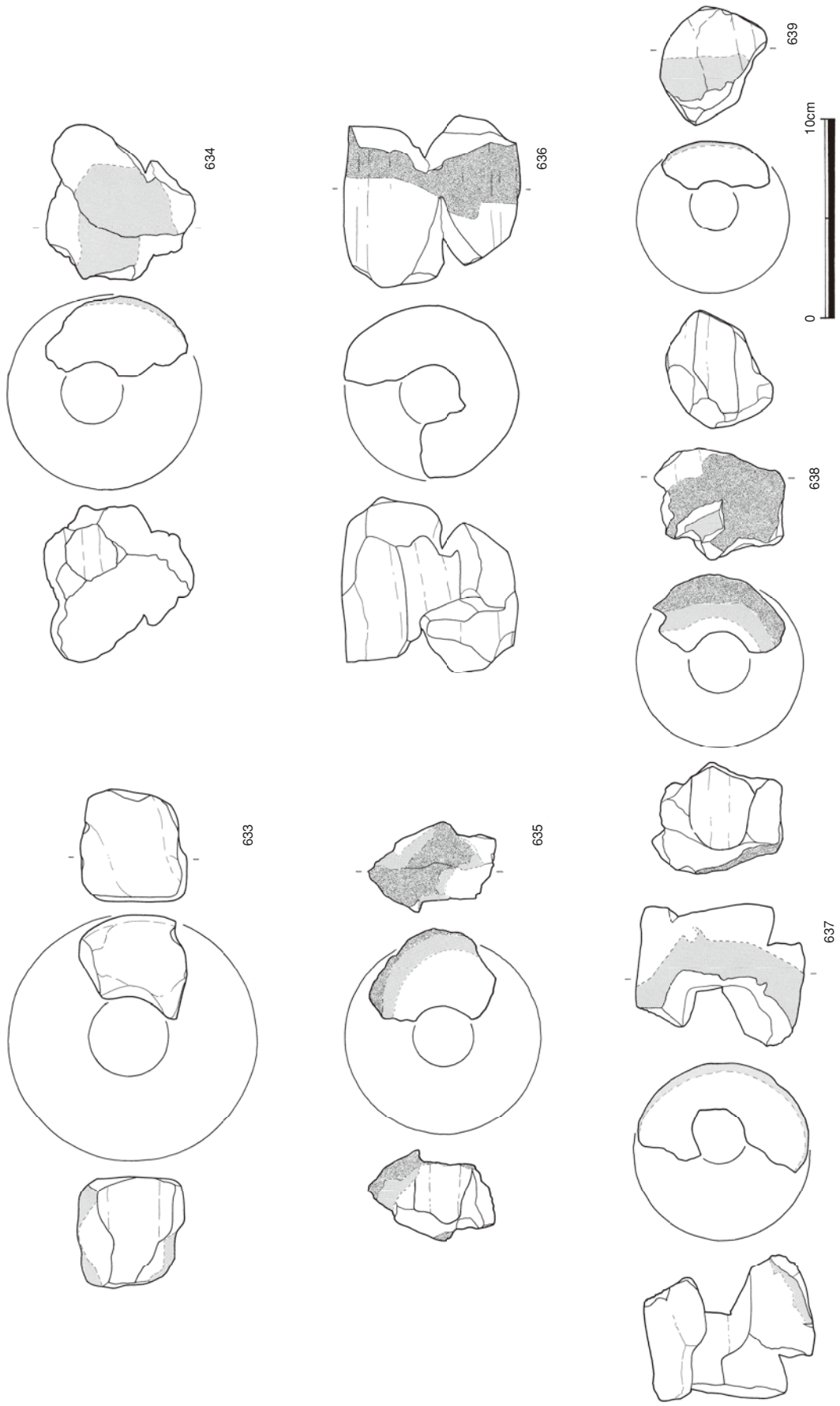


第160図 SX2003 出土遺物 (1)

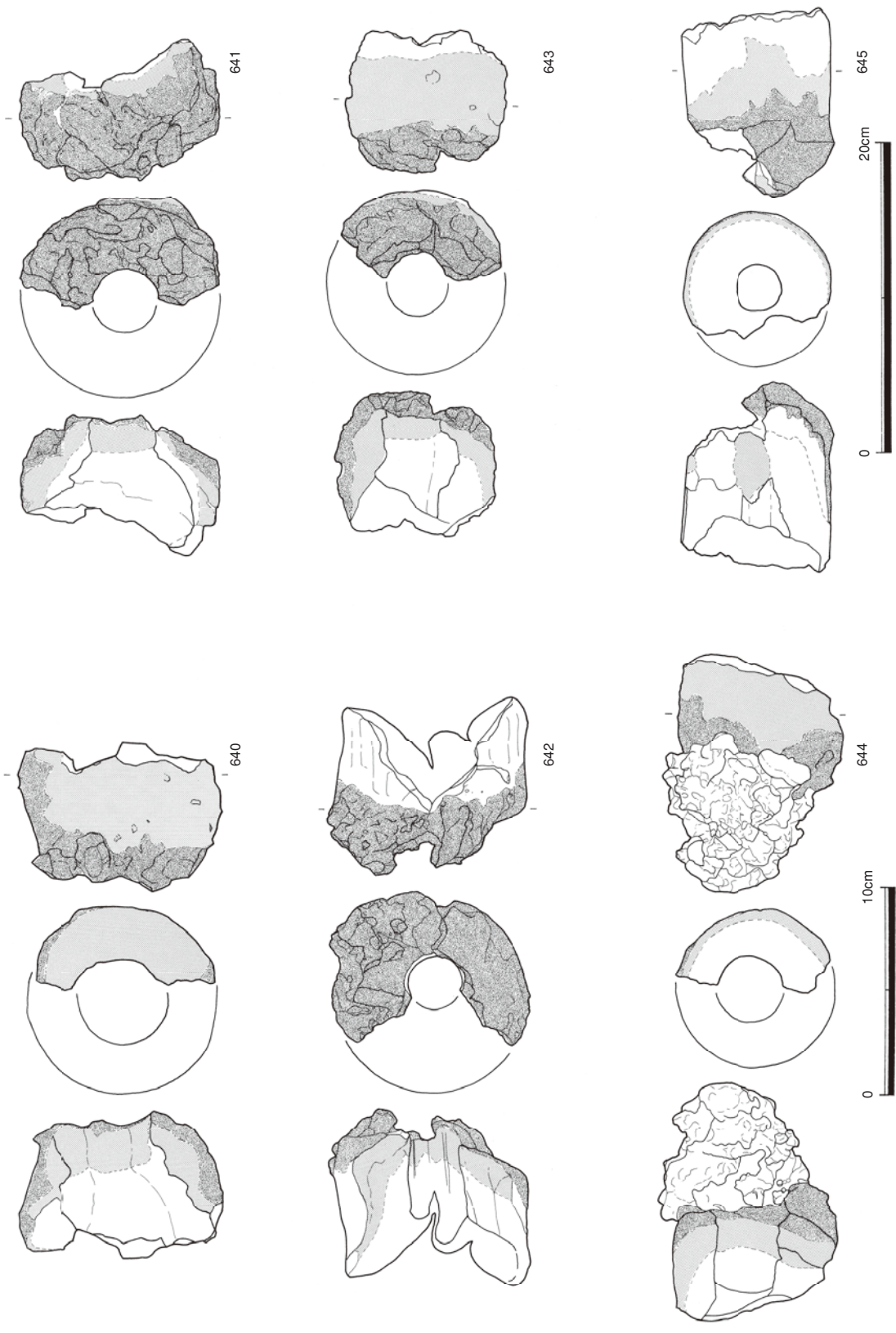
10～30cm大の結晶片岩および砂岩から成る集石を確認した。これらの集石は、おもににぶい黄褐色を呈するⅡ層からの出土である。集石は全般的に規則性を持った積み方はなされていないが、一部小口面を揃えてみえる個所がある(C-C')。この部分の集石は床面直上に並び、その高さをほぼ揃えている。

遺物は土師質土器杯・小皿・羽釜・鍋・羽釜脚部、須恵質土器椀、滓、羽口、溶解炉壁、鉄滓、結晶片岩製磨石が出土した。また集石の間から、土師質土器杯・小皿・羽釜・鍋・羽釜脚部、青磁片、須恵質土器壺、瓦器椀、羽口、溶解炉壁、焼土塊、鉄片、陶器灯明皿が出土している。これらの中で図化できたのは、土師質土器杯(618～621)・小皿(622・623)・甕(624)・羽釜(625・628)・甕(626)・鉢?(627)・鍋(629)、須恵質土器椀(630)・甕体部片(631)、砂質片岩製磨石(S81)、鉄片(632)、羽口(633～645)、鉄滓(646～722)である。杯・小皿の底部はすべて回転ヘラ切りで、620・623の内面見込みみでは部分的にナデを施す。629は胎土に金雲母を含むことから、讃岐からの搬入品の可能性がある。S81は表裏面の2面に、研面が認められる。13点図化できた羽口のうち、640～645の6点が羽口の先端部である。644は、先端部に鉄滓が付着する。遺存状態にもよるが、孔径の復元径が3cm大が8点、2cm大が3点、4cm大が2点を数え、孔径3cm大の羽口が多数を占める。鉄滓は多量に出土しており、図化したのはその一部で77点を数える。

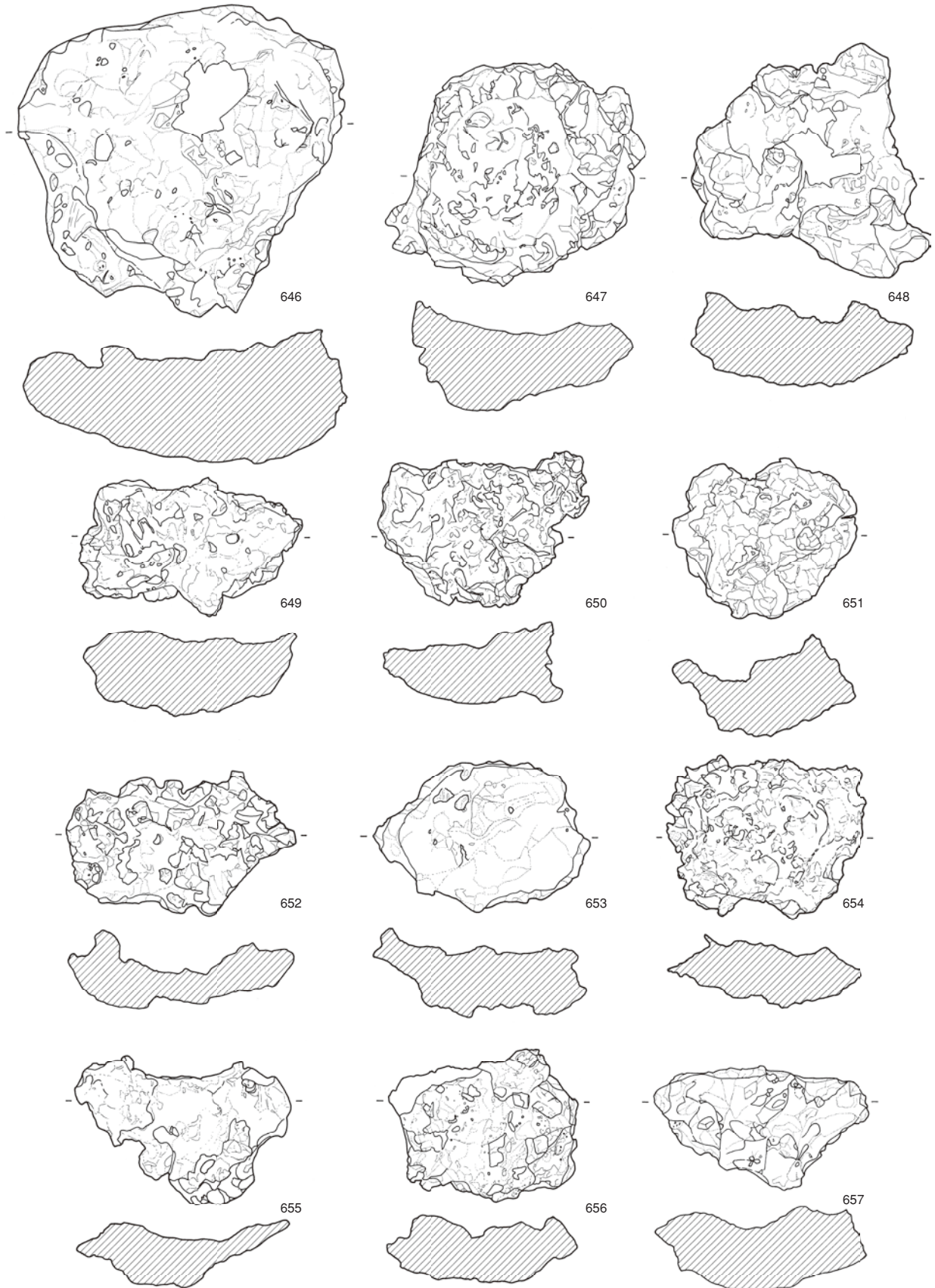
出土遺物は中世を主体とするが、集石の間から陶器灯明皿が出土していることから構築時期が江戸時代まで下がる可能性もある。



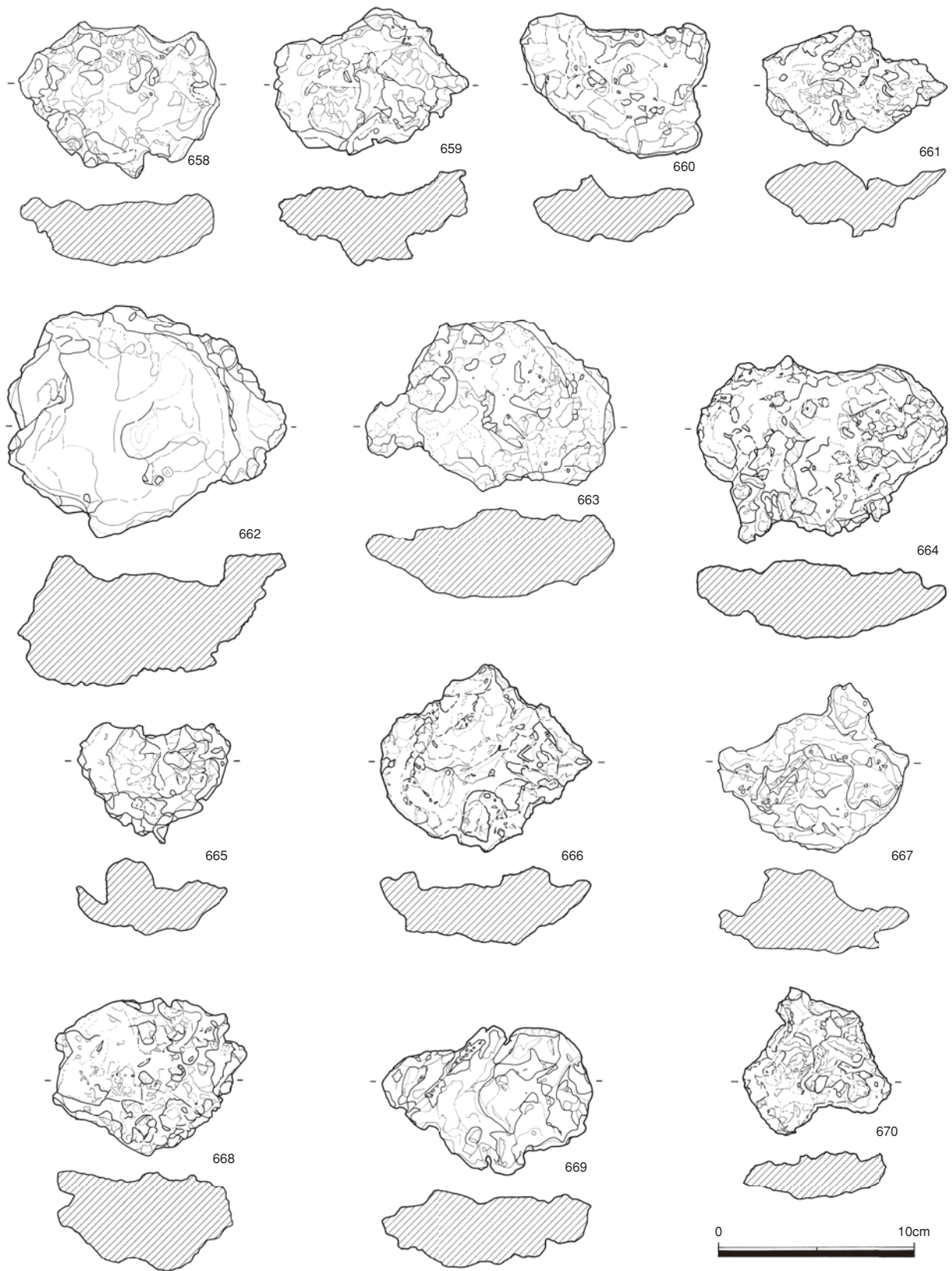
第161图 SX2003 出土遺物 (2)



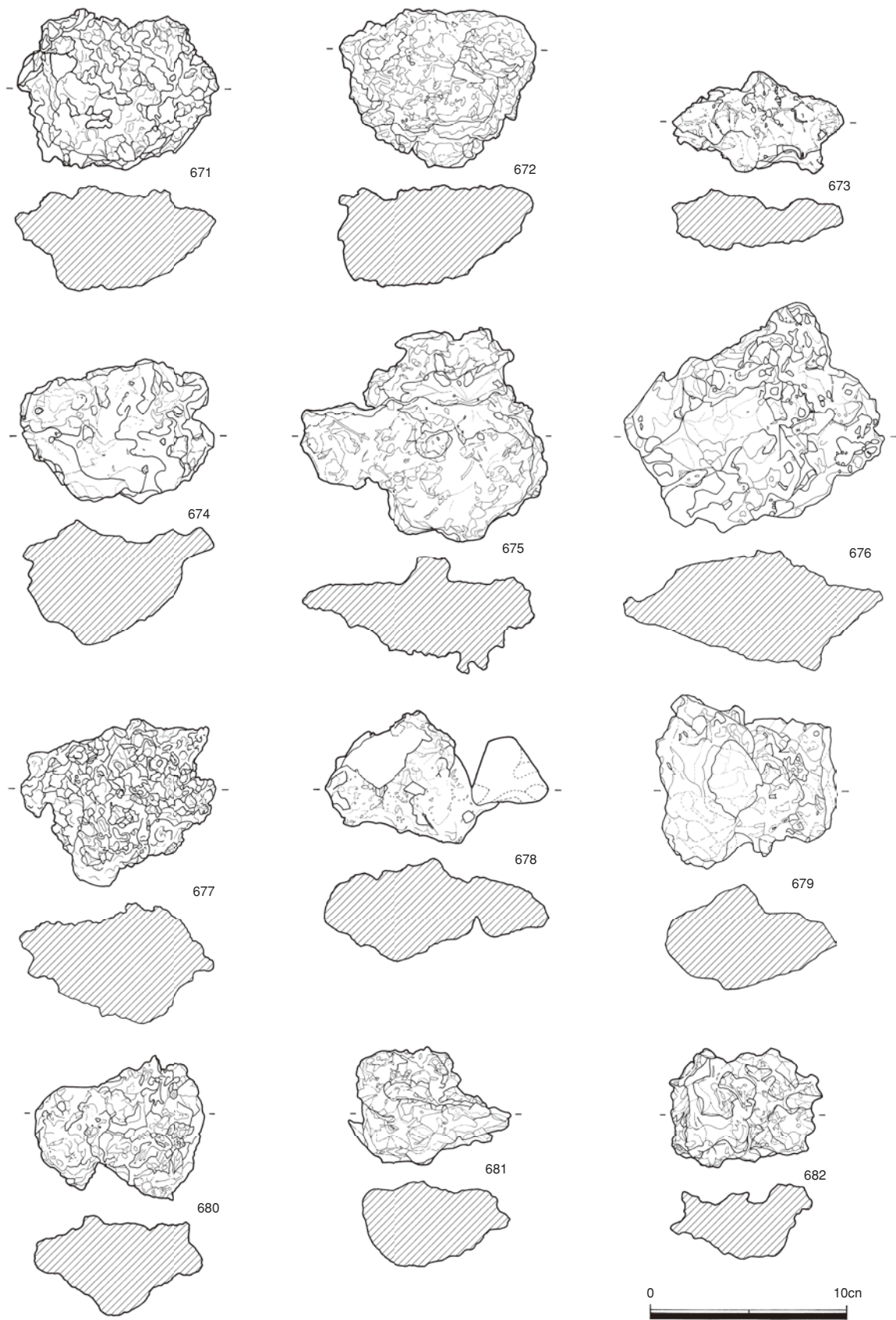
第162図 SX2003 出土遺物 (3)



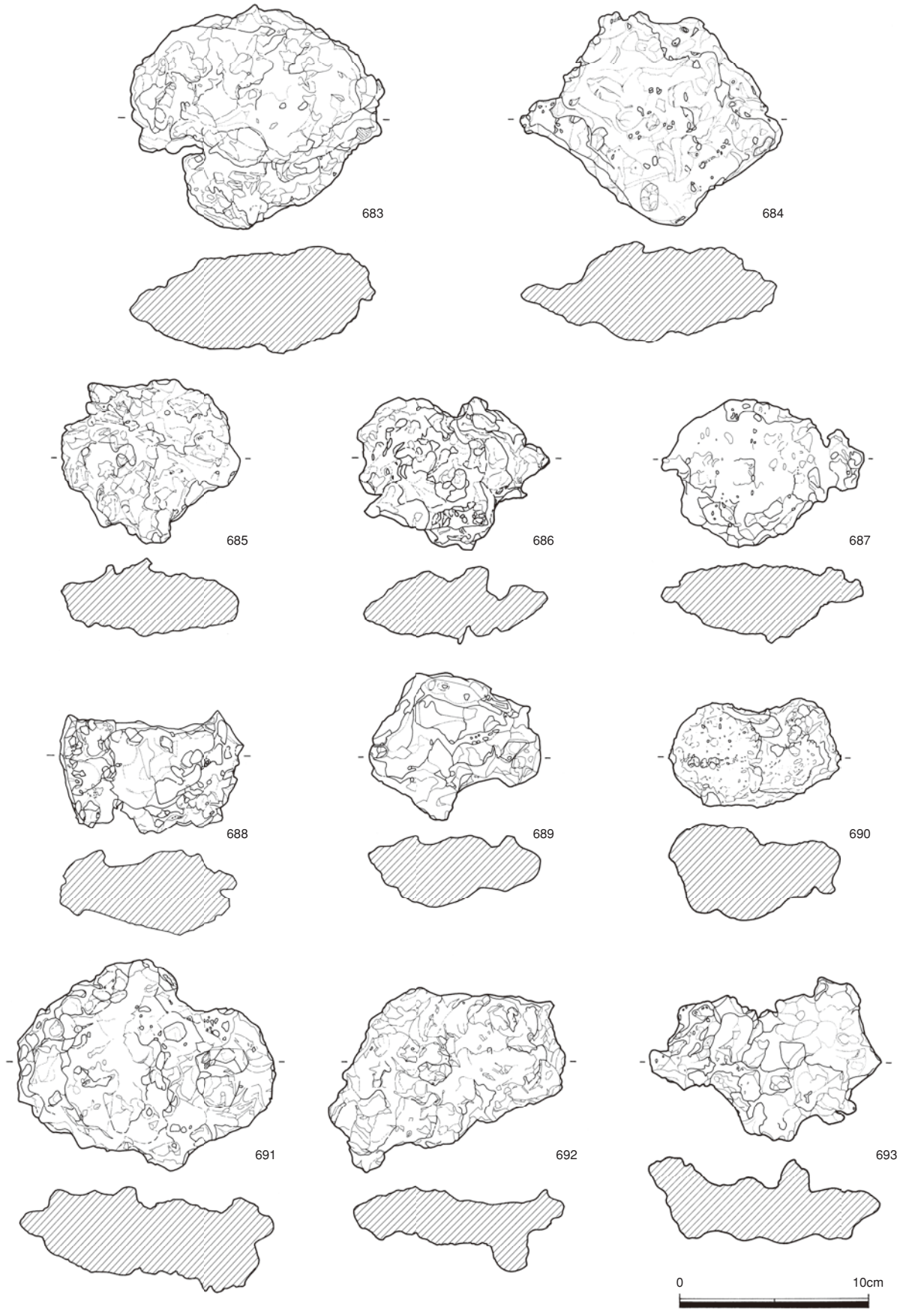
第163图 SX2003 出土遺物 (4)



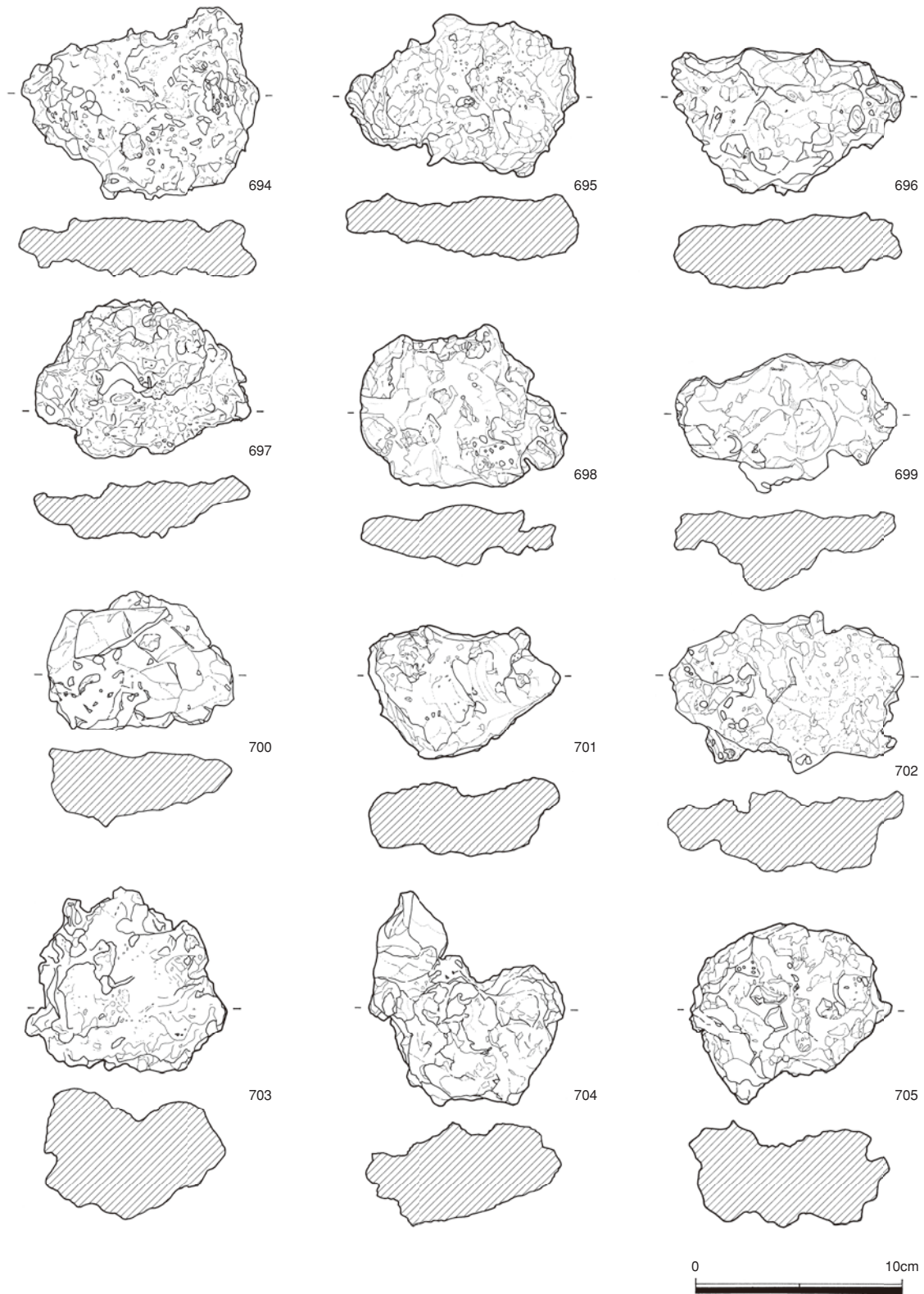
第164図 SX2003 出土遺物 (5)



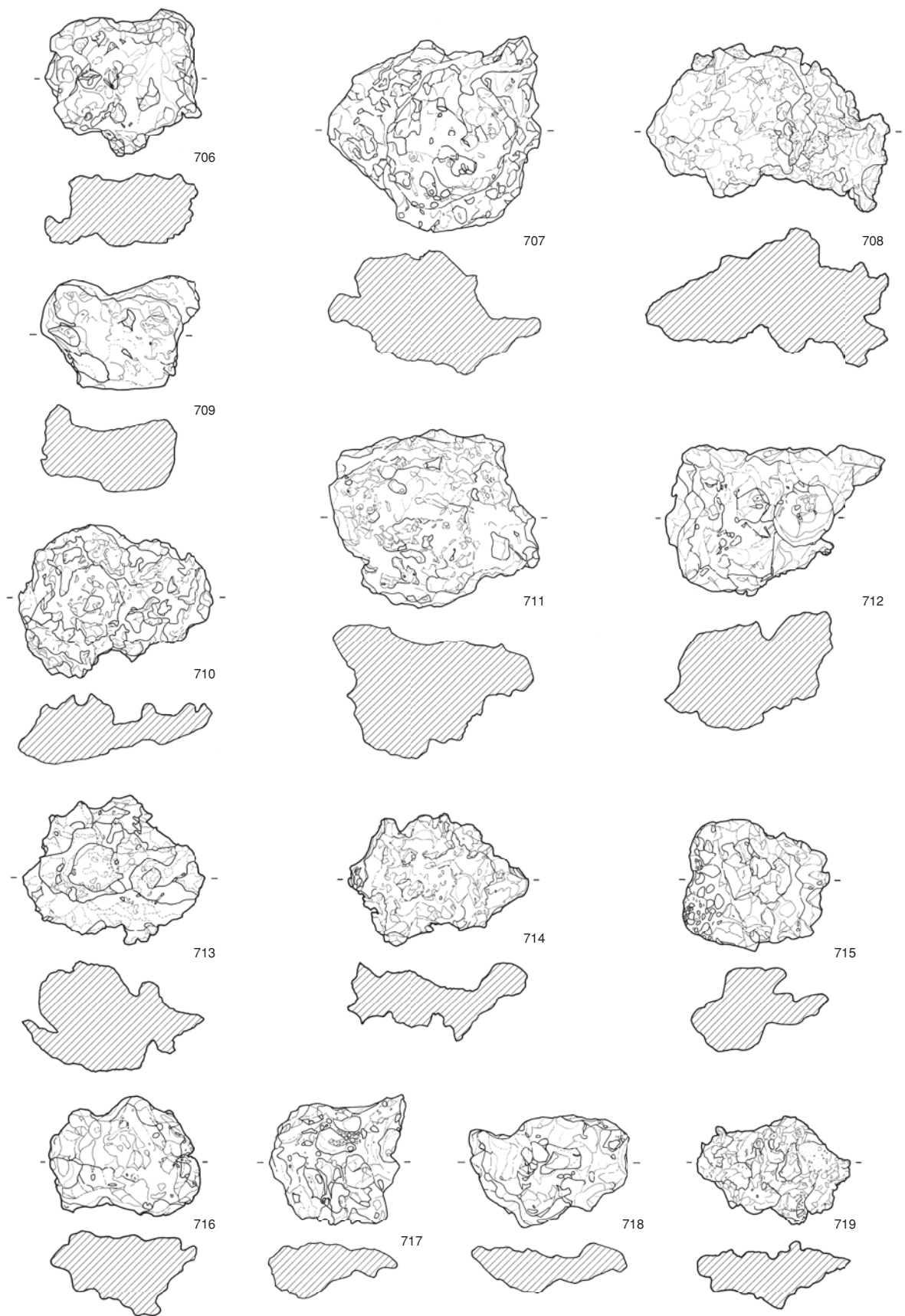
第165図 SX2003 出土遺物 (6)



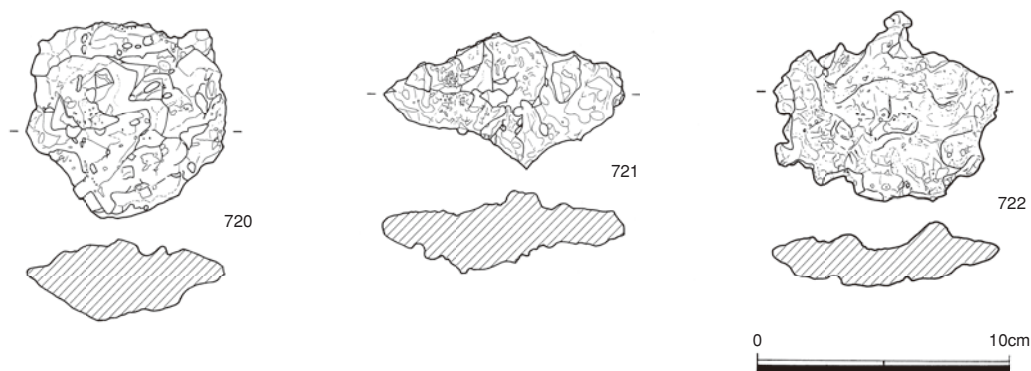
第166図 SX2003 出土遺物 (7)



第167图 SX2003 出土遺物 (8)



第168図 SX2003 出土遺物 (9)



第169図 SX2003 出土遺物 (10)

不明遺構4号 (SX2004) (第170図)

10-2区 K~M-74~76でSA2001、SK2019~2021・1274・1281、SP2273に切られた状態で確認された溝状を呈した不明遺構。遺構の検出状況から、南側に位置するSX1019と同一遺構の可能性もある。平面形態・底面形態ともに不整形、断面形態は不整な舟底形を呈し、全長20.48m、最大幅3.50m、最大深度0.32mを測る。覆土はにぶい黄褐色粘質土1層で、直径10~20cm大の礫を大量に含む。遺構内で認められた集石に、構築面などの人為的な痕跡は認められなかった。

遺物は鉄滓が出土したのみで、図化できるものはなかった。

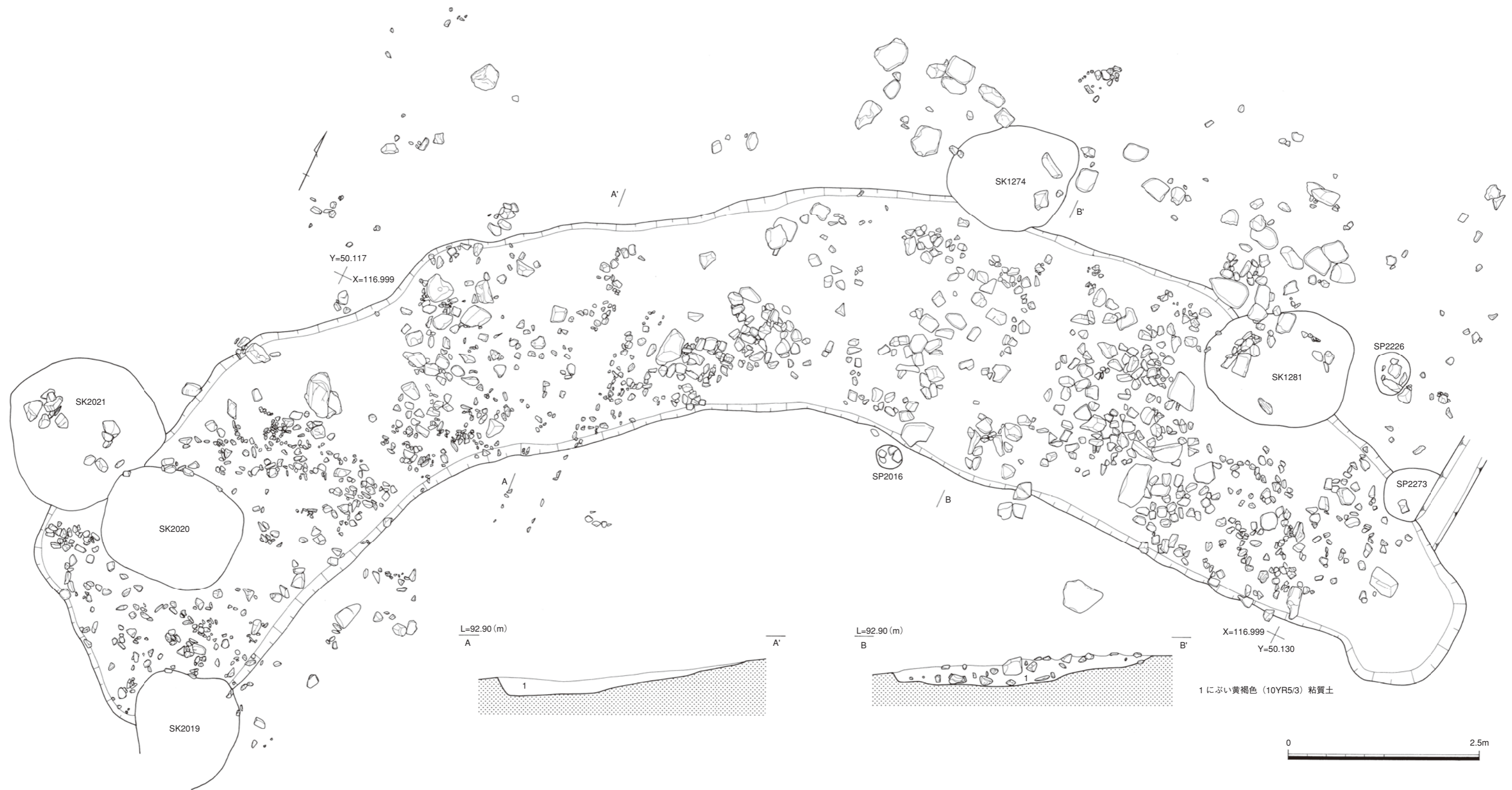
不明遺構5号 (SX2005) (第172図)

10-2区 K・L-74~76でSD2002・SP2287・SX2003に切られた状態で確認された不明遺構。SX2003と同じように、東西方向に遺構の拡がりを確認することはできなかった。平面形態・底面形態ともに溝状を呈した不整形、断面形態は舟底形と思われ、全長7.75m、最大幅1.80m、最大深度0.30mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土1層で、炭化物を若干含む。

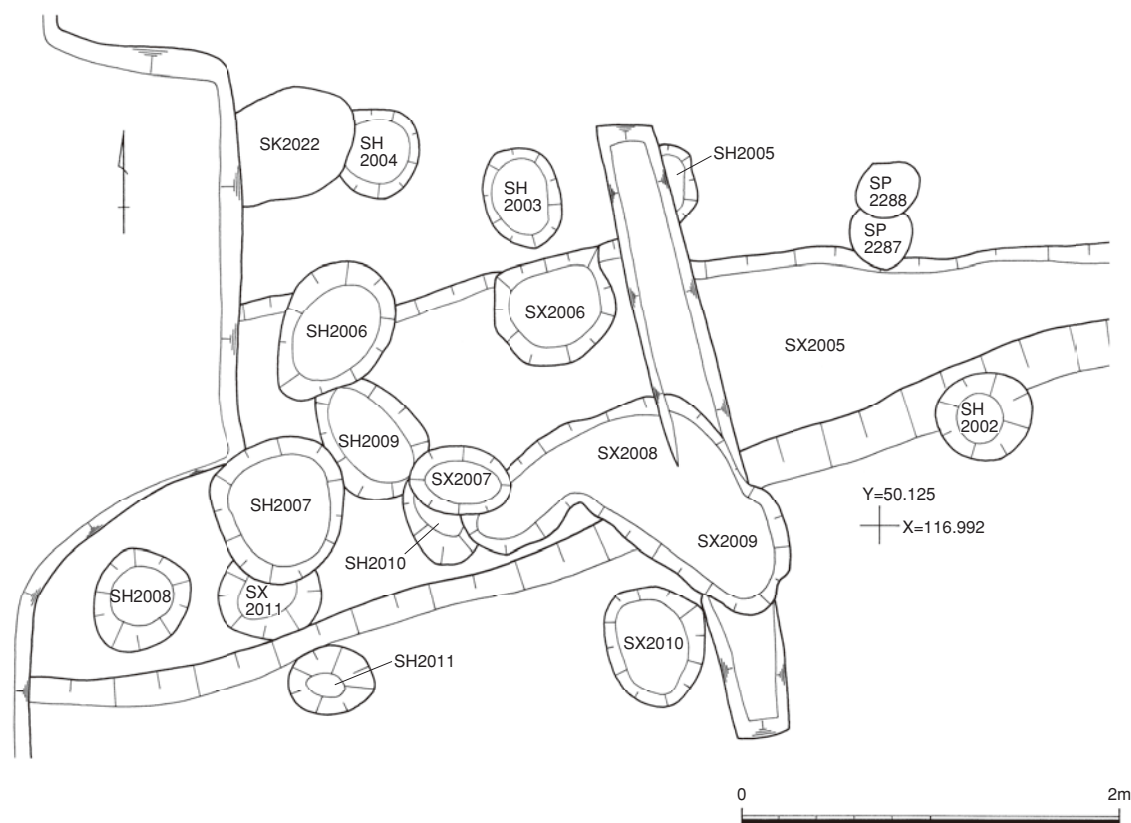
遺物は土師質土器碗・杯・小皿、黒色土器碗、須恵質土器碗・甕底部、瓦質こね鉢、溶解炉壁、羽口、滓、焼土塊、鉄滓、縄文土器が出土し、その中で図化できたのは、土師質土器杯(723~727)・碗(728)・小皿(729)、須恵質土器碗(730)、瓦質土器こね鉢(731)、羽口(732)、鉄滓(733~740)である。杯の底部は回転ヘラ切りで、その後ナデを施す。小皿は底部回転ヘラ切りのあと、底部中央のみ粗い板ナデを施す。羽口は先端部が遺存し、鉄滓が付着する。復元孔径は3cmである。図化できた鉄滓のうち、740は中央部に一ヶ所穿孔が認められる。

不明遺構6号 (SX2006) (第174図)

10-2区 K-75でSX2005に切られた状態で確認された不明遺構。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.67m、短軸0.56m、最大深度0.12mを測る。覆土は暗褐色砂質土1層で、鉄粒を多量に含む。出土遺物は、認められなかった。



第170図 SX2004 遺構図



第171図 SX2005～2010 遺構配置図

不明遺構7号 (SX2007) (第174図)

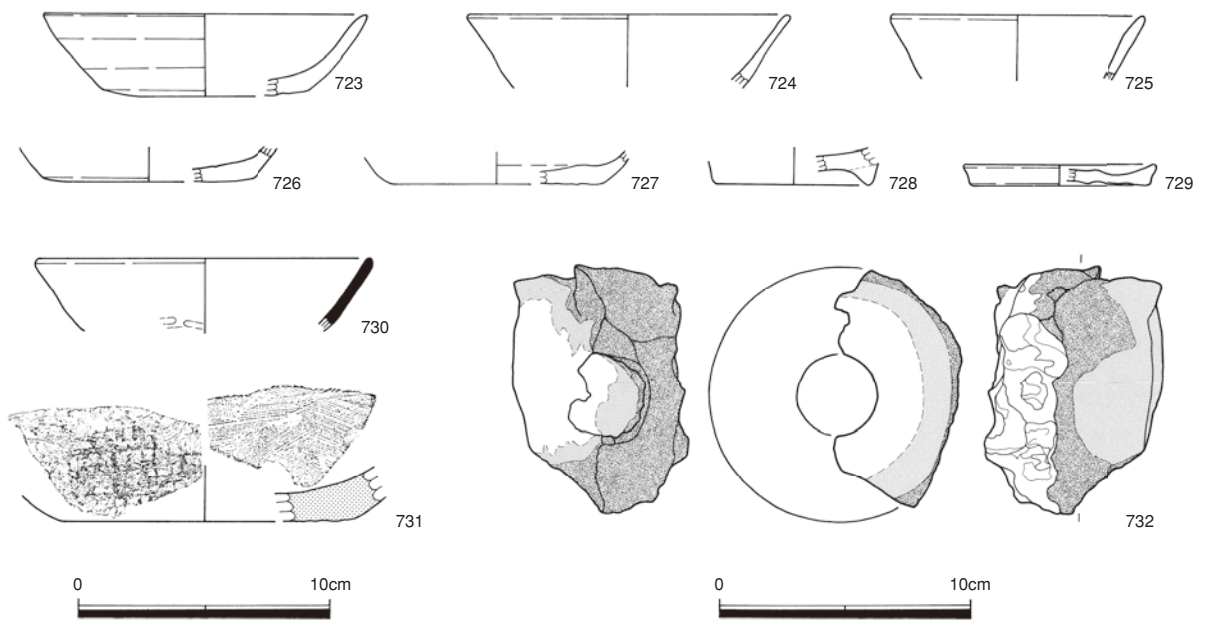
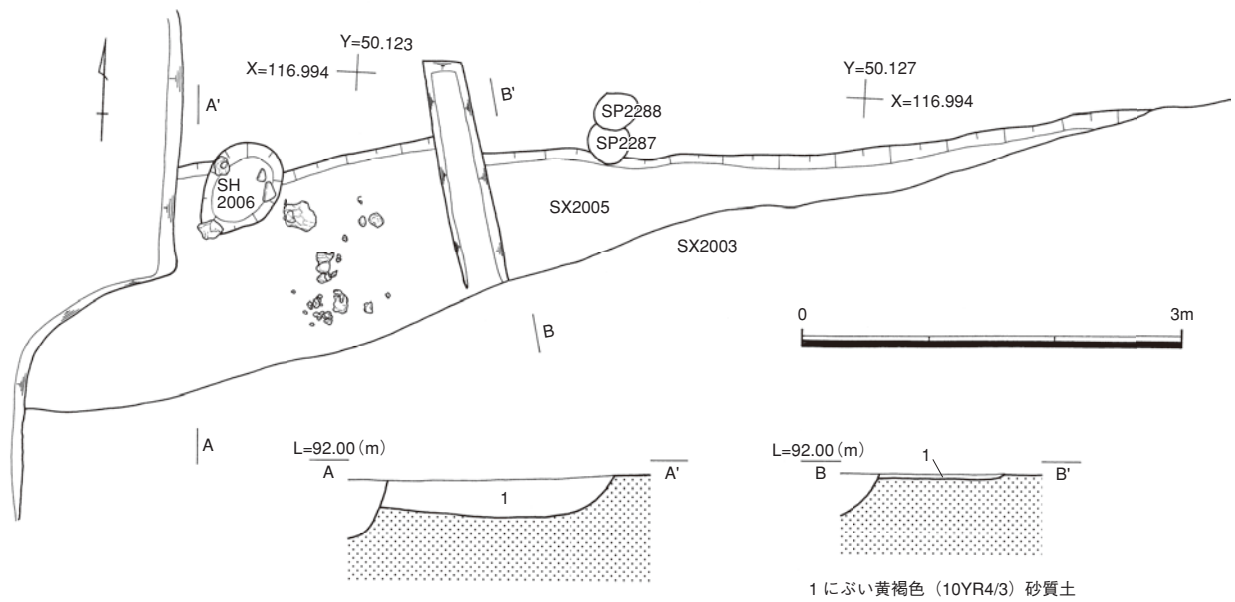
10-2区 K-75でSX2005に切られた状態で確認された不明遺構。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.54m、短軸0.36m、最大深度0.17mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は暗褐色砂質土で鉄粒を多量に含む。2層はにぶい黄褐色砂質土である。出土遺物は、認められなかった。

不明遺構8号 (SX2008) (第175図)

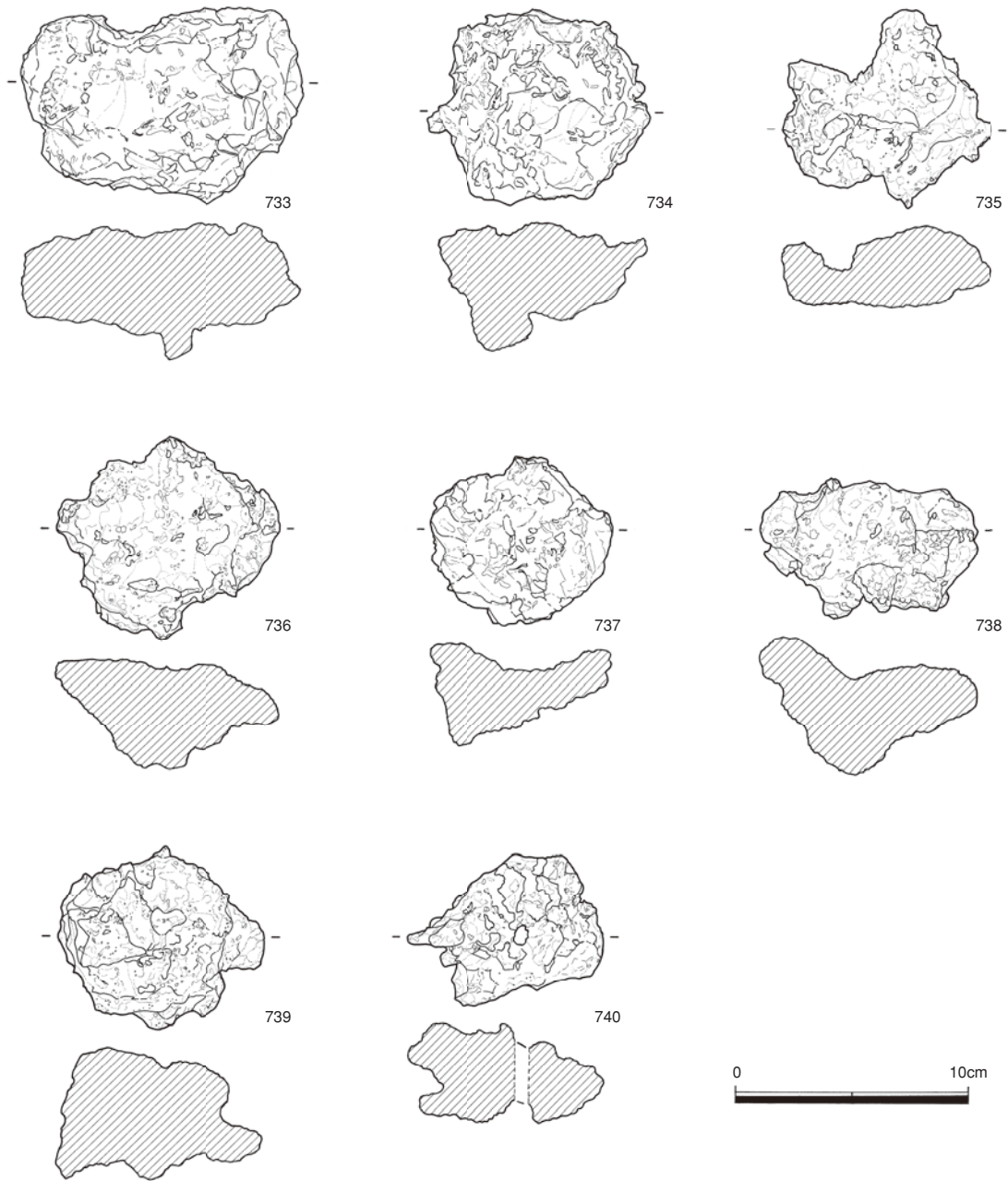
10-2区 K-75でSX2005・2007、確認トレンチに切られた状態で確認された不明遺構。SX2009とも切り合い関係にあるが、前後関係は不明である。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、最大長0.53m、短軸0.39m、最大深度0.10mを測る。覆土は暗褐色砂質土1層で、炭化物を若干、鉄粒を多量に含む。出土遺物は、認められなかった。

不明遺構9号 (SX2009) (第175図)

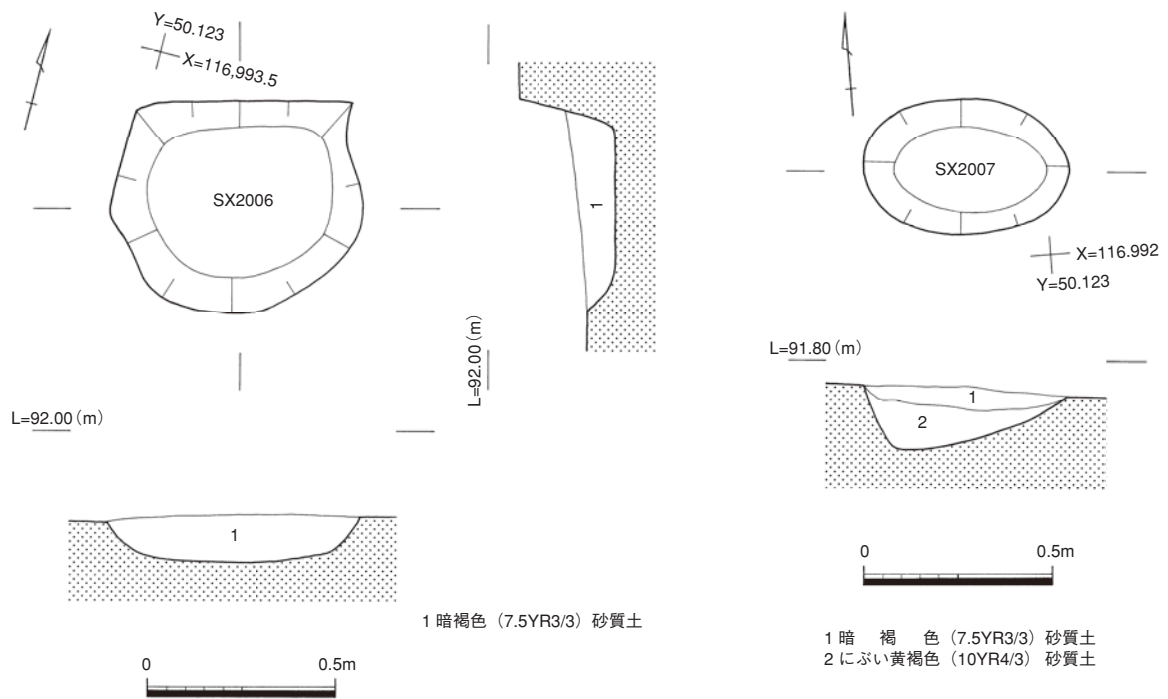
10-2区 K-75でSX2003・2005、確認トレンチに切られた状態で確認された不明遺構。SX2008とも切り合い関係にあるが、前後関係は不明である。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸1.30m、短軸0.81m、最大深度0.27mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は暗褐色砂質土で、鉄粒を多量に含む。2層はにぶい黄褐色砂質土で、炭化物を多量に含む。鉄滓が出土したが、



第172図 SX2005 遺構図・出土遺物



第173図 SX2005 出土遺物



第174図 SX2006・2007 遺構図

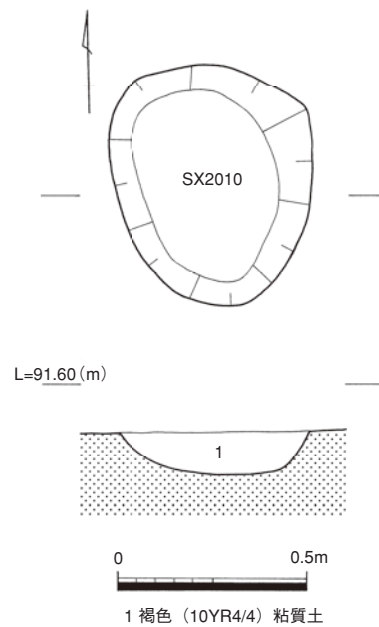
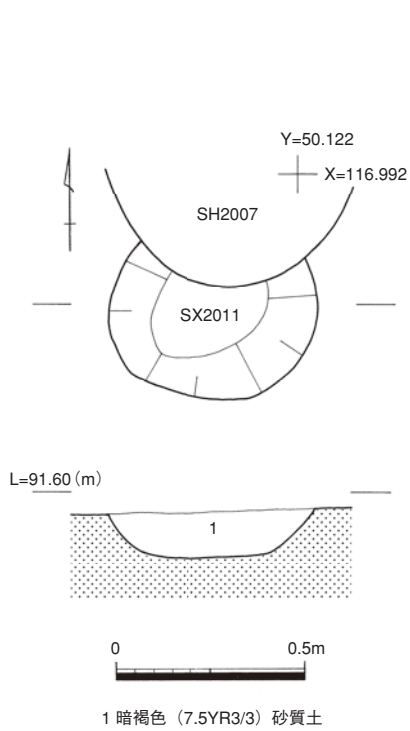
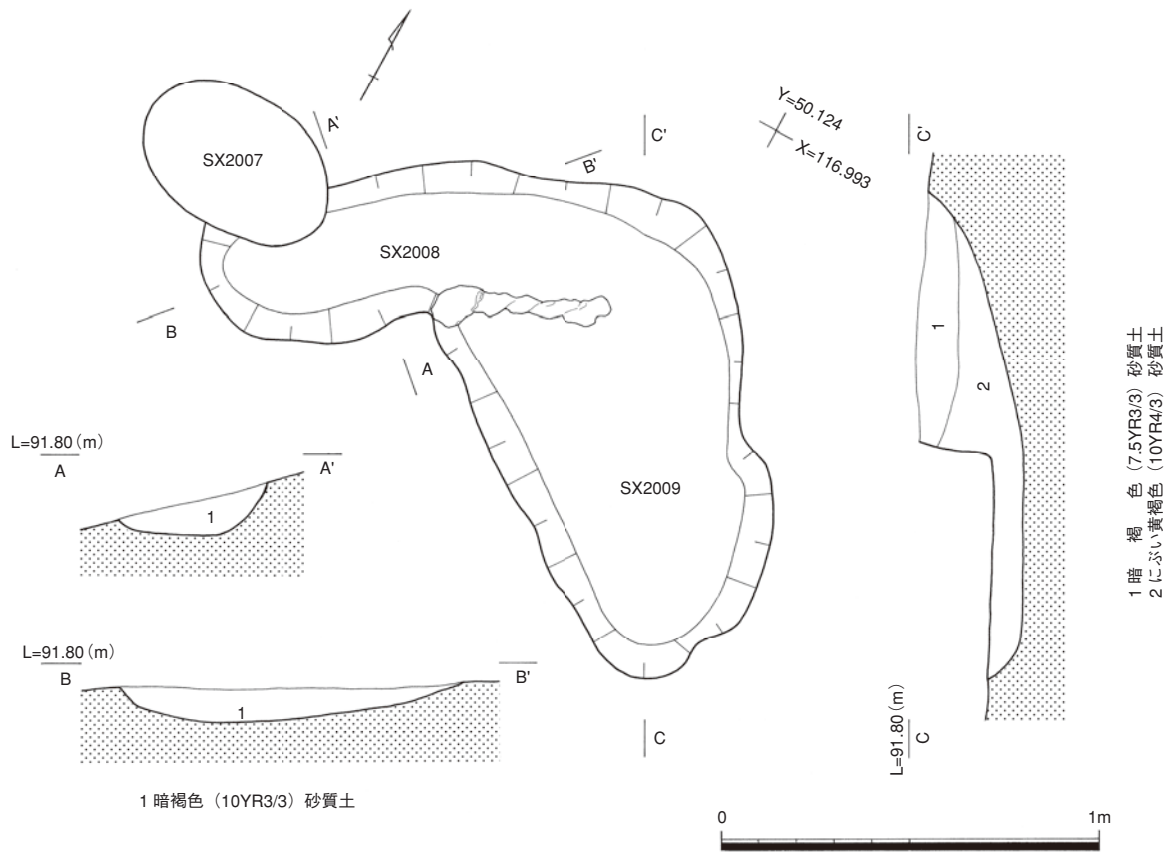
図化できなかった。

不明遺構10号 (SX2010) (第175図)

10-2区 K-75でSX2003に切られた状態で確認された不明遺構。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.70m、短軸0.53m、最大深度0.12mを測る。覆土は、褐色粘質土1層である。出土遺物は、認められなかった。

不明遺構11号 (SX2011) (第175図)

10-2区 K-75でSH2007、SX2005に切られた状態で確認された不明遺構。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は舟底形を呈し、直径0.50m前後、最大深度0.12mを測る。覆土は暗褐色砂質土1層で、鉄粒を多量に含む。出土遺物は、認められなかった。



第175図 SX2008~2010 遺構図

(5) 包含層

包含層出土遺物は、土器4,959点、石器389点、鉄器8点、銭貨12点を図化した。これらの遺物は各時代ごとにまとめ、特に縄文土器と石器に関しては各調査区ごとに掲載した。包含層出土遺物の中で最多の出土量を誇る縄文土器は、それぞれ出土した調査区で主体となる時期に差が認められる傾向にある。

5.1 縄文土器（第176～321図）

荒川遺跡から出土した縄文土器の過半数が、包含層からの出土である。その出土量は調査区により偏りが認められ（第2・3表）、1区、3区、5-4・5区からの出土量が最も多く全体の9割近くを占める。

縄文土器が出土した包含層のうち、1区、5-4・5区は嫁坂谷川への斜面堆積土（第6・8図）、3区は後世の削平を受けてはいるものの調査区が勾配のきつい斜面であり、調査区南側の平坦面との境に認められた斜面堆積土である（第9図）。この斜面堆積土は基本的に小礫が多量に混じる砂礫層で、その堆積深度は浅いところで0.60m、深いところで最大2.00mを測る。調査担当者の所見では、縄文土器が出土する砂礫層から後世の土器の出土は認められず、その下層からも後出する時代の遺物は出土していない。時代幅のある縄文時代以降の土器は、その上層の同一層からの出土が確認されている。

また砂礫層からの出土にもかかわらず縄文土器は明瞭な調整を保持し、かつ破片は角張っている。このことにより、縄文土器がローリングを受けた可能性は低いと思われる。

調査時において、1・3区内および隣接する調査区で古墳が検出されたことから、縄文土器が多量に出土した砂礫層は、古墳築造に伴う整地によって遺構面が削られ、堆積した層の可能性が考えられていた。また古墳が確認された調査区では、弥生時代の竪穴住居跡も検出されている。斜面堆積土が古墳築造の整地に伴うものとした場合、同一層から縄文土器・弥生土器の出土が認められるはずである。しかし、縄文土器と縄文時代以降の遺物は、同一層からの出土が認められない。

調査区内で検出した縄文時代の遺構は後期前葉が主体であり、遺構数も少ない。調査区外に包含層から出土した縄文時代の遺構が拡がる可能性は強く、斜面堆積土から出土した縄文土器はこの場所に意図的に捨てられた可能性を想定したい。

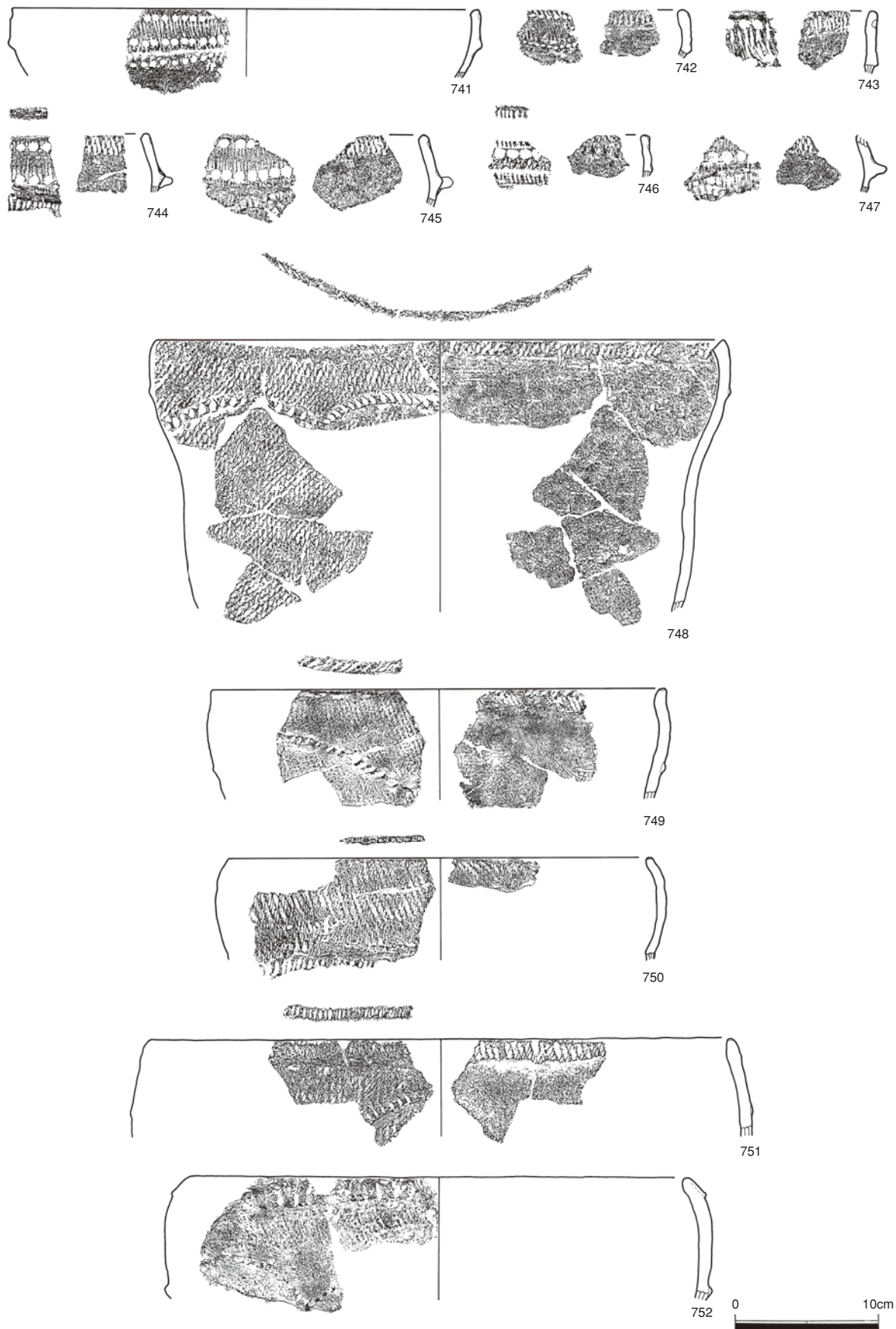
1区（第176～201図）

本調査区から出土した縄文土器は、中～晩期に属する。縄文中期の土器がまとまって出土したのは1区のみで、調査区西壁際（N・O-35）の斜面堆積土からの出土である。

隆帯文系の一群（第176～180図：748～835）

741～747・753は、密接な刺突文が認められる一群である。この刺突文は口縁端部と隆帯の際、あるいは隆帯際に沿って施され、施工原体は棒状工具・竹管状工具等である。また口縁端部と隆帯際に施される2ないし3列の円形刺突文は、交わらず平行に走るものと思われる。また、745は隆帯際の下に押引連続刺突文が、747ではI字状の連続刺突文が認められる。

また744～756は、刻目隆帯が下弦弧状に巡る一群である。この一群の口縁部の形態は内彎する、いわゆるキャリパー形と呼ばれるものである。口唇部に刻目が施されるものは746・748～751の5点、752では連続刺突文が施される。刻目隆帯は、しっかり貼り付けされた隆帯（744～747）と、わずかに盛り上



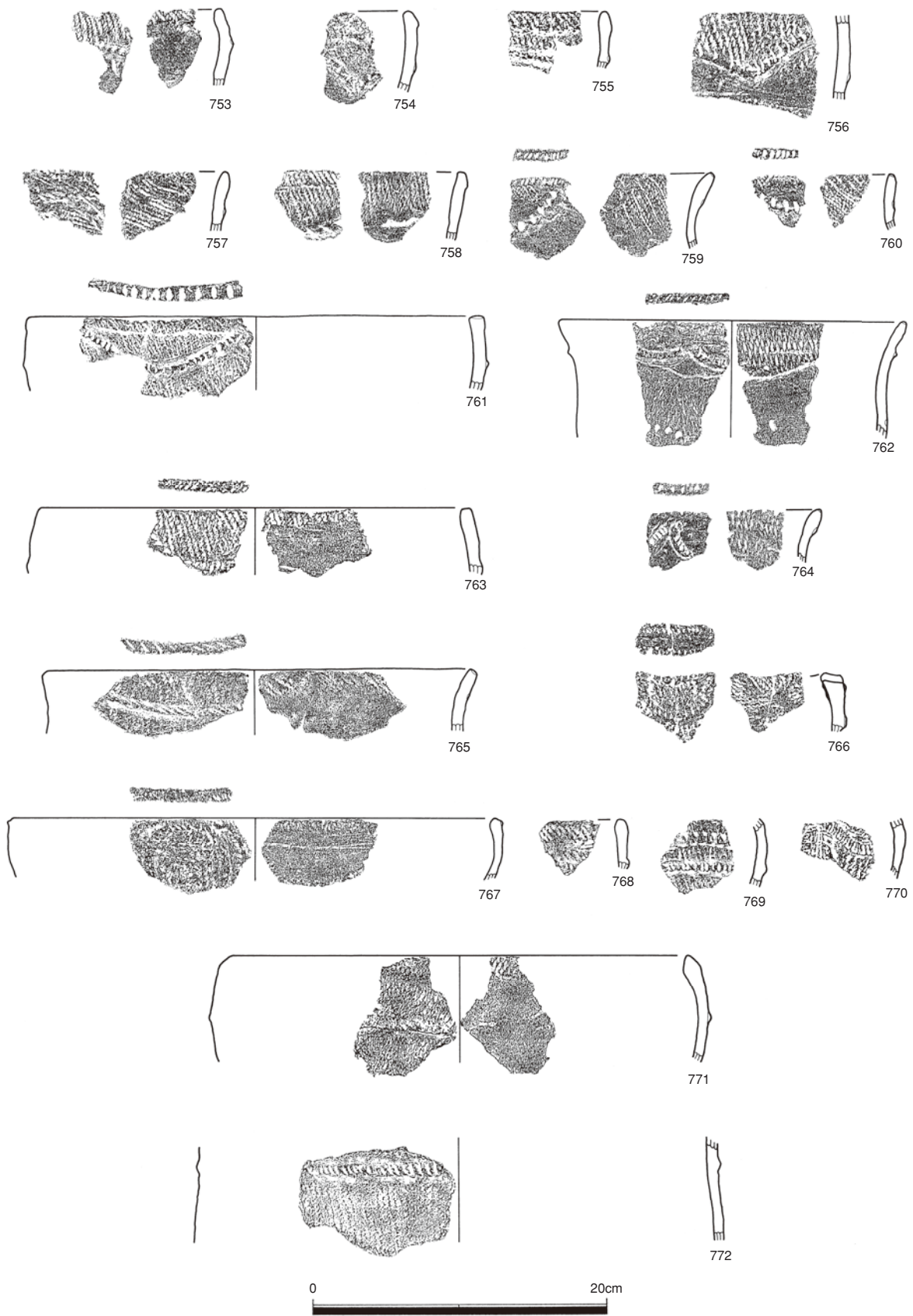
第176図 1区 包含層出土縄文土器 (1)

第2表 出土縄文土器一覽表 (1)

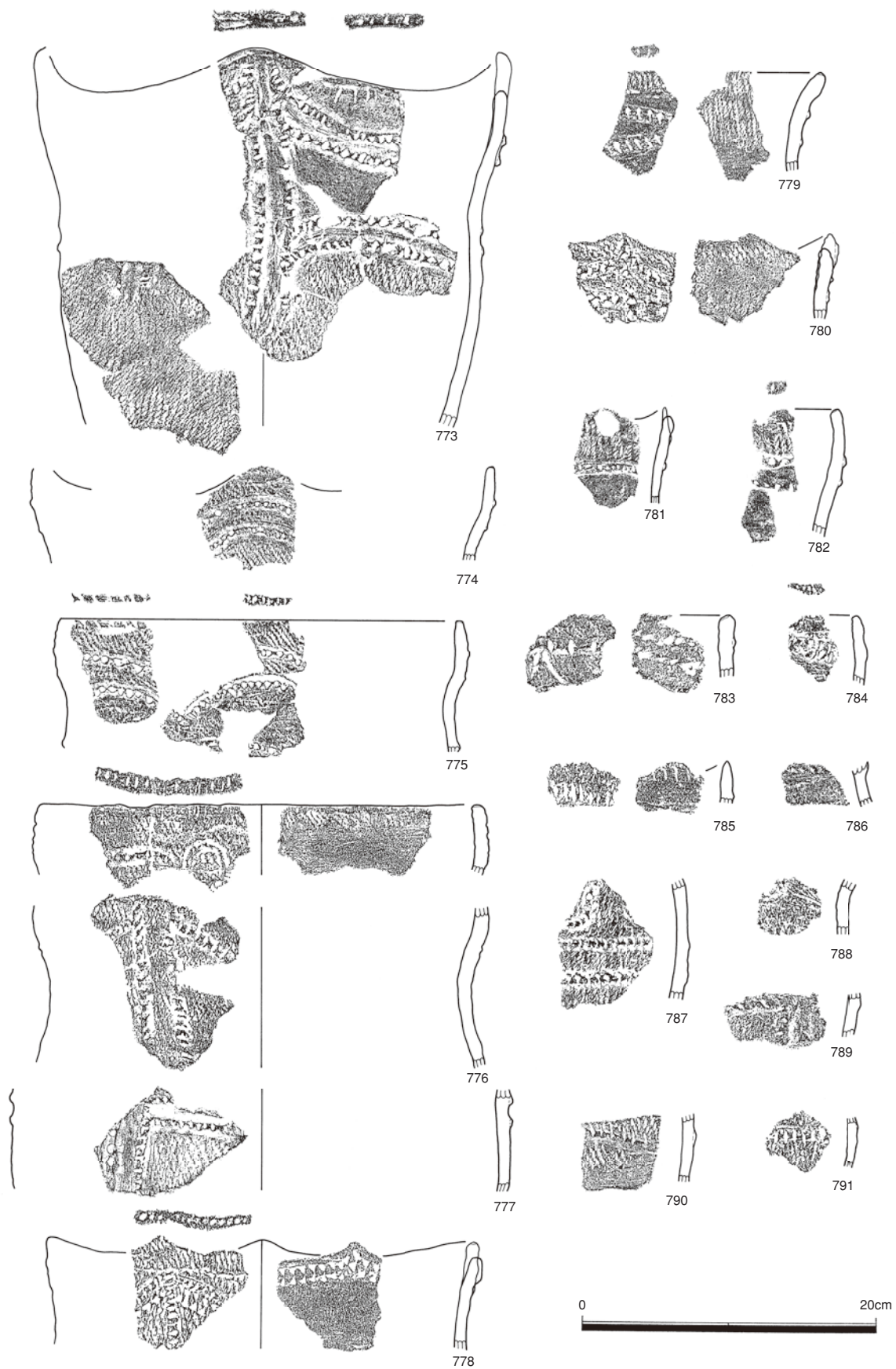
縄文	調査区	大分類	小分類	96-1区						96-2区										
				器種(口縁部限定)					小計	合計	器種(口縁部限定)					小計	合計			
				深鉢・鉢	浅鉢・皿	壺	注口	その他			深鉢・鉢	浅鉢・皿	壺	注口	その他					
中期			陰帯のみ	74						74							0			
			船元式・陰帯文系	陰帯・刺突・沈線文	9						9							0		
				陰帯・半截竹管沈線文	1						1							0		
			船元式・刺突文系								0							1		
					半截竹管状工具	1					1		1						0	
					半截竹管状工具押引	8					8								0	
					半截竹管文						0								0	
					指頭圧痕	1					1								0	
					貝頂部刺突	1					1								0	
			船元式・沈線文系		棒状工具など	69					69								0	
						19					19								0	
				半截竹管状工具	19					19		39							0	0
				棒状工具など	1					1									0	
			船元式・特殊突帯文系			5					5	5							0	0
			船元式・中期全縄文系			152					152								0	0
					波子タイプ	22					22	174								0
			中期全縄文系			17					17								0	0
					波子タイプ						0									0
中期太沈線文系			10					10	10							0	0			
里木Ⅱ・Ⅲ式系			2					2	2							0	0			
中期末北白川C式系								0	0							0	0			
中期把手							1	1	1							0	0			
中期無文系		口唇部刻目あり	1					1	1								0	0		
		口唇部刻目なし	1					1	2								0	0		
中々後期		中～後期把手					1	1	1								0	0		
		中～後期有文系(口唇部刻目あり)	1					1	1								0	0		
		中～後期無文系	12					12	96								0	0		
		口唇部刻目なし	84					84									0	0		
後期		中津式	8	1				9	9	1						1	1			
		福田KⅡ式(宿毛系含む)		20				20	20		1					1	1			
		福田KⅡ式～縁帯文成立期						0	0								0	0		
		刻目隆帯文系						0	0								0	0		
			福田KⅡ式～縁帯文					0										0		
			36					36		34	2					36				
		縁帯文成立期	1					1	37							0	36			
			前葉(芥川併?)					0										0		
			無文					0										0		
		縁帯文成立期～縁帯文						0	0								0	0		
								0										0		
		縁帯文						0	7									0		
			津雲A式					0												
			彦崎KⅠ式	1				1												
			北白川上層1～2期併	6				6									0			
		集約沈線文系		4				4	4								0	0		
		沈線文系						9	9								0	0		
			後期前半					0										0		
		素縄文(口胴全縄文)系						0	0								0	0		
		全縄文						0	0									0		
		凹線文系						0	0									0		
			内面凹線					0												
		後期前葉					0										0			
	元住吉山Ⅰ						0	0		1						1	1			
	後葉～末		4				4	4								0	0			
	波状波頂突起部		8				8	8								0	0			
	後期無文		未付着				0													
		口唇部・付加文					0													
		口唇部・調整有り					0													
		口唇部・沈線あり					0													
		口唇部・刻目あり	5				5		22		8					8		45		
		口唇部・刻目なし	17				17				37					37				
	その他					0	0										0			
		形式不明					0													
		用途不明土製品					0													
晚期		晚期前葉(無文)					0	0									0	0		
		晚期中葉					0	0									0	0		
			谷尻・前池併行				0	0									0	0		
			無文				0	0										0		
		晚期突帯文		4			4	4									0	0		
			刻目なし				0											0		
			刻目あり				0											0		
	晚期後葉・突帯文土器					0	0										0			
	晚期有文原下層併行					0	0										0			
	晚期無文					0	0										0			
		口唇部刻目あり				0														
		口唇部刻目なし				0														
	波状口縁		1				1	1								0	0			
	有文型式・時期不明		3				3	3								0	0			
	把手						0	0									0			
	小計		613	25	0	0	2	640	640	82	3	0	0	0	0	85	85			

第3表 出土縄文土器一覧表 (2)

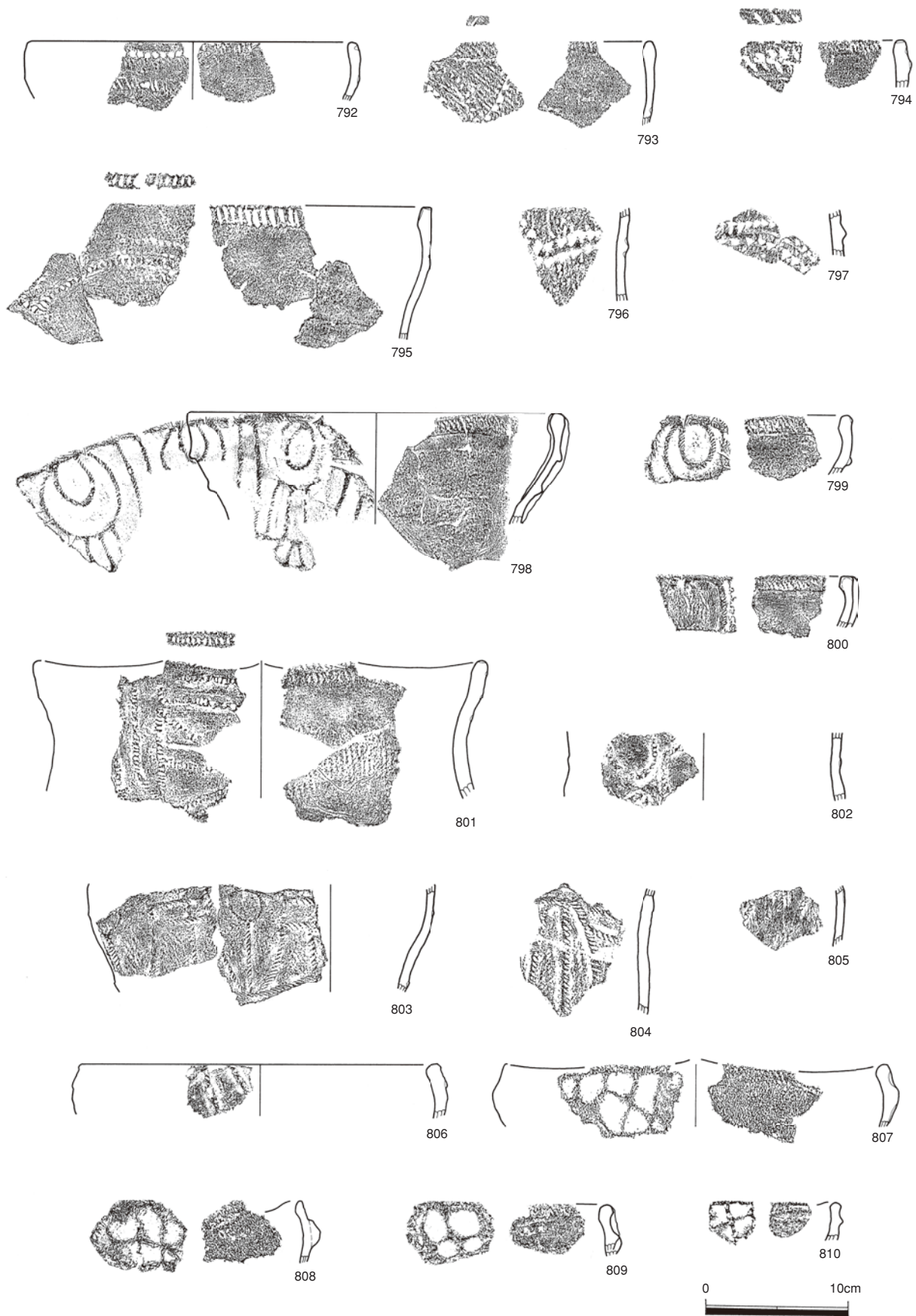
調査区			8区						9区									
縄文	大分類	小分類	器種(口縁部限定)						小計	合計	器種(口縁部限定)						小計	合計
			深鉢・鉢	浅鉢・皿	壺	注口	その他	深鉢・鉢			浅鉢・皿	壺	注口	その他				
中期	船元式・隆帯文系	隆帯のみ						0							0	0	0	
		隆帯・刺突・沈線文						0							0			
		隆帯・半截竹管沈線文						0							0			
	船元式・刺突文系	半截竹管状工具						0							0	0	0	
		半截竹管状工具押引						0							0			
		半截竹管文						0							0			
		指頭圧痕						0							0			
		貝頂部刺突						0							0			
		棒状工具など						0							0			
	船元式・沈線文系	半截竹管状工具						0							0	0	0	
		棒状工具など						0							0			
	船元式・特殊突帯文系							0							0	0	0	
	船元式・中期全縄文系	波子タイプ						0							0	0	0	
	中期全縄文系	波子タイプ						0							0	0	0	
中期太沈線文系							0							0	0	0		
里木Ⅱ・Ⅲ式系							0							0	0	0		
中期末北白川C式系							0							0	0	0		
中期把手							0							0	0	0		
中期無文系	口唇部刻目あり						0							0	0	0		
	口唇部刻目なし						0							0				
中～後期	中～後期把手						0							0	0	0		
	中～後期有文系(口唇部刻目あり)						0							0	0	0		
	中～後期無文系	口唇部刻目あり					0							0	0	0		
後期	中津式						0							0	0	0		
		福田KⅡ式(宿毛系含む)	1					1									1	
	福田KⅡ式～縁帯文成立期						0				1			1	1	1		
	刻目隆帯文系	福田KⅡ式～縁帯文						0							0	0	0	
			3					3							3			
	縁帯文成立期	前葉(芥川併?)						0							0	0	0	
		無文						0							0			
	縁帯文成立期～縁帯文						1							1	1	1		
	縁帯文		11(5)					11							11	18	0	
		津雲A式						0							0			
		彦崎KⅠ式	7					7							7			
		北白川上層1～2期併						0							0			
	集約沈線文系						0							0	0	0		
	沈線文系	後期前半	1					1							1	1	1	
								0							0	0	0	
	素縄文(口胴全縄文)系		1					1							1	1	1	
	全縄文	頸部無文						0							0	0	0	
	凹線文系	内面凹線						0							0	0	0	
		後期前葉						0							0			
	元住吉山Ⅰ							0							0	0	0	
	後葉～末							0							0	0	0	
波状波頂突起部							0							0	0	0		
後期無文	朱付着						0							0	22	5		
	口唇部・付加文						0							0				
	口唇部・調整有り						0							0				
	口唇部・沈線あり						0							0				
	口唇部・刻目あり						0							0				
	口唇部・刻目なし	18(15)	4(3)				22				5			27				
その他	形式不明					1	1				1(平城Ⅰ型模倣形?)			1	1	1		
	用途不明土製品						0							0	0	0		
晩期	晩期前葉(無文)						0							0	0	0		
	晩期中葉	谷尻・前池併行					0							0	0	0		
		無文						0						0				
	晩期突帯文	刻目なし						0							0	0	0	
		刻目あり						0							0			
	晩期後葉・突帯文土器		1					1							1	1	1	
晩期有文原下層併行							0							0	0	0		
晩期無文	口唇部刻目あり						0							0	0	0		
	口唇部刻目なし						0							0				
波状口縁							0							0	0	0		
有文型式・時期不明							0							0	0	0		
把手							0							0	0	0		
小計			43	4	0	1	1	49	49	5	1	0	0	0	6	7		



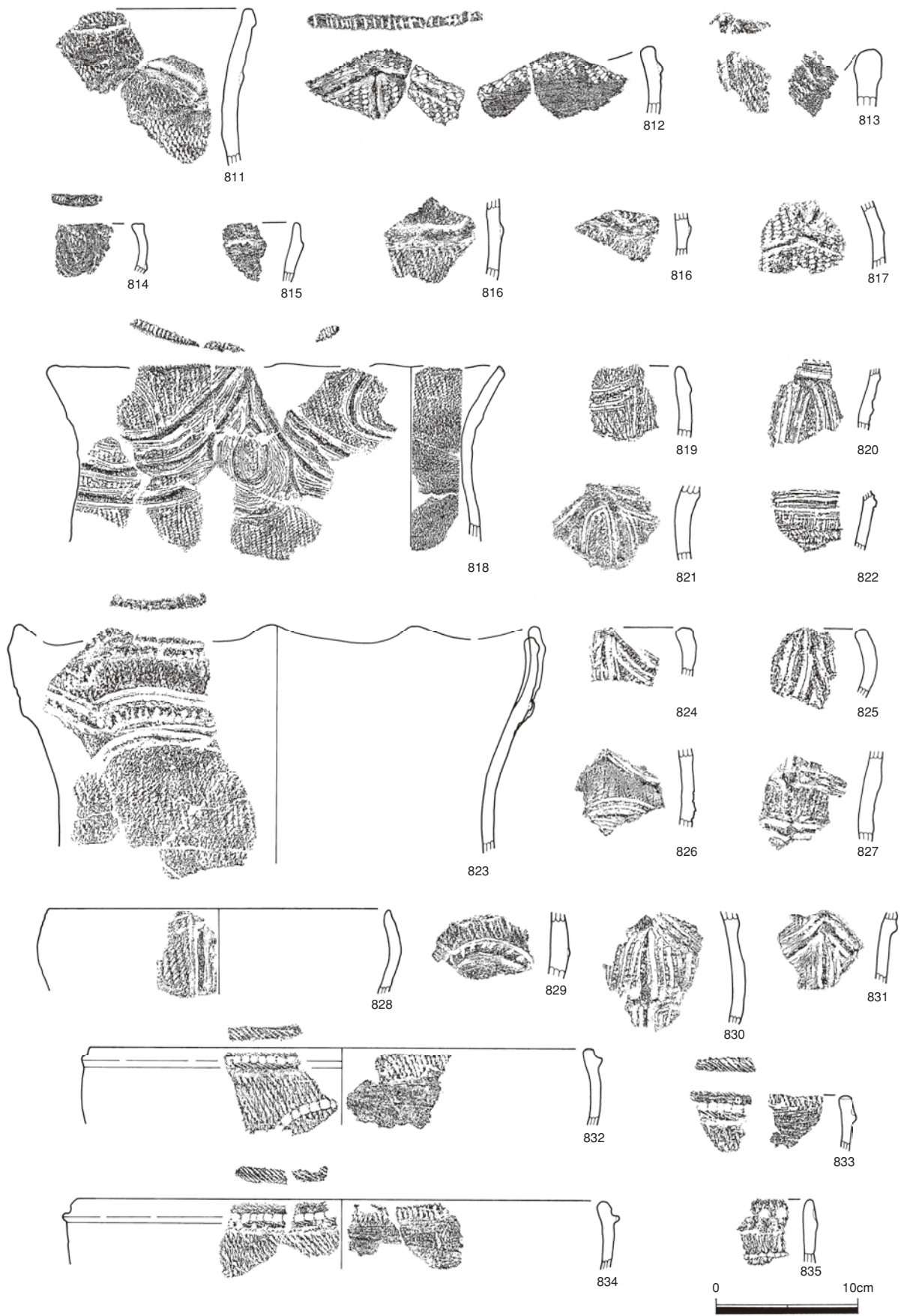
第177図 1区 包含層出土縄文土器 (2)



第178图 1区 包含層出土繩文土器 (3)



第179图 1区 包含層出土縄文土器 (4)



第180图 1区 包含層出土縄文土器 (5)

がる程度の低い隆帯（748～756）に分けることができる。750の刻目は、爪形文と思われる。

757～764は、刻目隆帯が上弦弧状に巡る一群である。この一群の口縁部の形態は、キャリパー形（761・763）と外反するもの（757～760・762）に分類できる。外反する個体の中に、758・759・764のように口縁端部が肥厚するものもある。口唇部に刻目が施されるものは759～762・764の5点、758・763では口唇部に縄文が認められる。

765～791は、刻目隆帯が弧状のみに巡らない一群である。この一群は隆帯が直線状（765・771・772）、あるいは1条ないしは2条一組で直線と弧状を組み合わせて隆帯が巡る（766～770・773～791）。766の口唇部の両端には、爪形文が施される。769・778では半截竹管状工具による連続刺突文が施され、778では内面にも認められる。781では口縁部に指頭圧痕状の押さえが、783の内面には棒状工具による刺突文が認められる。770・772・779の刻目は、半截竹管状工具による。

792～797は、下弦弧状の刻目隆帯と刺突文を組み合わせた一群である。793～795は、口唇部に刻目が認められる。この一群の口縁部の形態は、キャリパー形である。

798～806は、隆帯の幅が細い一群である。この一群は、曲線および直線を用いて多様な模様を構成している。

807～810は、隆帯に指頭圧痕が施された一群である。807・808は、波状口縁を呈する。

811～835は、823・829を除いて隆帯に刻目が施されない一群である。811～817は隆帯が認められ、そのうちの812では口唇部に刻目が施され、体部は二枚貝を用いた刺突文が認められる。814は、口唇部に縄文が施される。818～831は、隆帯と併せて沈線文が施される。沈線は隆帯際、あるいは体部に施される。818～821は、沈線を施す施工原体に半截竹管状工具を用いる。

832～834は口縁部上位に隆帯が認められ、押引刺突文が施される。また、隆帯上および口唇部に細い刻目が認められる。835も先の3点と同じように口縁部上位に隆帯が認められ、円形刺突文が施される。隆帯の下位には、押引刺突文が施される。

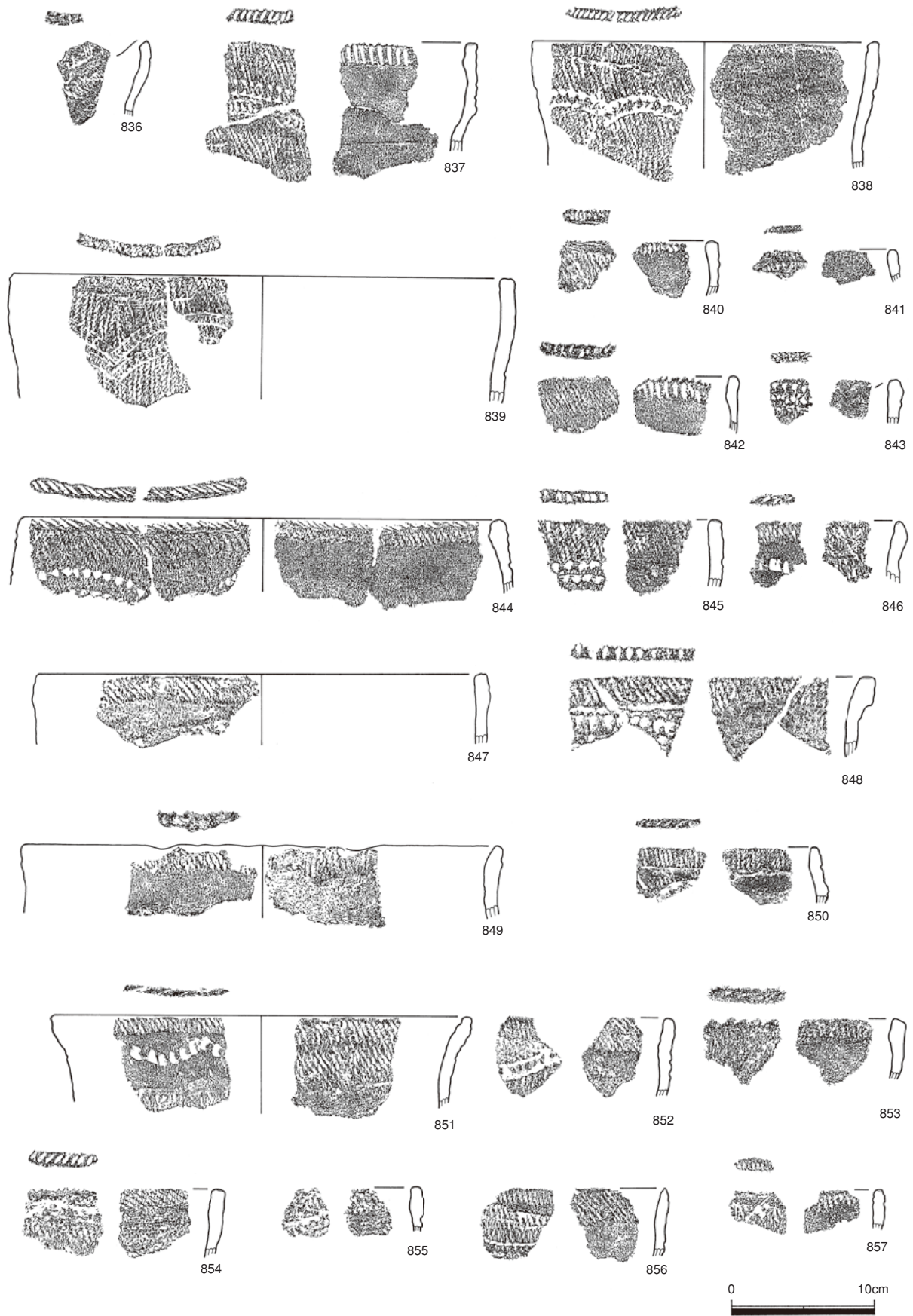
刺突文系の一群（第181～185図：836～992）

836は、ヘラを用いた連続刺突文が施される。837～850は、押引刺突文が下弦弧状に施される一群である。この14点のうち、839・841・847の3点は口唇部に縄文が、849はユビオサエが認められ、残り10点は刻目が施される。837～840・845～847は、刺突の施工原体に半截竹管状工具を用いる。この一群の口縁部形態はキャリパー形が主体をしめ、846・848・849の3点が外反する形態をもつ。

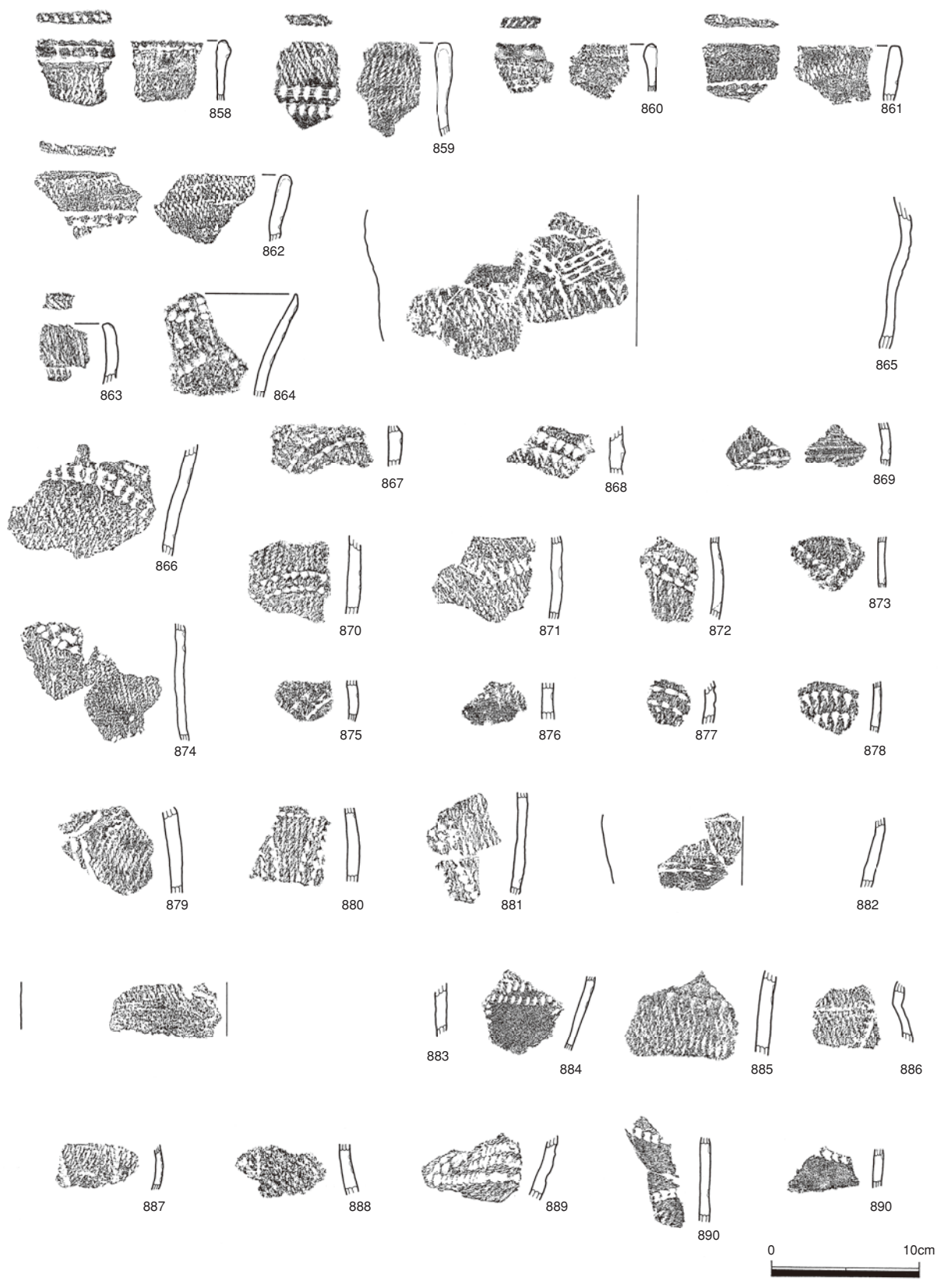
851～857は、押引刺突文が上弦弧状に施される一群である。851・854の口唇部に刻目が、853では縄文が認められる。852・857は、施工原体に半截竹管状工具を用いる。856では、体部に結節沈線文が施される。口縁部の形態は851・856の2点が外反、残り5点がキャリパー形となる。

858～864は、押引刺突文が弧状以外に巡る一群で、直線状（858～863）あるいは曲線状（864）に施される。口縁部はキャリパー形が多く、外反する口縁部を持つのは864の1点である。キャリパー形のなかでも、直線的に立ち上がるもの（858～860）、少し外上方へ開くもの（861・862）、内彎するもの（863）に分かれる。864以外は、口唇部に刻目あるいは縄文（859・862）が認められる。また刺突文の施工原体に859は棒状工具、それ以外の6点は半截竹管状工具が用いられる。

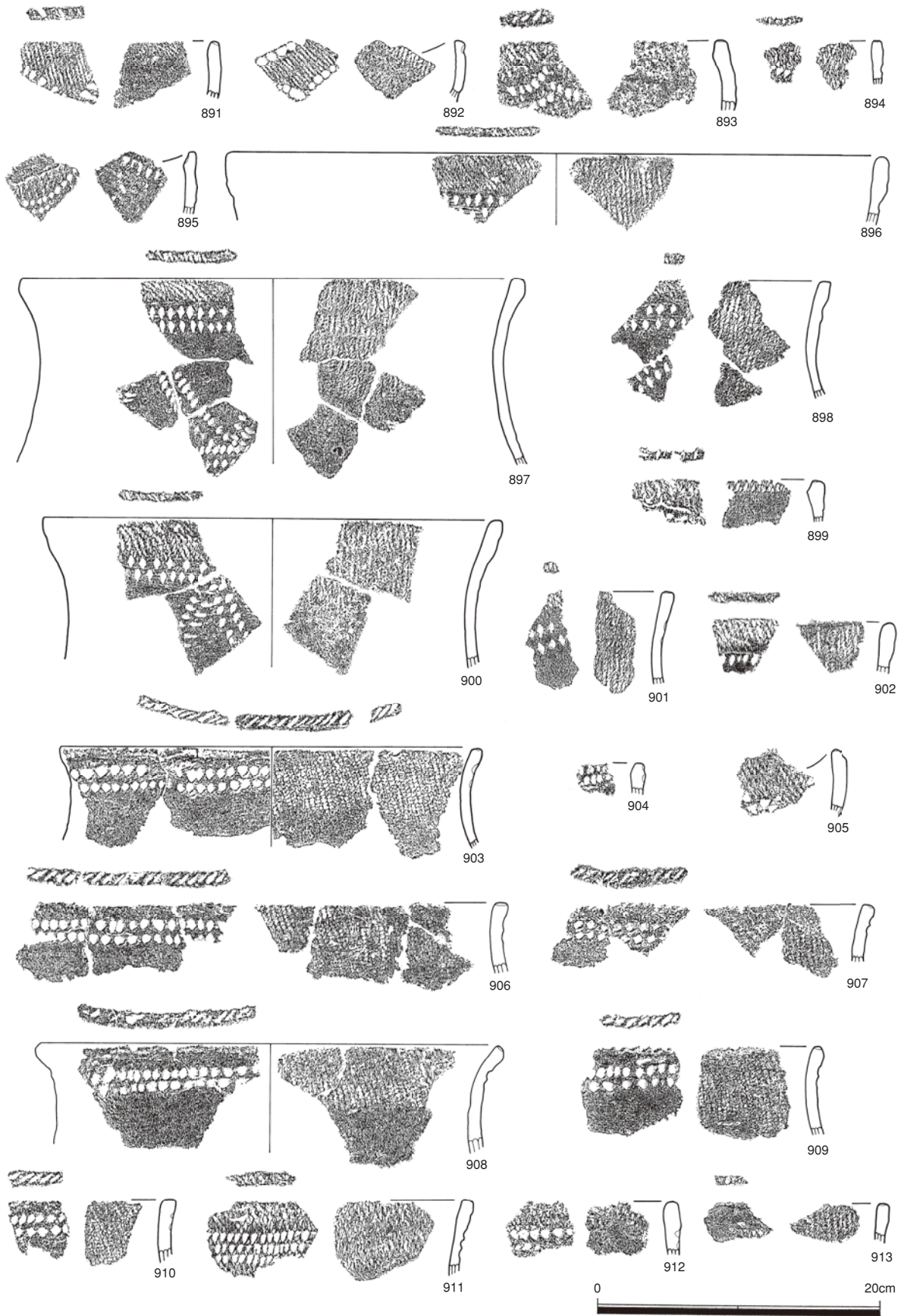
865～890は、押引刺突文が施された体部片である。刺突文は、上弦および下弦弧状、あるいは直線的に1～2条施される。



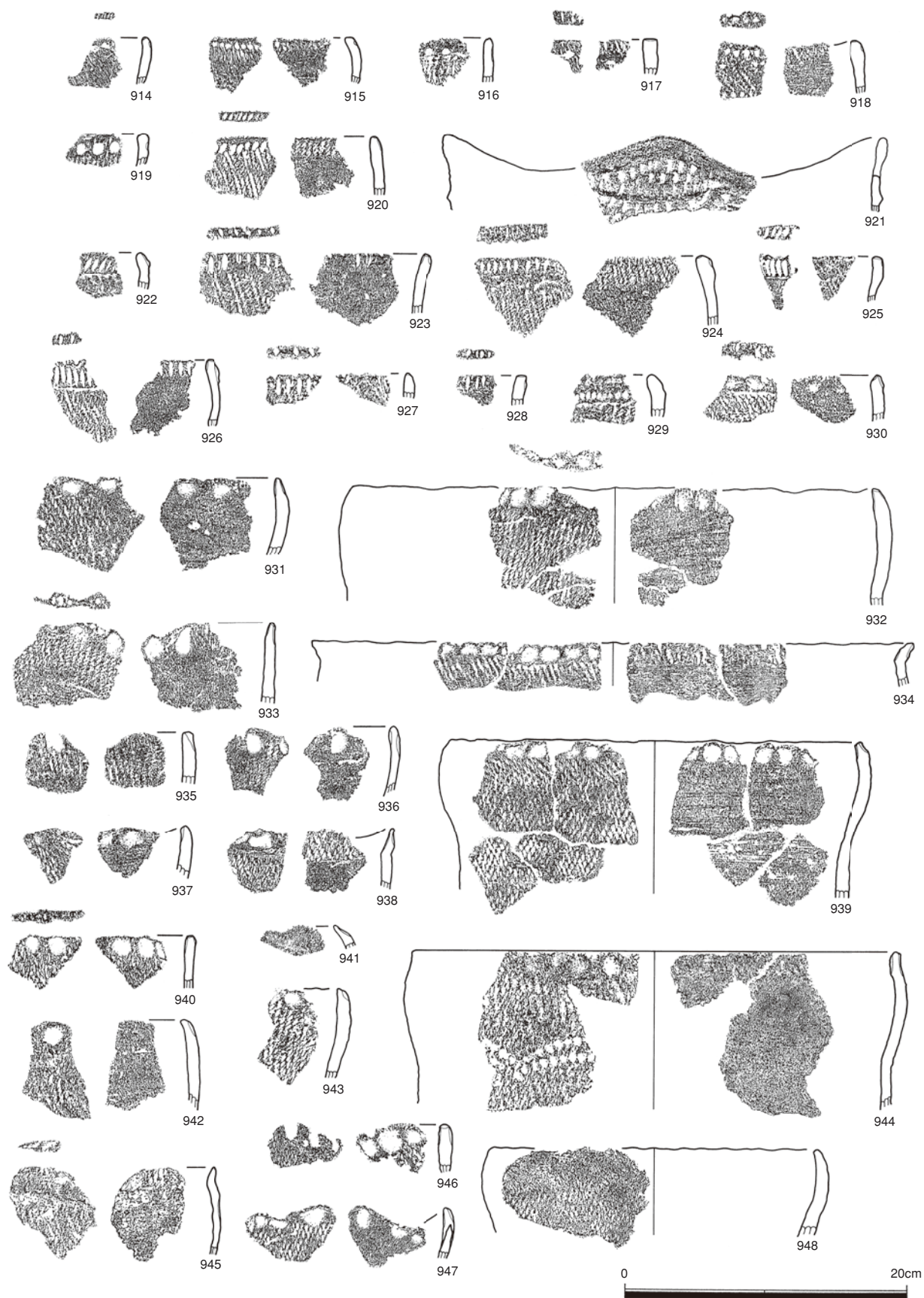
第181图 1区 包含層出土縄文土器 (6)



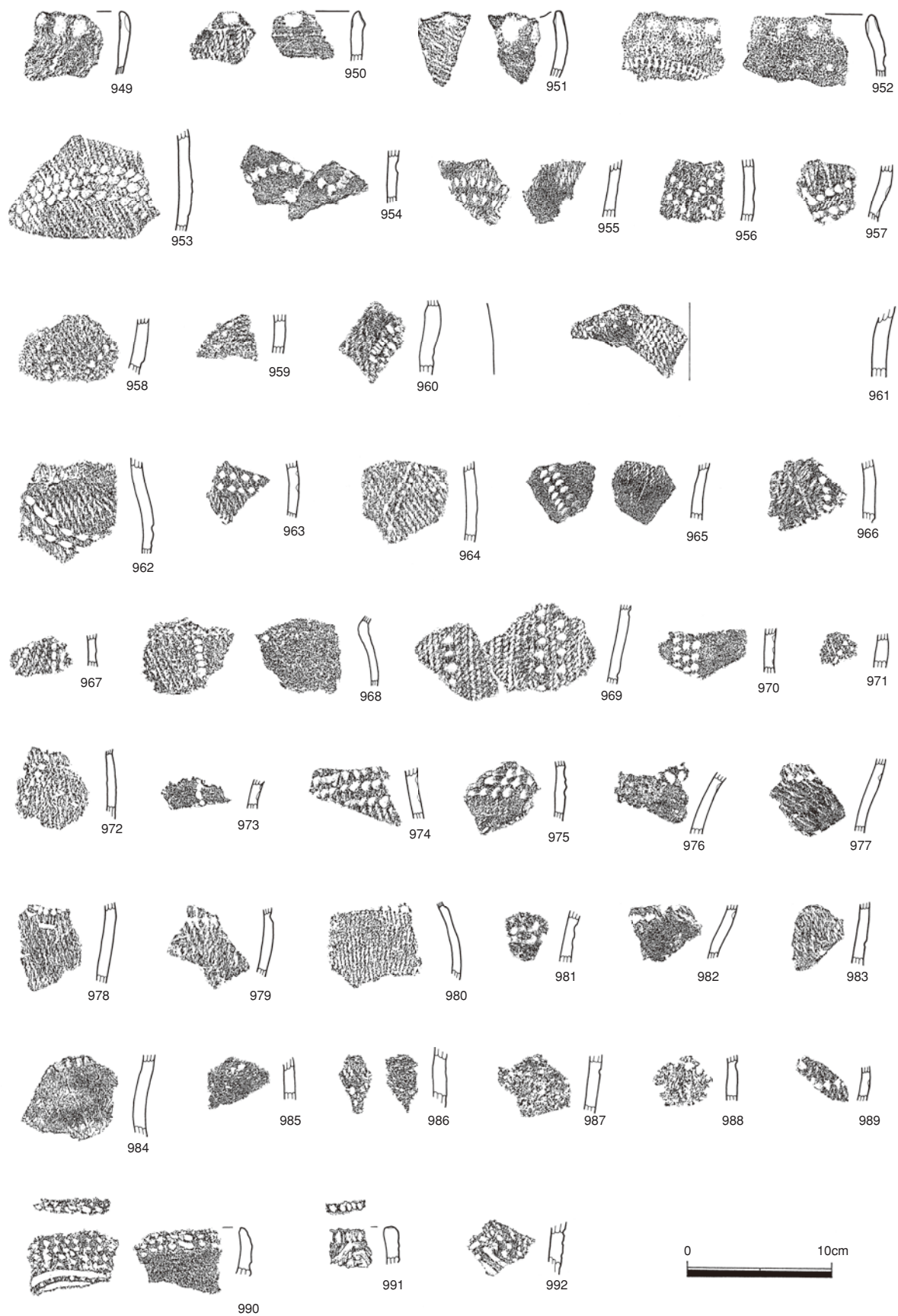
第182図 1区 包含層出土縄文土器 (7)



第183图 1区 包含層出土繩文土器 (8)



第184図 1区 包含層出土縄文土器 (9)



第185図 1区 包含層出土縄文土器 (10)

891～921は、棒状工具を用いた連続刺突文を施す一群である。891～895は、連続刺突文が上弦あるいは下弦弧状に施される。892・895以外は口唇部に刻目が認められるが、895では刻目が口唇部ではなく口縁部内面上位に施される。896～902は2列1組の刺突文で変形鋸歯文が、903～913では2列1組の刺突文が横位に施される。また911では、3列の刺突文が認められた。変形鋸歯文が描かれた7点のうち、口唇部に刻目を施すのが899・901のみである。横位配列のものでは、903・906～910・913に刻目が、911では縄文が施される。口縁部の形態は891・893・894はキャリパー形、896～902のうち、896・899・902はキャリパー形で、残り4点は外反する。903～913では、904・905・912の3点を除いて外反する。892・895・905は波状口縁である。914～920は、口縁端部近くに横方向の刺突文が1条施される。口縁部の形態は7点共にキャリパー形を呈し、916・919を除く5点には口唇部に刻目が認められる。921は波状口縁を持ち、半截竹管状工具による連続刺突が施される。

922～928は、口縁部外面に棒状工具による刻目を施す一群である。922以外の7点は、口唇部に刻目を施す。また929では棒状工具による刺突文、930では指頭圧痕が認められる。

931～952は、口縁部に指頭圧痕文が施される一群である。強く押さえることにより、内外面に明瞭に指頭圧痕が認められるものと、外面あるいは内面のみに認められるものに分かれる。遺存状態に左右されるが、外面のみに明瞭な指頭圧痕が確認できるものは934・935・938・942・943・944・949の6個体、内面のみは937の1個体だけである。また941・945・948のように、指頭圧痕が不明瞭なものも存在する。体部の施文として縄文のみの個体が多数を占めるが、刺突文が施される個体も認められる（944・952）。また、932・933・940・945・946の5個体の口唇部に刻目が施される。

953～989は、刺突文が認められる体部片である。953～961は、1～3列の刺突文が下弦弧状に施されたものである。施工原体に、棒状および半截竹管状工具を用いる。962・963は、2列の刺突文が上弦弧状に施される。964～973では、1～3列の直線的な刺突文が縦あるいは斜め方向に施される。974～980は、1～3列の刺突文が横方向に施される。981～989は刺突文が認められるものの、モチーフが不明な一群である。

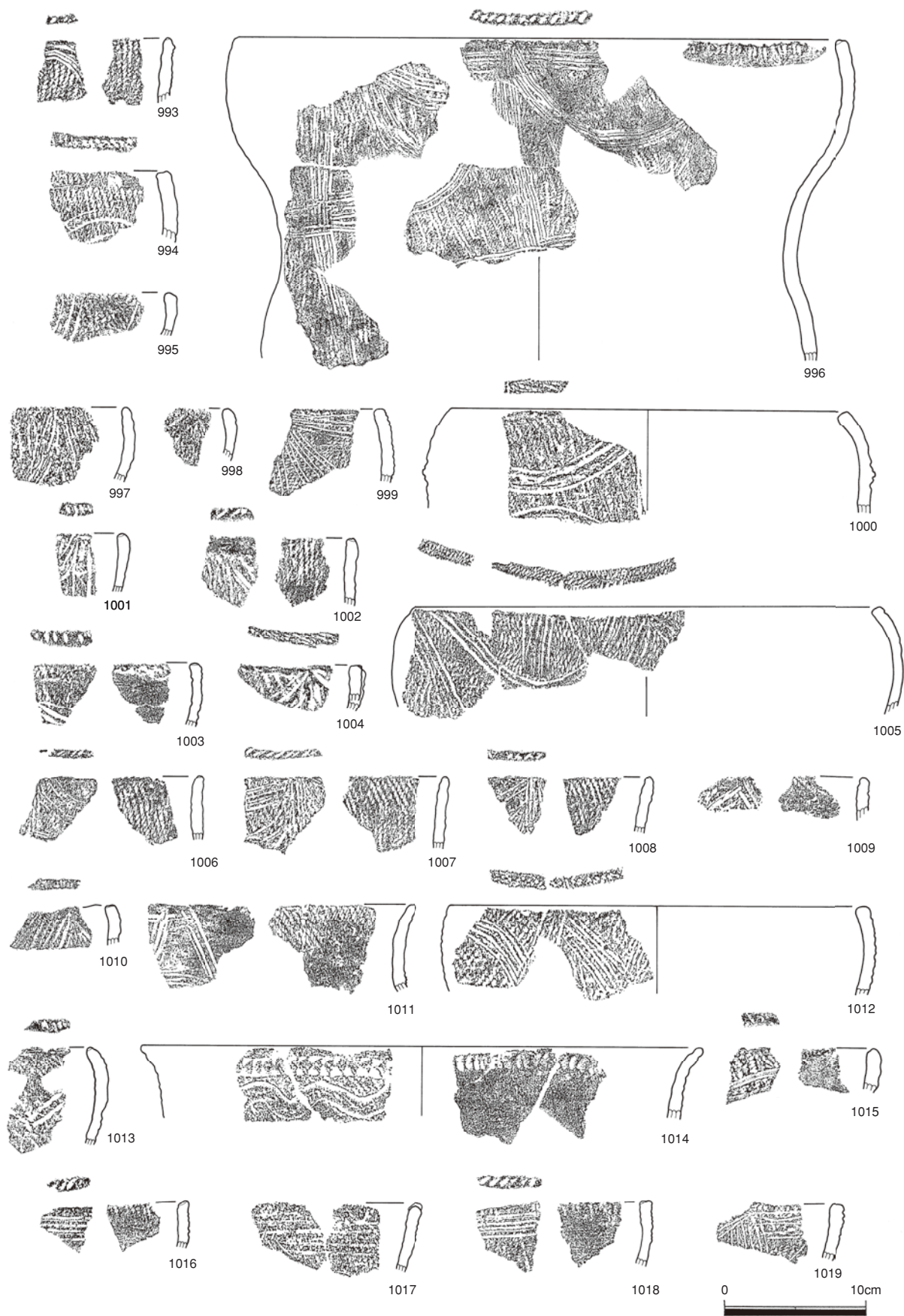
990～992は、連続刺突文と沈線が施された一群である。刺突文の施工原体は、990・992は半截竹管状工具を用いる。口唇部では、990は刺突文、991は刻目が認められる。

沈線文系の一群（第186～188図：993～1060）

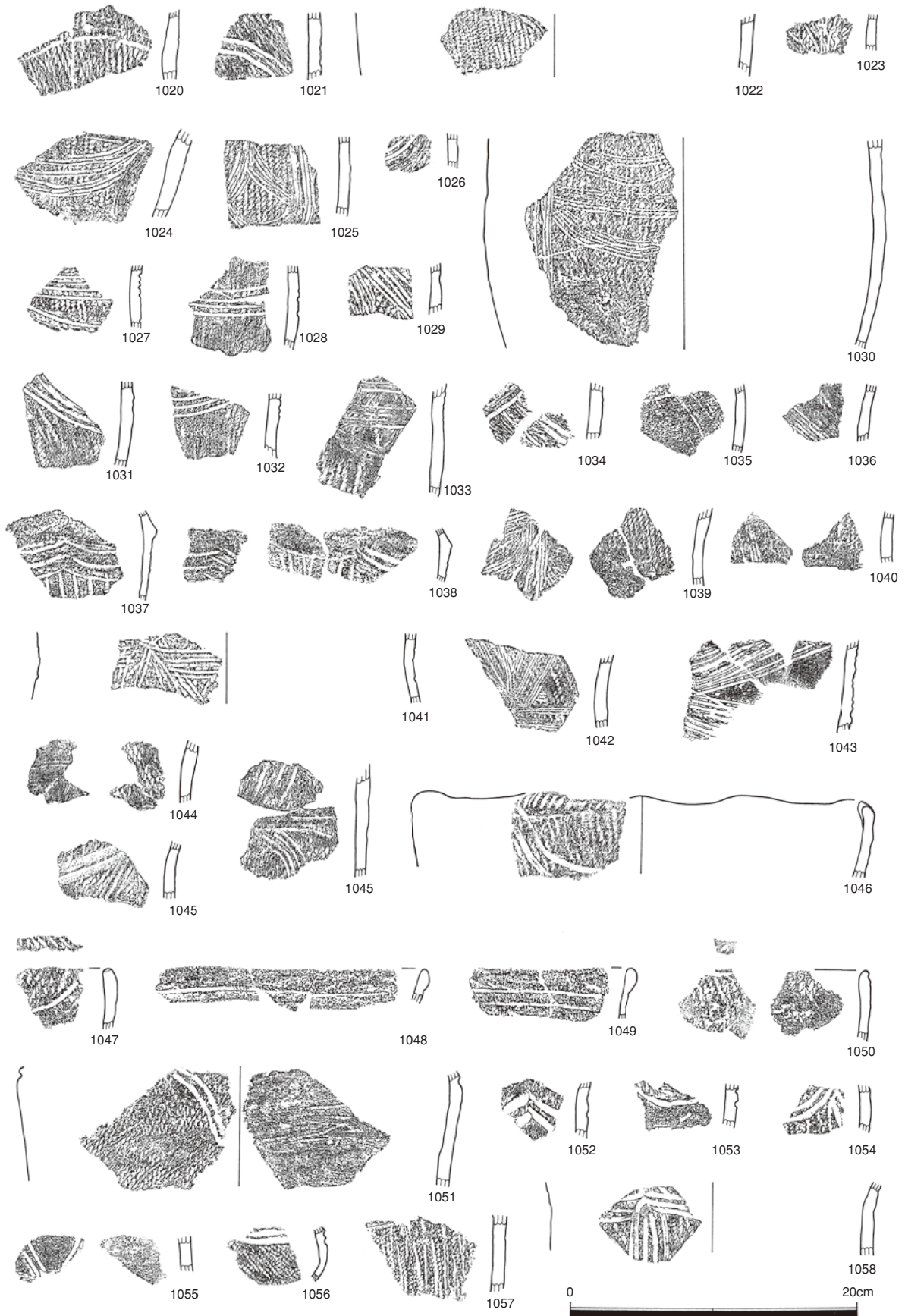
993～1045は、沈線の施工原体に半截竹管状工具を用いる一群である。993～1008は、沈線が弧状に巡るものである。993のみ下弦弧状を呈するが、残り15点は上弦弧状となる。口縁部は、キャリパー形口縁が多数をしめる。口唇部に施される刻目は993・996・1001～1003・1006～1008の8点、縄文は994・1000・1004・1005の4点である。1009～1013は、沈線が三角状に巡るものである。口縁部は1011のみ外反するが、残り4点はキャリパー形口縁である。口唇部には1010・1013が刻目、1012は縄文が施される。1014・1015は沈線が波状を呈し、1015の口唇部に縄文が認められる。1016～1018は沈線が横位に、1019は幾何学的に巡る。1016・1018の口唇部に、刻目が認められる。

1020～1045は、半截竹管状工具による沈線が認められる体部片である。1020～1040は上弦弧状、1041～1043は三角、1044は横位方向、1045は幾何学文が認められる。

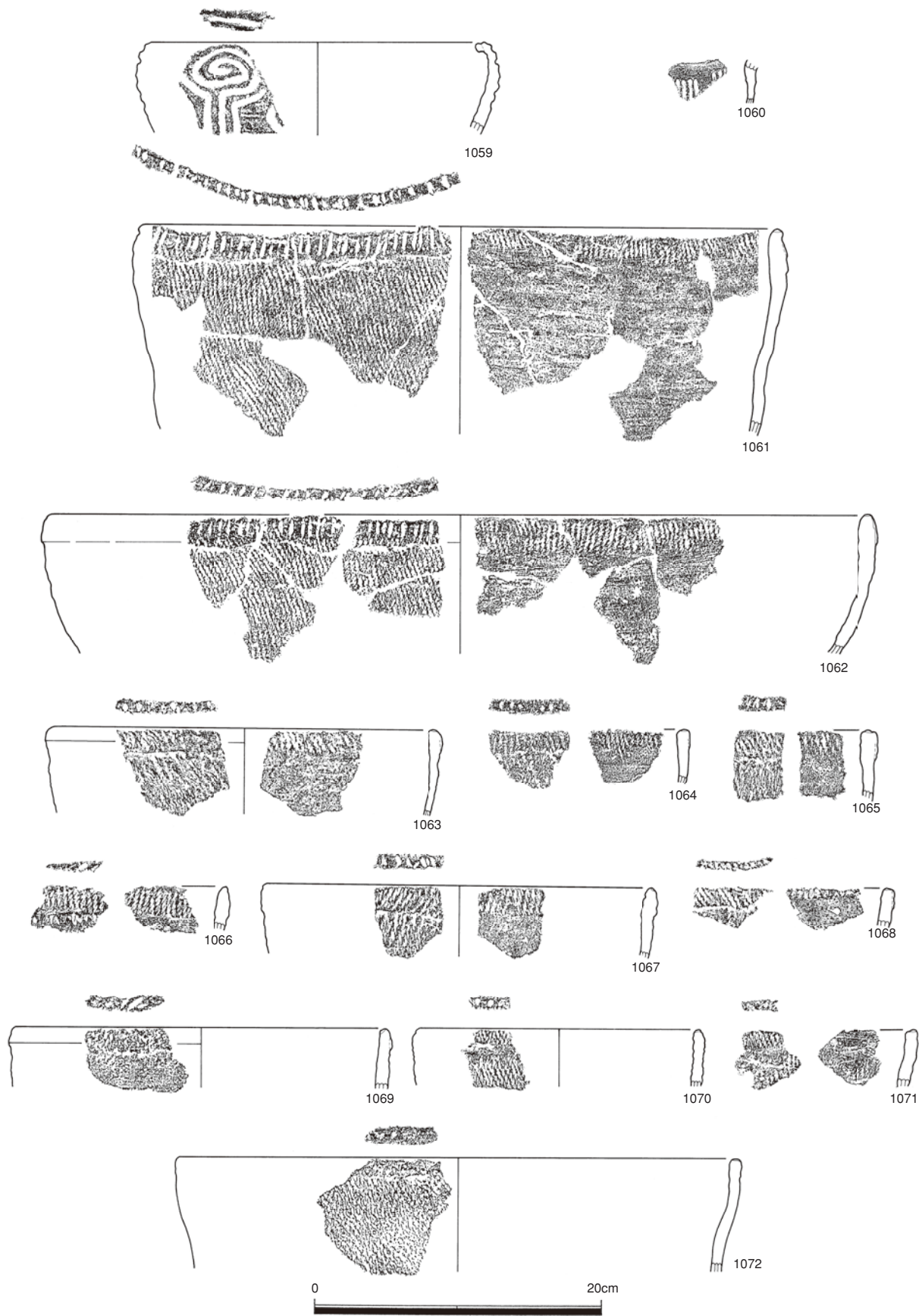
1046～1057は、沈線の施工原体に棒状工具を用いる一群である。1046・1047は上弦弧状、1048～1050は横位の平行沈線を巡らせる。1047・1050は、口唇部に刻目が認められる。1051～1057はその体部片で、



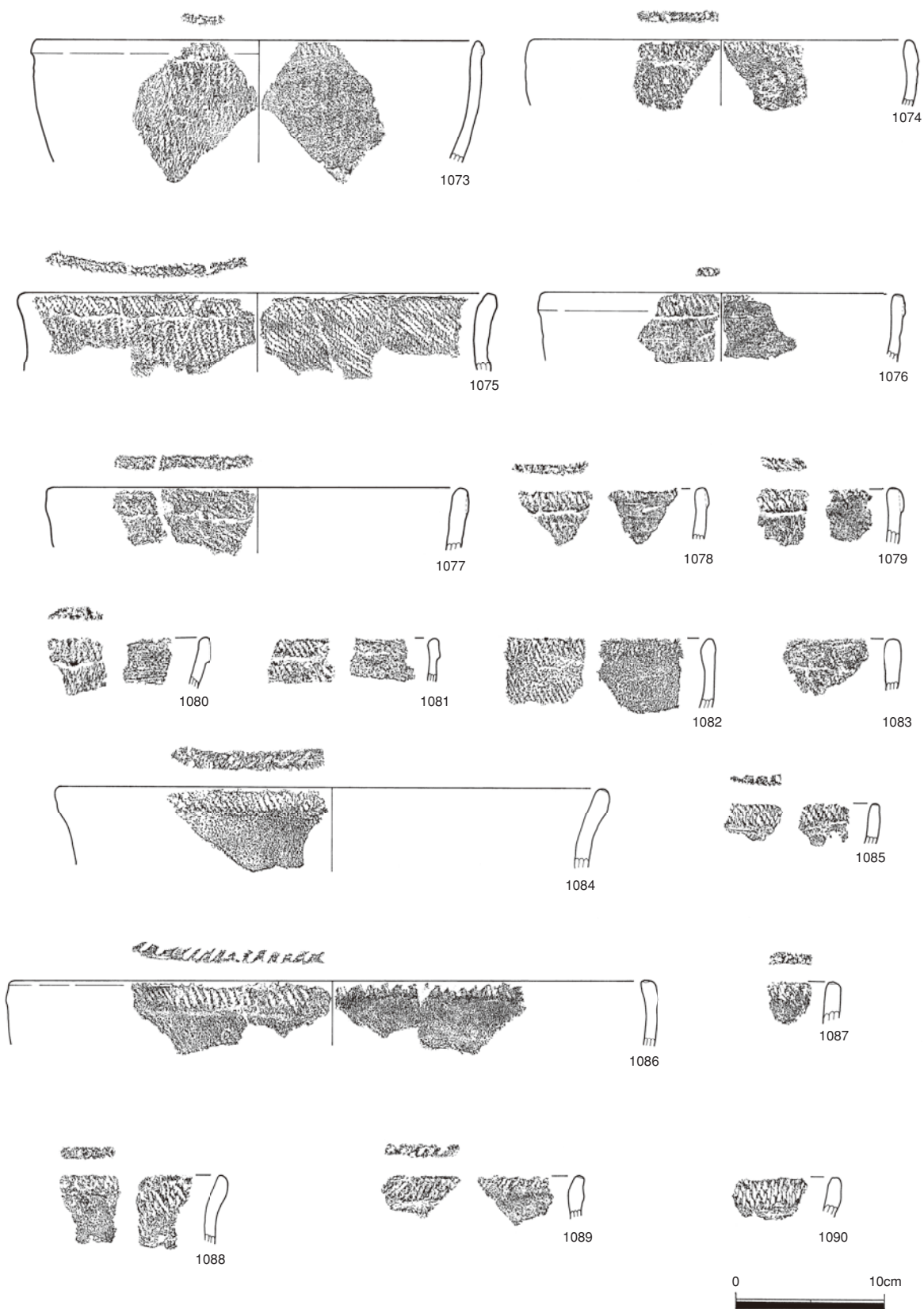
第186図 1区 包含層出土縄文土器 (11)



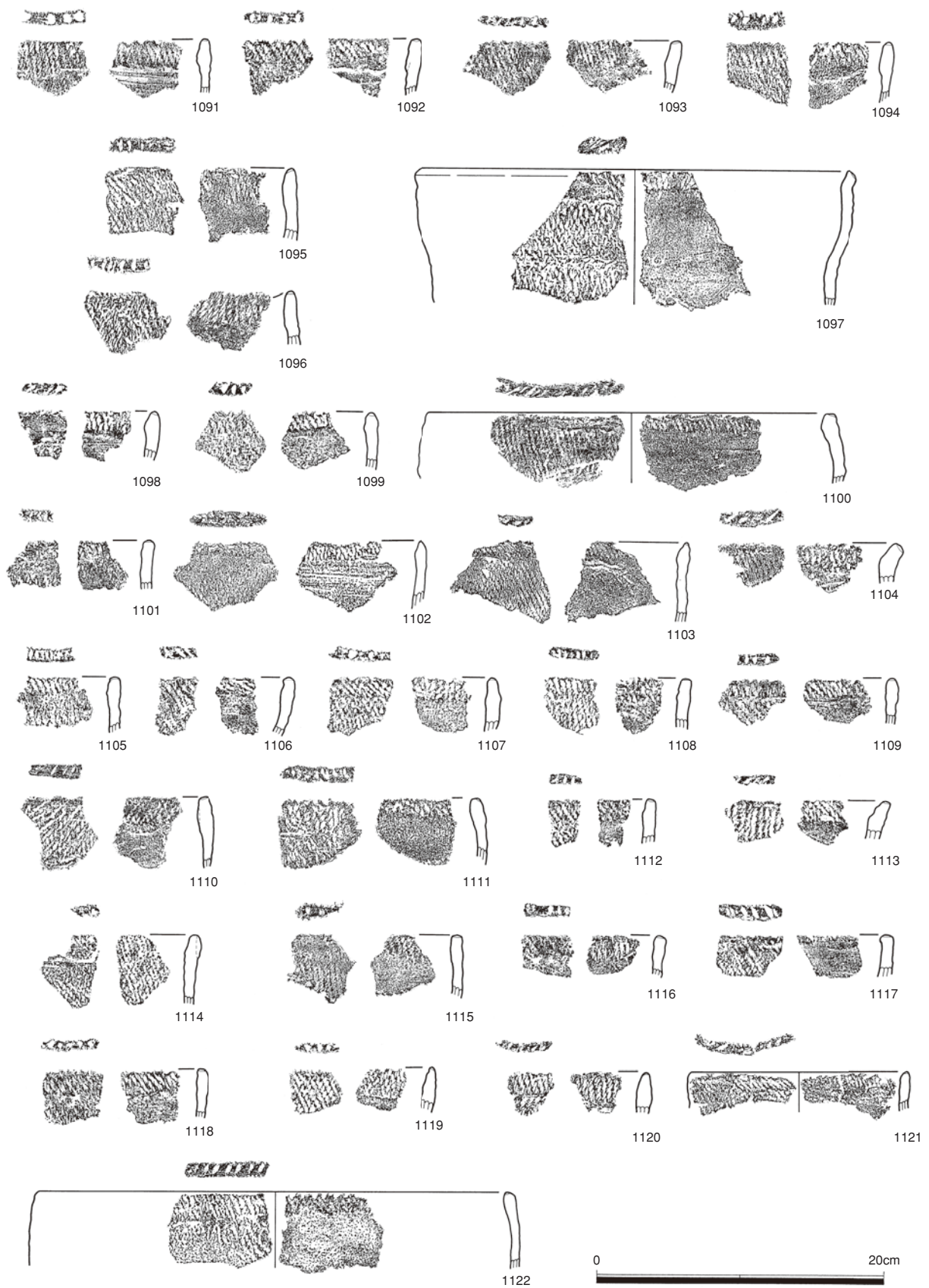
第187図 1区 包含層出土縄文土器 (12)



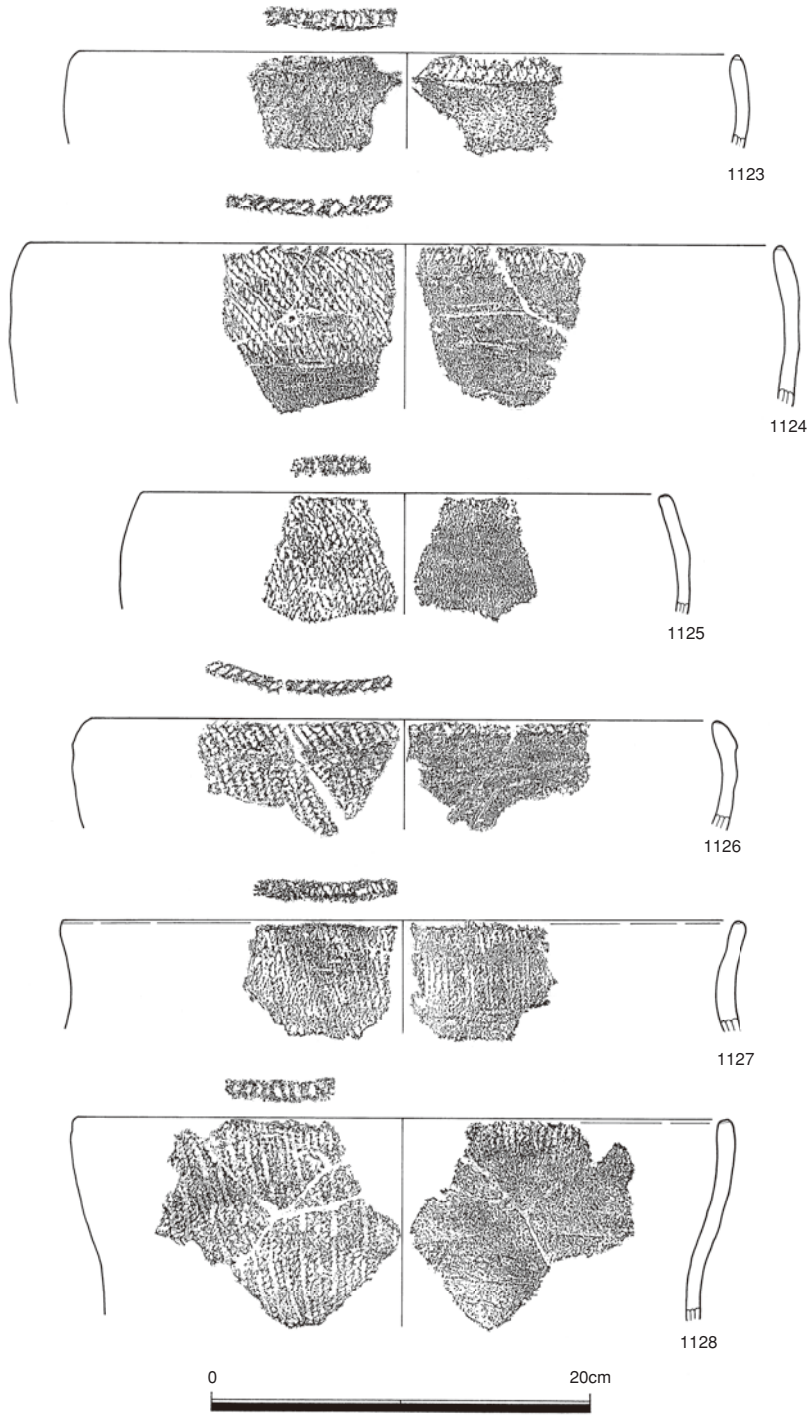
第188図 1区 包含層出土縄文土器 (13)



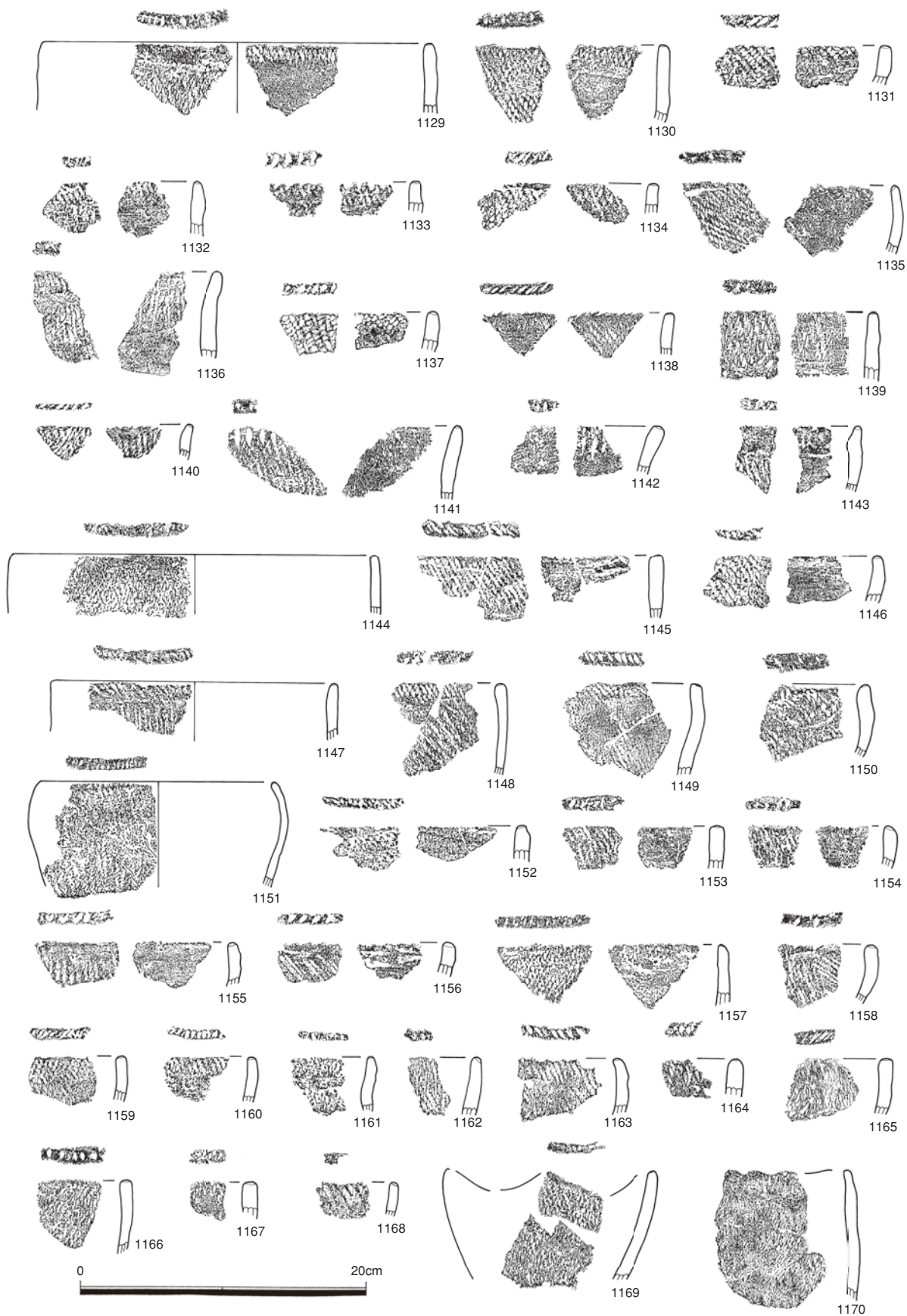
第189図 1区 包含層出土縄文土器 (14)



第190図 1区 包含層出土縄文土器 (15)



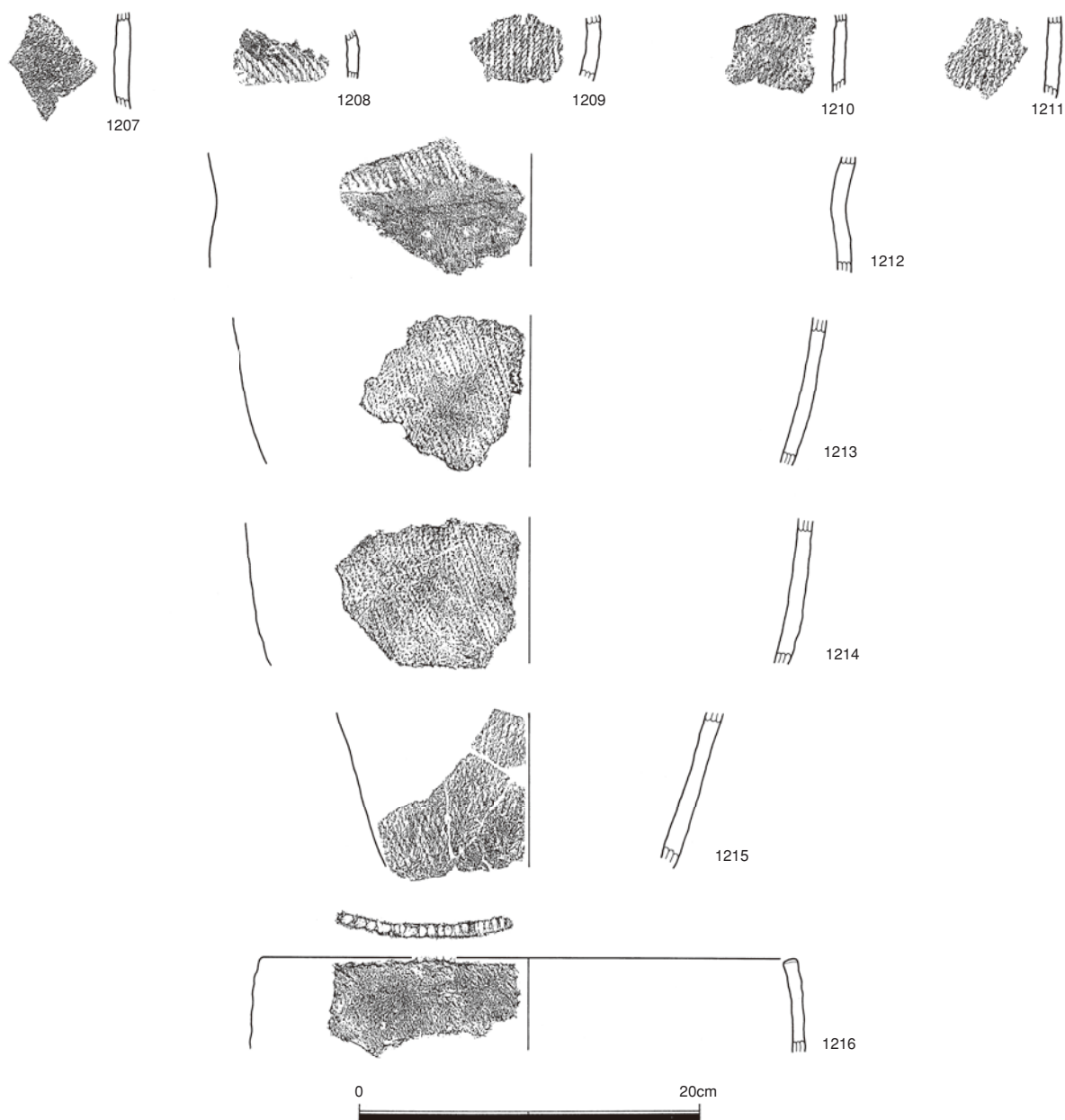
第191図 1区 包含層出土縄文土器 (16)



第192図 1区 包含層出土縄文土器 (17)



第193図 1区 包含層出土縄文土器 (18)



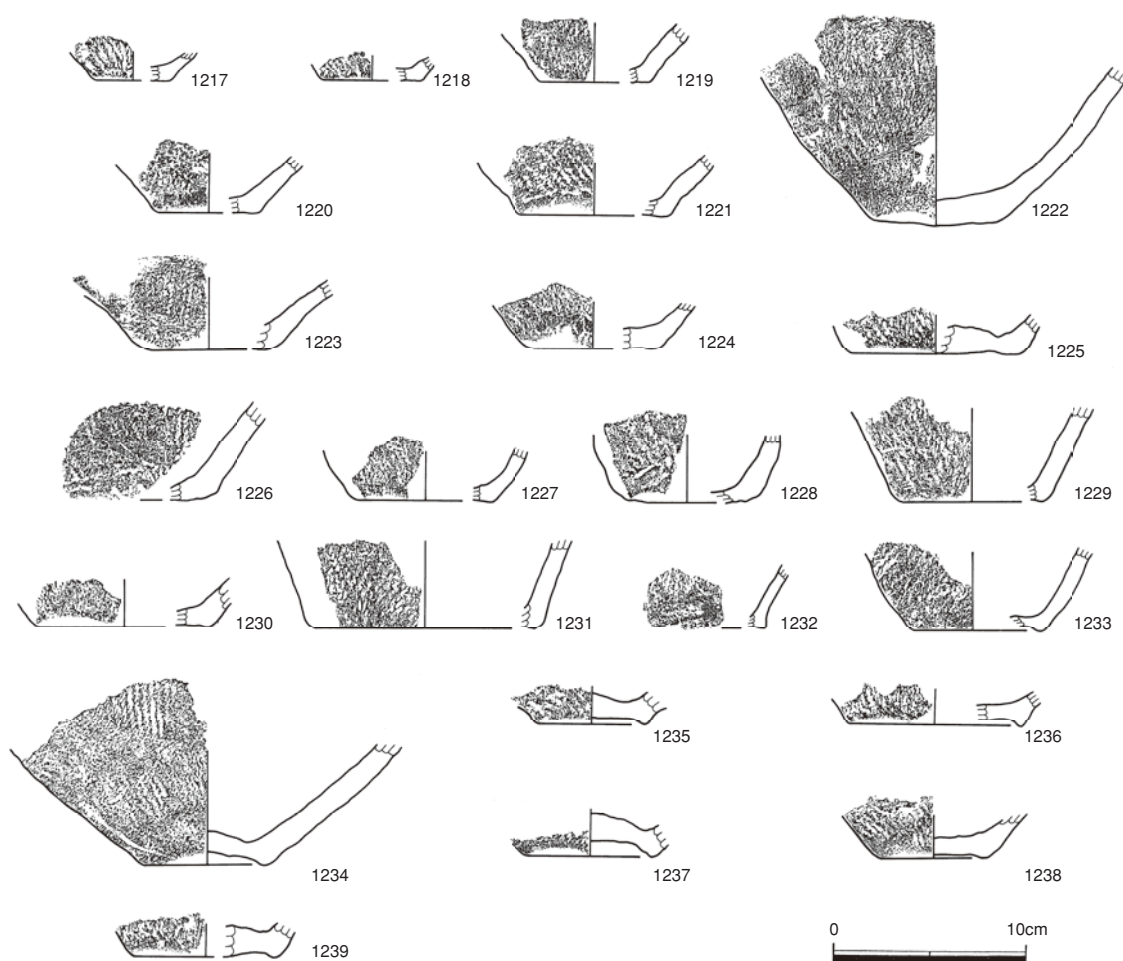
第194図 1区 包含層出土縄文土器 (19)

1051は下弦弧状、1052～1054は上弦弧状、1055は三角、1056は横位方向、1057は幾何学文が認められる。

1058～1060は、船元式の太沈線文系の一群である。1059では体部に渦巻き文が認められ、口唇部にも沈線が施される。1058・1060は幾何学的な文様が施される。

刺突文系? の一群 (第188図 : 1061・1062)

1061・1062は口唇部に刻目を施し、また口縁部外面にわずかな粘土帯を貼り付けて、その上に刻目を施す。



第195図 1区 包含層出土縄文土器 (20)

全縄文系の一群 (第188~195図：1063~1239)

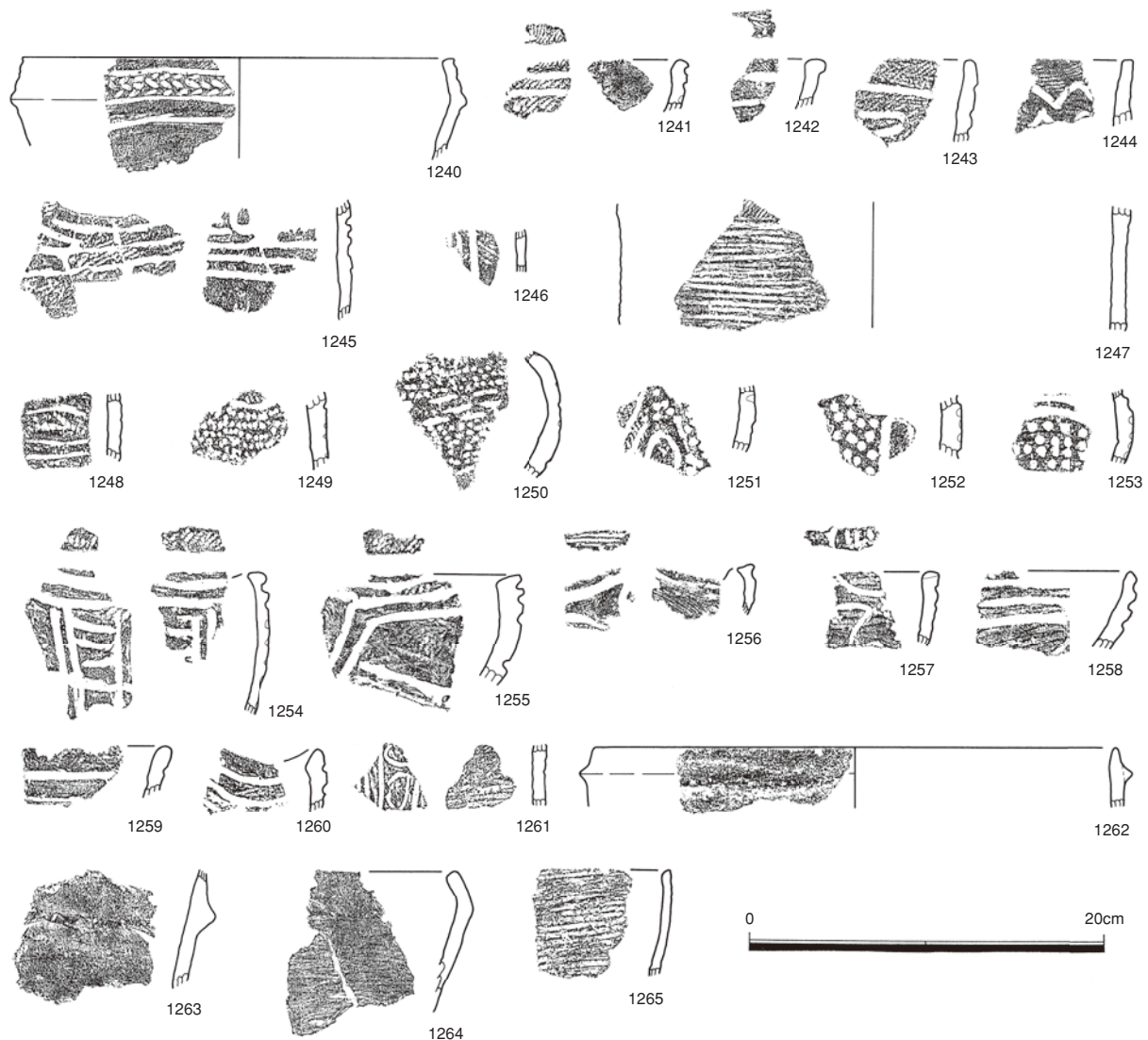
1063~1083は、全縄文系のなかでも波子系と呼ばれる一群である。キャリパー形口縁が多数をしめ、1075のみ外反する。1063~1072の口唇部には刻目、1073~1080は縄文が施されるが、1081~1083の3点は無文である。

1084~1215は、全縄文系の一群である。1084~1090は内外面共に口縁部のみ縄文を施し、体部はナデ調整である。

1091~1114・1171・1173は、口縁部内面を肥厚させ縄文を施す一群である。肥厚の度合いは、個体によって異なる。また、口唇部に刻目を施す。1100は、刻目隆帯が認められることから隆帯文系である。1115~1140・1172・1174は、1091~1114と同じく口唇部に刻目を施すが、内面は肥厚しないものである。内外面共に、縄文帯の幅は個体によって異なる。1141~1143は上記と同じように、口唇部に刻目が認められ、内面肥厚しない。しかし異なる点は、1141は外面口縁端部に連続刺突文が、1142・1143は内面にも刻目が認められることである。

1144~1169は口唇部に刻目が認められ、内面はナデ調整のみである。また1145・1146・1153・1160の4点の内面は、条痕の後にナデを施している。1170は、口縁部内面に指頭圧痕が施される。

1175~1186・1206は口唇部に縄文がみとめられ、内面口縁部を中心に縄文が施される一群である。



第196図 1区 包含層出土縄文土器 (21)

1187～1205は、口唇部に刻目・縄文が認められない一群である。1207～1215は体部片である。1212は、頸部付近にヨコナデが施され、その部分のみ縄文がナデ消されている。

1216は口唇部に刻目を施し、外面は縄文のあとナデ調整、内面はナデ調整のものである。外面のナデ調整は丹念には行われておらず、外面口縁部に少し縄文が認められる。

1217～1239は、底部である。内面は、すべてナデ調整である。底部の分類を行うと、1217～1223は平底A、1224～1232は平底B、1234・1237は凹底、1232・1233・1235・1236・1238・1239は高台底となる。

中期末～後期の有文深鉢 (第196図：1240～1265)

第196図で掲載した遺物は、縄文時代中期末から後期と思われる有文深鉢の一群で、形式を比定できるものは少ない。

1241～1244は、後期の土器である。1241は北白川上層式、1242は福田KⅡ式、1243・1244は中津式に比定できる。

1247・1248・1261は、沈線文系の一群と思われる。1247は遺存部の上位に縄文が認められ、下位は横



第197図 1区 包含層出土縄文土器 (22)

位の多条沈線が施される。1248の外表面は縄文・ナデのあと、横位の沈線を施す。1261の外表面はナデのあとと沈線で幾何学模様を描き、内表面は巻貝条痕である。

1240・1249～1253は、185図の990～992と同じ棒状工具による刺突文系の一群と思われる、体部に沈線と刺突文の組み合わせが認められる。1240は、棒状工具による連続刺突文を施す。

1245・1246・1254～1260は、太沈線文系の一群である。1254・1255の口唇部には縄文が、1256は板状工具によるナデが、1257は刻目が施される。

1262～1264は里木Ⅲ式、1265は無文系か。

後期～晩期の有文深鉢（第197・198図：1266～1309・1323～1326・1328～1333）

後期～晩期に属する有文深鉢の一群である。1266～1269・1307・1308は中津式と捉えたが、小片により形式不明瞭な一群である。1269の外表面は、巻貝を回転させて疑似縄文を施す。

1270・1271・1274～1277は、小片により3条沈線を認めることができないものの福田KⅡ式と捉えた一群である。1270は口唇部に刻目を、1274～1277は縄文と沈線を施す。

1272・1273・1278～1306・1309は、縁帯文成立期と考えられる一群である。口唇部に刻目のみを施すのが1272・1292、沈線+縄文は1278・1283、沈線+刻目は1279・1284～1295、沈線のみが1280～1282・1297～1301である。1292は押し引きで刻目を施す。沈線+刻目では、沈線1条が多数を占めるが、1295のように2条も存在する。沈線は1～3条施され、なかには縄文のあと沈線を施すものもある（1300）。1302は口唇部に沈線+棒状工具による刺突文が、1304・1305は口縁部に竹管文が2条認められる。

1323～1326は沈線文系、1327・1328は縁帯文系である。1329は、縁帯文成立期の体部か。1330は素縄文系、1305・1331・1332は北白川上層式か。1333～1335は、晩期突帯文系である。

後期の有文浅鉢（第198図：1310～1322・1327）

1310～1322・1327は、後期に属する有文浅鉢の一群である。1310～1313は、中津式と考えられる一群である。小片により、文様構成は不明である。1314～1320・1327は小片により3条沈線を認めることができないものの、福田KⅡ式の範疇で捉えた一群である。なかでも1315・1317・1318の3点は、宿毛式と考えられる。1321・1322は、集約沈線文系である。

中～後期の無文深鉢（第199・200図：1336～1417・1419～1421・1425）

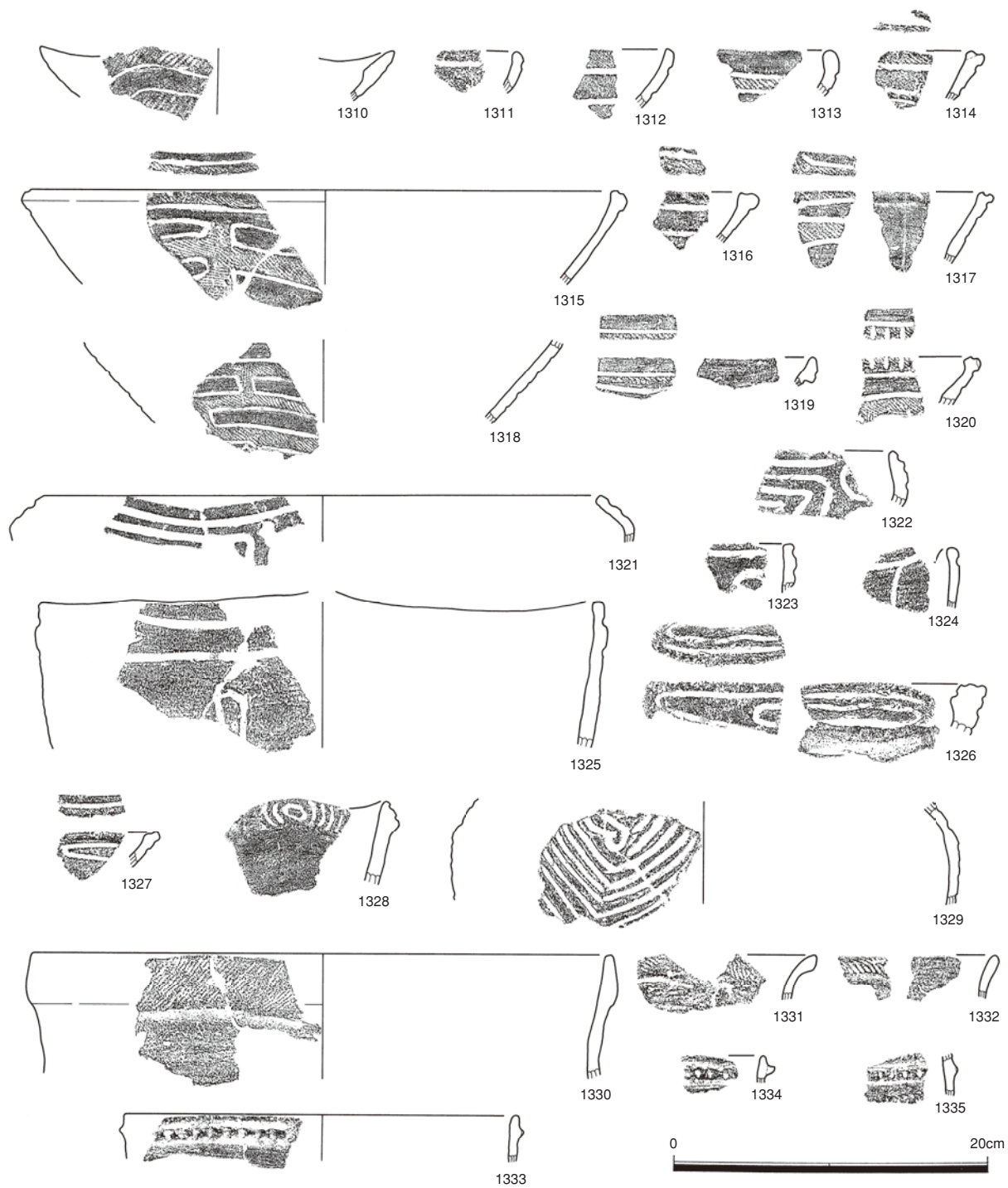
1区出土の無文深鉢は、86点図化できた。小片が多く、図化できた個体のなかに無文深鉢でないものも含まれている可能性が考えられるが、明確に別器種と判断できない場合は深鉢に含めて分類を行った。

1群（第199図：1336・1338～1349）

口唇部に施文が認められるものを、1群とした。1336・1338～1348は口唇部に刻目を、1337は押し引による刺突文を、1349は縄文を施す。刻目を施す12個体のうち、1347・1348の刻目の形態は斜行である。

2群（第199・200図：1350～1417・1419～1421・1425）

口唇部に施文が認められないものを2群とし、口縁部および口縁端部の形状から大きく5類に分類した。頸部から口縁端部に向かって緩やかに内彎しながら立ちあがる2群1類に該当するものは、認められなかった。



第198図 1区 包含層出土縄文土器 (23)



第199図 1区 包含層出土縄文土器 (24)

2群2類（第199・200図：1350～1376・1379～1381・1388・1395～1403・1405・1412）

頸部から口縁端部に向かってほぼ直線的に外上方へ立ち上がる一群を、2類とした。そして端部肥厚の有無でさらに分類し、肥厚しないものを2a類、肥厚するものを2b類とした。

2群a類（第199・200図：1350～1376・1388・1396～1399・1405・1412）

頸部から口縁端部に向かってほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、端部をそのまま収める。端部の形状からさらに細分可能で、丸く収めるもの（1351～1355・1364～1366・1376・1405）、方形に収めるもの（1350・1356～1363・1367～1373）、尖り気味に収めるもの（1374・1375・1412）に分かれる。

2群2b類（第199・200図：1379～1381・1395・1400～1403）

頸部から口縁端部に向かってほぼ直線的に外上方に立ち上がり、端部を肥厚させて収める。1380・1381・1400は端部が方形、1379・1395・1402・1403は端部を丸く、1401は尖り気味に収める。

2群3類（第199・200図：1382～1387・1389～1394・1413～1416）

頸部から口縁端部に向かって外反する一群を、3類とした。そして、端部肥厚の有無でさらに分類し、肥厚しないものを3a類、肥厚するものを3b類とした。

2群3a類（第199図：1382・1383・1385～1387・1389～1394）

頸部から口縁端部に向かって外反し、端部をそのまま収める。端部の形状からさらに細分可能であり、端部を丸く収めるもの（1385・1386・1390～1392）・方形に収めるもの（1382・1383・1387・1389・1393・1394）に分けることができる。方形に収める中でも、端面を水平に保つものと斜めになるものがある。

2群3b類（第199・200図：1384・1413～1416）

頸部から口縁端部に向かって外反しながら立ち上がり、端部を肥厚させて収める。内面もしくは外面側に肥厚させ、端部を丸くあるいは尖り気味に収める。

2群4類（第199・200図：1377・1378・1406・1411・1417・1419～1421）

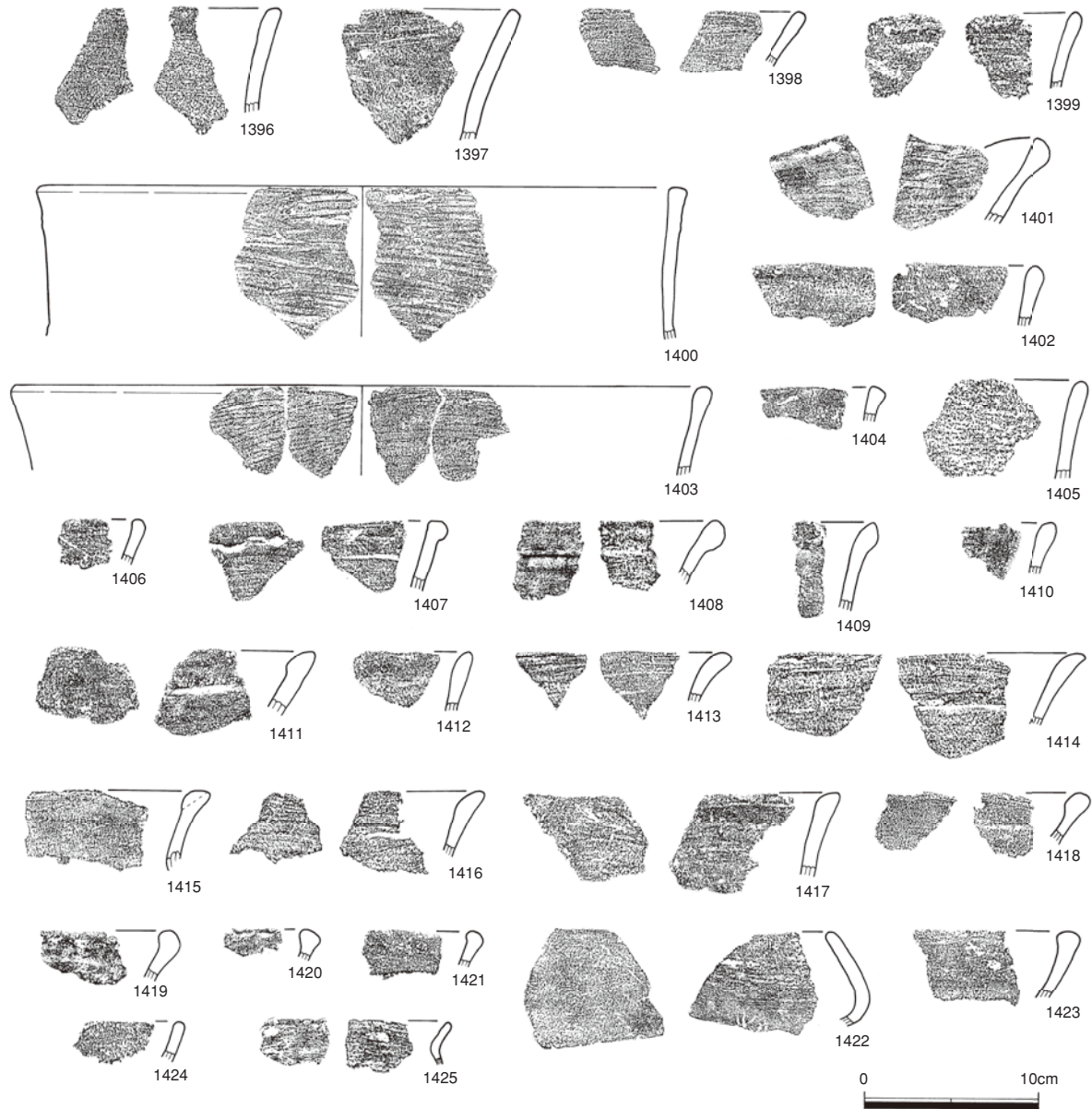
口縁部の内面側に肥厚帯が認められる一群を、4類とした。肥厚帯の幅は長短があり、端部をそれぞれ丸くあるいは尖り気味に収める。

2群5類（第200図：1404・1407～1410）

口縁部の外面側に肥厚帯が認められる一群を、5類とした。1404は断面三角形に、1407・1408・1410は端部を丸く、1409は平坦に収める。

後期の無文浅鉢（第200図：1418・1422～1424）

浅鉢4点のうち、1418・1423・1424の3点は体部が直線的に、もしくは緩やかに内彎しながら立ち上が



第200図 1区 包含層出土縄文土器 (25)

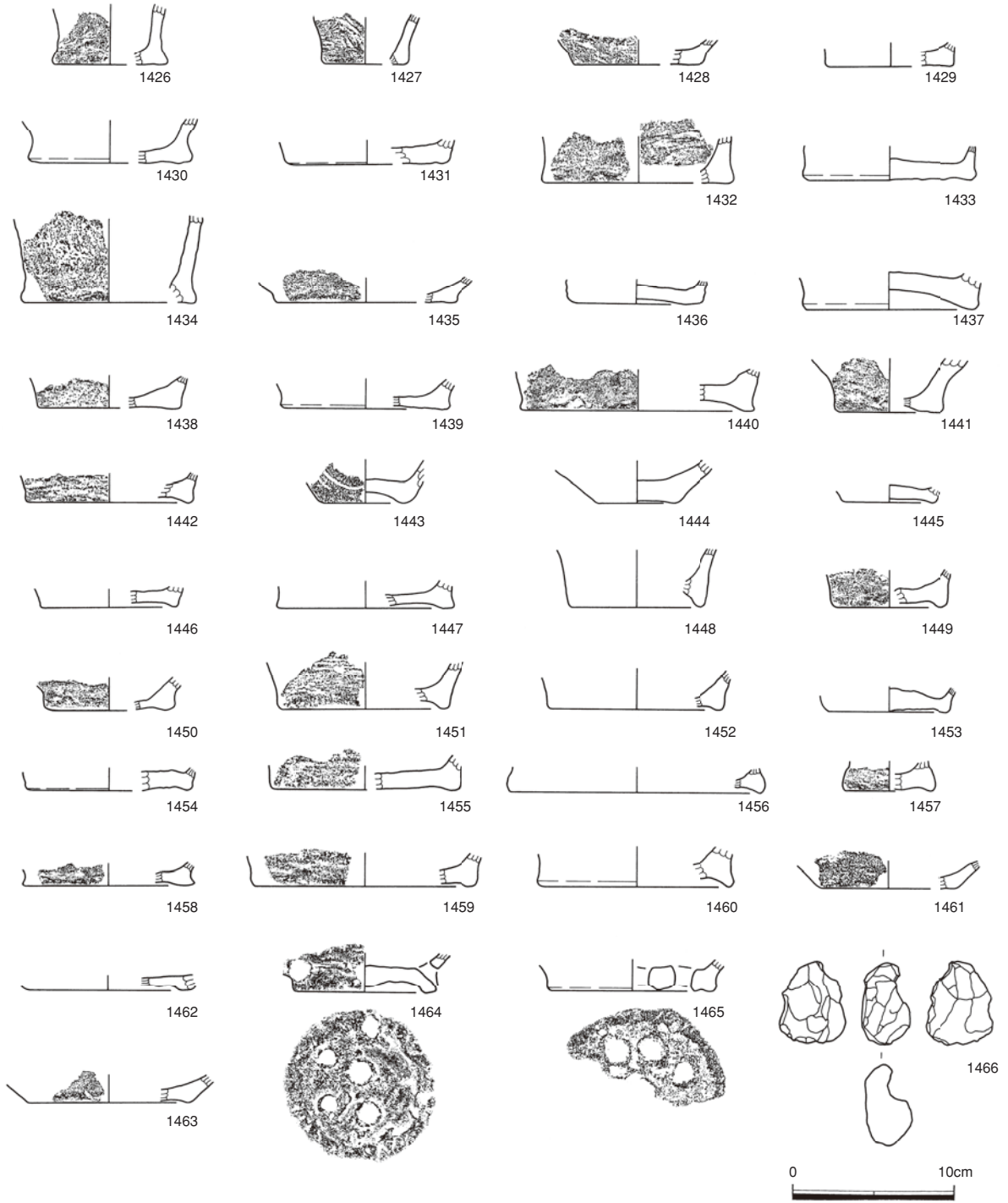
る2群3類に該当し、口縁端部の形態から1424は2群3a類、1418・1424は2群3b類に分類できる。1422は、内側に向かって屈曲する2群1類である。

底部・粘土塊 (第201図：1426～1466)

1434・1443の2点のみ、有文深鉢の底部である。底部の形状から1434は平底A、1443は凹底に分類できる。

1426～1433・1436～1442・1444～1461・1464・1465は無文深鉢の底部である。底部の形状から1426～1432は平底A、1433・1461は平底B、1436～1439・1441・1442・1444は凹底、1445～1460は高台底、1464・1465は多孔底にそれぞれ分類できる。1465は内外面の穿孔部を中心に、白色物および黒色物の付着が認められる。

1435・1462・1463は、無文浅鉢の底部である。底部の形状から、1435は平底A、1462・1463は高台底



第201図 1区 包含層出土縄文土器 (26)

に分類できる。

1466は、焼成された粘土塊である。用途は不明である。

2区（第202・203図）

本調査区から出土した土器は、後期を中心とする土器の出土が認められた。中期に属する土器は、棒状工具を用いた連続刺突文が施される体部片（1467）1点が図化できたのみである。出土点数は少なく、その中で図化できたのは42点で、有文深鉢64点、無文深鉢12点、有文浅鉢2点、無文浅鉢4点、壺1点を数える。

有文深鉢（第202・203図：1467～1470・1472～1494・1496・1498～1514・1516～1520・1523～1537）

1468・1469は中津式、1470は福田KⅡ式、1472～1494・1496は縁帯文成立期の範疇でそれぞれ捉えた一群である。縁帯文成立期の一群のうち1472～1480の口唇部施文から、刻目のみ（1477）、刻目＋沈線（1472～1476・1478）、沈線＋縄文（1479）、沈線のみ（1480）にそれぞれ分類できる。1484～1488は口縁端部を上方に拡張し、口縁部に沈線を施す。1484・1485は沈線で幾何学的な模様を、1486～1488は1ないしは2条の沈線をそれぞれ描く。1489～1494・1496は縁帯文成立期の範疇で捉えた体部片である。1489～1492・1496の外表面は、条痕・ナデ・縄文・沈線文・ミガキが施される。1493・1494の外表面はナデ・沈線のみで、縄文は認められない。

1498・1499は、形式を比定できない深鉢である。1498は沈線文が、1499は棒状工具による刺突文が口唇部と体部に認められる。

1500～1503は縁帯文期の一群で、1500・1501は津雲A式、1503は元住吉山Ⅰ式か。

無文深鉢（第203図：1503～1514）

1群（第203図：1503～1507）

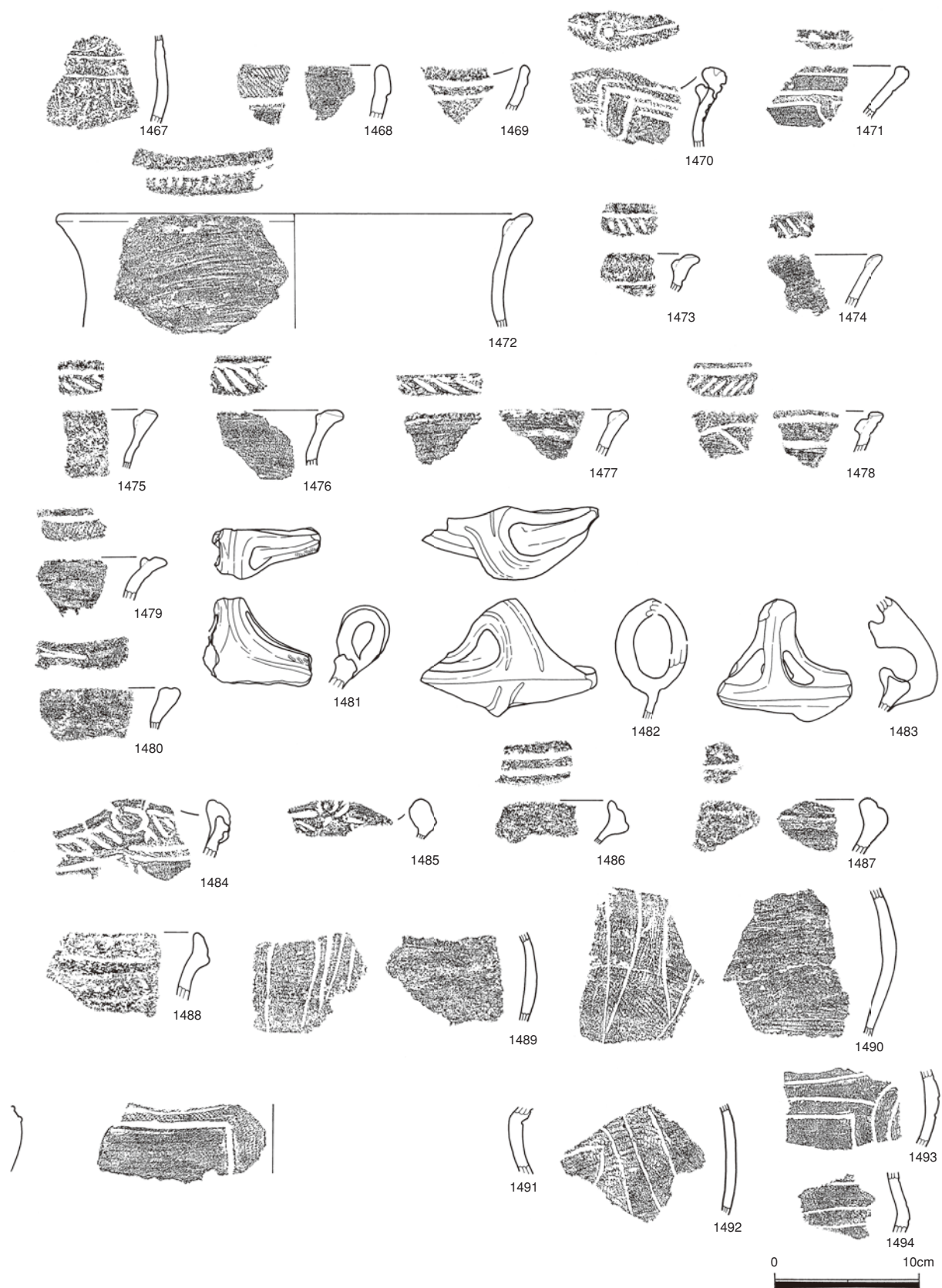
口唇部に施文が認められるものを、1群とした。1503・1504・1506・1507は口唇部に刻目を、1505は縄文を施す。

2群（第203図：1508～1514）

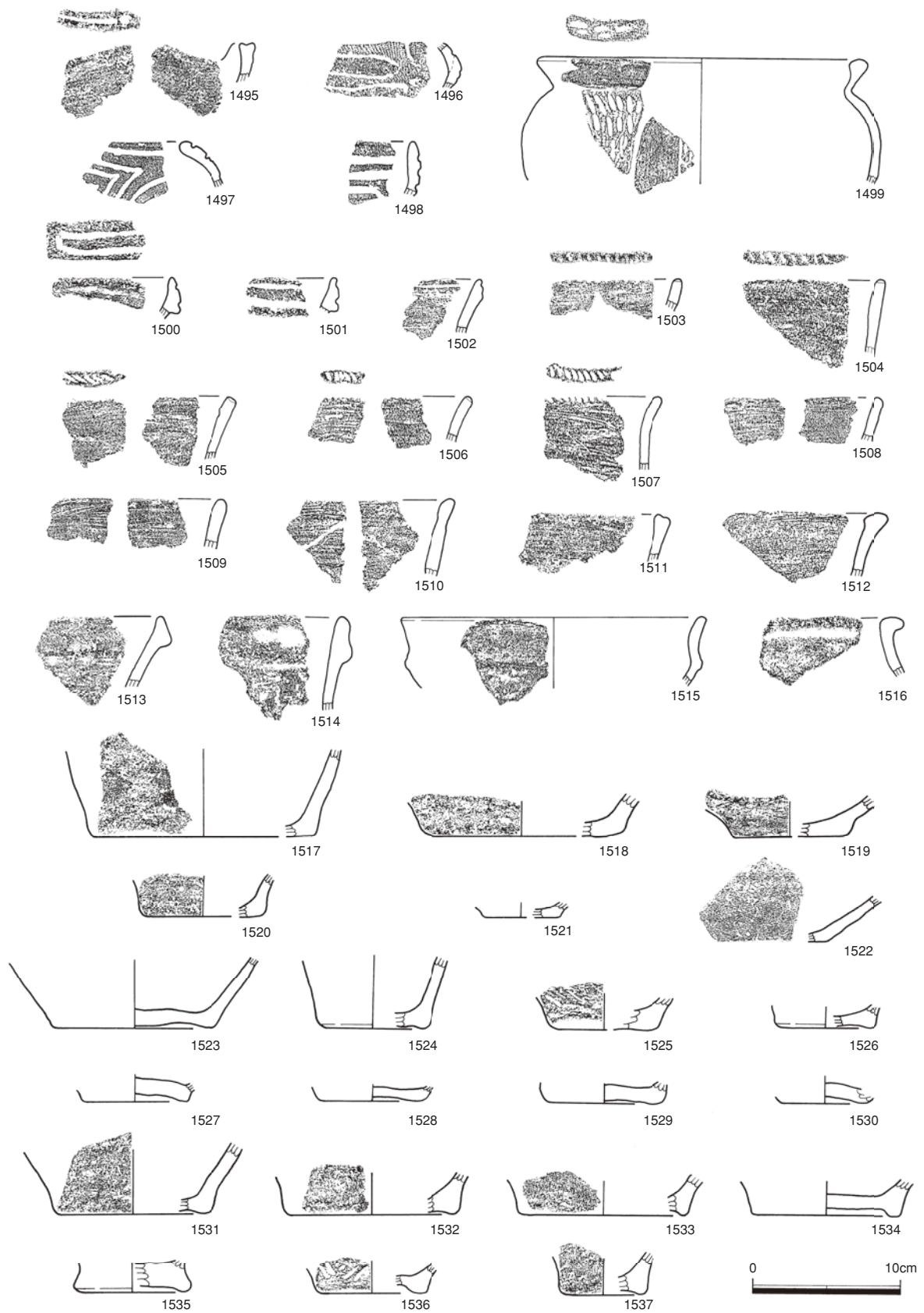
口唇部に施文が認められないものを2群とし、口縁部および口縁端部の形状から大きく5類に分類した。頸部から口縁端部に向かって内彎しながら立ちあがる2群1類に該当するものは、認められなかった。1508～1511は口縁端部に向かって体部が直線的に立ち上がる2群2類に該当し、端部の形状から1508～1510は2群2a類、1511は2群2b類に分類できる。1512は外反しながら端部を肥厚させることから2群3b類に、1513・1514は2群5類にそれぞれ分類できる。

後期の浅鉢（第203図：1471・1495・1497・1515）

1471・1497は有文浅鉢で、1471は福田KⅡ式、1497は集約沈線文系に比定できる。1495・1515の2点は、無文浅鉢である。1495は口唇部に沈線＋刺突文が認められ1群に、1515はその形態から2群5類に分類できる。



第202図 2区 包含層出土縄文土器 (1)



第203図 2区 包含層出土縄文土器 (2)

他の器種（第203図：1516）

1516は、外面ナデ・内面条痕を施す無文の壺である。

底部（第203図：1517～1537）

1525・1536の2点のみ、有文深鉢である。底部の形状から1525は平底B、1536は高台底に分類できる。

1517～1520・1523～1537は無文深鉢の底部である。底部の形状から1517～1520は平底A、1523・1524・156は平底B、1527～1530は凹底、1531～1537は高台底にそれぞれ分類できる。

1521・1522は、無紋浅鉢の底部である。底部の形状から、2点ともに平底Aに分類できる。

3区（第204～255図：1538～3355）

本調査区から出土した土器は、後期を中心とする土器の出土が認められた。中期に属する土器は、半截竹管状工具を用いて連続刺突文や竹管文を施した体部片（1541～1543）3点が図化できた。土器の出土量は5・4・5区に次いで多く、その中で図化できたのは、有文深鉢523点・浅鉢126点、無文深鉢727点・浅鉢107点、別器種8点、底部326点、計1,817点を数える。第二包含層出土分を併せると、1,879点を数える。

有文深鉢（第204～222・227～229図：1538～1997・2125～2189）

有文深鉢のうち、中期に属する土器は3点（1541～1543）である。3点共に半截竹管状工具を用いた刺突文を施し、中期船元式に比定できる。

中津式の範疇で捉えた一群（第204図：1538・1539・1546～1558）

中津式の範疇で捉えたのは13点で、山形・波状口縁は6点、平縁口縁は7点となる。そのうちの4点（1538・1539・1556・1558）は、中津式としたものの形式不明瞭なものである。小片のために文様構成の不明なものが大半を占めるが、1546は渦巻き文と考えられる。1547は縄文帯が認められず、沈線のみで文様が描かれる。また1554・1555は、浅鉢体部片の可能性もある。

福田KⅡ式～縁帯文成立期系の一群（第204・205図：1559～1594）

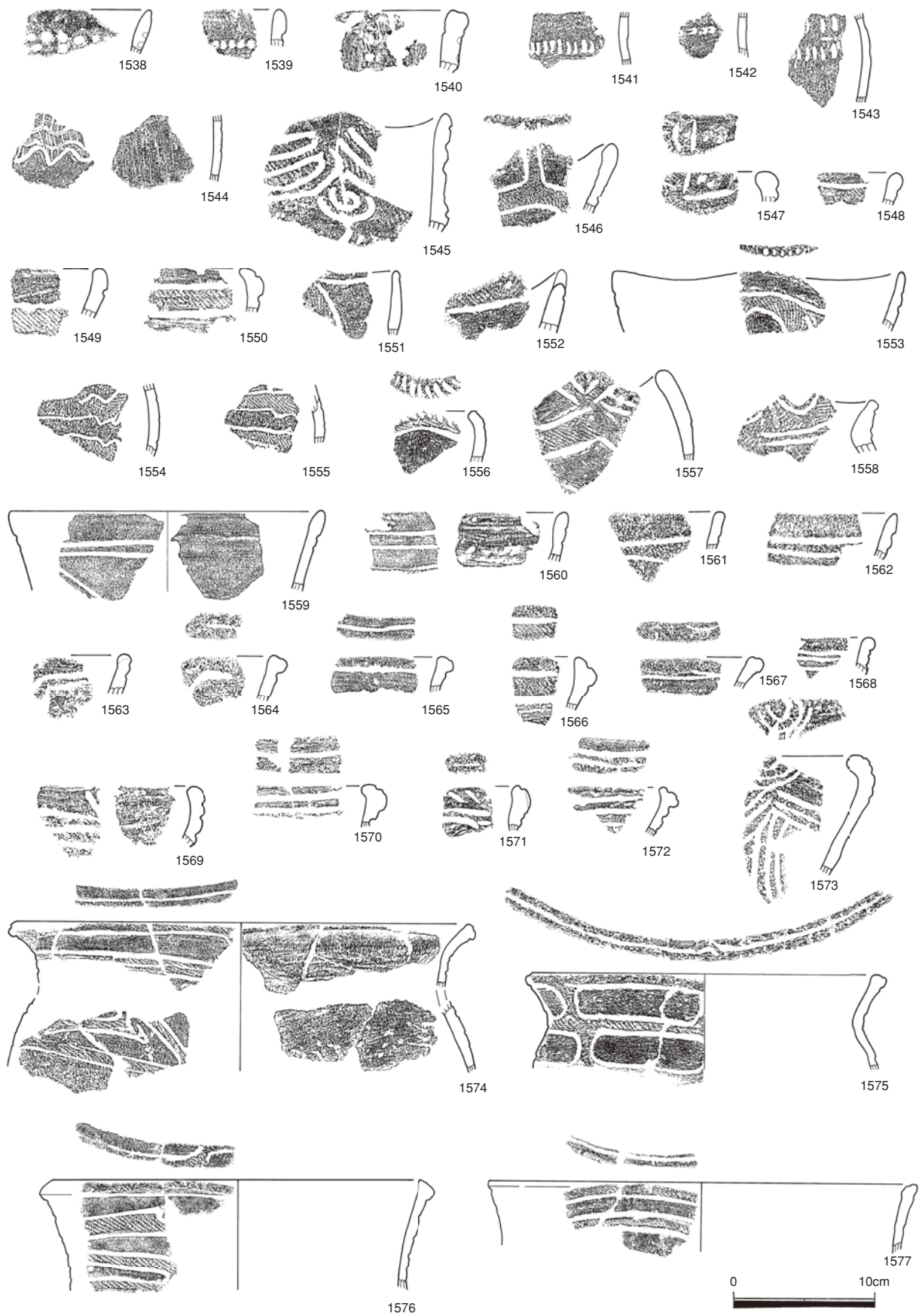
小片が多いものの、3条沈線を施し福田KⅡ式と考えられるのは、1568・1569・1573・1587・1590の5点である。1580は縁帯文系と考えられ、それ以外は縁帯文成立期系と思われる。福田KⅡ式の範疇で捉えた5点のうち、縄文帯が認められず沈線のみで文様を描くのは、1568・1569・1587の3点である。1574～1577・1586は、その文様構成から宿毛あるいは松ノ木式と考えられる。

沈線文系の一群（第205図：1595～1597）

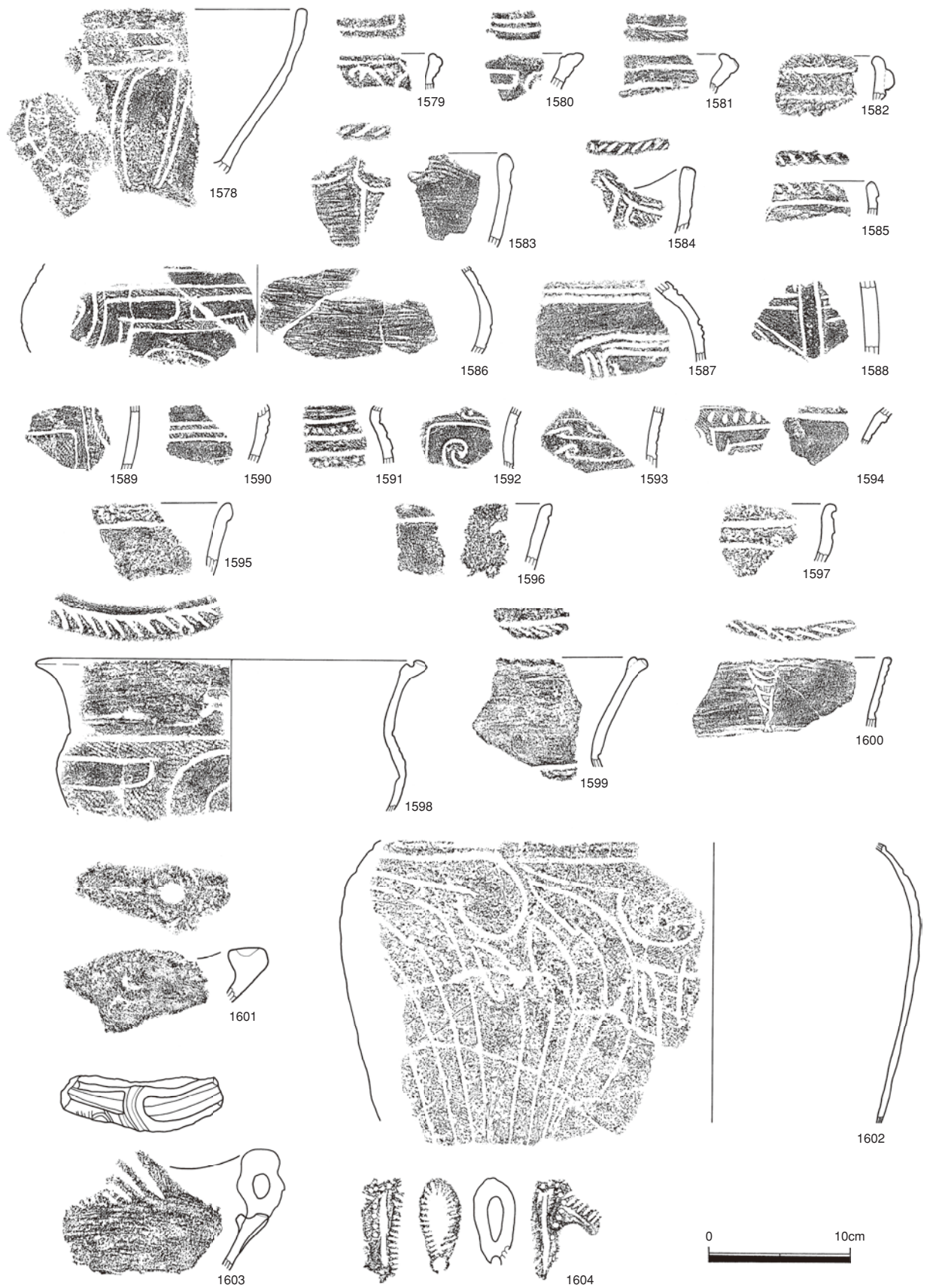
1595～1597は、沈線文系として捉えた。1597は外面に2条の沈線が、それ以外の2点は1条の沈線が施される。

縁帯文成立期の一群（第205～221図：1582・1598～1604・1606～1974）

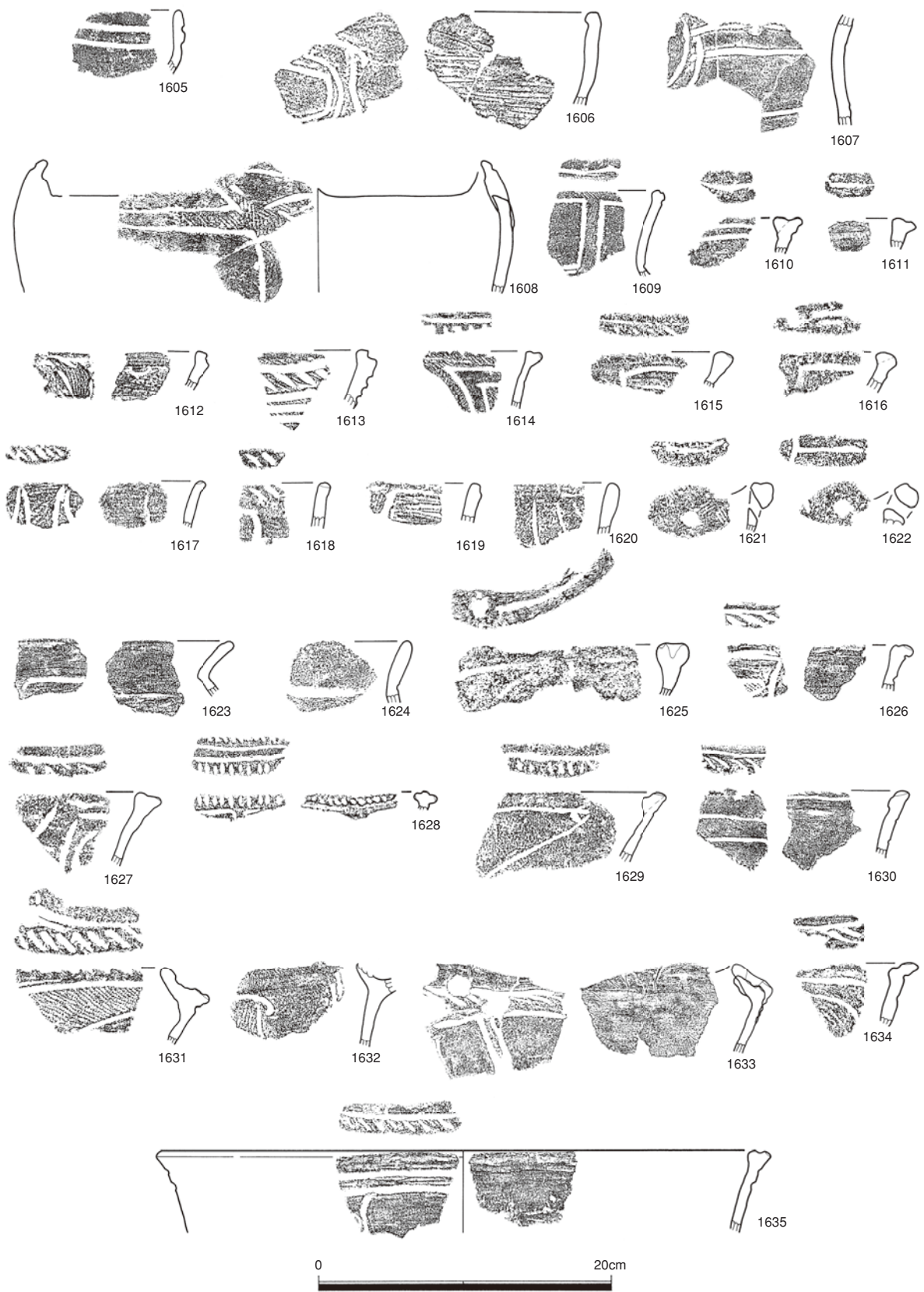
縁帯文成立期として捉えたのは377点で、口唇部に施す施文として沈線＋刻目が基本となる。1688・



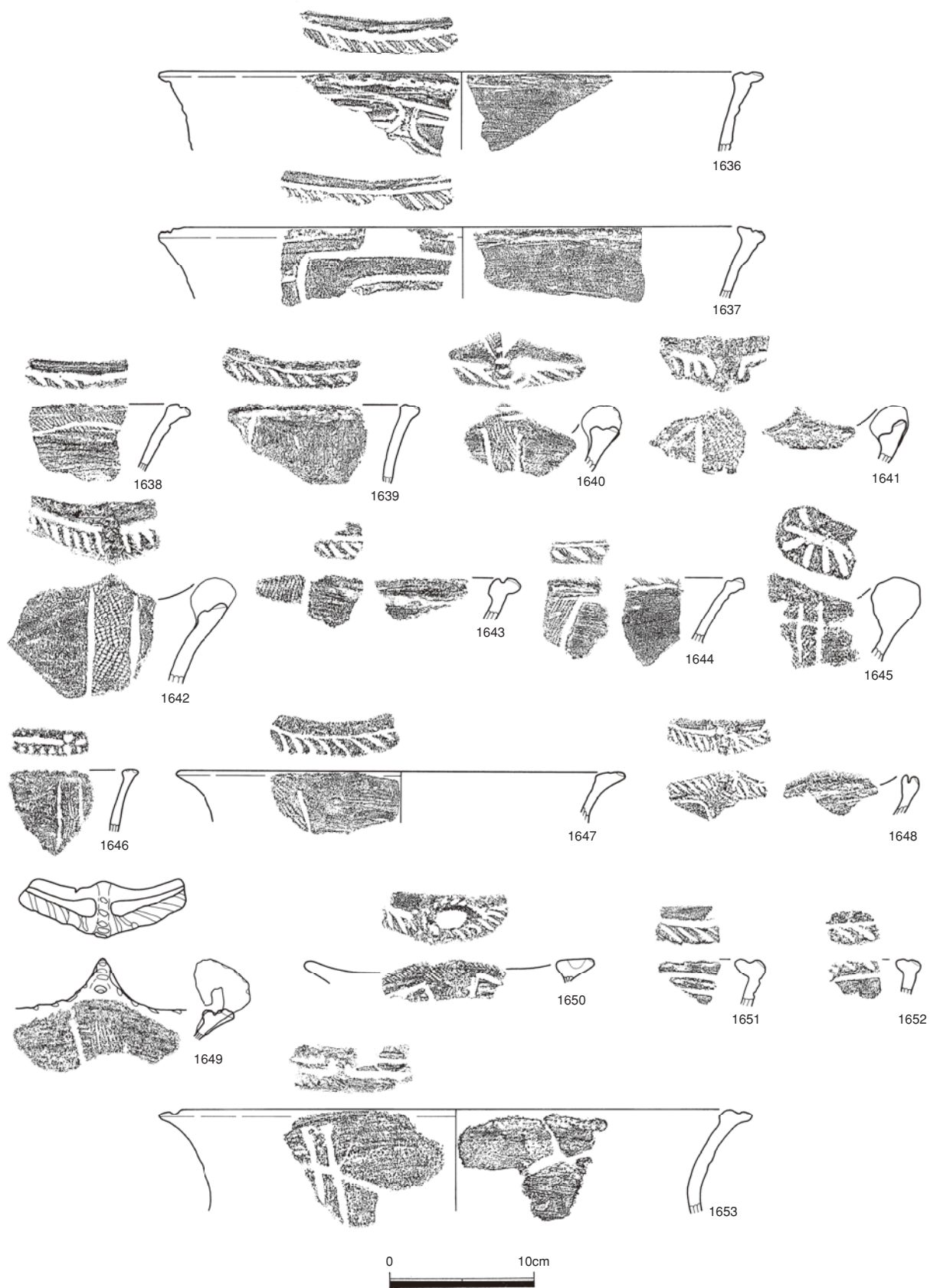
第204図 3区 包含層出土縄文土器 (1)



第205図 3区 包含層出土縄文土器 (2)



第206図 3区 包含層出土縄文土器 (3)



第207图 3区 包含層出土縄文土器 (4)



第208図 3区 包含層出土縄文土器 (5)

1700・1701・1708・1724・1820・1822～1824の9点は、口唇部に刻目のみを施す一群である。刻目は1822～1824の3点以外は、すべて斜行である。また1823・1824は、縄文を施した後に刻目を施す。1816～1819は、斜行以外の刻目を持つ一群である。1816～1818・1821は直行刻目+沈線、1819はV字形を呈する刻目+沈線をもつ。口唇部に施す施文として沈線+刻目が基本だが、その施文方法および口縁部の形態からさらに細分可能である。

1606～1637の32点は、器形は縁帯文成立期に属するものの文様構成に前段階の特徴が認められ、頸部に文様帯が施される一群である。文様は沈線+縄文帯、もしくは沈線のみで描かれる。口唇部の施文として、沈線のみ（1609～1611・1621・1622）、沈線+刻目（1614・1615・1626～1631・1634～1637）、沈線+刺突文（1616・1625）、刻目のみ（1617・1618）などが施される。

1600・1638～1678の42点は、頸部にいわゆる梯子状の文様が施される一群である。梯子状といっても、縦方向に沈線2条のみ施す簡単なものから、沈線2条の間に横方向に何条かの沈線を施し、梯子状に見えるもの、あるいは沈線2条の間に充填縄文・縦方向の沈線を施すものなど、様々な文様構成が存在すると思われる。また、これらの口縁部端面に施された文様は沈線+刻目が主体であり、それ以外は刻目+沈線文+刺突文（1640・1642・1646・1649・1650・1671・1672）、沈線+縄文のみ（1653）、沈線のみ（1677）、刻目のみ（1600・1669・1674・1676）となる。また1638・1639・1644・1650・1653・1658・1659・1662・1673・1675の10点には、沈線+刻目を巡らす前に縄文を施す。

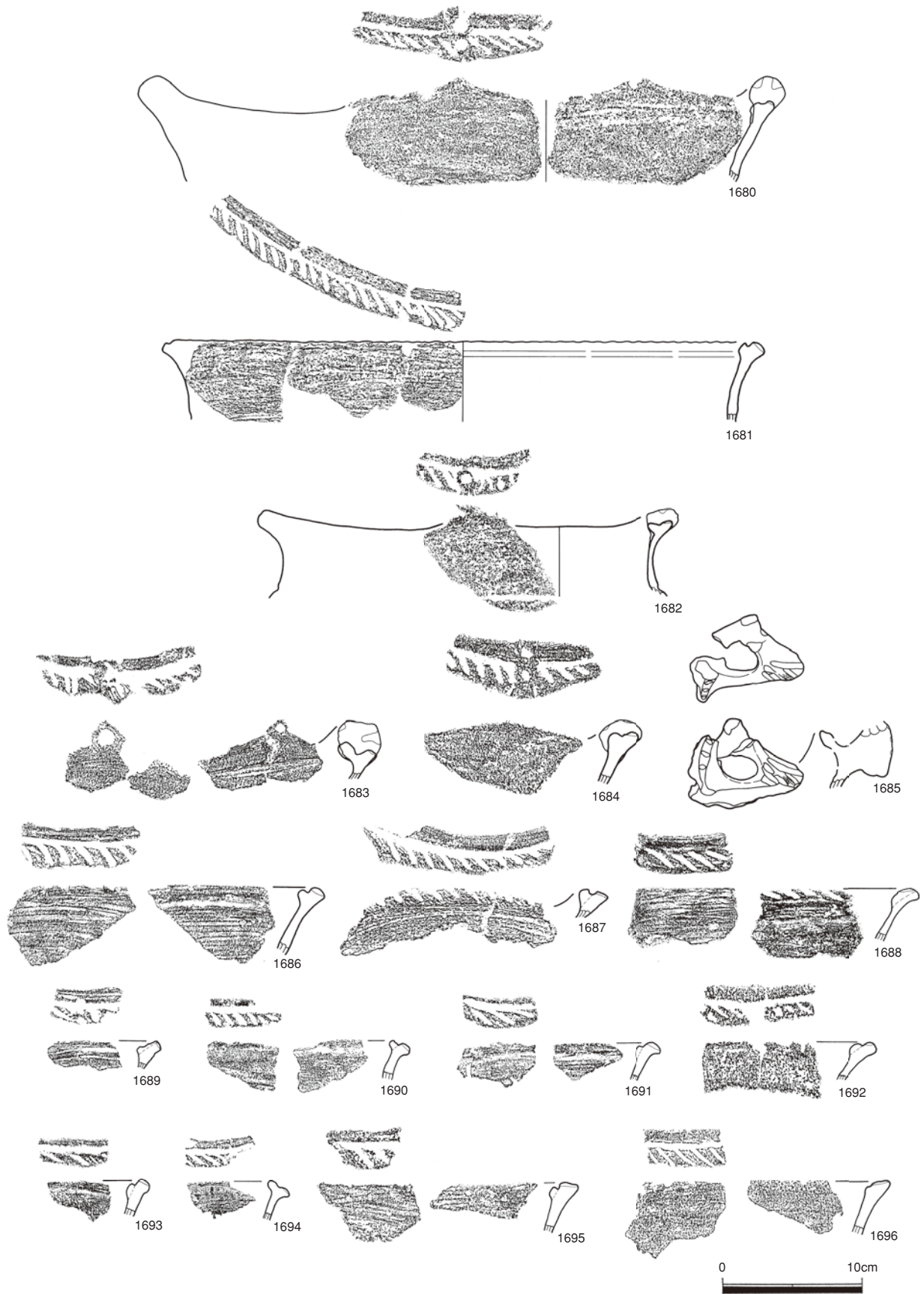
1679～1703は、沈線文+刻目を巡らす前に口唇部に縄文を施す。また、沈線+刻目以外に刺突文を施すものも認められる。

1704～1757は沈線+刻目を施す一群で、口縁端部の形態からさらに分類できる。1704～1738は口唇部が幅広となるものの口縁端部の肥厚がやや弱い一群、1739～1757はさらに口縁端部が肥厚する一群、1758～1764・1766～1792・1795・1797～1800は口縁端部が肥厚し、内傾する一群、1796・1801～1815は口縁部が外反し、端部を肥厚させて収める一群、の計4群に細分できる。また1815は、刻目を持たない。1825～1834は、口唇部に沈線と縄文を施す一群である。

1836～1872は、口唇部に施す施文が凹線主体の一群である。凹線以外の施文方法で大きく2分類でき、1836～1849は凹線+刻目、1850～1872は凹線のみとなる。刻目を施す14点のうち、1848・1849のみ刻目が直行する。また刻目以外に、刺突文・沈線文を施す個体もある。この一群に掲載しているが、1839・1840・1851・1854・1856の5点は、頸部にいわゆる梯子状の文様が施される。

1873～1934は、口唇部に施す施文が沈線主体の一群である。施文には、一条沈線の一群（1873～1897）・多条沈線の一群（1898～1919・1924）・沈線間に縄文を施す一群（1920～1923・1925～1932・1934）・沈線2条とその外側に縄文を施す一群（1933）がある。沈線以外にも刺突文・沈線による円文が施される。また多条沈線の一群は、2条沈線が主体である。なかには沈線を3条巡らすもの（1920）や、2条沈線をとぎれとぎれに巡らすもの（1901・1906・1907）がある。図化できたものは小片が多く、1910・1911・1922のように杵状区画文を施すものも含まれていると思われる。1885・1889・1902は、沈線+刻目の一群に含まれる。

1935～1974は縁帯文成立期（松ノ木式）の体部片としたが、1955・1964の2点は福田KⅡ式と思われる。遺存状態に差はあるものの、体部は沈線+縄文（1935～1948・1950・1952・1954・1959・1961）、沈線のみ（1949・1951・1953・1956～1958・1960・1962～1974）に分類できる。



第209図 3区 包含層出土縄文土器 (6)



第210図 3区 包含層出土縄文土器 (7)



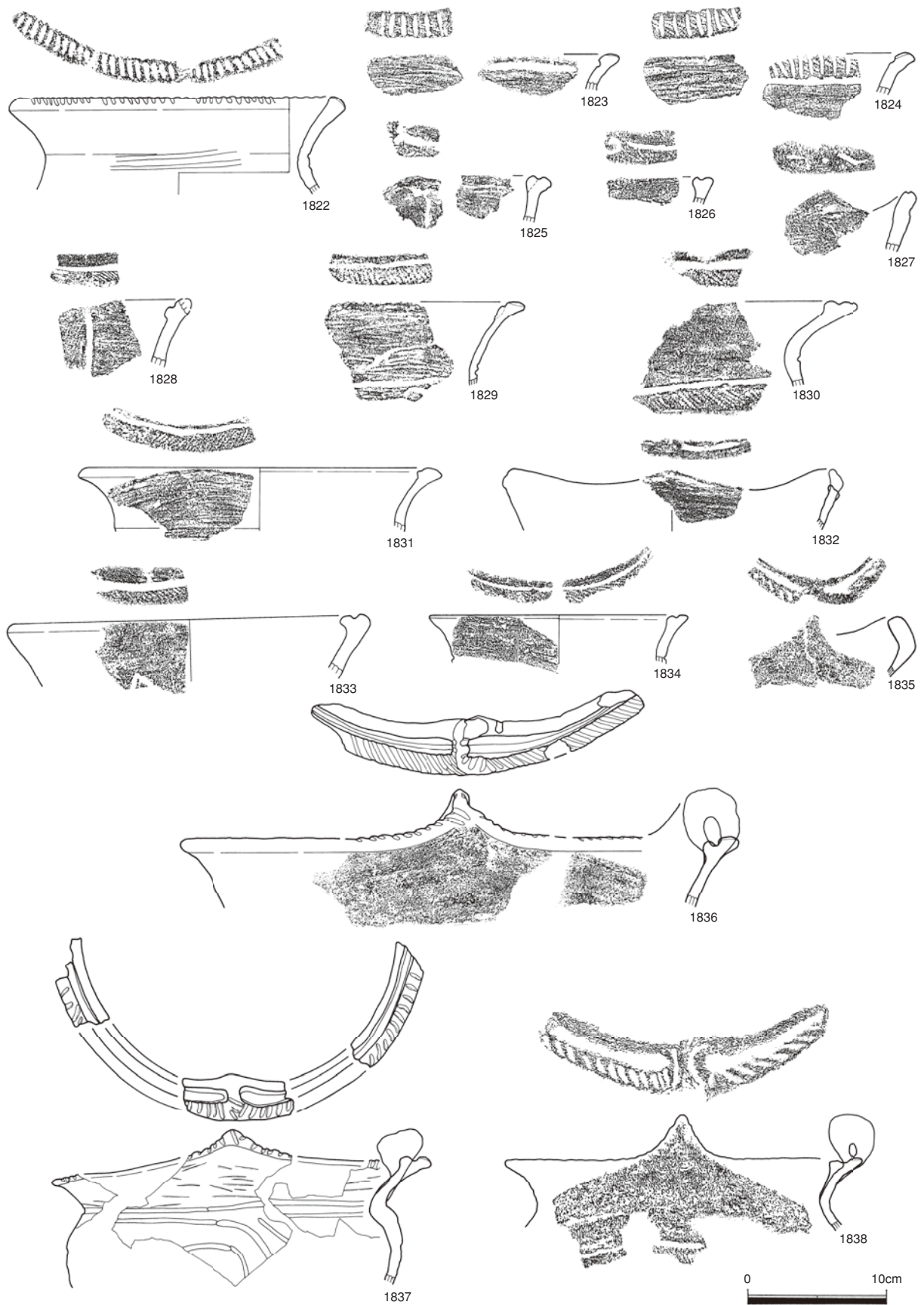
第211図 3区 包含層出土縄文土器 (8)



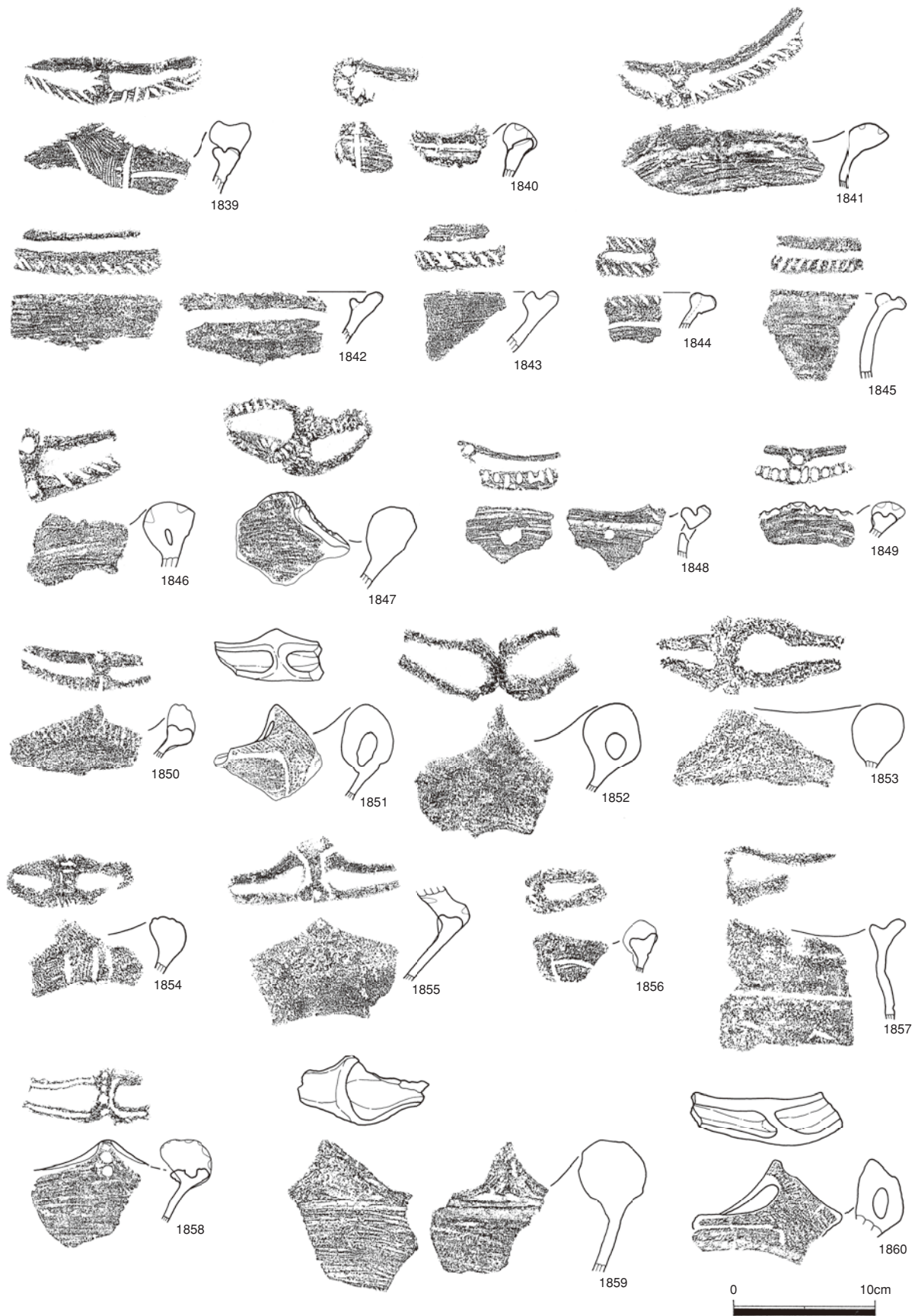
第212図 3区 包含層出土縄文土器 (9)



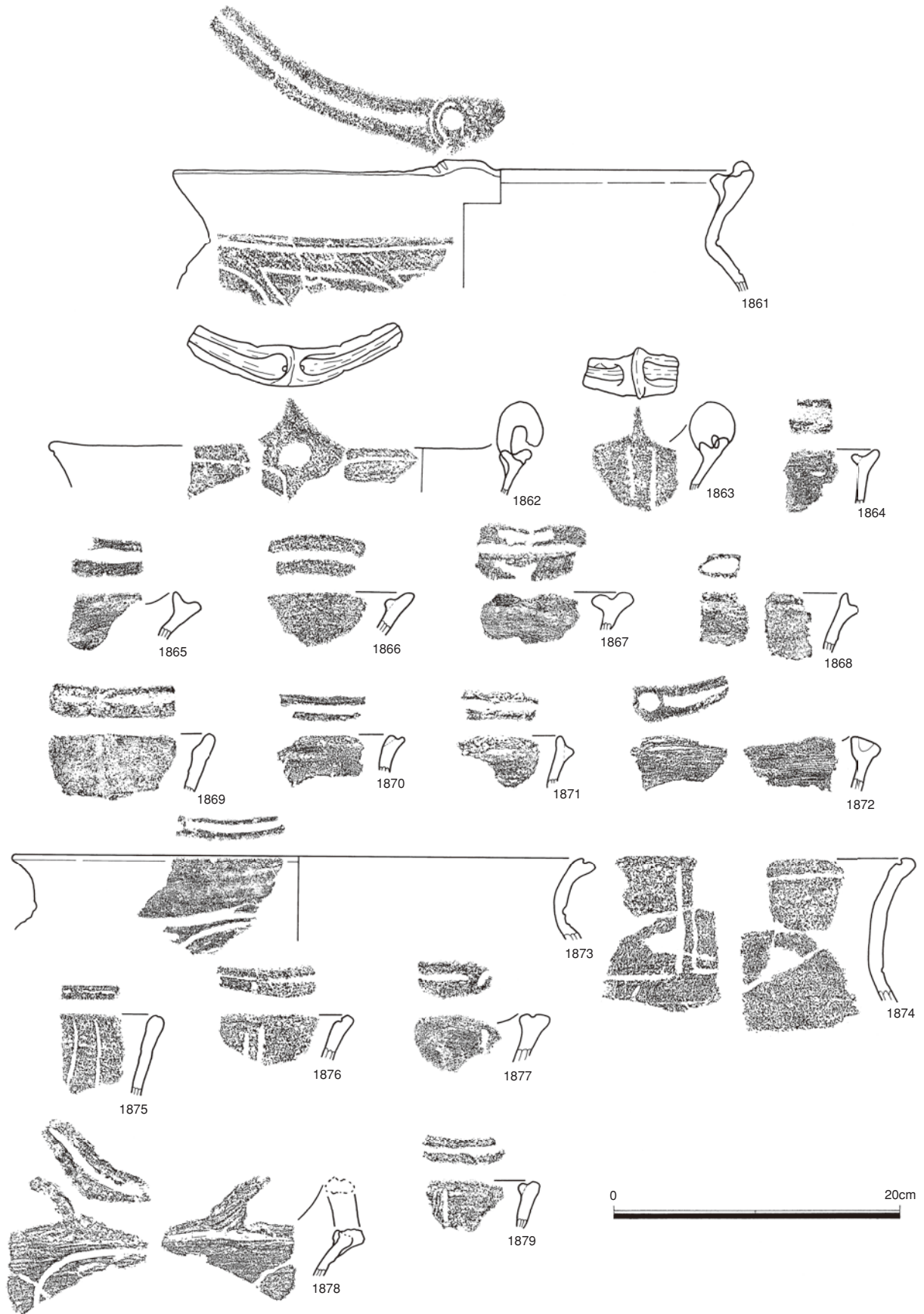
第213図 3区 包含層出土縄文土器 (10)



第214図 3区 包含層出土縄文土器 (11)



第215図 3区 包含層出土縄文土器 (12)



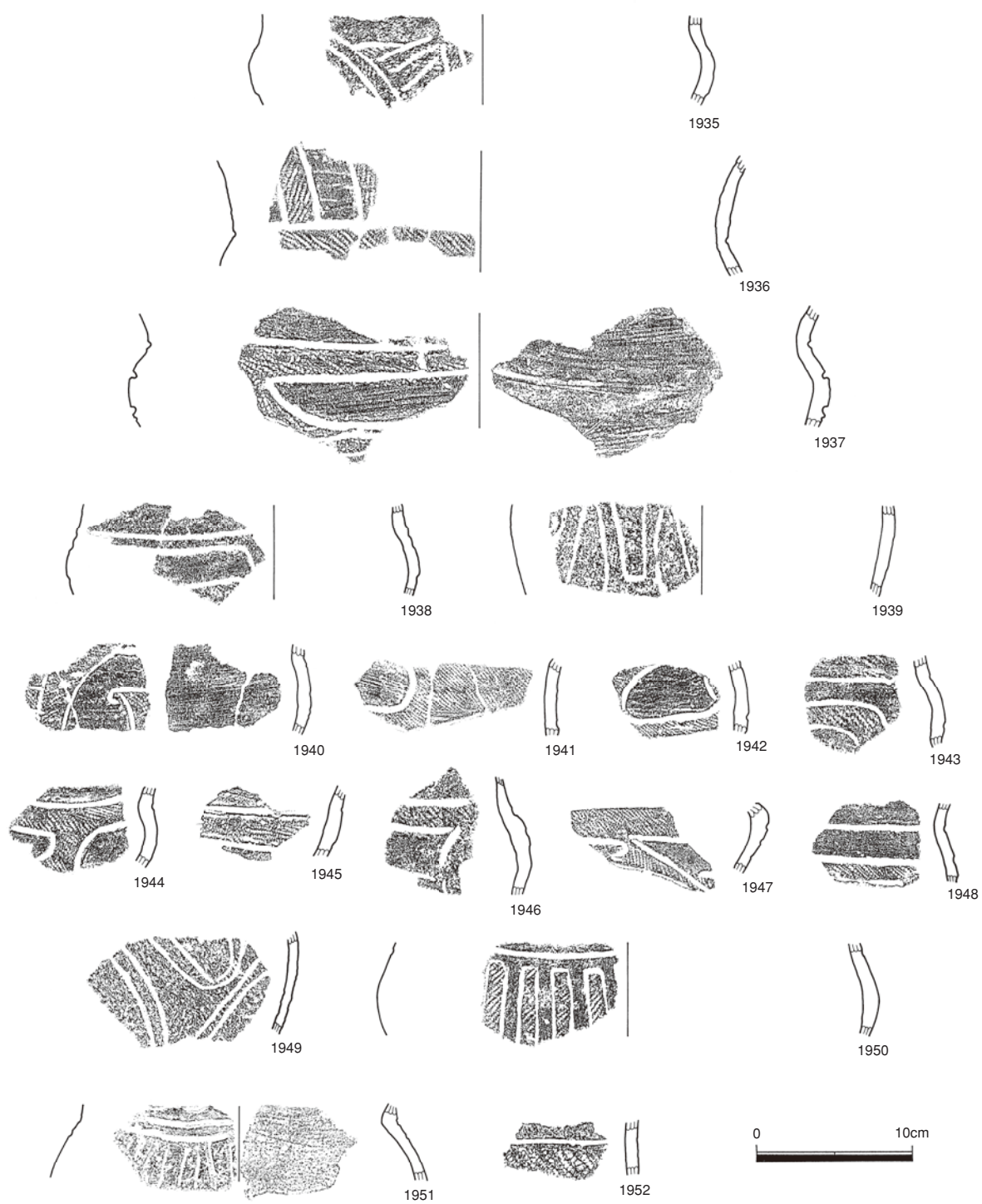
第216図 3区 包含層出土縄文土器 (13)



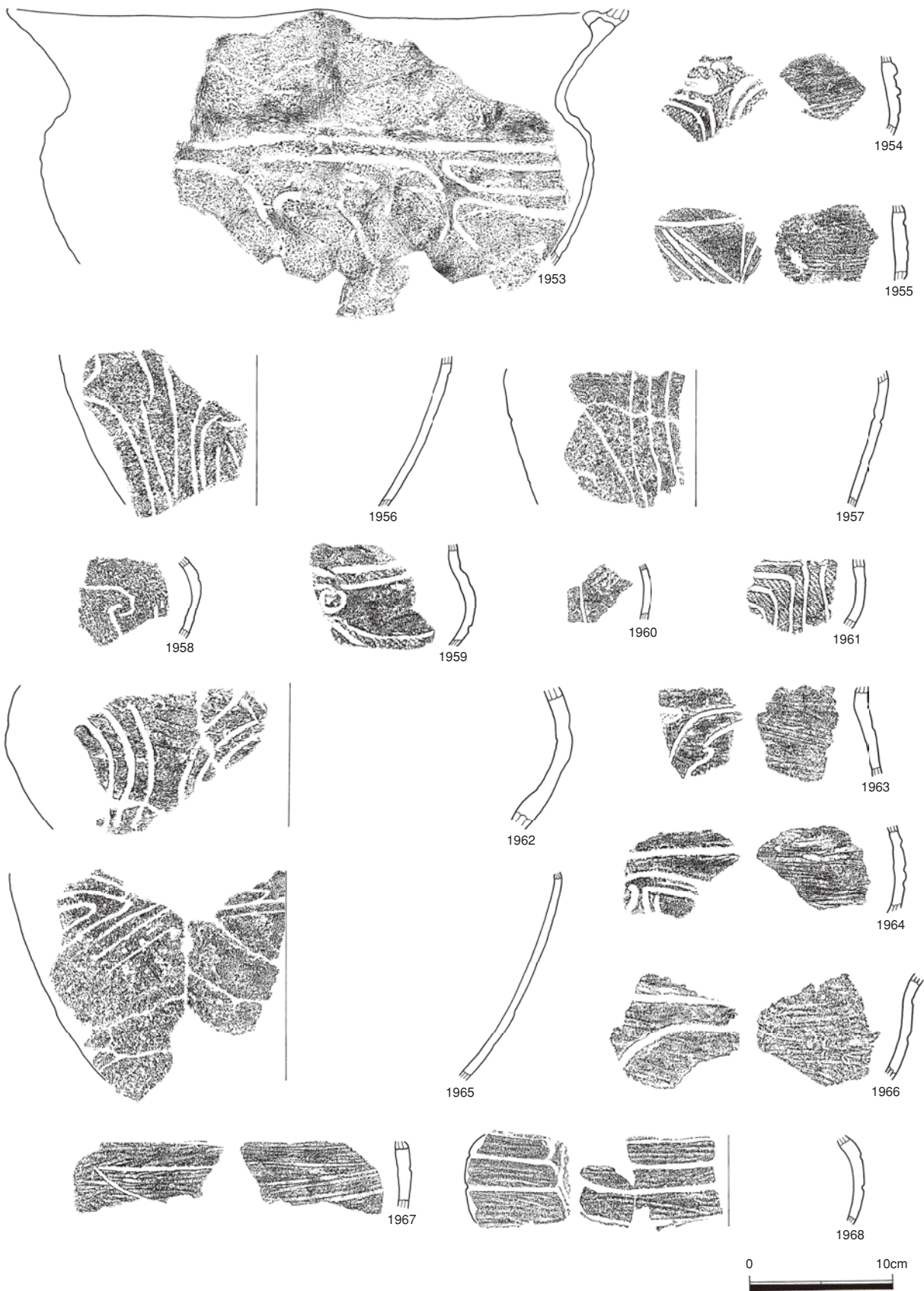
第217図 3区 包含層出土縄文土器 (14)



第218図 3区 包含層出土縄文土器 (15)



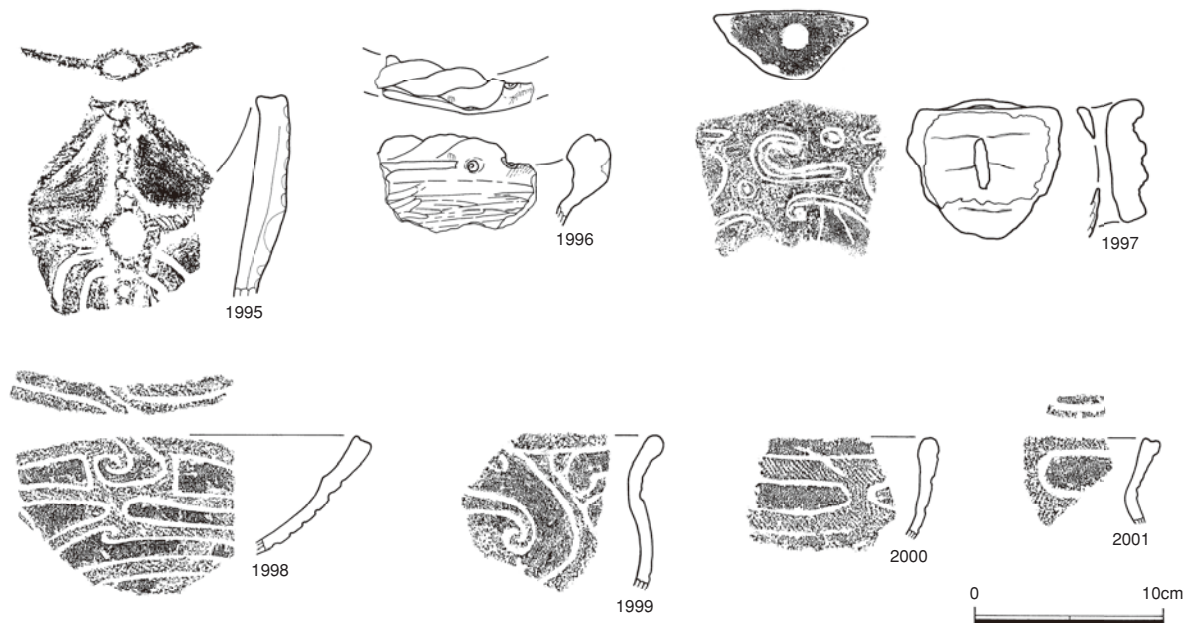
第219図 3区 包含層出土縄文土器 (16)



第220図 3区 包含層出土縄文土器 (17)



第221図 3区 包含層出土縄文土器 (18)



第222図 3区 包含層出土縄文土器 (19)

縁帯文系の一群 (第227～229図：2125～2178)

縁帯文系の一群として図化できたのは、74点を数える。口縁部の主文様として、刺突文や沈線で描かれた円文や渦巻き文に沈線2条を巡らせて縄文を施す、あるいは杵状区画文を巡らせて縄文を施すものが認められる。頸部は無文で条痕やナデが多く認められるが、そのうえに細密条痕や沈線を施すものもある。

口縁部の形態から、口縁端部を肥厚させ断面三角形を呈する一群 (2126・2127・2129・2137～2141・2145・2150・2153・2155・2158・2166)、さらに上方あるいは上下方向に拡張する一群 (2131～2135・2154)、肥厚があまり認められず、端部を方形あるいは丸く収める一群 (2125・2128・2130・2136・2142～2144・2146～2149・2151・2152・2156・2157)、口唇部がやや水平方向に拡張する一群 (2164・2167～2169)、口縁端部を拡張して内傾する一群 (2165・2170～2178) に細分可能である。また少数ながらも、口縁部が内面側に屈曲し、くの字形を呈するもの (2159・2163) もある。

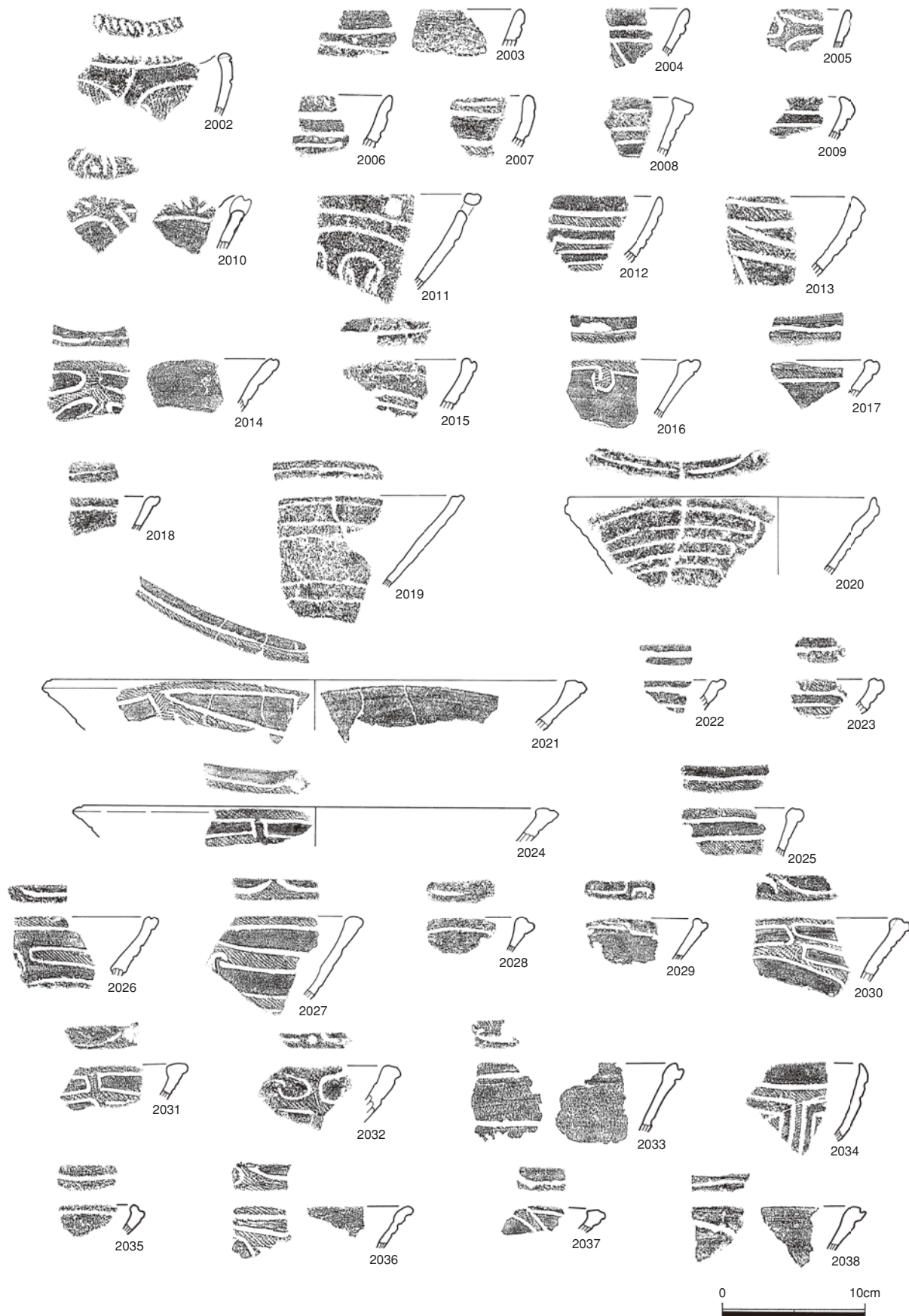
口唇部に施される施文のうち、沈線間に縄文を施すものが大半を占めるが、沈線のみ (2146・2147・2149・2153・2156～2158・2165・2170・2172・2175・2176・2178)、また沈線の外側に縄文 (2136・2152・2154・2166) を施す個体がある。また口縁部全面に縄文を施し、沈線を巡らせるものもある (2139・2144)。また沈線は2条が主流であり、2157・2170・2176は多条、2147は1条を施す。

素縄文系の一群 (第229図：2179～2183)

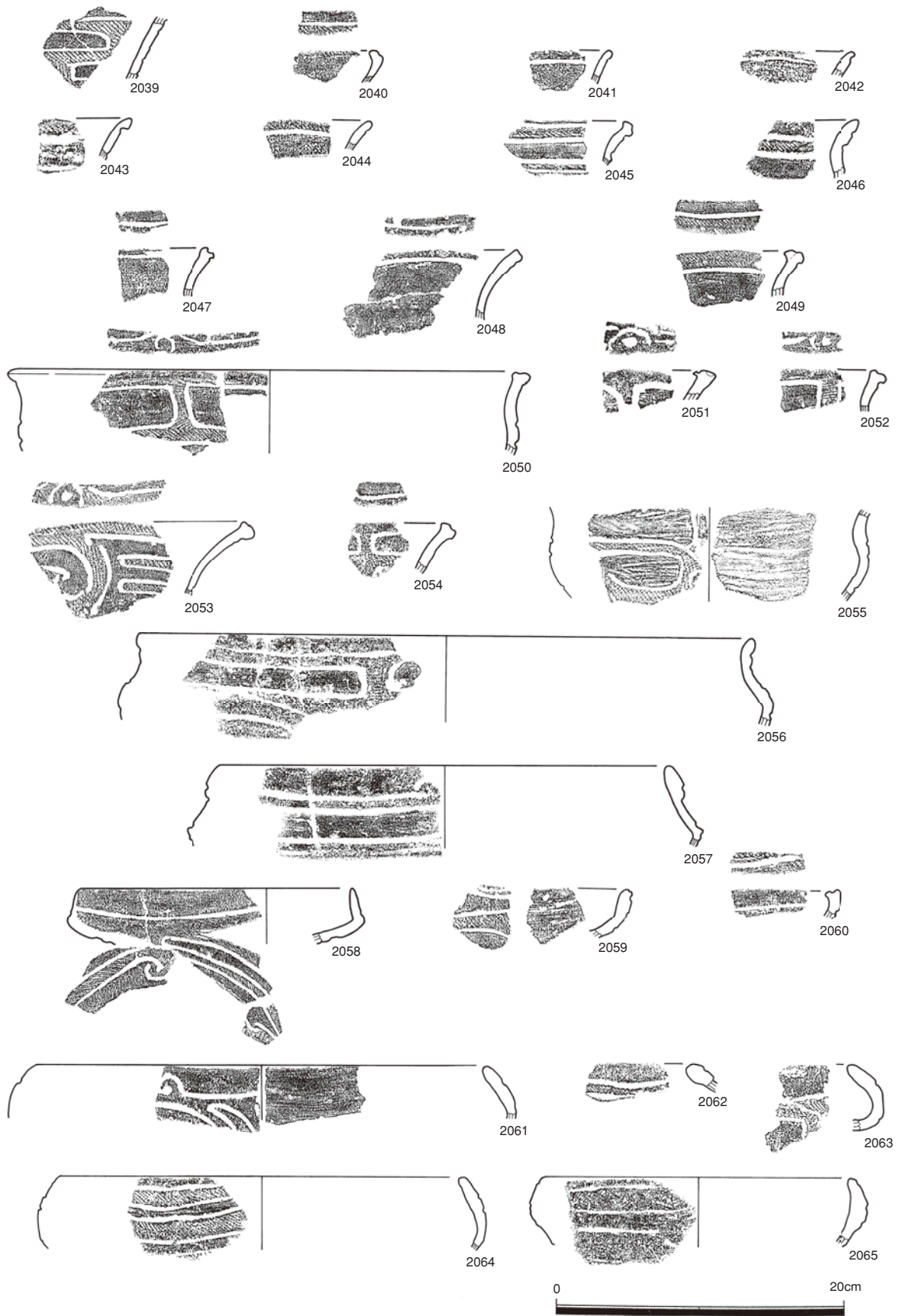
口縁部は縄文、頸部はナデ・条痕を施す一群で、図化できたのは5点を数える。2182・2183は、口縁部と頸部の境に沈線を施す。口縁端部の形状に、外面側に肥厚させて断面三角形に収めるもの (2179・2181)、肥厚させて丸く収めるもの (2180・2182・2183) がある。

その他の一群 (第221・222・229図：1975～2001・2184～2189)

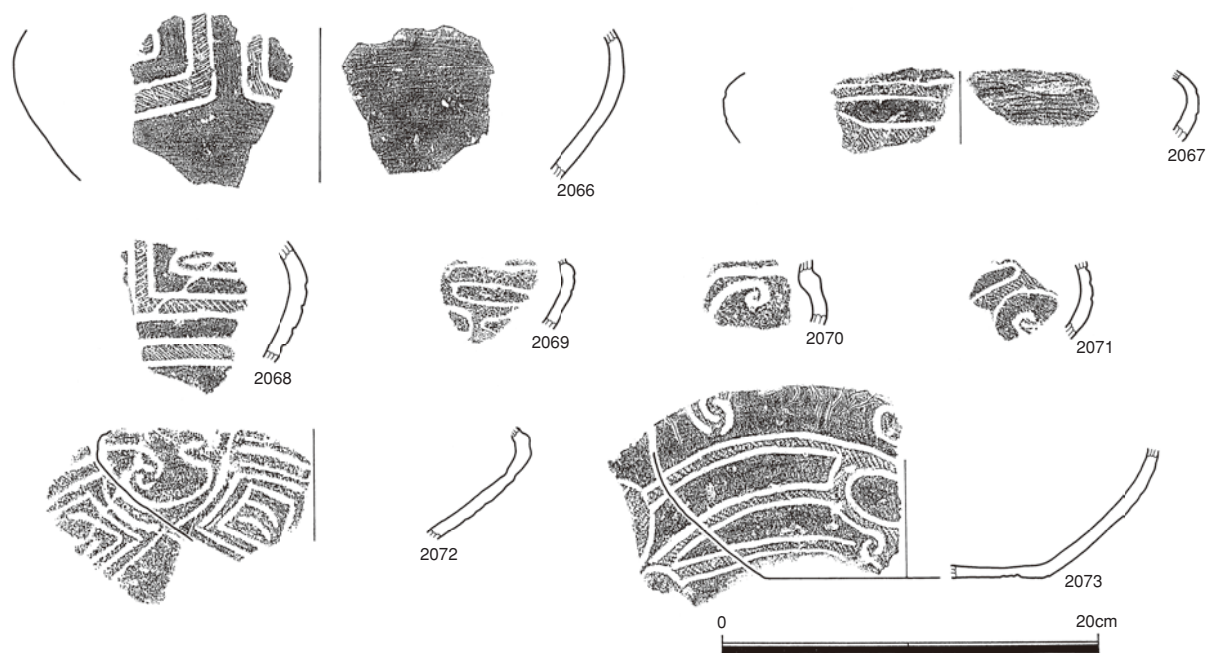
1975～1979は縁帯文系に属し、1980は中津式か。1981・1982・2184は沈線文系で、1982は口唇部に縄文を施す。1984は、刻目隆帯文系である。1985～1990は多条の沈線が施された体部片、1992～1994は素縄文



第223図 3区 包含層出土縄文土器 (20)



第224図 3区 包含層出土縄文土器 (21)



第225図 3区 包含層出土縄文土器 (22)

系の体部片である。1995～1997は、形式不明の一群である。1995は器形が砲弾形を呈すると考えられ、波頂部に隆帯を十字に貼り付け、縦方向の隆帯には刺突文を施す。1997は外面に刺突文・沈線による円文および渦巻文を施し、縦方向の穿孔が認められる。1998～2001は、福田KⅡ式（宿毛式）の範疇で捉えられる浅鉢である。2185～2189は、形式不明な一群である。

有文浅鉢（第223～229図：2002～2124）

有文浅鉢は、127点図化できた。小片も多く、明確に形式区分ができないため大きく分類を行った。

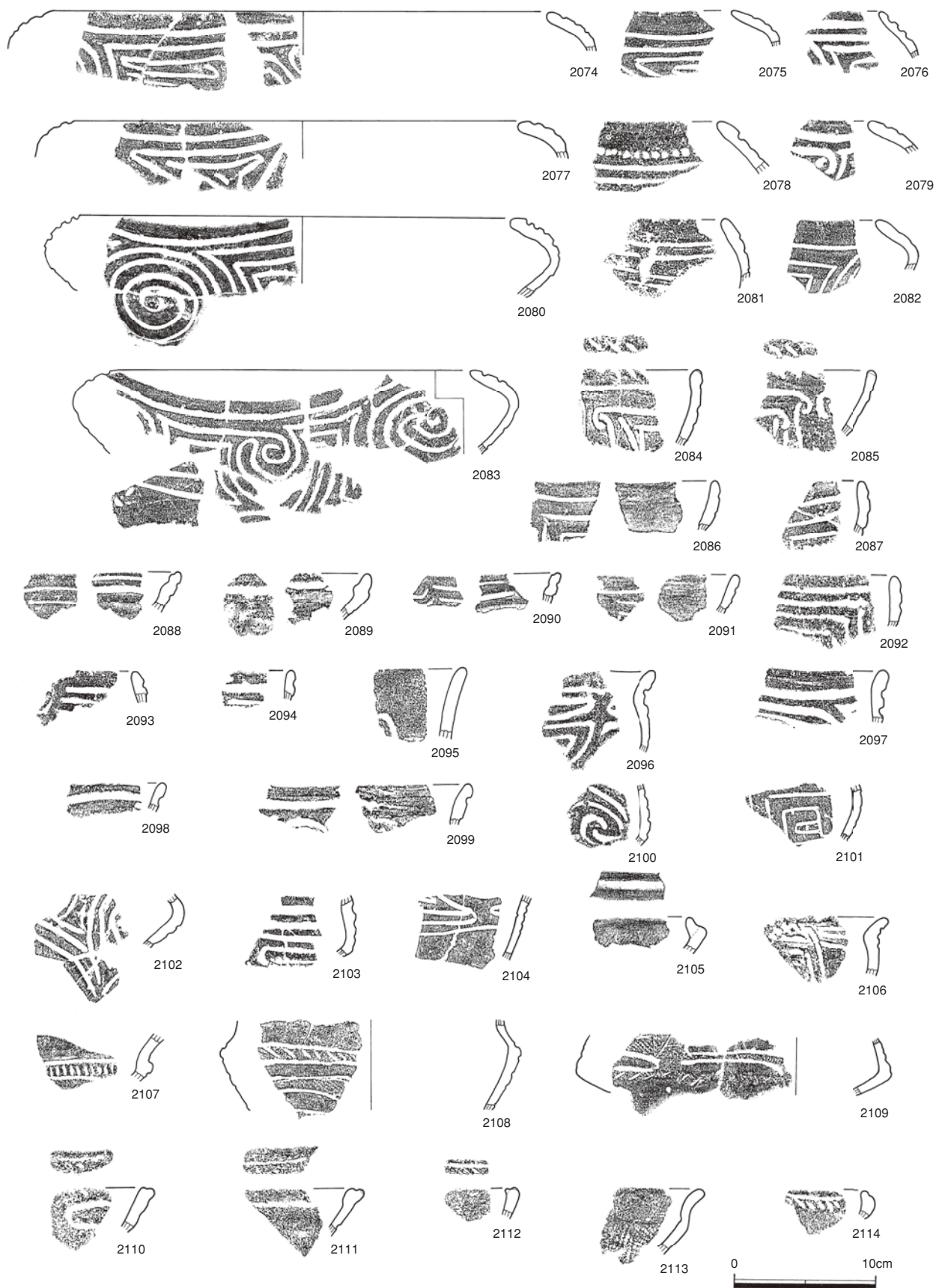
福田KⅡ式～縁帯文成立期の範疇で捉えた一群（第223～225図：2002～2071・2073）

図化できたのは、口縁部62点・体部9点・底部1点の計72点を数える。2002のみ口唇部に刻目を持ち、波状口縁である。主体となる施文は、円文・入組文・杵状区画文・横位の帯縄文である。口縁部から体部にかけての形状から、体部が外上方へ直線的に立ち上がる一群、体部が緩やかに内彎しながら立ち上がりボール形を呈する一群、体部上位で内彎する（体部の張りがやや強い）一群の3つに細分した。また小片により、判断できないものもある。

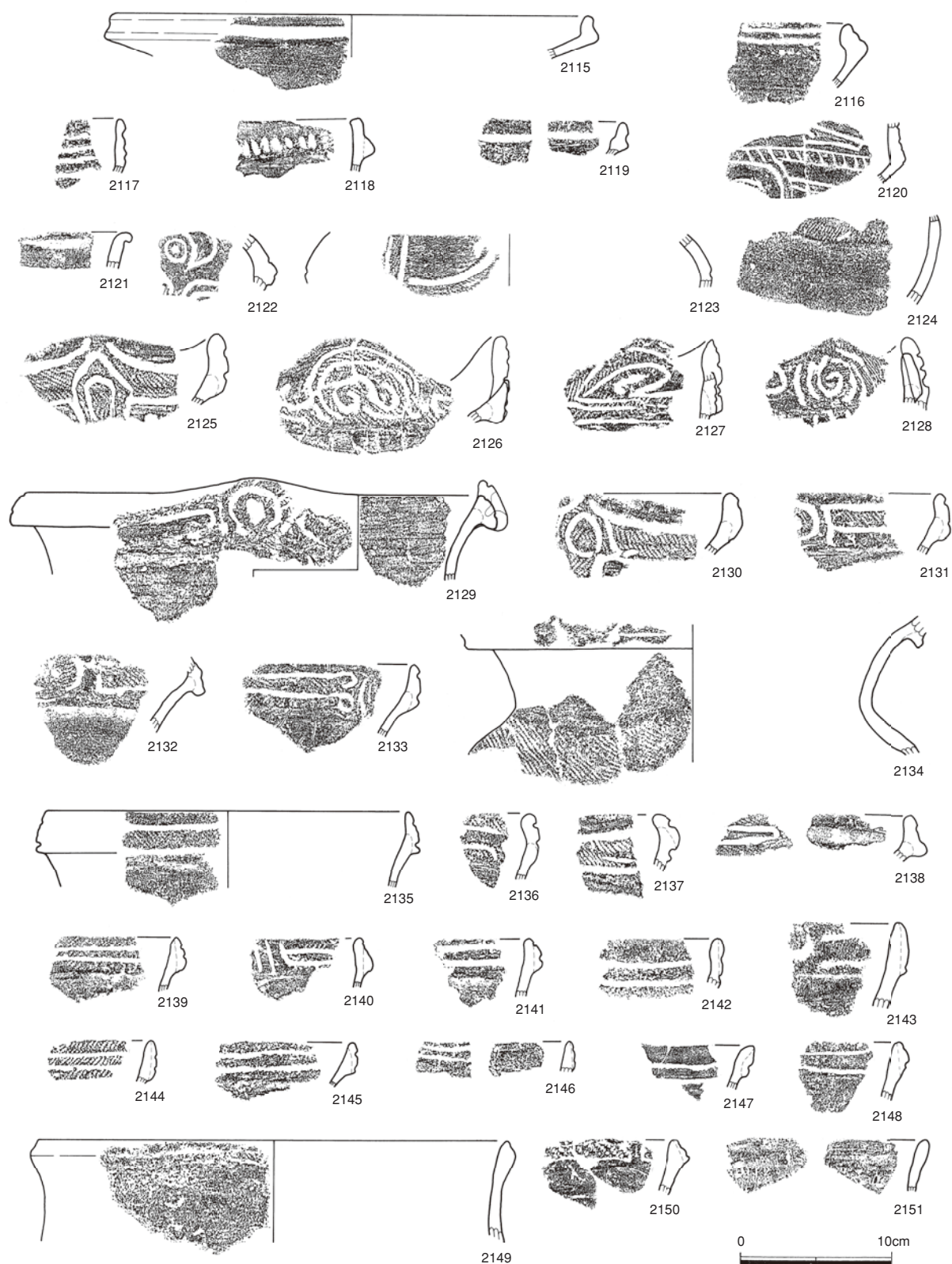
体部が外上方へ直線的に立ち上がる一群（2003～2006・2008～2010・2014・2016～2033・2035～2045・2051・2053・2054）では、体部の傾きによって皿状を呈するものもある。口縁端部の形状には、そのまま丸く収めるもの、端部で内彎するもの、肥厚させるものと様々である。

体部が緩やかに内彎しながら立ち上がり、ボール形を呈する一群（2002・2007・2011～2013・2015・2034）は、口縁端部を丸く、あるいは方形・尖り気味に収める

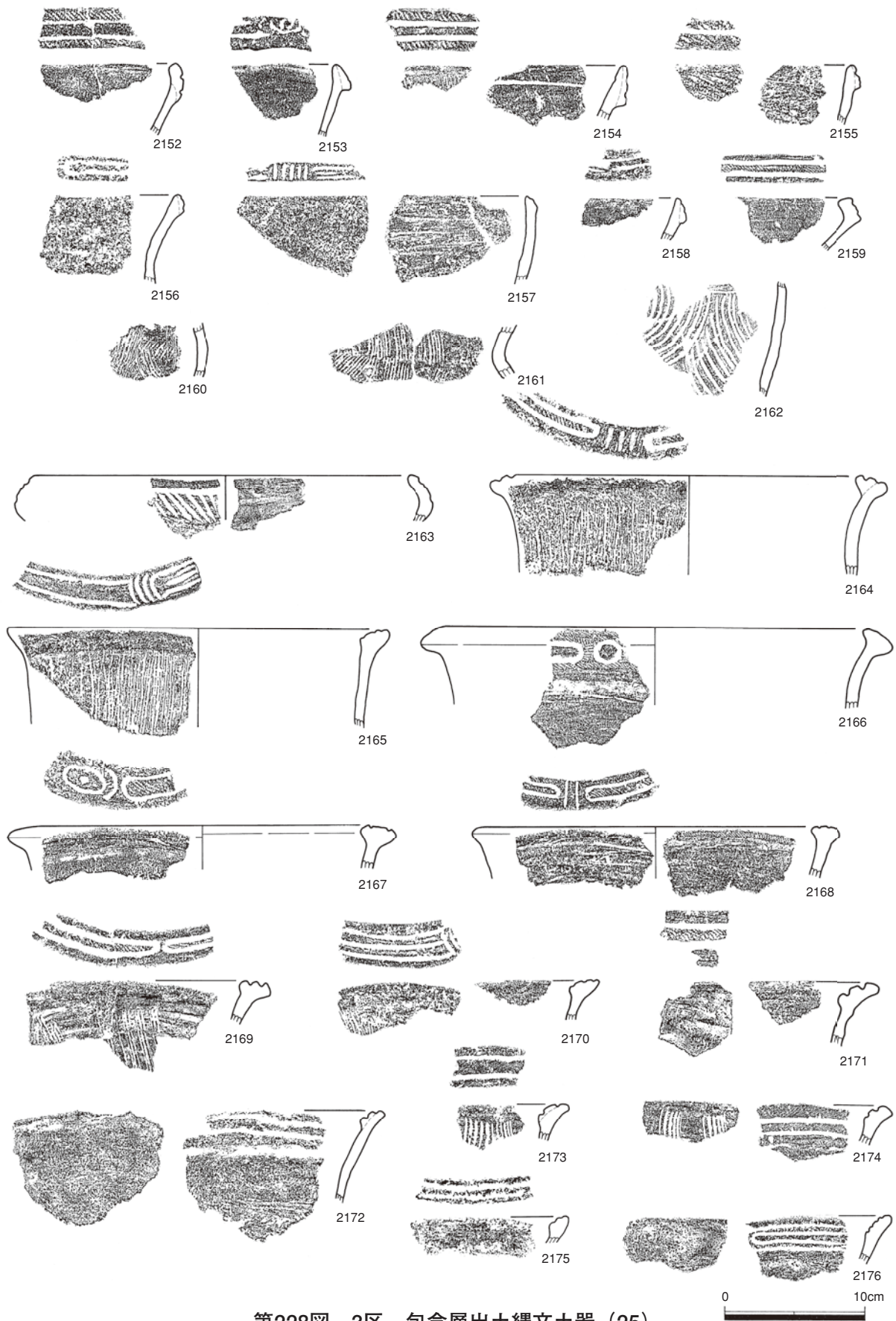
体部上位で内彎する一群（2046・2048～2050・2052・2055・2056～2058・2061～2065）の体部の内彎度は、個体によって差がある。また口縁部の立ち上がり方によって、A：外反しながら立ち上がる（2046・2048～2050・2052・2055・2056）、B：内傾しながら直線的に立ち上がる（2057・2058）、C：内彎しながら



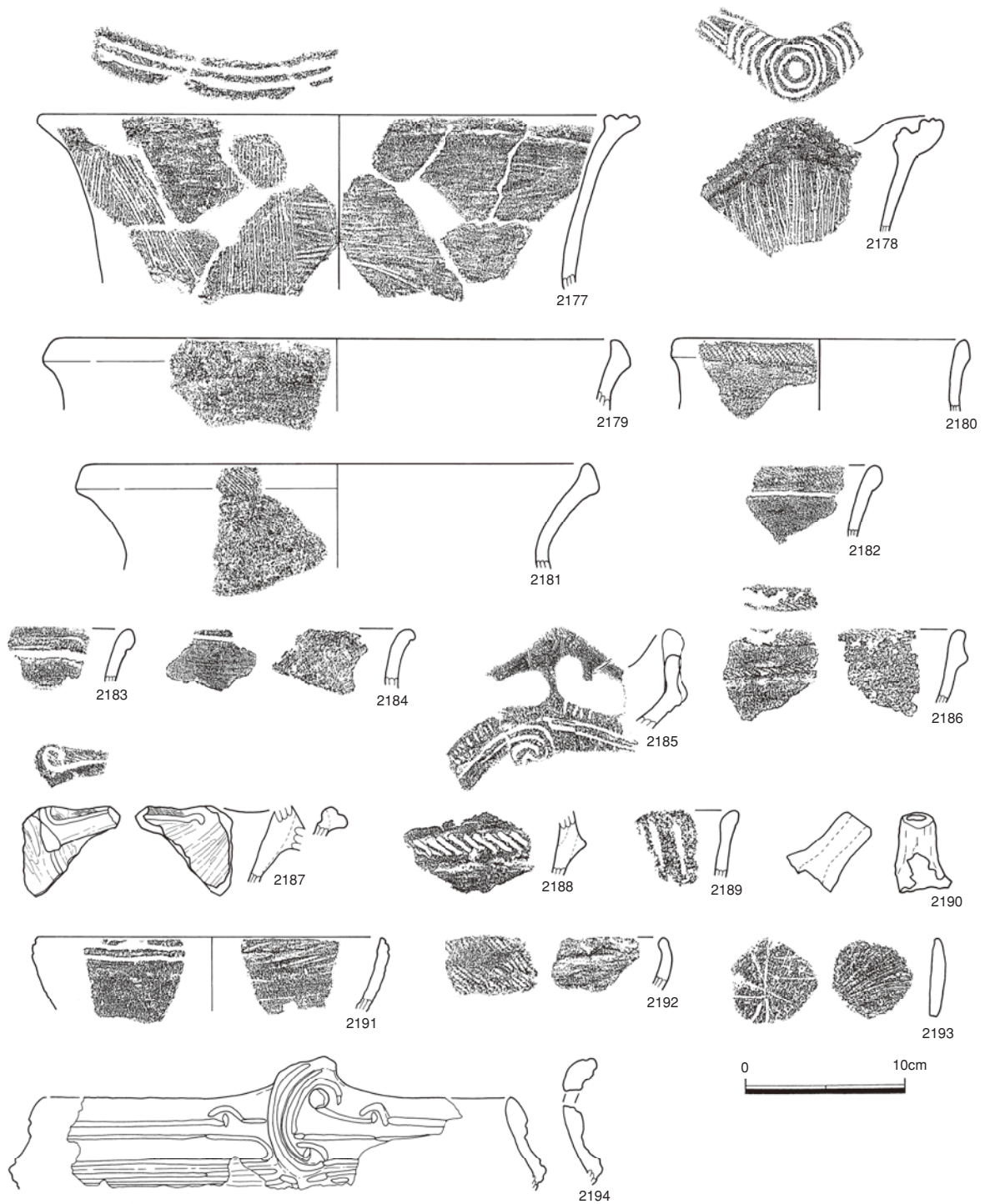
第226図 3区 包含層出土縄文土器 (23)



第227図 3区 包含層出土縄文土器 (24)



第228図 3区 包含層出土縄文土器 (25)



第229図 3区 包含層出土縄文土器 (26)

立ち上がる（2061～2065）、の3つに細分できる。

集約沈線文系の一群（第225・226図：2072・2074～2106）

集約沈線文系として捉えた一群は34点で、多重の円文・三角形・方形などを配する。2084・2085の2点には、口唇部に刻目が認められる。口縁部の形態として、口縁部が内側に屈曲するもの（2074～2083・2093）、内彎しながら立ち上がるもの（2084～2087・2092）、外上方へ開くもの（2088～2091）、外反しながら外上方へ開くもの（2094～2099）がある。2072・2100～2104は、体部片である。

刻目隆帯文系の一群（第226・227図：2107～2109・2120）

刻目隆帯文系として捉えた一群は、体部片4点である。2107は縦方向の刻目、それ以外の3点は斜め方向の刻目を頸部に施す。また4点とも、明確な隆帯を持たない。

その他の一群（第226・227・229図：2110～2124・2191・2194）

2105・2110～2112・2114・2191は沈線文系、2115～2117・2119は凹線文系の浅鉢と思われる。2118は刻目隆帯文系か。2124は口縁部のみに縄文を施していることから、素縄文系と思われる。2113・2194は形式不明で、2113は口縁部ナデ・体部は縄文を施す。2192は無文浅鉢か。

中～後期の深鉢・浅鉢以外の器種（第227・229図：2121～2123・2190・2193）

2121は壺、2123は壺もしくは注口土器の体部片と思われる。2190は注口土器、2193は円盤状土製品である。

中～後期の無文深鉢の一群（第230～247図：2195～2921）

3区出土の無文深鉢は、727点図化できた。その中で、内外面に条痕のみが認められる個体は19点を数え、条痕の施工原体には巻貝・二枚貝も認められる。出土した深鉢は小片が多く、図化できた個体のなかに無文深鉢でないものも含まれている可能性が考えられるが、明確に別器種と判断できない場合は深鉢に含めて分類を行った。

1群（第230・231図：2195～2244・2247～2251）

口唇部に施文が認められるものを、1群とした。掲載した56点すべてが刻目で、2202・2207・2208・2212・2225の5点は押引による刻目を、2247～2251の4点は縄文を施した後に刻目を施す。刻目の形態は、直行（2195～2198・2200～2210）と斜行（2199・2211～2251）するものがある。

2群（第233～247図：2304～2921）

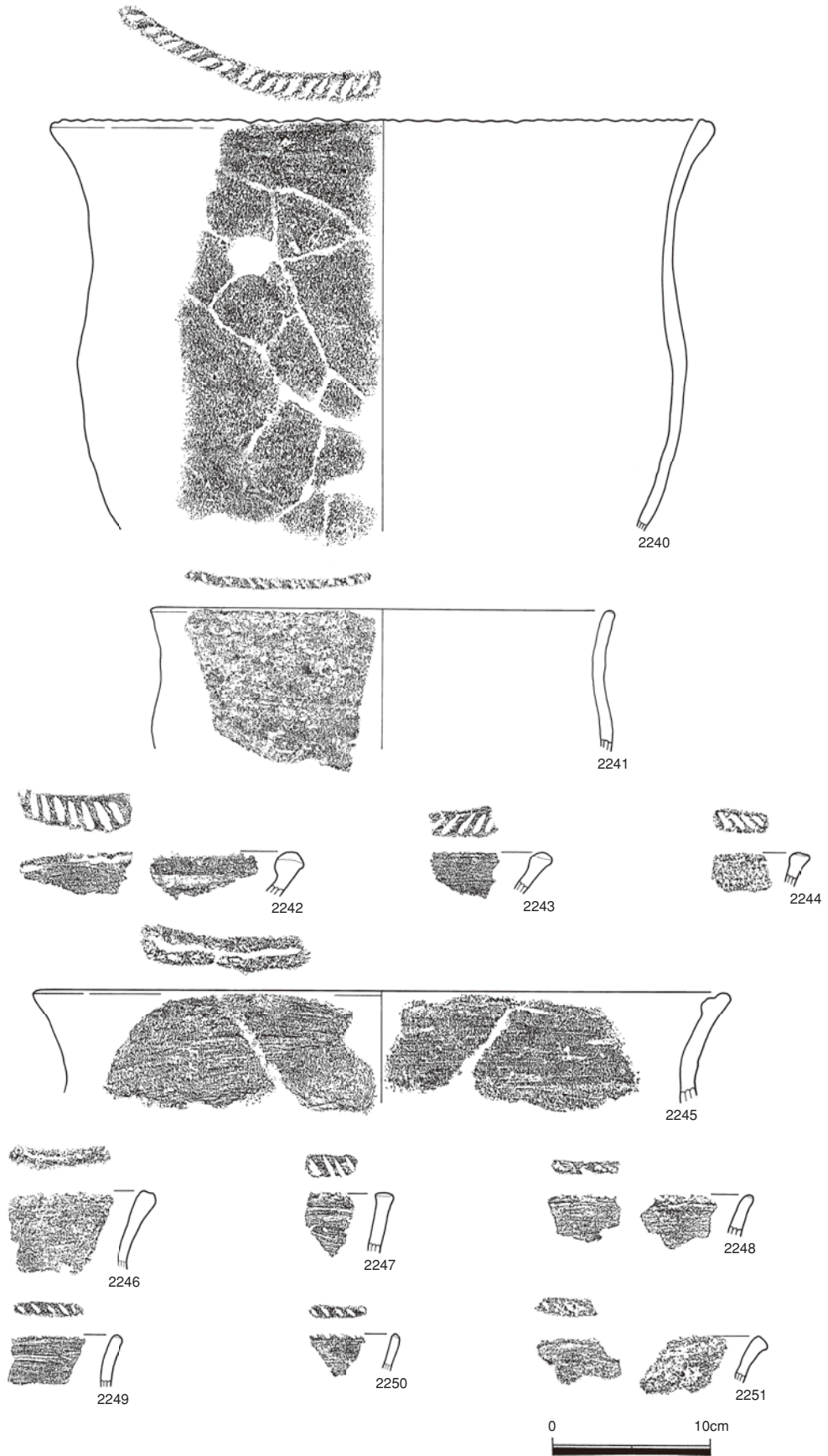
口唇部に施文が認められないものを2群とし、口縁部および口縁端部の形状から大きく5類に分類した。

2群1類（第232図：2252～2277）

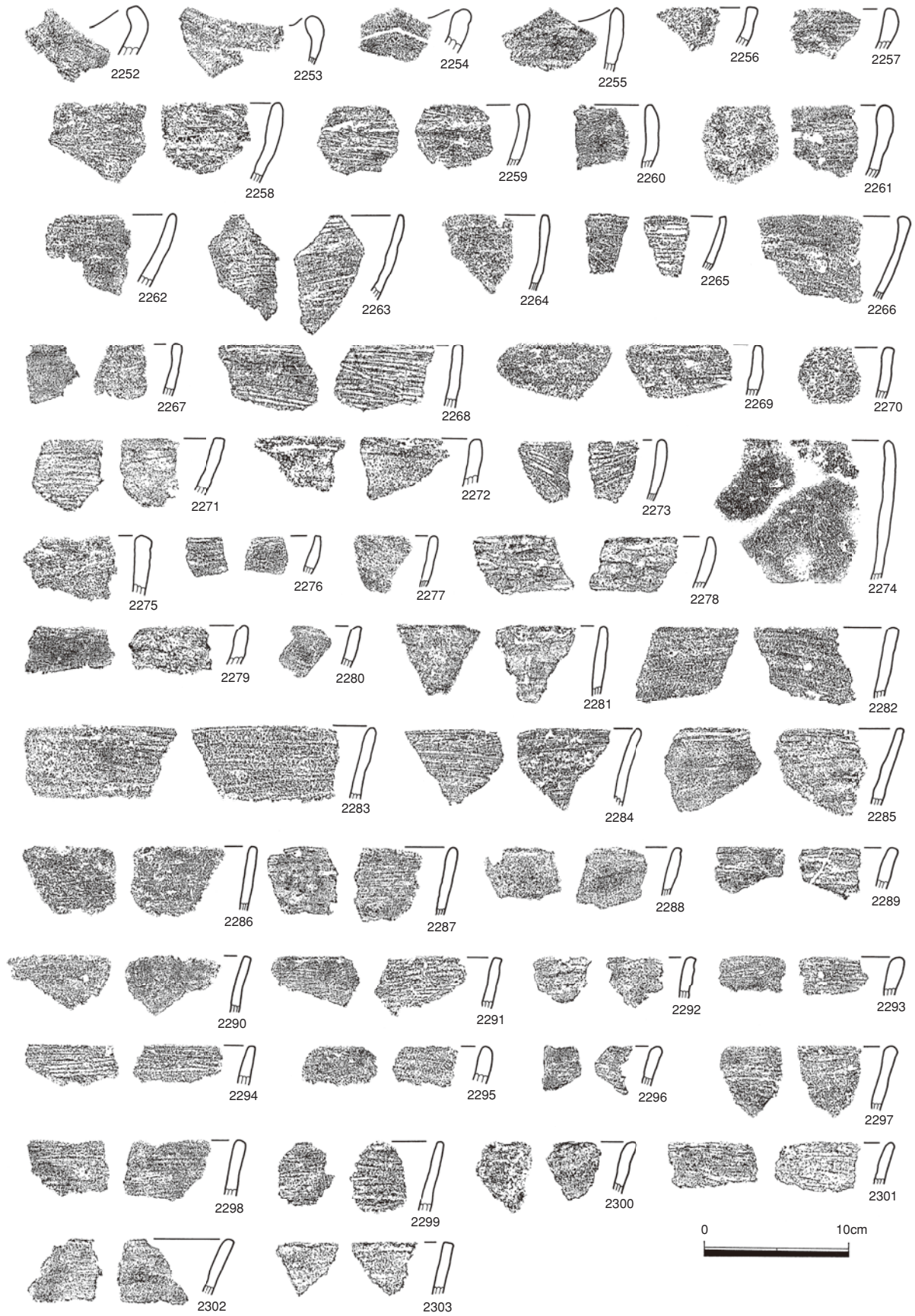
頸部から口縁端部に向かって緩やかに内彎しながら立ちあがる一群である。口縁端部の形状はさまざまで、2257～2262・2273・2274・2277は口縁端部を丸く、2256・2263～2265・2267～2272・2276は方形に収める。2266・2275は、端部を肥厚させて丸く収める。2252～2255の4点のみ、波状・山形口縁を呈する。



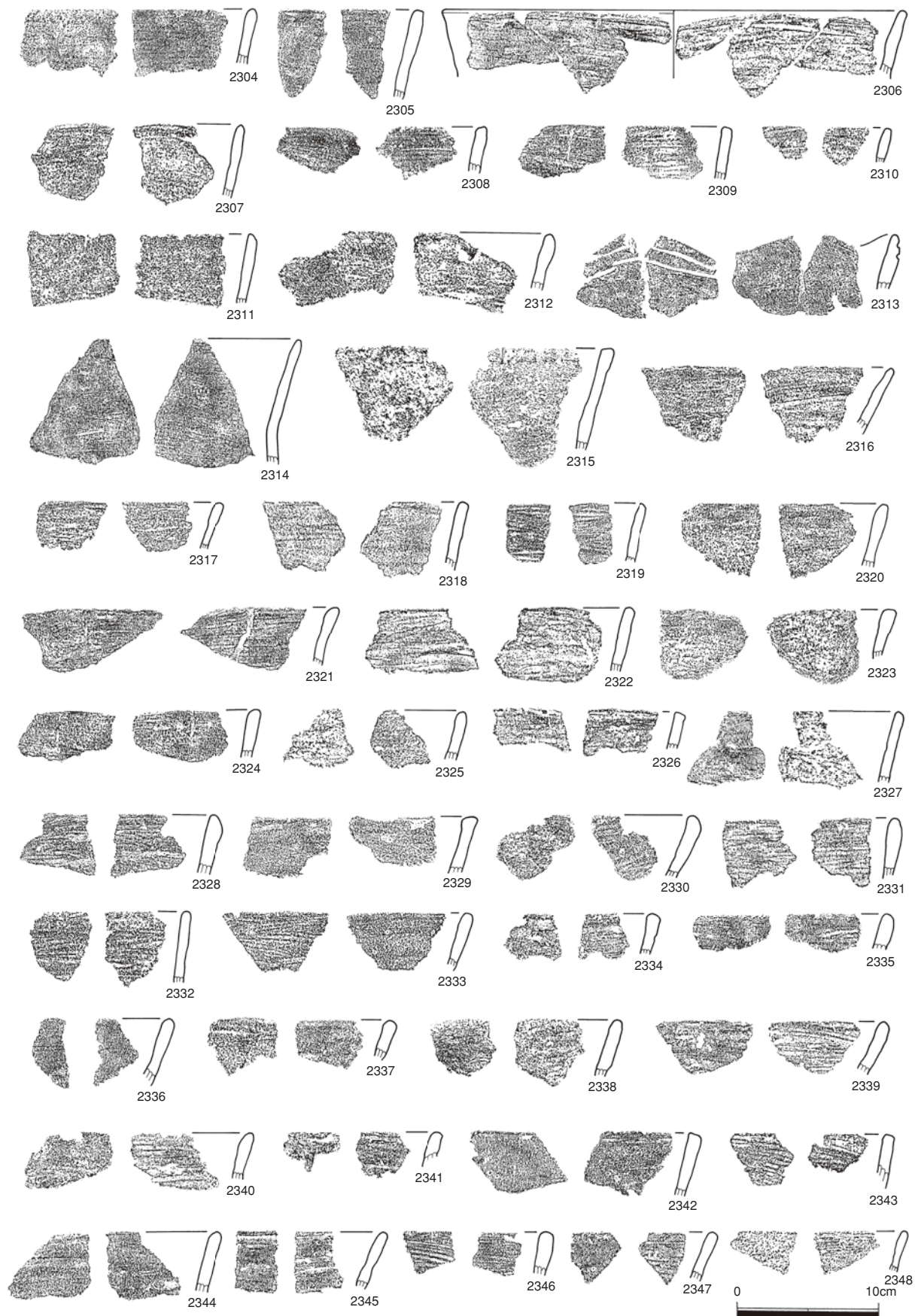
第230图 3区 包含層出土縄文土器 (27)



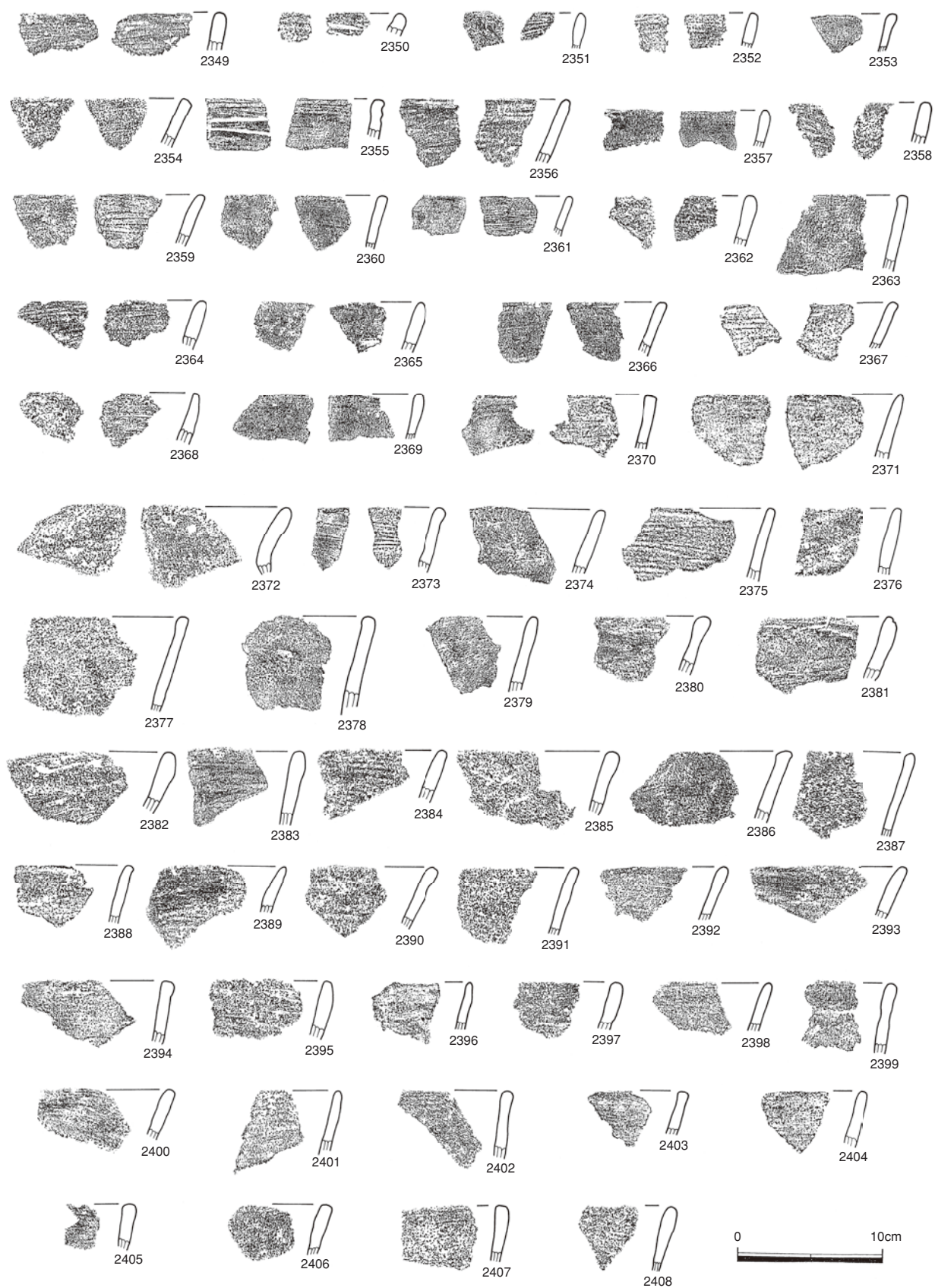
第231図 3区 包含層出土縄文土器 (28)



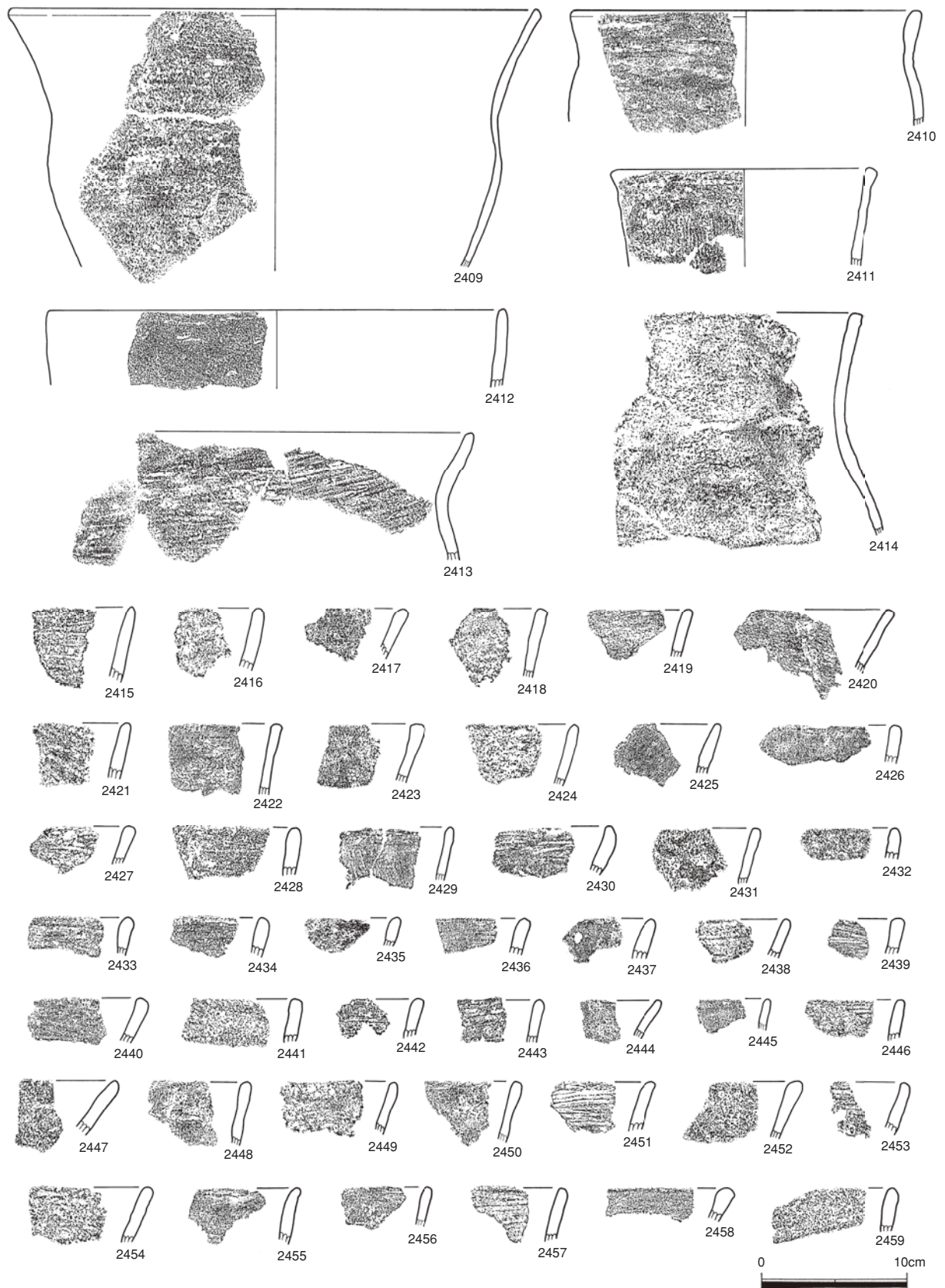
第232図 3区 包含層出土縄文土器 (29)



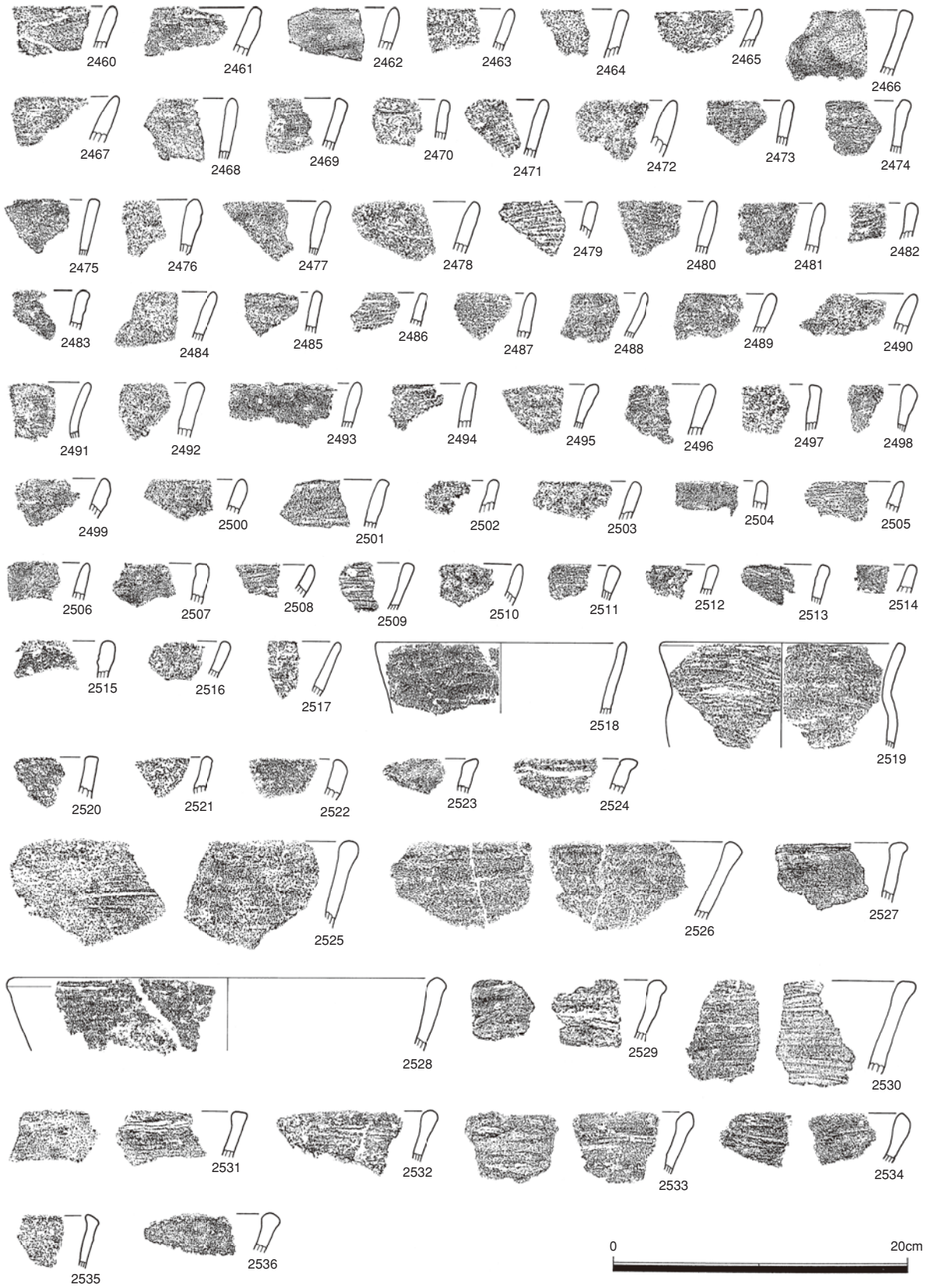
第233図 3区 包含層出土縄文土器 (30)



第234図 3区 包含層出土縄文土器 (31)



第235図 3区 包含層出土縄文土器 (32)



第236図 3区 包含層出土縄文土器 (33)

2群2類（第233～236図：2304～2536）

頸部から口縁端部に向かってほぼ直線的に外上方へ立ち上がる一群を、2類とした。そして、端部肥厚の有無でさらに分類し、肥厚しないものを2a類、肥厚するものを2b類とした。

2群2a類（第233～236図：2304～2524）

頸部から口縁端部に向かってほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、端部をそのまま収める。この端部の形状でさらに細分化が可能で、口縁端部を丸く、あるいは方形、尖り気味に収めるものがある。方形に収めるものはさらに細分可能で、端部上面がやや平坦なものとそうでないものに分けることができる。また尖り気味に収めたもののうち、さらに端部を細く尖らせて収めるものがある。2313は山形口縁をもち、外面に沈線2条が認められる。

2群2b類（第236図：2525～2536）

頸部から口縁端部に向かってほぼ直線的に外上方に立ち上がり、端部を肥厚させて収める。2526～2530・2531・2535は端部が方形を呈し、内面もしくは外面側、あるいは両方向に若干肥厚して収める。また、2525・2532・2533・2536は端部を肥厚させて丸く、あるいは尖り気味に収める。2534は肥厚させて方形に収める。

2群3類（第237～246図：2537～2858）

頸部から口縁端部に向かって外反する一群を、3類とした。そして、端部肥厚の有無でさらに分類し、肥厚しないものを3a類、肥厚するものを3b類とした。

2群3a類（第237～244図：2537～2824）

頸部から口縁端部に向かって外反し、端部をそのまま収める。端部の形状からさらに細分化可能であり、端部を丸く収めるもの(例：2540)・尖り気味に収めるもの(例：2544)・方形に収めるもの(例：2537)に分けることができる。方形に収める中でも、端面を水平に保つものと斜めになるものがある。2682のみ、波状口縁を持つ。

2群3b類（第244～246図：2825～2858）

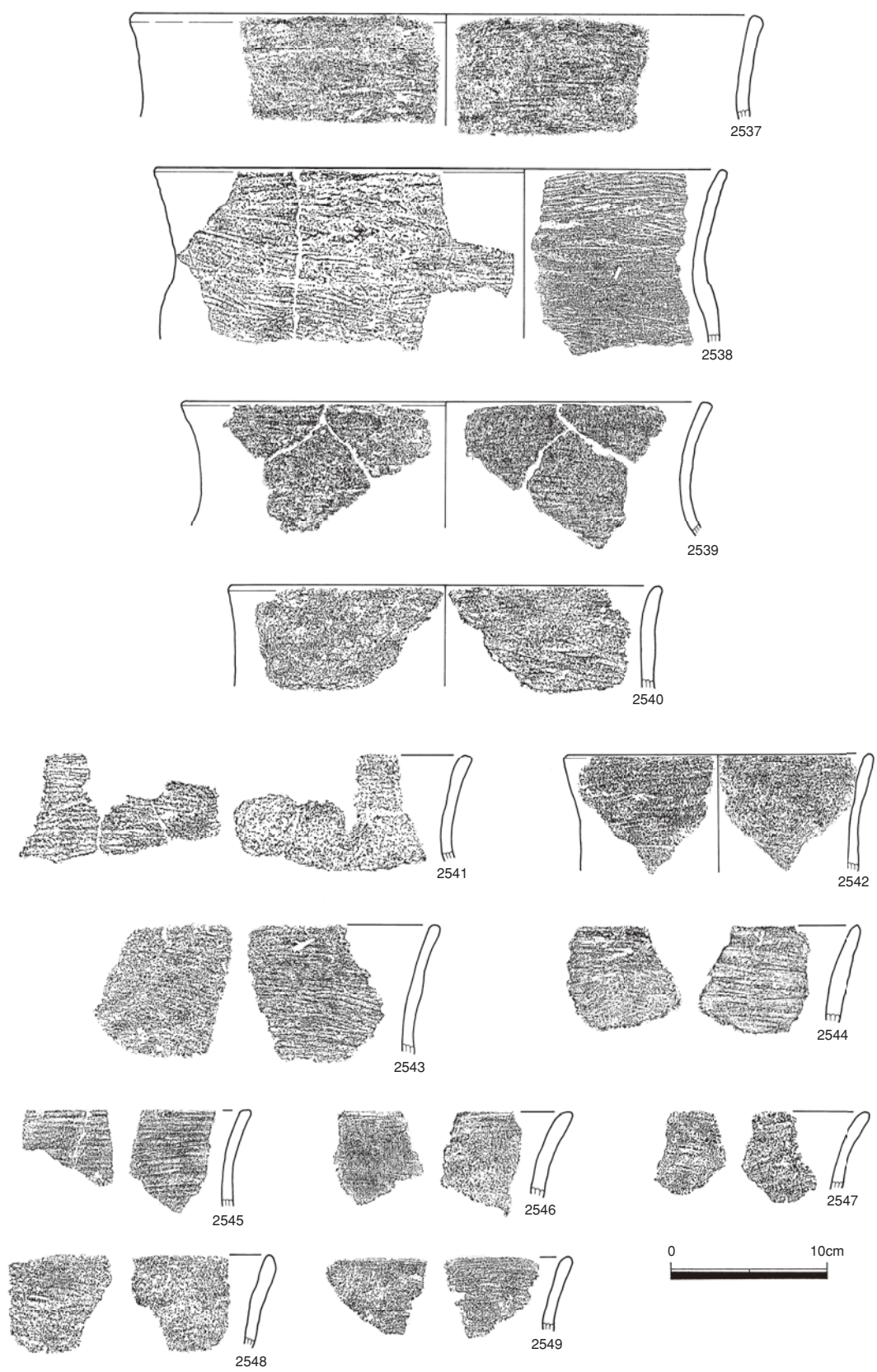
頸部から口縁端部に向かって外反しながら立ち上がり、端部を肥厚させて収める。肥厚は内面もしくは外面側、あるいは両方向にそれぞれ肥厚して収める。

2群4類（第245・246図：2859～2893）

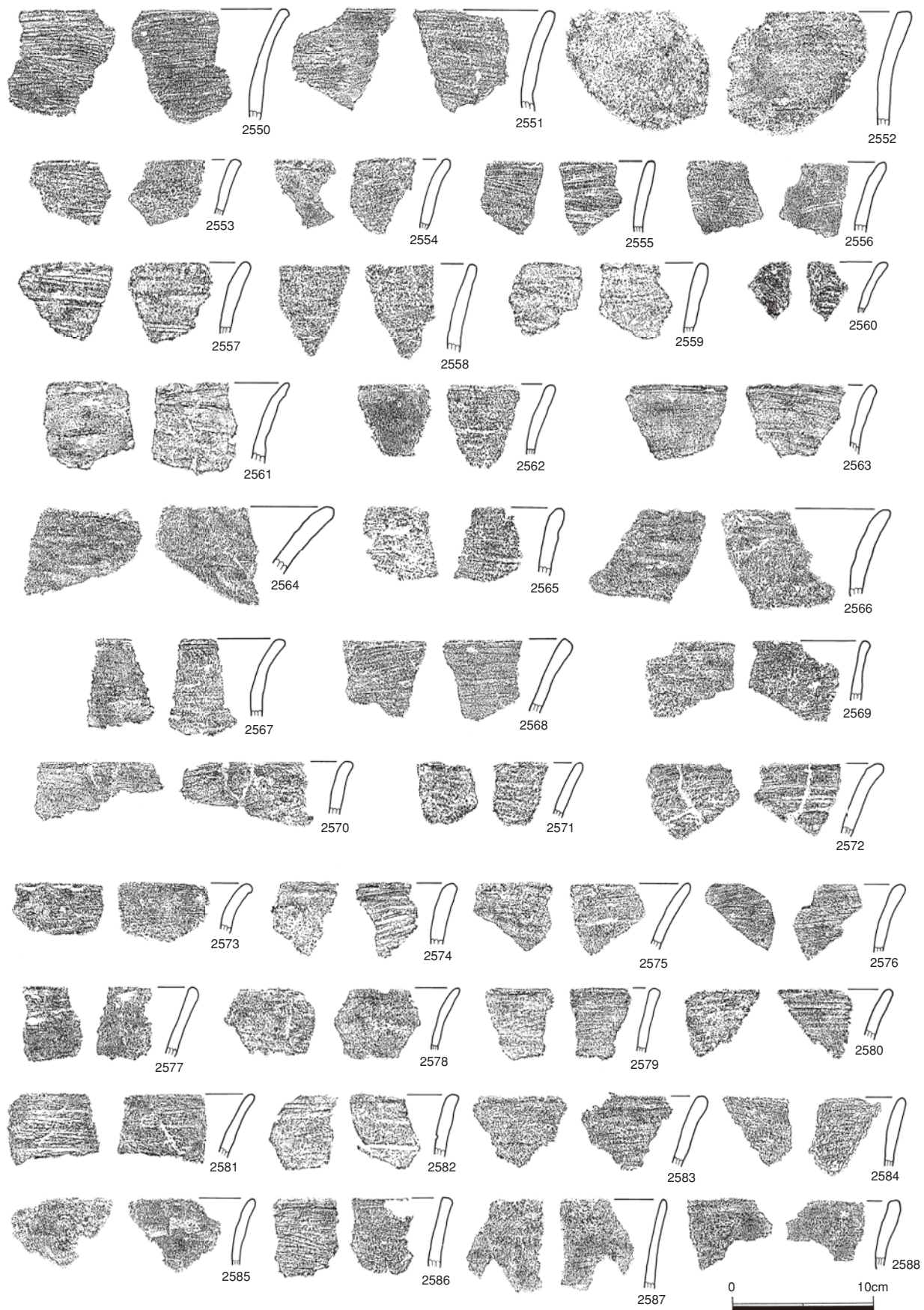
口縁部の内面側に肥厚帯が認められる一群を、4類とした。肥厚帯の幅は長短があり、端部をそれぞれ丸くあるいは尖り気味に収める。また肥厚帯が先の一類と比較してやや短く、端部を丸く収めるもの、端部の上方、あるいは内面側を肥厚させて丸く収めるものがある。

2群5類（第246図：2894～2920）

口縁部の外面側に肥厚帯が認められる一群を、5類とした。肥厚帯の断面は三角形を呈するが、



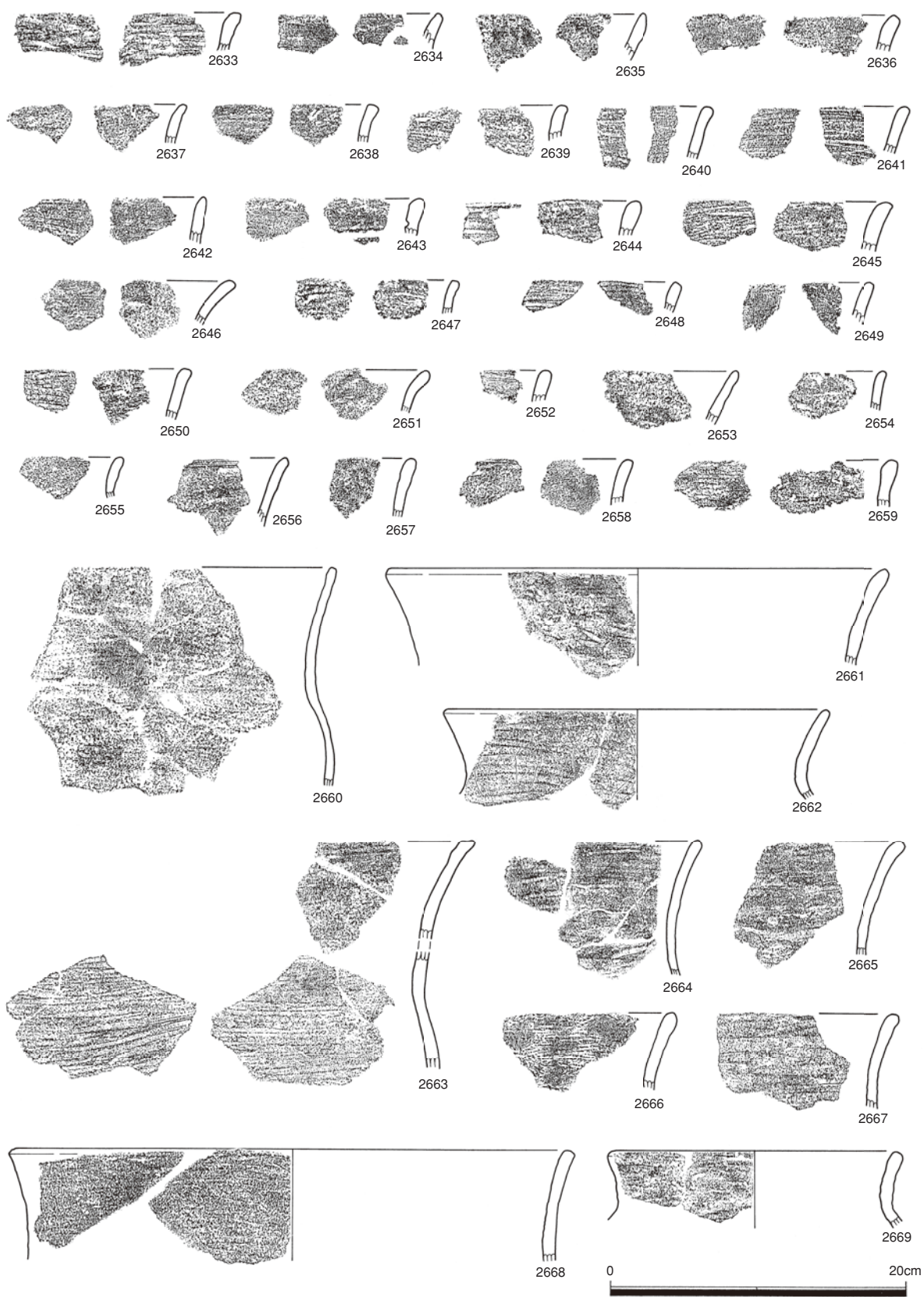
第237図 3区 包含層出土縄文土器 (34)



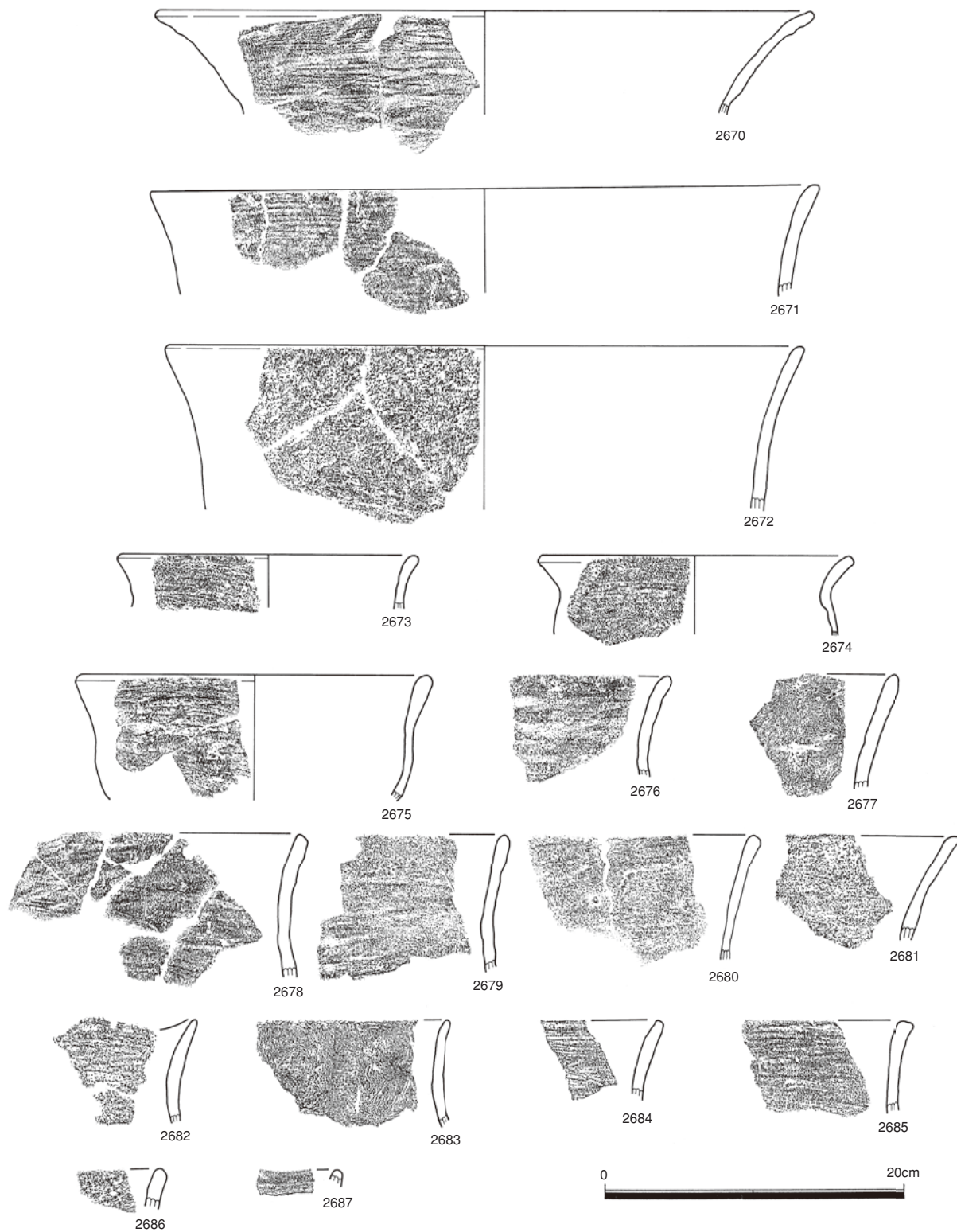
第238図 3区 包含層出土縄文土器 (35)



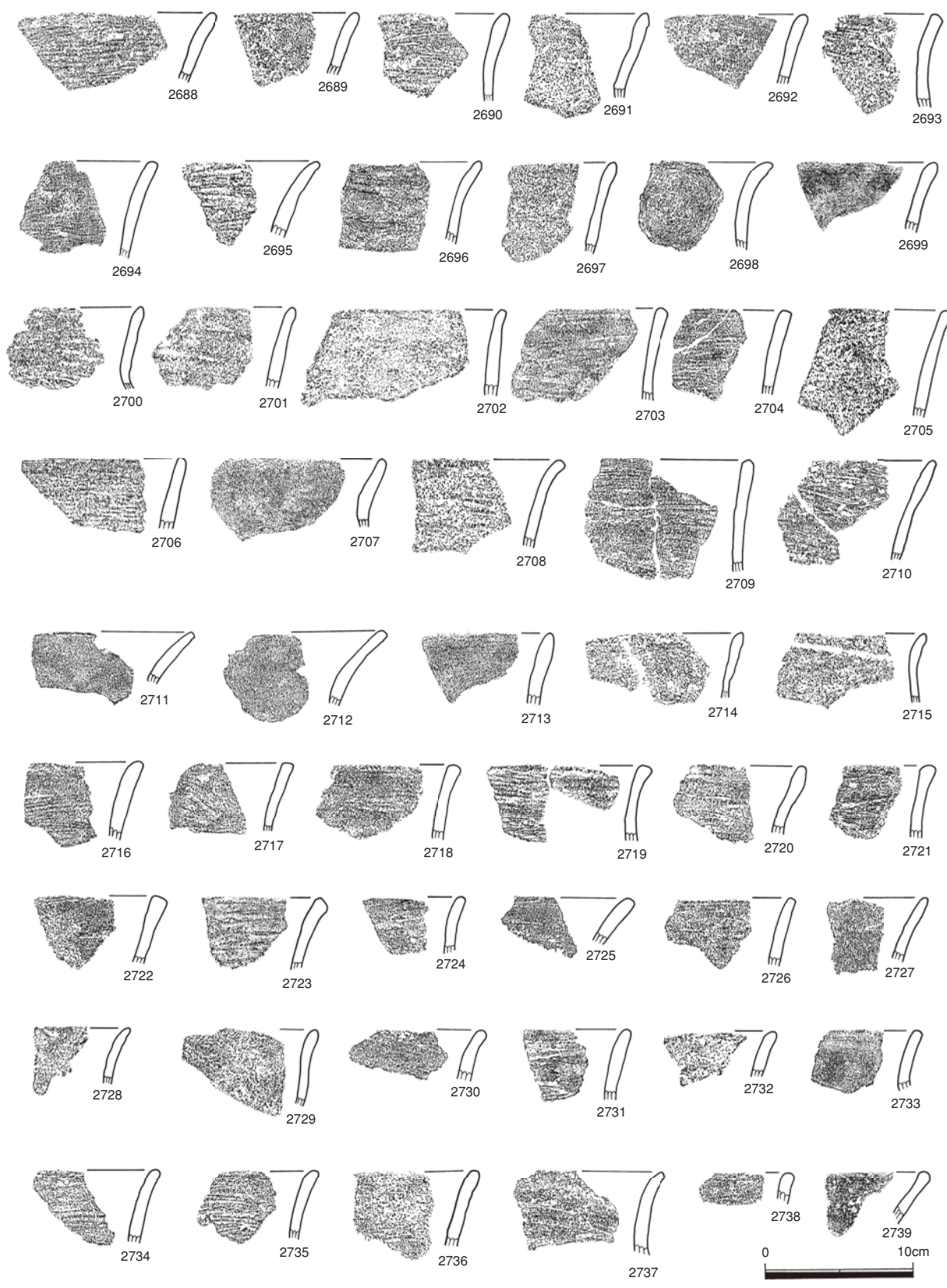
第239図 3区 包含層出土縄文土器 (36)



第240図 3区 包含層出土縄文土器 (37)



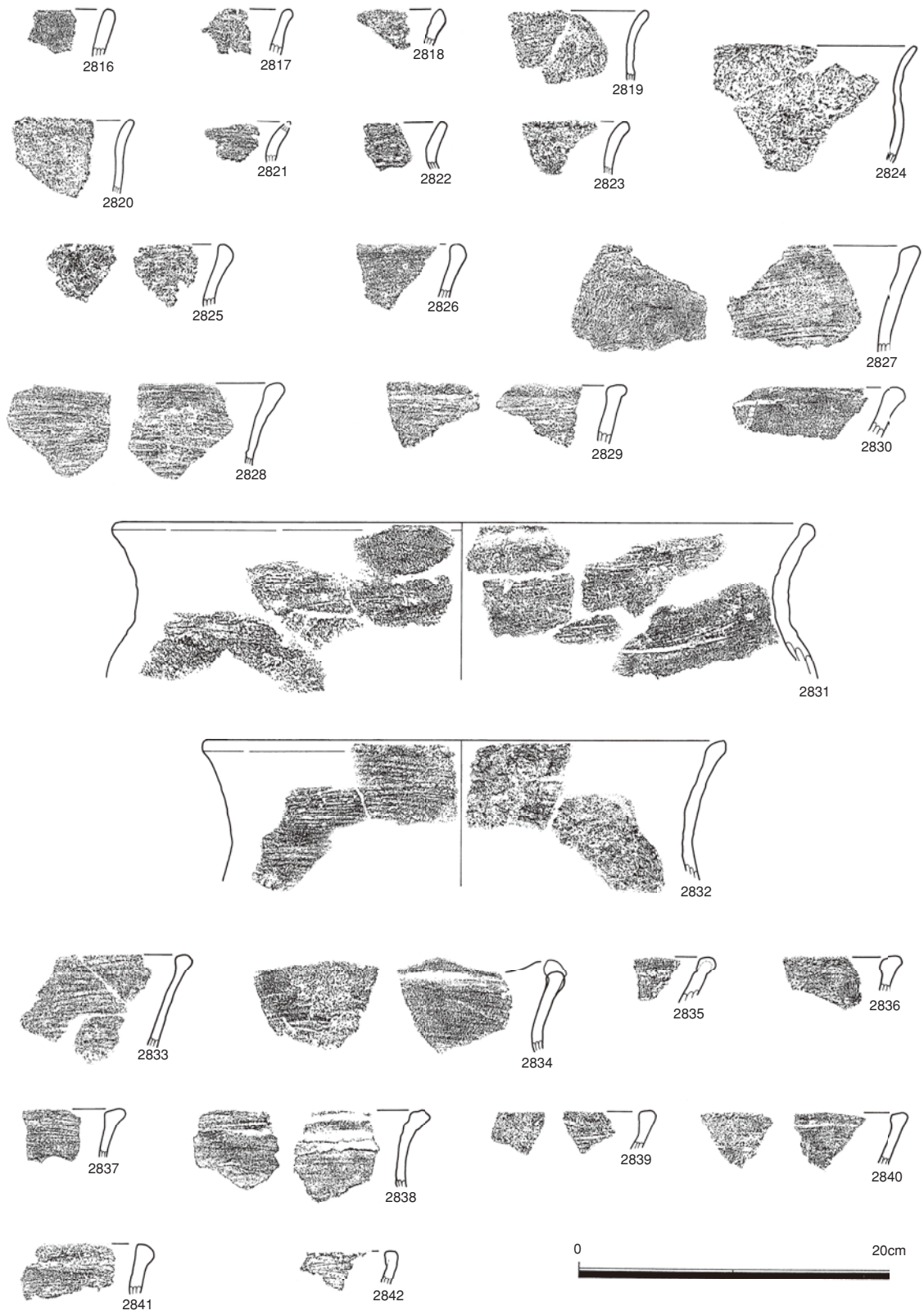
第241図 3区 包含層出土縄文土器 (38)



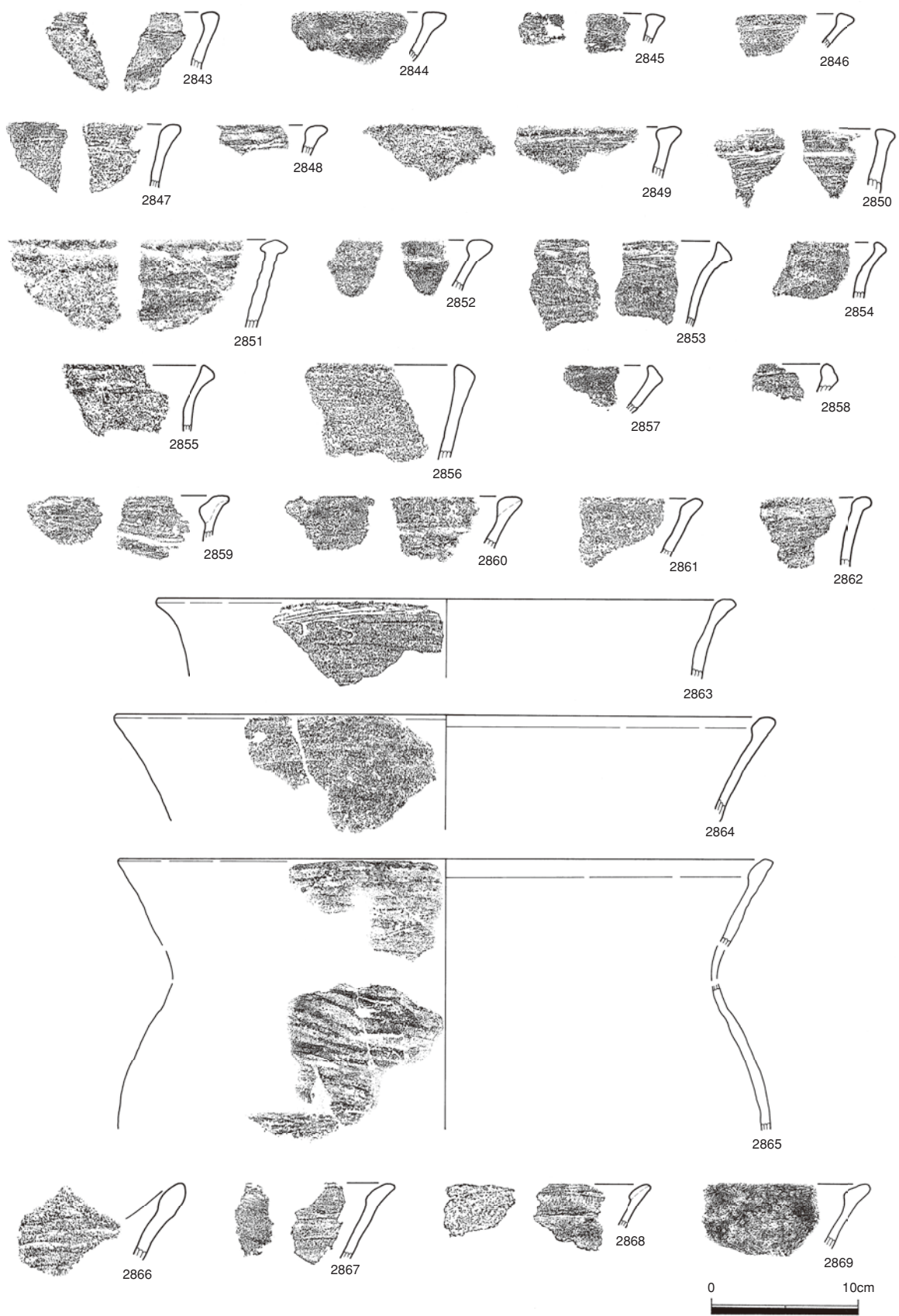
第242図 3区 包含層出土縄文土器 (39)



第243図 3区 包含層出土縄文土器 (40)



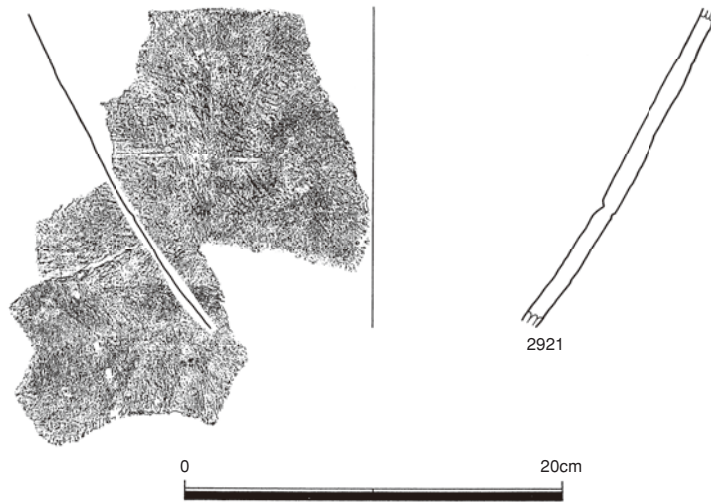
第244図 3区 包含層出土縄文土器 (41)



第245図 3区 包含層出土縄文土器 (42)



第246図 3区 包含層出土縄文土器 (43)



第247図 3区 包含層出土縄文土器 (44)

2897・2898は肥厚の度合いが弱い。また、2902～2904は肥厚帯の幅が短く、肥厚帯というより突帯に近い。

4群 (第232図：2277～2303)

内外面共に条痕が認められる一群を、4群とした。口縁部の形状は様々で、1類 (2278)・2類 (2279～2283・2285～2288・2291～2303)、3類 (2284・2289・2290) にそれぞれ分類できる。また2類は、端部の形状からさらに細分可能である。

中～後期の無文浅鉢 (第248・249図：2922～3028)

3区出土の無文浅鉢は、107点図化できた。口唇部に施文が認められるものを1群、認められないものを2群としたが、3区内では1群に分類できる土器の出土は認められなかった。

2群 (第248・249図：2922～3025)

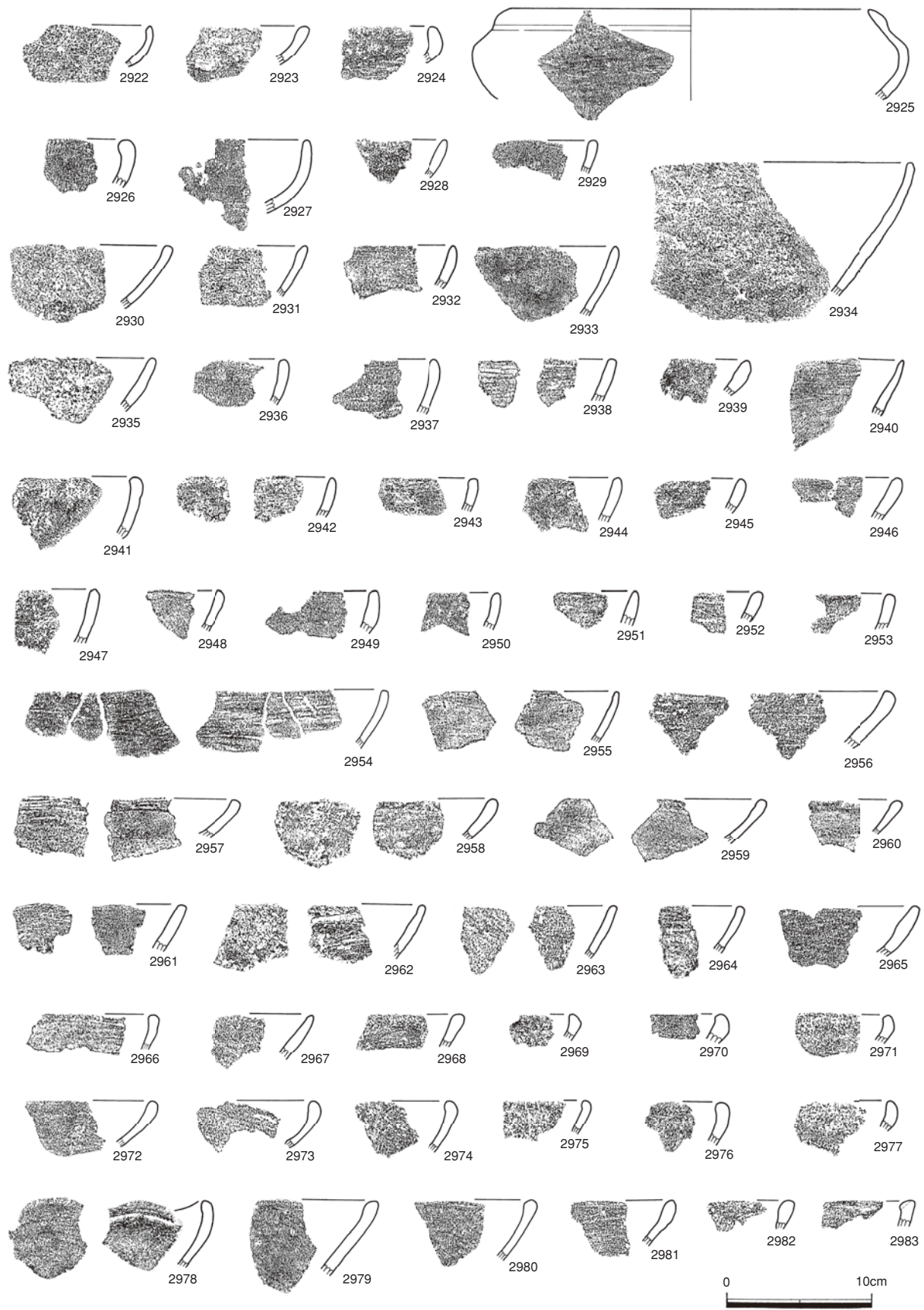
口唇部に施文が認められないものを2群とし、口縁部および口縁端部の形状から大きく5類に分類した。

2群1類 (第248図：2922～2929)

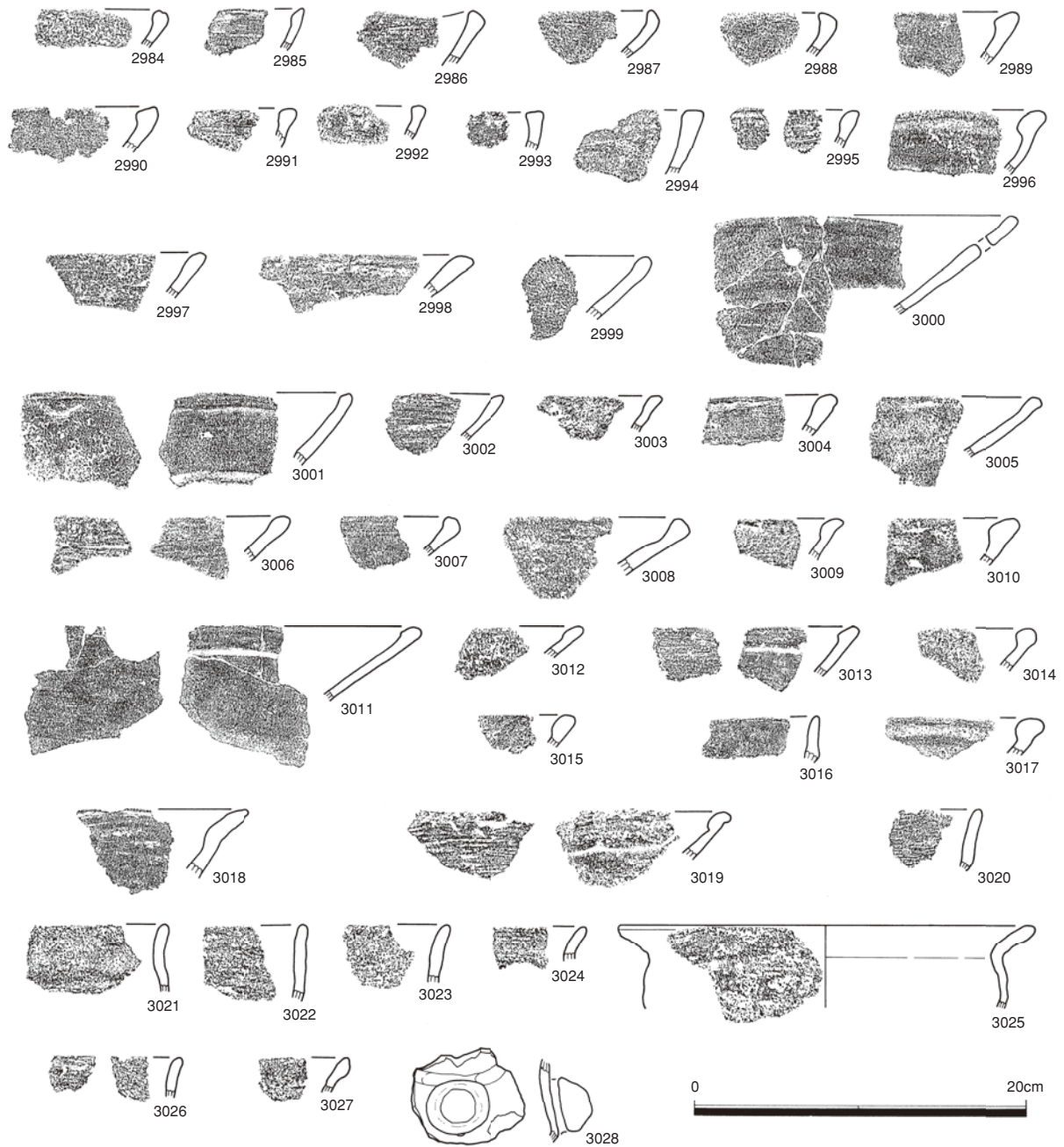
体部が内彎しながら立ち上がる一群で、2類と比較して内彎の屈曲が大きい。口縁端部の形状はさまざまだが、口縁端部を丸く収めるものが大半を占める。2922・2925の2点は、やや尖り気味に収める。

2群2類 (第248図：2930～2953)

体部が、緩やかに内彎しながら立ちあがる一群である。口縁部の形状はさまざまで、端部を丸く収めるもの (2931・2935～2937・2941～2943・2946・2947・2950・2952)、尖り気味に収めるもの (2932・2933・2939・2940・2944)、方形に収め、端面が水平にならないもの (2930・2945・2948・2951・2953)・水平になるもの (2934・2938・2949) がある。



第248図 3区 包含層出土縄文土器 (45)



第249図 3区 包含層出土縄文土器 (46)

2群3類 (第248・249図：2954～2996)

体部から口縁端部に向かって緩やかに内彎しながら、あるいは直線的に外上方へ立ち上がる一群を、3類とした。そして、端部肥厚の有無でさらに分類し、肥厚しないものを3a類、肥厚するものを3b類とした。

2群3a類 (第248図：2954～2967)

体部が外上方へ緩やかに内彎しながら立ち上がるもの(2954～2956・2964～2966)、外上方へ直線的に立ち上がるもの(2957～2963・2967)がある。直線的に立ち上がるものの中に、口縁端部付近でわずかに内彎するもの(2957・2964)が認められる。

2群3b類（第248・249図：2968～2996）

外上方へ体部が緩やかに内彎しながら立ち上がるもの、あるいは直線的に立ち上がるもので、口縁端部を肥厚させる一群である。内面側を肥厚させて断面三角形を呈するもの（2969・2973～2980・2983～2989）、端部を内外面側に若干肥厚させて丸く、あるいは方形に収めるもの（2968・2970～2972・2981・2982・2990～2994）、内面側に肥厚帯が認められるもの（2970・2995・2996）が認められる。

2群4類（第249図：2997～3015・3017・3019）

体部が浅く大きく開き、皿状を呈する一群を4類とした。そして、端部肥厚の有無でさらに分類し、肥厚しないものを4a類、肥厚するものを4b類とした。

2群4a類（第249図：2997～3001）

皿状を呈した一群に、体部が緩やかに内彎しながら大きく開くもの（2997・3001）、外上方へ直線的に開くもの（2998～3000）がある。口縁端部は、方形あるいは丸く収める。

2群4b類（第306図：3002～3015・3017・3019）

体部が皿状を呈したなかで、口縁端部を肥厚させる一群である。内面側を肥厚させて断面三角形を呈するもの（3007・3008・3010・3013）、丸く収めるもの（3002～3006）、内面側に肥厚帯が認められるもの（3009・3011・3012・3014・3015・3017・3019）が認められる。

2群5類（第249図：3016・3018・3020～3027）

頸部でくびれ、口縁部が外反する一群である。くびれおよび口縁部の外反の度合いは、個体によって異なる。口縁端部は丸く収めるもの、若干肥厚させて方形に収めるものが認められる。小片のなかには、鉢が含まれる可能性もある。

中～後期の深鉢・浅鉢以外の器種（第249図：3026～3028）

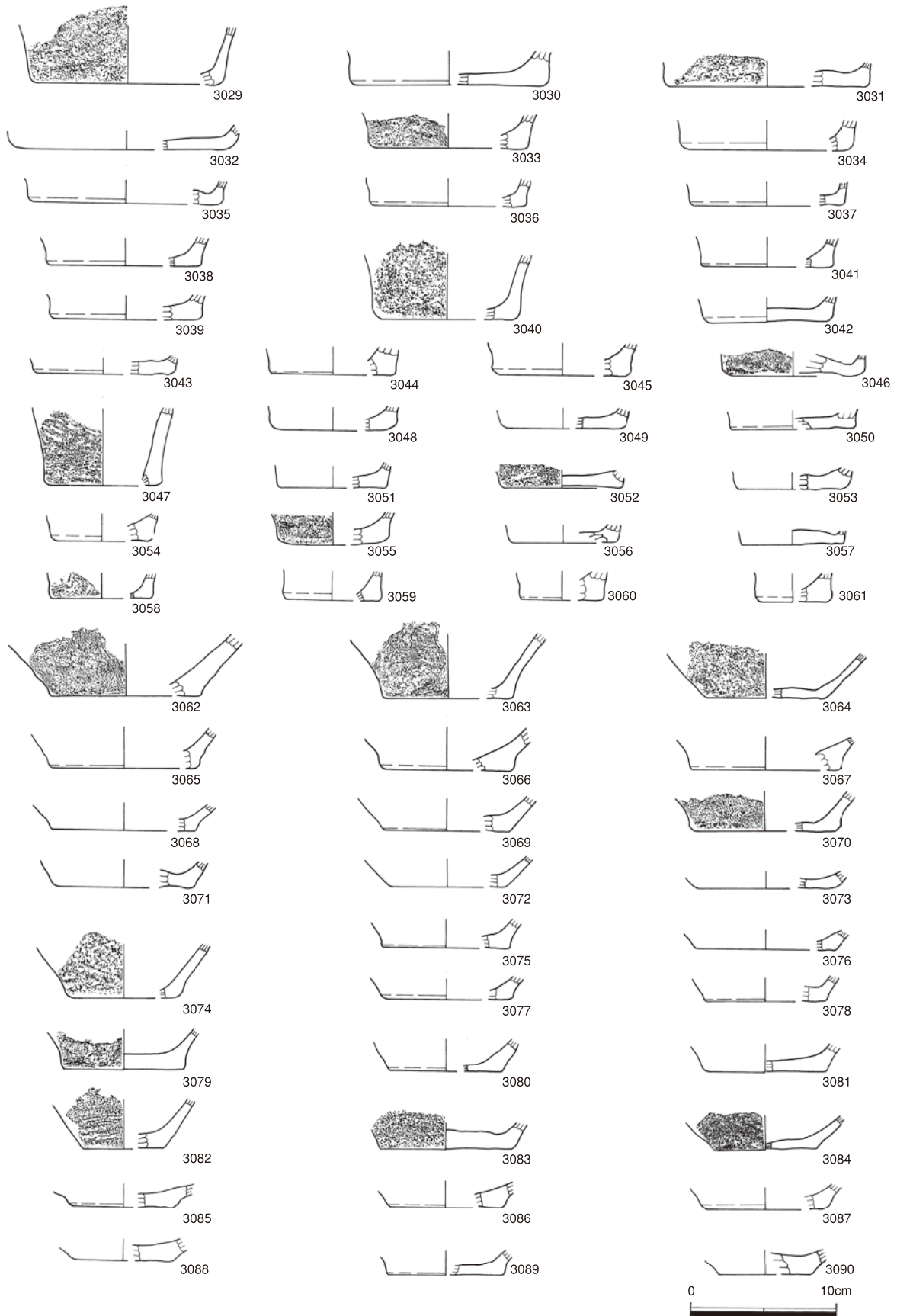
3026～3028の3点ともに、無文の壺と考えられる。遺存状態が悪いものの、3028は壺の把手部である。3026は、内外面に条痕のあとナデを施す。

深鉢底部（第250～255図：3029～3323・3348～3355）

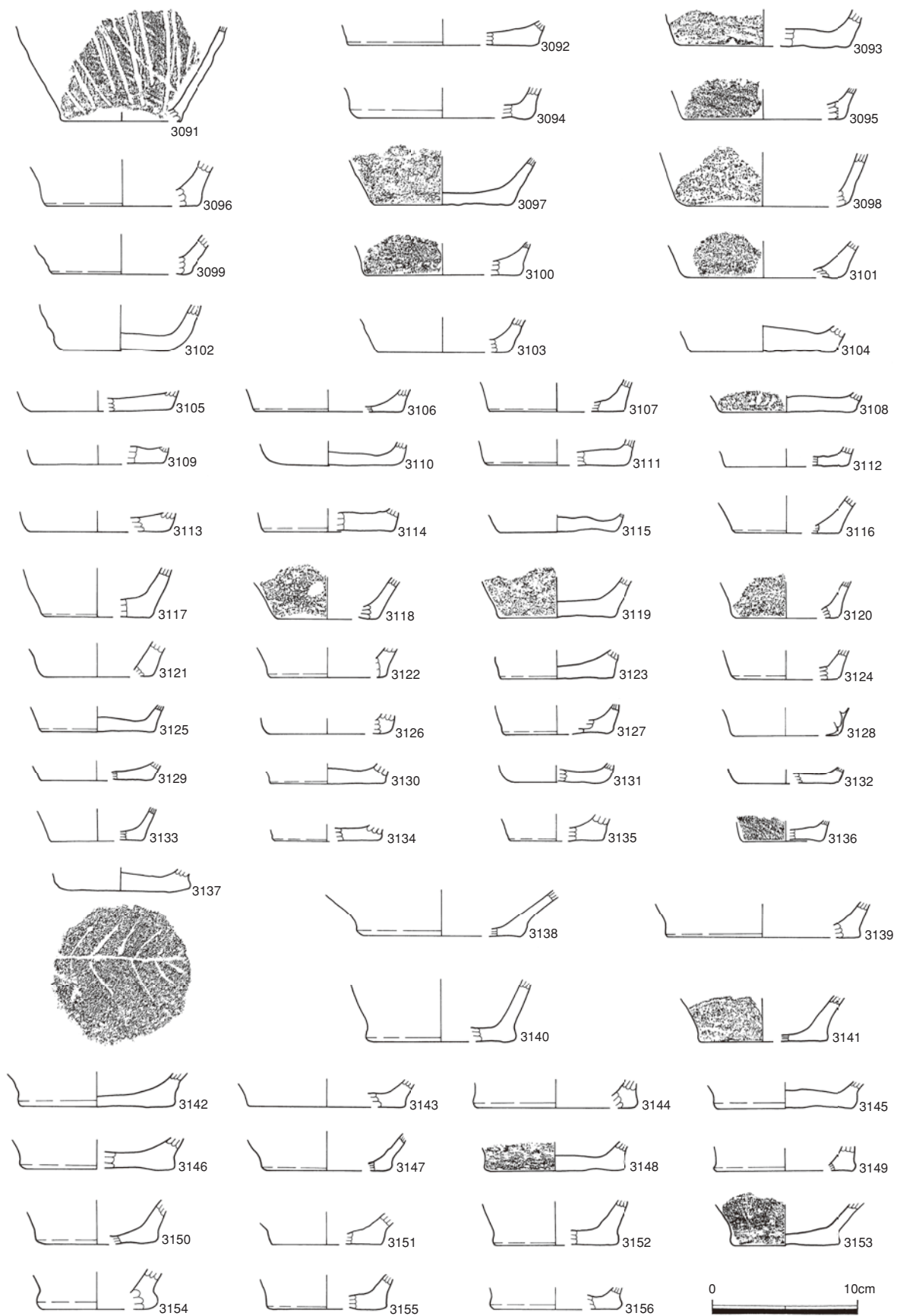
3091・3170・3218・3235・3241・3243の計6点が、有文深鉢の底部である。6点のうち、底部の形状から3091は平底A、3170は凹底、3218・3235・3241・3243は高台底に分類できる。

3029～3323・3348～3355のうち、上記の6点を除く307点が無文深鉢の底部である。底部の形状から3029～3051・3053～3135・3137～3165・3307は平底Aに、3052・3136・3166・3167は平底Bに、3168～3210は凹底、3211～3306・3308～3323は高台底、3348～3355は多孔底にそれぞれ分類できる。

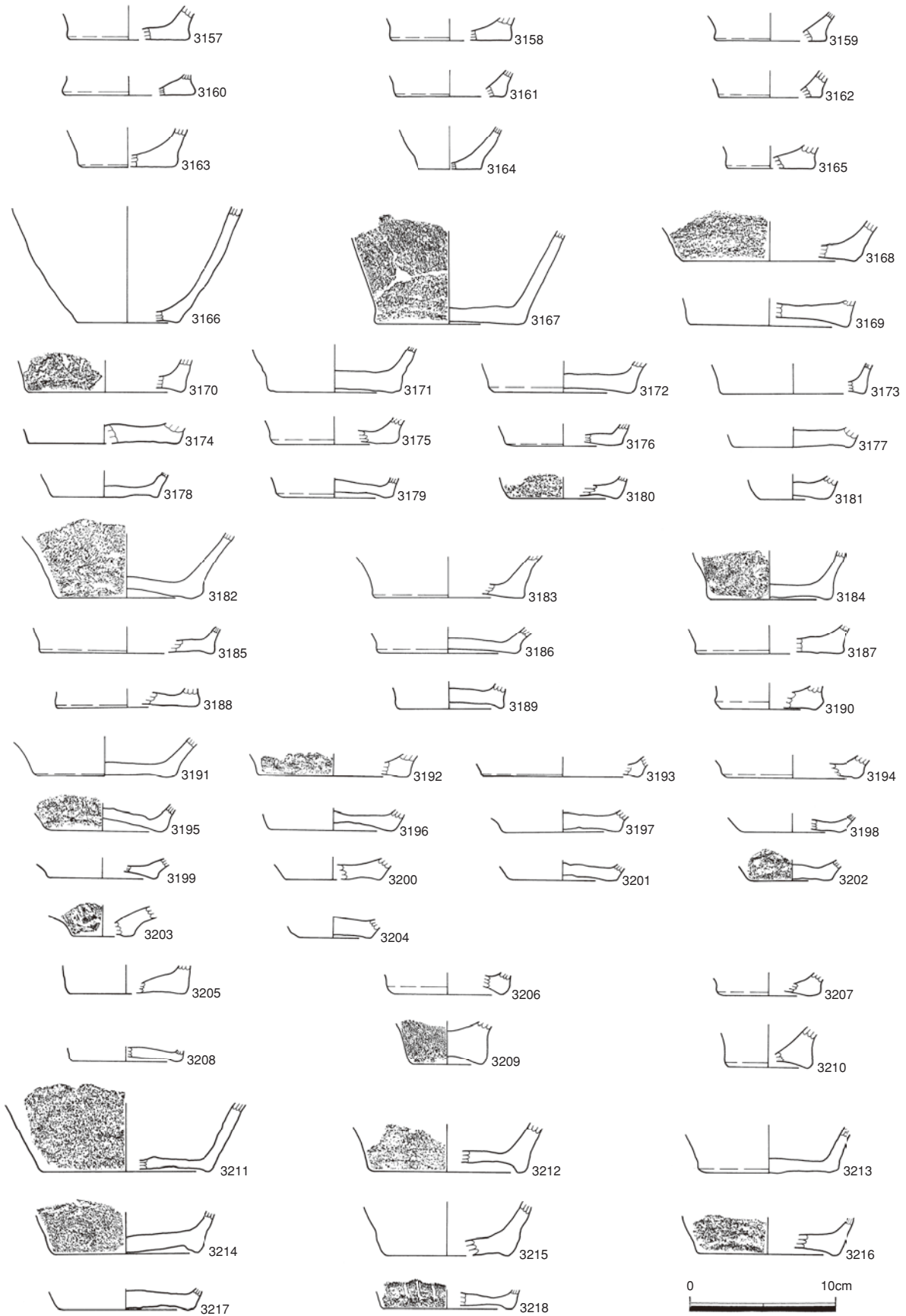
平底Aのなかで体部の傾きからさらに分類を行うと、3029～3051・3053～3061は遺存部で体部が直立気味に立ち上がる一群、3062・3064・3065・3068・3069・3071～3073・3075～3078・3084・3086～3136は体部が外上方へ直線的に開く一群、3137～3156は一旦、直立気味に立ち上がり、そこから外上方へ開く一群、3137～3165は立ち上がり内側に屈曲してから、外上方へ開く一群の計4群に分けることができる。



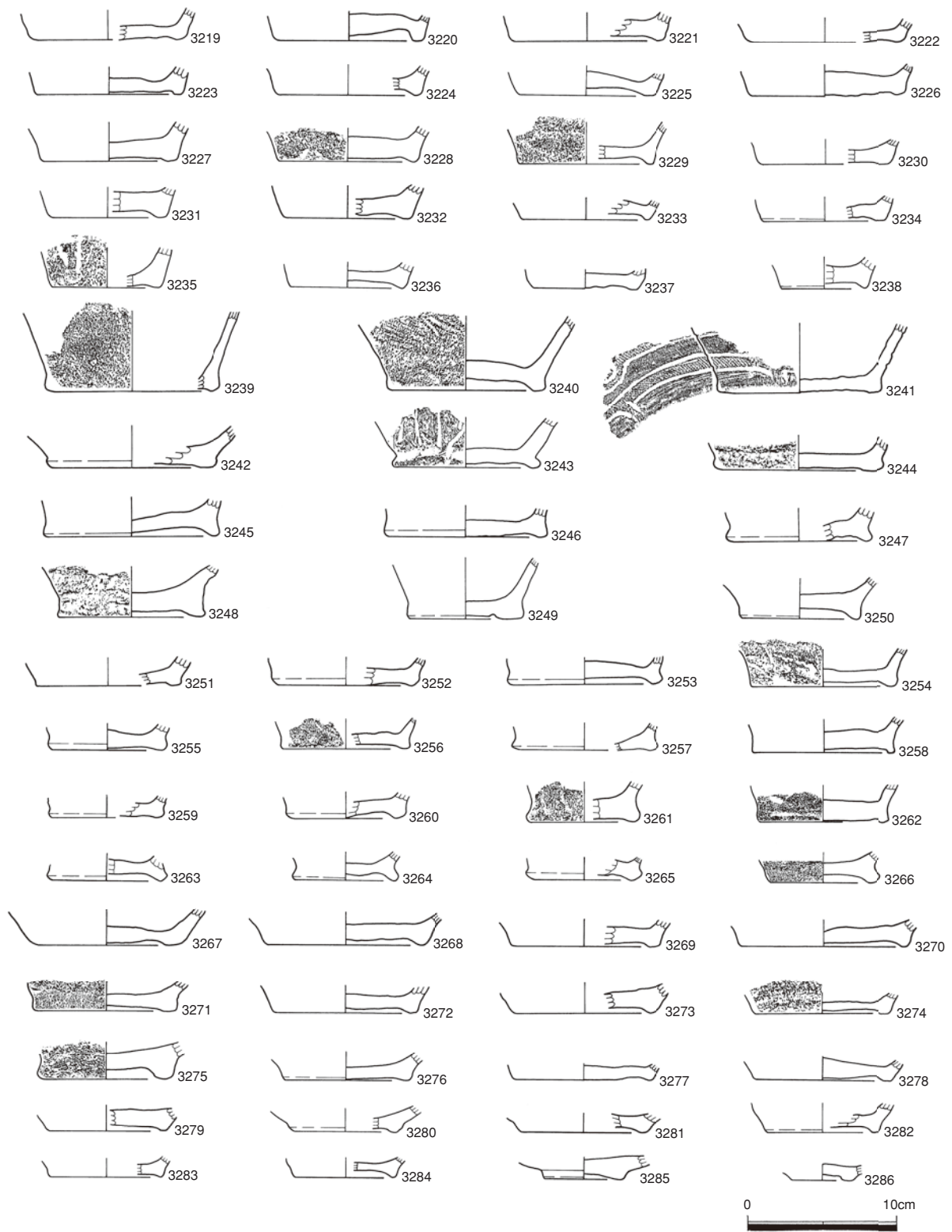
第250図 3区 包含層出土縄文土器 (47)



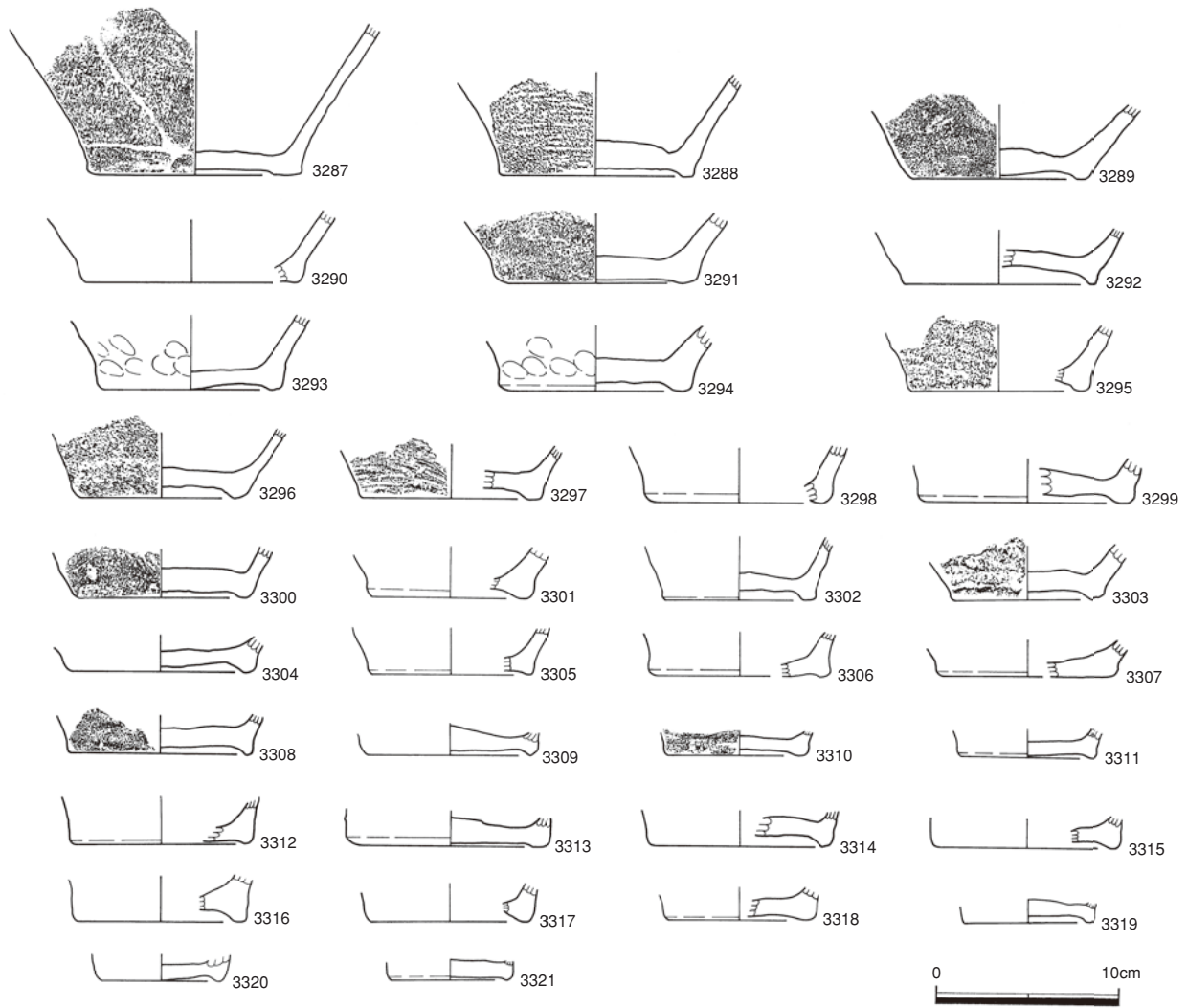
第251图 3区 包含層出土縄文土器 (48)



第252図 3区 包含層出土縄文土器 (49)



第253図 3区 包含層出土縄文土器 (50)



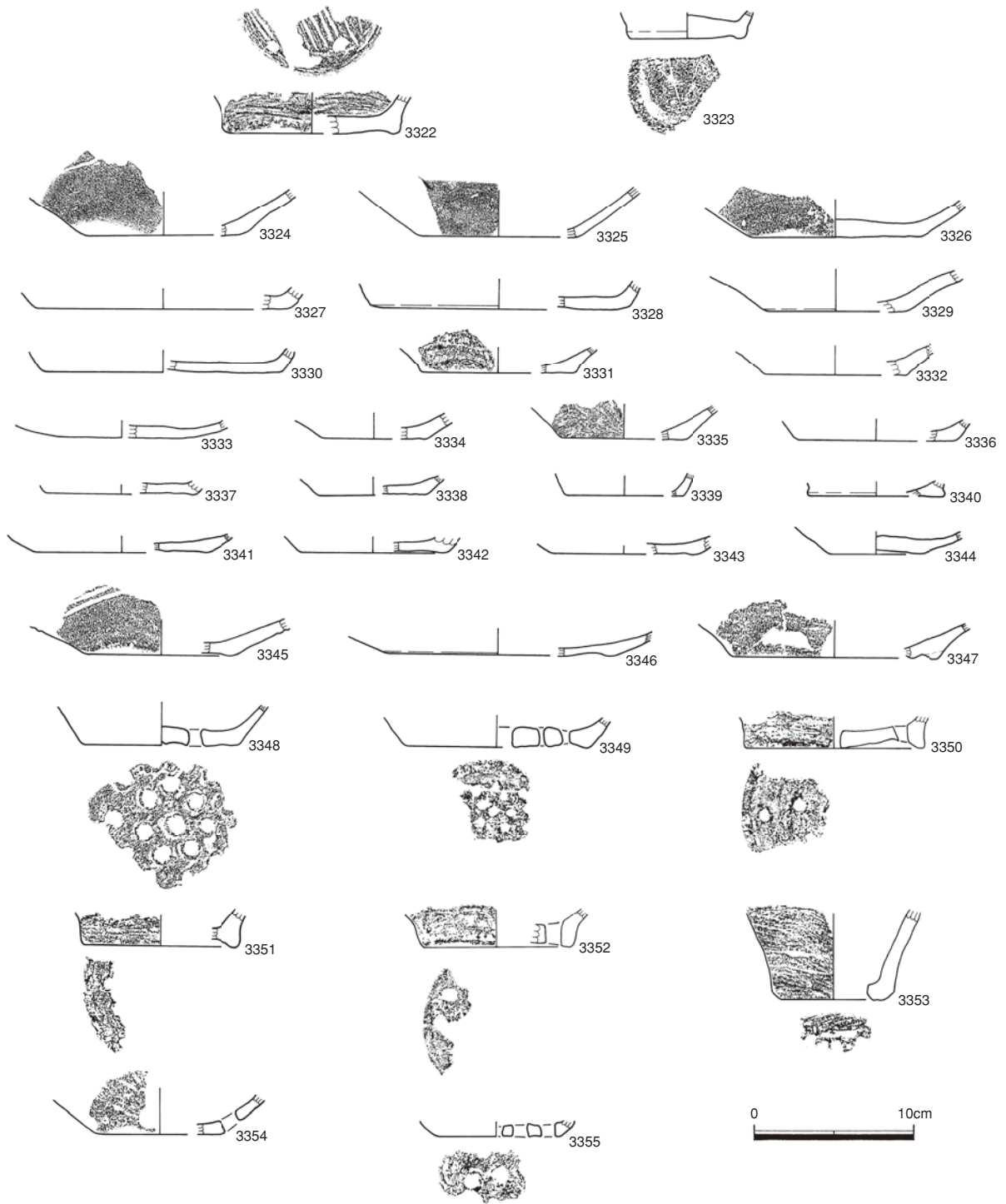
第254図 3区 包含層出土縄文土器 (51)

平底Bも平底Aと同じように体部の傾きから分類を行うと、3052・3136は遺存部で体部が直立気味に立ち上がる一群、3166は体部が直線的に外上方へ開く一群、3167は、立ち上がりが内側に屈曲してから、外上方へ開く一群の計4群に分けることができる。

凹底も同じように体部の傾きからさらに分類を行うと、3169・3205・3206・3208・3209は遺存部で体部が直立気味に立ち上がる一群、3168・3170・3172～3174・3176～3181は体部が直線的に外上方へ開く一群、3182・3191・3193・3195～3202は体部の開きがさらに大きい一群、3171・3175・3183・3203は一旦直立気味に立ち上がり、そこから外上方へ開く一群、3184～3190・3194・3197・3199は立ち上がりが内側に屈曲してから外上方へ立ち上がる一群の計5群に分けることができる。

高台底も平底Aと同じように体部の傾きからさらに分類を行うと、3312～3321・3266は遺存部で体部が直立気味に立ち上がる一群、3211～3238は体部が直線的に外上方へ開く一群、3267～3270・3272～3274・3276～3279・3282～3284・3286は体部の開きがさらに大きい一群、3287～3311は一旦直立気味に立ち上がり、そこから外上方へ開く一群、3239～3265・3271・3275・3280・3281・3285は立ち上がりが内側に屈曲してから外上方へ立ち上がる一群の計4群に分けることができる。

多孔底8点のうち、3348・3349の穿孔部を中心に白色物の付着を確認した。遺存状態に差はあるものの、2点共に穿孔部だけでなく器壁にもその付着が認められる。



第255図 3区 包含層出土縄文土器 (52)

浅鉢底部（第255図：3324～3347）

図化できた浅鉢24点のうち、3324・3345の2点が有文浅鉢である。底部の形状は3324が平底A、3345は高台底である。残り22点は無文浅鉢で、底部の形状から3325～3327・3329～3332・3334～3339は平底A、3328・3340は平底B、3333は丸みを帯びた平底C、3341～3347は高台底にそれぞれ分類できる。

平底Aのなかで体部の傾きからさらに分類を行うと、3328・3335・3336・3339は体部が直線的に外上方へ開く一群、3325～3327・3329・3330～3338は体部の開きがさらに大きい一群の計2群に分けることができる。

平底Bでは、3328は体部が直線的に外上方へ開き、3340は直立気味に立ち上がる。平底Cの3333と高台底の7点は、共に体部の開きがさらに大きい。

3区 第二包含層（第256・257図：3356～3418）

第二包含層からの出土遺物は、第一包含層のものと内容的に大きな差異は認められない。後期の土器が大半を占め、中でも中津式・福田KⅡ式・縁帯文成立期のうち縁帯文成立期が主体となる。図化できた土器は、有文深鉢28点・浅鉢16点、無文深鉢7点・浅鉢2点、底部11点の総数63点である。

有文深鉢

中津式の範疇で捉えた一群（第256図：3356・3358・3385・3393）

4点共に平縁口縁で、小片のために文様構成は不明である。3356では、刺突文が認められる。

縁帯文成立期として捉えた一群（第256図：3357・3359～3379・3381～3383）

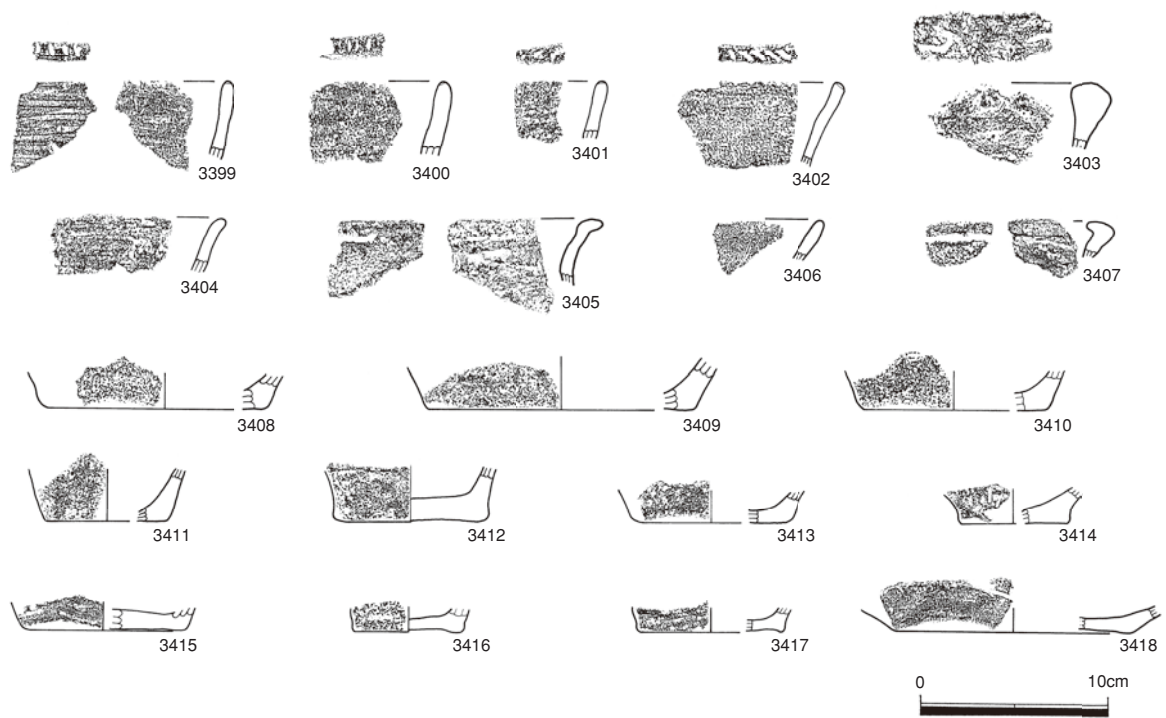
縁帯文成立期の範疇で捉えたのは、22点を数える。3359～3365は口縁端部を内外面に肥厚して、口唇部に沈線1条+刻目を施す。3366～3368も同様に沈線1条+刻目を施すが、この3点は内面に肥厚帯を巡らす。3369は、口唇部に刻目のみ施す。3370～3377は端面の拡張にそれぞれ違いがあるものの、3370～3374は沈線1条を、3375～3377は沈線2条を巡らす。3376は、施工原体に半裁竹管状工具を用いる。3378・3379は縁帯文に属し、3378は口縁端部を内面上方に拡張し、3条の沈線を巡らす。3379は内外面に口縁端部を拡張し、端面に沈線2条を巡らす。3357・3381～3383は、4点ともに縁帯文成立期の深鉢体部片である。

その他の一群（第256図：3388・3398）

3388は福田KⅡ式、3398は縁帯文と思われる深鉢である。3398は口縁端部を外面側のみ肥厚させ、口縁部に縄文と沈線2条を施す。



第256図 3区 第2包含層出土縄文土器 (1)



第257図 3区 第2包含層出土縄文土器 (2)

有文浅鉢 (第256図：3384～3387・3389～3397)

福田KⅡ式として捉えた一群 (第256図：3384・3386・3388～3390・3392・3396)

福田KⅡ式として捉えた一群は6点で、そのうちの3386は鉢である。3386・3389・3392の3点は、文様から宿毛式の可能性がある。

縁帯文成立期として捉えた一群 (第256図：3387・3391)

縁帯文成立期として捉えた一群は、3387・3391の2点である。

その他の一群 (第256図：3380・3388・3394・3395・3397)

3380・3394・3395の3点は集約沈線文、3388は沈線文系、3397は刻目隆帯文系の浅鉢と思われる。

中～後期の無文深鉢 (第257図：3399～3406)

1群 (第257図：3399～3403)

口唇部に施文が認められるものを、1群とした。3399～3402は刻目、3403は沈線文を施す。刻目の形態は、直行するもの (3399～3401) と斜行するもの (3402) が認められる。

2群（第257図：3404～3406）

口唇部に施文が認められないものを2群とし、口縁部および口縁端部の形状から大きく5類に分類した。

2群2類（第257図：3406）

頸部から口縁端部に向かって、ほぼ直線的に外上方へ立ち上がる一群を2類とした。そして、端部肥厚の有無でさらに分類し、肥厚しないものを2a類、肥厚するものを2b類とした。該当するのは3406のみで、2a類で口縁端部を丸く収める。

2群3類（第257図：3404）

頸部から口縁端部に向かって外反する一群を、3類とした。そして、端部肥厚の有無でさらに分類し、肥厚しないものを3a類、肥厚するものを3b類とした。該当するのは3404のみで、3a類で口縁端部を丸く収める。

2群4類（第257図：3405）

口縁端部の内面側に肥厚帯が認められる一群を、4類とした。該当するのは3405のみで、肥厚帯が長く端部をやや丸く収める。

中～後期の無文浅鉢（第257図：3406・3407）

図化できた浅鉢は、2点のみである。口唇部に施文が認められるものを1群、認められないものを2群とし、2点ともに2群に属する。

2群3類（第257図：3406・3407）

体部から口縁端部に向かって緩やかに内彎しながら、あるいは直線的に外上方へ立ち上がる一群を、3類とした。そして、端部の肥厚の有無でさらに分類を行い、肥厚しないものを3a類、肥厚するものを3b類とした。口縁端部の形状から3406は3a類、3407は3b類に属する。小片だが、体部は外上方へ直線的に立ち上がり、3407は口縁端部を内面側に肥厚させて収める。

底部（第257図：3408～3418）

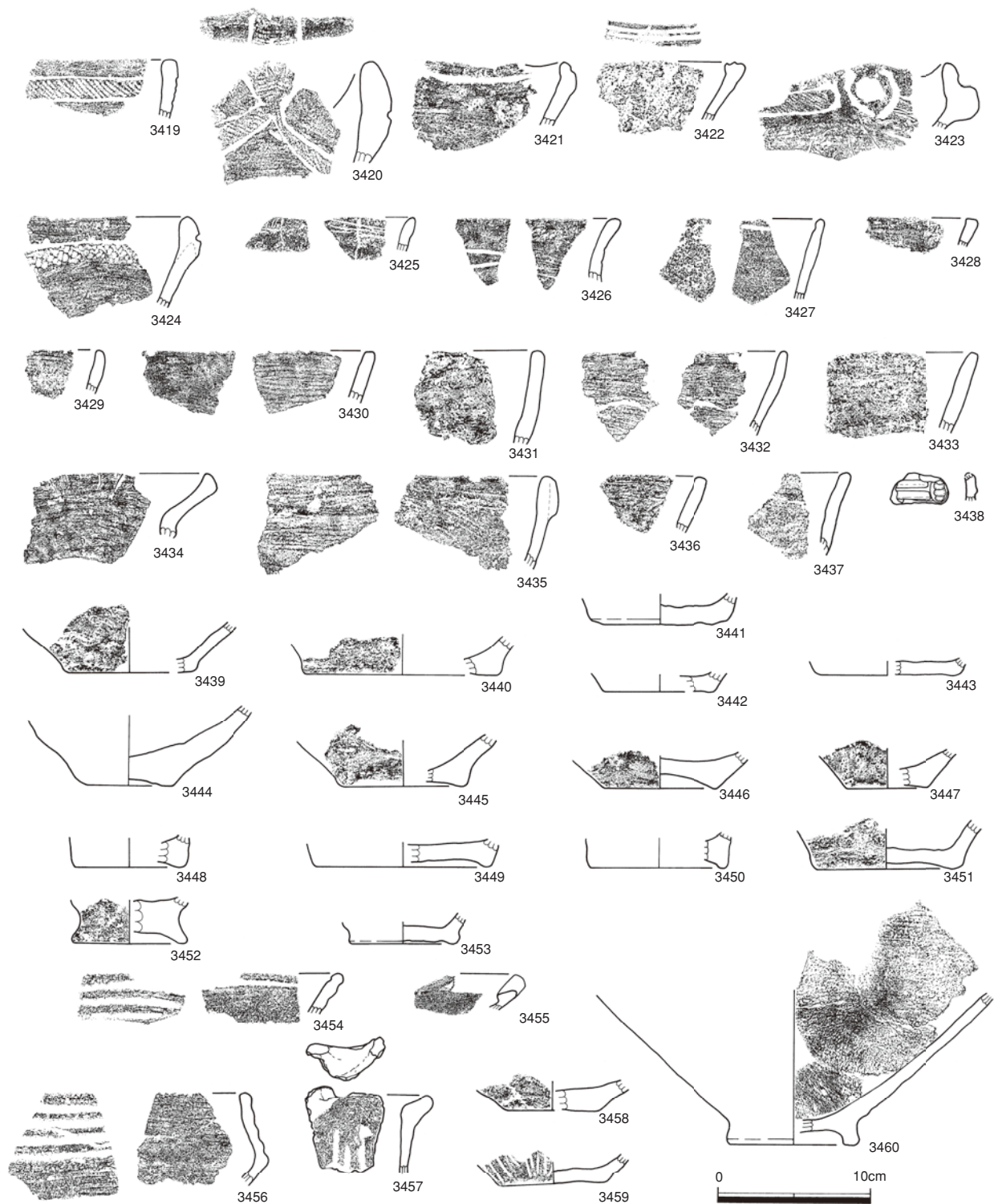
11点図化できた底部は、3418以外は深鉢の底部である。深鉢10点のうち、底部の形状から3408～3411・3413・3414の6点は平底A、3412・3415は平底B、3416・3417は高台底に分類できる。また3414のみ有文深鉢の底部で、残り9点は無文深鉢の底部である。

平底Aのなかで体部の傾きからさらに分類を行うと、3408～3411・3413は体部が直線的に外上方へ開く一群、3414は一旦直立気味に立ち上がり、そこから外上方へ開く一群に分けることができる。

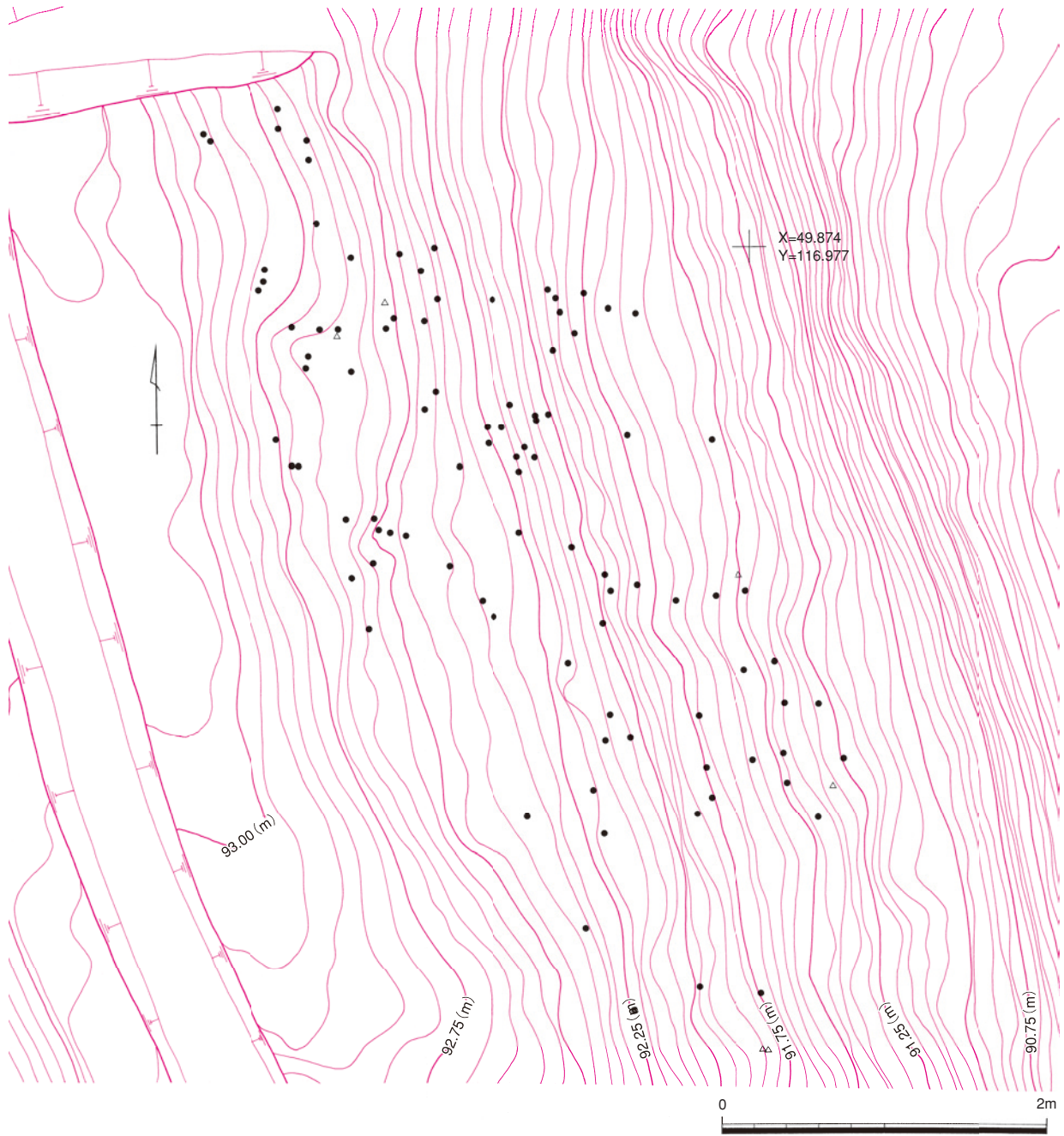
浅鉢は3418の1点のみで、凹底に分類できる。

5-1～3区（第258図：3419～3460）

本調査区では、次に述べる5-4・5区と同じように後期を中心とする土器の出土が認められた。晩期は、3455のみの1点である。出土点数は少なく、その中で図化できたのは42点で、深鉢（3419～3453）35点、



第258図 5-1~3区 包含層出土縄文土器

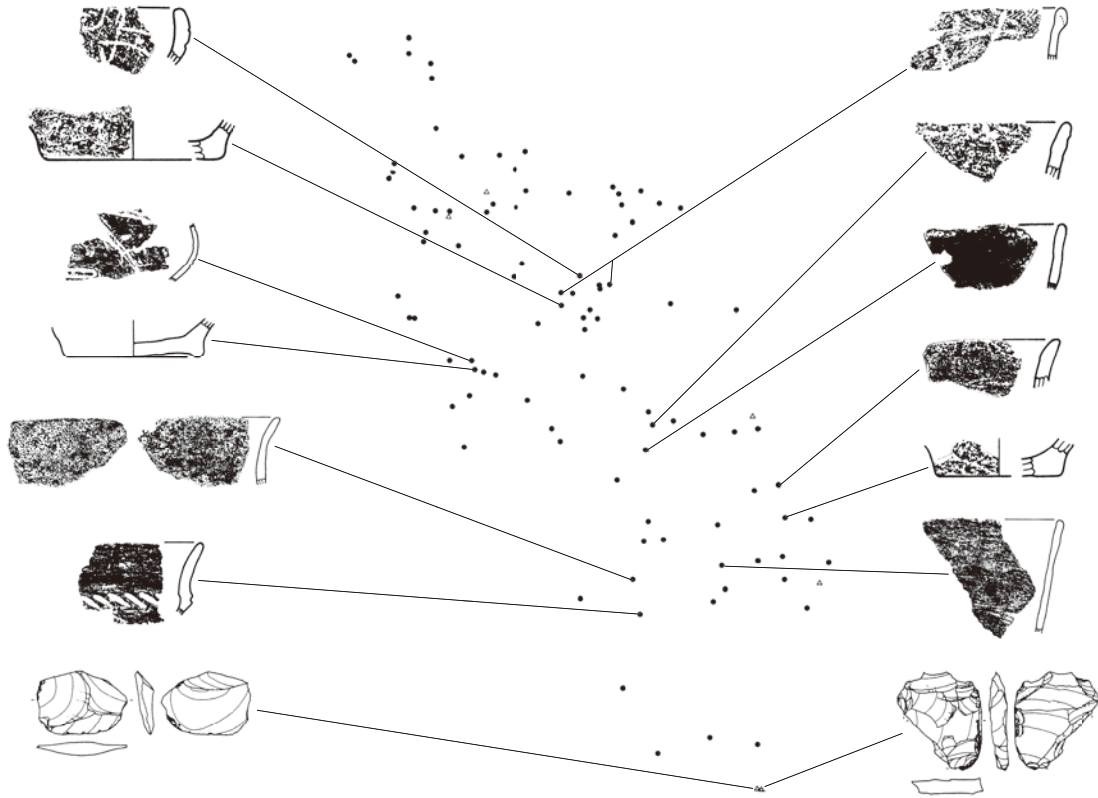


第259図 5-5区 包含層出土遺物状況図

浅鉢 (3454~3456・3458~3460) 6点、注口土器 (3457) 1点である。

後期の有文深鉢 (第258図：3419~3427・3438)

3419・3420は中津式、3421は福田KⅡ式、3422は縁帯文成立期、3423~3425は縁帯文期 (3423・3424は津雲A式、3425は彦崎KⅠ式)、3426は沈線文、3427・3438は凹線文にそれぞれ比定できる。また後期でも、3419~3422は後期前葉、3423~3425は後期中葉、3426~3427・3438は後期後葉あるいは後期後半となる。3438では遺存状態が悪いものの、巻貝を用いた扇状圧痕が認められる。3425は胎土に角閃石を含むことから、讃岐からの搬入品の可能性がある。



第260図 5-5区 遺物出土状況図

無文深鉢（第258図：3428～3437）

3434・3437以外の8点には外面に条痕が認められ、そのうちの3430・3432・3435の3点では、施工原体に巻貝を用いる。3435は胎土に角閃石・金雲母を含むことから、讃岐からの搬入品の可能性が高い。

底部（第258図：3439～3453）

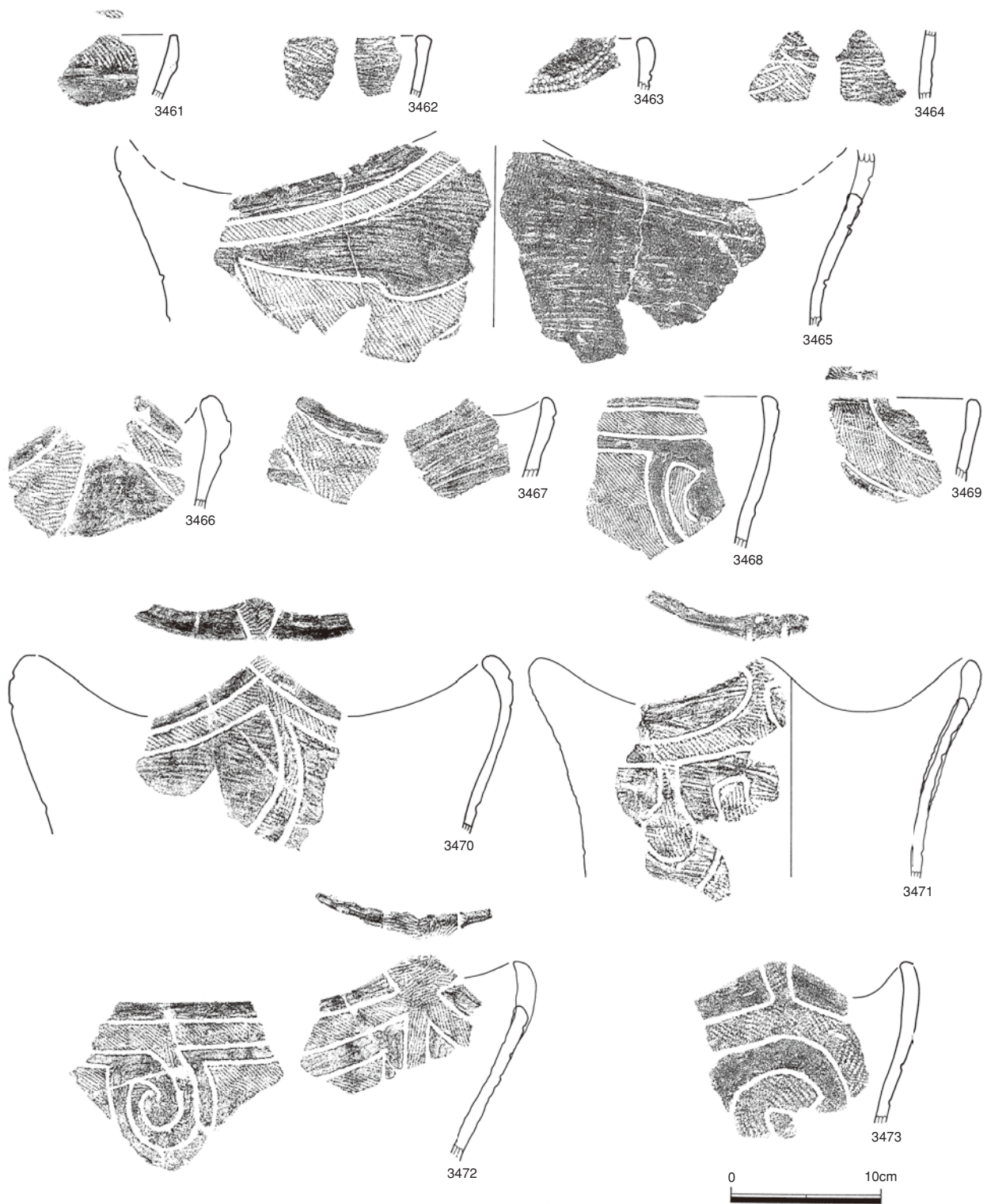
底部15点のうち、それぞれの形状から3439～3443は平底A、3444～3447は凹底、3448～3453は高台底に分類できる。

浅鉢（第258図：3454～3456・3458～3460）

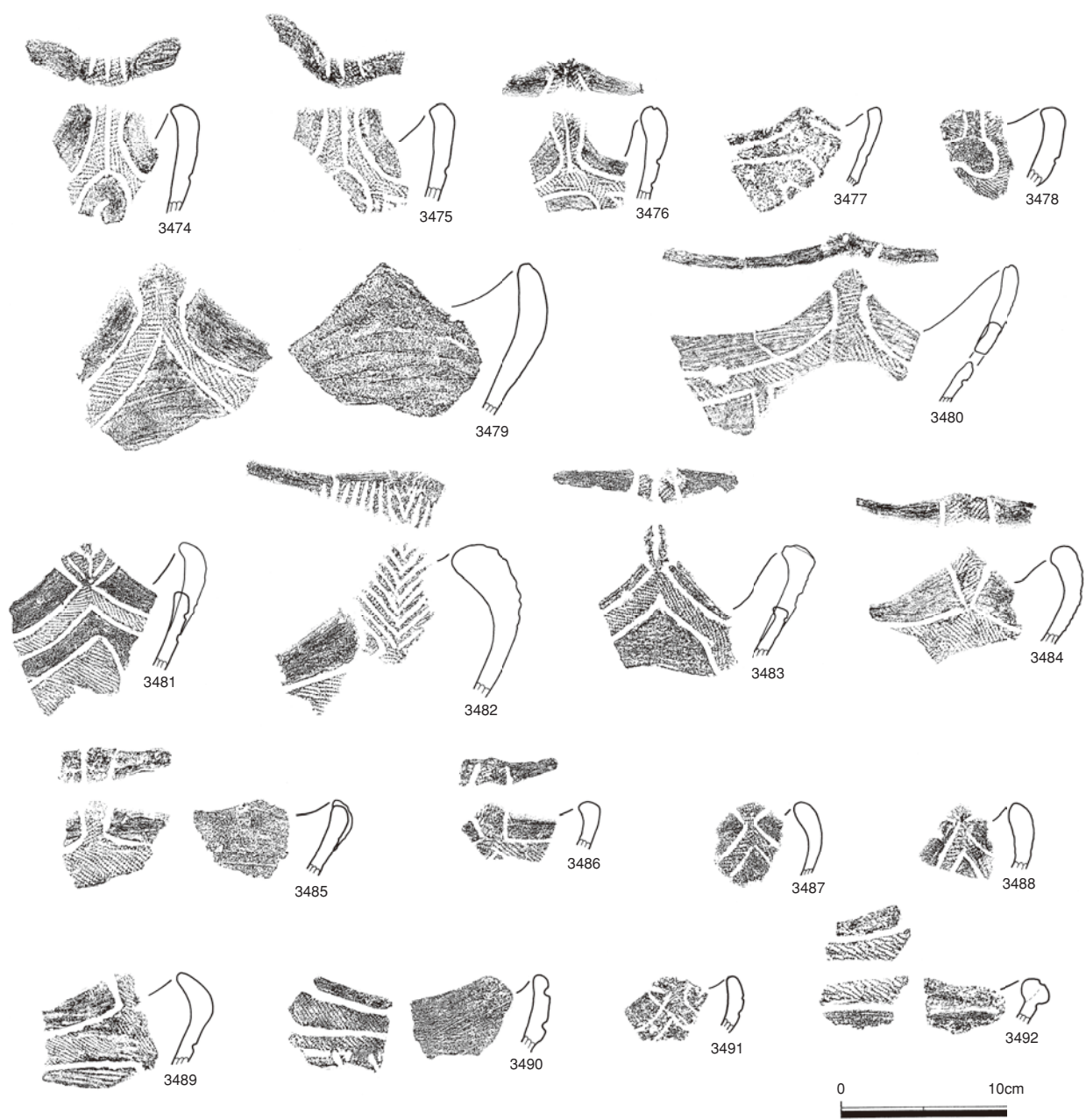
浅鉢は、3454・3456は凹線文系、3455は晩期中葉の無文浅鉢である。図化できた底部3点のうち、3458は平底A、3459は凹底、3460は高台底である。

5-4・5区（第259～314図）

本調査区では後期を中心とし、中津式・福田KⅡ式（宿毛式）・縁帯文成立期（松ノ木式）・縁帯文期（津雲A式・なつめの木式）に該当する土器の出土量が多い。また包含層掘削中に、土器・石器が集中して出土する地点が確認された（第259・260図）。しかしこれらの遺物は、位置は押さえられているものの高さが不明である。位置的に第6図ベルト③と近接しており、これらの遺物は4～10層中から出土したと推測できる。また分類に際して型式を比定するのに困難なものもあり、それは大きく捉えた。図化できた土器は、有文深鉢523点・浅鉢68点、無文深鉢776点・浅鉢199点である。



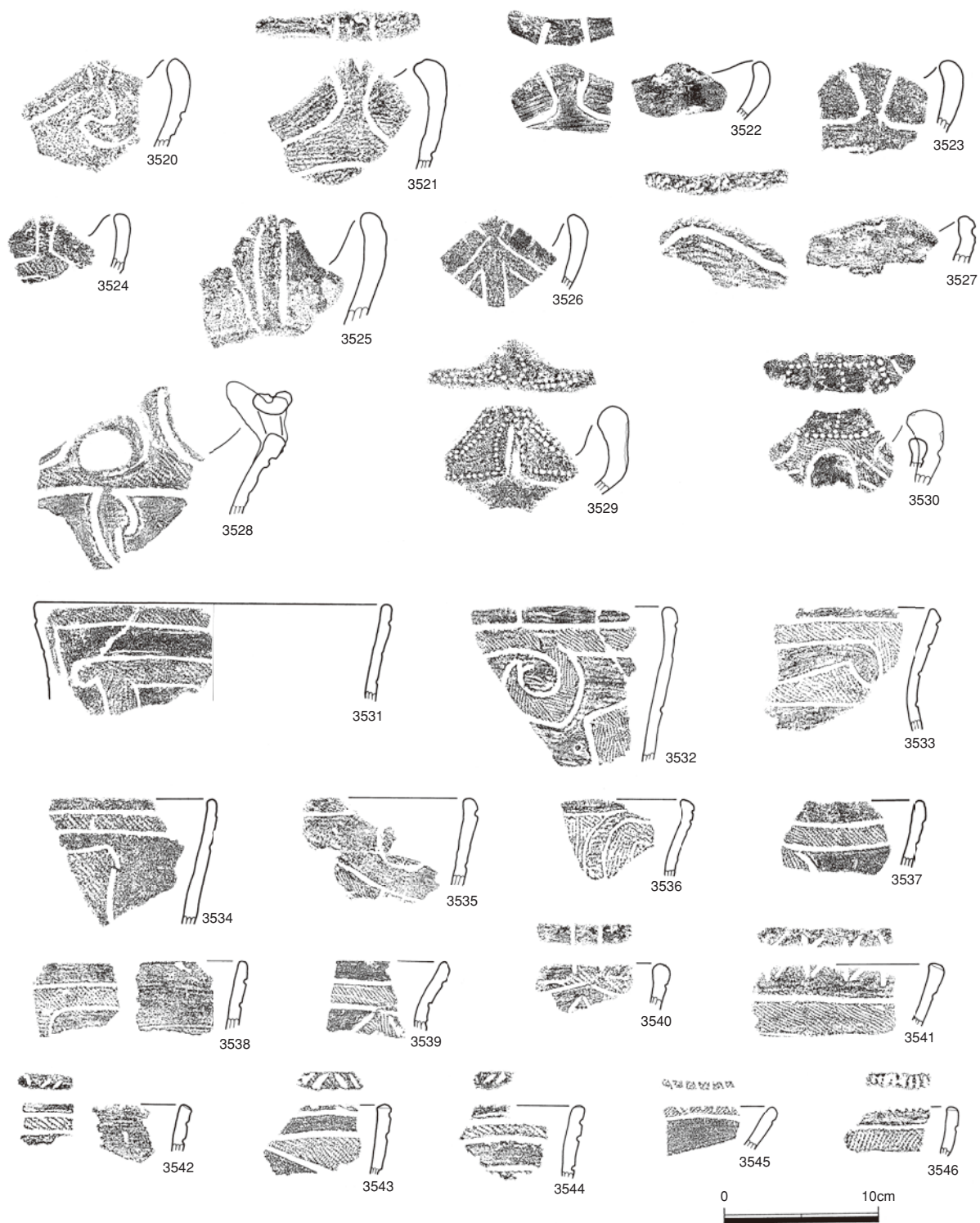
第261图 5-4·5区 包含層出土繩文土器 (1)



第262図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (2)



第263图 5-4·5区 包含層出土繩文土器 (3)



第264図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (4)



第265図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (5)

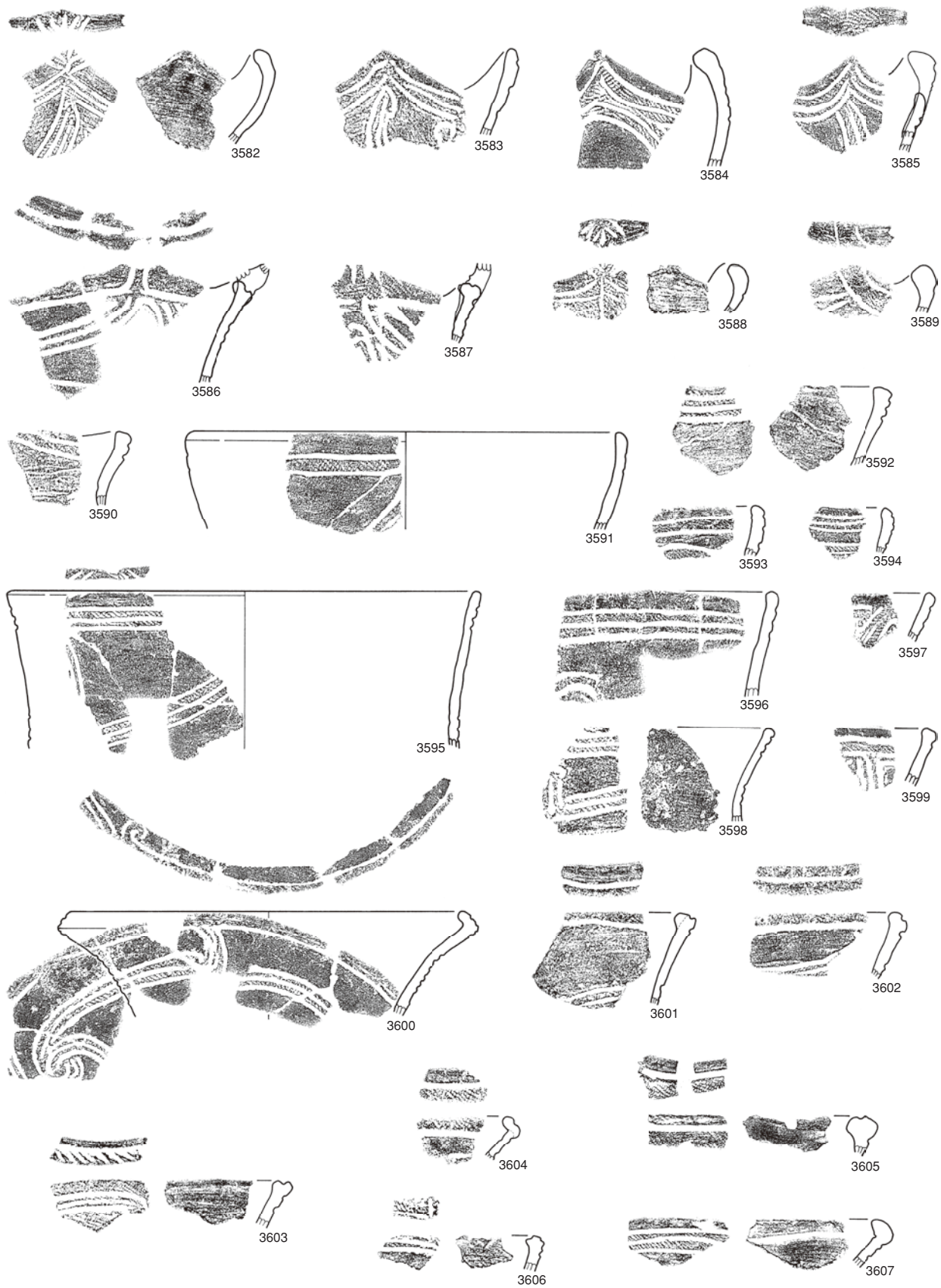
有文深鉢 (第261～281図)

有文深鉢 (3461～3983) のうち、中期に属する土器は4点 (3461～3464) である。3461は北白川C式、3462は全縄文系、3463は船元式、3464は型式不明である。ほぼ中期末に比定できる。

中津式の範疇で捉えた一群 (第261～265図：3465～3527・3529～3581)

3465～3469の5点は、縄文帯の幅が一定しないと思われる一群である。

3470～3530は山形口縁・波状口縁を持つ一群である。この一群をさらに文様で小分類すると、渦巻き文 (3470～3478)、紡錘文 (3504～3510)、小片のために文様構成が不明なもの (3479～3503・3511～3519) となる。

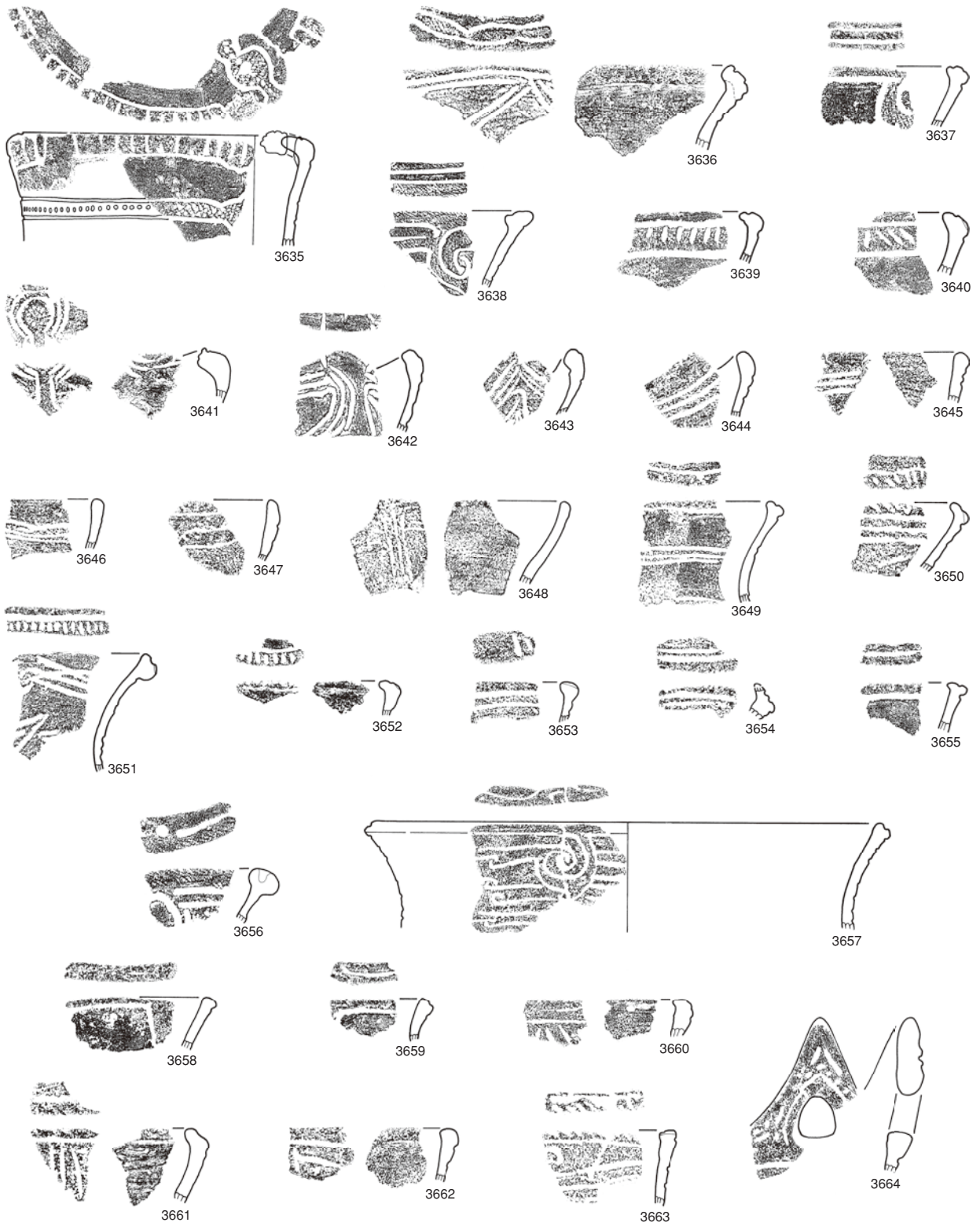


第266図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (6)

0 10cm

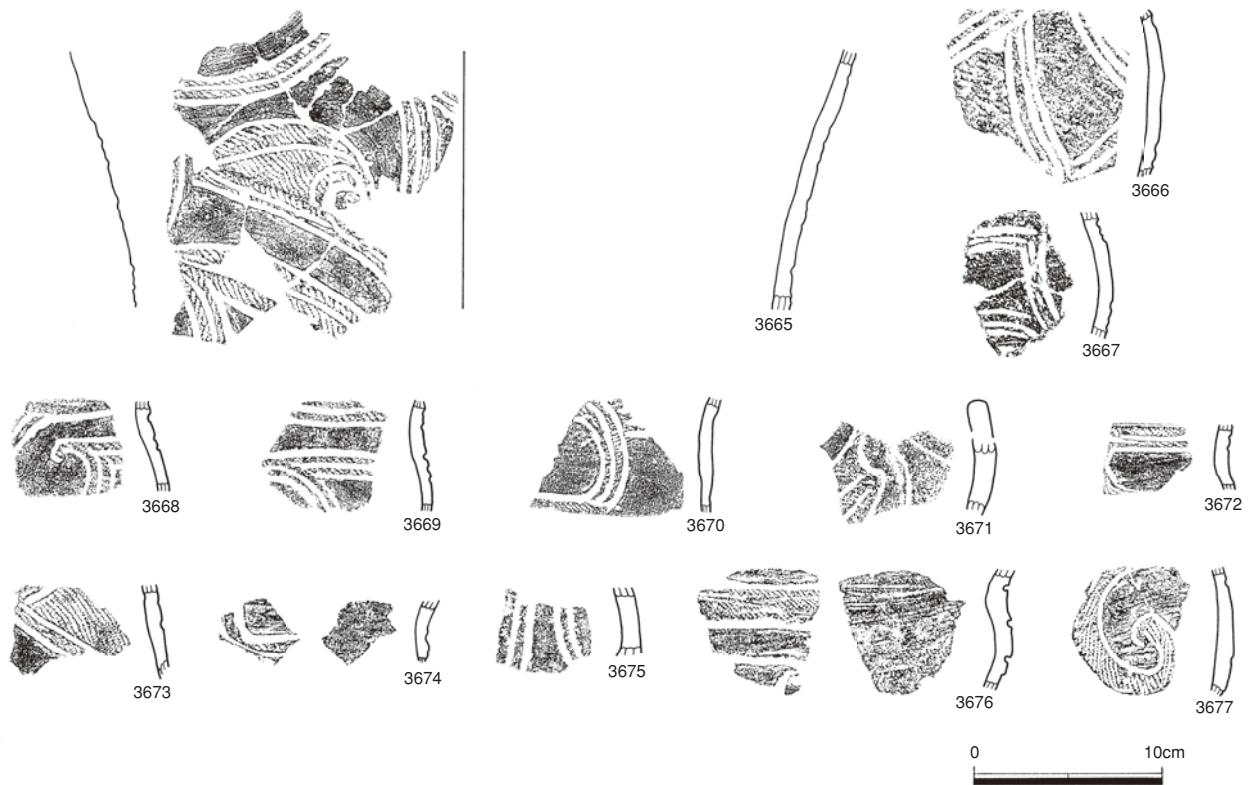


第267图 5-4·5区 包含層出土繩文土器 (7)



0 10cm

第268图 5-4·5区 包含層出土縄文土器 (8)



第269図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (9)

3520～3526は縄文帯が認められず、沈線のみで文様が描かれた一群である。

3427は、巻貝による疑似縄文を施す。3528は、縁帯文系である。3529・3530の2点は、中津式としたが型式不明な一群である。

3531～3575は、平縁口縁を持つ一群である。口縁部の形態でさらに細分すると、3531～3566はほぼ直線的に立ち上がり、3567～3575は内彎する。小片が多いために文様の不明なものが多数を占めるが、渦巻き文(3532・3536)・スベード文(3533)・紡錘文(3539・3540)が認められる。また3541～3546の口唇部に、刻目が施される。3576～3581は、体部片である。

福田KⅡ式の範疇で捉えた一群 (第266～269図：3582～3677)

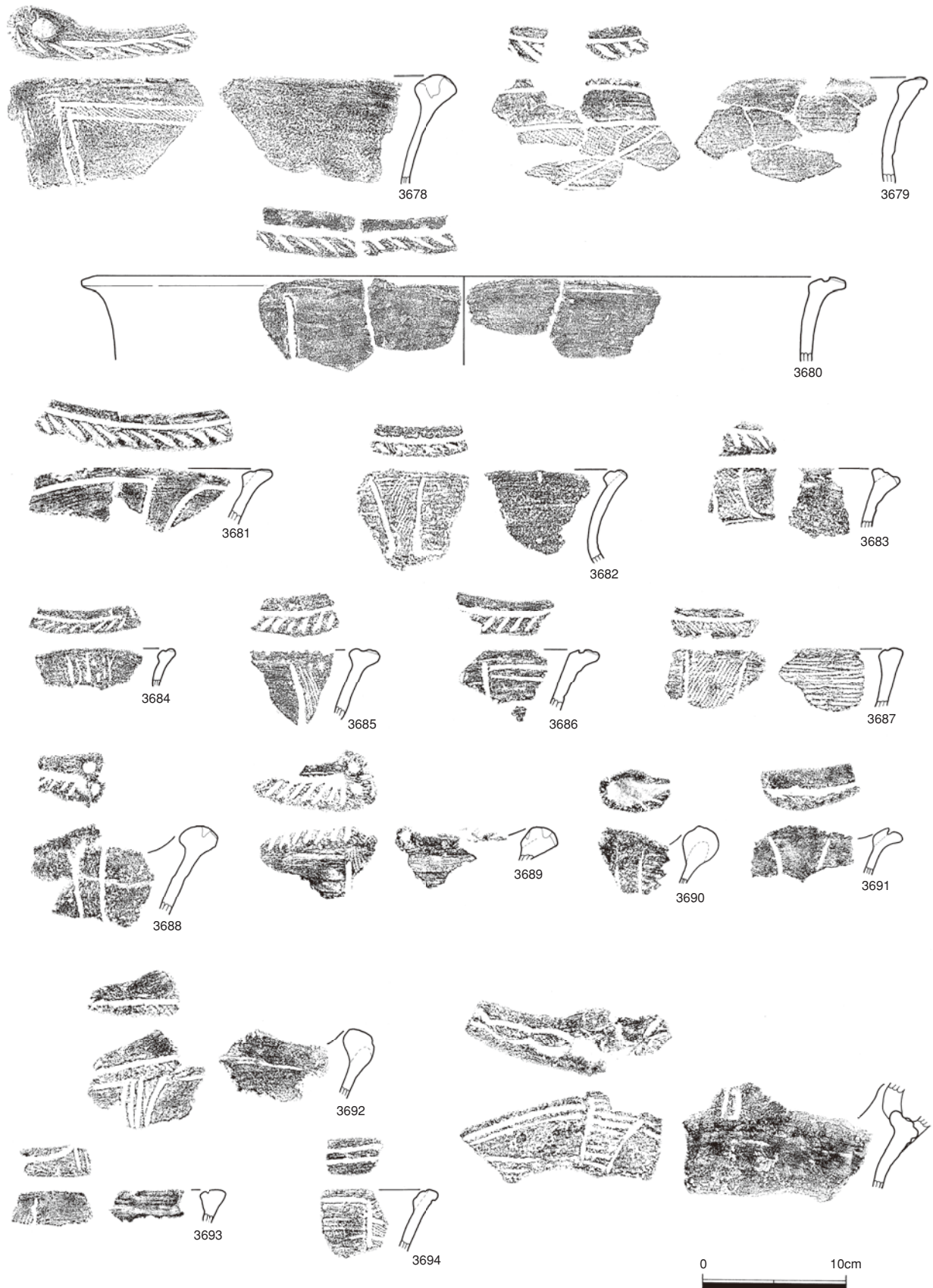
2条の沈線による文様帯が施された一群が、3582～3612である。その中で山形あるいは波状口縁を持つのが3582～3589、平縁口縁を持つのが3591～3610である。3611・3612は福田KⅡ式の範疇で捉えたが、文様構成に異なる点が認められる。

2条の沈線による文様帯が施された一群が、3613～3640である。沈線間には縄文が認められる。また2～3条の沈線のみで文様を描いた一群が、3641～3664である。この一群には縄文が施されないが、出土遺物が小片により先の一群に含まれる可能性もある。

3665～3677は、体部片である。3665～3670は3条の沈線、3671～3677は2条によって文様が描かれる。そのうち3666・3667・3675の3点は、沈線のみで文様が描かれる。

縁帯文成立期で捉えた一群 (第270～273図：3678～3780)

縁帯文成立期として捉えたのは、103点である。



第270图 5-4-5区 包含層出土縄文土器 (10)



第271图 5-4·5区 包含層出土縄文土器 (11)



第272図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (12)



第273图 5-4-5区 包含層出土縄文土器 (13)

3678・3679・3725・3732・3738の5点は、器形は縁帯文成立期に属するものの文様構成に前段階の特徴が認められ、頸部に文様帯が施される一群である。文様は沈線と縄文帯で描かれ、口唇部には沈線+刻目、沈線+縄文、刺突文が施される。

3680～3695の16点は、頸部にいわゆる梯子状の文様が施される一群である。梯子状といっても、縦方向に沈線2条のみを施すものから、沈線2条の間に横位の沈線を何条か施して梯子状に見えるもの、あるいは沈線2条の間に充填縄文・縦方向の沈線を施すものなど、様々な文様構成が存在すると思われる。また、これらの口唇部に施された文様は沈線+刻目が主体であり、それ以外は刻目+沈線文+刺突文(3688・3689)、沈線+縄文のみ(3687・3691～3693)、沈線のみ(3694)、凹線のみ(3690)となる。また3682・3689・3695の3点には、沈線+刻目を施す前に縄文が認められる。

3696～3704は、口唇部に刻目のみ施す一群である。刻目は3696～3700では直行、3701～3704は斜行である。

3705～3731は、口唇部に沈線+刻目を施す一群である。また、沈線+刻目以外に刺突文を施すものも認められる。口縁端部の形態から、口唇部がだんだんと幅広くなり肥厚していく一群(3705～3714)、さらにそれが進み、口唇部が幅広でより肥厚する一群(3718～3724)、口縁端部が肥厚し、内傾する一群(3725～3731)に細分可能である。

3733・3739・3740は口唇部に沈線+縄文を施す一群、3734～3737・3741は沈線1条のみ施す一群、3742～3748は多条沈線を施す一群である。

3749～3776は、口縁部に主に沈線のみ施す一群である。口縁部の形態から、断面形態が肥厚により三角形を呈する一群(3749～3754)、さらに肥厚し上下方向あるいは上方向に拡張する一群(3755～3763)、拡張の度合いがさらに強い一群(3764～3772)、内傾する一群(3773～3776)に細分可能である。口縁部の施文は、端面に沈線を1ないしは2条(3749・3750・3753)、沈線+刺突文(3751・3762・3768)、沈線+縄文(3755～3760・3763・3765～3767)がそれぞれ施される。

3777～3780は、口唇部に凹線を巡らす一群である。

沈線文系の一群 (第274図：3781～3792)

沈線文系として捉えたのが、12点である。3781～3783では、口唇部にも沈線が施される。

縁帯文系の一群 (第274～278図：3793～3905)

縁帯文期の範疇で捉えたのは、113点を数える。口縁部の主文様として、刺突文や沈線で描かれた円文や渦巻き文に沈線2条を巡らせて縄文を施す、あるいは沈線で枠状区画文を巡らせて縄文を施すものが認められる。また口縁部の形態によって主文様は若干異なり、山形口縁では波頂部に円孔・円文・縦方向の沈線文が認められる。頸部は無文で条痕やナデが多く認められるが、そのうえに細密条痕や沈線を施すものもある。

口縁部の形態は、口縁端部を肥厚させ断面三角形を呈し(3793～3880)、個体によって上方あるいは上下方向に拡張するのが認められる(3865・3877～3880)。拡張の度合いが強い5点のうち、3878～3880は沈線3条を巡らせる。また平縁口縁で、肥厚があまり認められずにほぼ頸部からの厚みのまま上方へ大きく拡張する個体がある(3887・3890・3891・3893・3895～3901)。これらの口縁部の主文様は、2ないしは3条の沈線あるいは枠状区画文を巡らせ、縄文を施す。2条の沈線間に縄文を施す個体が大半を占



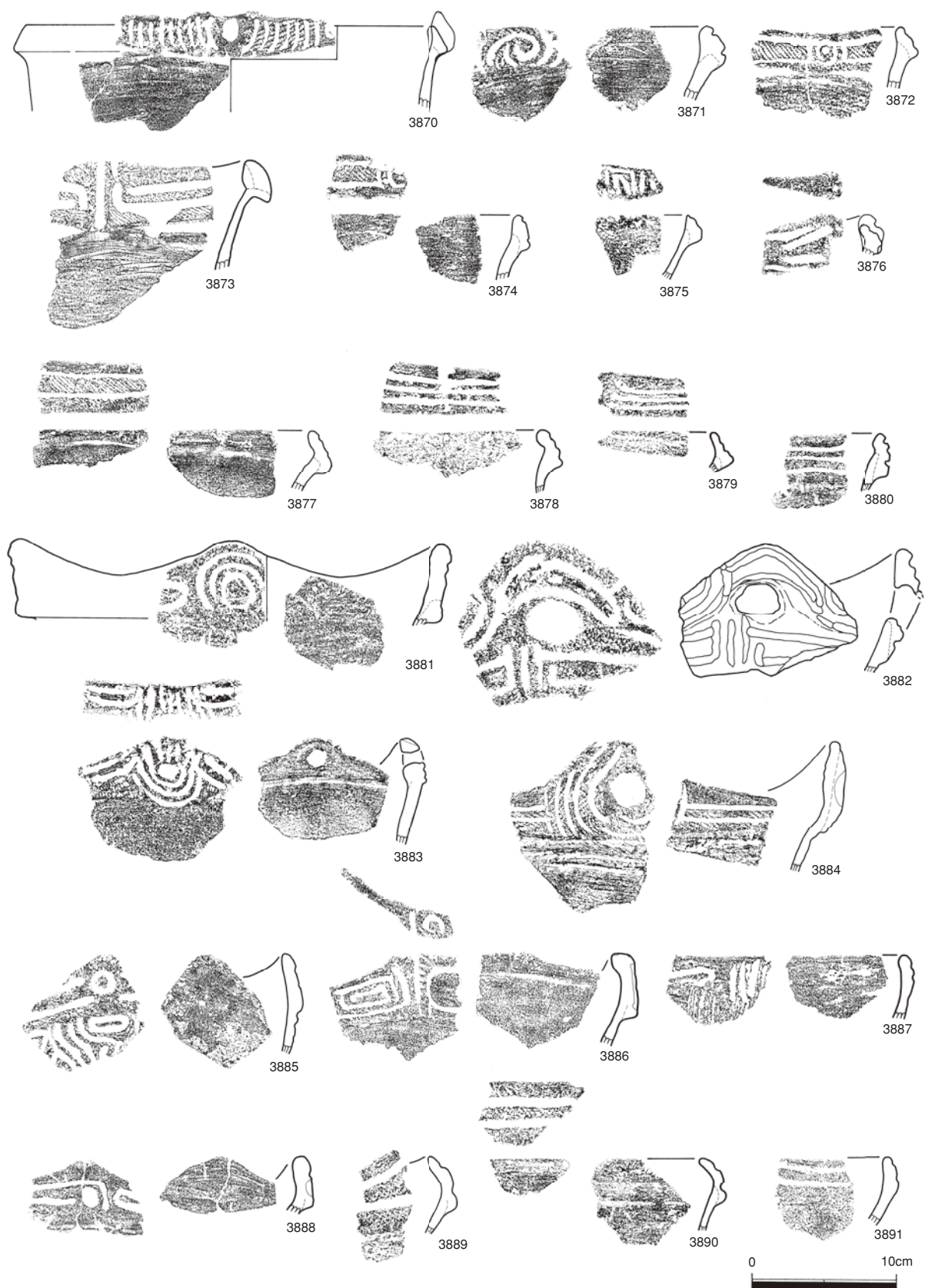
第274图 5-4·5区 包含層出土縄文土器 (14)



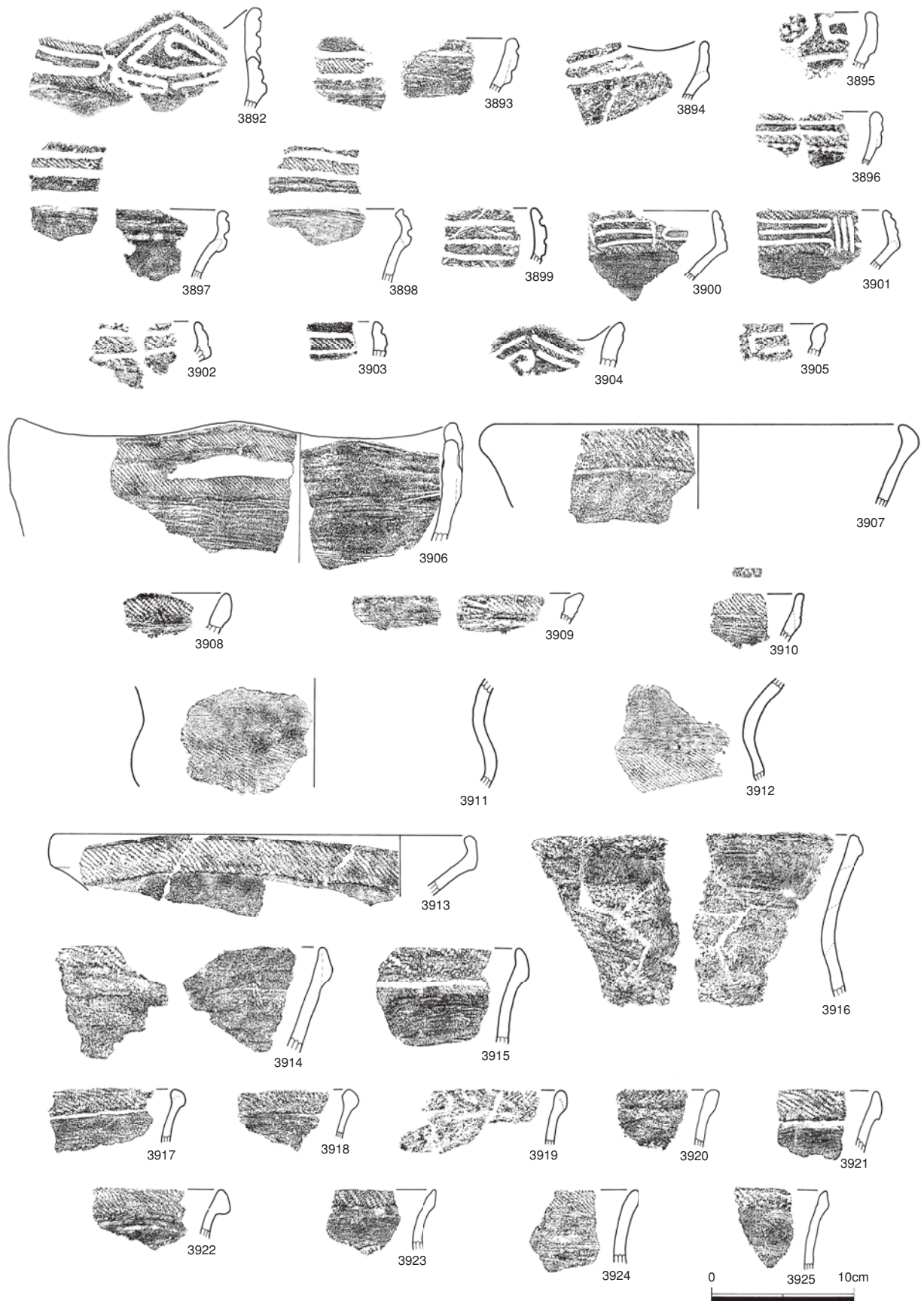
第275图 5-4·5区 包含層出土縄文土器 (15)



第276图 5-4·5区 包含層出土縄文土器 (16)



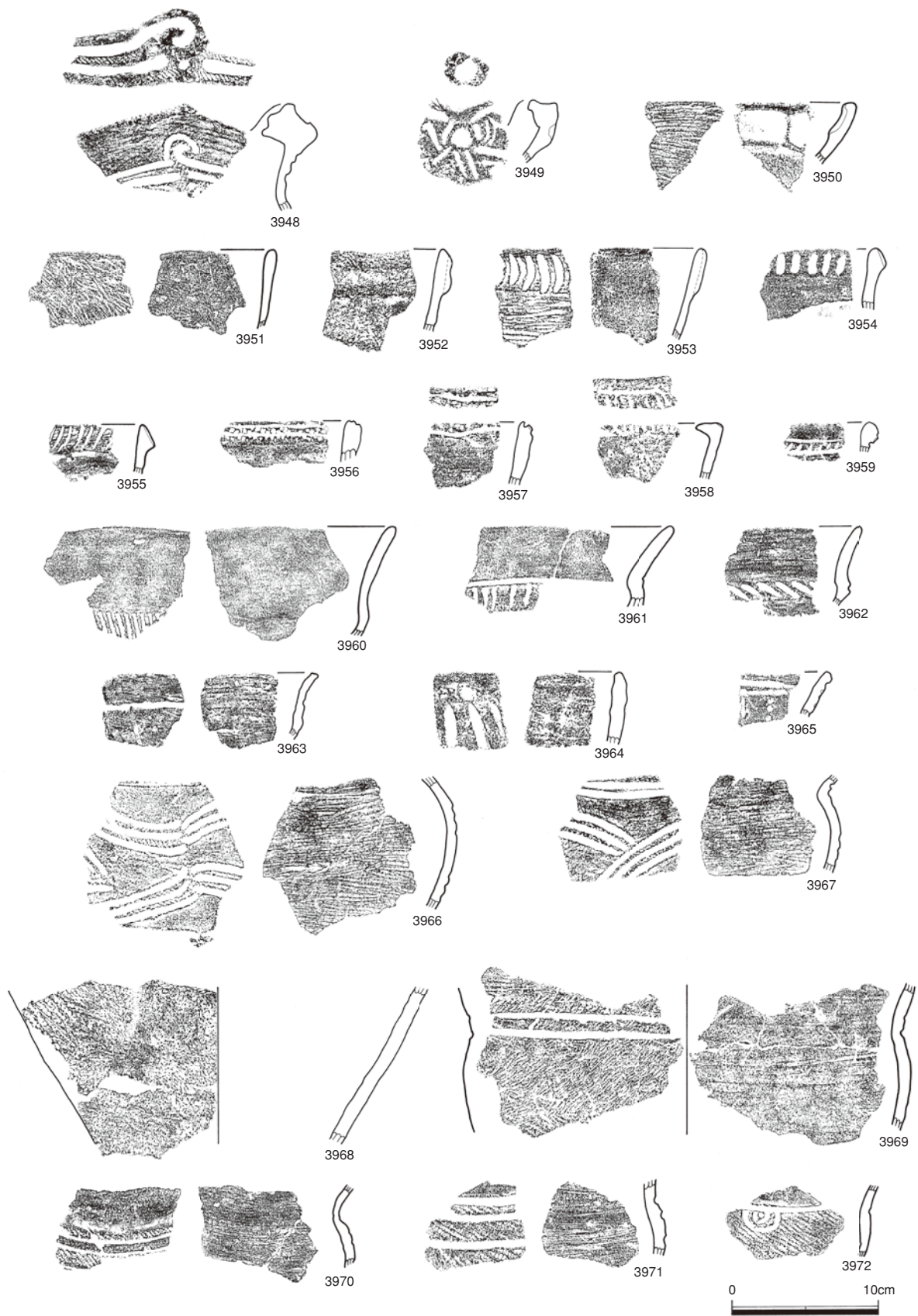
第277图 5-4·5区 包含層出土縄文土器 (17)



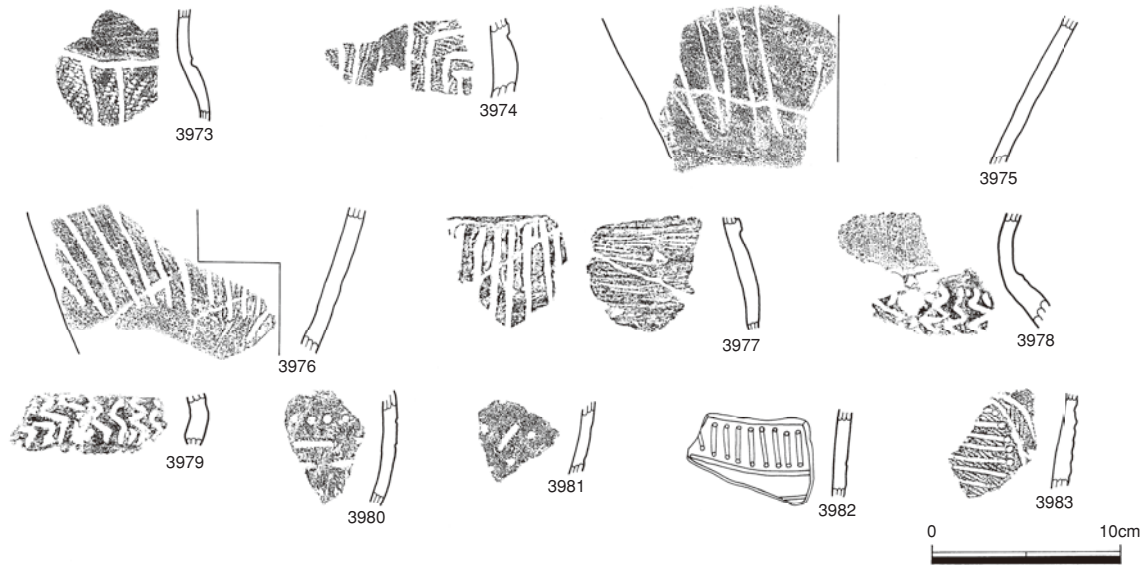
第278図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (18)



第279图 5-4-5区 包含層出土縄文土器 (19)



第280図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (20)



第281図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (21)

めるが、3895・3896・3900・3901の4点では沈線の外側に縄文を施す。

素縄文系の一群 (第278図：3906～3927)

口縁部と体部は縄文、頸部はナデ・条痕を施す一群で、図化できたのは22点を数える。3906は波状口縁で口縁部幅が広く、中央に圧痕が認められる。口縁端部は、丸く収めるもの(3906)、やや尖り気味に収めるもの(3908・3909)、方形に収めるもの(3910)、外面側に肥厚させて断面三角形に収めるもの(3914～3916・3921～3923・3925)、肥厚させて丸くあるいは方形に収めるもの(3917～3920・3924)がある。また、口縁部がくの字状を呈するものもある(3907・3913)。

凹線文系の一群 (第279図：3928～3936)

口縁部外面に2～3条の凹線が施される一群で、図化できたのは9点を数える。3928は内面にも凹線1条を、3933は口唇部に刺突文+凹線1条を施す。3935は、晩期の可能性も考えられる。

形式不明の一群 (第279図：3937～3959・3964・3965)

形式不明の一群としたが、有文深鉢以外も含まれる。3944・3945・3951・3952は無文深鉢、3938は無文の壺か。3943は横位方向に沈線で区画文を施す鉢、3950は内面に圧痕が認められる無文浅鉢である。

ここに掲載した一群は、縁帯文成立期～縁帯文期に属すると考えられる。3937は山形口縁を持ち、波頂部に円孔が認められる。遺存部の外面体部は、条痕を施す。3939は口唇部に横位の刻目を2列、3940・3941は口唇部に沈線1条+横位の刻目を施す。3939と3940は、刻目の前に縄文を施す。3942は縁帯文期の深鉢と考えられ、沈線+刻目+刺突文を施す。3946は、有文深鉢の一部か。3947～3949は山形口縁を持つ深鉢で、3947は口唇部に巡らした沈線間に縄文を施す。3948の波頂部は内面側に肥厚し、沈線文+刺突文を施す。体部は、沈線による渦巻文が認められる。3949の波頂部端部は押圧痕があり、外面は刺突文+沈線による幾何学文が描かれる。3953～3955は口縁部外面に刻目が認められ、3956は口唇



第282図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (22)

部に沈線文2条+刺突文を施す。3957～3959は口縁部に刻目+沈線が認められるが、3957・3958は口唇部にも施す。3960～3963は頸部から口縁部にかけて外上方へ開く形態をもち、頸部に沈線+刻目、あるいは刻目のみ施す一群である。刻目隆帯文系の浅鉢か。3964・3965は、沈線文・刺突文を施す。

縁帯文成立期～縁帯文系の体部片（第280・281図：3966～3983）

出土した体部片のうち、18点図化できた。そのうち3980～3983の4点は、形式不明である。

有文浅鉢（第282・283図：3984～4052）

有文浅鉢のうち中期に属する土器は2点（3984・3985）で、3984は船元式、3985は型式不明である。

中津式の範疇で捉えた一群（第282図：3986・3987・3989～3992・3994～3996）

図化できた9点はすべて平縁口縁で、3989の紡錘文以外は小片のため文様構成が不明である。

福田KⅡ式の範疇で捉えた一群（第282図：3988・3993・3997～4019）

福田KⅡ式として捉えた一群は、24点である。小片のために文様構成が不明瞭なものもあるが、3条沈線+縄文による文様帯が施された一群が4000・4004～4012、2条沈線+縄文による文様帯が施された一群が3999・4015である。また2～3条の沈線のみで文様を描いた一群が、3988・4013である。

4018は体部片で入組文が認められ、4017は朱の付着が認められる。4019は、福田KⅡ式～縁帯文成立期か。

刻目隆帯文系の一群（第283図：4020～4026）

刻目隆帯文系として捉えた一群は、7点である。隆帯に刻目を施すもの（4022～4025）と、隆帯を持たずに頸部に刻目を施すもの（4020・4021・4025・4026）がある。口縁部の形態では、頸部から外上方へ向かって大きく開くもの（4020・4022・4024～4026）と、丸く屈曲するもの（4021・4023）がある。

縁帯文成立期として捉えた一群（第283図：4027～4033）

縁帯文成立期として捉えた一群は、7点である。4027・4030は口縁部に沈線1条+刻目、4031・4032は沈線1条を施す

縁帯文系の一群（第283図：4034～4042）

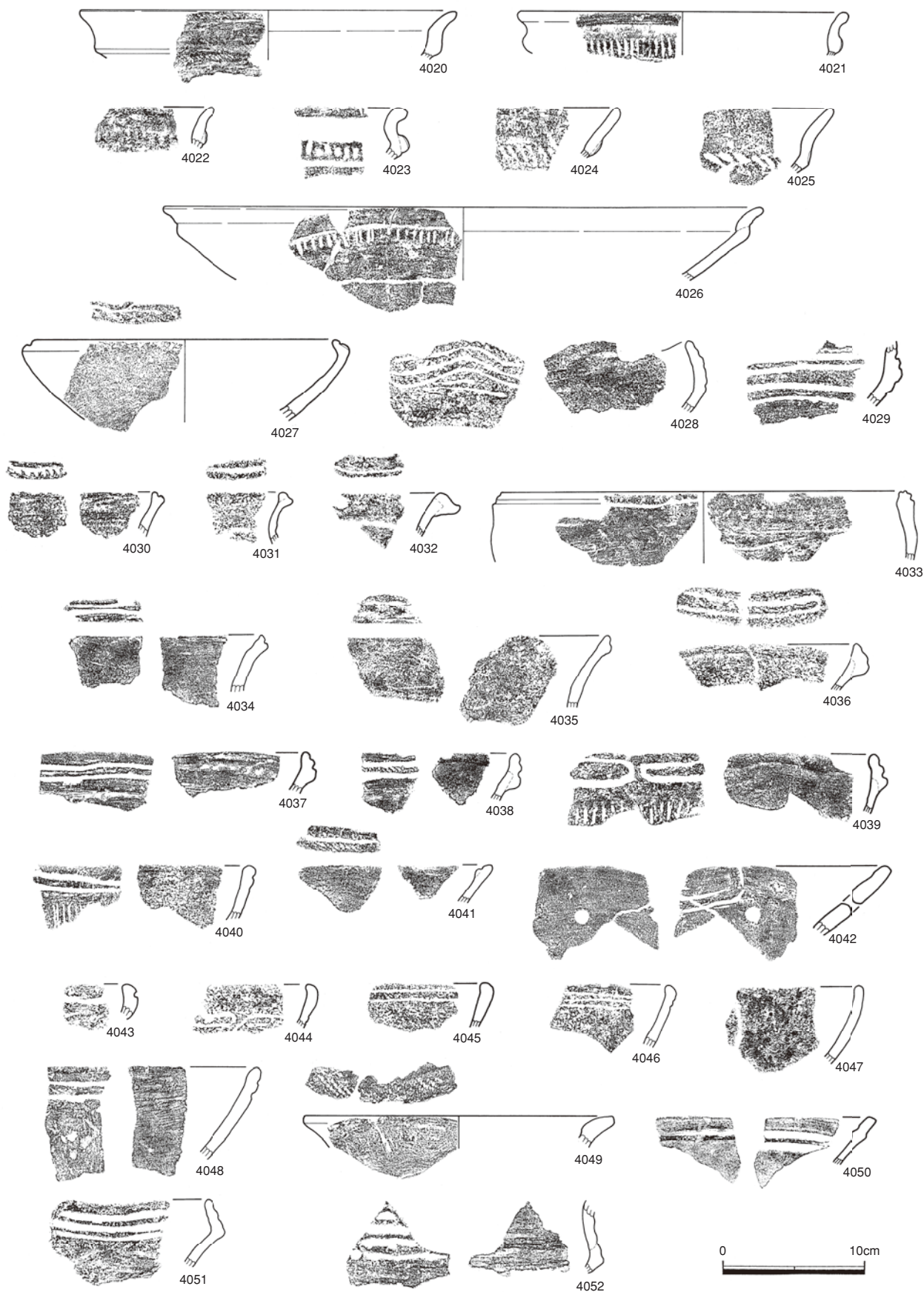
縁帯文系として捉えた一群は、9点である。4041・4042以外の7点には口縁部に沈線2条が巡らされ、4036・4039は口縁部に杵状区画文、頸部に細密条痕を施す。4042は、沈線による施文が内面に認められる。

その他の一群（第283図：4043～4052）

4043～4048は沈線文系の、4050～4052は凹線文系の浅鉢と思われる。4044は福田KⅡ式、4049は素縄文系の浅鉢か。

中～後期の無文深鉢（第284～302図：4053～4828）

5・4・5区出土の無文深鉢は、776点図化できた。その中で、内外面に条痕のみが認められる個体は307



第283図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (23)

点を数え、条痕の施工原体には巻貝・二枚貝も認められる。出土した深鉢は小片が多く、図化できた個体のなかに無文深鉢でないものも含まれている可能性が考えられるが、明確に別器種と判断できない場合は深鉢に含めて分類を行った。

1群（第284・285図：4053～4122）

口唇部に施文が認められるものを、1群とした。4053～4110は刻目、4111～4120は刺突文、4121・4122は縄文を施す。刻目の形態では、直行するもの（4056～4090）と斜行するもの（4091～4110）以外に、V字形を呈するものが3個体（4053～4055）認められる。刺突文の施工原体には、棒状工具（4111～4118）と竹管状工具（4119・4120）の二種類認められる。

2群（第285～302図：4123～4828）

口唇部に施文が認められないものを2群とし、口縁部および口縁端部の形状から大きく5類に分類した。

2群1類（第285～288図：4123～4237）

頸部から口縁端部に向かって緩やかに内彎しながら立ちあがる一群である。口縁端部の形状はさまざま、4123～4178は口縁端部を丸く、4179～4193は端部をやや尖り気味に収める。4194～4234は端部を方形に収めるがさらに細分可能で、端部上面がやや水平なもの（4194～4215）とそうでないもの（4216～4234）に分けることができる。4235～4237の3点のみ、波状・山形口縁を呈する。

2群2類（第289～296図：4238～4626）

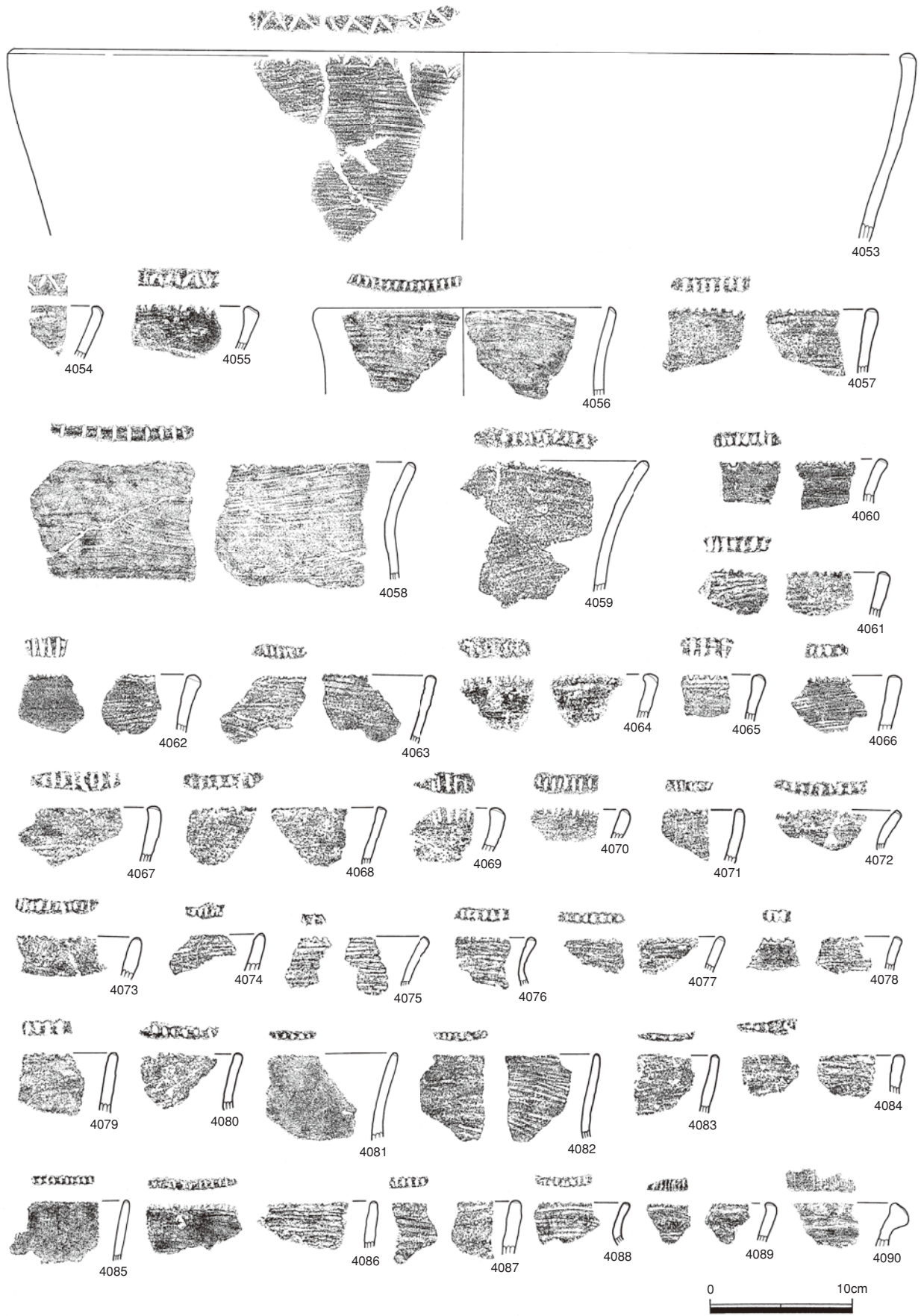
頸部から口縁端部に向かってほぼ直線的に外上方へ立ち上がる一群を、2類とした。そして、端部肥厚の有無でさらに分類し、肥厚しないものを2a類、肥厚するものを2b類とした。

2群2a類（第289～294図：4238～4527）

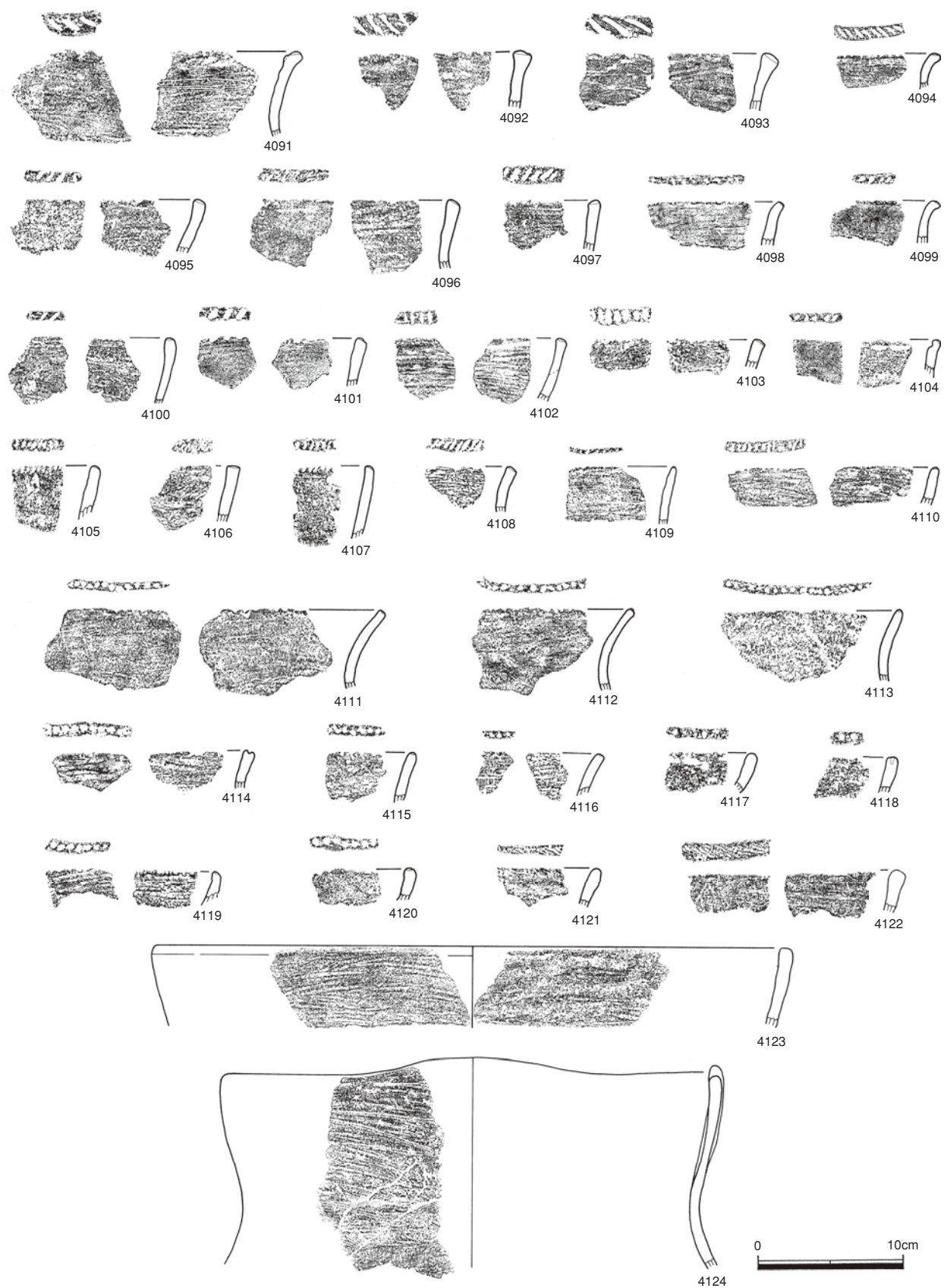
頸部から口縁端部に向かってほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、端部をそのまま収める。端部の形状からさらに細分可能で、4238～4393は口縁端部を丸く収め、4394～4439は尖り気味に収める。尖り気味に収めたもののうち、4410～4439はさらに端部を細く尖らせて収める。4440～4523は端部を方形に収めるが、端部上面がやや水平なもの（4440～4475）とそうでないもの（4476～4523）に分けることができる。4524～4527の4点のみ、山形口縁・波状口縁をもつ。

2群2b類（第295・296図：4528～4626）

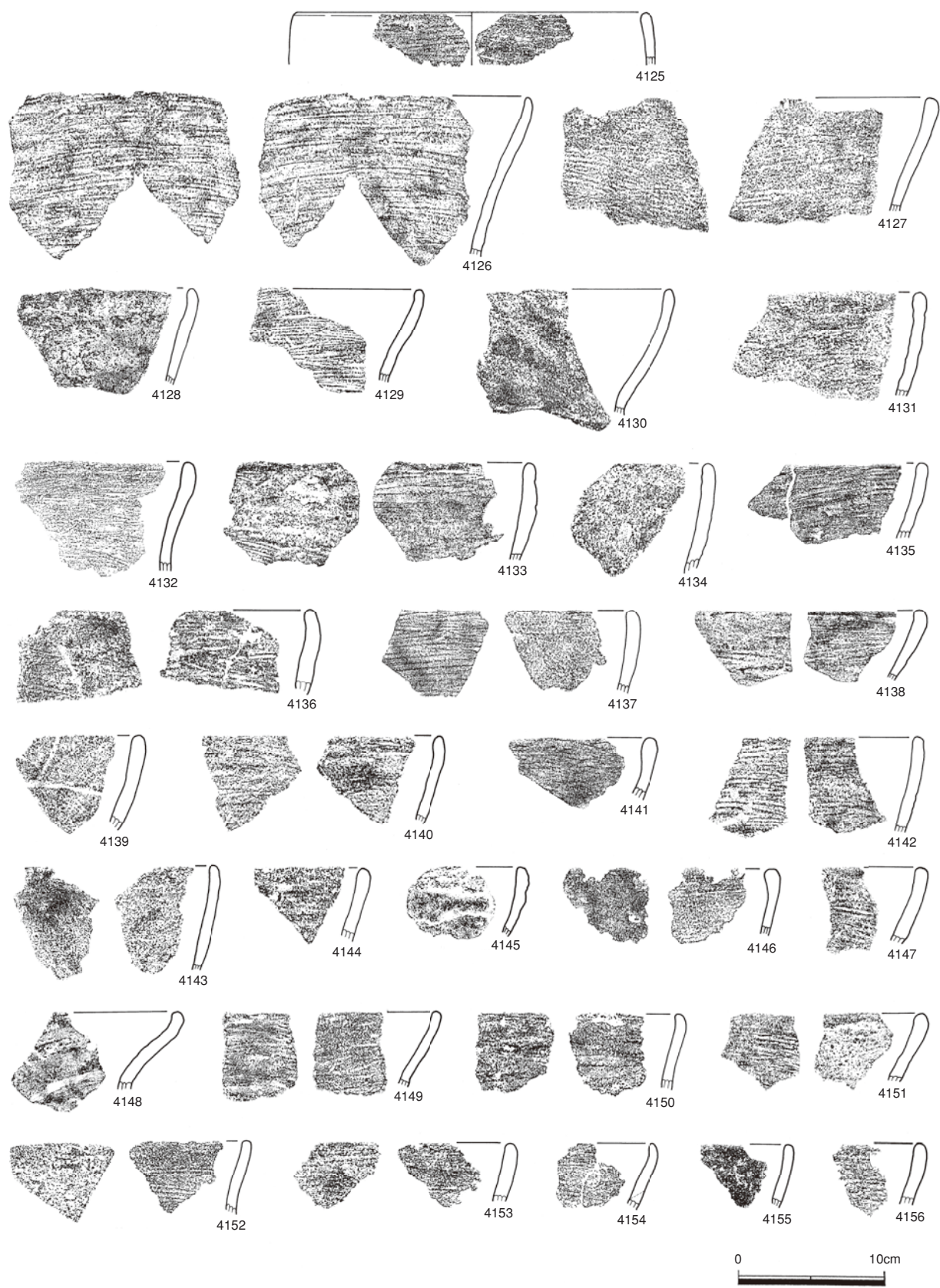
頸部から口縁端部に向かってほぼ直線的に外上方に立ち上がり、端部を肥厚させて収める。4528～4539は端部が方形を呈し、内面もしくは外面側、あるいは両方向に若干肥厚して収める。4540～4582は内面側に肥厚して収めるが、その中の4577～4582の6点は内上方側にやや長く肥厚する。4583～4621は、端部を内外面に肥厚させて収める。そのうちの4583～4606は、肥厚させて端部を丸くあるいは尖り気味に、4607～4621は肥厚させて方形に収める。4622～4626の5点は、波状・山形口縁を呈する。



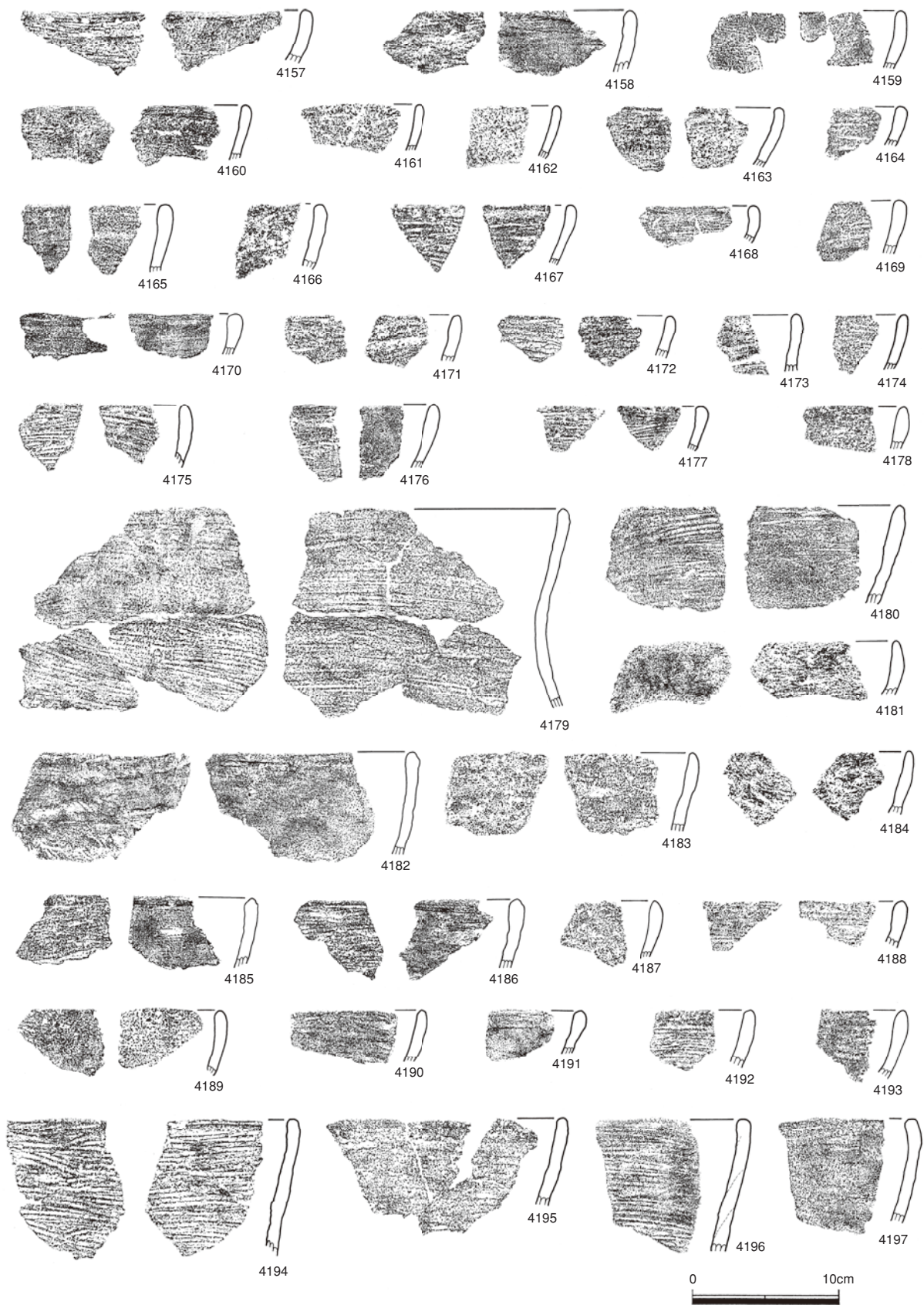
第284図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (24)



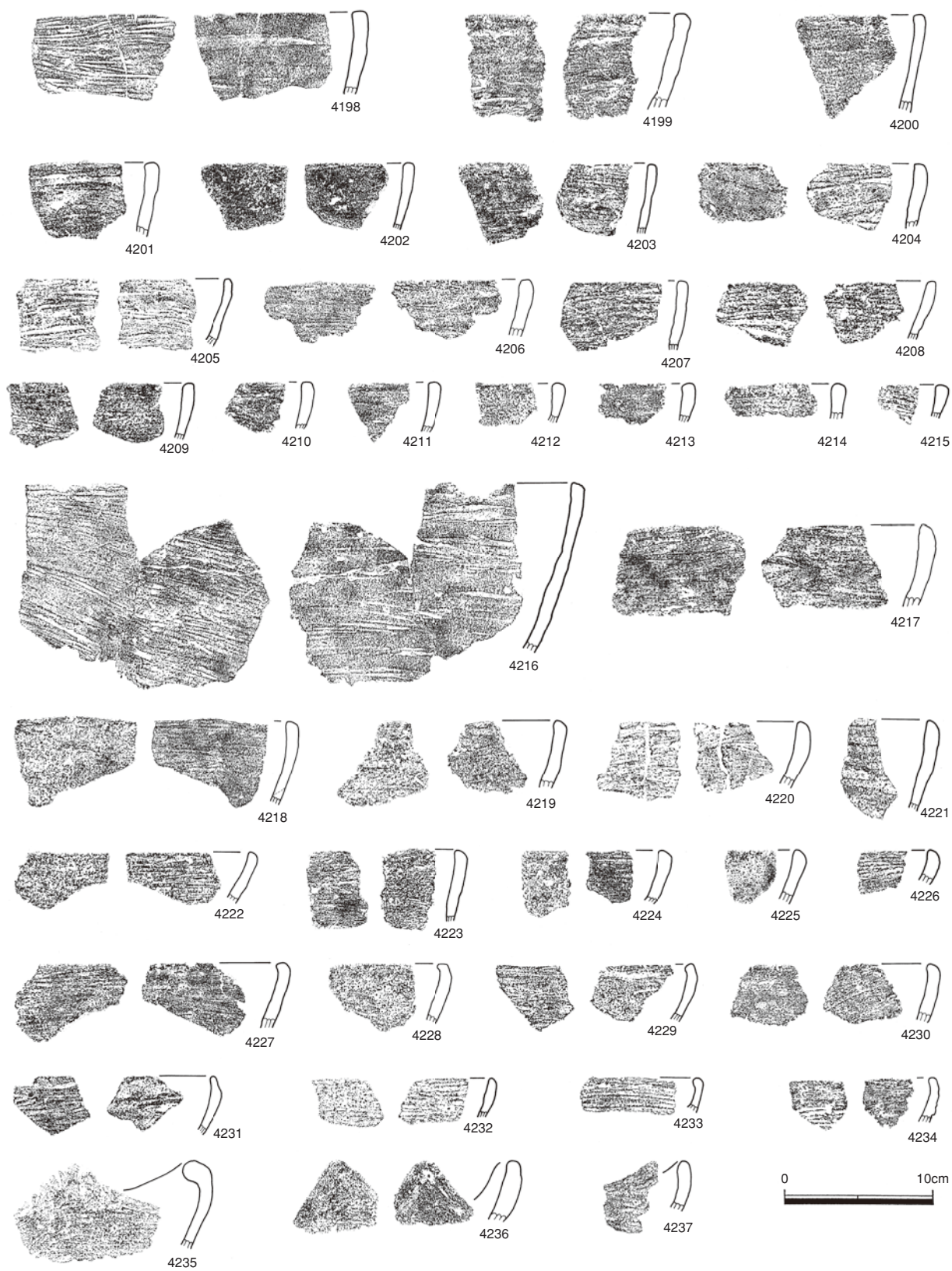
第285図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (25)



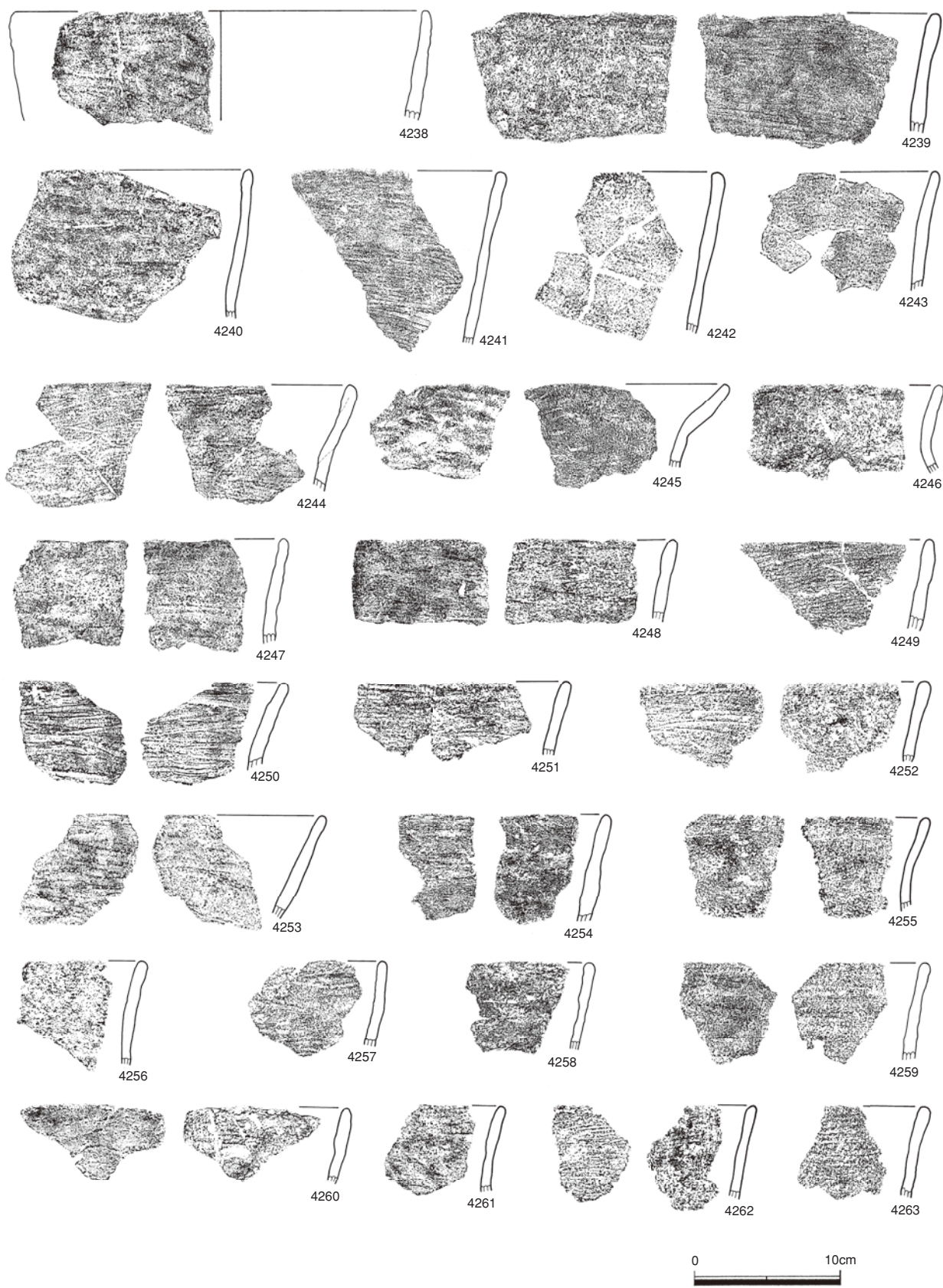
第286図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (26)



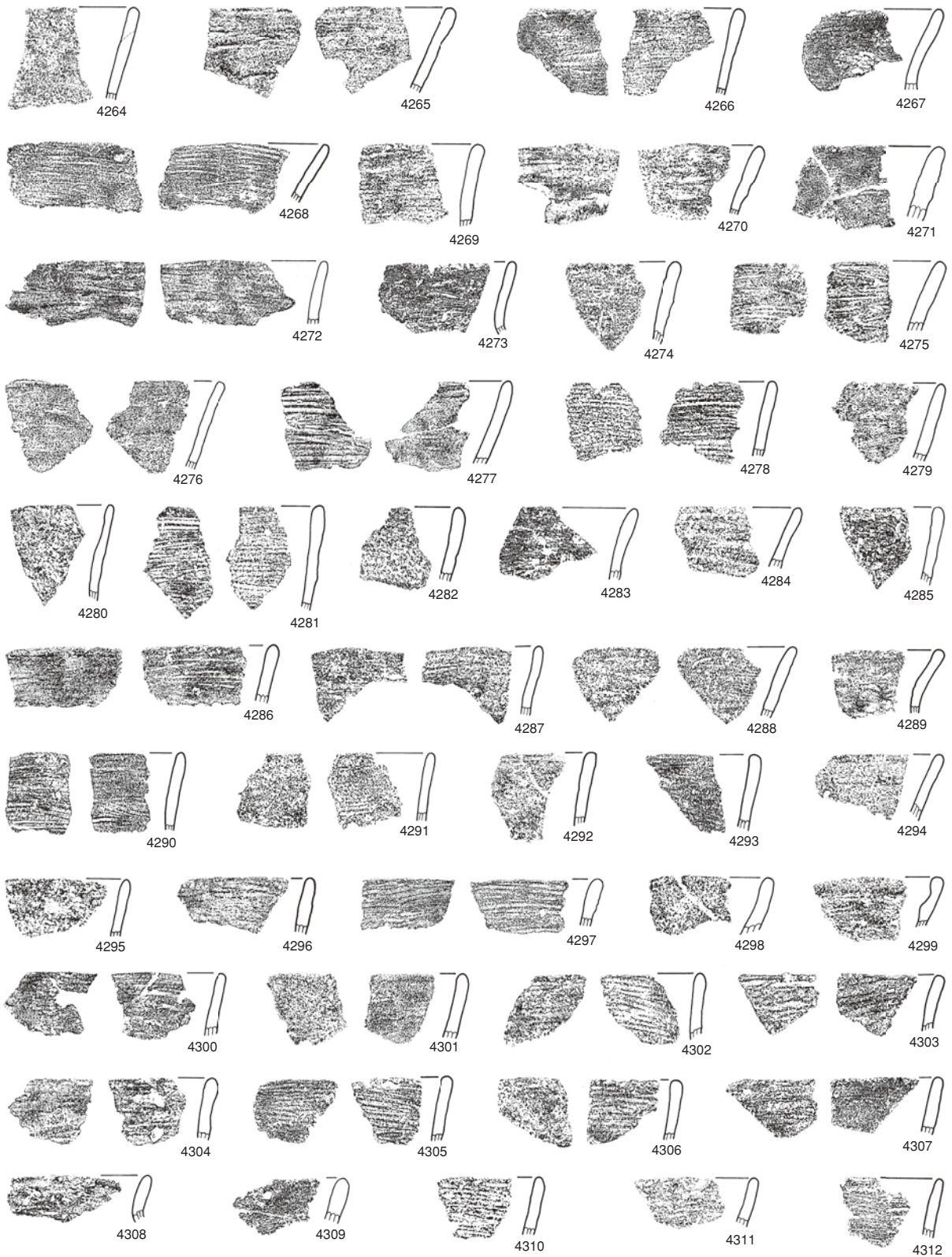
第287図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (27)



第288図 5-4・5区 包含層出土繩文土器 (28)



第289図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (29)



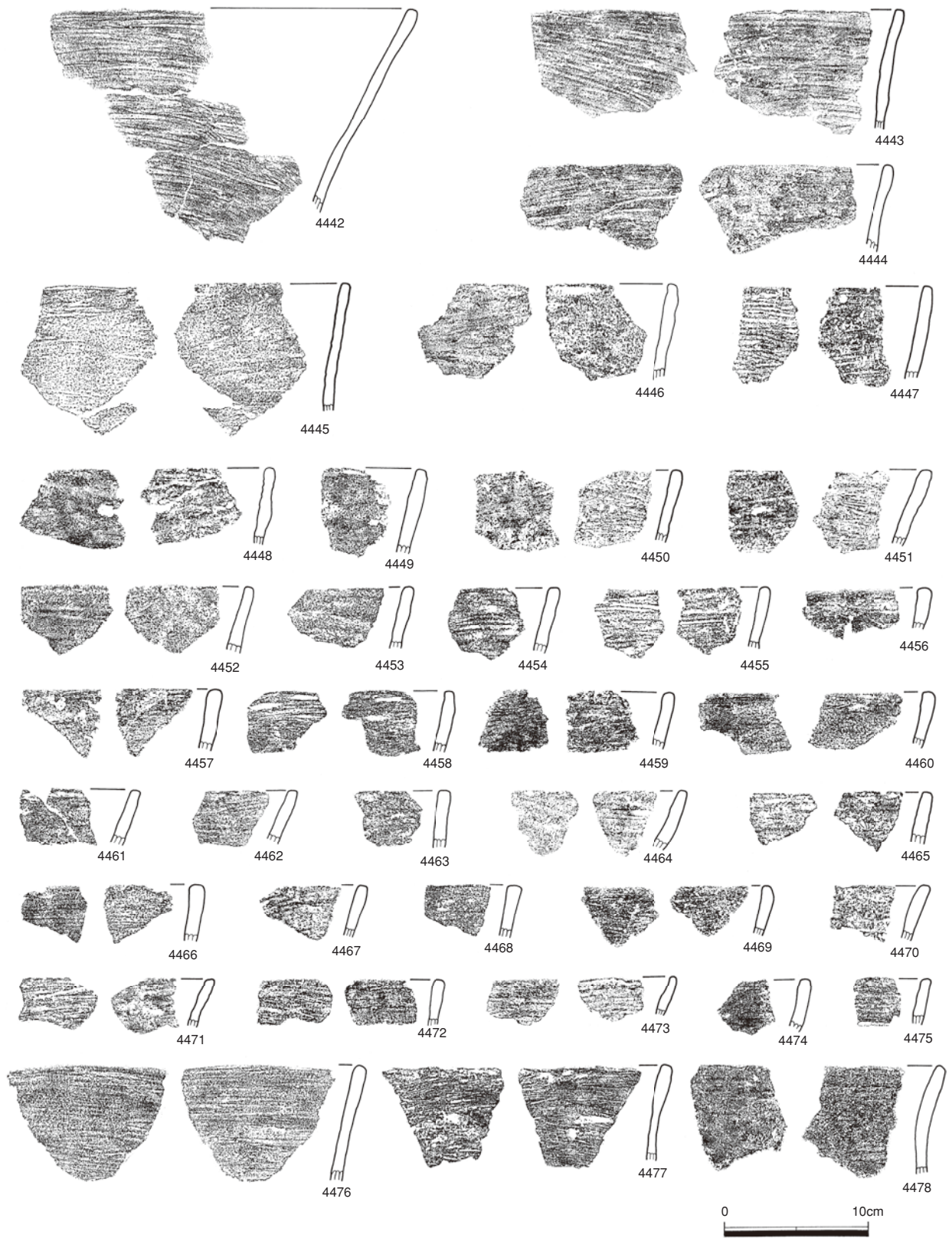
第290図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (30)



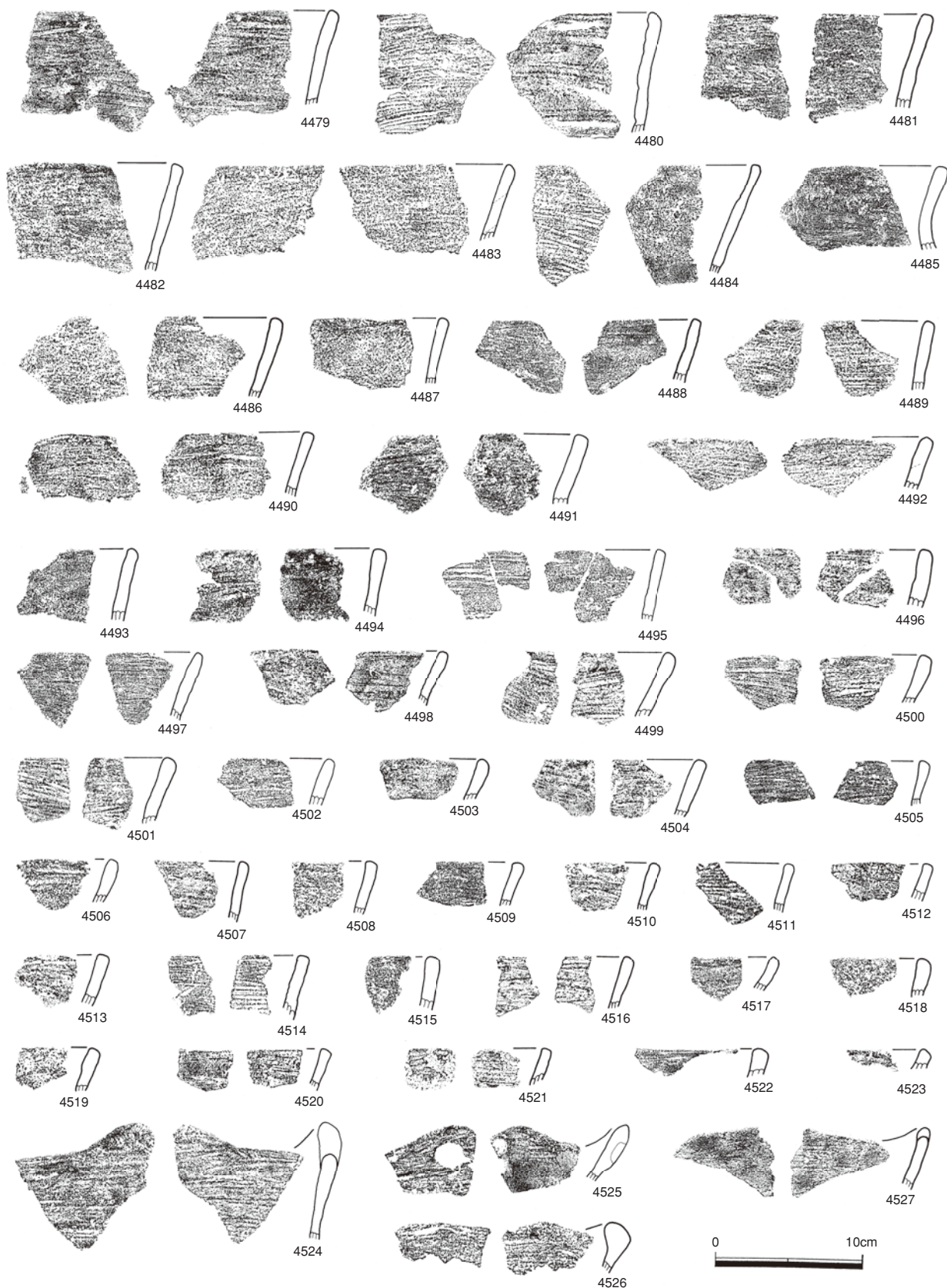
第291図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (31)



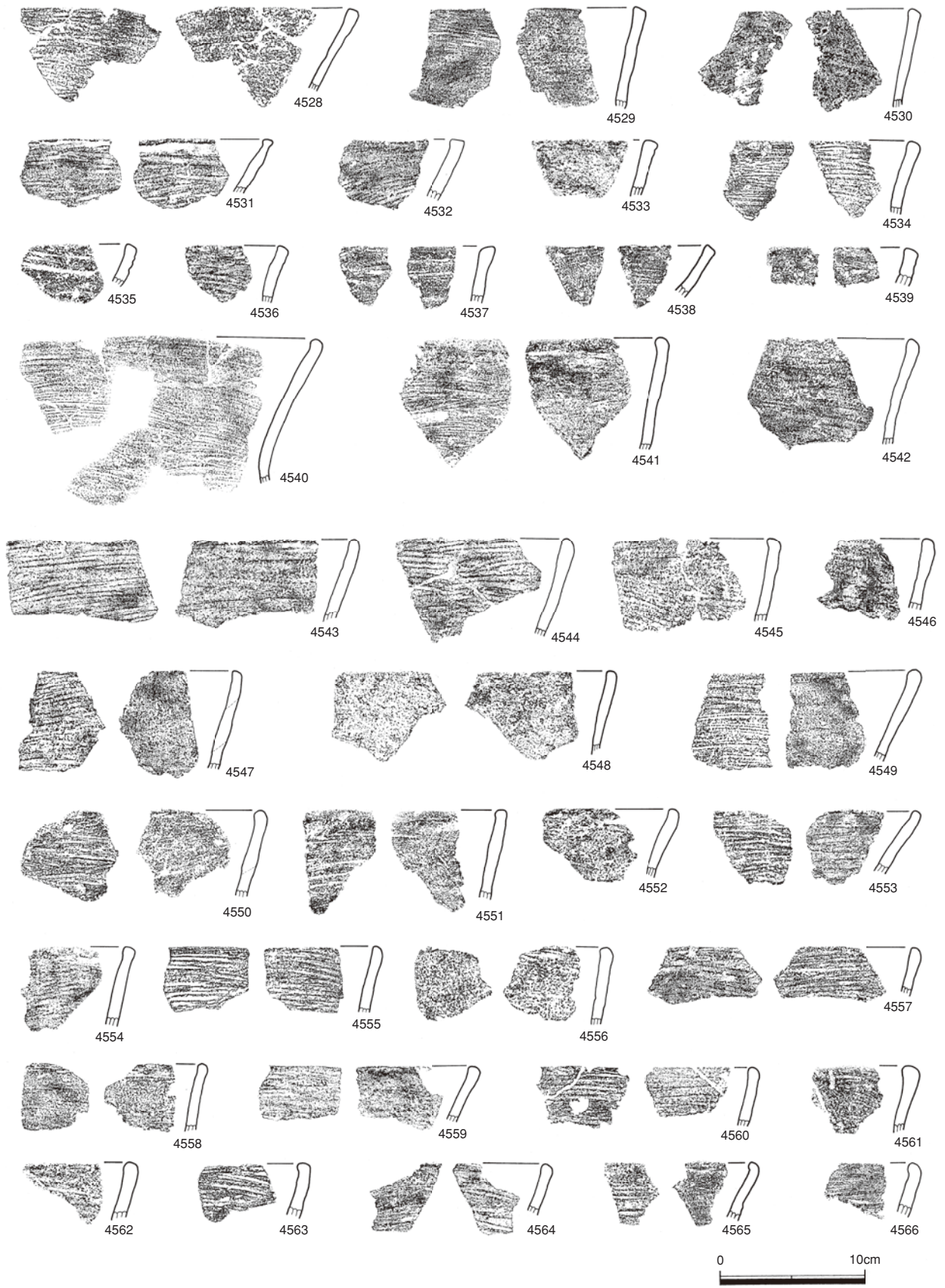
第292図 5-4-5区 包含層出土縄文土器 (32)



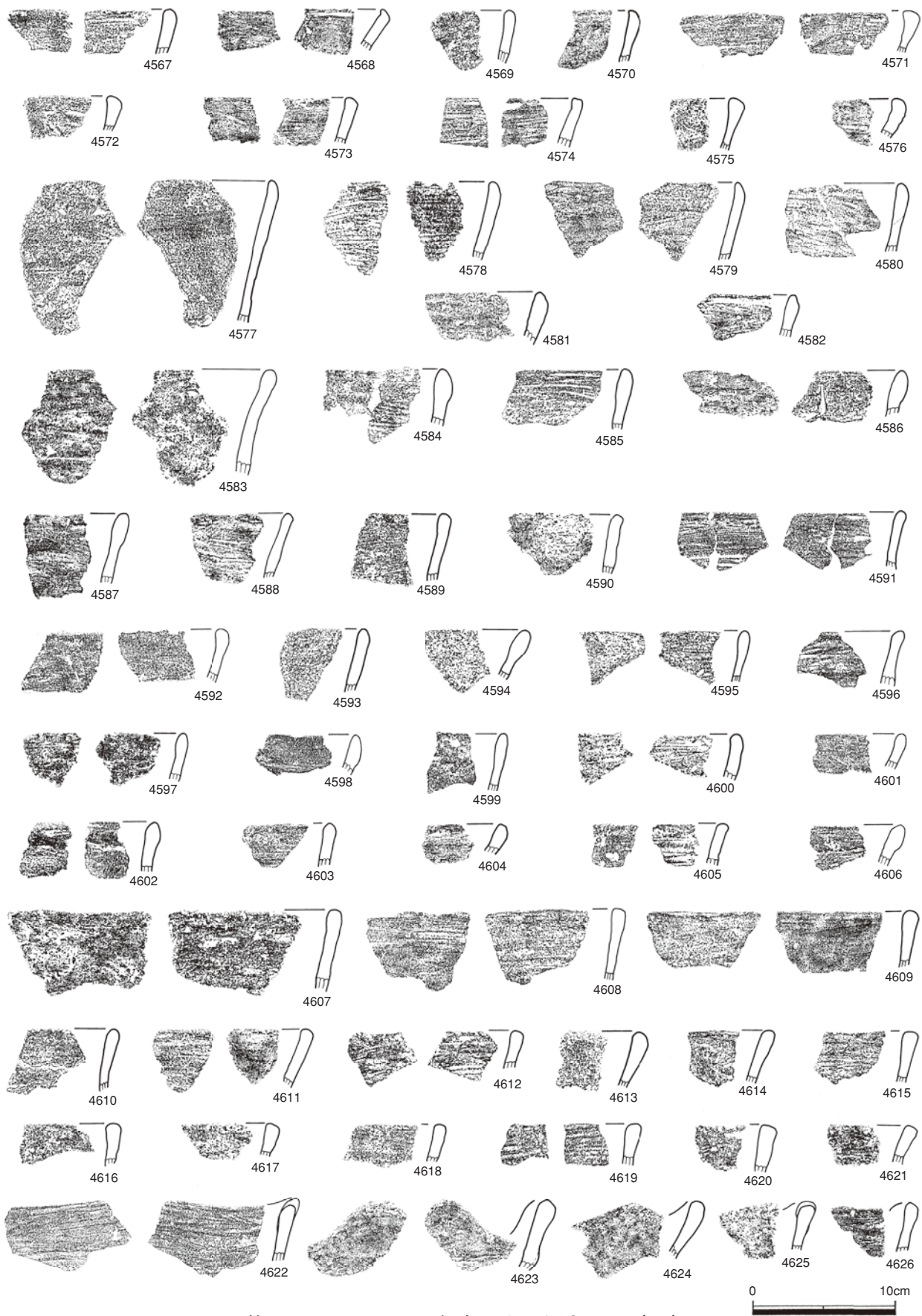
第293図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (33)



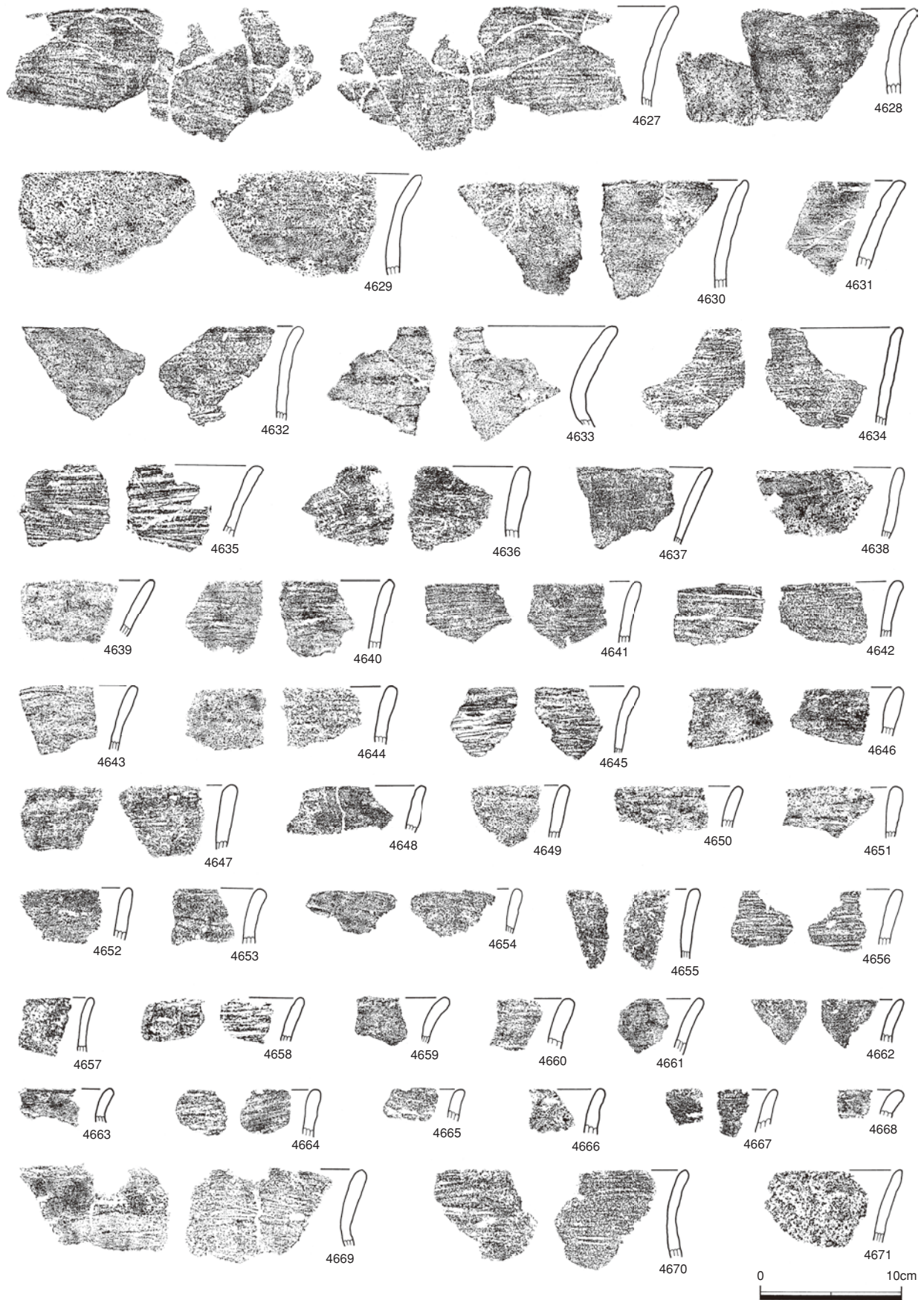
第294図 5-4-5区 包含層出土縄文土器 (34)



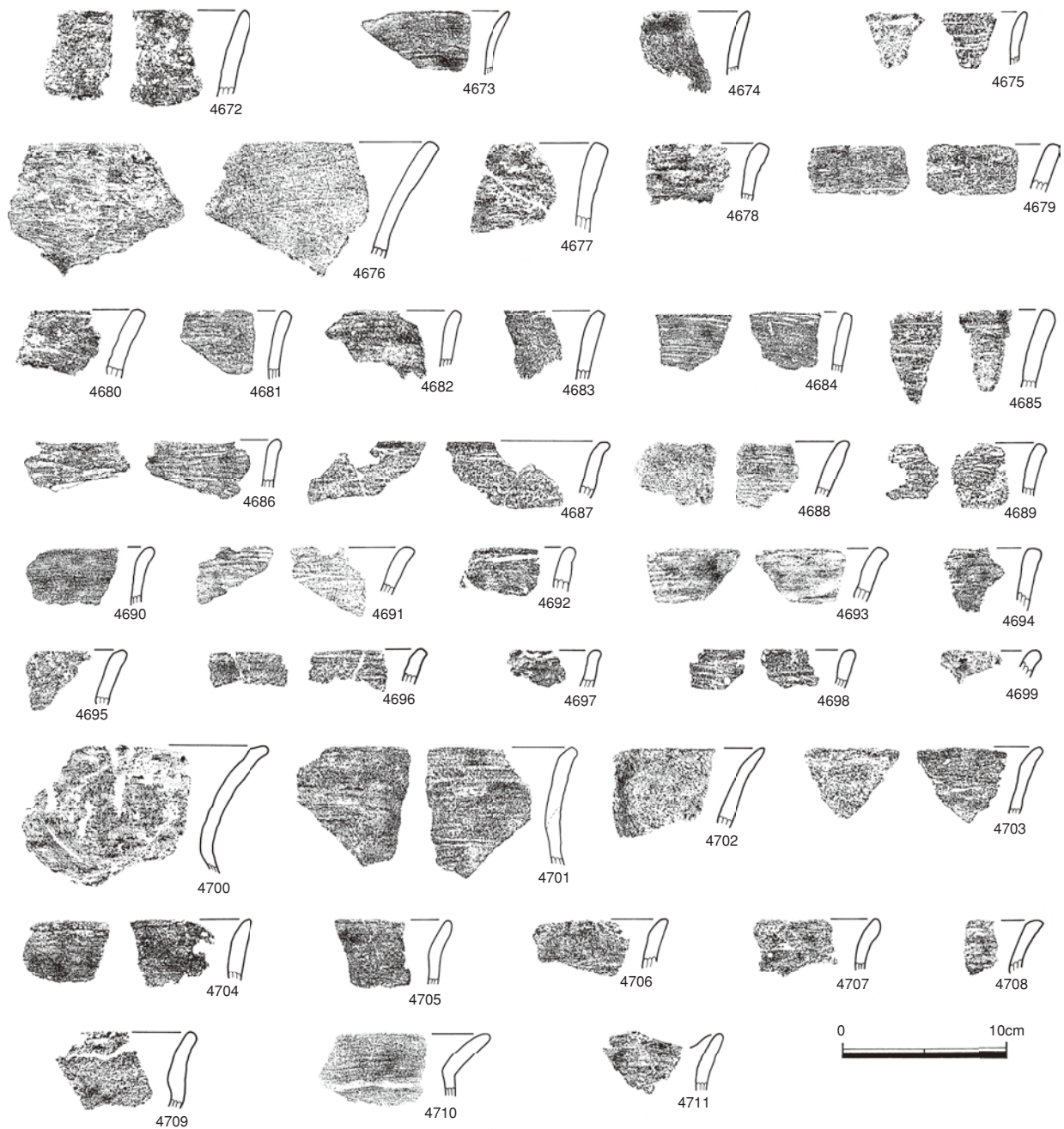
第295図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (35)



第296図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (36)



第297図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (37)



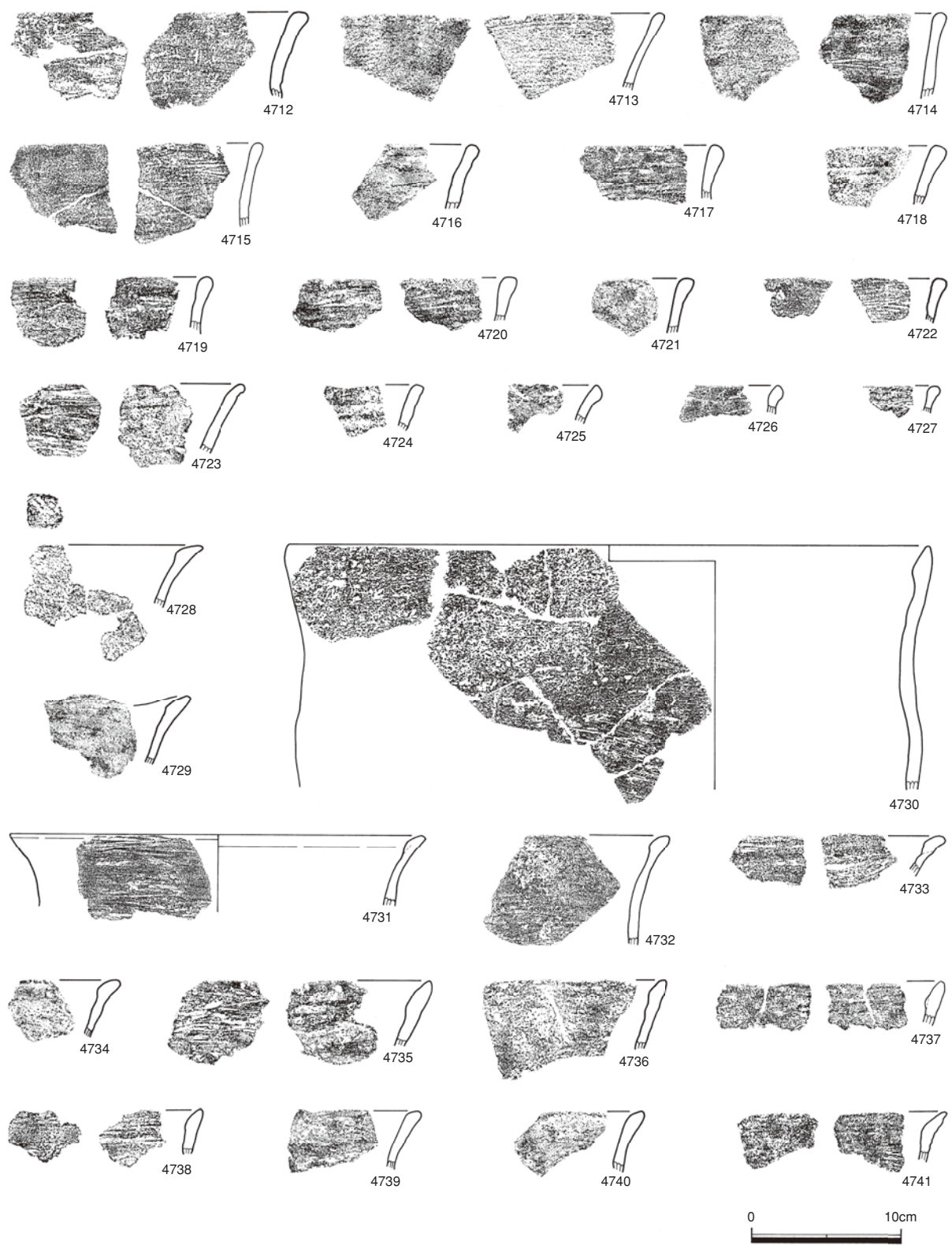
第298図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (38)

2群3類 (第297～299図：4627～4727)

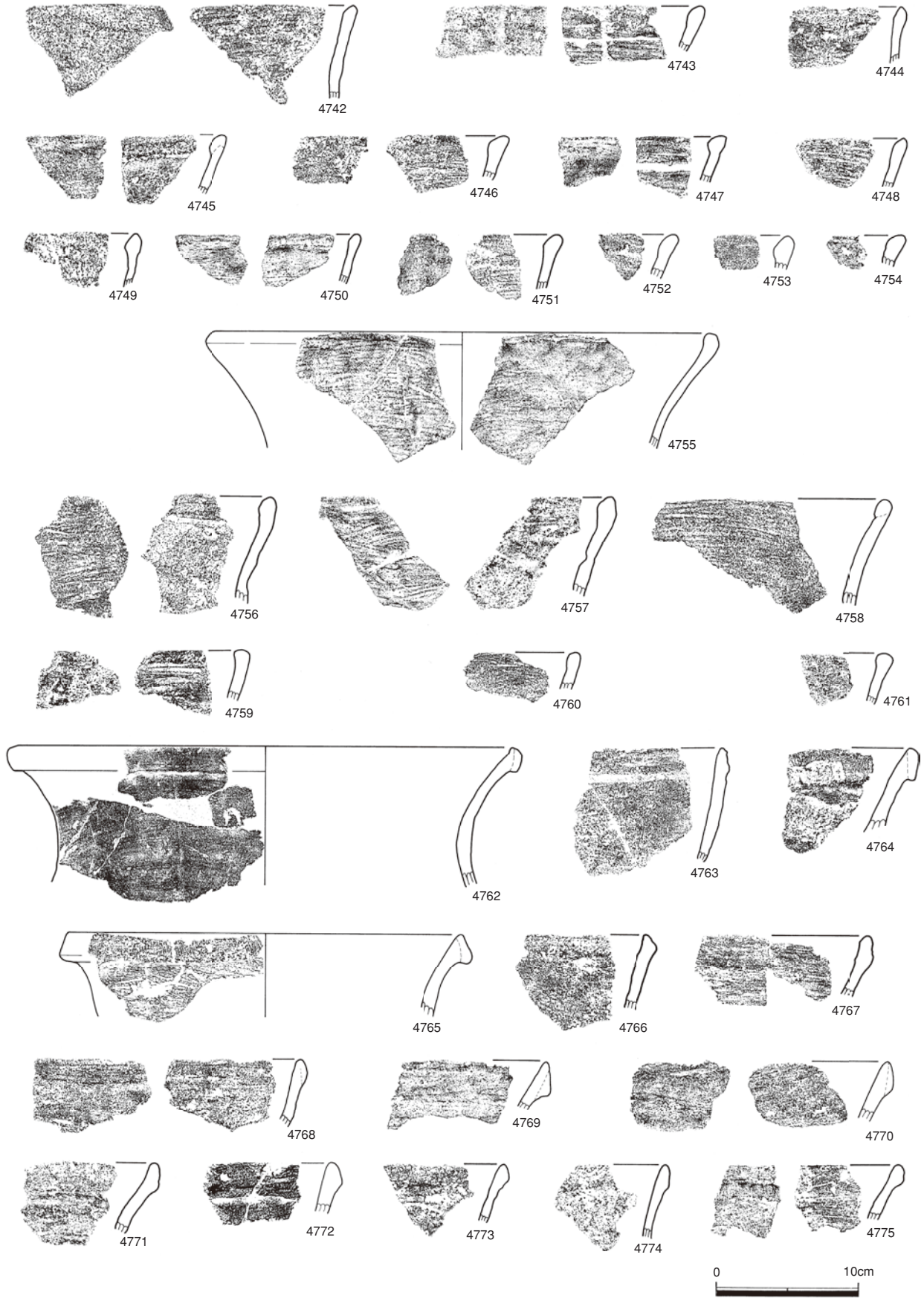
頸部から口縁端部に向かって外反する一群を、3類とした。そして、端部肥厚の有無でさらに分類し、肥厚しないものを3a、肥厚するものを3bとした。

2群3a類 (第297・298図：4627～4711)

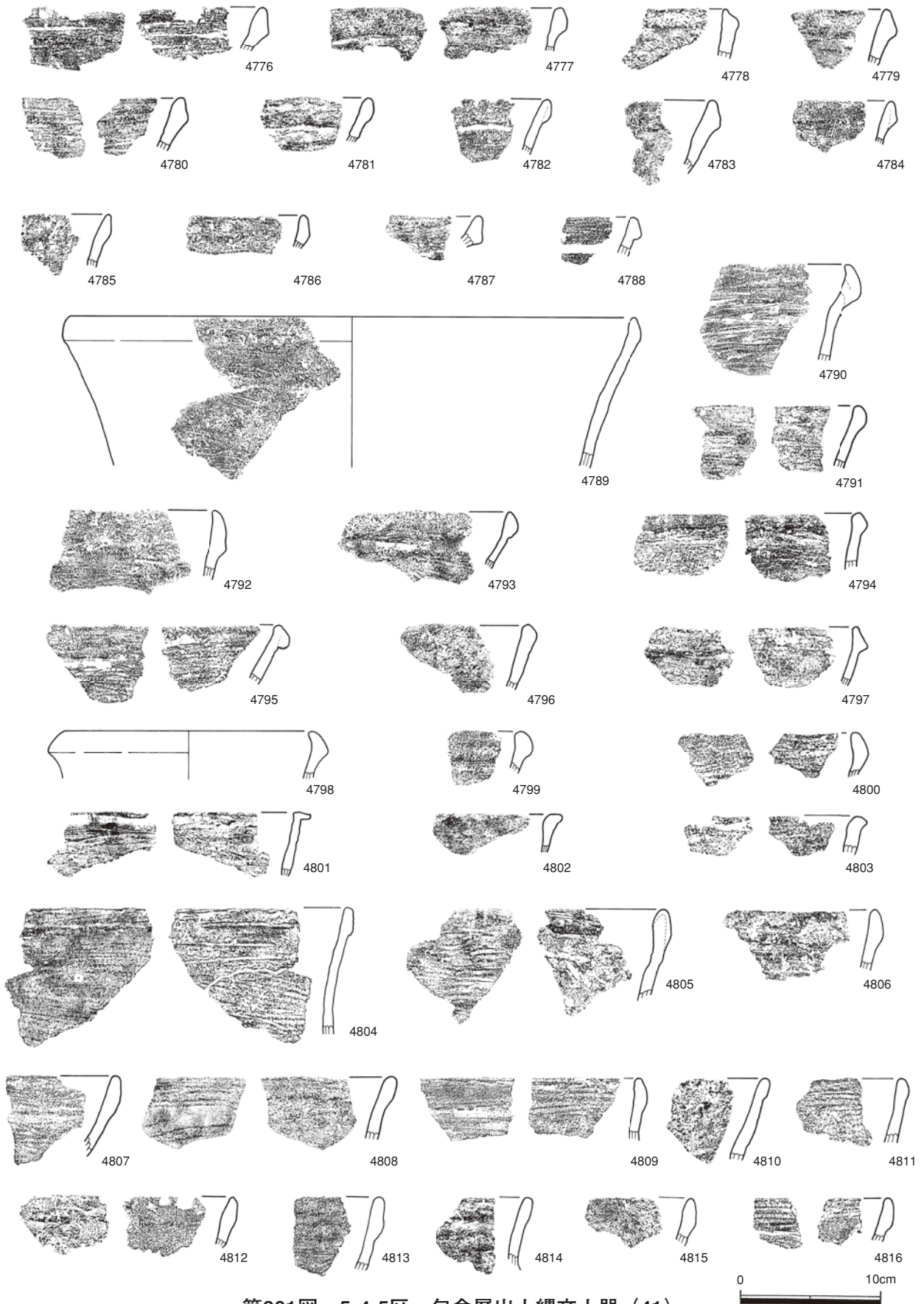
頸部から口縁端部に向かって外反し、端部をそのまま収める。端部の形状からさらに細分可能で、4627～4668は端部を丸く、4669～4675は尖り気味に、4676～4685は方形に収める。4686～4710は、端部でさらに外反し、4700～4710の11個体はその外反部がより長くなるものである。4711のみ、波状口縁を持つ。



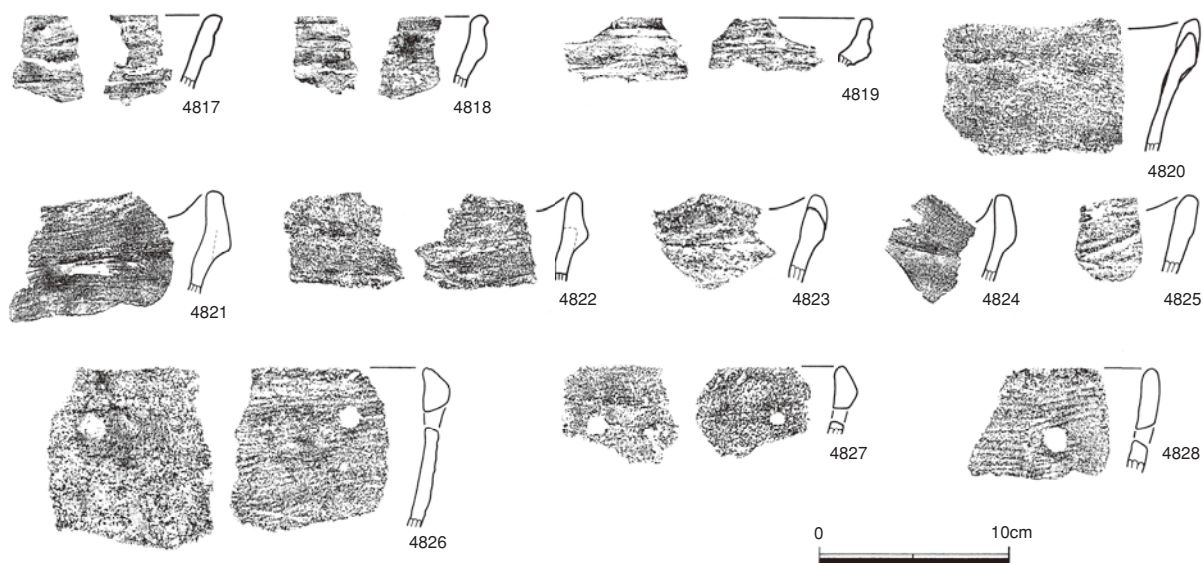
第299図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (39)



第300图 5-4-5区 包含層出土縄文土器 (40)



第301図 5-4-5区 包含層出土縄文土器 (41)



第302図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (42)

2群3b類 (第299図：4712～4727)

頸部から口縁端部に向かって外反しながら立ち上がり、端部を肥厚させて収める。肥厚は内面もしくは外面側、あるいは両方向に若干肥厚して収める。

2群4類 (第299・300図：4728～4761)

口縁部の内面側に肥厚帯が認められる一群を、4類とした。4728～4741は肥厚帯が長く、端部を尖り気味に収める。4742～4754は肥厚帯が先の一群と比較してやや短く、端部を丸く収める。4755～4761は、端部の上方、あるいは内面側を肥厚させて丸く収める。

2群5類 (第300～302図：4762～4825)

口縁部の外面側に肥厚帯が認められる一群を、5類とした。4762～4788は、肥厚帯の断面が三角形を呈する。4789～4797も断面が三角形を呈するがやや内傾し、4798～4800ではさらに内傾する。4801～4803は肥厚帯の幅が短く、肥厚帯というより突帯に近い。4804～4819は肥厚帯が上下に長く、端部が丸みを帯びる。そのうちの4817～4819では、端面に凹みが認められる。4820～4825の6点は、波状口縁を持つ。

3群 (第302図：4826～4828)

体部に穿孔部が認められる一群を、3群とした。4826・4827の口縁部の形状は5類、4828は2類aである。

中～後期の無文浅鉢 (第303～306図：4829～5026)

5-4・5区出土の無文浅鉢は、199点図化できた。口唇部に施文が認められるものを1群、認められないものを2群とした。

1群 (第303図：4829・4830)

口唇部に施文が認められるものを、1群とした。4829・4830ともに、直行刻目が施される。

2群（第303～306図：4831～5026）

口唇部に施文が認められないものを2群とし、口縁部および口縁端部の形状から大きく5類に分類した。

2群1類（第303図：4831～4843）

体部が内彎しながら立ち上がる一群で、2類と比較して内彎の屈曲が大きい。口縁端部の形状はさまざままで、口縁端部を丸くおさめるもの（4833～4838・4840・4843）・やや尖り気味に収めるもの（4832・4839）、方形に収め端部が水平なもの（4831・4841）・そうでないもの（4842）がある。

2群2類（第303図：4844～4879）

体部が、緩やかに内彎しながら立ちあがる一群である。口縁部の形状はさまざままで、端部を方形に収め、端面が水平にならないもの（4844～4850・4878・4879）・水平になるもの（4851～4858）、端部を丸く収めるもの（4859～4875）・尖り気味に収めるもの（4876）がある。4877は、端部を肥厚させて尖り気味に収める。

2群3類（第304・305図：4880～4988）

体部から口縁端部に向かって緩やかに内彎しながら、あるいは直線的に外上方へ立ち上がる一群を、3類とした。そして、端部肥厚の有無でさらに分類し、肥厚しないものを3a類、肥厚するものを3b類とした。

2群3a類（第304～306図：4880～4940・5013）

体部が外上方へ緩やかに内彎しながら立ち上がるもの（4880～4897・4938）、外上方へ直線的に立ち上がるもの（4898～4937・4939）がある。直線的に立ち上がるものの中には、口縁端部付近でわずかに内彎するもの（4914～4931）・外反ぎみなもの（4932～4937・5013）が認められる。4940の1点のみ、波状口縁である。

2群3b類（第305図：4941～4988）

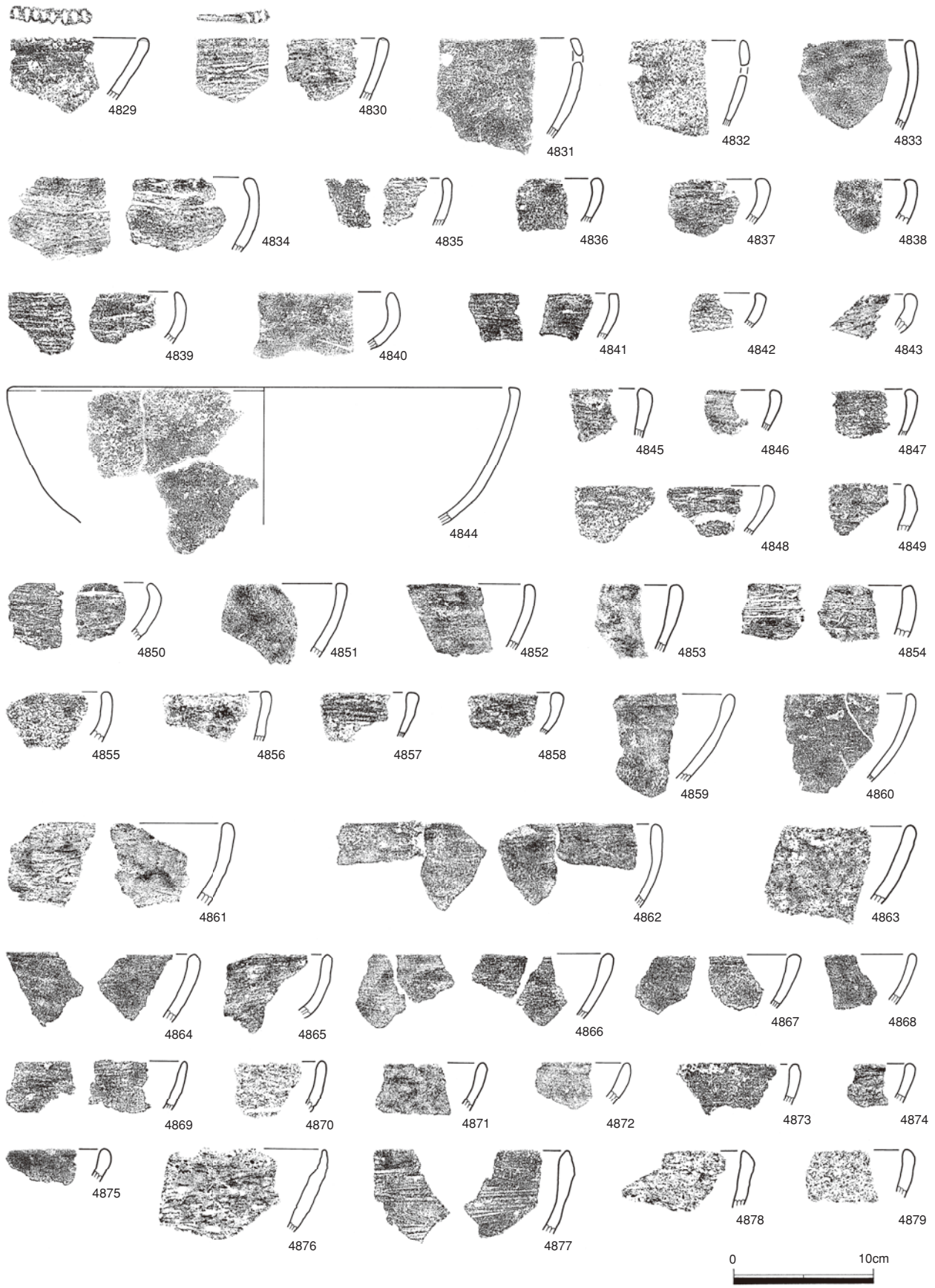
外上方へ体部が緩やかに内彎しながら立ち上がるもの、あるいは直線的に立ち上がるもので、口縁端部を肥厚させる一群である。内面側を肥厚させて断面三角形を呈するもの（4941～4963）、端部を内外面側に若干肥厚させて丸く、あるいは方形に収めるもの（4964～4974）、内面側に肥厚帯が認められるもの（4975～4981）、外面に肥厚帯が認められるもの（4982～4988）が認められる。

2群4類（第306図：4989～5012）

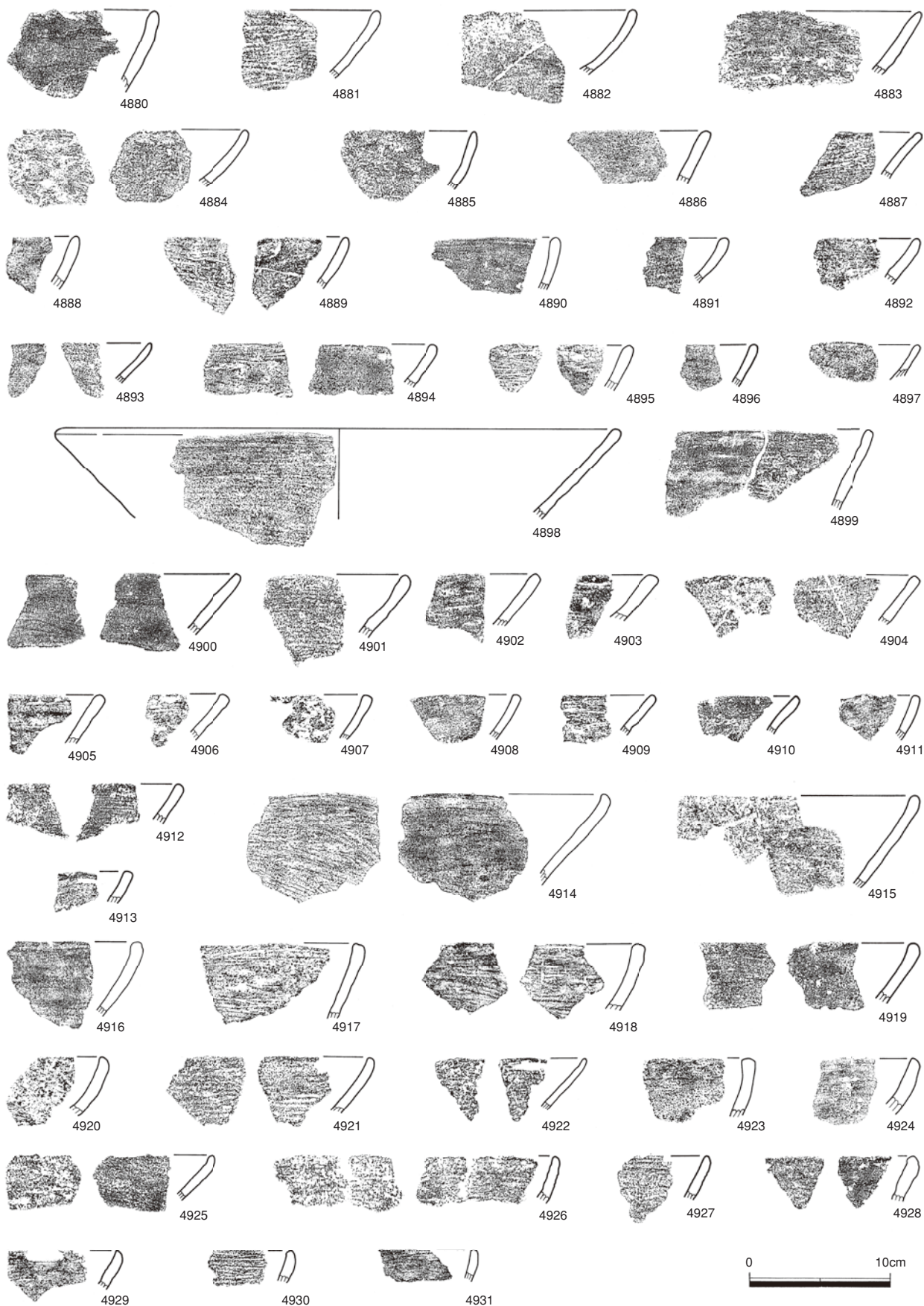
体部が浅く大きく開き、皿状を呈する一群を4類とした。そして、端部肥厚の有無でさらに分類し、肥厚しないものを4a類、肥厚するものを4b類とした。

2群4a類（第306図：4989～4997）

皿状を呈した一群に、体部が緩やかに内彎しながら大きく開くもの（4989～4993）、外上方へ直線的に開くもの（4994～4997）がある。口縁端部は、方形あるいは丸く収める。



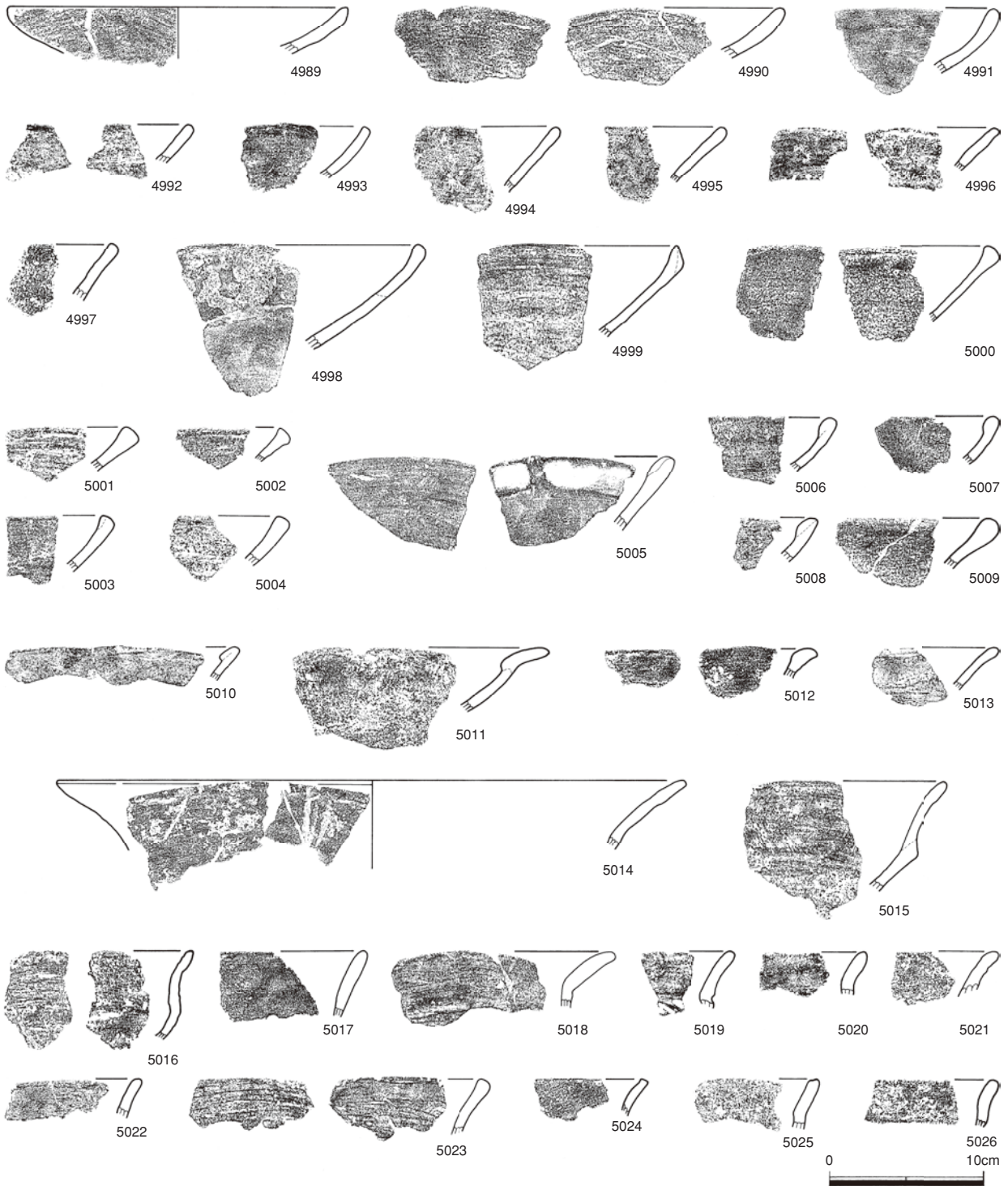
第303図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (43)



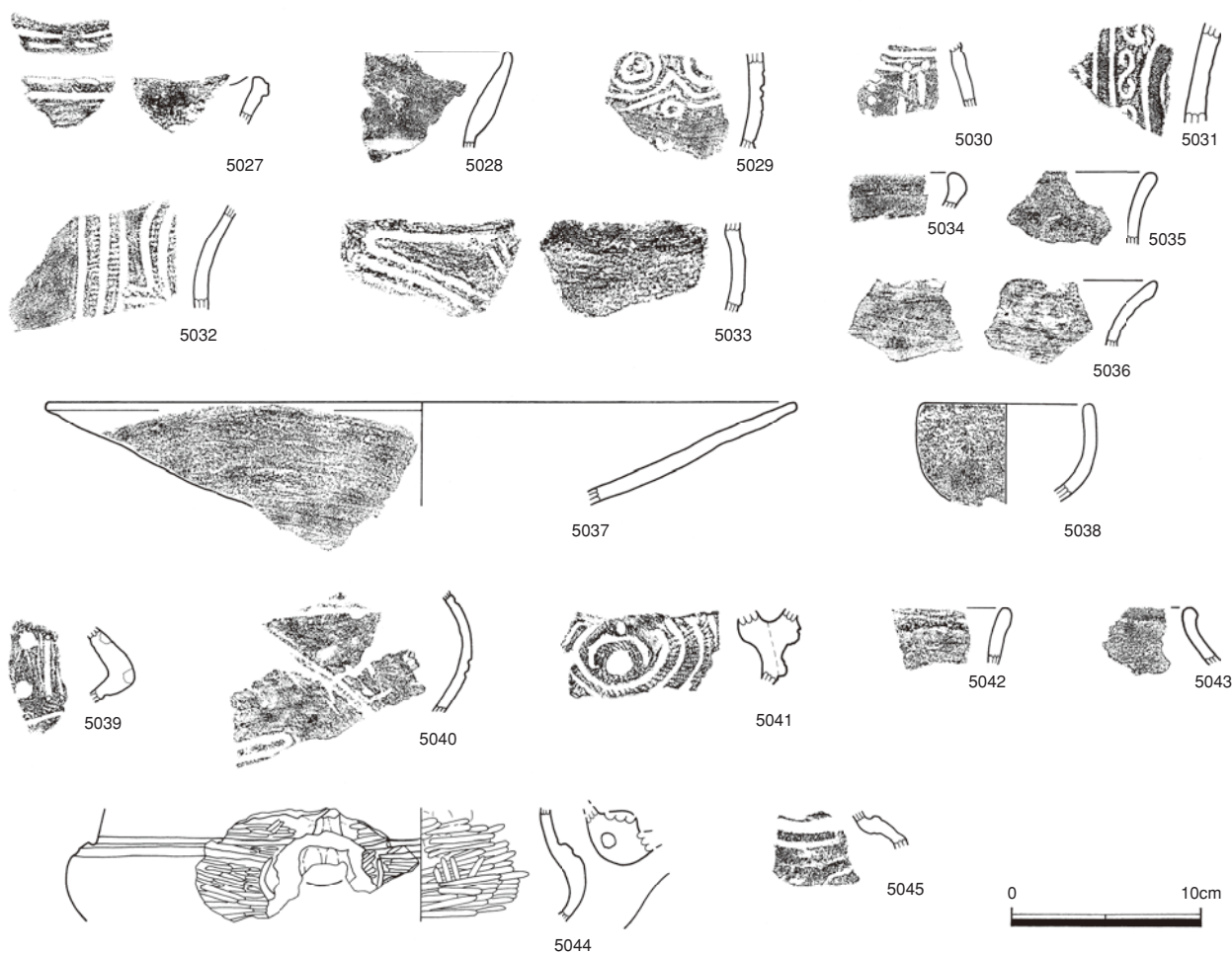
第304図 5-4-5区 包含層出土縄文土器 (44)



第305図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (45)



第306図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (46)



第307図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (47)

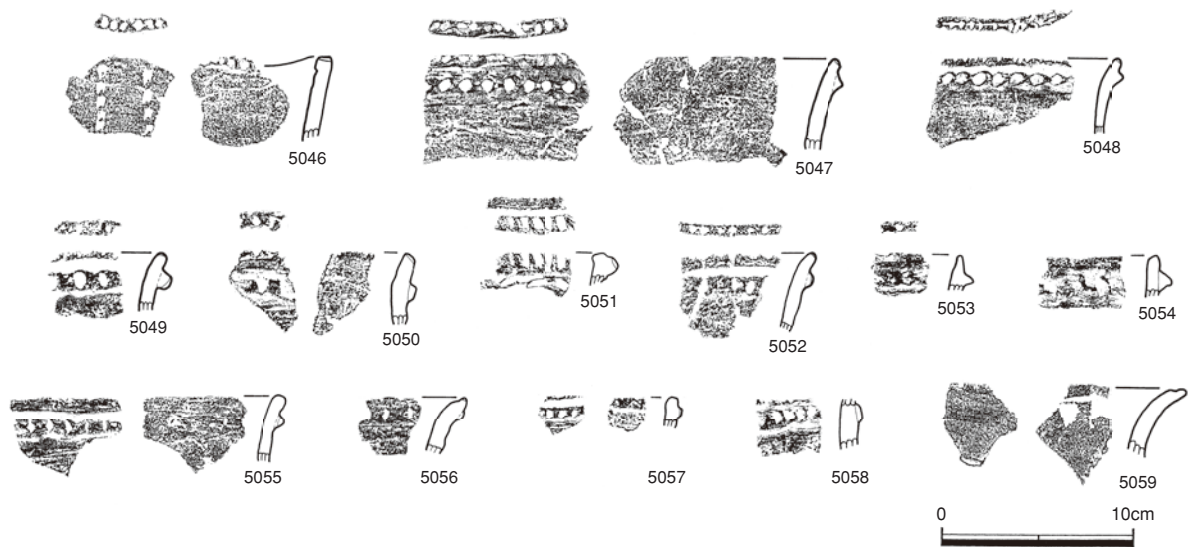
2群5類 (第306図：5014～5026)

頸部でくびれ、口縁部が外反する一群である。くびれおよび口縁部の外反の度合いは、個体によって異なり、口縁端部は丸く収めるもの、若干肥厚させて方形に収めるものが認められる。図化した小片のなかには、鉢が含まれる可能性もある。

中～後期の深鉢・浅鉢以外の器種 (第307図：5027～5045)

5027～5036は、鉢と考えられる。5029～5031は形式不明だが、中期末か。3点ともに沈線文を描き、5030では刺突文も施される。また、5030は胎土に金雲母・角閃石を含むことから、讃岐からの搬入品の可能性がある。5027・5032は福田KⅡ式、5028は沈線文系、5033は縁帯文成立期に比定できる。5034～5036は無文の鉢で、5034の口縁部は内側に肥厚し、5035・5036は外反する。

5037は無文皿、5038は無文椀、5039～5043は壺、5044・5045は注口土器である。遺存状態は悪いが、5039は双耳角壺、5041は壺の把手部である。5039は中津式、5040は福田KⅡ式～縁帯文成立期文、5041は縁帯文成立期、5042は素縄文系、5043は無文である。



第308図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (48)

晩期の深鉢（第308図：5046～5059）

5046以外の13点は刻目突帯文をもつ深鉢で、5046～5053・5056には口唇部に刻目が認められる。5046は体部に棒状工具による刺突文が認められる。5059は晩期の可能性がある無文深鉢で、内面に沈線文が認められる。

深鉢底部（第309～314図：5060～5354・5398～5402）

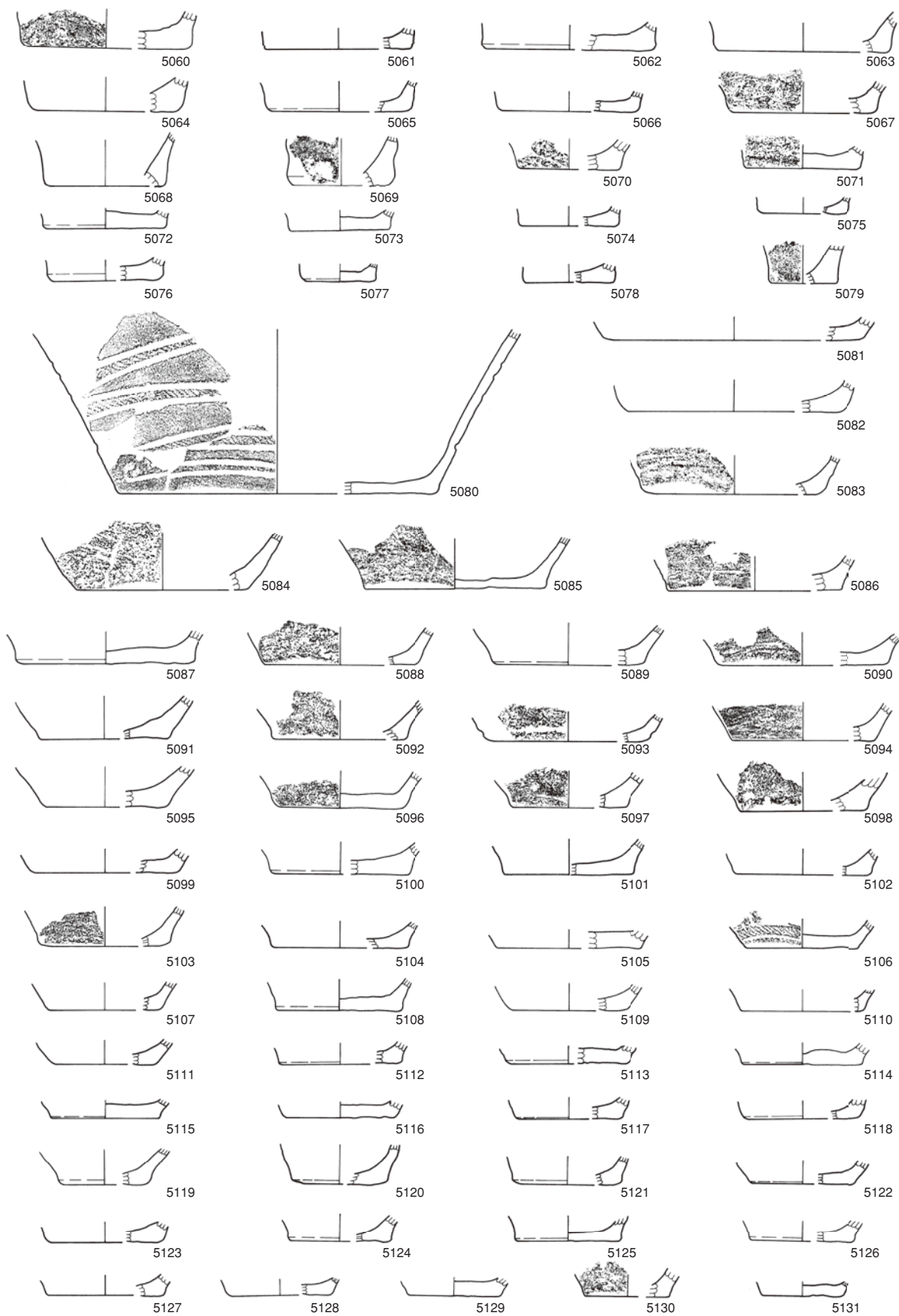
5080・5093・5106・5150・5157・5169・5218の計7点が、有文深鉢の底部である。5106・5169は、福田KⅡ式に比定できる。7点のうち、底部の形状から5218を除く6点は平底A、5218は平底Bに分類できる。

5060～5354・5398～5402のうち、上記の7点を除く293点が無文深鉢の底部である。底部の形状から5060～5186は平底Aに、5187～5227は平底Bに、5228～5269は凹底、5270～5354は高台底、5398～5402は多孔底にそれぞれ分類できる。また5132・5236は底面に強いユビオサエがあり、5132では一見すると高台底に見える。

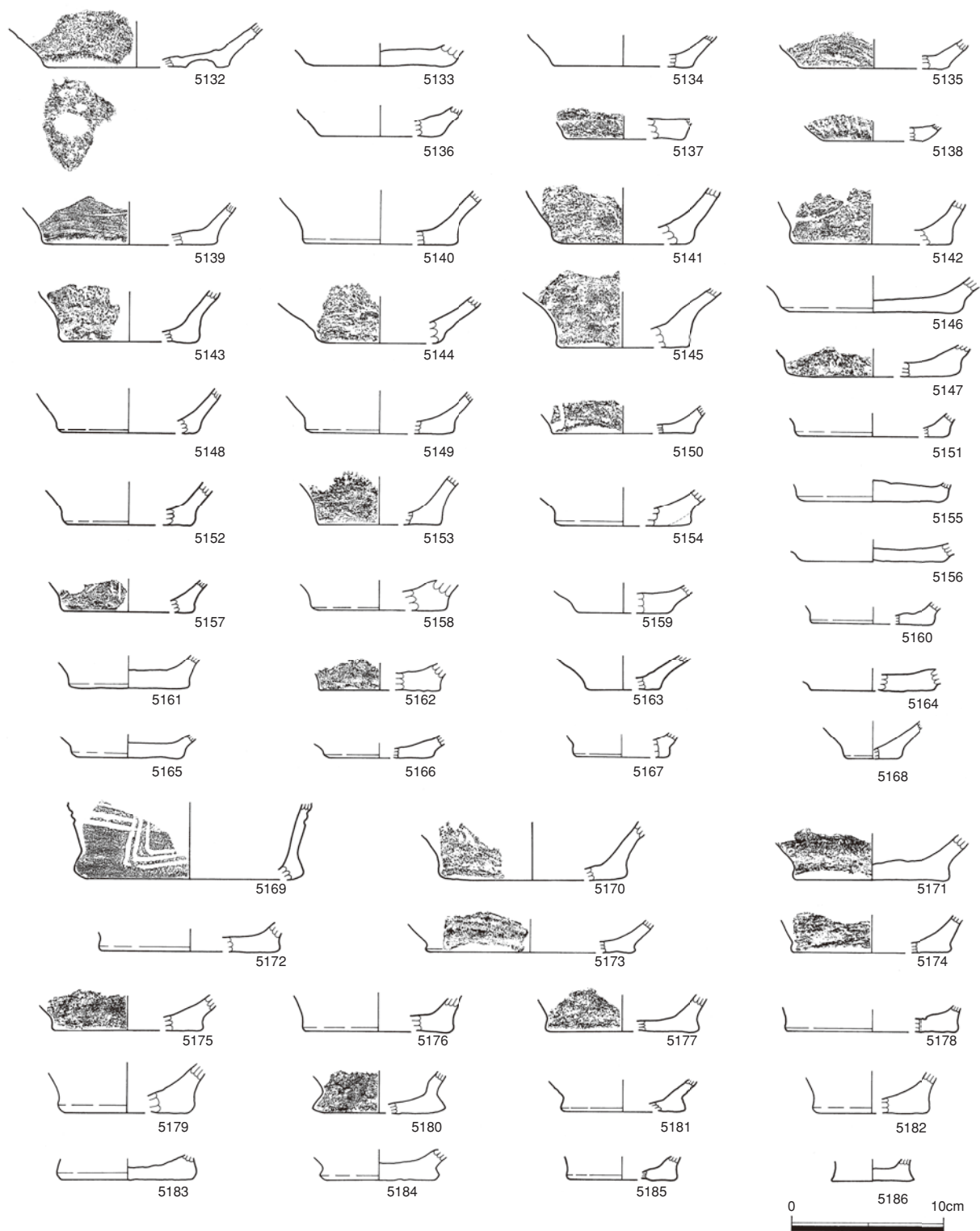
平底Aのなかで体部の傾きからさらに分類を行うと、5060～5079は遺存部で体部が直立気味に立ち上がる一群、5080～5131は体部が外上方へ直線的に開く一群、5132～5138は体部の開きがさらに大きい一群、5139～5168は一旦直立気味に立ち上がり、そこから外上方へ開く一群、5169～5186は立ち上がりが内側へ一旦屈曲してから外上方へ開く一群の計5群に分けることができる。

平底Bも平底Aと同じように体部の傾きから分類を行うと、5187～5190は遺存部で体部が直立気味に立ち上がる一群、5191～5212は体部が外上方へ直線的に開く一群、5213～5218は体部の開きがさらに大きい一群、5219～5222は一旦直立気味に立ち上がり、そこから外上方へ開く一群、5223～5227は立ち上がりが内側に屈曲してから外上方へ開く一群の計5群に分けることができる。

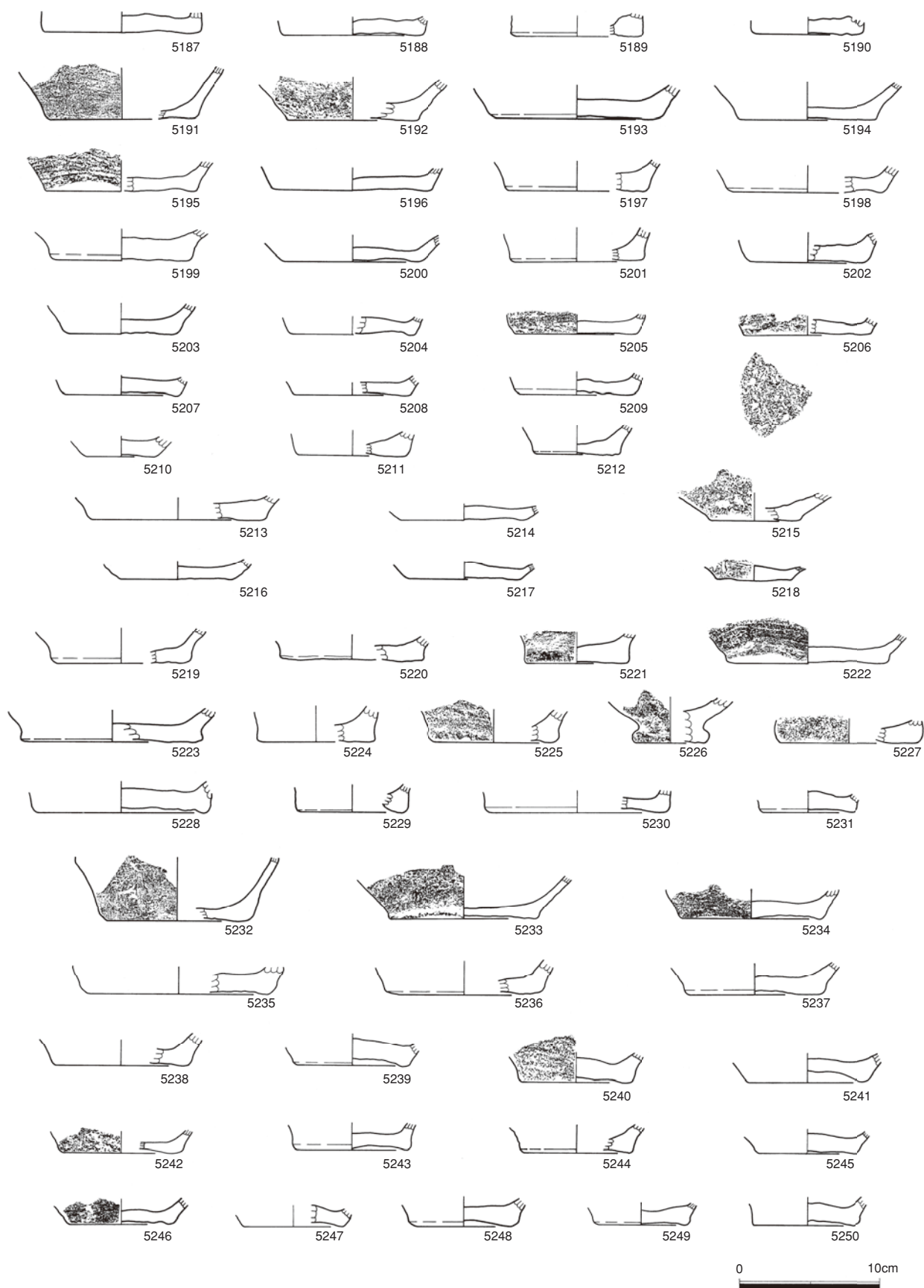
凹底も平底Aと同じように体部の傾きからさらに分類を行うと、5228～5231は遺存部で体部が直立気



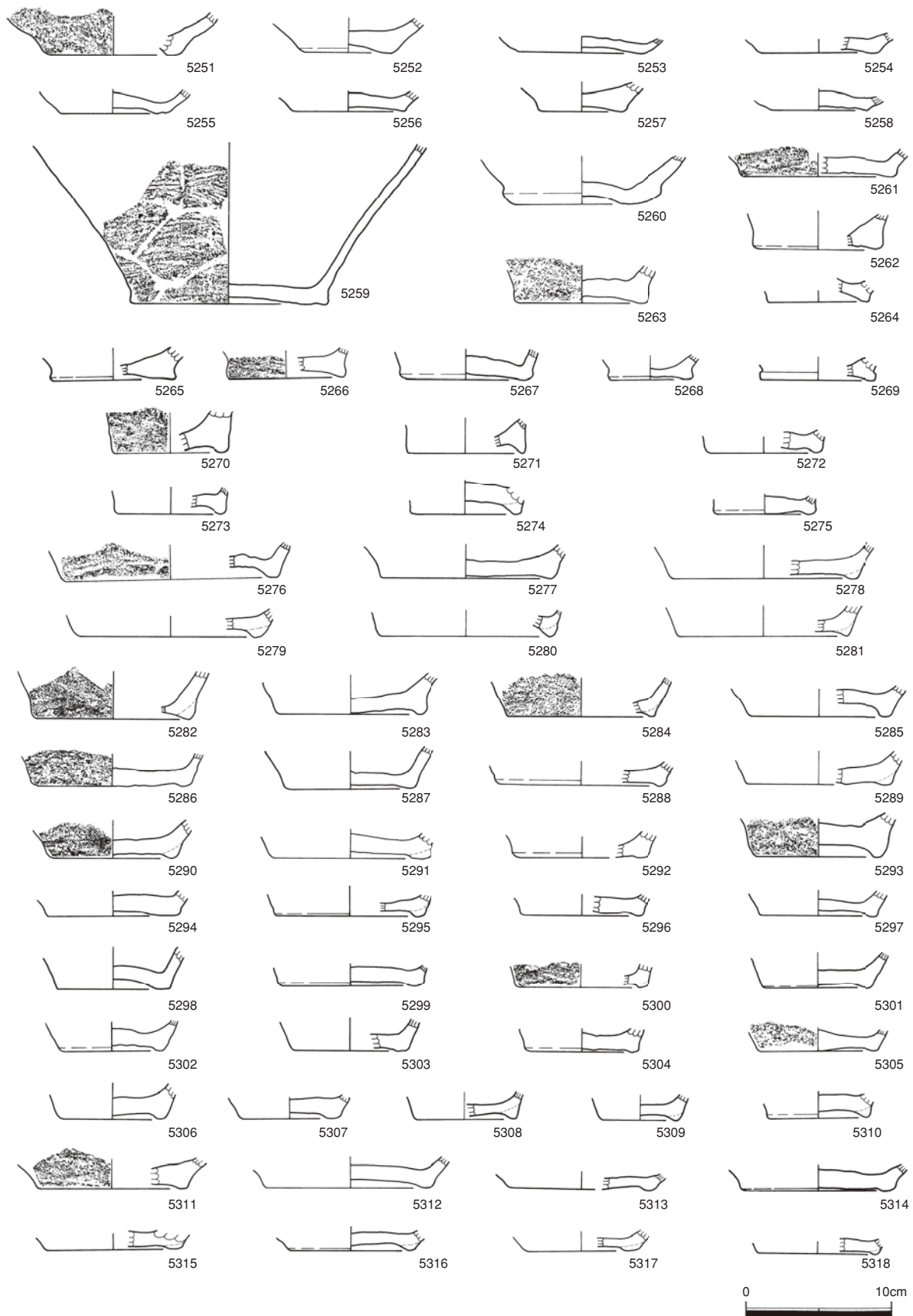
第309図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (49)



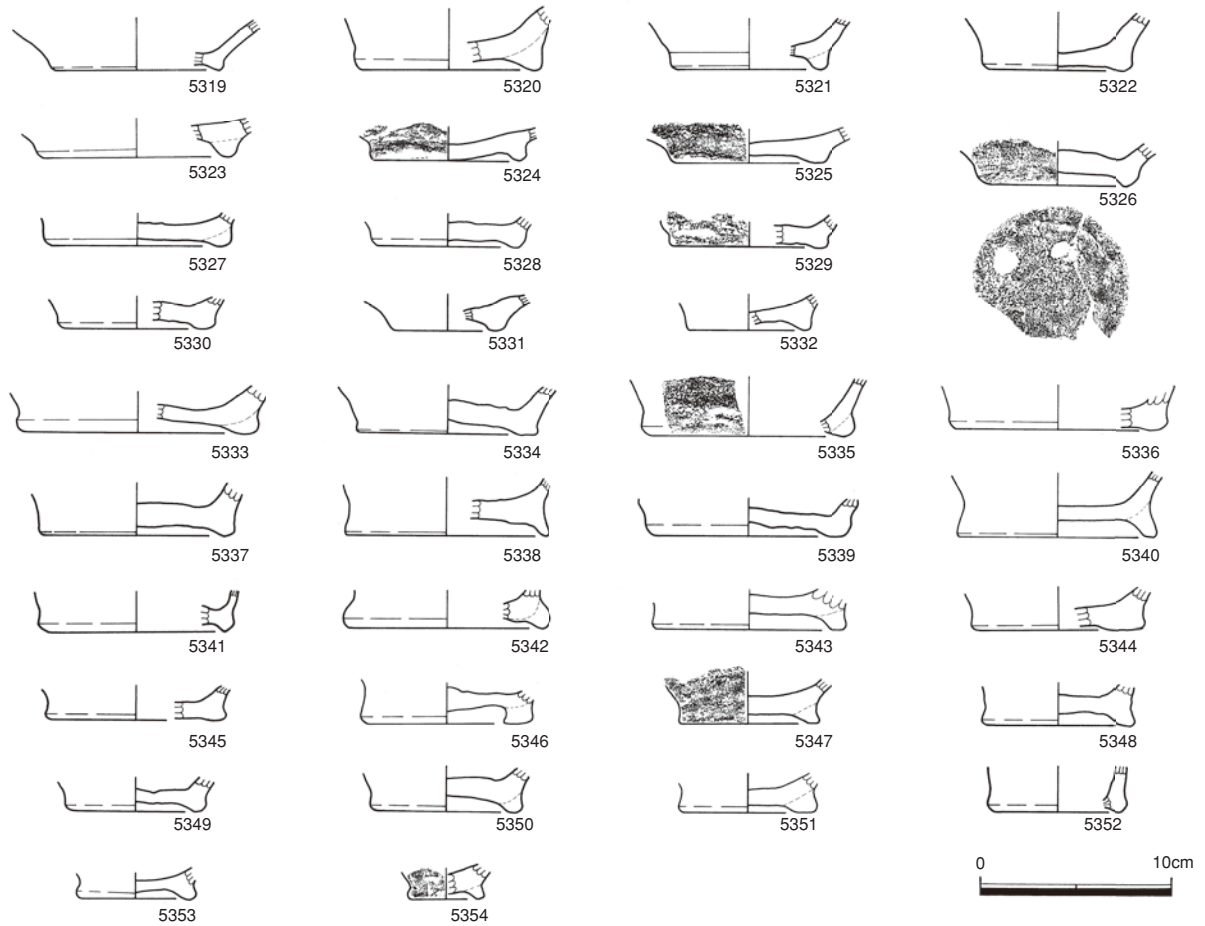
第310图 5-4-5区 包含層出土縄文土器 (50)



第311图 5-4-5区 包含層出土縄文土器 (51)



第312図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (52)



第313図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (53)

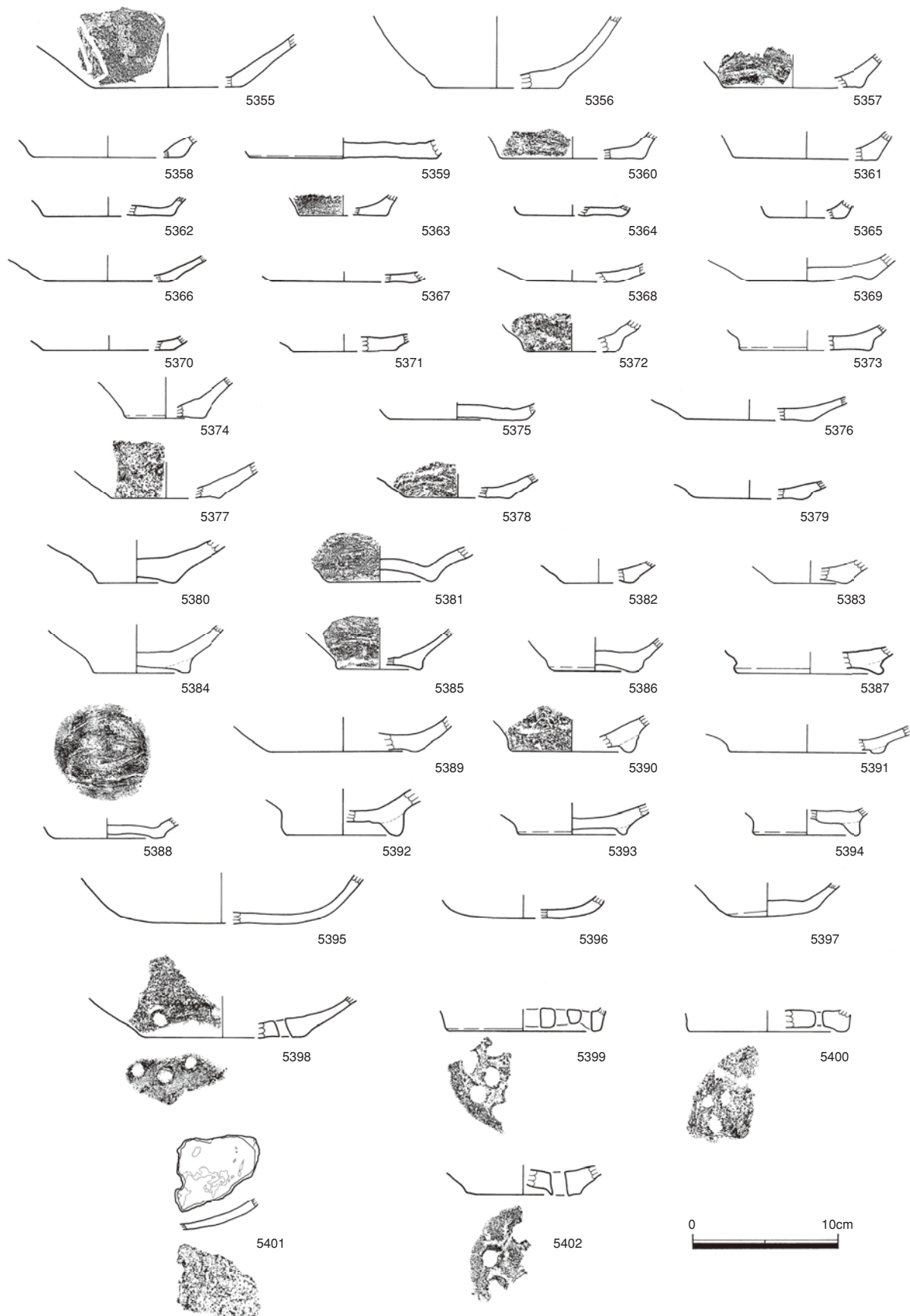
味に立ち上がる一群、5232～5250は体部が直線的に外上方へ開く一群、5251～5258は体部の開きがさらに大きい一群、5259～5264は一旦直立気味に立ち上がり、そこから外上方へ開く一群、5265～5269は立ち上がりが内側に屈曲してから外上方へ立ち上がる一群の計5群に分けることができる。

高台底も平底Aと同じように体部の傾きからさらに分類を行うと、5276～5310は体部が直線的に外上方へ開く一群、5311～5318は体部の開きがさらに大きい一群、5319～5332は一旦直立気味に立ち上がり、そこから外上方へ開く一群、5333～5354は立ち上がりが内側に屈曲してから外上方へ立ち上がる一群の計4群に分けることができる。

多孔底5点のうち、5398・5399の穿孔部を中心に白色物の付着を確認した。特に5398では、穿孔部だけでなく内面にもその付着が認められる。

浅鉢底部 (第314図：5355～5397)

図化できた浅鉢43点のうち、5355のみ福田KⅡ式に比定できる有文浅鉢の底部である。底部の形状は、平底Aである。残りの5356～5397は無文浅鉢で、底部の形状から5356～5373は平底Aに、5374～5379は平底Bに、5380～5383は凹底、5384～5394は高台底に、5395～5397は丸みを帯びた平底Cにそれぞれ分類できる。



第314図 5-4・5区 包含層出土縄文土器 (54)

平底Aのなかで体部の傾きからさらに分類を行うと、5356～5365は体部が外上方へ直線的に開く一群、5366～5371は体部の開きがさらに大きい一群、5372・5373は一旦直立気味に立ち上がり、そこから外上方へ開く一群の計3群に分けることができる。

平底Bのなかで体部の傾きからさらに分類を行うと、5374・5375は体部が直線的に外上方へ開く一群、5376～5378は体部の開きがさらに大きい一群、5379は一旦直立気味に立ち上がり、そこから外上方へ開く一群の計3群に分けることができる。

凹底は、4点共に体部の開きがさらに大きい一群である。

高台底のなかで体部の傾きからさらに分類を行うと、5389は体部が直線的に外上方へ開く一群、5384～5386・5388・5390～5391は一旦直立気味に立ち上がり、そこから外上方へ開く一群、5387は立ち上がりが内側に屈曲してから、外上方へ立ち上がる一群の計3群に分けることができる。

5-4・5区 第二包含層（第315～317図：5403～5512）

第二包含層からの出土遺物は、第一包含層のものと内容的に大きな差異は認められない。後～晩期の土器が出土し、中津式・福田KⅡ式・縁帯文成立期・刻目突帯文が認められる。図化できた土器は、有文深鉢42点・浅鉢10点、無文深鉢48点・浅鉢10点の総数110点である。

有文深鉢

中津式の範疇で捉えた一群（第315図：5403～5426）

5403～5426のうち、5403～5417は平縁口縁、5418～5426は波状・山形口縁となる。小片のため文様構成の不明瞭なものが多いが、5413・5417は渦巻き文か。沈線のみで縄文帯が認められないのは、5417・5419・5422の3個体である。

福田KⅡ式の範疇で捉えた一群（第315図：5427～5429・5436・5437）

5427～5429・5436・5437は小片だが、福田KⅡ式の範疇で捉えた。5点共に平縁口縁である。5427は口唇部にV字形の刻目が、5436・5437は沈線1条が認められる。

縁帯文成立期～縁帯文期の一群（第315図：5430～5435・5438～5442）

縁帯文成立期の範疇で捉えたのは、11点を数える。5432～5435は口縁部を上方に拡張して、沈線2条を施す。5438・5439は内面側が若干肥厚し、1・2条の沈線を巡らす。5440～5442は口縁部を拡張し、円文・杵状区画文・沈線2条・縄文を施す。

晩期の深鉢（第315図：5443・5444）

小片だが、刻目突帯文を施す深鉢2点（5443・5444）が図化できた。



第315图 5-4·5区 第2包含層出土縄文土器 (1)

無文深鉢（第316図：5445～5492）

第二包含層出土の無文深鉢は、48点図化できた。その中で、内外面に条痕のみが認められる個体は25点を数え、条痕の施工原体には巻貝・二枚貝も認められる。出土した深鉢は小片が多く、図化できた個体のなかに無文深鉢でないものも含まれている可能性が考えられるが、明確に別器種と判断できない場合は深鉢に含めて分類を行っている。

1群（第316図：5445・5446）

口唇部に施文が認められるものを、1群とした。1群に含まれるのは2点のみで、ともに斜行刻目が施される。

2群（第316図：5447～5492）

口唇部に施文が認められないものを2群とし、口縁部および口縁端部の形状から次のように大きく5類に分類した

2群1類（第316図：5447～5452・5454・5459）

体部が、緩やかに内彎しながら立ちあがる一群である。口縁部の形状はさまざまで、端部を方形に収め、端面が水平にならないもの(5453)・水平になるもの(5451・5452)、端部を丸く収めるもの(5450・5459)、内面側が肥厚するもの(5447～5449)がある。

2群2類（第316図：5453・5455～5458・5460～5462・5465～5480）

頸部から口縁端部に向かってほぼ直線的に外上方へ立ち上がる一群を、2類とした。そして端部肥厚の有無でさらに分類し、肥厚しないものを2a類、肥厚するものを2b類とした。

2群2a類（第316図：5453・5455～5458・5460～5462・5465～5477）

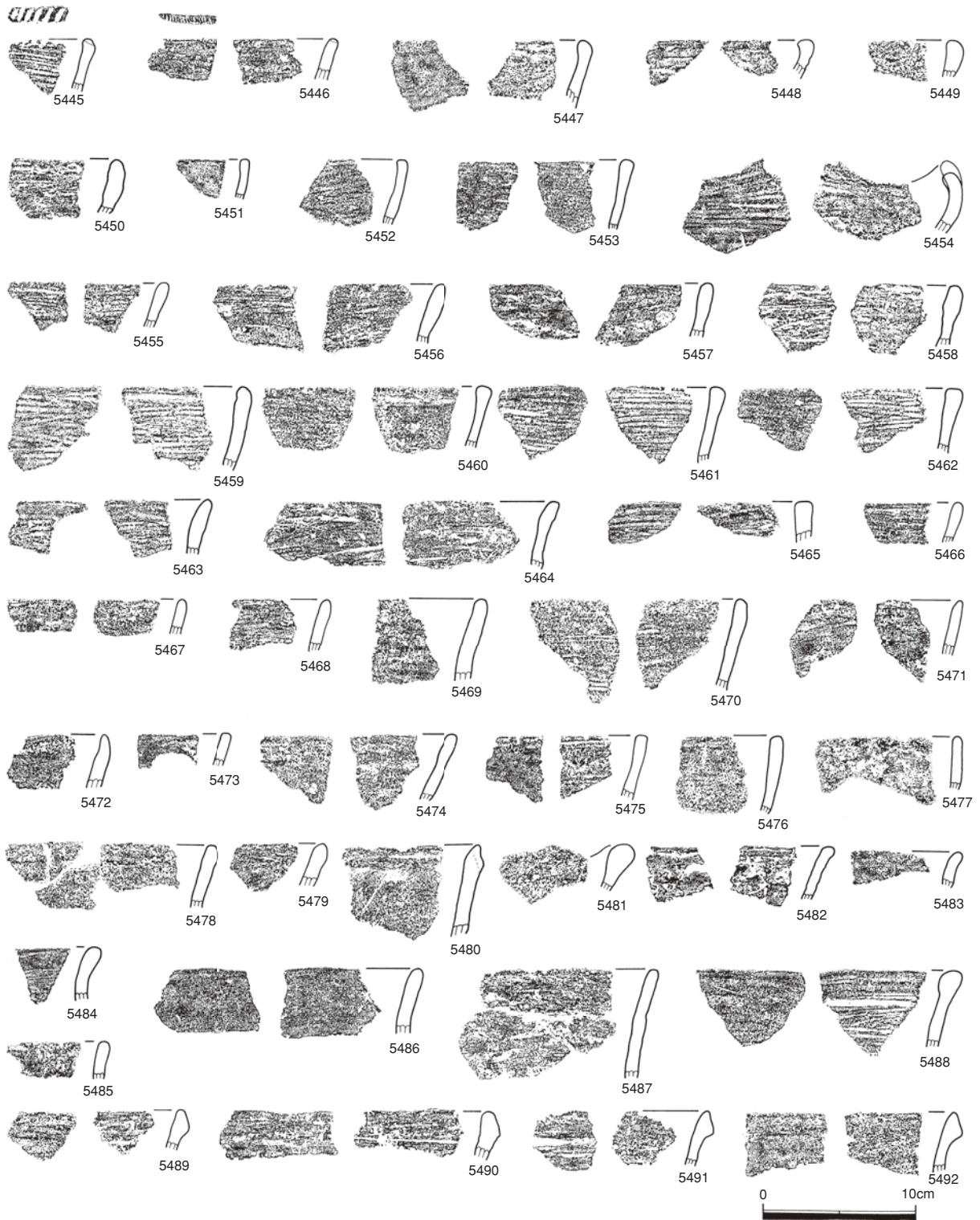
頸部から口縁端部に向かってほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、端部をそのまま収める。この端部の形状からさらに細分可能で、5455～5458・5466～5470・5477は口縁端部を丸く収め、5471・5472は尖り気味に収める。5453・5460～5462・5465・5473～5476は端部を方形に収め、端部上面がやや水平なもの(5462・5465・5473～5475)と水平にならないもの(5453・5460・5461・5476)に分けることができる。

2群2b類（第316図：5478～5480）

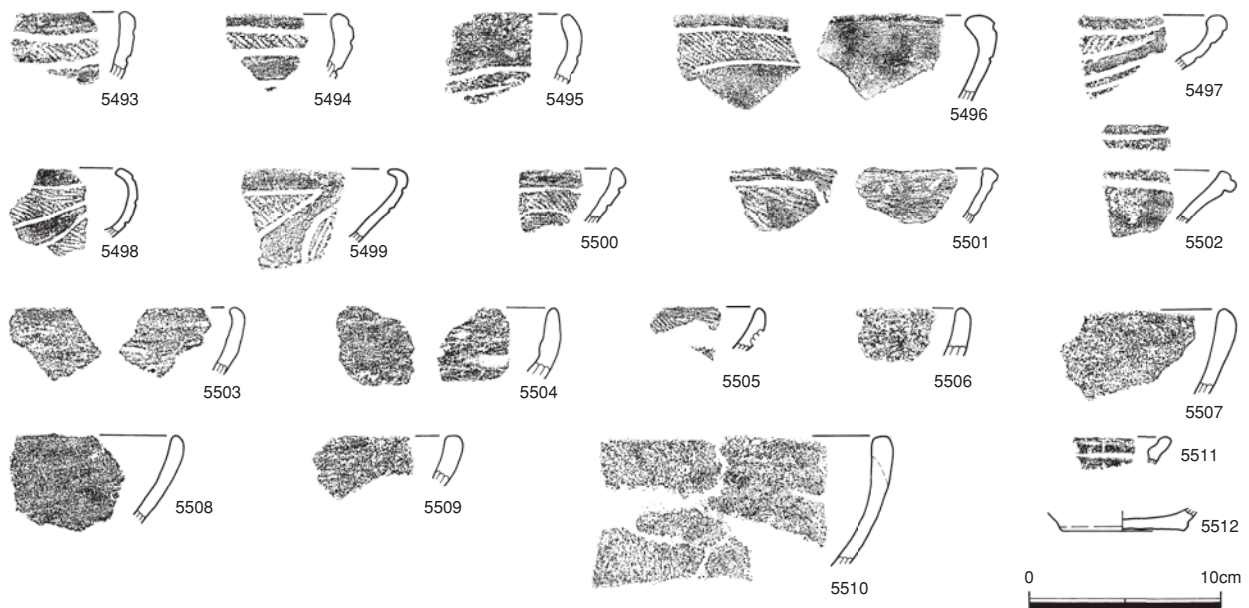
頸部から口縁端部に向かってほぼ直線的に外上方に立ち上がり、端部を肥厚させて収める。3点とも外面側を若干肥厚させて、端部を丸くあるいは尖り気味に収める。

2群3類（第316図：5463・5464・5481～5487）

頸部から口縁端部に向かって外反する一群を、3類とした。そして、端部肥厚の有無でさらに分類し、肥厚しないものを3a類、肥厚するものを3b類とした。



第316図 5-4・5区 第2包含層出土縄文土器 (2)



第317図 5-4・5区 第2包含層出土縄文土器 (3)

2群3a類 (第316図：5463・5464・5483～5487)

頸部から口縁端部に向かって外反し、端部をそのまま収める。端部の形状からさらに細分可能で、5483～5487は端部を丸く、5463は尖り気味に、5464は方形に収める。

2群3b類 (第316図：5481・5482)

頸部から口縁端部に向かって外反し、端部を肥厚させて収める。2点共に、外面側を若干肥厚させて丸く収める。

2群4類 (第316図：5488)

口縁端部の内面側に肥厚帯が認められる一群を、4類とした。4類に属するのは5488の1点のみで、肥厚帯がやや短く、端部を丸く収める。

2群5類 (第316図：5489～5492)

口縁端部の外面側に肥厚帯が認められる一群で、4点ともに口縁部の断面が三角形を呈する。

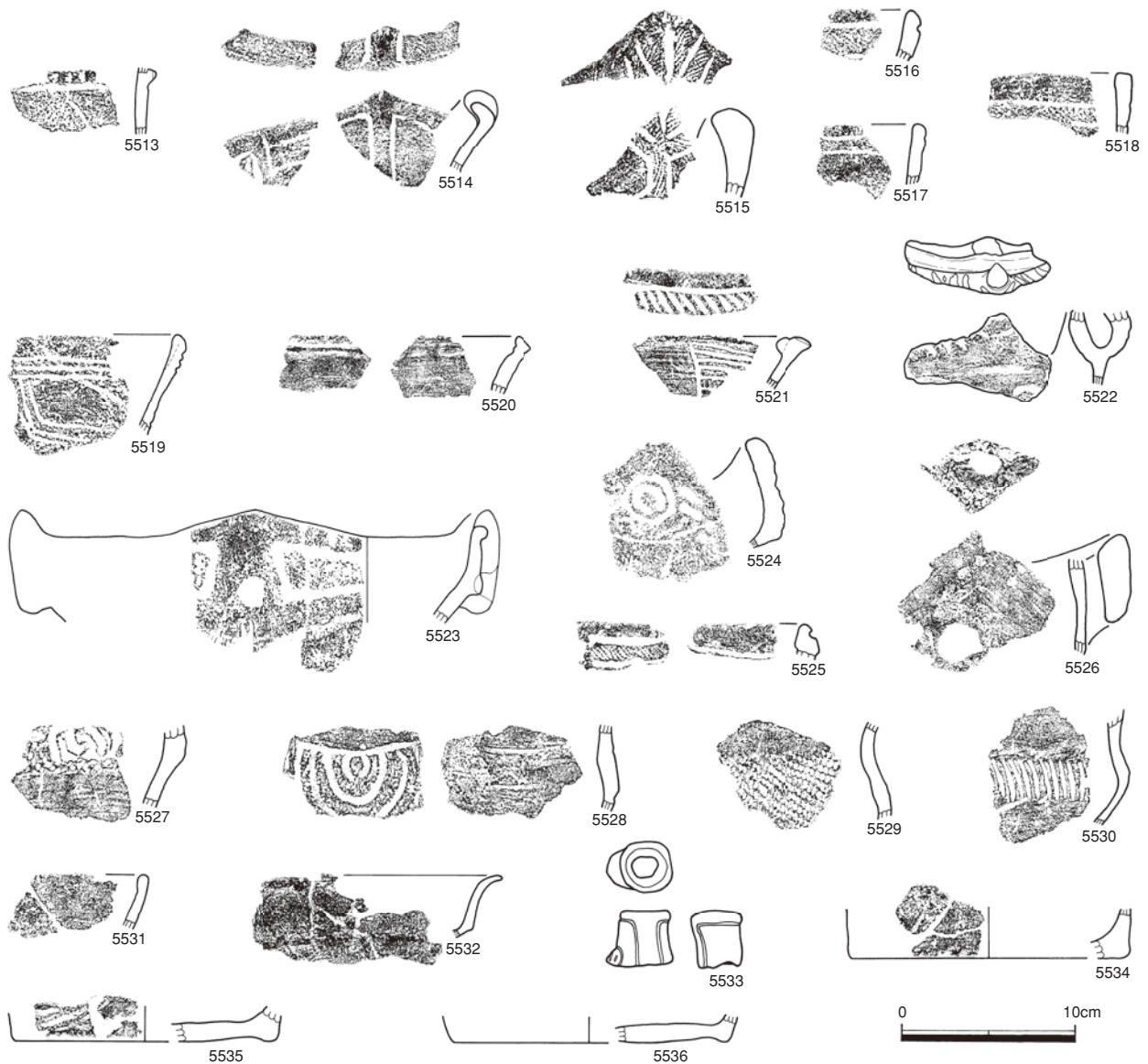
後期の浅鉢 (第317図：5493～5512)

中津式の範疇で捉えた一群 (第317図：5493～5500)

図化できた8点はすべて平縁口縁で、小片のため文様構成が不明である。

福田KⅡ式の範疇で捉えた一群 (第317図：5501・5502)

2点共に小片だが、福田KⅡ式の範疇で捉えた。



第318図 5区 トレンチ出土縄文土器

無文浅鉢（第317図：5503～5512）

第二包含層出土の無文浅鉢は、10点図化できた。しかし口唇部に施文された1群や、体部が大きく開き皿状を呈する2群4類の浅鉢は、図化することができなかった。

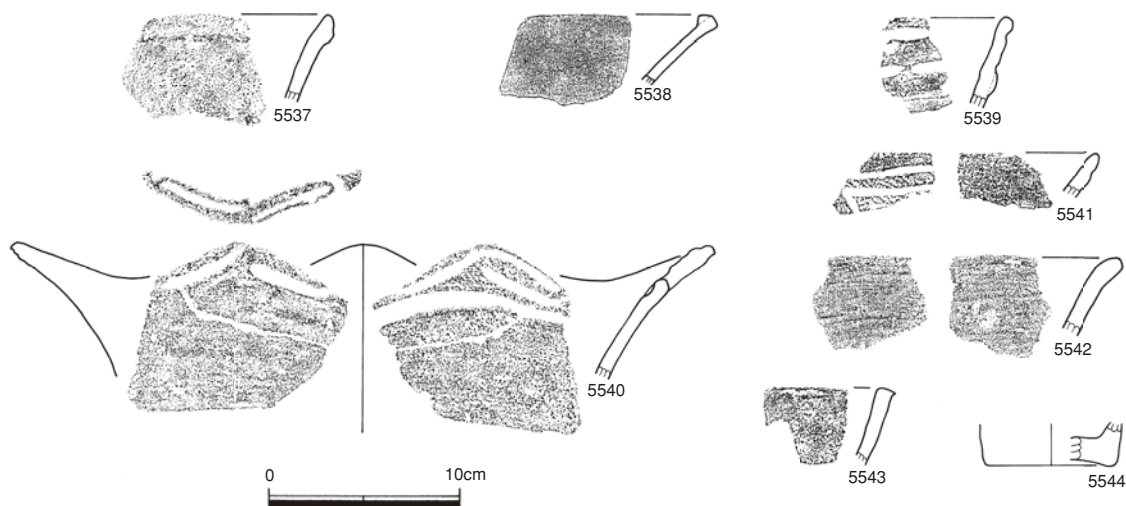
2群（第317図：5503～5512）

2群2類（第317図：5503・5510）

体部が内彎しながら立ちあがる一群である。5510は端部を方形に収め、端面が水平になる。5503は、端部を内面側に肥厚させて丸く収める。

2群3類（第317図：5504～5509）

体部から口縁端部に向かって緩やかに内彎しながら、あるいは直線的に外上方へ立ち上がる一群を3



第319図 7・9・10区 包含層出土縄文土器

類とした。そして端部肥厚の有無でさらに分類を行い、肥厚しないものを3a類、肥厚するものを3b類とした。図化できた個体の中には、3b類に該当するものは認められなかった。

2群3a類（第317図：5504～5509）

体部が外上方へ緩やかに内彎しながら立ち上がるものが大半を占め、5507のみ直線的に立ち上がる可能性がある。

晩期の浅鉢（第317図：5511）

5511は晩期の浅鉢で、1点のみ図化できた。

底部（第317図：5512）

5512は深鉢の底部で、形状から高台底に属する。

5区 トレンチ（第318図：5513～5536）

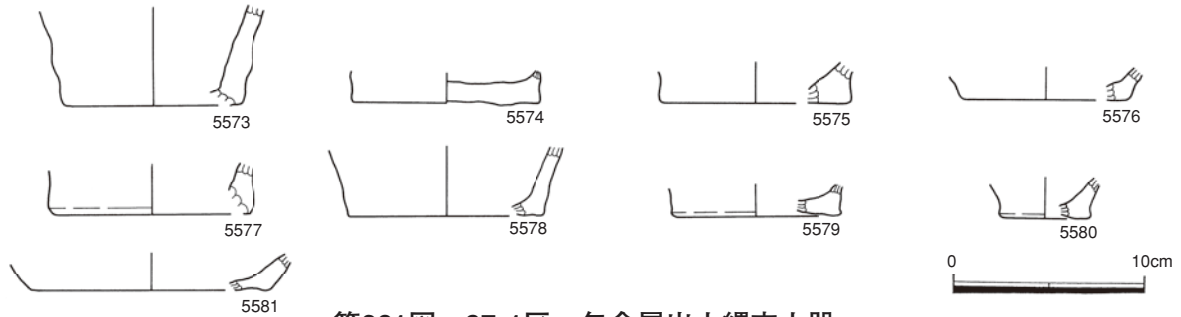
トレンチからの出土遺物は有文深鉢18点、無文深鉢4点・浅鉢1点、注口土器1点の計24点図化でき、後期を主体とする。5513のみ晩期の深鉢で、欠損しているものの刻目突帯文をもつ。

5515～5518は、中津式として捉えた深鉢である。5514・5516の2点は、沈線文のみで縄文帯が認められない。5519・5520は福田KⅡ式、5521・5522は縁帯文成立期、5523～5530は縁帯文系の範疇で捉えた。5521は口縁部端面に沈線+刻目が施され、また外面に施された文様から松ノ木式に比定できる。5522は、端面に凹線と刻目が認められる。また5523～5525・5527は、津雲A式か。5533は沈線文が施され、中津式と思われる注口土器である。

5531・5534～5536は無文深鉢、5532は無文浅鉢である。底部の形状から、5534は平底A、5535・5536は高台底である。



第320図 8区 包含層出土縄文土器



第321図 97-1区 包含層出土縄文土器

7・9・10区（第319図：5537～5544）

7・9・10区の出土遺物はそれぞれ少なく、図化できたのは8点のみである。5537・5538の2点が7区出土、5539は10区出土、残り5点が9区出土である。

5537は縁帯文系として捉えた深鉢で、頸部に櫛状工具による細密条痕が施される。5538は晩期の無文浅鉢で、内側に肥厚帯を巡らせる。5539は中期末と考えられる深鉢で、体部に押引による沈線文が認められる。矢部奥田式の範疇に含まれるか。

5540は、形式不明の深鉢である。遺存部の全面にミガキを施し、口唇部に部分的に縄文と沈線を巡らす。5541は有文浅鉢で、福田KⅡ式～縁帯文期に属すると思われる。5542～5545は無文深鉢で、口縁部の形態から5542は2群3a類、5543は2群2a類に分類できる。5545は、凹底である。

8区（第320図：5545～5572）

8区から出土した遺物のうち、有文深鉢14点・浅鉢1点、無文深鉢9点・浅鉢2点、鉢1点、注口土器1点の計28点が図化できた。後期中葉を主体とし、晩期は5566の1点のみの出土である。

5545～5557は縁帯文系深鉢で、5545～5548・5555・5556の5点は彦崎KⅠ式と想定できる。5545・5546は同一個体で、口唇部には沈線文を、頸部～体部ではナデのあと櫛状工具による細密条痕を施し、頸部では格子目を、体部には弧状の文様を描く。底部は焼成後、内面から穿孔しており、埋甕の可能性が考えられる。5555・5556も同様に、ナデの後に櫛状工具による細密条痕を施す。5547・5548の口唇部では沈線文が巡らされ、5547では刻目も認められる。5549～5553は口縁部端部を外側あるいは内面に拡張し、口唇部に1～2条の沈線を施す。5554では、体部に棒状工具による文様を描く。

5558～5560・5568～5572は、無文深鉢である。口縁部の形状から、5558は2群3a類、5559は2群4類、5560は2群5類に分類できる。底部の形状から、5568は平底A、5569～5571は凹底、5572は高台底に分類できる。

5562は有文浅鉢で、平城Ⅰ式の模倣例か。5563・5564は無文浅鉢で、5563は2群3b類、5564は2群5類に分類できる。5564の外側は、沈線が1条巡る。5561は中～後期に属すると思われる鉢で、体部に沈線文が認められる。5567は、無文注口土器である。

97-1区（第321図：5573～5581）

97-1区から出土した土器のうち、図化できたのは無文深鉢底部9点のみである。底部の形状から分類を行うと、5581の1点のみが平底Bで、その他の8点は平底Aである。平底Aを体部の傾きからさらに分類すると、5573～5579は遺存部で体部が直立気味に立ち上がり、5580は一度内側に屈曲してから立ち上がる。

5.2 弥生土器（第322・323図）

包含層から出土した弥生土器は、住居が検出された9区を中心に、1区、5-4・5区、7区から確認した。包含層出土分を併せても、弥生土器の出土量は少ない。これらの土器は、それぞれ器種別にまとめて述べていくことにする。

壺形土器(5582～5597)は、計16点図化できた。広口壺(5582～5584・5586～5590)、短頸広口壺(5585・5589)、底部(5591～5597)である。広口壺は、口縁端部を上方あるいは上下方向に拡張して、端面に凹線や強いヨコナデを施すもの(5582～5584)、口縁端部をそのまま方形あるいは丸くおさめるもの(5586～5588)、端部を拡張するが端面はヨコナデのみのもの(5590)がある。また5582では、口縁部内面に凹線3条を施す。短頸広口壺の2点は、口縁端部を上方に拡張し、強いヨコナデを施す。またこの2点は、甕形土器の可能性も考えられる。底部はすべて平底で、5591では2孔1対の穿孔部が2ヶ所認められた。また、5595は上げ底である。調整では、全般的に遺存状態が悪いものの、外面はヨコナデ・ハケメ・ミガキ、内面はヨコナデ・ハケメ・ケズリが認められる。

甕形土器(5598～5615)は、計18点図化できた。口縁部(5598～5609)、底部(5610～5615)である。出土した口縁部は、くの字を呈する。これらのうち、口縁端部を上方あるいは上下方向に拡張するもの(5598・5600・5602～5607)、そのまま丸く、あるいは方形に収めるもの(5599・5601・5608・5609)がある。端部を拡張する個体のなかに、端面に凹線を施すものが認められる(5598・5600)。5608では粘土紐接合痕が認められ、また5598・5600では外面頸部に、5599では内外面の体部下半と外面口縁部の一部に煤状の炭化物が付着し、特に5599に多い。底部はすべて平底で、5610のみ上底である。また5613では遺存部で未穿孔が認められ、胎土に角閃石・金雲母を含むことから讃岐からの搬入品の可能性がある。調整では、外面はヨコナデ・ミガキ・ハケメ、内面はヨコナデ・ハケメ・板ナデ・ケズリ・ユビナデが認められる。内面のケズリを施す個体の中には、口縁部近くまで施すものもある。

鉢形土器(5616～5619)は、計4点図化できた。このうち5616～5618の形態は、体部が外上方へ直線的に立ち上がり、口縁端部を丸く収めるもの(5616)、口縁部で外反するもの(5617)、直立するもの(5618)である。5619の底部は不明だが、小型丸底鉢と考えられる。また5616は、外面に炭化物の付着が認められる。調整では、外面はヨコナデ・ハケメ・ユビナデ・ミガキが、内面はユビナデ・ハケメ・ミガキが認められる。

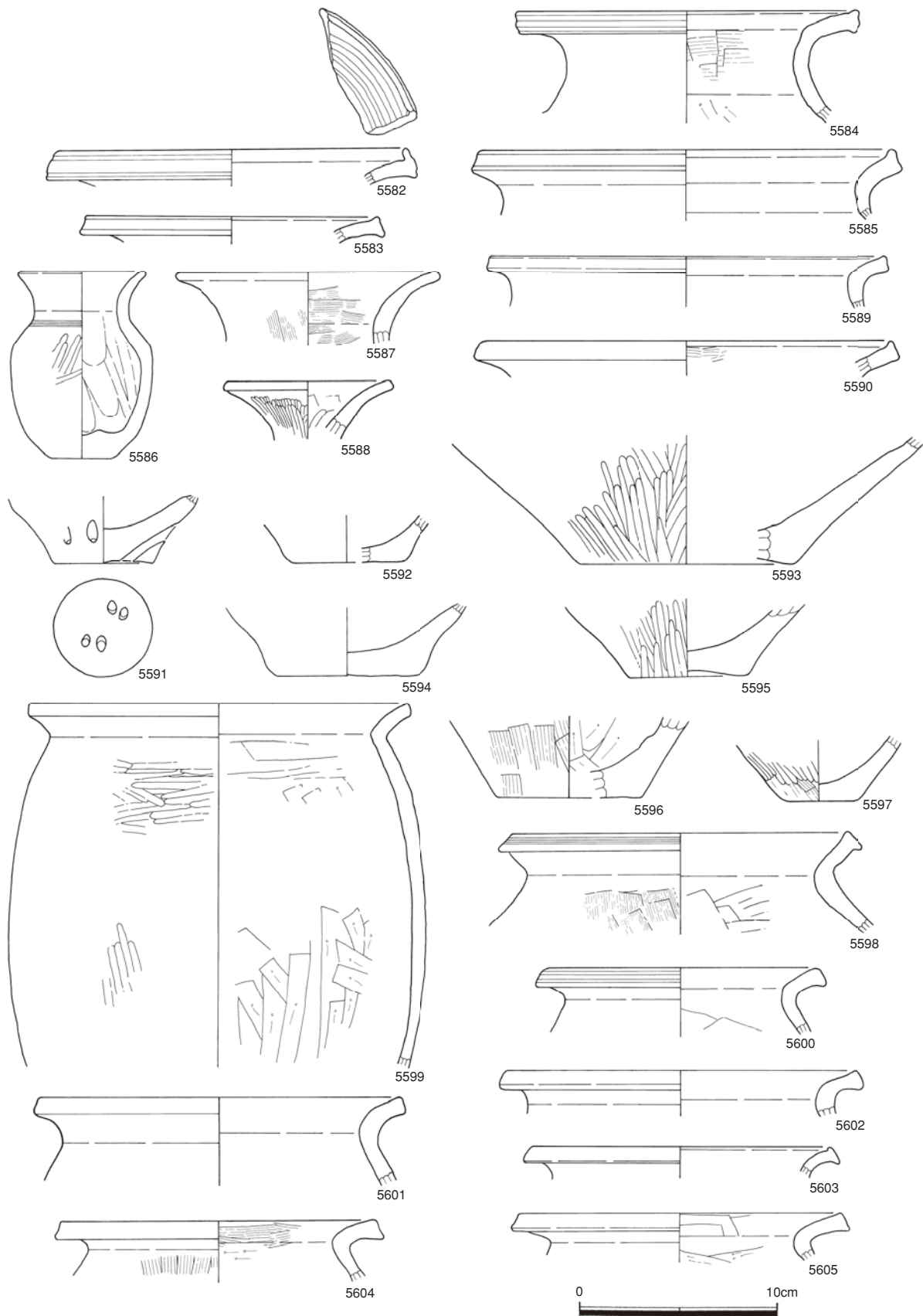
高坏形土器(5620・5621)は、計2点図化できた。5620は脚部で、遺存部で円形透孔が3ヶ所認められた。透孔は、外面から施す。5621は坏部で、坏部と脚部の接合が円盤充填法である。

5.3 須恵器・土師器（第324～327図）

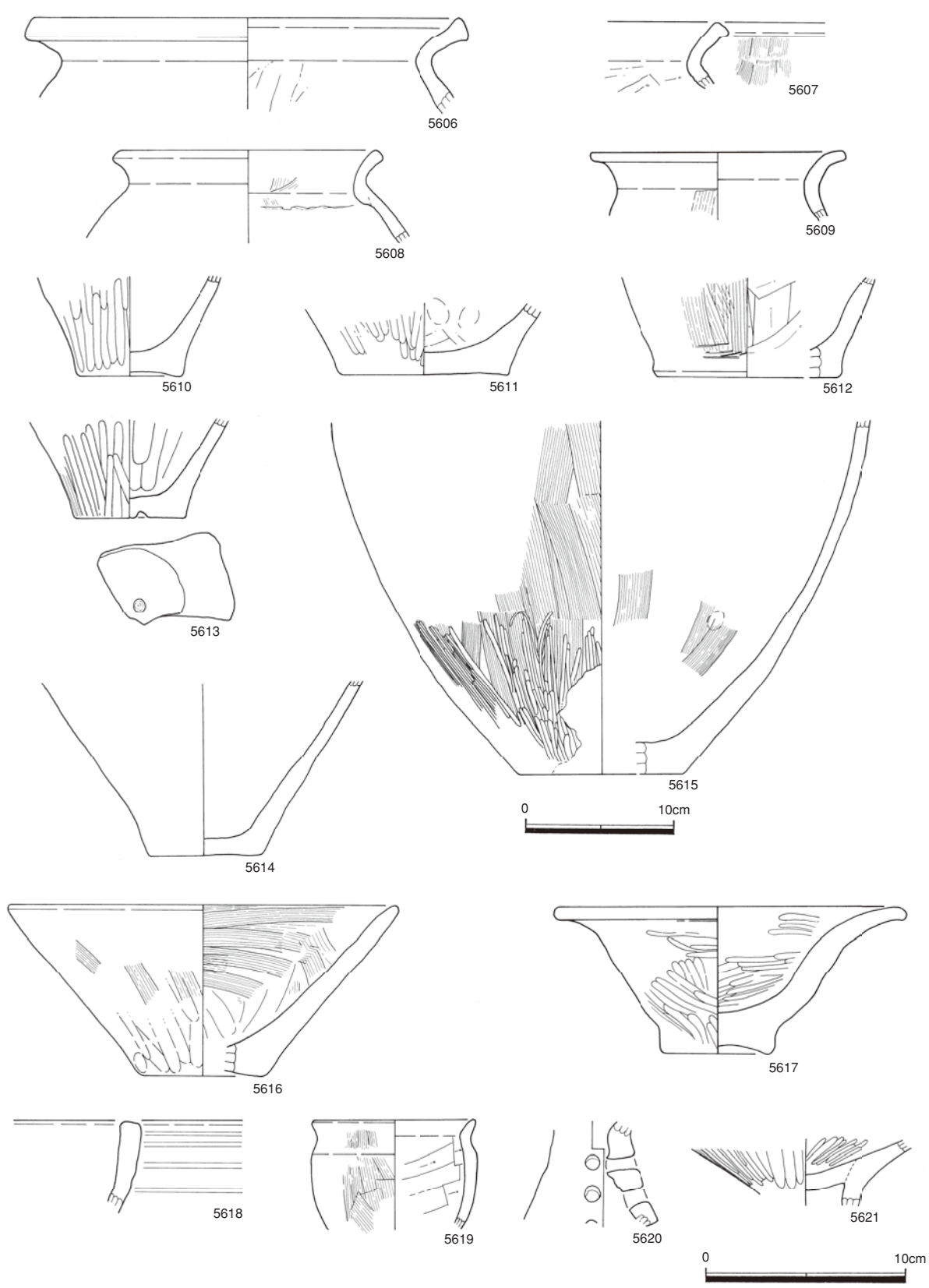
包含層から出土した古墳時代の遺物(5622～5641)は、墳墓が検出された1区、97-1区から確認した。これらの遺物は、検出できた墳墓に伴う可能性が考えられる。図化できた遺物は、須恵器坏蓋(5622～5625)・坏身(5626～5630)・甕(5631)・平瓶(5632)・高坏(5633)・器台(5634)・提瓶(5635・5637・5638)・甕(5639～5641)、耳環(5636)の計20点である。

須恵器坏蓋(5622～5625)は、計4点図化できた。5622は、内面見込みに回転ナデの後ユビナデが認められる。

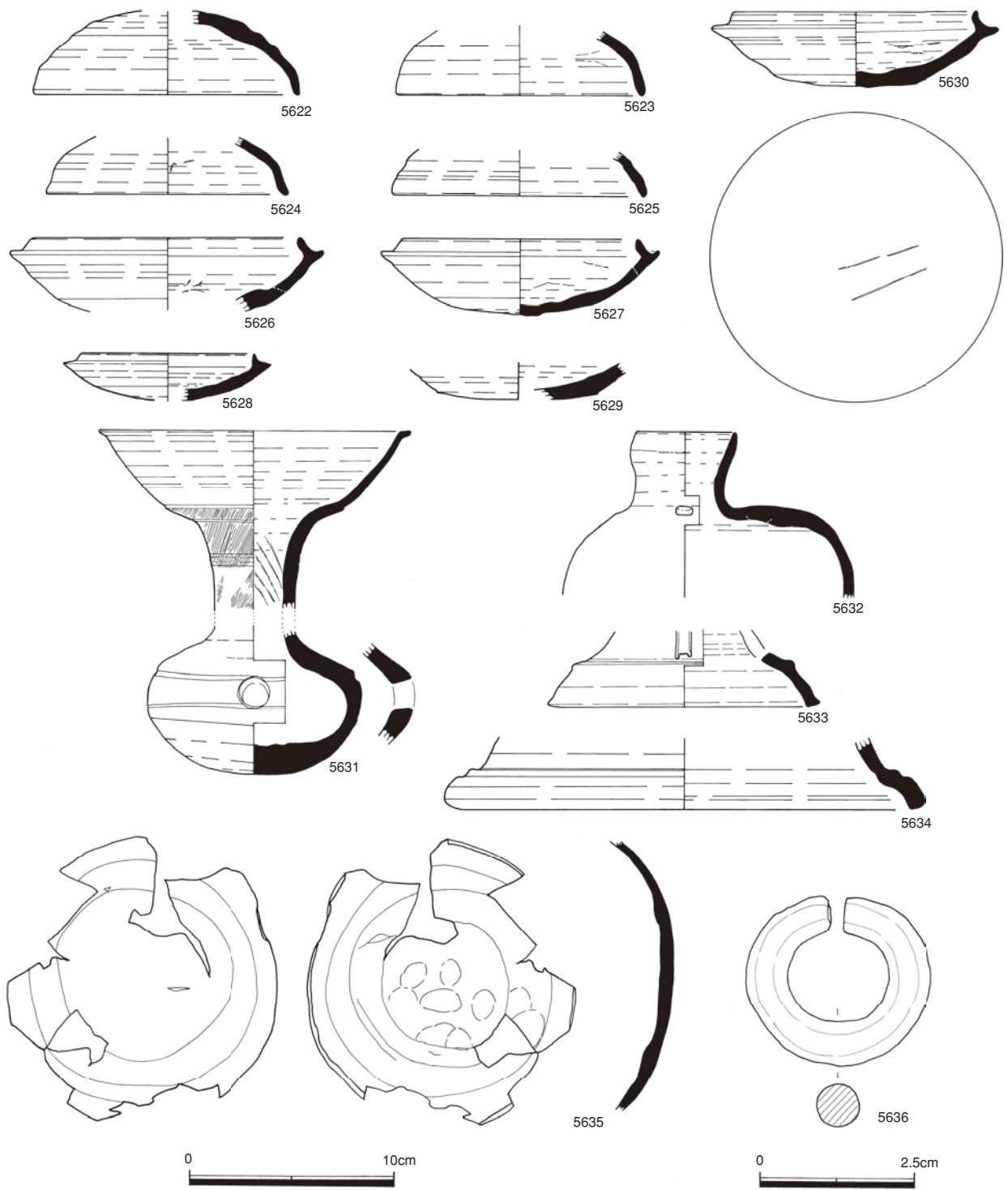
須恵器坏身(5626～5630)は5点図化でき、5630のみ完形である。5627・5628・5630の3点は、内面見込みに回転ナデの後ユビナデが施される。



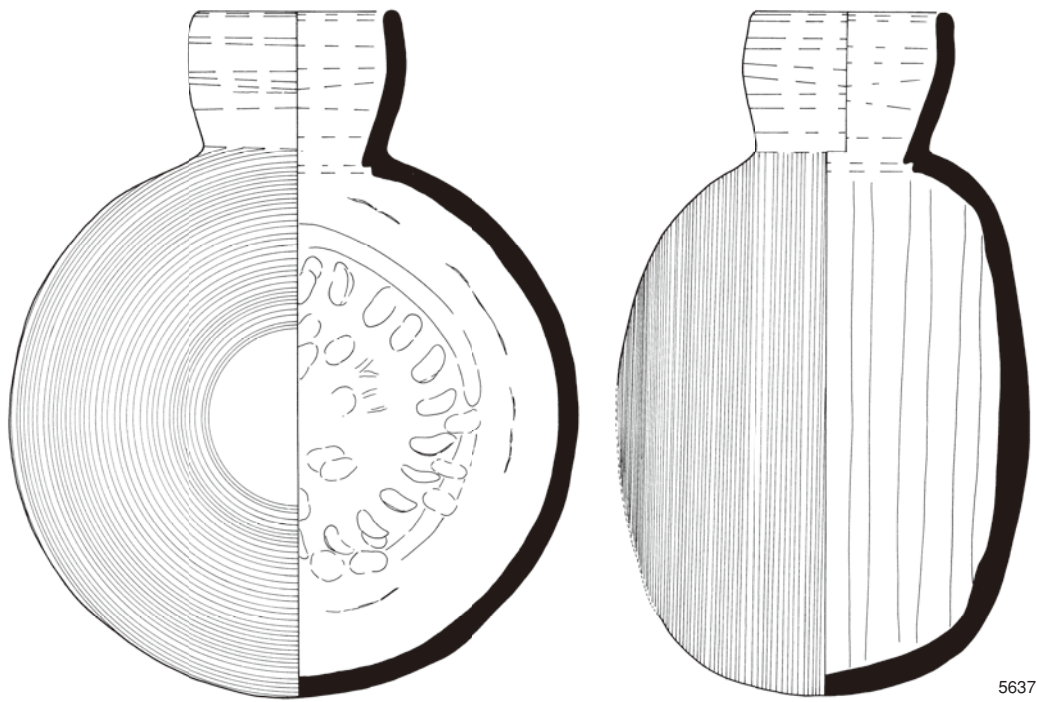
第322图 包含層出土土器（弥生）（1）



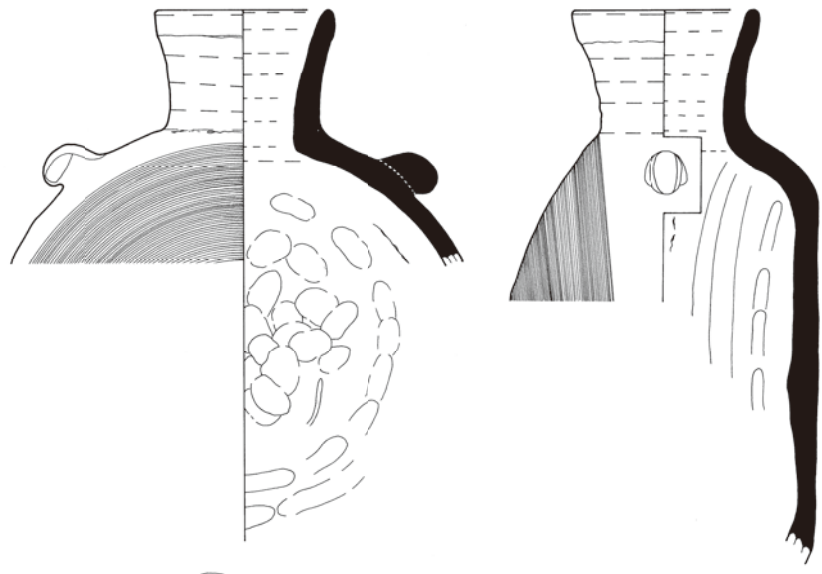
第323图 包含層出土土器（弥生）（2）



第324図 包含層出土土器（古墳）（1）



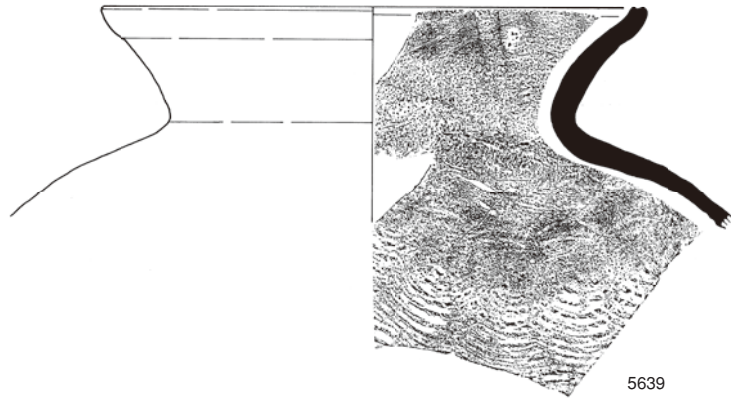
5637



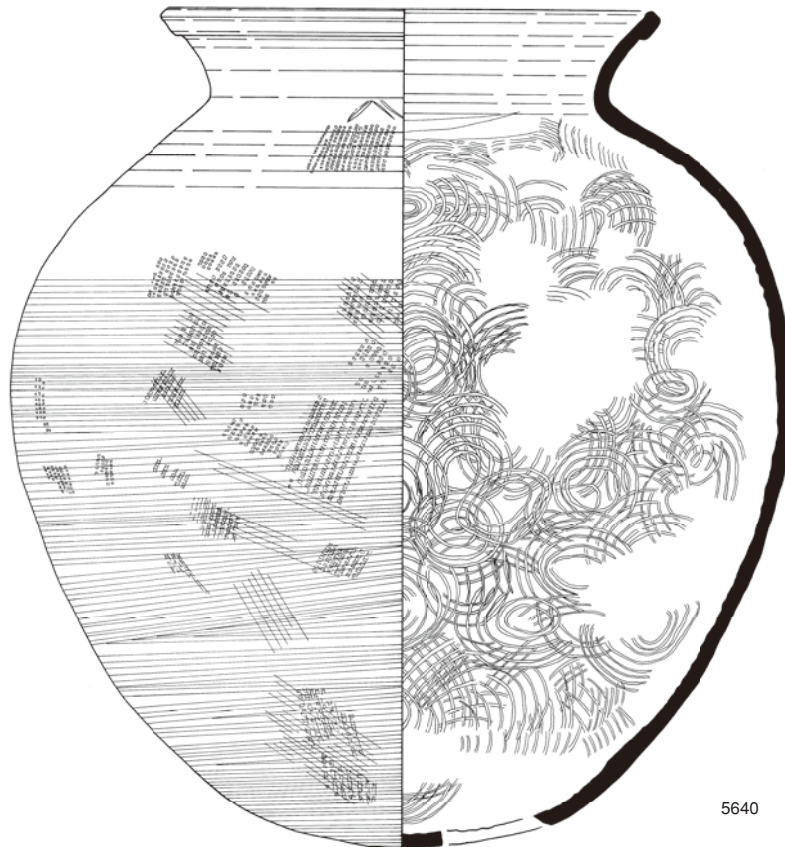
5638



第325図 包含層出土土器（古墳）（2）



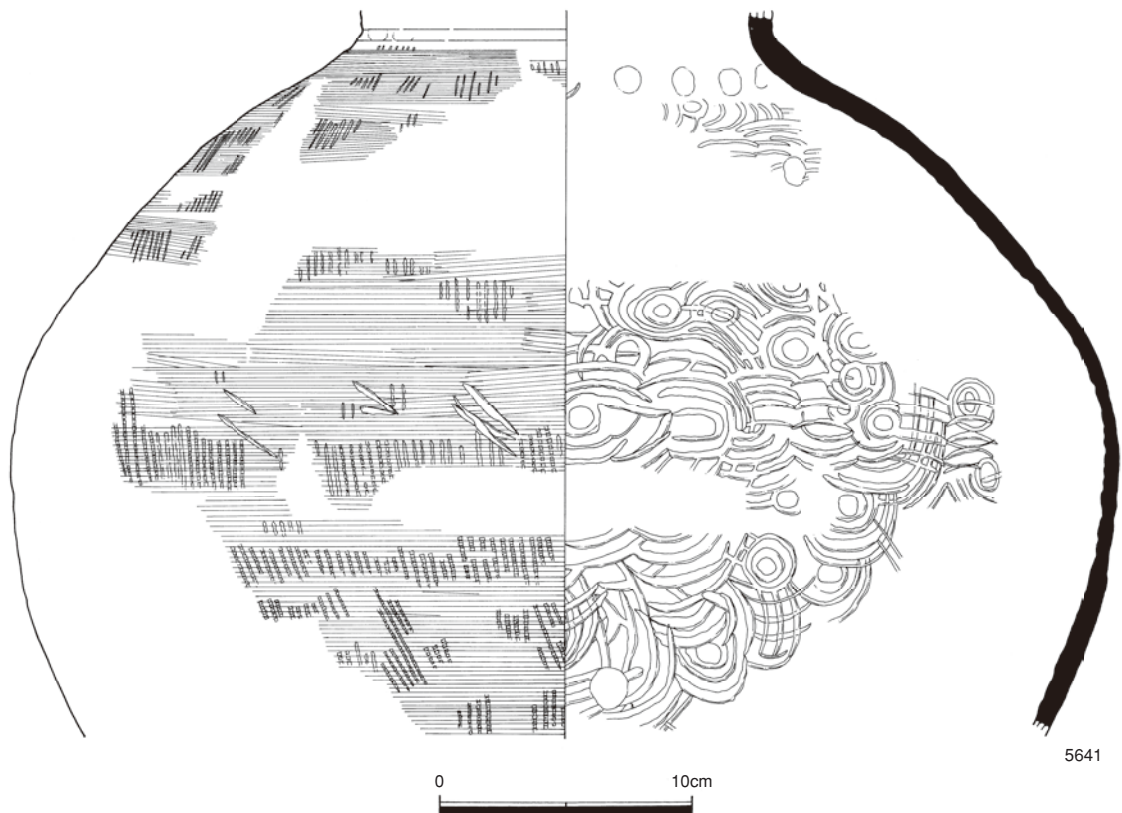
5639



5640



第326図 包含層出土土器（古墳）（3）



第327図 包含層出土土器（古墳）（4）

5623・5624・5626・5627・5630の5点は、内面に粘土紐接合痕が残る。また5630では、外面底部にヘラ記号が認められた。

甗(5631)は頸部と体部の境で破損するが、同一個体である。頸部に3条、体部に2条の沈線が認められる。また頸部では沈線を施した後に、工具による斜め方向のナデの痕跡が認められた。

平瓶(5632)は、底部が欠損する。全体的に歪みがあり、体部上面はやや角張る。摘みを有し、外面に粘土紐接合痕が認められる。

高坏(5633)・器台(5634)ともに脚部のみの出土で、5633は長方形の透孔が認められる。

提瓶(5635・5637・5638)は3点図化でき、5637のみ完形である。3点ともに、内面にユビオサエ・ユビナデが顕著に認められ、特に5637では爪痕も残る。また内外面に、粘土紐接合痕が認められる。5637・5638の2点は体部にカキメが施され、5638の方が細かい。また5638は吊手を持ち、裏面にヘラ記号が認められる。

甗(5639～5641)は、3点図化できた。5640・5641の外面体部の調整として、斜め方向の格子目タタキのあとにカキメを施す。3点ともに、内面は青海波文である。5639は、外面一面と口縁部内面に自然釉がかかる。5640は外面頸部にヘラ記号が認められ、底部を故意に打ち割る。5641は、外面体部の7ヶ所にヘラ記号が認められる。

5.4 中世遺物（第328～331図）

中世遺物(5642～5719)は、黒色土器碗(5642)、土師質土器碗(5643)・杯(5644～5648)・皿(5649)・小皿(5650～5657)・羽釜(5658～5669・5672)・茶釜(5670)・鍋(5671)・播鉢(5673～5675)、須恵質土器碗(5676～5683)・小皿(5684)・播鉢(5685)・こね鉢(5686～5688)、瓦器碗(5689)・小皿(5692)、瓦質土器碗(5690)・茶釜(5693)、黒色土器碗(5691)、青磁碗(5694・5696)、白磁碗(5695・5697)、陶器甕(5698)・播鉢(5699)、鉄製品(5700～5707)、銭貨(5708～5719)の計78点が図化できた。

土師質土器の供膳具のうち、碗の出土量は少ない。黒色土器碗は、断面方形を呈しハの字に開く高台を持つ5642と5691の2点のみだが、5691は瓦質土器碗の可能性もある。土師質土器碗は、5643の1点のみである。貼り付け高台で、断面逆台形を呈し、ハの字に開く。高台貼り付け時に、板状工具による回転ナデを施す。土師質土器杯は、5点図化できたなかで5646以外の杯は体部が外上方に開きながら立ち上がり、口縁部で外反する。5644のみ静止糸切りで、他の4点は回転ヘラ切りである。また5645・5646は回転ヘラ切りの後ナデを、5648は板ナデを施す。5645は内面見込みの中央部のみ、回転ナデのあと粗い板ナデを施す。土師質土器皿は5649のみで、底部は静止糸切りである。また内外面に、多量の煤状の炭化物が付着する。土師質土器小皿は、8点図化できた。底部はすべて回転ヘラ切りで、5650・5651・5654はヘラ切りのあと粗い板ナデを施す。5656以外の小皿では、ヘラ切りのあとに板ナデ・ナデを施す。また5654は、内外面に炭化物が多く付着する。

煮沸具のうち、土師質土器羽釜は脚部2点を含めて13点図化できた。鏝部は水平に向くものが主体だが、上向きもある。図化できたなかには、鏝部のしっかりしたもの(5658)や、退化したもの(5665)が散見できる。また鏝部の成形でほとんどが折り曲げだが、5664のみ貼付成形である。5658～5665の8点は、鏝部から下位の体部に煤状の炭化物が付着し、5661・5662・5664・5665の4点では多量に付着する。また5664・56652点の胎土に金雲母が認められることから、讃岐からの搬入品の可能性がある。5672は、底部に格子目タタキが認められる。茶釜は5670の、鍋は5671の各1点のみである。5671は、外面に煤状の炭化物が付着する。

調理具である土師質土器播鉢は3点図化でき、遺存状態が悪いものも存在するがそれぞれ内面に播目を確認した。

須恵質土器の供膳具のうち、碗は8点図化できた。底部はすべて貼り付け高台で、断面を逆三角形・方形・半円形・逆台形に収める。5676はほぼ完形で、外面は回転ナデのあとに稜線をつぶすような形で、ミガキを5条施す。内面の調整もミガキである。須恵質土器小皿は5684の1点のみで、底部回転ヘラ切りのちに粗い板ナデを施す。また口縁部に、重ね焼きによる黒色帯が認められる。

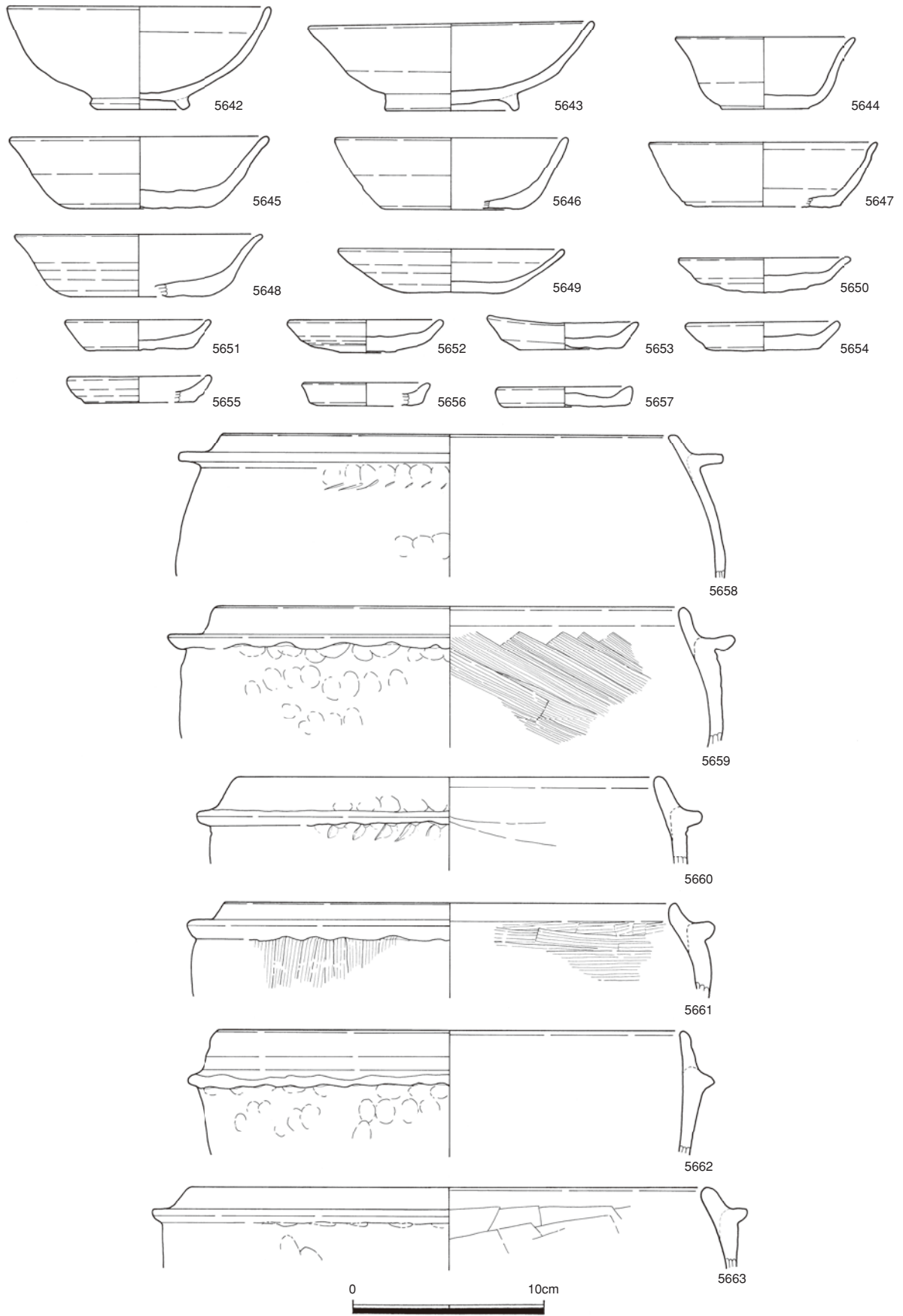
調理具である須恵質土器播鉢は、5685の1点のみである。須恵質土器こね鉢は2点図化でき、遺存状態が悪いものも存在するが、それぞれ内面に播目を確認した。こね鉢は5688のみが、片口をもつ。

瓦質土器のうち、5689と5692は瓦器といえる。

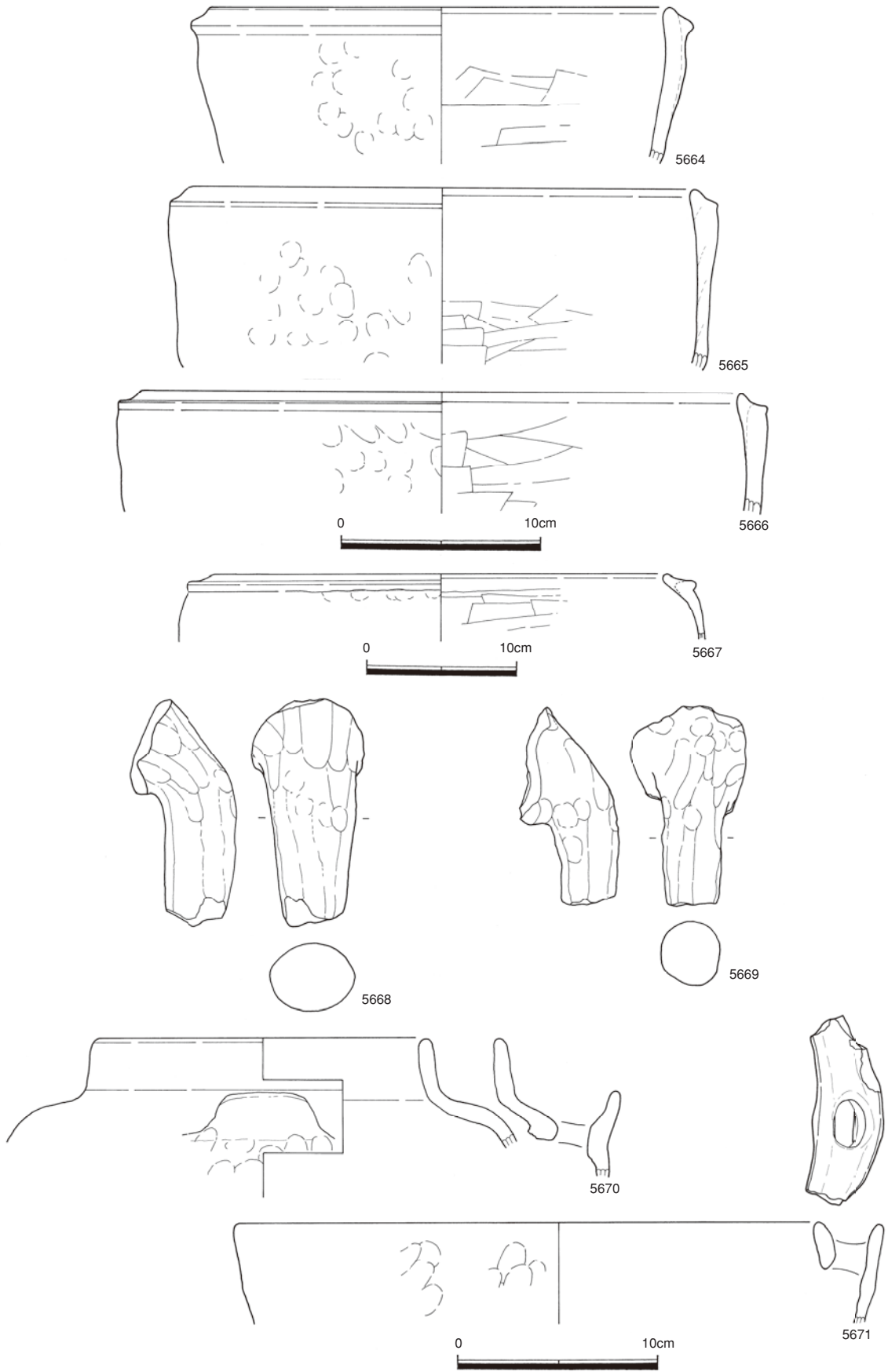
輸入陶磁器で、5694・5696は青磁碗、5695・5697は白磁碗である。5694は、鎬連弁文を持つ。5698は陶器甕、5699は陶器播鉢であり、ともに備前産と考えられる。

鉄製品は、8点図化できた。5700は鉄鎌、5701～5704は断面方形を呈する鉄釘、5705は不明鉄製品、5706は棒状鉄片、5707は鑄造に伴うと考えられる鉄塊である。

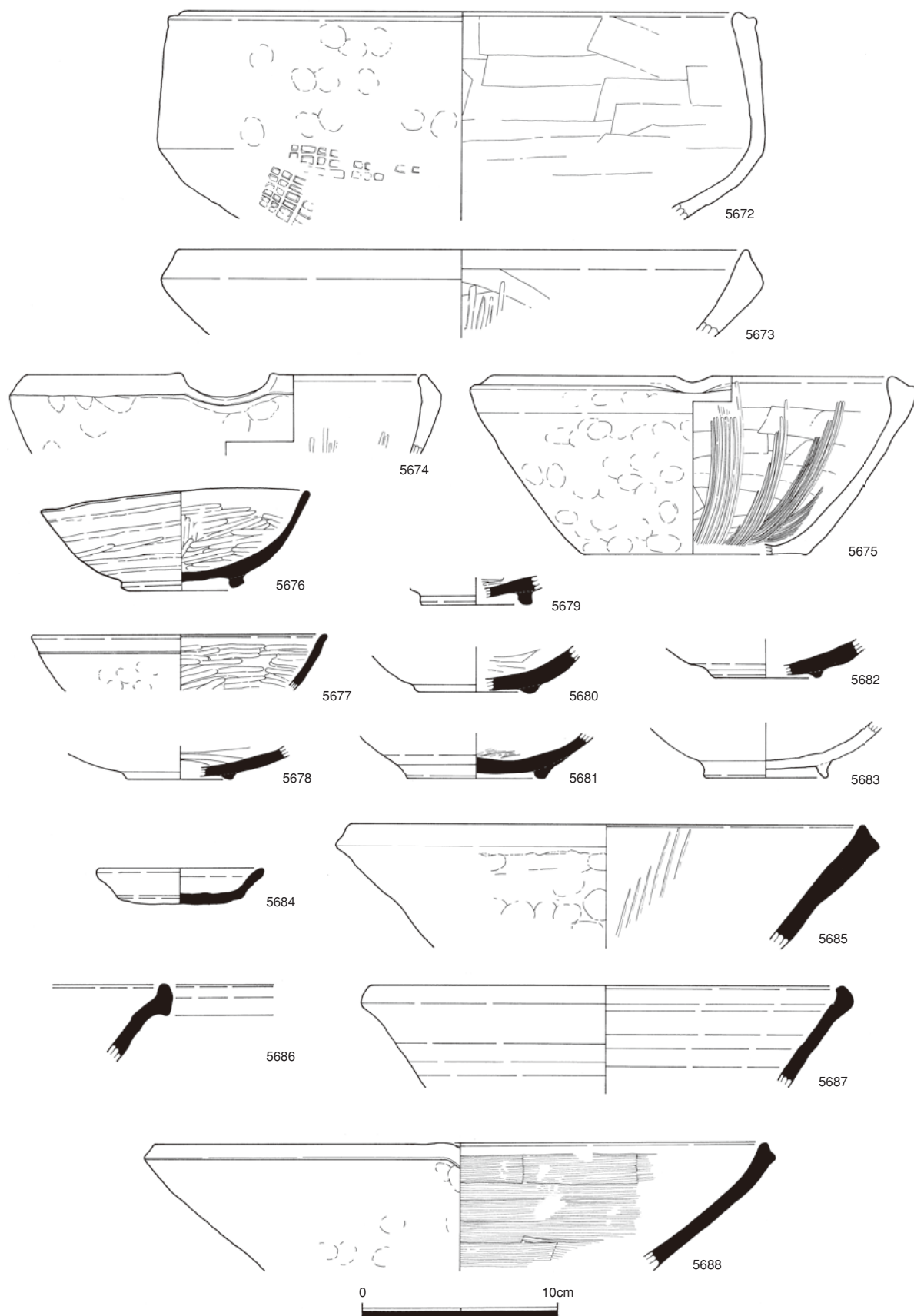
銭貨は、12点図化できた。5718・5719の2点は、遺存状態が悪く文字が判読できないものの、かろうじて5718で「宝」の文字が読みとれる。5708は開元通寶、5709は祥符元寶、5710は熙寧元寶、5711・



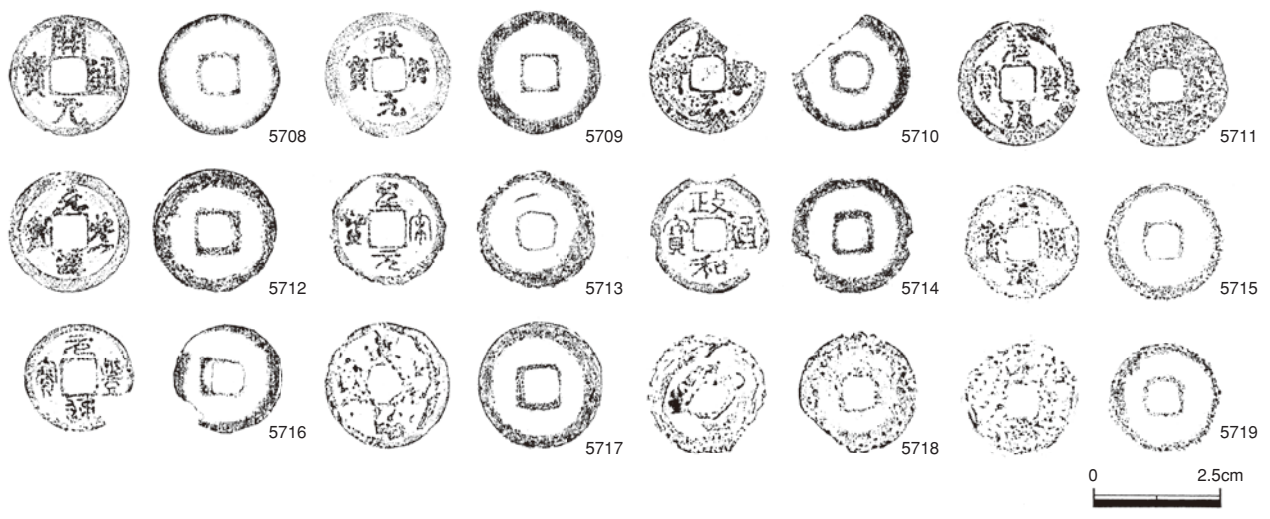
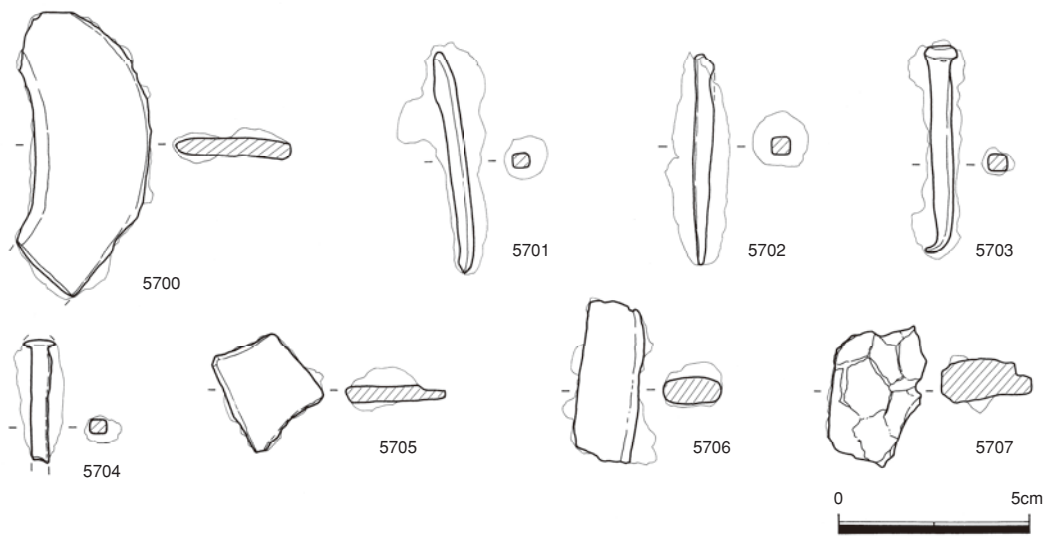
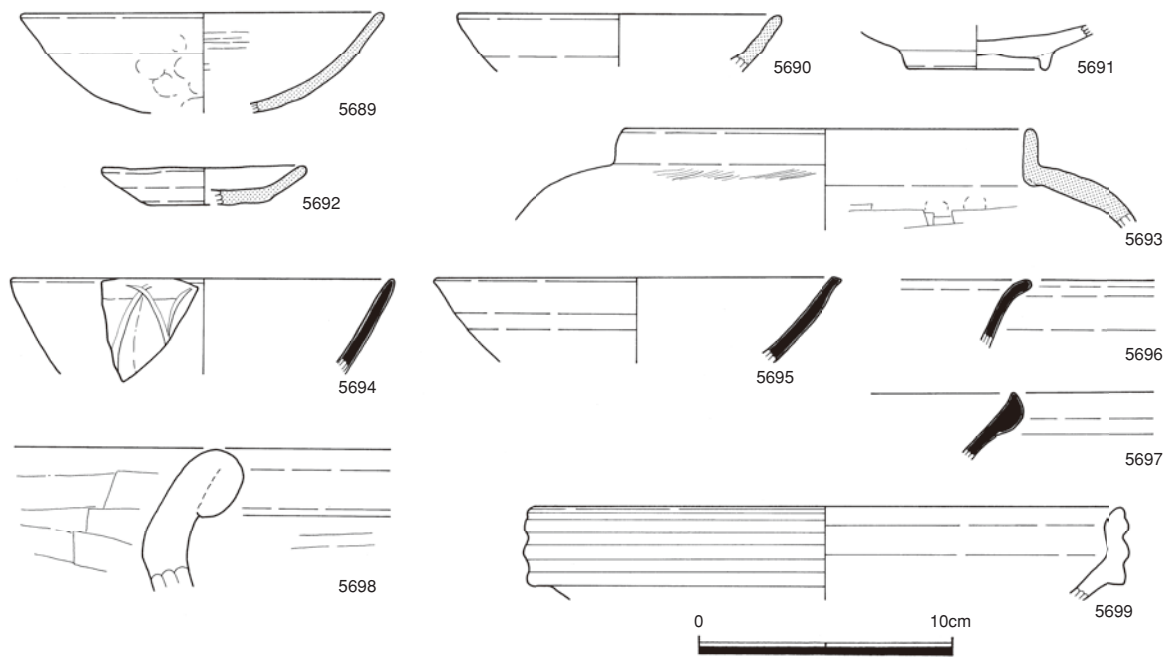
第328图 包含層出土土器（中世）（1）



第329図 包含層出土土器（中世）（2）



第330図 包含層出土土器（中世）（3）



第331图 包含層出土土器（中世）（4）

5712・5716・5717は元豊通寶、5713は聖宋元寶で背面に月文が認められる。5714は政和通寶、5715は洪武通寶である。また元豊通寶のうち、5716は模鑄錢と思われる。

5.5 石器 (第332～375図)

1区 (第332～339図)

出土した石器のうち、石鏃(S82～92)11点、石錐(S93～96)4点、楔形石器(S97～106)10点、石匙(S107)1点、削器(S108～116)9点、剥片(S117～154)38点、石斧(S155)1点、石錘(S156～170)15点、敲石(S171～180)10点、磨石(S181)1点、石皿(S182)1点の計101点が図化できた。

石鏃のうち、S82～85は平基三角、S86～92は凹基式で、そのうちのS83・84・86・88は未製品である。使用石材は、すべてサヌカイトである。石錐の使用石材はすべてサヌカイトであり、S96のみ完形である。

楔形石器の使用石材はすべてサヌカイトで、S97のみ完形である。裁断面はS99は右に、S101・103は左右に、S104は左に認められる。打面構成は欠損部があるものの、S97～100・102が四方向、S101・103～106が二方向と思われる。

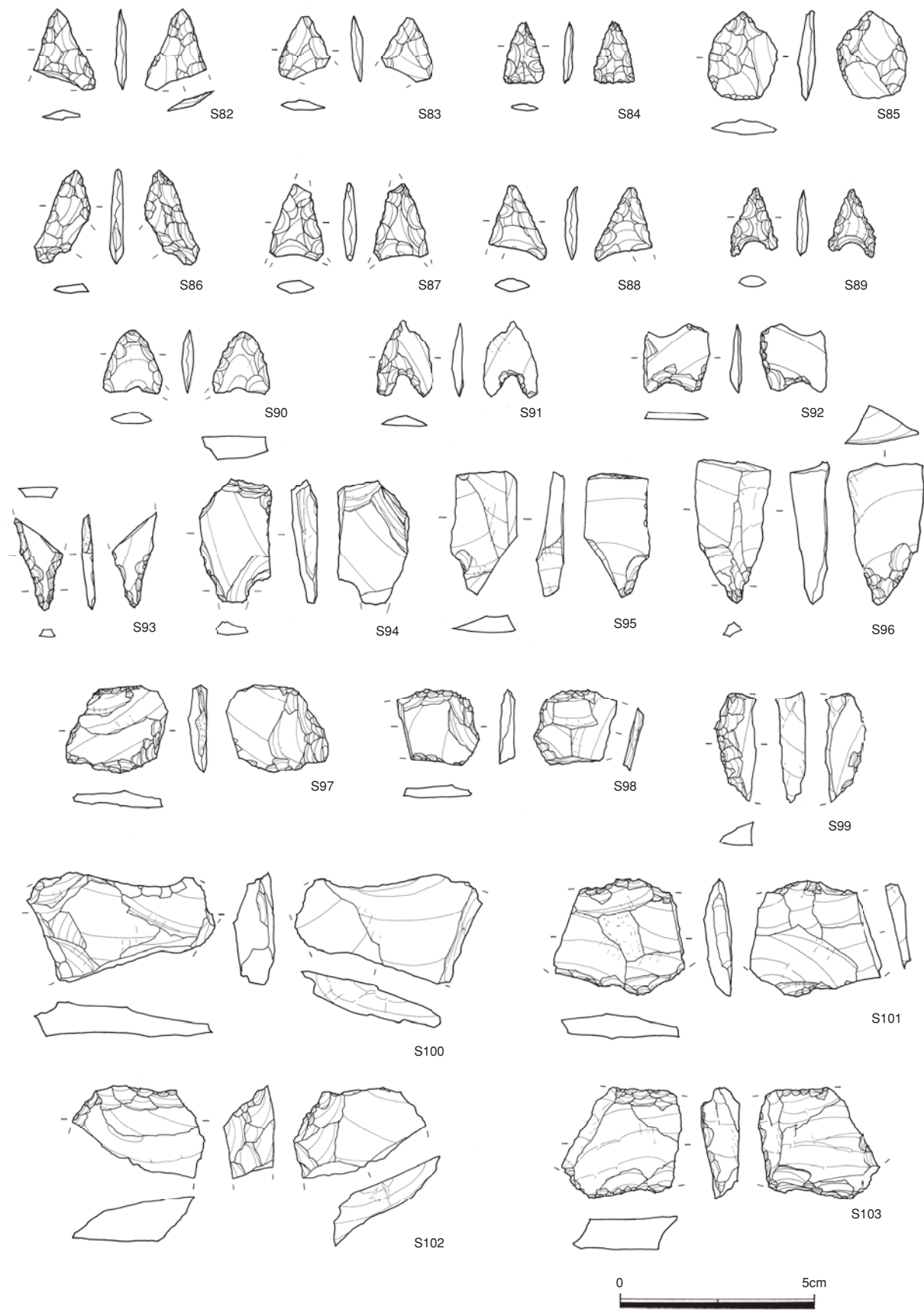
S107は完形の石匙で、使用石材にサヌカイトを用いる。横長剥片を用い、凸刃・複刃を持つ。削器のうち、刃部数はS108～113は単刃、S114～116は複刃で、刃部の形態はS108・110・112・113は平刃、S109・111は凹刃、S115・116は平刃・凹刃、S114は凹刃・凸刃をもつ。S116は石匙の未製品の可能性があり、また上側縁部につぶれ痕が認められる。使用石材として、S108・112は砂質片岩、S110は粘板岩、その他はサヌカイトを用いる。

剥片はすべてサヌカイトで、そのうちのS149～154では二次加工が認められる。またS150・154で、それぞれつぶれ痕が認められた。

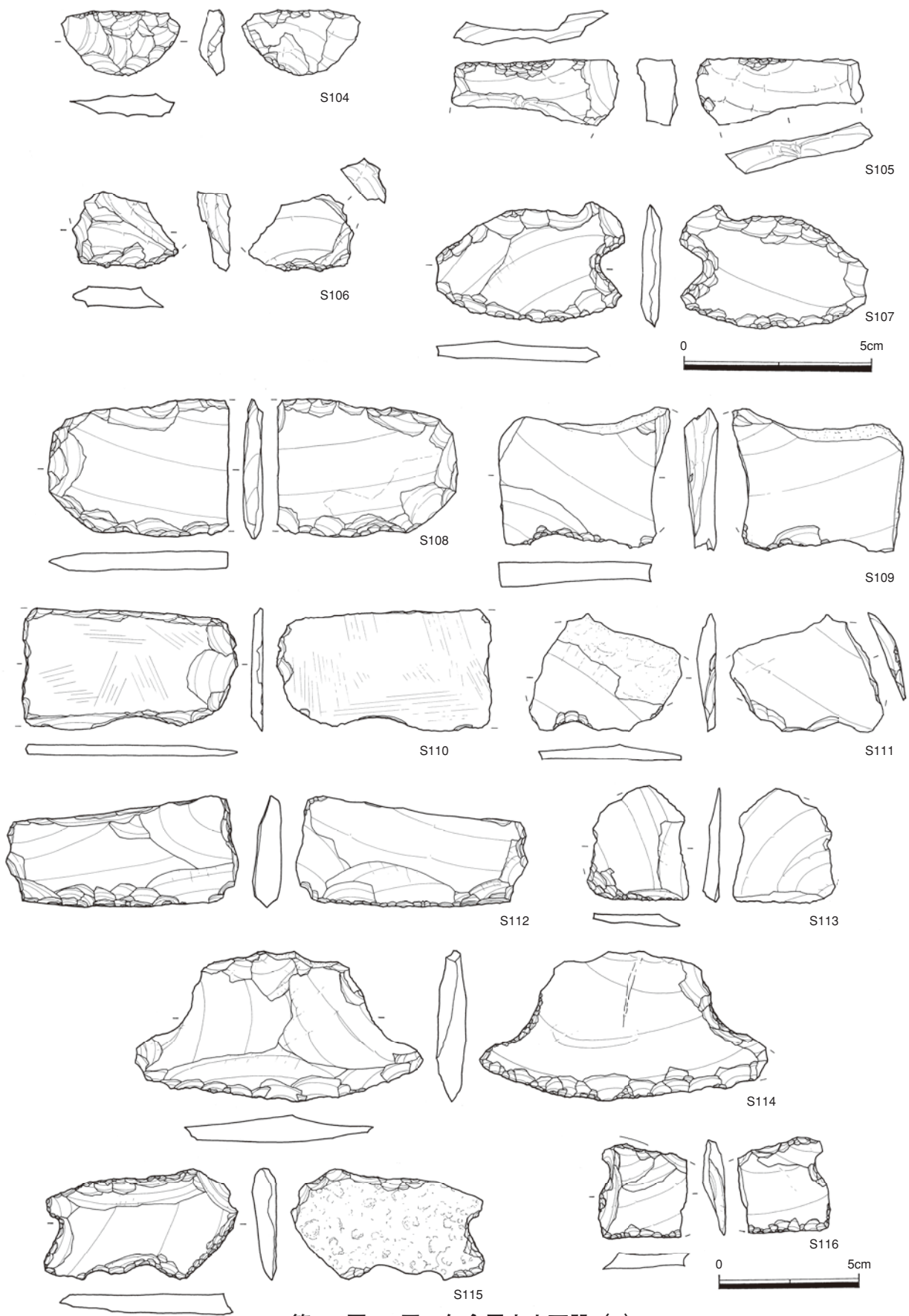
石斧はS155のみで、砂質片岩を使用した柱状片刃石斧である。上半部が欠損する。石錘はすべて完形であり、S156のみ切目石錘だが、残りすべてが打欠石錘である。使用石材に、S156・159・163・167の4点は砂質片岩を、S157は砂岩を、S158・164・169の3点は斑糲岩を、S160は閃緑岩を、S161・166の2点は泥岩を、S162・165・170の3点は緑泥片岩を、S168は泥質片岩を用いる。

敲石は、S174・176・179の3点以外は完形である。使用石材としてS171・172・174・177・178の5点は砂岩を、S173・176・179・180の4点は砂質片岩を、S175は閃緑岩を用いる。それぞれ敲打痕が、1～4ヶ所認められる。

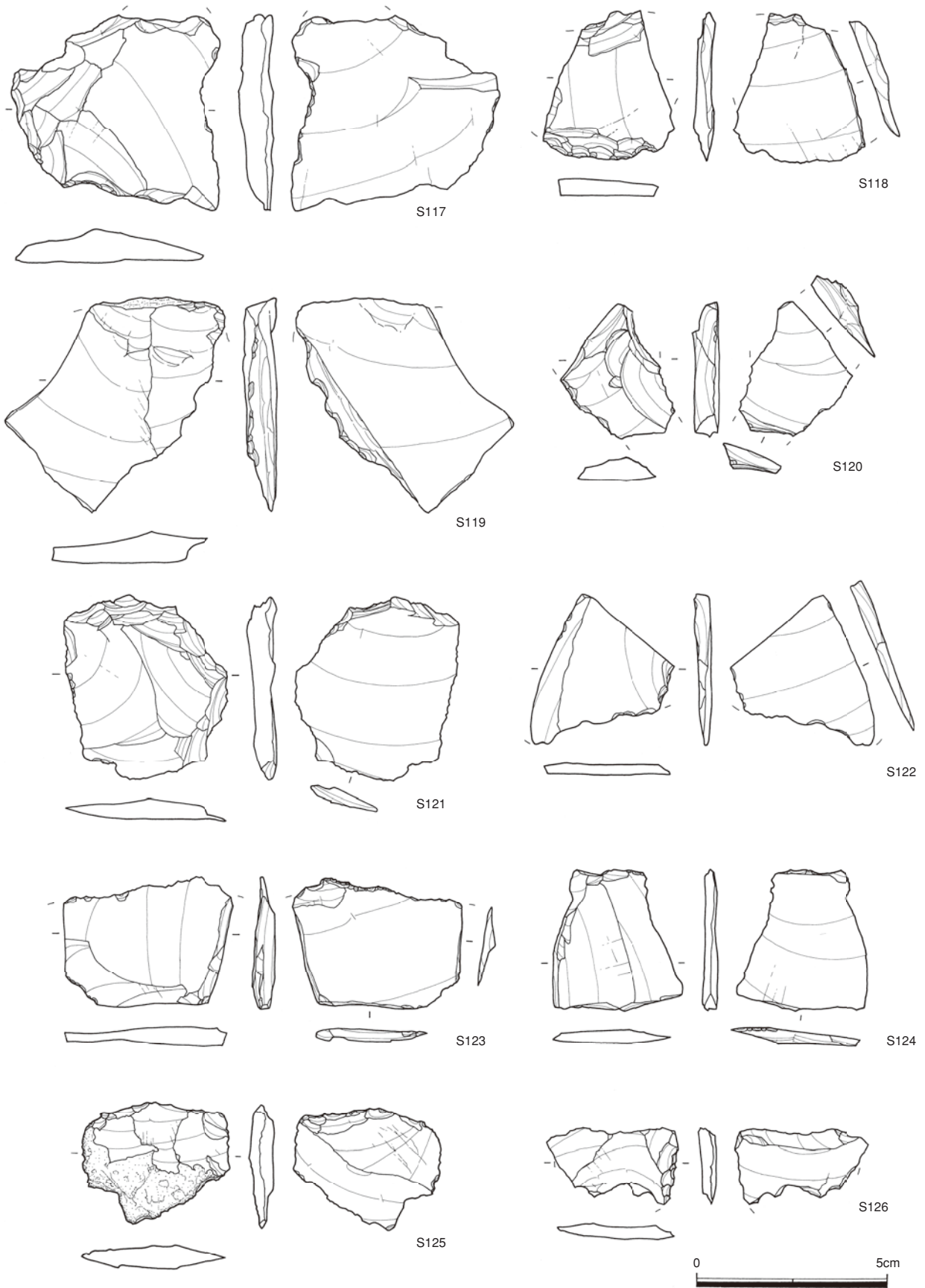
磨石はS181の1点のみで、表裏面に研面が認められる。使用石材として緑泥片岩を用いる。石皿はS182のみで、下半分が欠損する。また使用石材に砂岩を用いる。



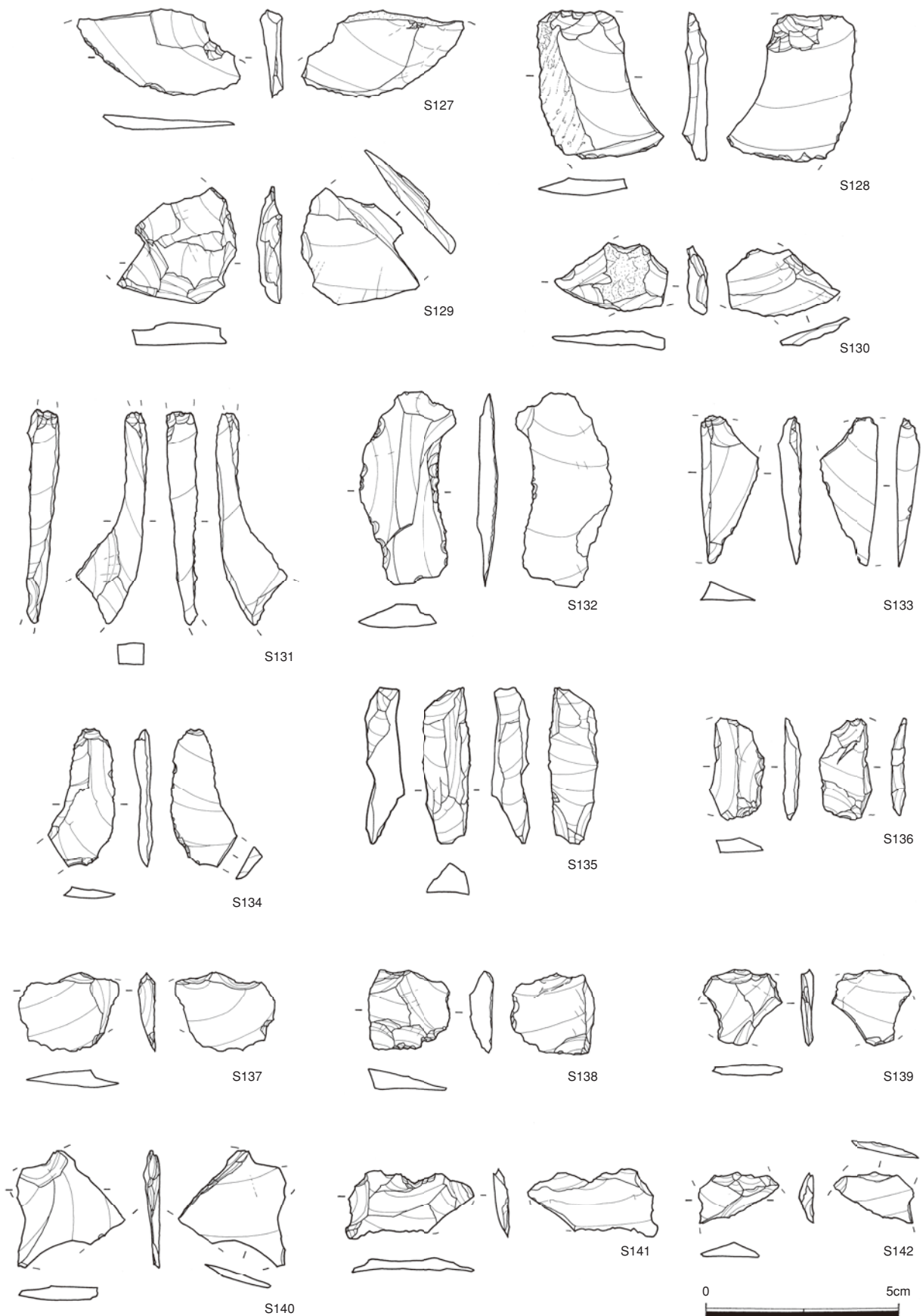
第332图 1区 包含层出土石器 (1)



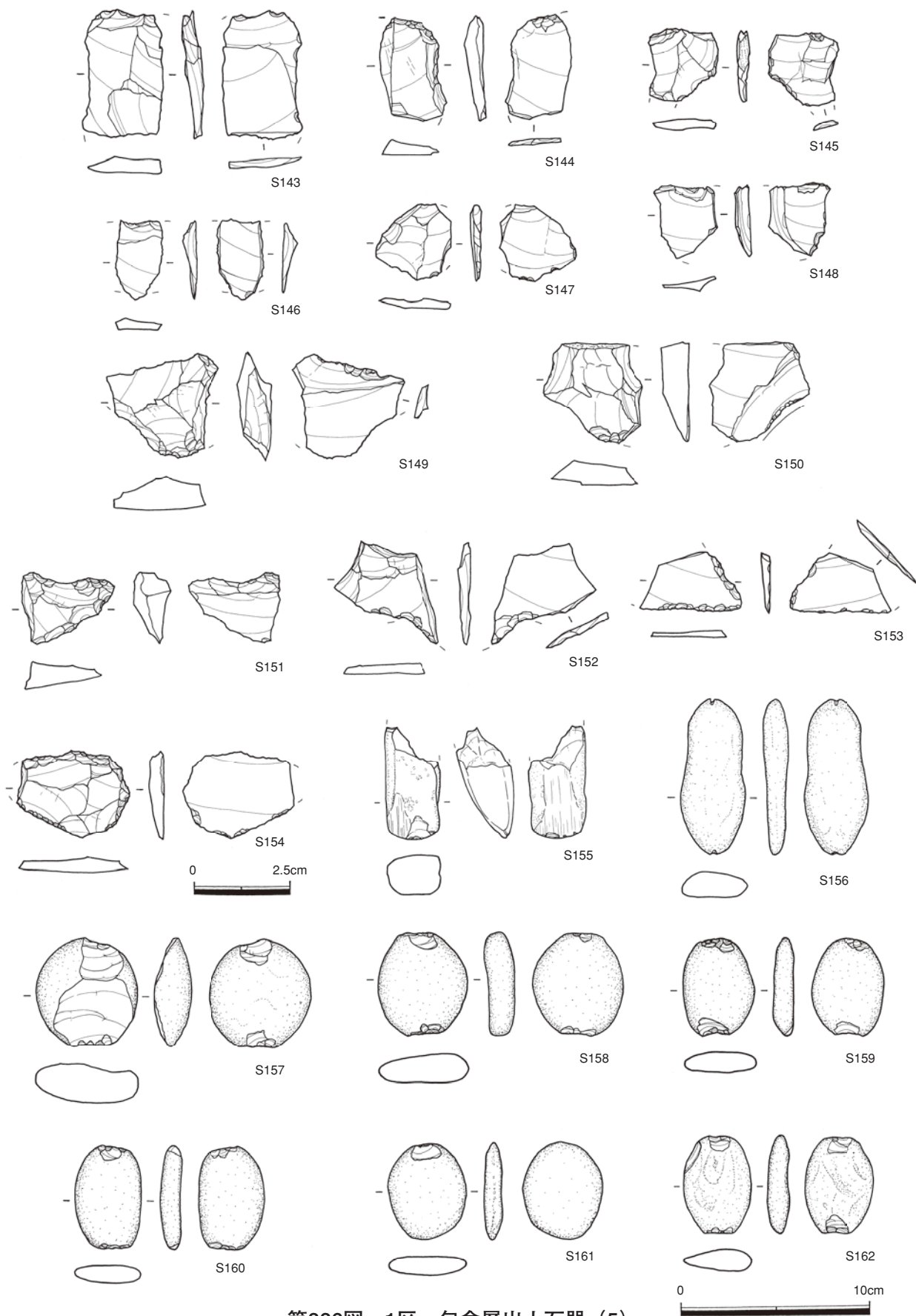
第333图 1区 包含層出土石器 (2)



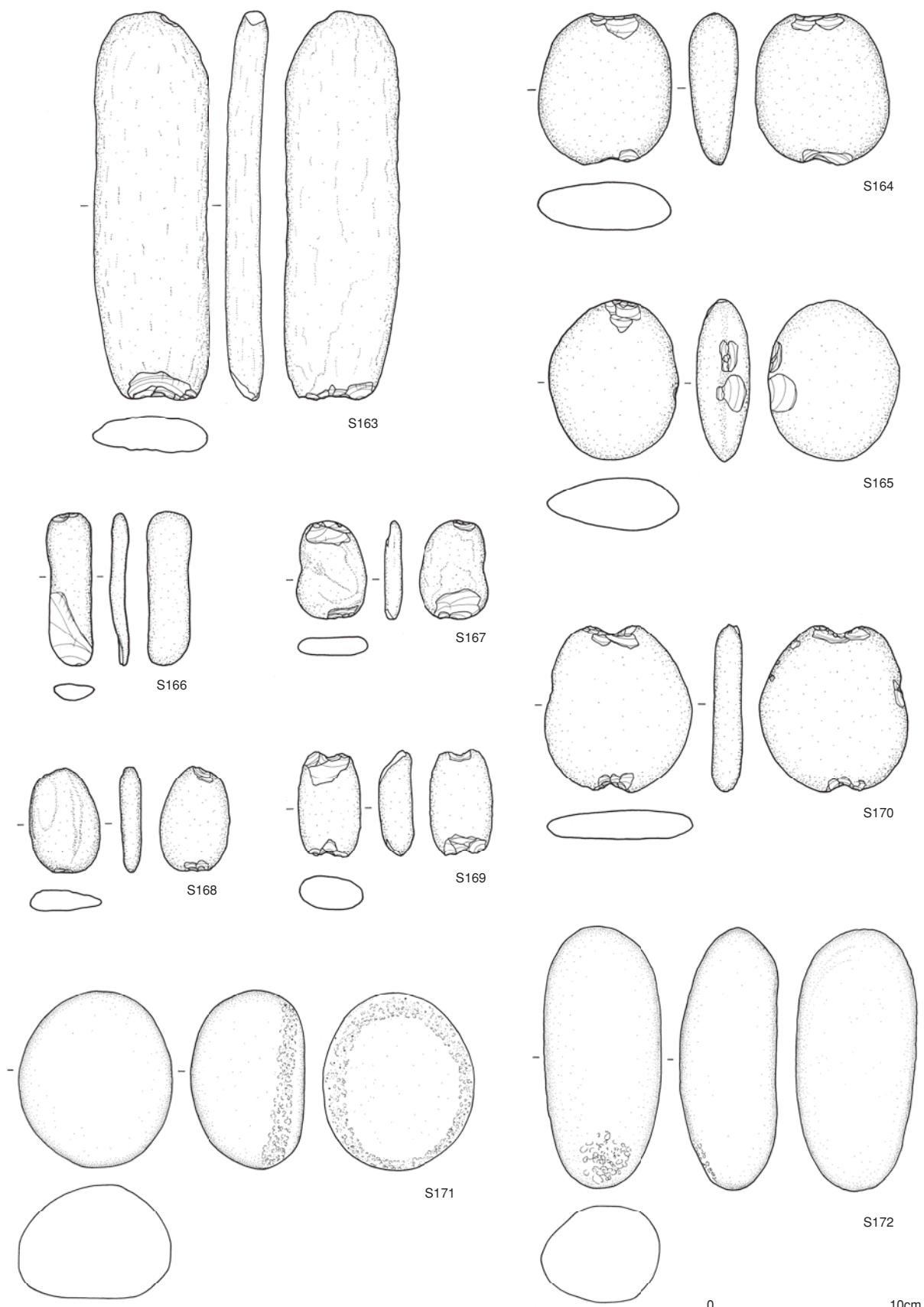
第334图 1区 包含層出土石器 (3)



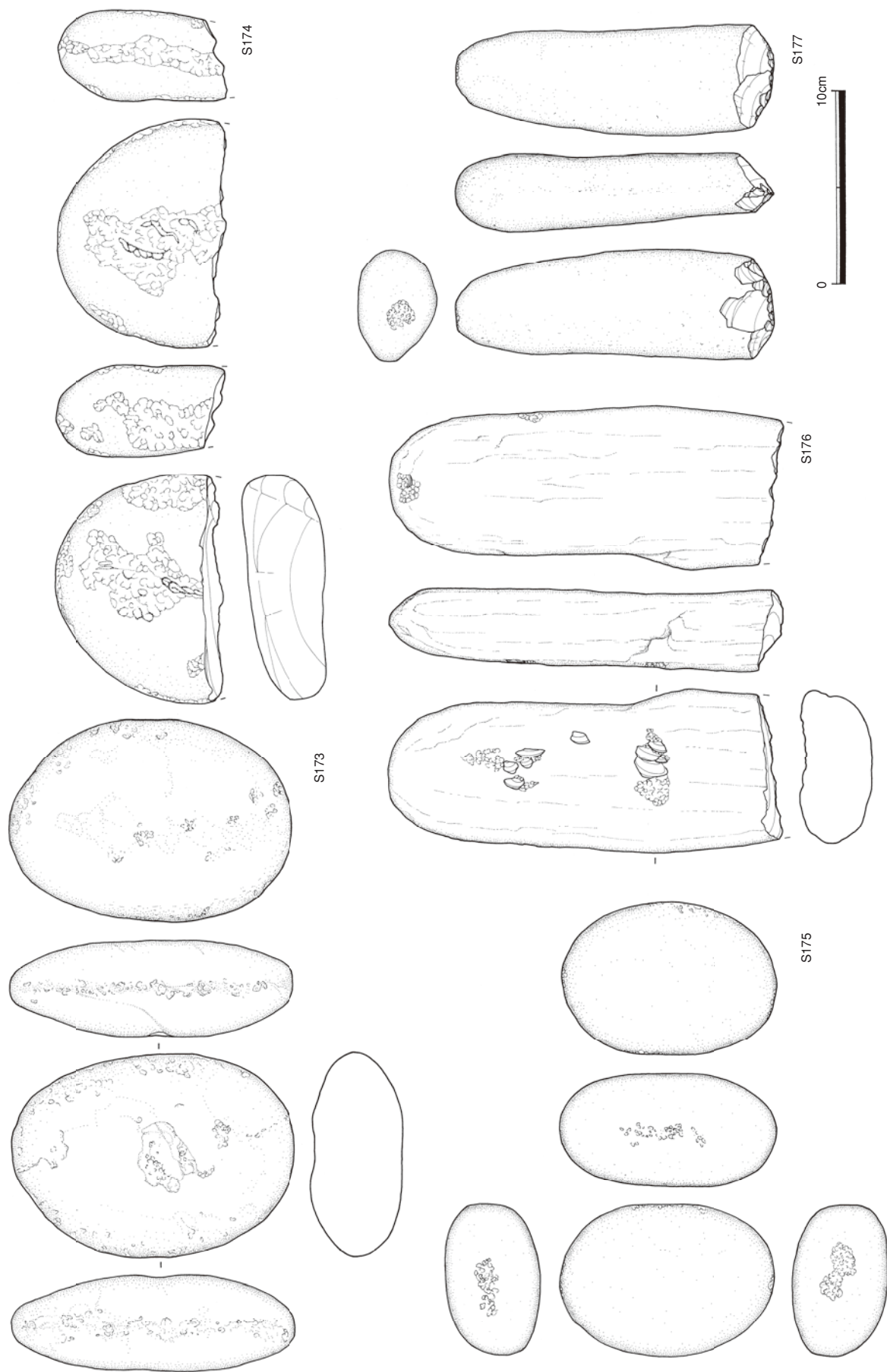
第335图 1区 包含層出土石器 (4)



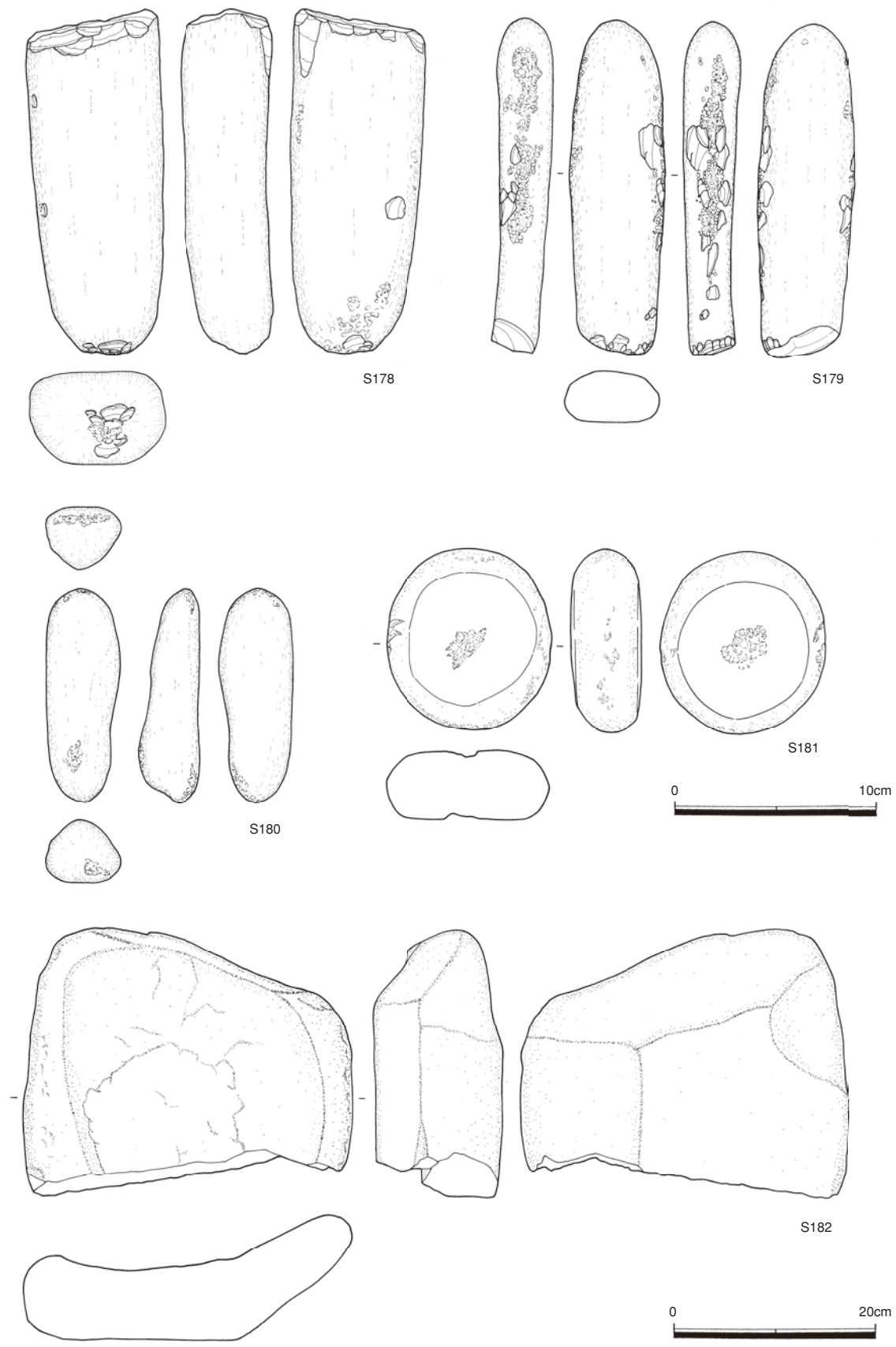
第336图 1区 包含層出土石器 (5)



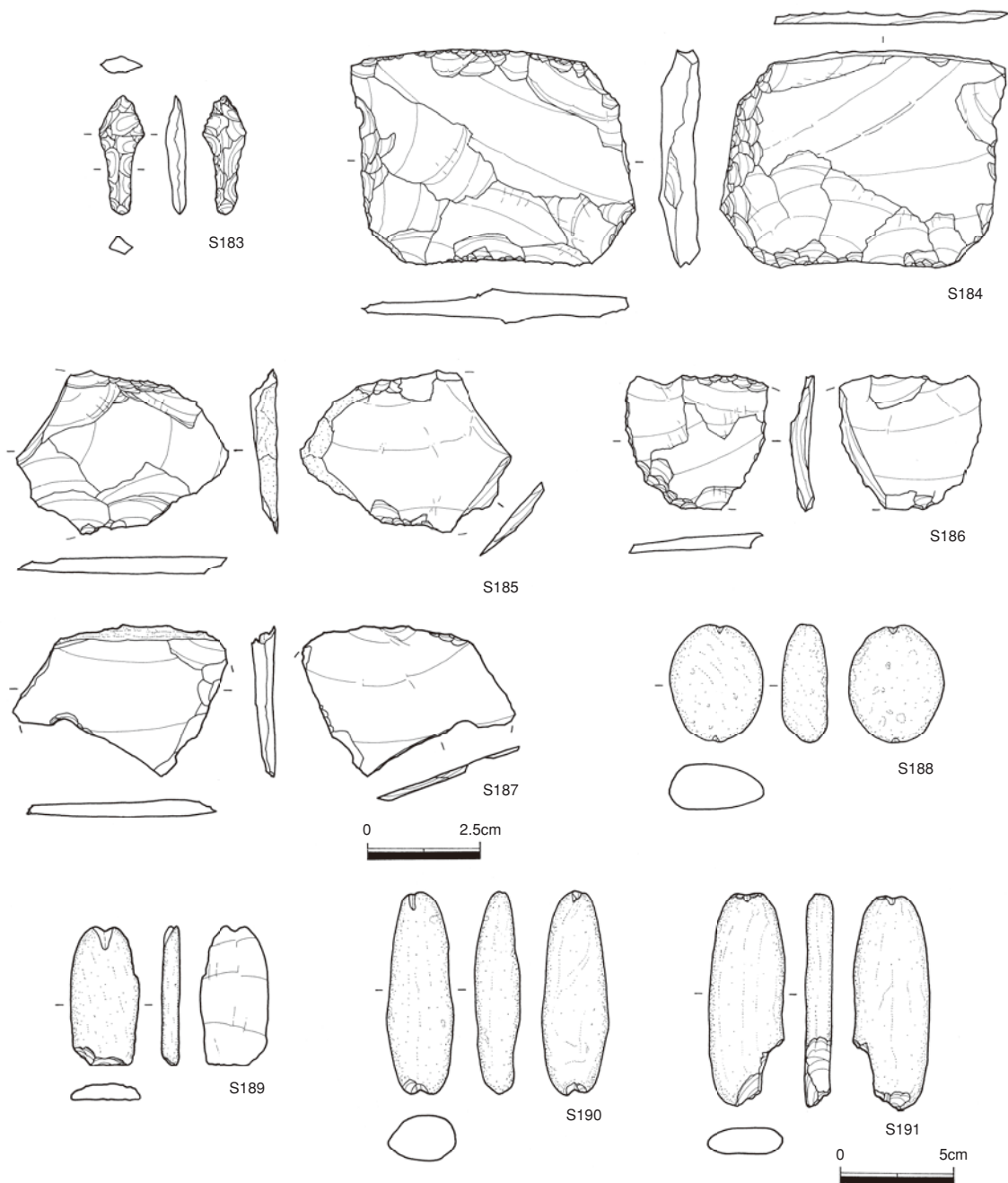
第337图 1区 包含層出土石器 (6)



第338图 1区 包含层出土石器 (7)



第339图 1区 包含層出土石器 (8)

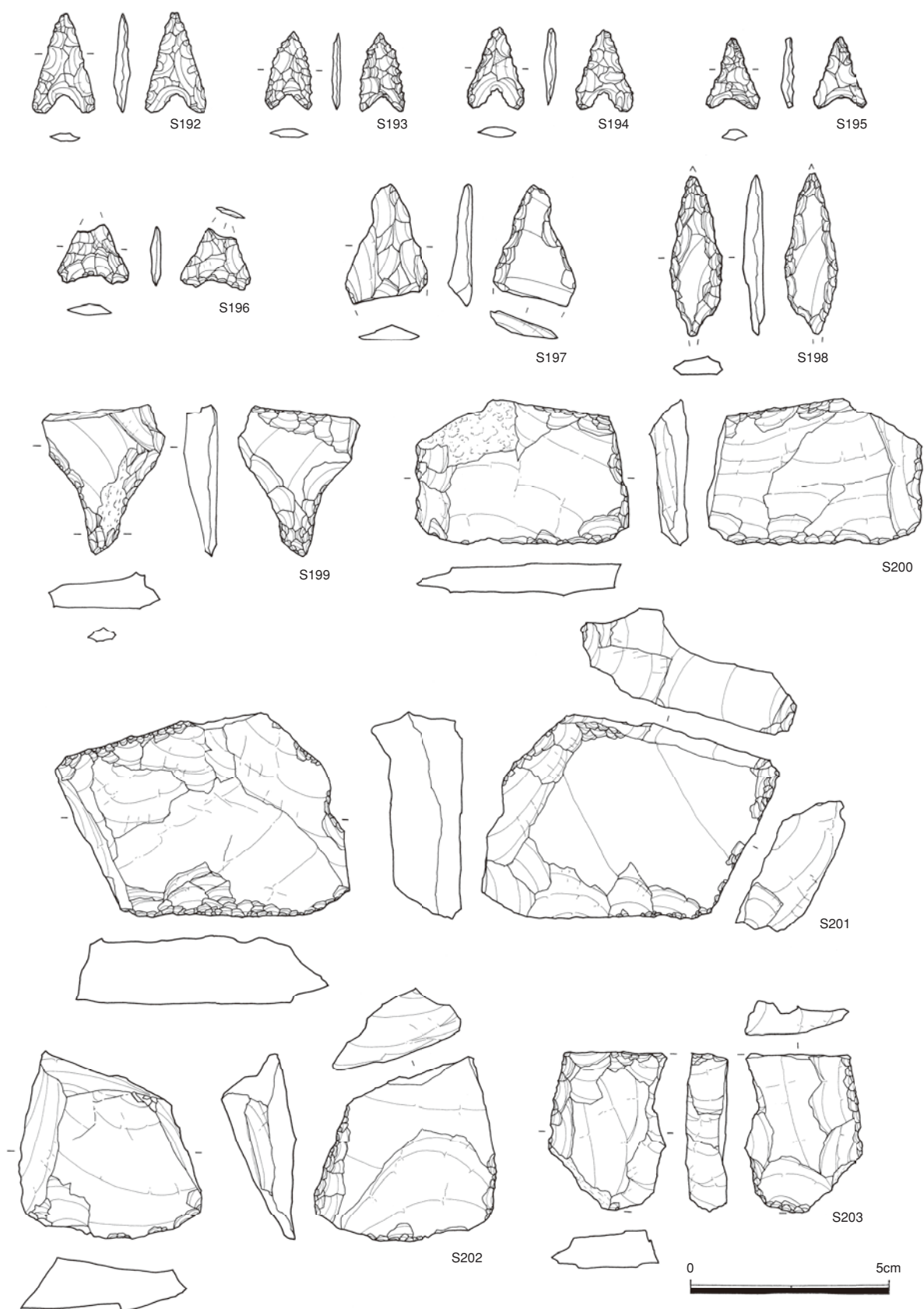


第340図 2区 包含層出土石器

2区 (第340図)

出土した石器のうち、石鏃(S183)1点、楔形石器(S184)1点、剥片(S185~187)3点、石錘(S188~191)4点の計9点が図化できた。

石鏃はS183のみで、有茎式である。サヌカイトを使用石材として用いる。楔形石器のS184は完形で、打面構成が四方向である。サヌカイトを使用石材として用いる。S185~187の剥片は、すべてサヌカイトである。石錘4点のうち、S189・191が欠損する。S188~190は切目石錘、S191のみ打欠石錘である。使用石材として、S188は斑糲岩、S189は砂質片岩、S190・191は緑泥片岩を用いる。



第341图 3区 包含层出土石器 (1)

3区（第341～354図）

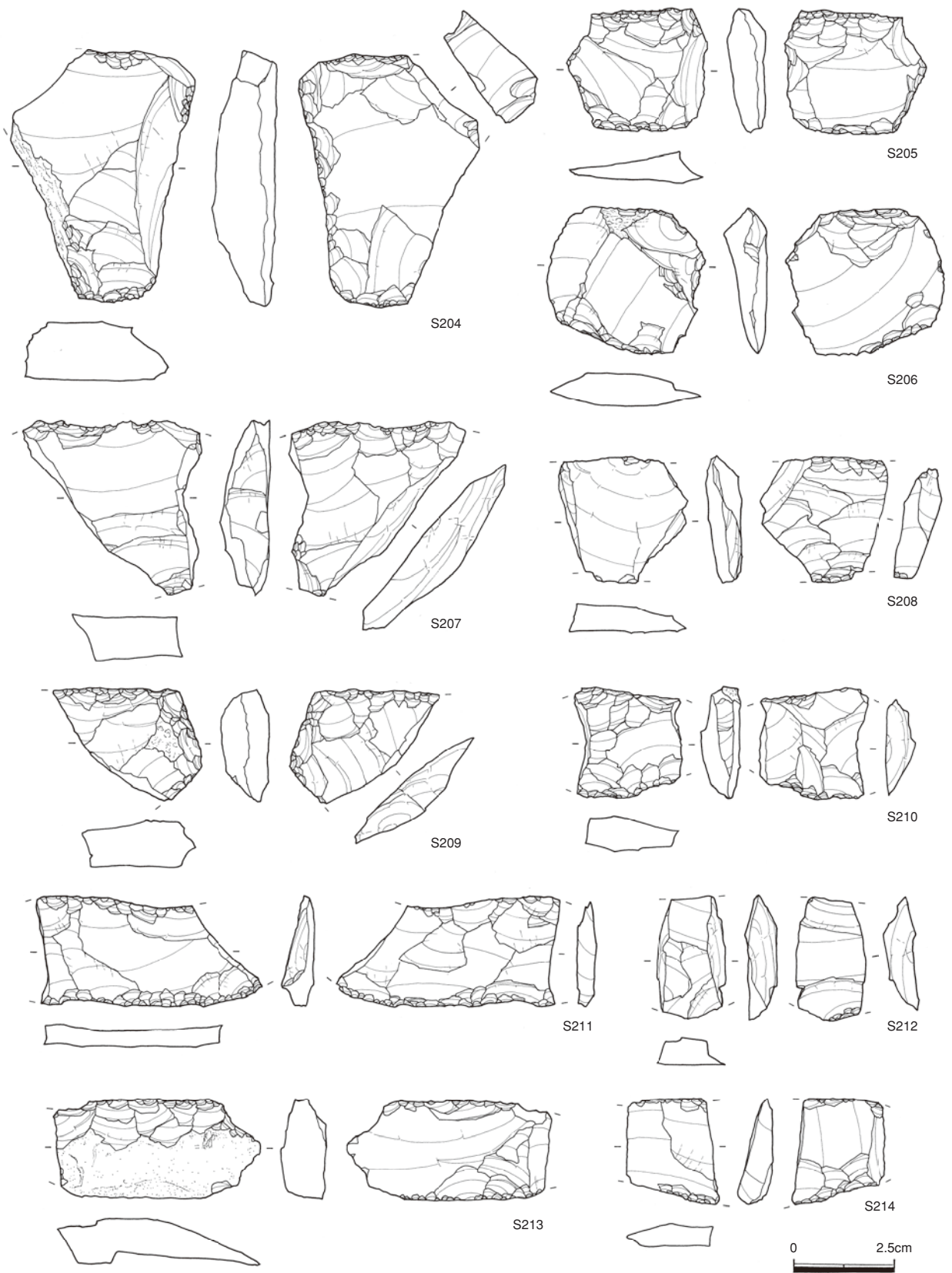
出土した石器のうち、石鏃(S192～198)7点、石錐(S199)1点、楔形石器(S200～223)24点、石匙(S224)1点、削器(S225～240)16点、剥片(S241～296)56点、石核(S297～301)5点、石棒(S302)1点、石錘(S303・304)2点、敲石(S305・306・308～311)6点、礫器(S307)1点、磨石(S312～316)5点、台石(S317)1点の計126点が図化できた。またS314のみ、第二包含層とした層からの出土である。

図化できた石鏃のうち、S192～196は凹基式、S198は有茎式、S197は型式不明である。使用石材は、すべてサヌカイトである。石錐S199の使用石材はサヌカイトで、完形である。楔形石器の使用石材はすべてサヌカイトで、S200・205のみ完形である。裁断面はS201は上に、S203・216は右に、S206・213・223は左に、S215・222は左右に認められる。S207・208・210・211・214・221の5点は、左右いずれかに裁断面が認められるものの、片方が欠損することにより両方に裁断面が認められる可能性もある。打面構成は欠損部があるものの、S200～205・209・216・217・222が四方向、S206～208・210～215・218～221・223が二方向と思われる。S224は完形の石匙で、使用石材にサヌカイトを用いる。横長剥片を用い、凸刃・単刃を持つ。削器のうち、不明瞭なものもあるがS225・228が複刃、残り14点は単刃である。刃部の形態はS226・227・229・231・232・234～238・240は平刃、S230・239は凸刃、S233は凹刃、S225は平刃・凸刃をもつ。S228の刃部形態は不明で、縦型石匙の可能性もある。S228・238をのぞく削器は、横長剥片を用いる。また石材では、サヌカイトを用いる。剥片はすべてサヌカイトで、S276ではつぶれ痕が認められる。石核の石材は、5点ともにサヌカイトである。S302は先端部および基部が欠損した石棒で、砂質片岩を用いる。石錘は2点ともに完形で、打欠石錘である。使用石材にS303は砂質片岩を、S304は斑糲岩を用いる。敲石6点のうちS308をのぞいた5点は、完形である。使用石材としてS305は閃緑岩、S306は砂岩、S308～311の4点は砂質片岩を用いる。それぞれ敲打痕が1～2ヶ所認められる。S306・311ではそれぞれ表裏面に凹痕が、S309では敲打痕の後に擦痕が施されたのが認められた。またS306では右側面から裏面、左側面の一部に炭化物が付着する。礫器はS307のみで、刃部は片刃である。磨石5点のうちS312～314の3点は、完形である。S315のみ表面だけ研面が認められるが、他の4点は表裏面に研面が認められる。またS312～314の3点には敲打痕が認められる。使用石材として、S312・315は閃緑岩を、S313・314は砂質片岩を、S316は砂岩を用いる。台石はS317のみで上下側縁部が欠損する。また使用石材に砂岩を用いる。

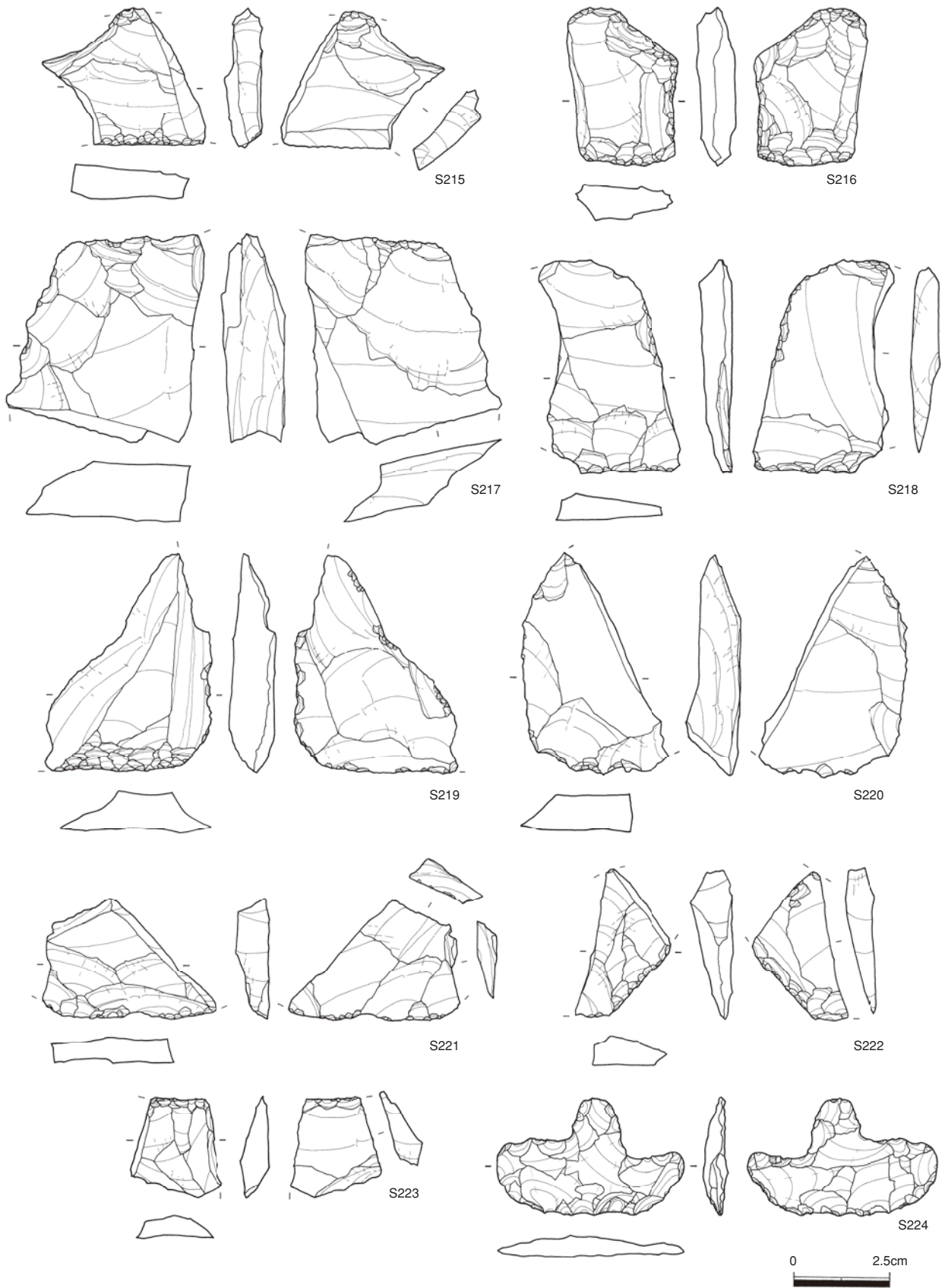
5区第一包含層（第355～360図）

出土した石器のうち、石鏃(S318～326)9点、石錐(S327)1点、楔形石器(S328～353)26点、削器(S354～362)9点、剥片(S363～379)17点、石核(S380)1点、石斧(S381・382)2点、石錘(S383～388)6点、磨石(S389)1点の計72点が図化できた。

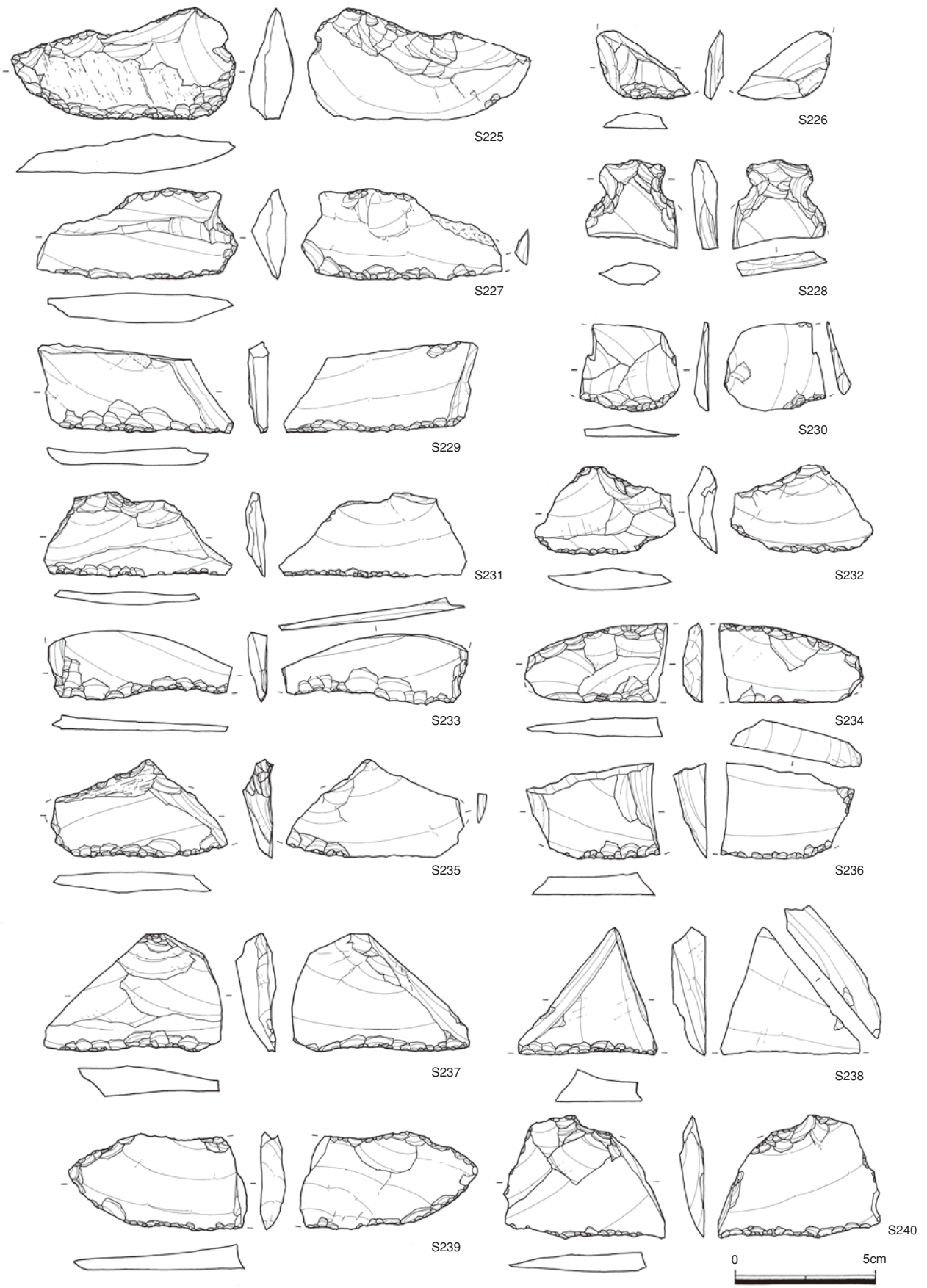
図化できた石鏃のうち、S318は平基五角、S319～322は平基三角、S323～325は無茎凹基式、S326は有茎式である。使用石材はすべてサヌカイトである。石錐S327の使用石材はサヌカイトで、完形である。摘みは無く、先端部に磨滅痕が認められる。楔形石器の使用石材はすべてサヌカイトで、S328・349～351のみ完形である。裁断面はS330・331・339～341・352は右に、S332～338・213・223は左に、S342～346は左右に、S347は左右および下方向に認められる。打面構成は欠損部があるものの、S328～334・346～348が四方向、S335～345・349～351が二方向と思われる。削器のうち、不明瞭なものもあるがすべてが単刃である。刃部の形態はS354～359は平刃、S361・362は凸刃、S360は凹刃を



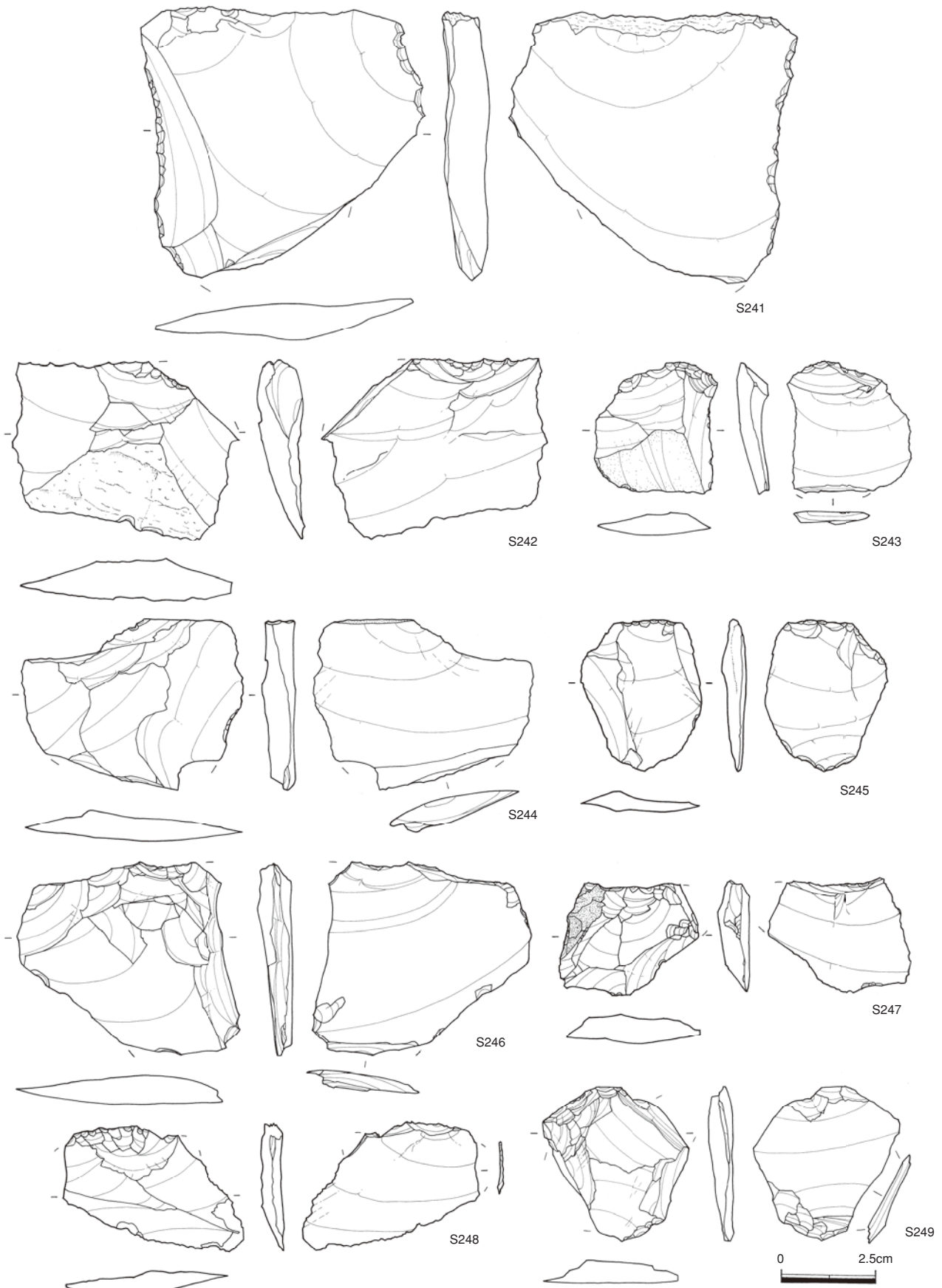
第342图 3区 包含層出土石器 (2)



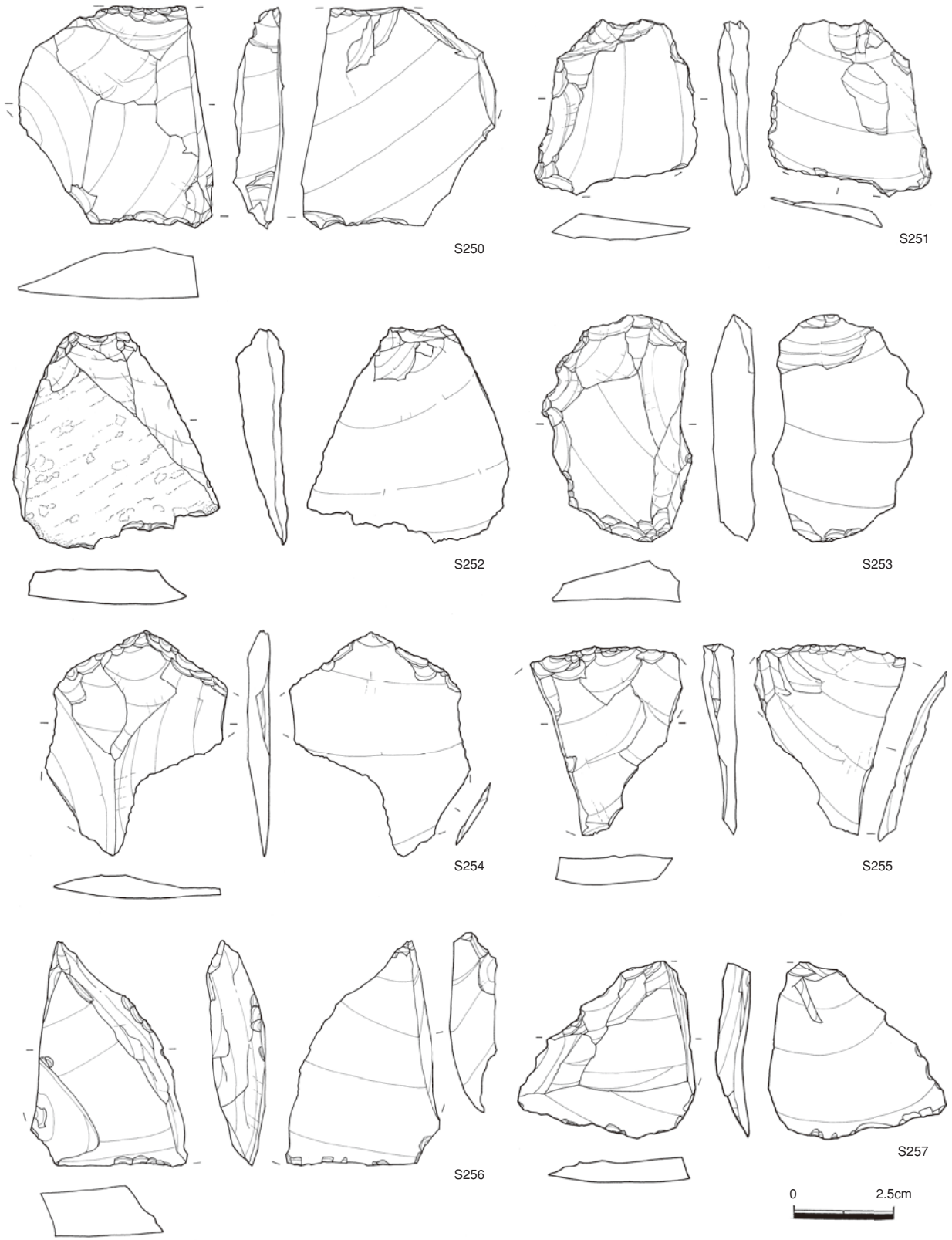
第343图 3区 包含層出土石器 (3)



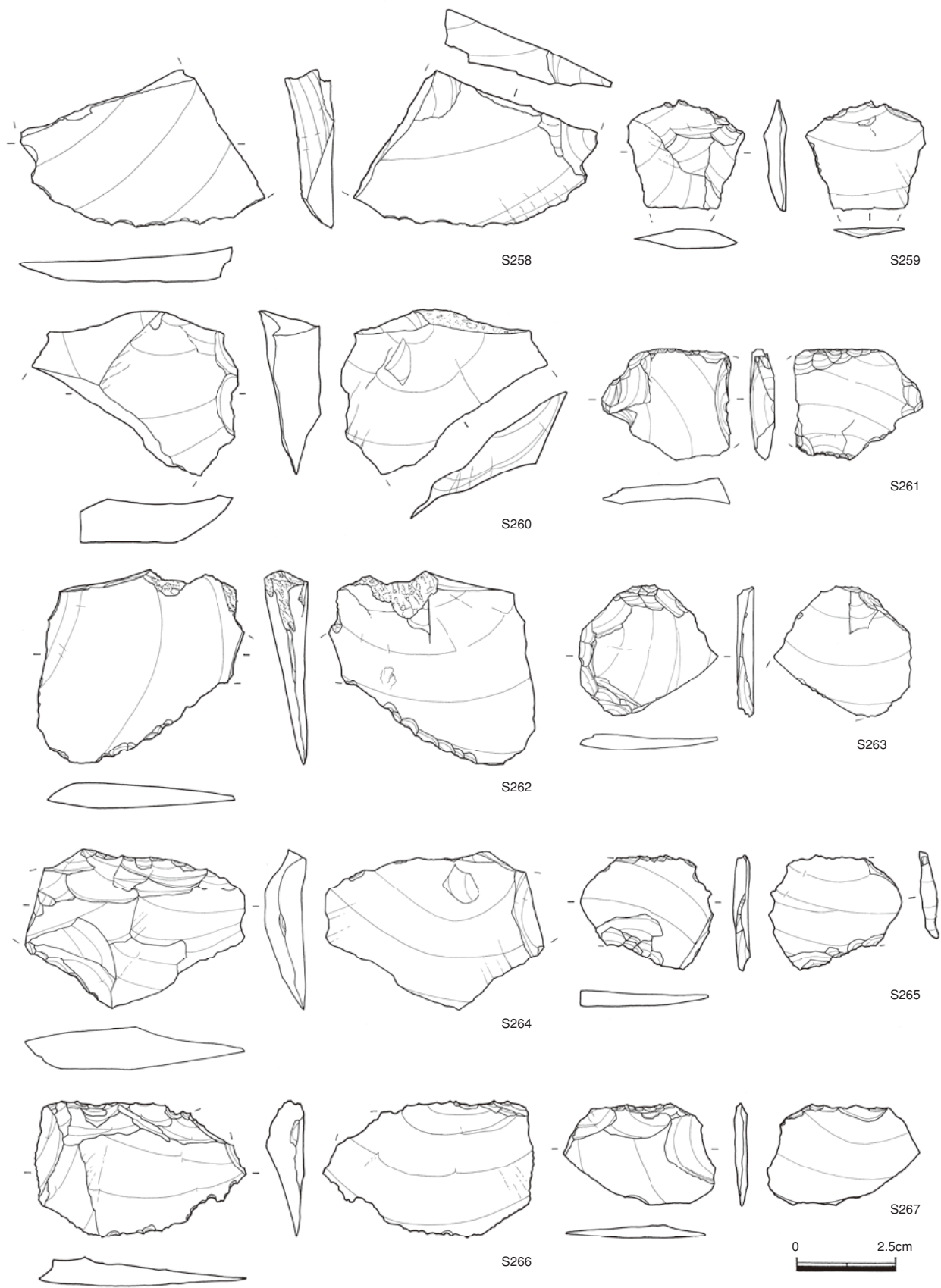
第344图 3区 包含层出土石器 (4)



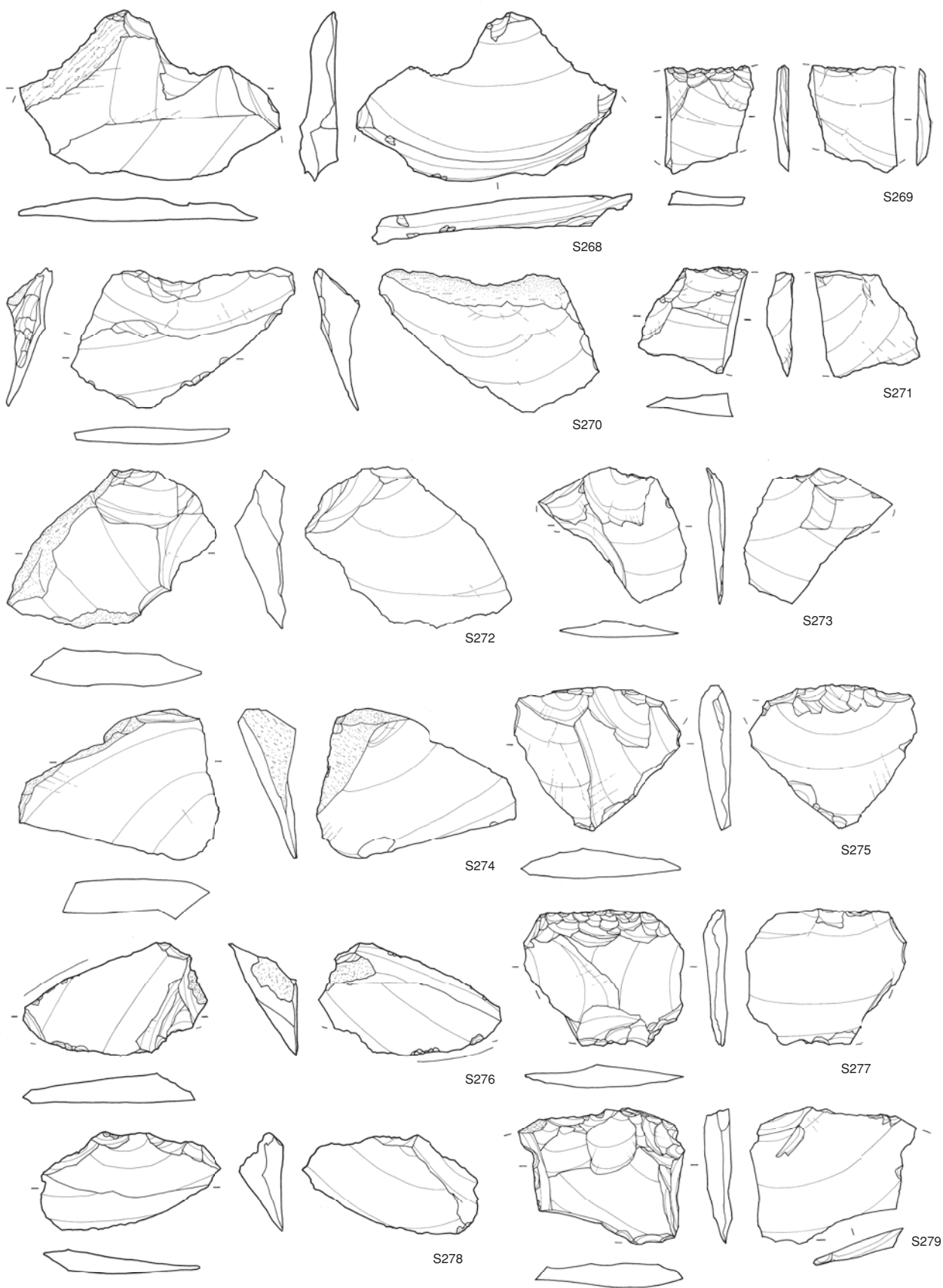
第345图 3区 包含層出土石器 (5)



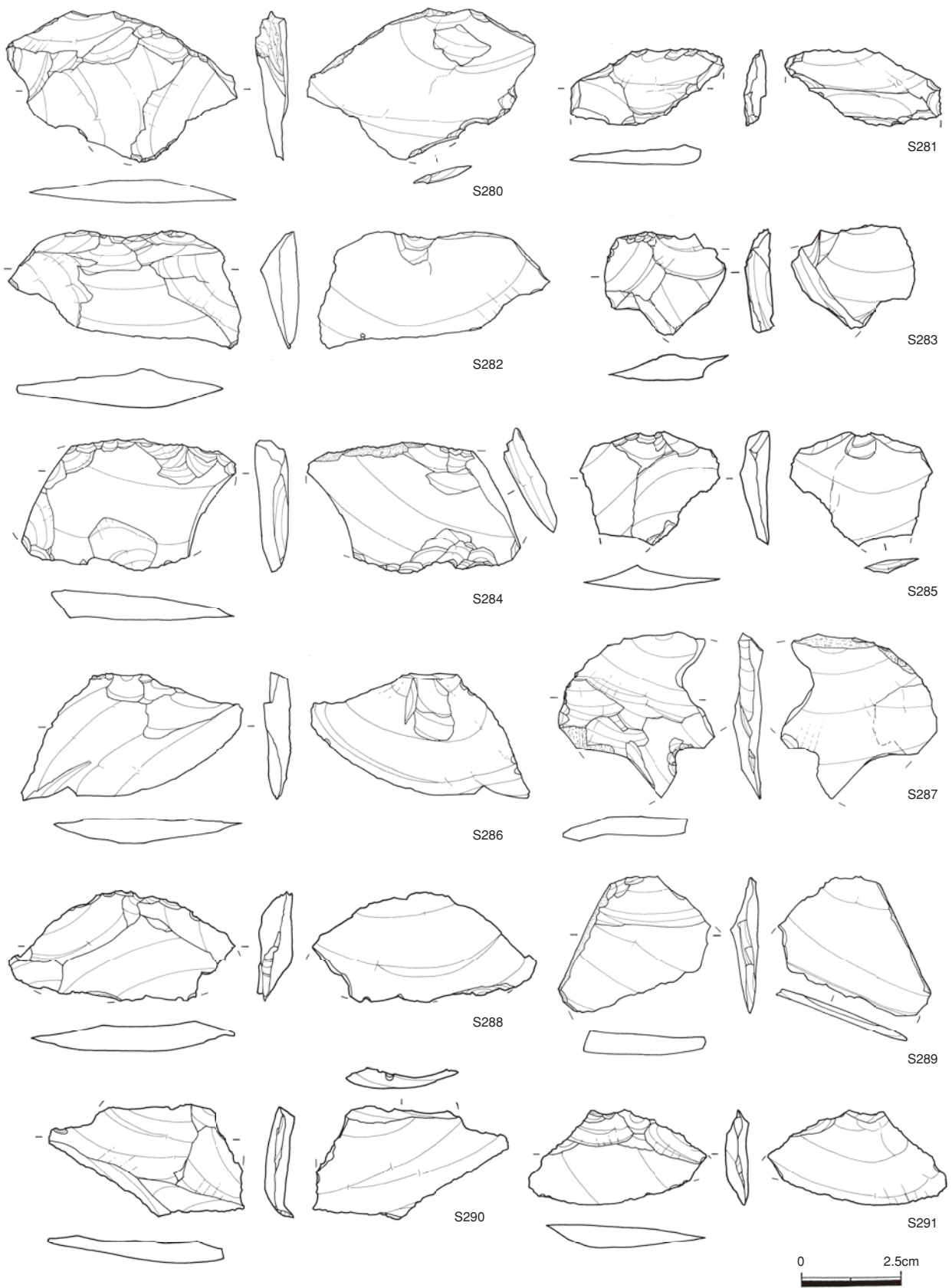
第346图 3区 包含層出土石器 (6)



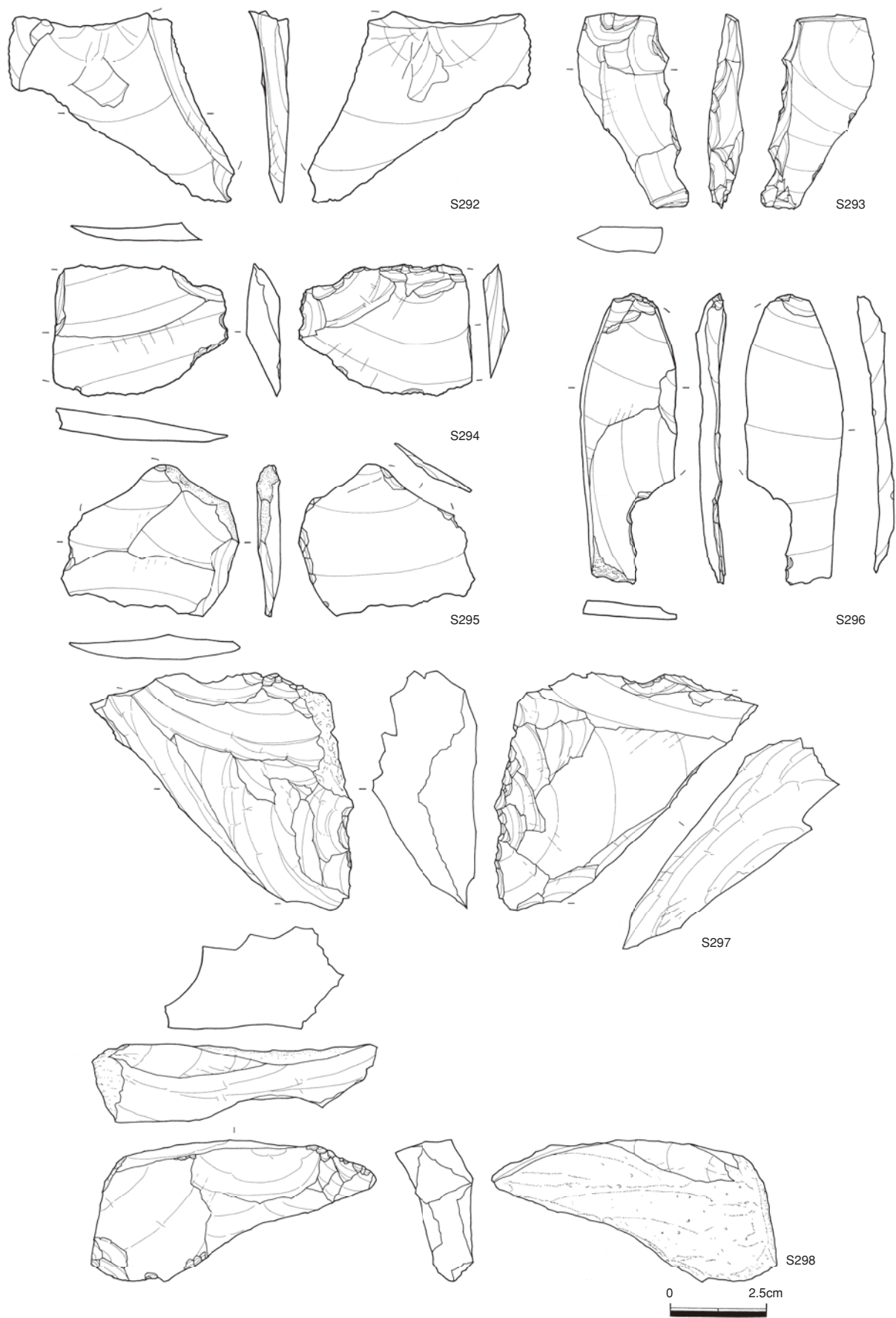
第347图 3区 包含層出土石器 (7)



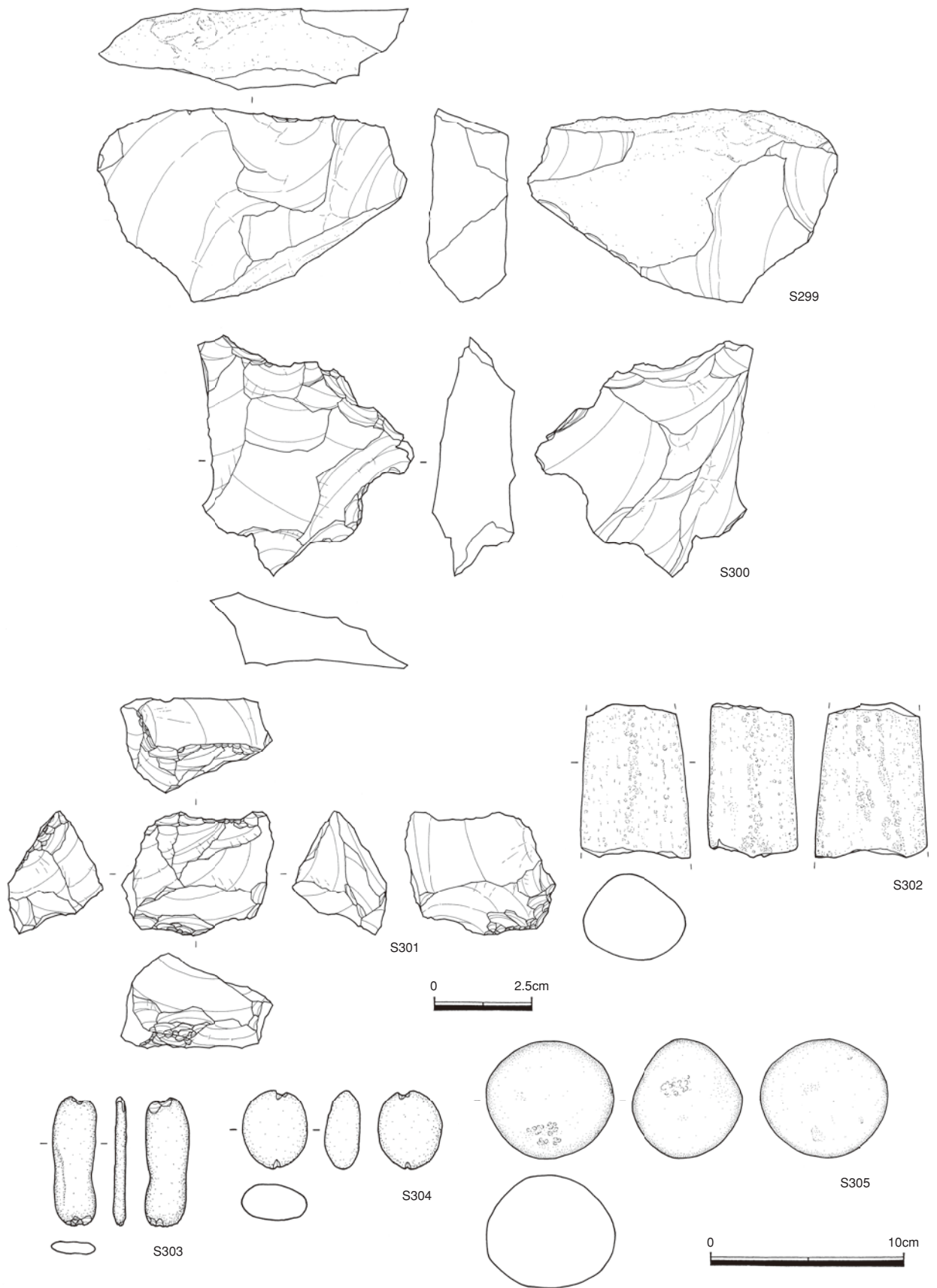
第348图 3区 包含层出土石器 (8)



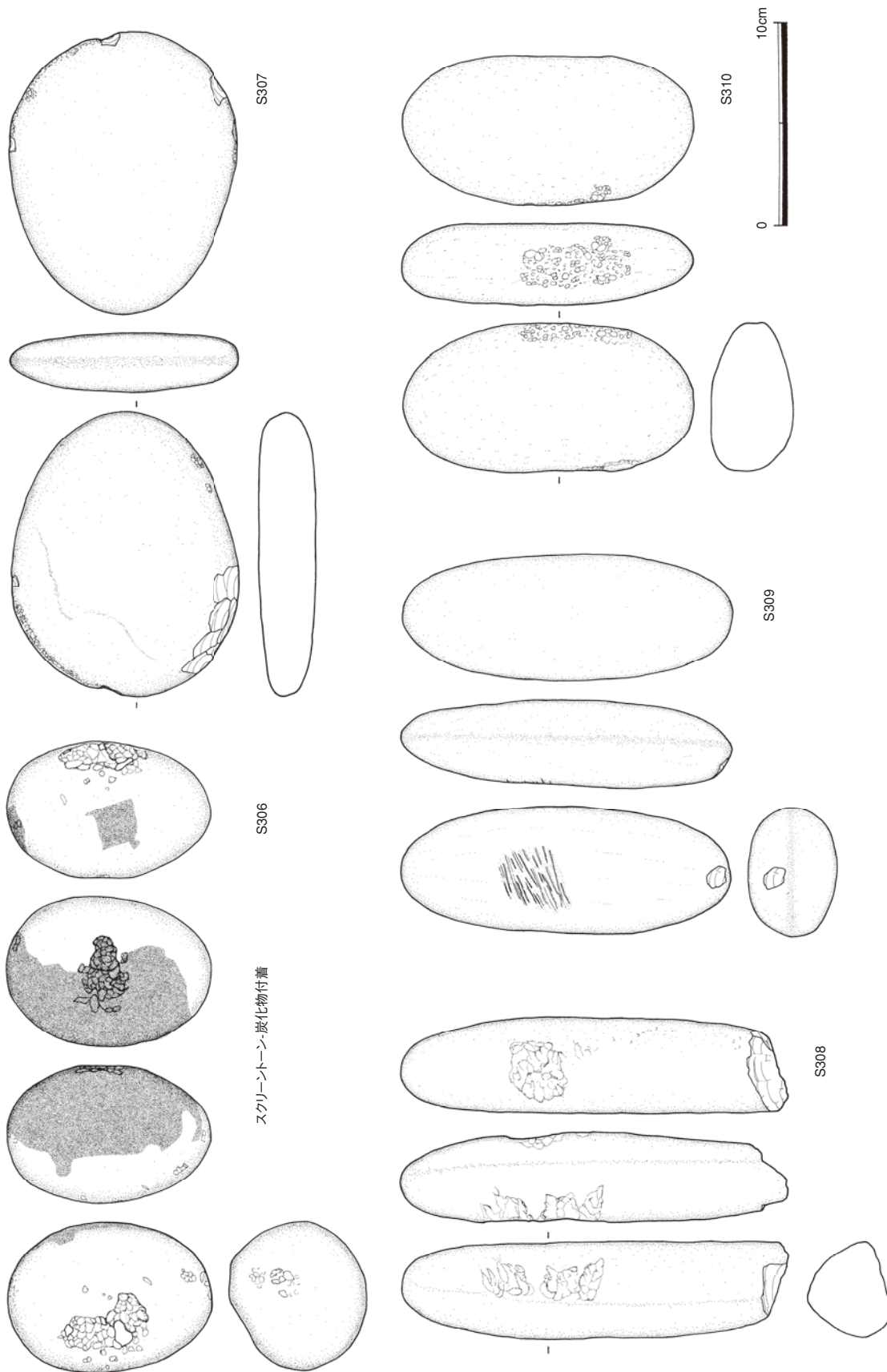
第349图 3区 包含層出土石器 (9)



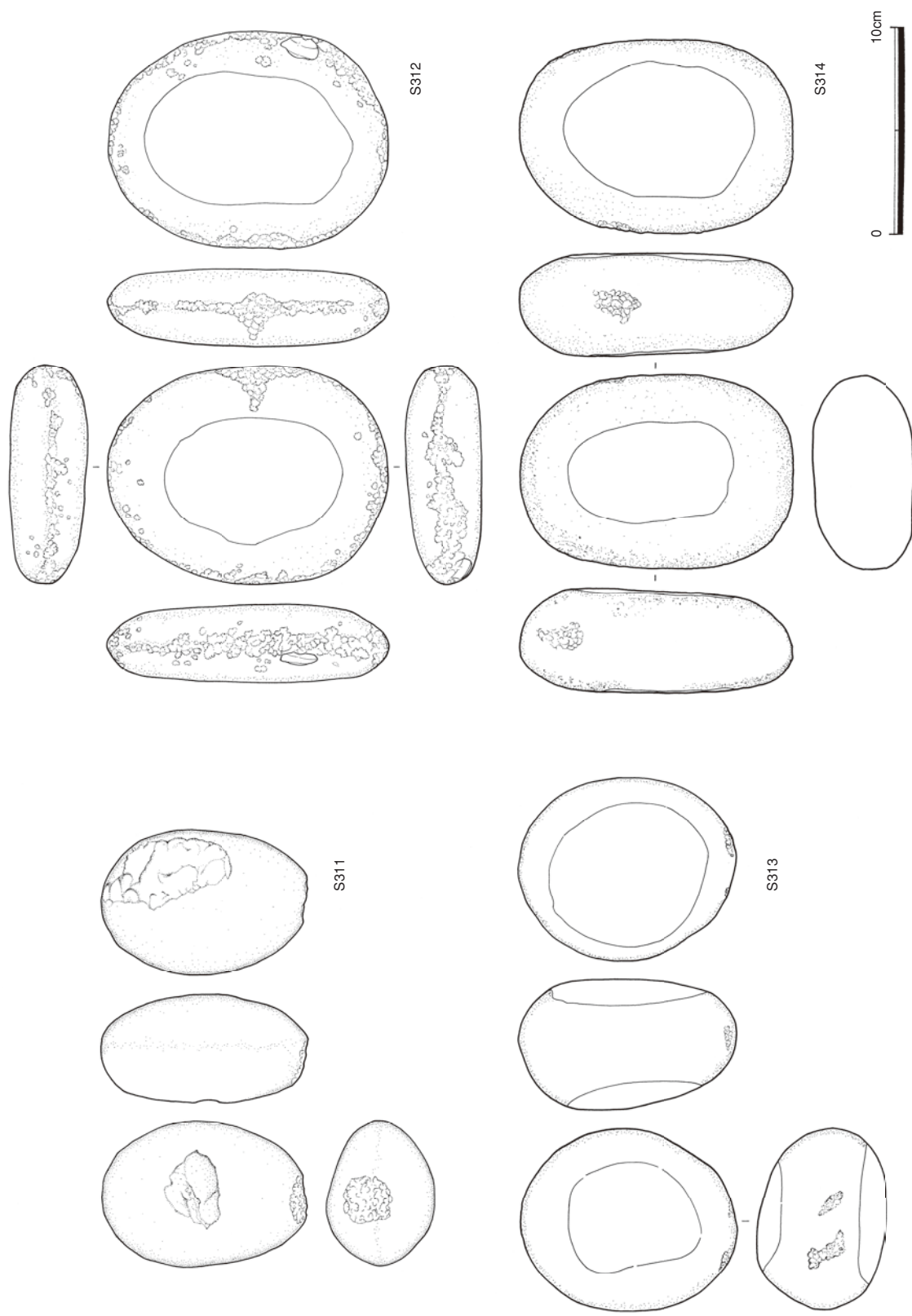
第350图 3区 包含層出土石器 (10)



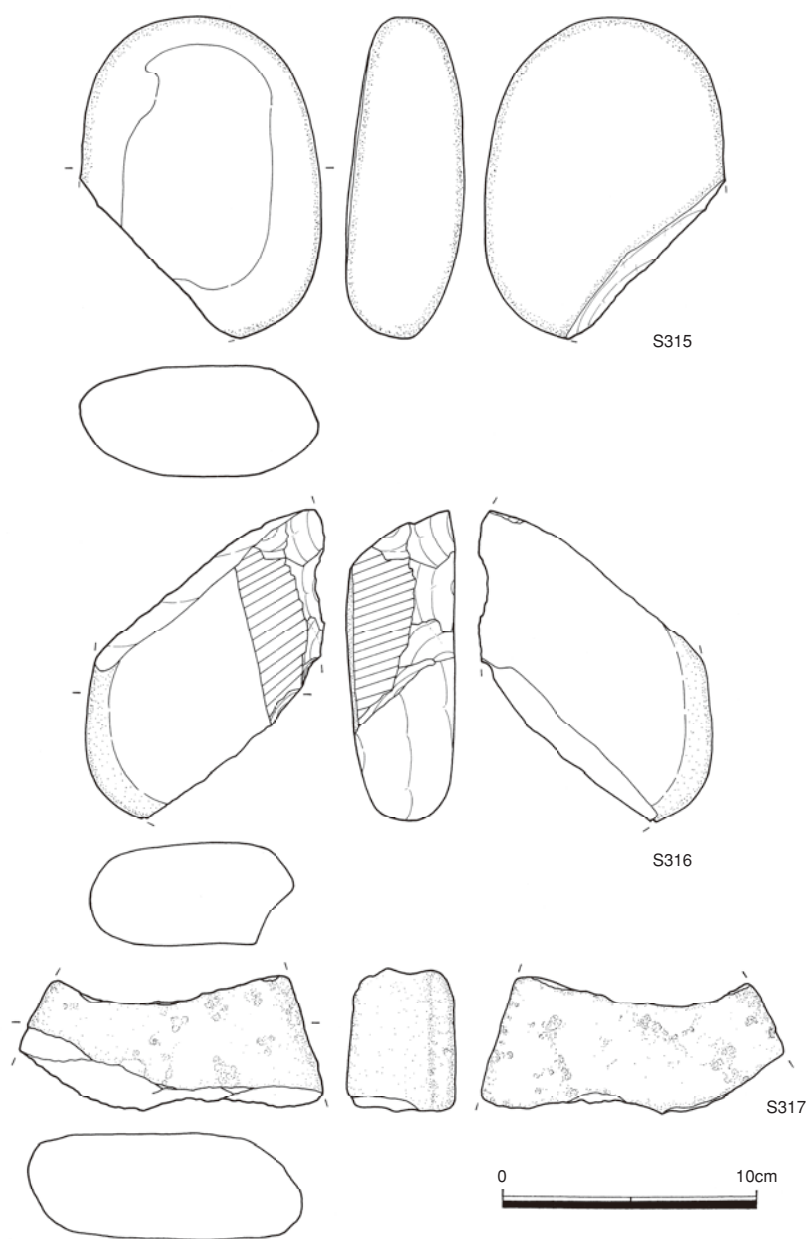
第351图 3区 包含層出土石器 (11)



第352図 3区 包含層出土石器 (12)

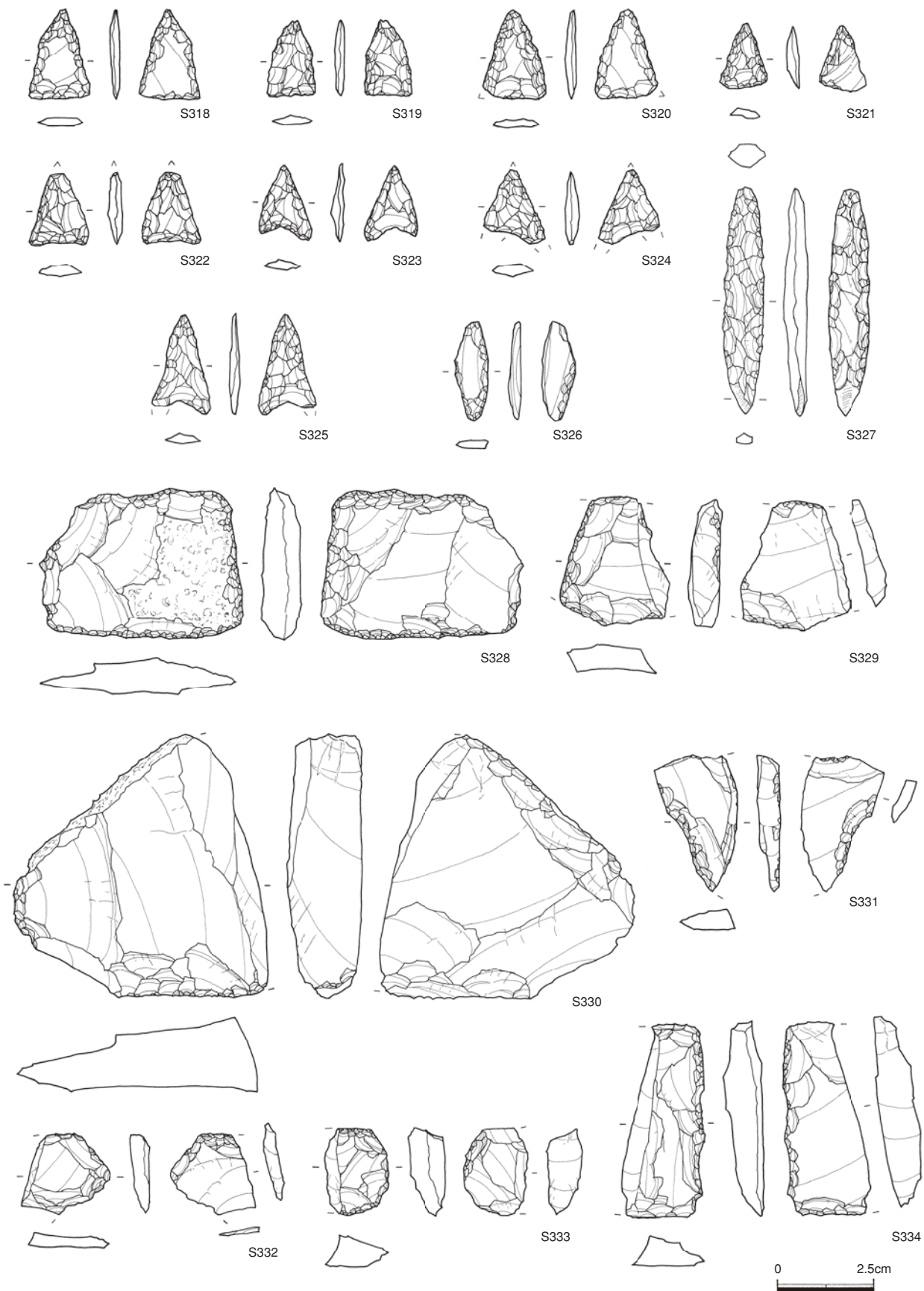


第353图 3区 包含层出土石器 (13)

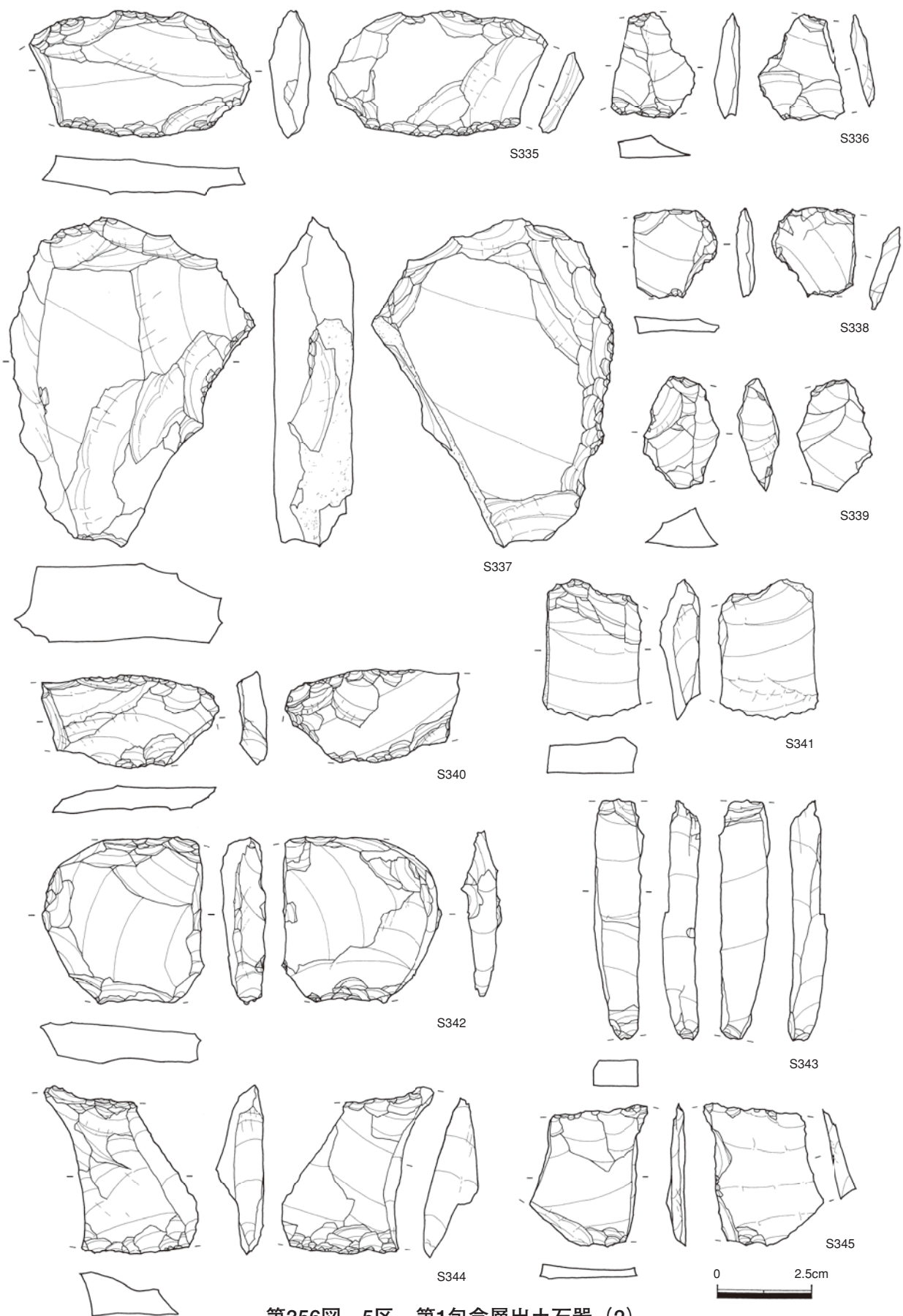


第354図 3区 包含層出土石器 (14)

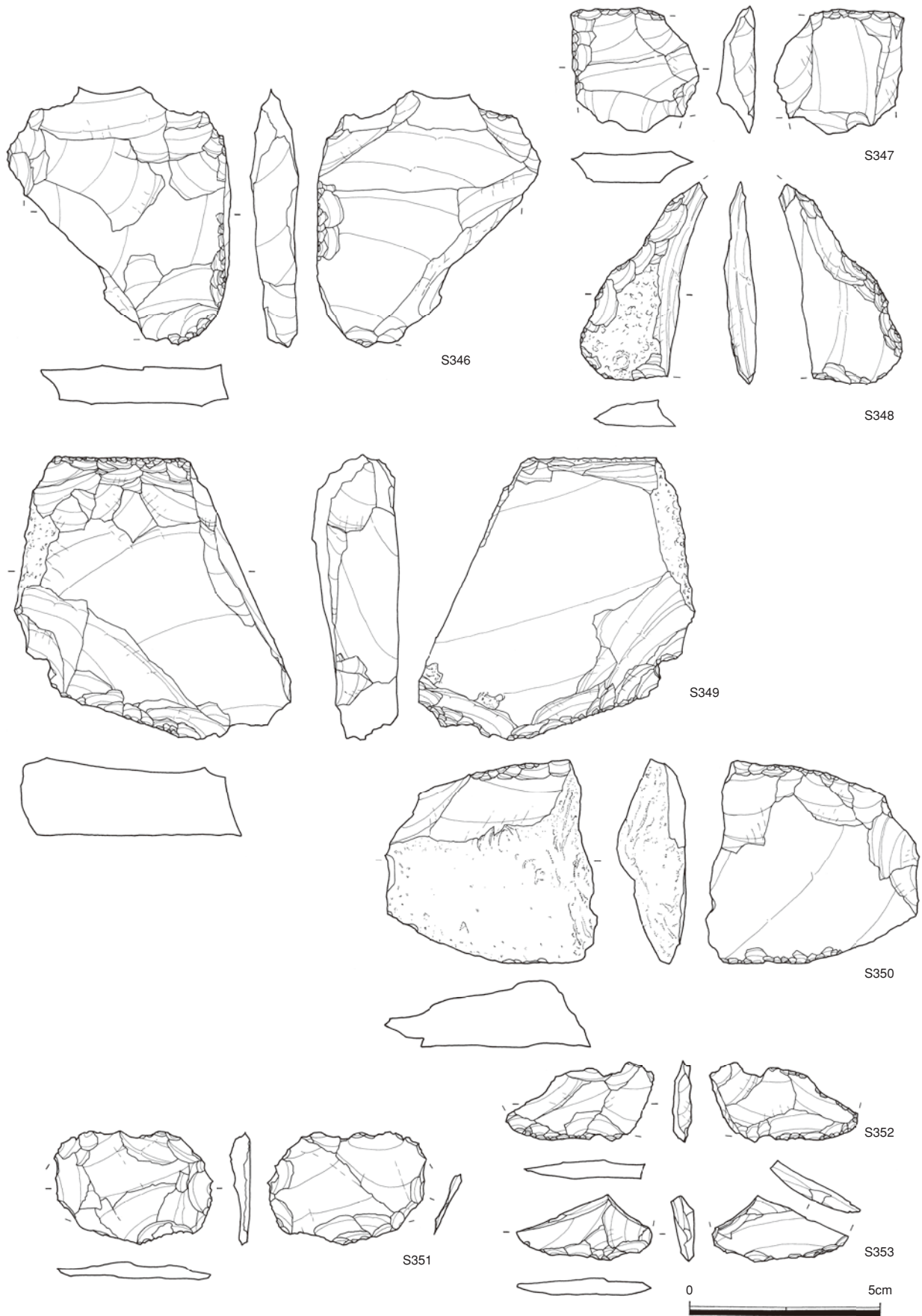
もつ。S360は縦長剥片を、それ以外は横長剥片を用いる。また使用石材は、すべてサヌカイトである。剥片の石材はS368は凝灰岩、それ以外はサヌカイトである。S377～379は二次加工の痕跡が認められる。石核S380の石材はサヌカイトである。石斧は、2点ともに砂質片岩を用いる。S381は未製品で、裏面に節理面が認められる。石錘6点のうちS383～385は切目石錘、S386～388は打欠石錘で、S385以外は完形である。使用石材にS383は閃緑岩を、S384は緑泥片岩を、S385～388は砂質片岩を用いる。磨石S389は上半部が欠損し、斑糲岩を使用石材として用いる。表面のみ研面が認められる。



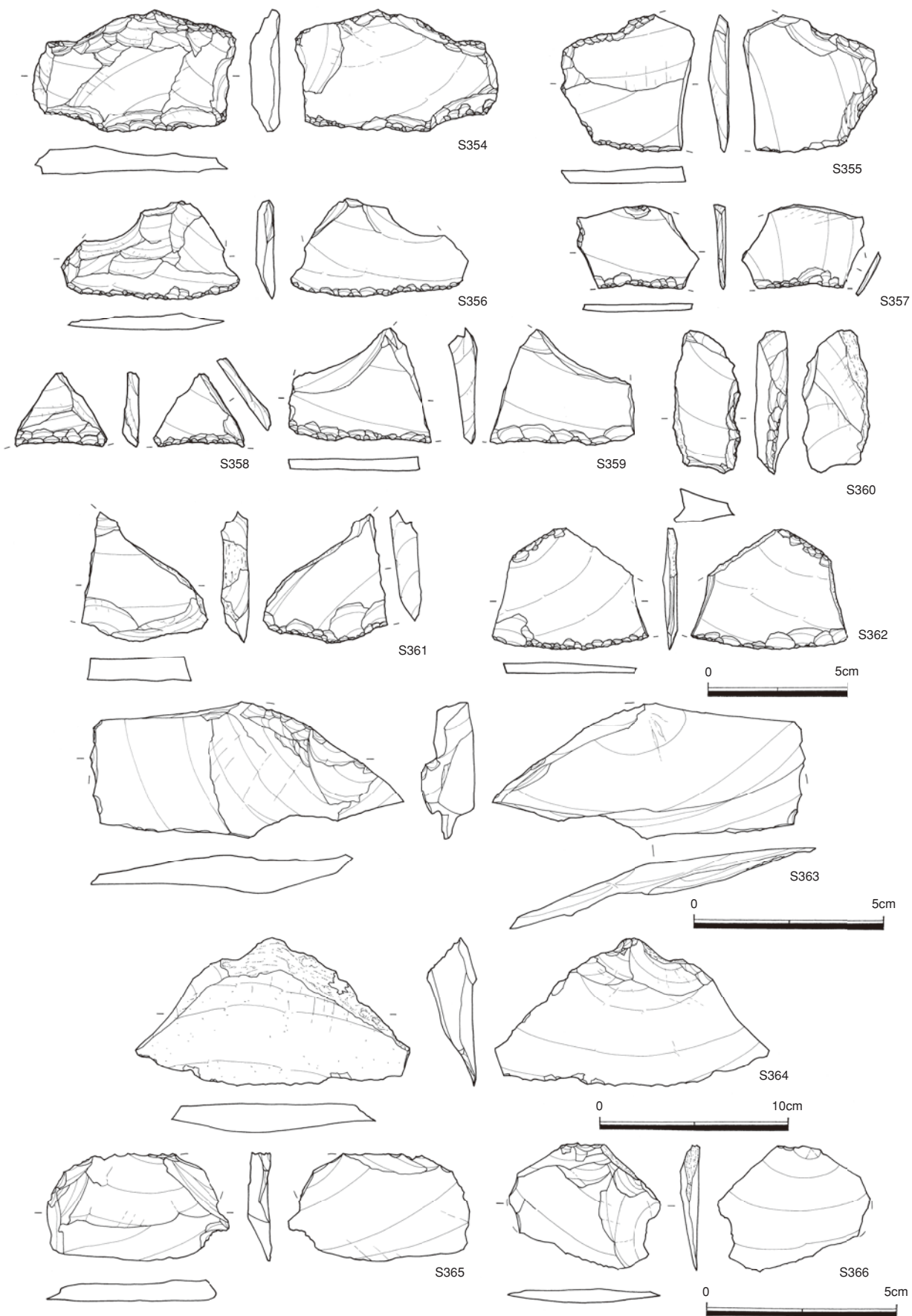
第355图 5区 第1包含層出土石器 (1)



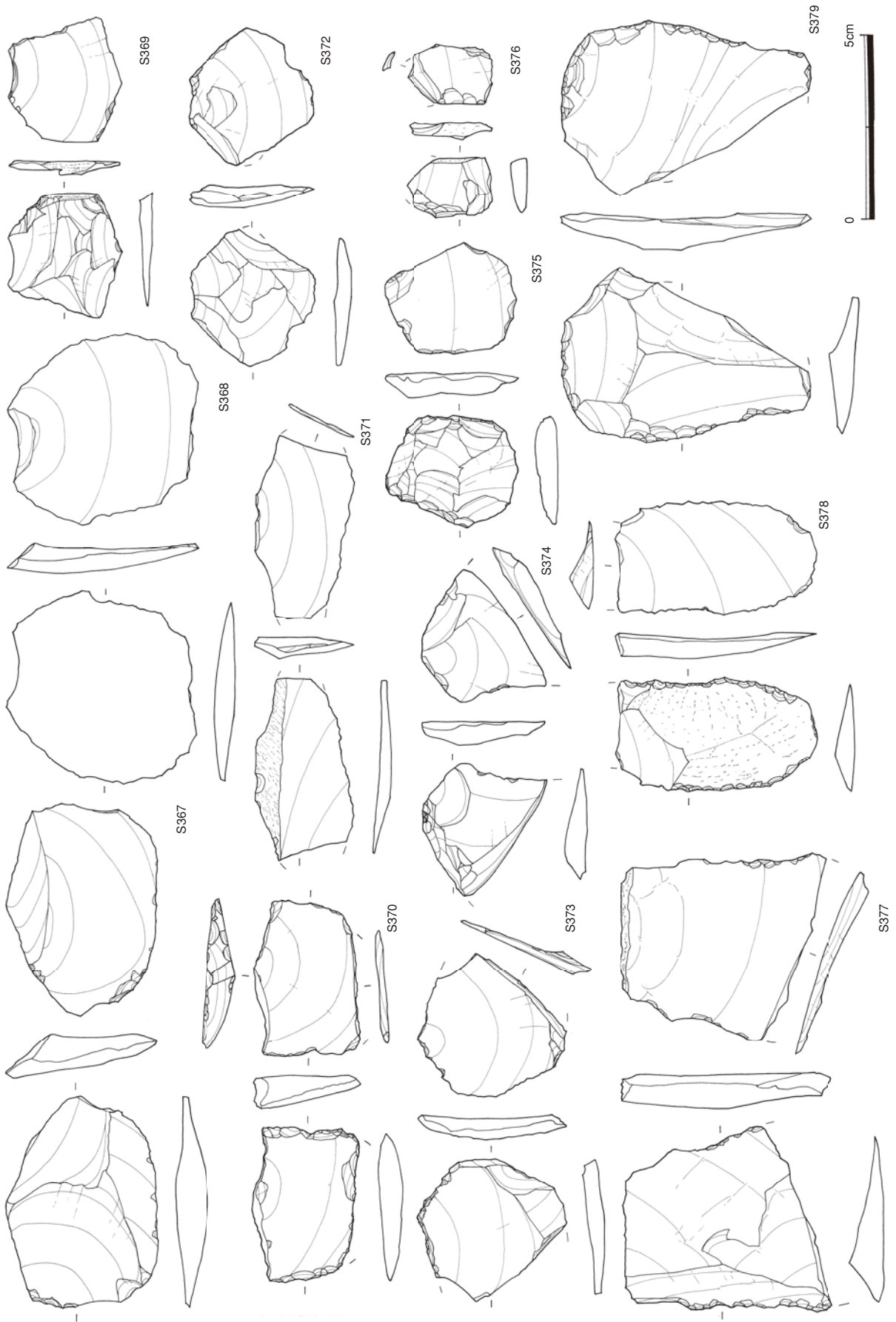
第356图 5区 第1包含层出土石器 (2)



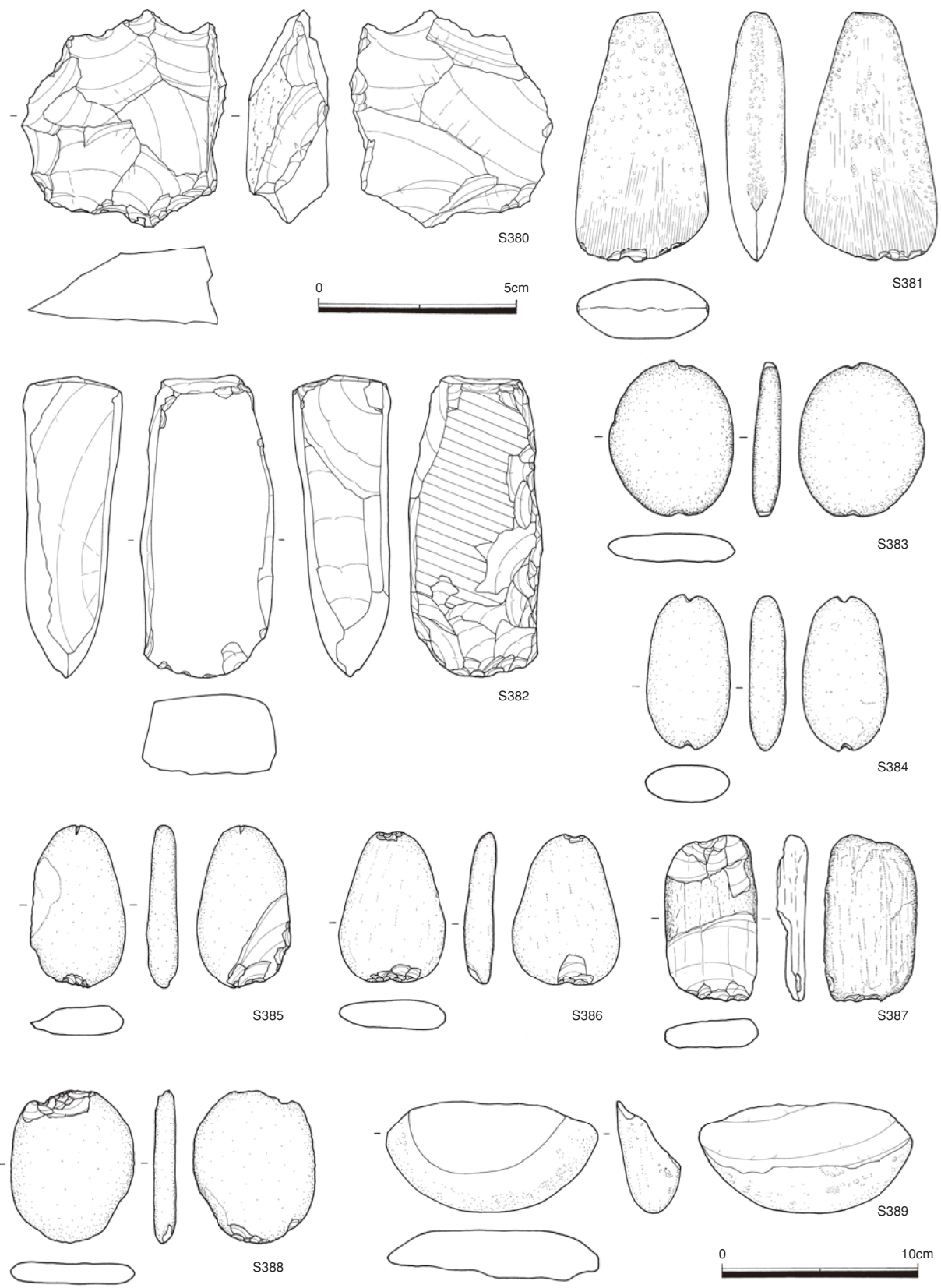
第357图 5区 第1包含層出土石器 (3)



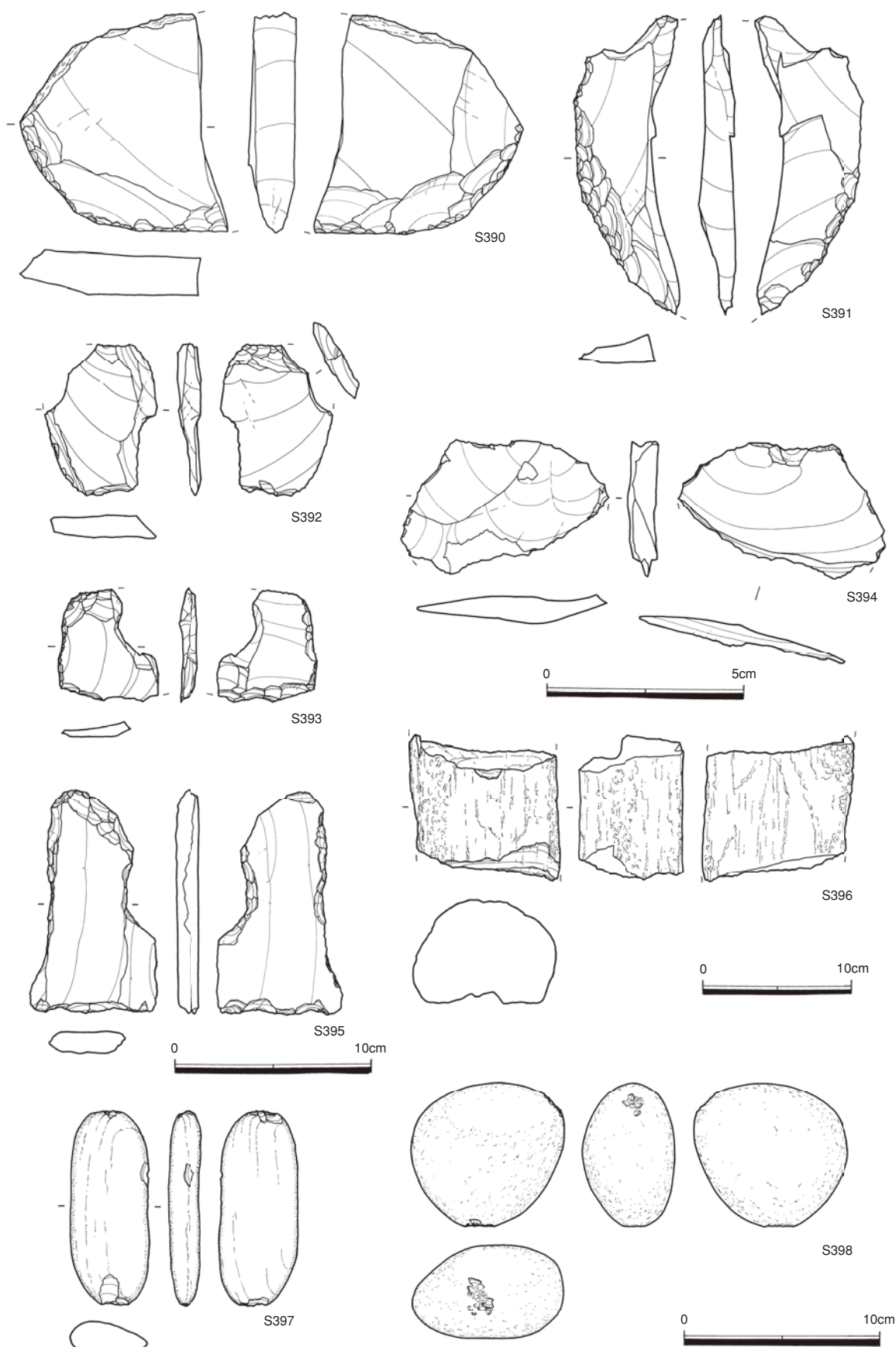
第358图 5区 第1包含层出土石器 (4)



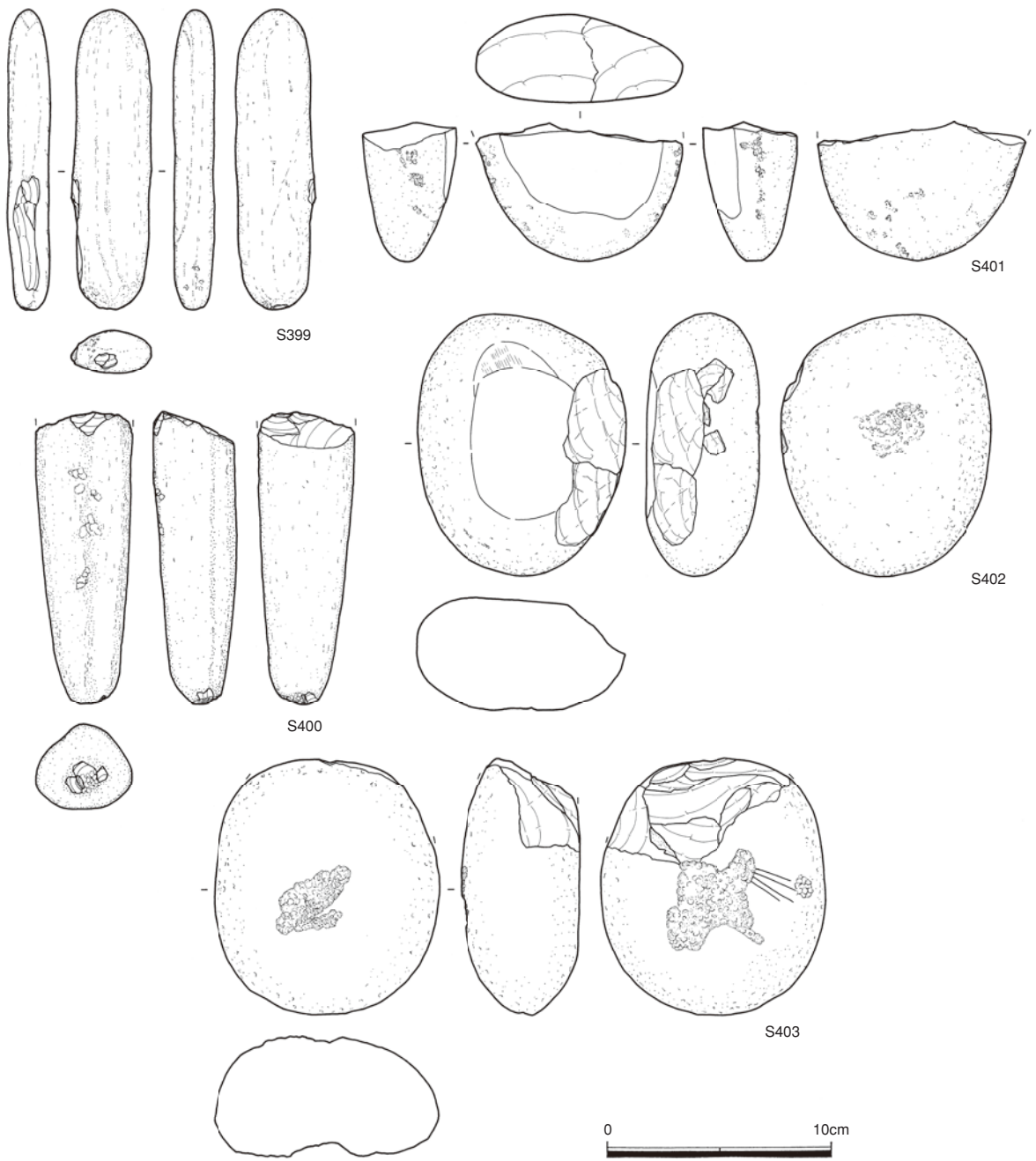
第359图 5区 第1包含层出土石器(5)



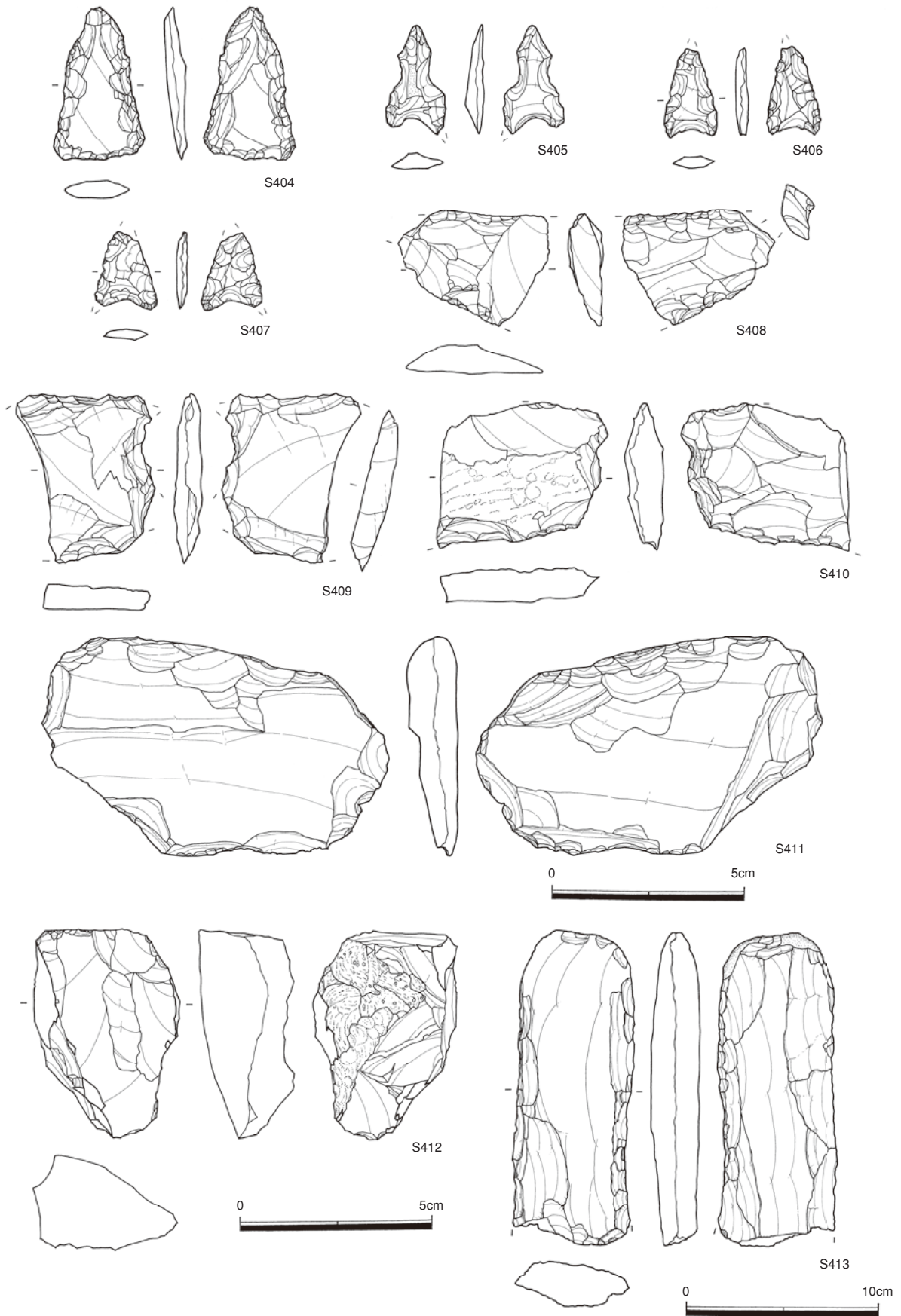
第360图 5区 第1包含層出土石器 (6)



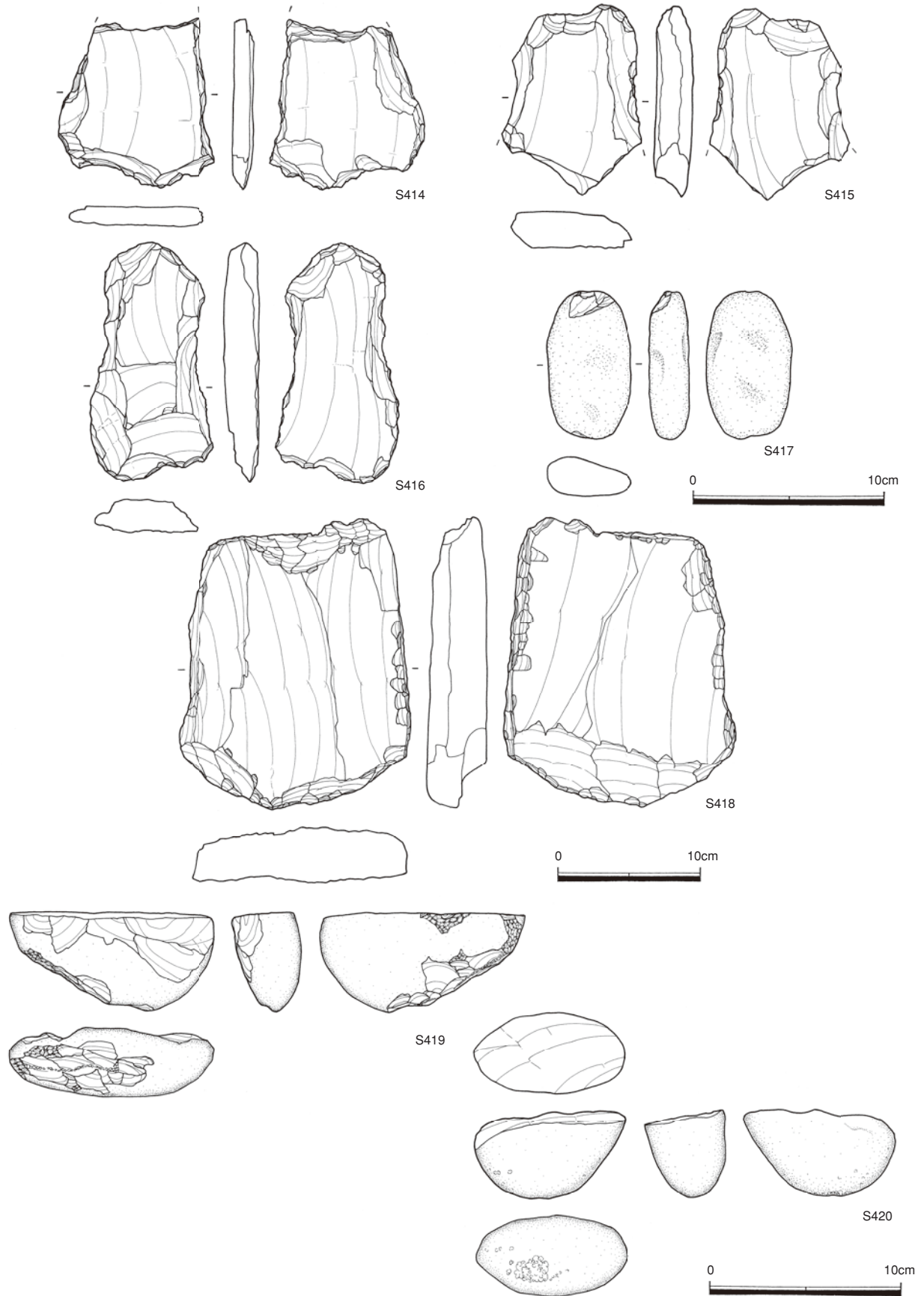
第361图 5区 第2包含層出土石器 (1)



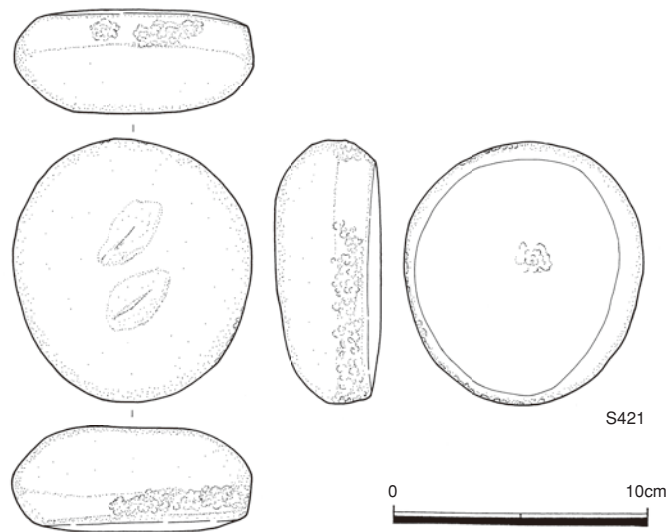
第362图 5区 第2包含层出土石器 (2)



第363图 7区 包含層出土石器 (1)



第364图 7区 包含層出土石器 (2)



第365図 7区 包含層出土石器 (3)

5区第二包含層 (第361・362図)

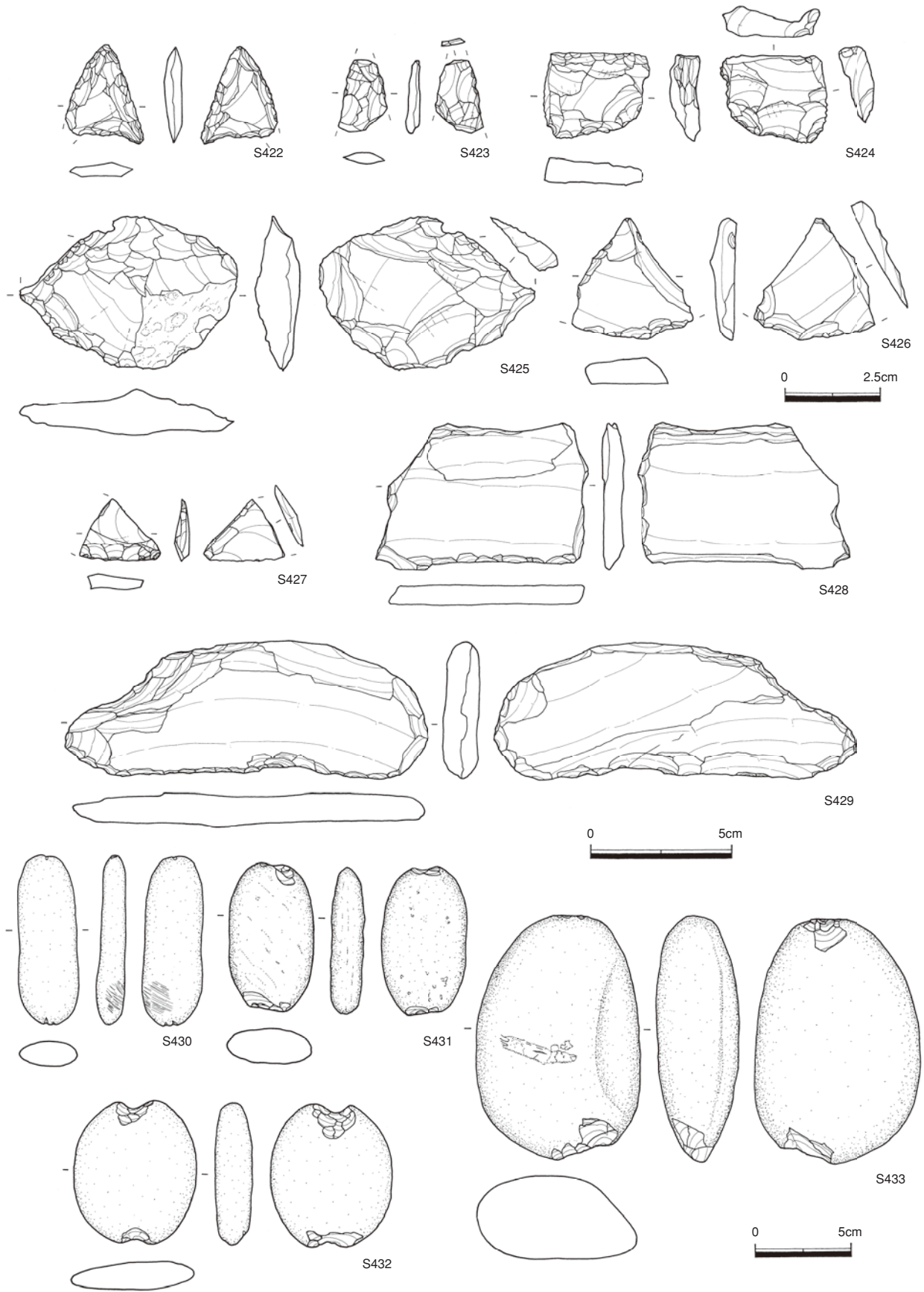
出土した石器のうち、楔形石器 (S390・391) 2点、剥片 (S392~394) 3点、石鋏 (S395)・石棒 (S396)・石錘 (S397) 各1点、敲石 (S398~401) 4点、磨石 (S402)・凹石 (S403) 各1点の計14点が図化できた。

楔形石器の使用石材はサヌカイトで、2点ともに裁断面は右に認められる。打面構成はS390が四方向と思われ、S391は不明である。剥片3点の石材は、すべてサヌカイトである。石鋏S395は下側縁部が欠損し、使用石材は砂質片岩である。石棒S396は上下側縁部が欠損し、砂質片岩を用いる。石錘S397は打欠石錘で、使用石材に砂質片岩を用いる。敲石4点のうち、S398のみ完形である。使用石材としてS398は緑泥片岩、S399・400は砂質片岩、S401は砂岩を用い、それぞれ敲打痕が1~2ヶ所認められる。またS401では表面に研面が認められる。磨石S402は使用石材として緑泥片岩を用い、表面に研面、裏面に凹痕がそれぞれ認められる。凹石S403は使用石材として砂質片岩を用い、表裏面それぞれに凹痕が認められる。

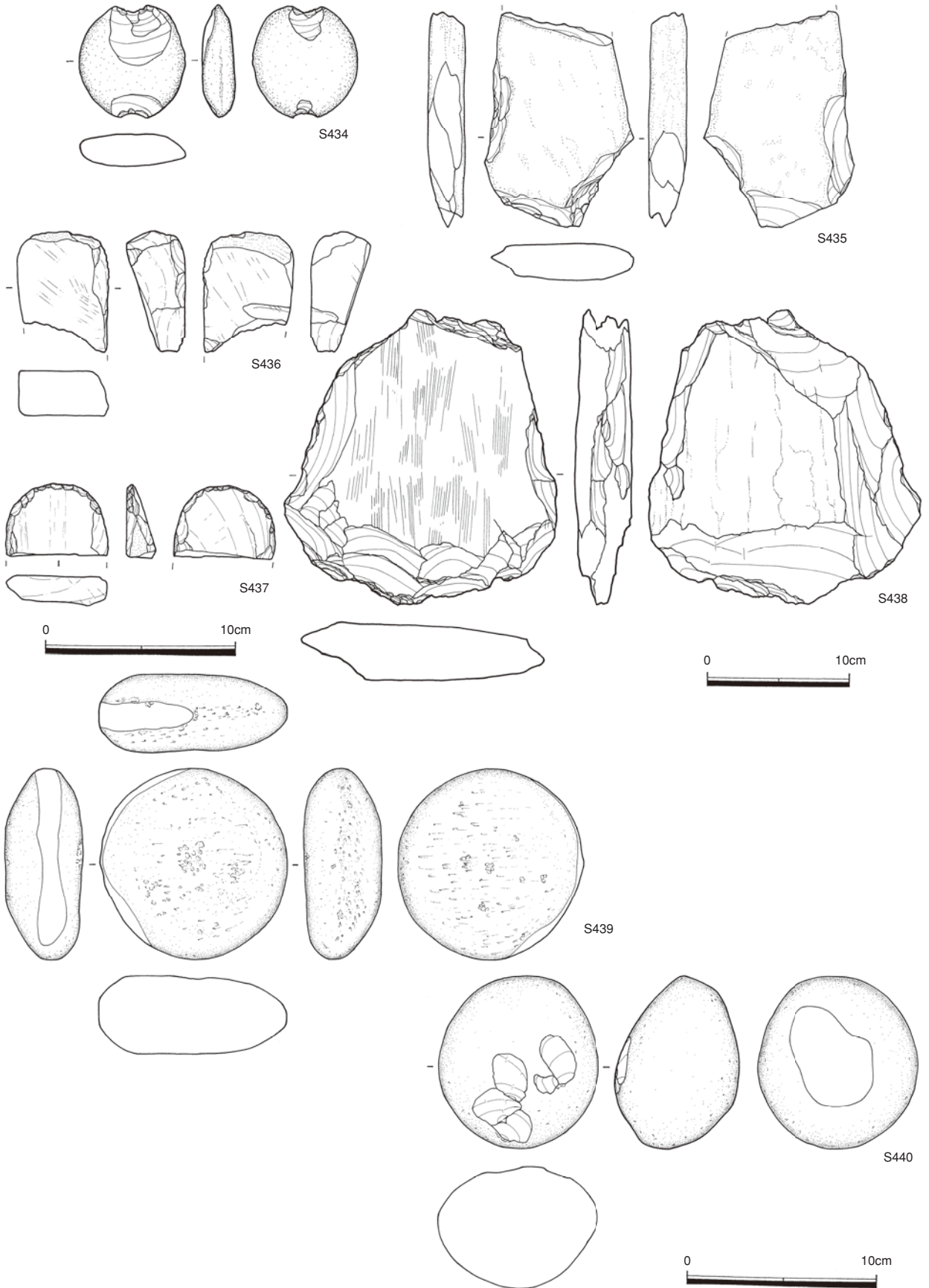
7区 (第363~365図)

出土した石器のうち、石鏃 (S404~407) 4点、楔形石器 (S408~411) 4点、石核 (S412) 1点、石鋏 (S413~416) 4点、石錘 (S417)・礮器 (S418) 各1点、敲石 (S419・420) 2点、磨石 (S421) 1点の計18点が図化できた。

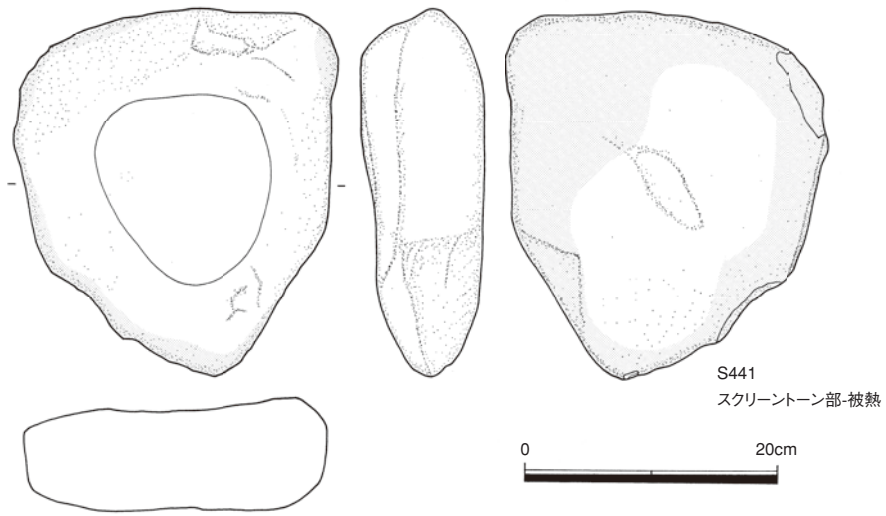
図化できた石鏃のうちS404は平基三角、S405~407は凹基式である。使用石材はすべてサヌカイトで、S404のみ完形である。楔形石器の使用石材はS411のみ砂質片岩で、残り3点はサヌカイトである。S408は右に、S409は左に裁断面が認められる。打面構成は欠損部があるものの、S408・409が四方向の可能性が、S410・411は二方向である。石核S412の石材はサヌカイトである。石鋏4点のうち完形はS416のみで、使用石材はすべて砂質片岩である。石錘S417は打欠石錘で、使用石材に砂質片岩を用いる。礮器S418の刃部は両刃で、砂質片岩を用いる。敲石2点のともに欠損し、使用石材にS419は砂質片岩を、



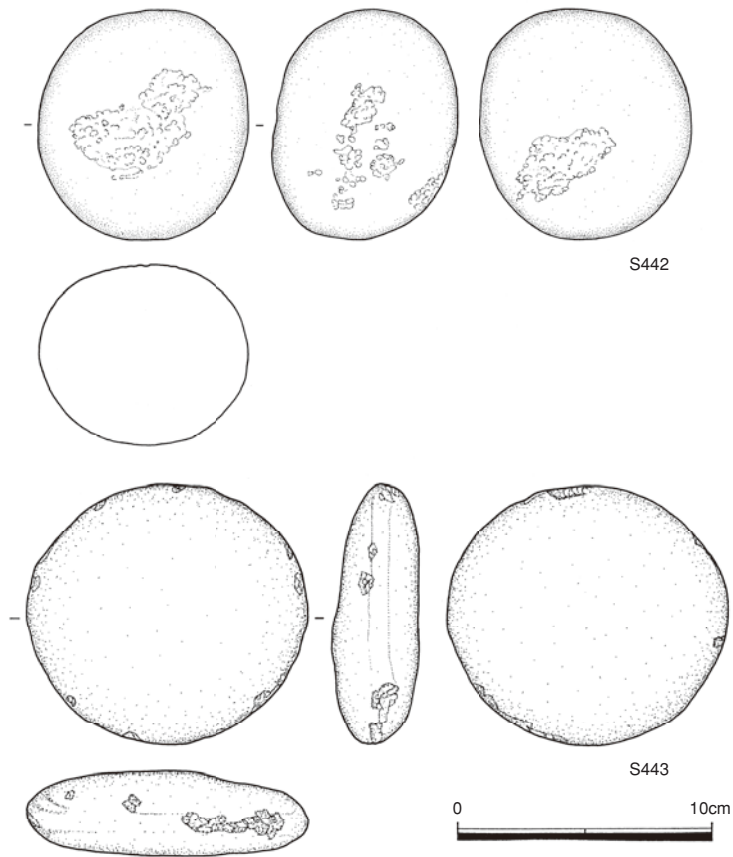
第366图 8区 包含層出土石器 (1)



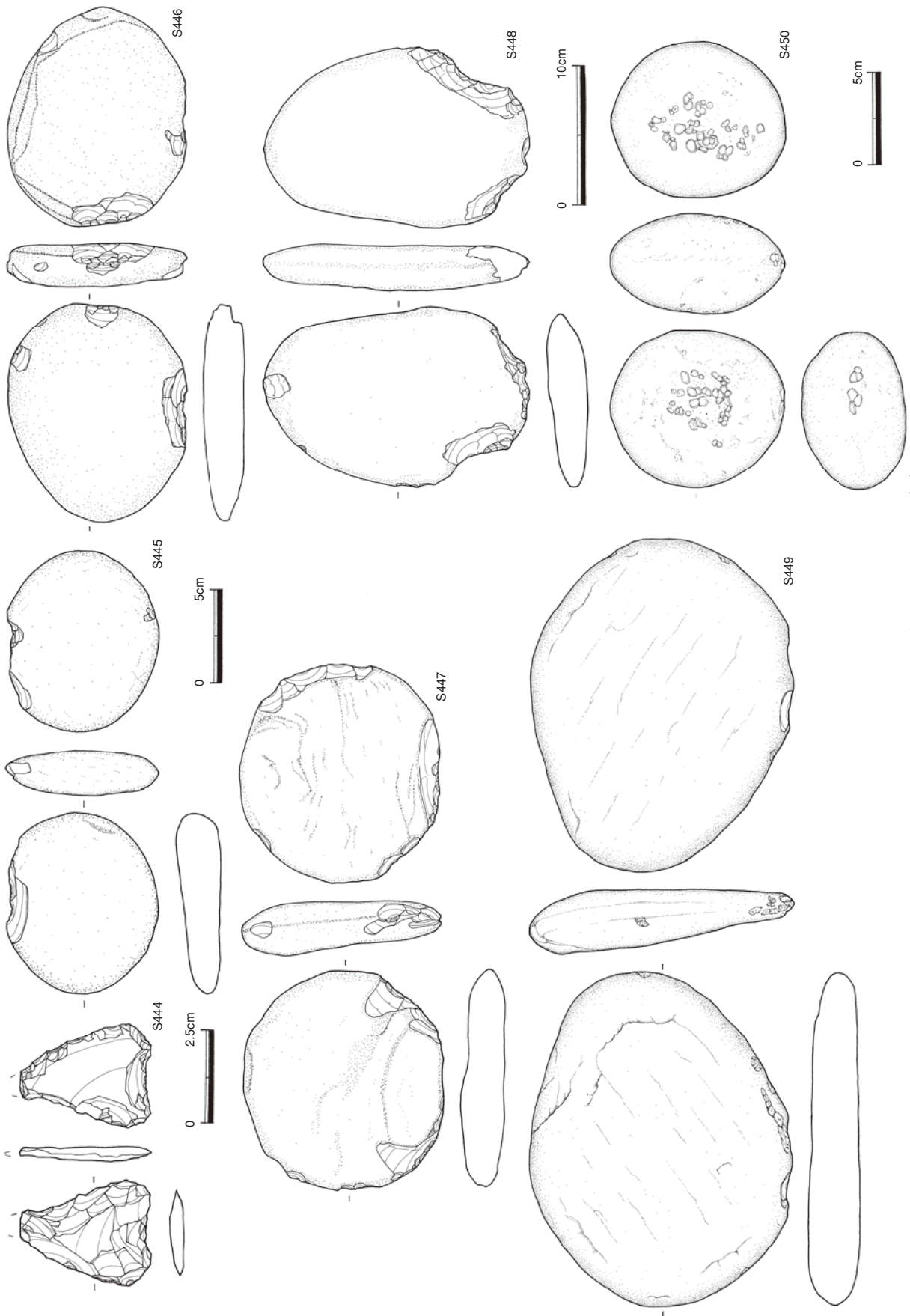
第367图 8区 包含層出土石器 (2)



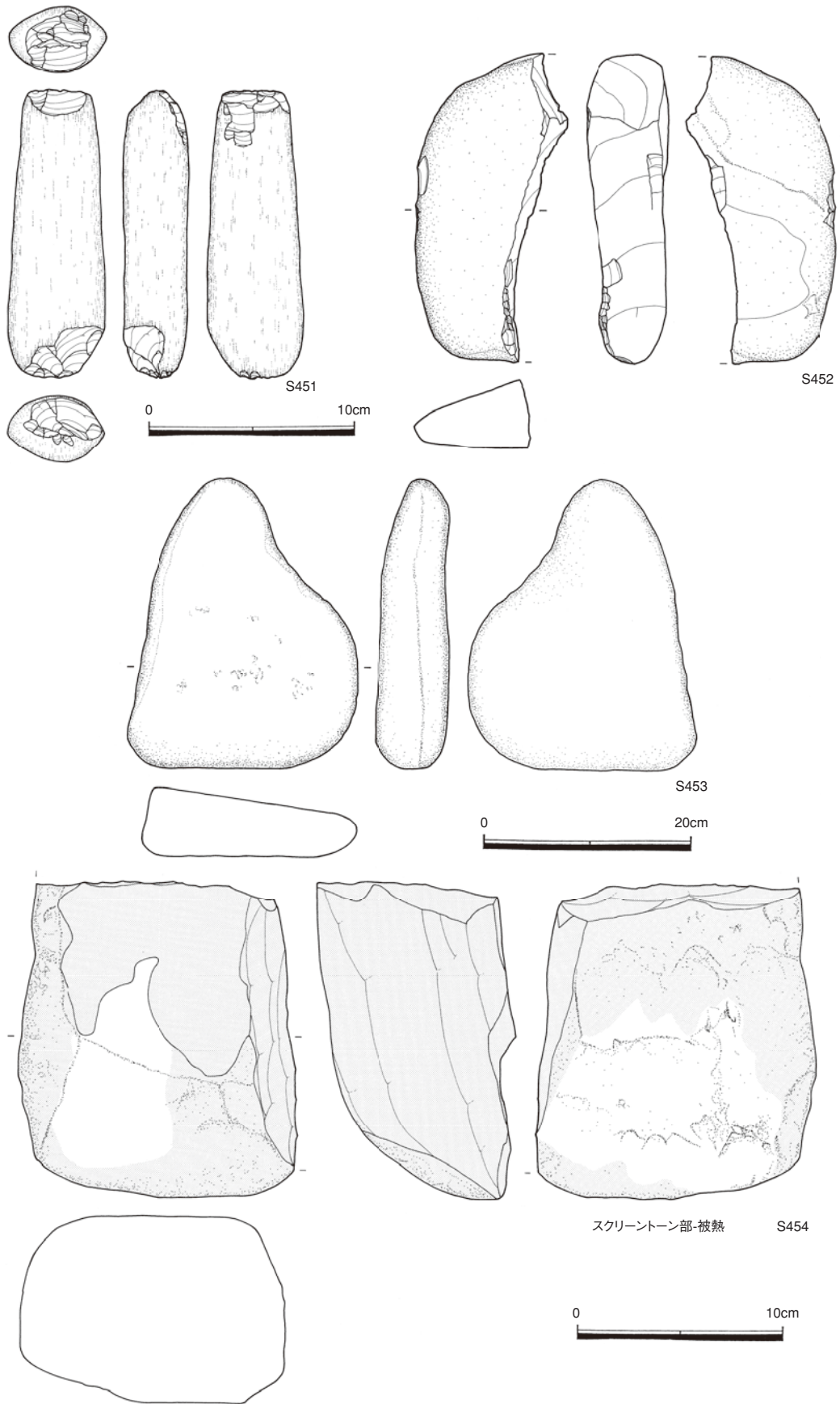
第368図 8区 包含層出土石器 (3)



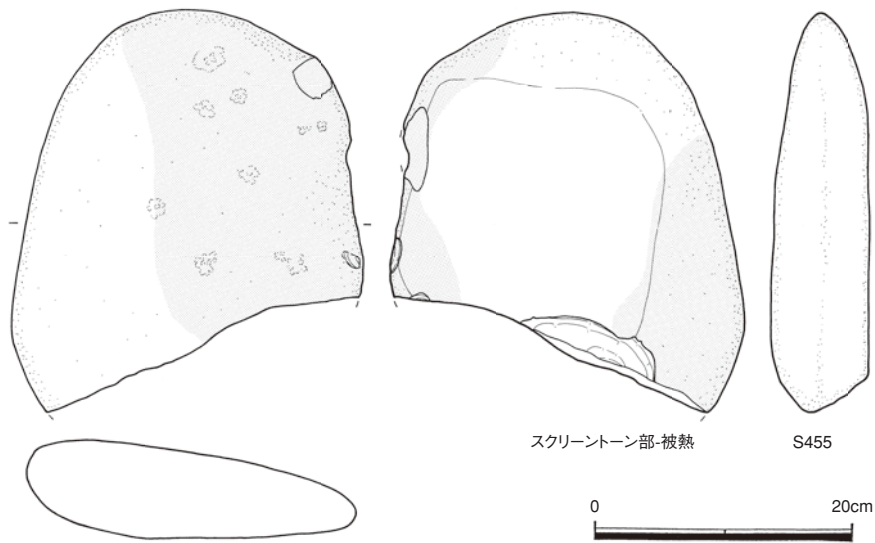
第369図 9区 包含層出土石器



第370图 10区 包含層出土石器 (1)



第371図 10区 包含層出土石器 (2)



第372図 10区 包含層出土石器 (3)

S420は砂岩を用いる。それぞれ敲打痕が1~2ヶ所認められる。磨石S421は使用石材として砂岩を用い、裏面に研面、上下右側面に敲打痕、表面に凹痕がそれぞれ認められる。

8区 (第366~368図)

出土した石器のうち、石鏃 (S422・423) 2点、楔形石器 (S424~426) 3点、削器 (S427~429) 3点、石錘 (S430~434) 5点、石鏃 (S435) 1点、砥石 (S436~438) 3点、敲石 (S439・440) 2点、石皿 (S441) 1点の計20点が図化できた。

図化できた石鏃のうち2点ともに無茎凹基式で、使用石材はサヌカイトである。楔形石器の使用石材はすべてサヌカイトで、S424・425は左に裁断面が認められる。打面構成は、S425・426が四方向、S424が二方向と思われる。削器3点のうち、S428・429は完形である。使用石材にS427はサヌカイトを、S428・429は砂質片岩を用いる。3点ともに刃部形態は平刃で、刃部数は単刃である。石錘5点は完形で、S430のみ切目石錘で、残り4点は打欠石錘である。使用石材にS430は砂質片岩、S431・434は斑糲岩、S432は緑泥片岩、S433は閃緑岩を用いる。またS430には、右側縁部と裏面の一部に擦痕が認められる。石鏃S435は上側縁部が欠損するものの、未製品である。使用石材に砂質片岩を用いる。砥石3点のうち、S438のみ完形である。使用石材としてS436は凝灰岩を、S437は砂岩を、S438は緑泥片岩を用いる。研面はS436で3ヶ所、S437・438でそれぞれ1ヶ所認められる。敲石2点ともに完形で、使用石材にS439は砂質片岩を、S440は緑泥片岩を用いる。それぞれ敲打痕が1~3ヶ所認められ、S439では左側面に、S440では裏面に研面が認められる。石皿S441は使用石材として砂岩を用い、被熱する。

9区（第369図）

出土した石器のうち、敲石（S442・443）2点のみ図化できた。敲石は2点ともに完形で、使用石材にS442は砂岩を、S443は砂質片岩を用いる。それぞれ敲打痕が認められ、S442は表裏面・右側面の3ヶ所、S443はおもに下側縁部に敲打痕が認められる。

10区（第370～372図）

出土した石器のうち、石鏃（S444）・石錘（S445）各1点、礫器（S446～448）3点、敲石（S449～451）3点、台石（S452・453）2点、砥石（S454）・石皿（S455）各1点の計12点が図化できた。

図化できた未製品の石鏃S444は平基三角で、使用石材はサヌカイトである。石錘S445は打欠石錘で、使用石材に砂質片岩を用いる。礫器3点ともに、刃部は両刃で使用石材に砂質片岩を用いる。敲石3点はすべて完形で、使用石材にS450は閃緑岩、その他の2点は砂質片岩を用いる。それぞれ1～3ヶ所に敲打痕が認められる。台石2点は、ともに使用石材として砂岩を用いる。砥石S454は上・右側縁部が欠損し、使用石材として砂岩を用いる。表面に研痕が認められ、遺存部のほぼ全体に被熱痕跡が認められる。石皿S455は使用石材として砂岩を用い、被熱痕跡が認められる。

97-1区（第373図）

出土した石器のうち、石鏃（S456・457）2点、石皿（S458）1点の計3点が図化できた。

図化できた石鏃2点ともに平基三角で、使用石材はサヌカイトである。石皿S458は、下半分が欠損する。使用石材として砂岩を用い、遺存部の約半分が被熱痕跡が認められる。

97-2区（第374図）

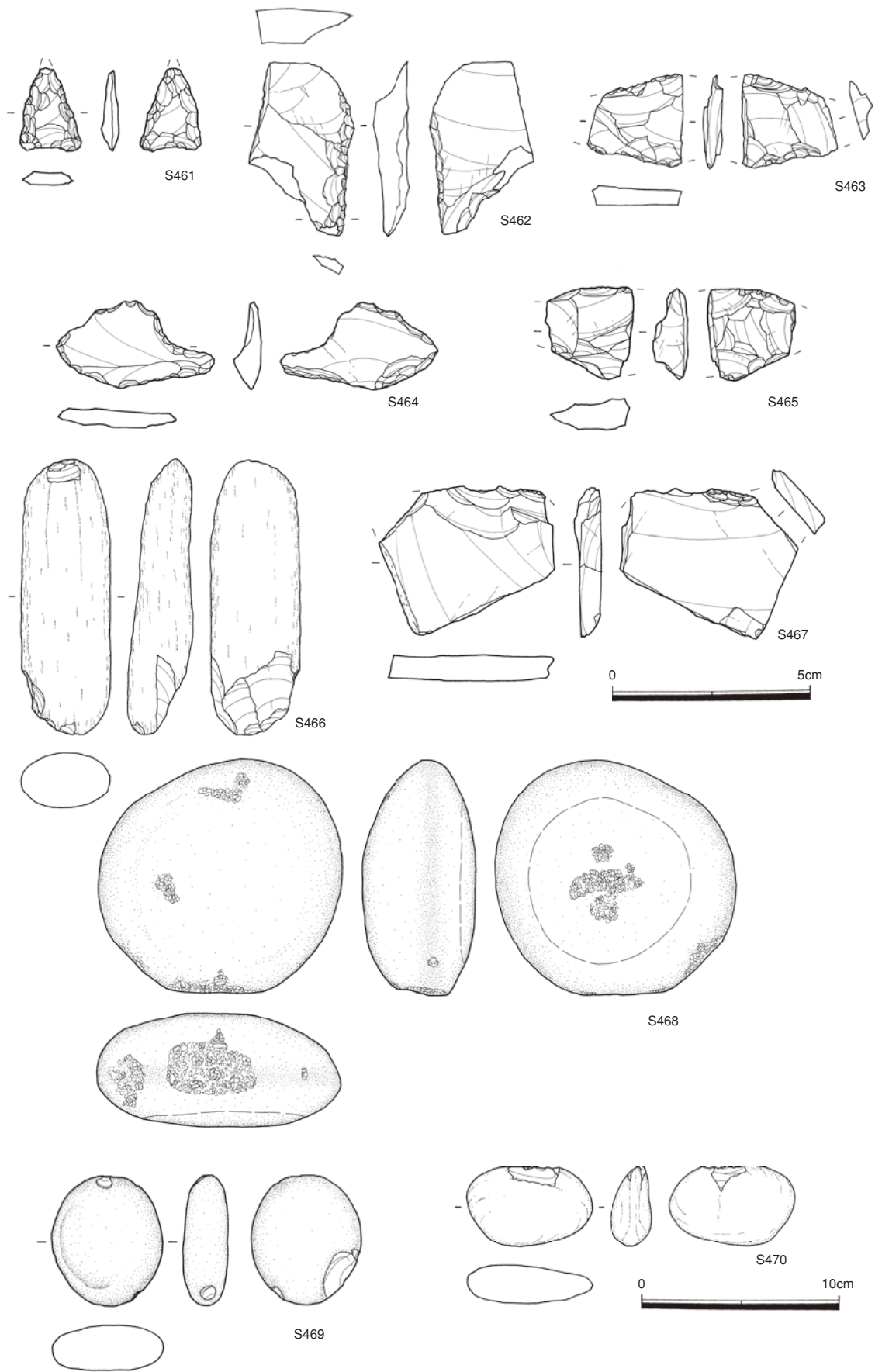
出土した石器のうち、石鏃（S459）・敲石（S460）各1点の計2点が図化できた。

図化できた石鏃S459は無茎凹基式で、使用石材はサヌカイトである。敲石S460は使用石材として砂岩を用い、上下側面部に敲打痕が認められる。

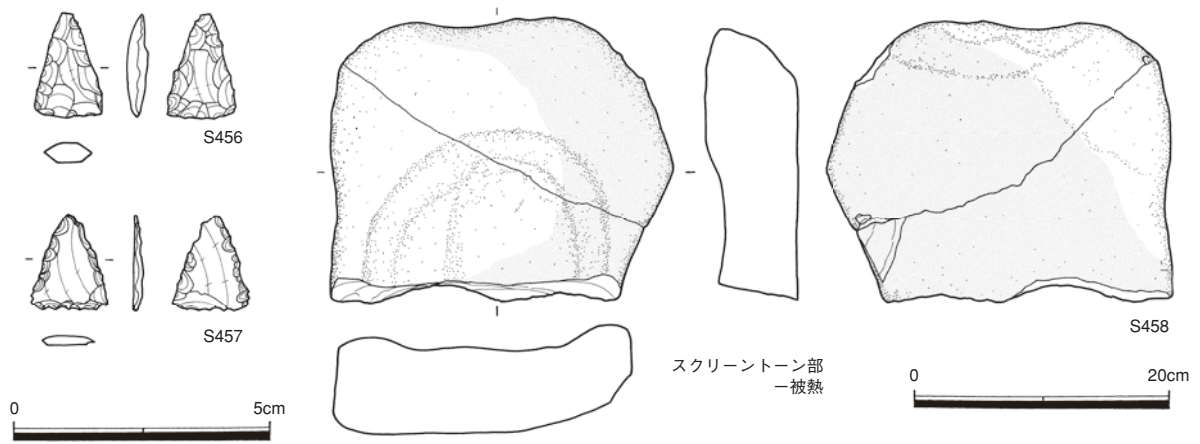
表土・側溝（第375図）

出土した石器のうち、石鏃（S461）・石錐（S462）各1点、楔形石器（S463～465）3点、石錘（S466・469・470）3点、剥片（S467）・敲石（S468）各1点の計10点が図化できた。

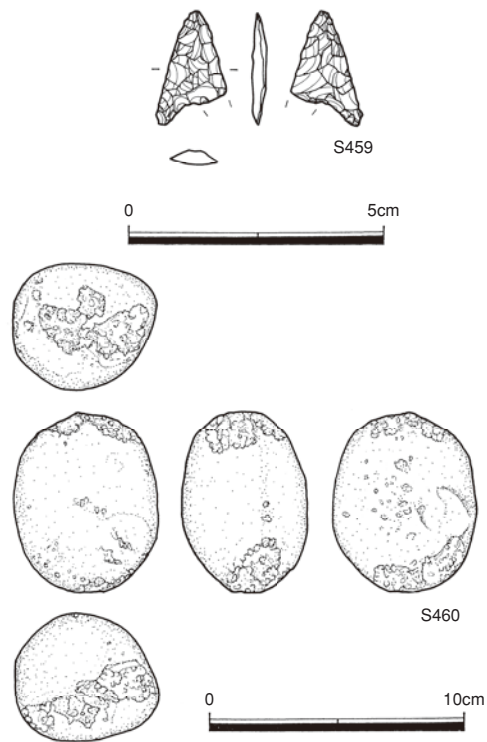
図化できた石鏃S461は平基三角で、使用石材はサヌカイトである。石錐S462は先端部が欠損し、使用石材にサヌカイトを用いる。楔形石器の転用の可能性がある。楔形石器の使用石材はすべてサヌカイトで、S463は左に、465は左右に裁断面が認められる。打面構成は、S463・465が四方向の可能性があり、S464が二方向である。石錘3点ともに打欠石錘で、使用石材にS466・469は砂質片岩を、S470は斑糲岩を用いる。剥片S467は、サヌカイトを用いる。敲石S468は使用石材に閃緑岩を用い、裏面・下側面それぞれ敲打痕が、裏面に研面が認められる。



第375図 表土・側溝出土石器



第373図 97-1区 包含層出土石器



第374図 97-2区 包含層出土石器

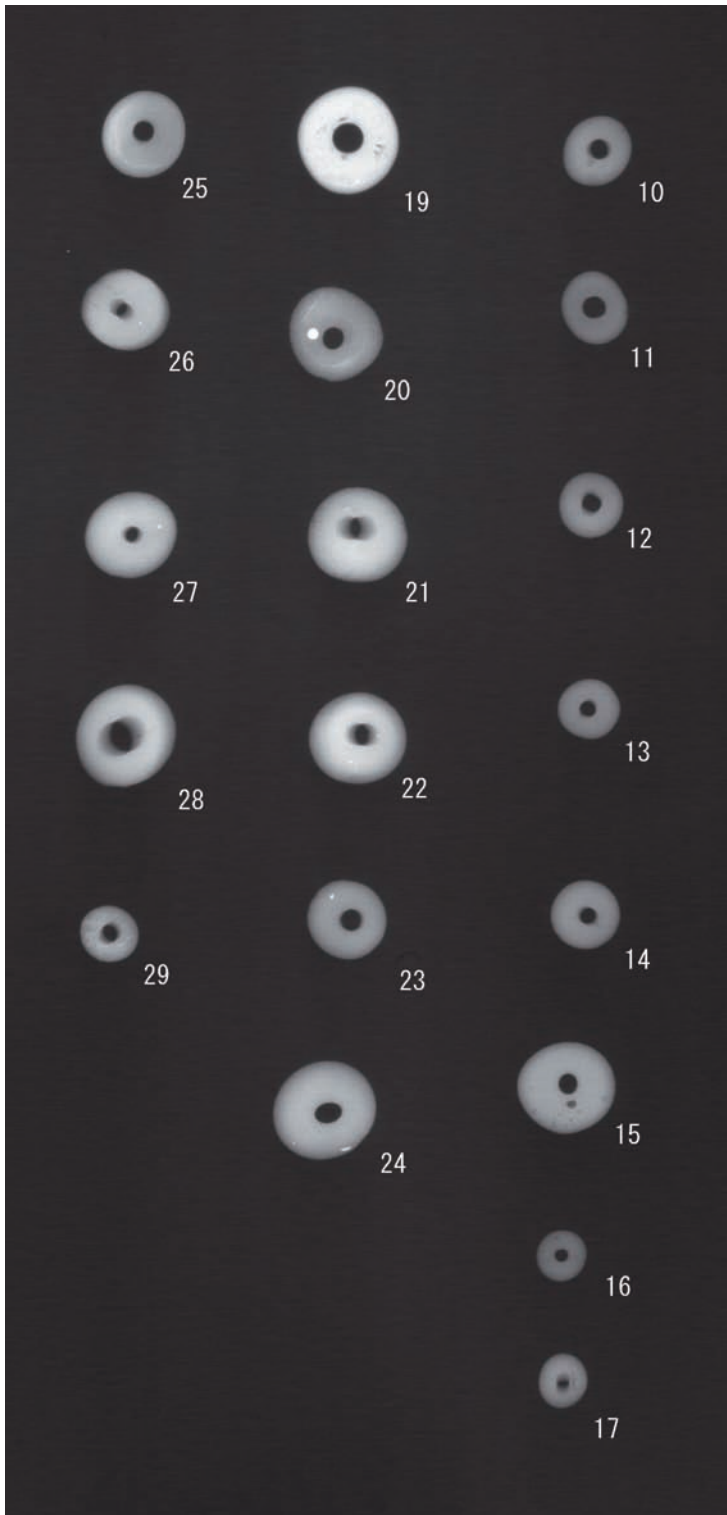


写真16 X線画像 木口面

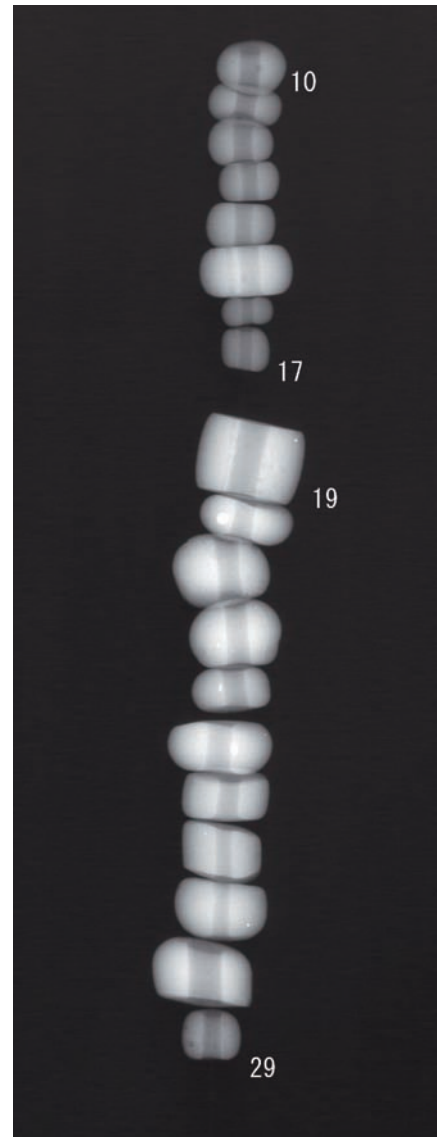


写真17 X線画像 側面

IV 自然科学分析

荒川遺跡の土器付着物分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

荒川遺跡は、徳島県北部を東流する吉野川に面した標高90～110m前後の山麓台地上に立地する複合遺跡であり、古代を除く縄文時代から江戸時代にかけての遺構・遺物が確認されている。中でも、約60,000点に及ぶ縄文土器が出土したことは、縄文時代の発掘例が少ない徳島県においては当時の様相を知る上で貴重な資料とされる。

多量に出土した縄文土器の中には、多孔底土器が10点確認されており、内7点について底部内外面や孔内に白色の付着物が認められている。また、一部の資料には黒色の付着物も見られていることから、本報告ではこれらの付着物の成分について自然科学分析調査を実施する。

1. 試料

調査に供する試料は、No.1465 (1-1区包含層)、No.3348 (3-2区包含層)、No.5399 (5-5区 H・G-26包含層)、No.5398 (5-5区I・J-26包含層)、No.5401 (5-5区G-26包含層) の多孔底土器片5点である。いずれも底部内外面あるいは孔内に白色の付着物が認められている。本調査では、これら白色付着物についてX線回折分析を実施し、白色付着物中の結晶性鉱物あるいは化合物を検証する。さらに、底部外面に煤状の黒色付着物が一様に観察されたNo.3348 (3-2区包含層) について赤外分光分析を実施し、有機化合物としての特性を調査する。

2. 分析方法

(1) X線回折分析

土器片に付着した白色物質を採取し、メノウ乳鉢で微粉碎した後、アセトンを用いて無反射試料板に塗布し、測定試料とする。作成したX線回折測定試料について以下の条件で測定を実施する。

検出された物質の同定解析は、Materials Data, Inc. のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

装置：理学電気製MultiFlex	Divergency Slit：1°
Target：Cu (Ka)	Scattering Slit：1°
Monochrometer：Graphite湾曲	Receiving Slit：0.3mm
Voltage：40KV	Scanning Speed：2° /min
Current：40Ma	Scanning Mode：連続法
Detector：S C	Sampling Range：0.02°
Calculation Mode：cps	Scanning Range：5～45°

(2) 赤外分光分析

土器片に付着した黒色物質を採取し、110℃、4時間の機械乾燥処理を行う。メノウ乳鉢で微粉碎(200メッシュ以下)した試料についてKBr錠剤法を用い、以下の条件で測定する(山田, 1986)。

装置：島津製作所製FTIR-8100A ミラー速度 (Detector) : 2.8mm/sec

測光値 (Measuring mode) : %T アポダイズ関数 (Apodization) : Happ-genzel

分解能 (Resolution) : 4.0cm⁻¹ 測定範囲 : 4600~400cm⁻¹

積算回数 (No.of Scan) : 40回 測定方法 : KBrマイクロ錠剤法

ゲイン (Gain) : 自動

3.結果

(1) X線回折分析

白色付着物のX線回折図を第376図に示す。図では、白色付着物から検出された鉱物の参照プロフィールを下段に併記している。以下に、各土器片の白色付着物から検出された鉱物を記載する。

1) No.1465 (1-1区 包含層)

石英 (quartz)、曹長石 (albite)、ハロイサイト (halloysite) のほか、微弱ではあるがダイアスポア (diaspore) の存在が認められる。

2) No.3348 (3-2区 包含層)

石英 (quartz)、曹長石 (albite)、微斜長石 (microcline)、ハロイサイト (halloysite) のほか、ダイアスポア (diaspore)、ギブサイト (gibbsite) の存在が確認される。

3) No.5399 (5-5区 H・G-26 包含層)

石英 (quartz)、曹長石 (albite)、微斜長石 (microcline)、ハロイサイト (halloysite) のほか、ダイアスポア (diaspore) の存在が確認される。

4) No.5398 (5-5区 I・J-26 包含層)

石英 (quartz) のほか、微弱ではあるが曹長石 (albite)、微斜長石 (microcline)、ハロイサイト (halloysite) の存在が確認される。

5) No.5401 (5-5区 G-26 包含層)

石英 (quartz)、ダイアスポア (diaspore) のほか、微弱ではあるがハロイサイト (halloysite) の存在が確認される。

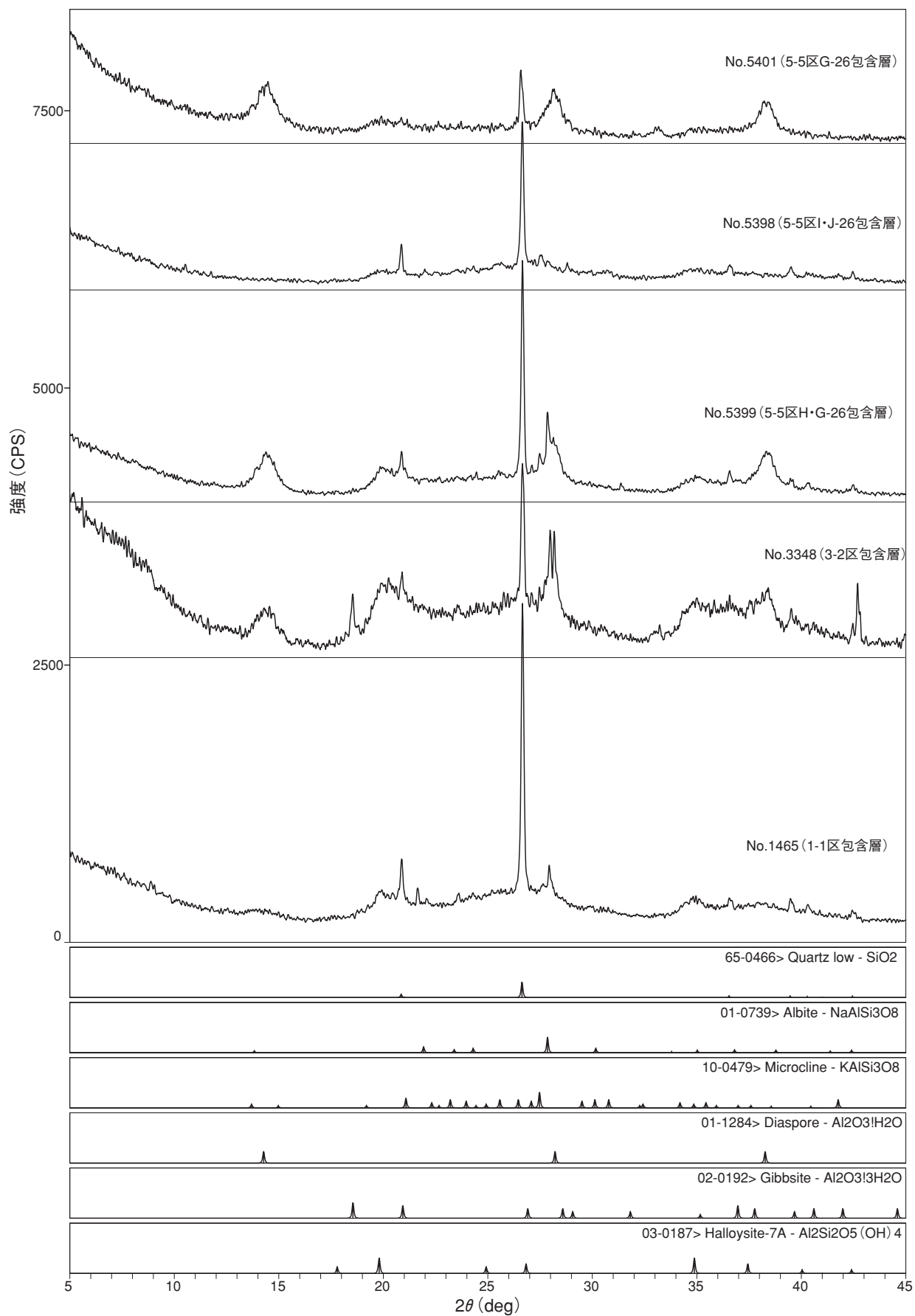
(2) 赤外分光分析

No.3348 (3-2区 包含層) から採取した黒色付着物の赤外線吸収スペクトルを、第378図に示す。主な吸収帯は、3450cm⁻¹、および1020cm⁻¹付近の幅広く強い吸収帯のほか、1620cm⁻¹、1390cm⁻¹、770cm⁻¹、530cm⁻¹、470cm⁻¹付近の吸収帯である。ここで、3450cm⁻¹付近の吸収は水分子やO-H基の伸縮振動、1620cm⁻¹付近の吸収はO-H基の変角振動、1390cm⁻¹付近の吸収は炭酸塩のC=O変角振動、1020cm⁻¹付近の吸収はSi-O伸縮振動、770cm⁻¹付近の吸収はAl-O伸縮振動と予想される。

4.考察

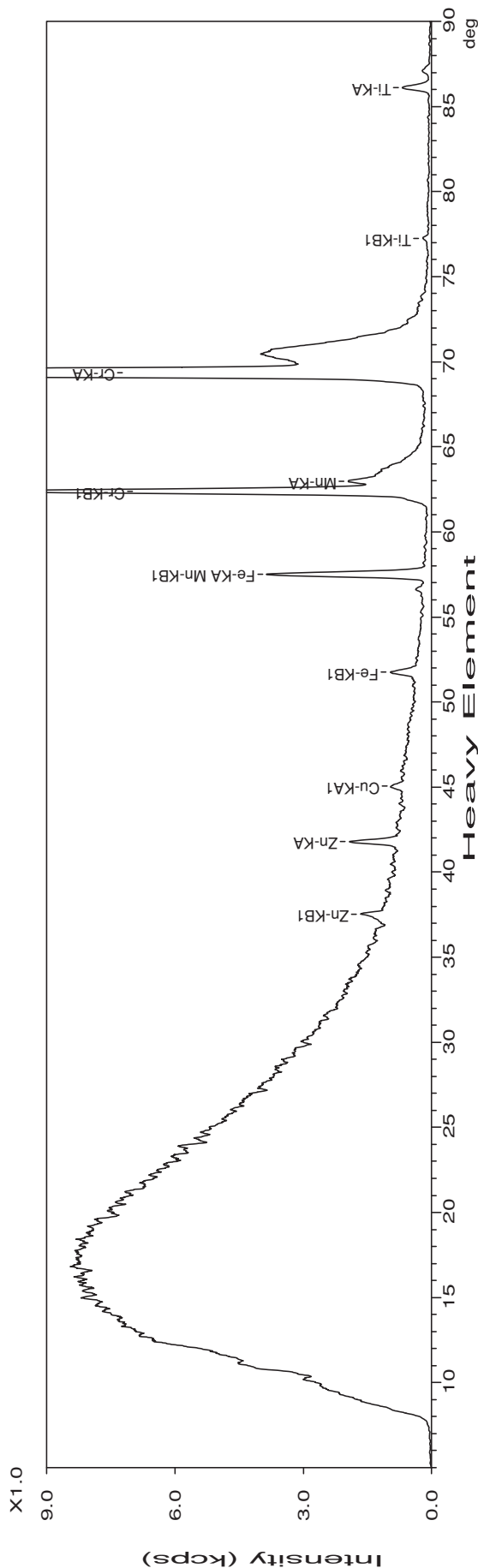
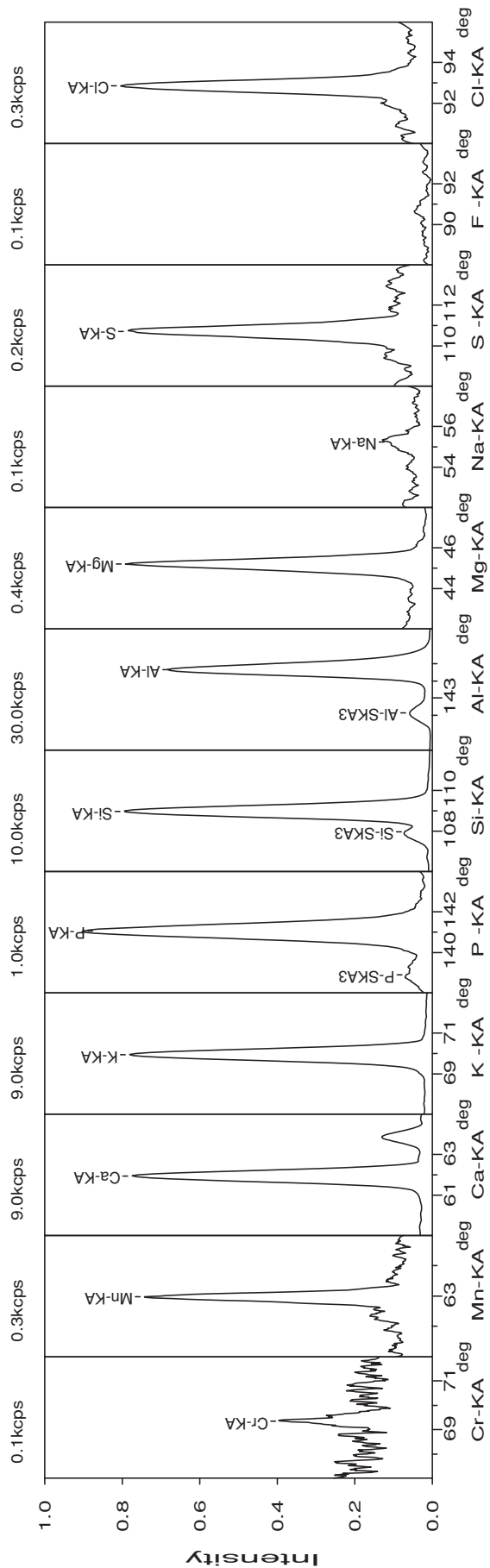
(1) 白色付着物

No.1465 (1-1区 包含層)、No.3348 (3-2区 包含層)、No.5399 (5-5区 H・G-26 包含層)、No.5398 (5-5区

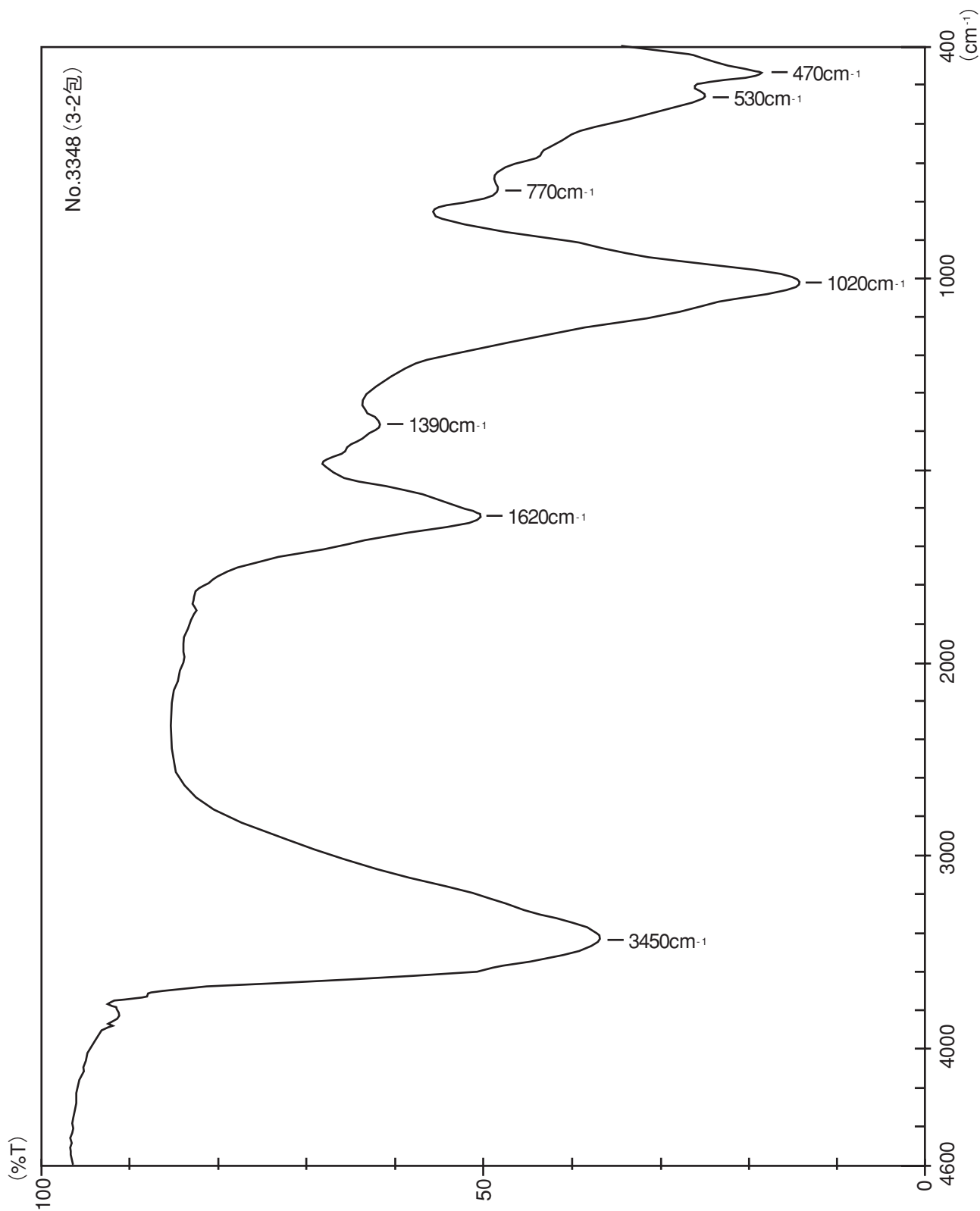


第376図 白色付着物のX線回折図

SpectrumChart



第377図 No.5399白色付着物の蛍光X線スペクトル



第378図 黒色付着物の赤外線吸収スペクトル

I・J-26 包含層)、No.5401 (5-5区 G-26 包含層) の多孔底土器片に付着した白色物質の由来としては、長石、ハロイサイト、ダイアスポア (No.5398を除く) が共通して含まれ、No.3348についてはさらにギブサイトの存在が認められており、アルミニウム含有量の高いバン土質な粘土であると判断される。さらに、白色付着物の化学組成を確認するためにNo.5399の白色付着物を対象として蛍光X線分析法により概略の化学組成を求めた結果を第377図および第4表に示す。化学組成を見ると、アルミニウム (Al₂O₃) が著しく多く含まれることが確認されるほか、ケイ酸 (SiO₂) を除いた他の成分がほとんど含まれていないこと、特に粘土の着色の主たる要因となる鉄 (Fe₂O₃) が少ないことが指摘される。

これらのことから、白色付着物はカオリン鉱物およびアルミニウム含水酸化物を含有するバン土質粘土と考えられ、いずれにも海塩に由来する結晶成分は認められない。

これまでの多孔底土器の白色付着物の分析例では、愛媛県小松町鶴来が元遺跡 (パリノ・サーヴェイ株式会社,1994)、高知県本山町松ノ木遺跡 (パリノ・サーヴェイ株式会社,2000) などにおいて行われている。

これらの分析例と今回を比較すると、ダイアスポアペーライト族およびギブサイトなどのアルミニウム含水酸化物が検出される点で、鶴来が元遺跡と今回の結果は類似する。また、松ノ木遺跡において検出された多量のアロフェン (非晶質の含水珪酸アルミニウム) は、アロフェンテストでの簡易的な定性判断である。アロフェンテストは厳密には「活性アルミニウムテスト」のことを示し、活性なアルミニウムがフッ化ナトリウムと反応してOH基を放出するために起こるpHの上昇について、フェノールフタレインを指示薬とした呈色反応により判定する方法である。アロフェンのほかにも、イモゴライトやアルミニウム-腐植複合体、ギブサイトなどが活性アルミニウムとして機能する。今回の調査結果や愛媛県小松町鶴来が元遺跡の調査結果で、多孔底土器の白色付着物にはアルミニウム含水酸化物が多く含まれることが判明したことにより、松ノ木遺跡において検出された白色付着物にはアロフェンというよりはむしろ Al₂O₃・nH₂Oのような非晶質態のアルミニウム含水酸化物が含まれているのではないかと考えられる。その場合の化学組成は今回と類似し、アルミニウム (Al₂O₃) が著しく多い特徴で共通することが予想される。なお、今回のような化学組成は非常に特殊で、現時点ではこのような粘土の由来や採取地については不明である。また、何故このような粘土が土器に付着しているのかなどの課題も残る。今後も、周辺地質調査や考古学所見などを含めて、継続した調査を行うことが望まれる。

(2) 黒色付着物

赤外線吸収スペクトル法では、あらかじめ試料物質が予想できるときには、既知の吸収スペクトルと比較して未知物質の同定および確認ができることから (山田,1986)、当社では試料の出所が既知の物質について、同一測定条件で赤外線吸収スペクトルを測定した例がいくつかある (未公表)。調査例としては、遺跡で検出される代表的な有機化合物である漆、天然アスファルト、松脂、動植物油、炭化物などがあげられる。これらはいずれも固有の吸収帯があり、漆では3480、2930、1710、1610、1440cm⁻¹、天然アスファルトでは2900、1600、1460、1380cm⁻¹と脂肪族飽和炭化水素に帰属する吸収帯に特徴がある。

第4表 No.5399白色付着物の化学組成

成分名	スペクトル	X線強度 (kcps)	分析結果 (wt%)
SiO ₂	Si-KA	7.8479	39.2555
TiO ₂	Ti-KA	0.6144	0.2623
Al ₂ O ₃	Al-KA	20.1177	50.5042
Fe ₂ O ₃	Fe-KB1	0.5714	1.9406
MnO	Mn-KA	0.1889	0.6226
MgO	Mg-KA	0.3683	2.6558
CaO	Ca-KA	6.6615	0.8699
Na ₂ O	Na-KA	0.0067	0.163
K ₂ O	K-KA	6.8232	1.2556
P ₂ O ₅	P-KA	0.8742	1.6557
SO ₃	S-KA	0.1419	0.2828
Cl	Cl-KA	0.223	0.1753
Cr ₂ O ₃	Cr-KA	0.0241	0.1653
ZnO	Zn-KA	1.0708	0.1914

また、松脂は 1700cm^{-1} 、動植物油は 1740cm^{-1} 、炭化物は $1140\sim 1160\text{cm}^{-1}$ に特徴ある吸収帯がある。

今回、No.3348 (3-2区 包含層) から採取した黒色付着物の赤外線吸収スペクトルには、上記吸収が認められていないことから、漆や天然アスファルト、松脂、動植物油、炭化物などの類とは考えにくい。これまでに実測した様々な材質の中で最も類似する赤外線吸収スペクトルを示す材質として、土壌や粘土が候補として挙げられることから、計測されたスペクトルは土器胎土あるいは付着物中に混在する土壌の影響を強く反映したものと判断される。

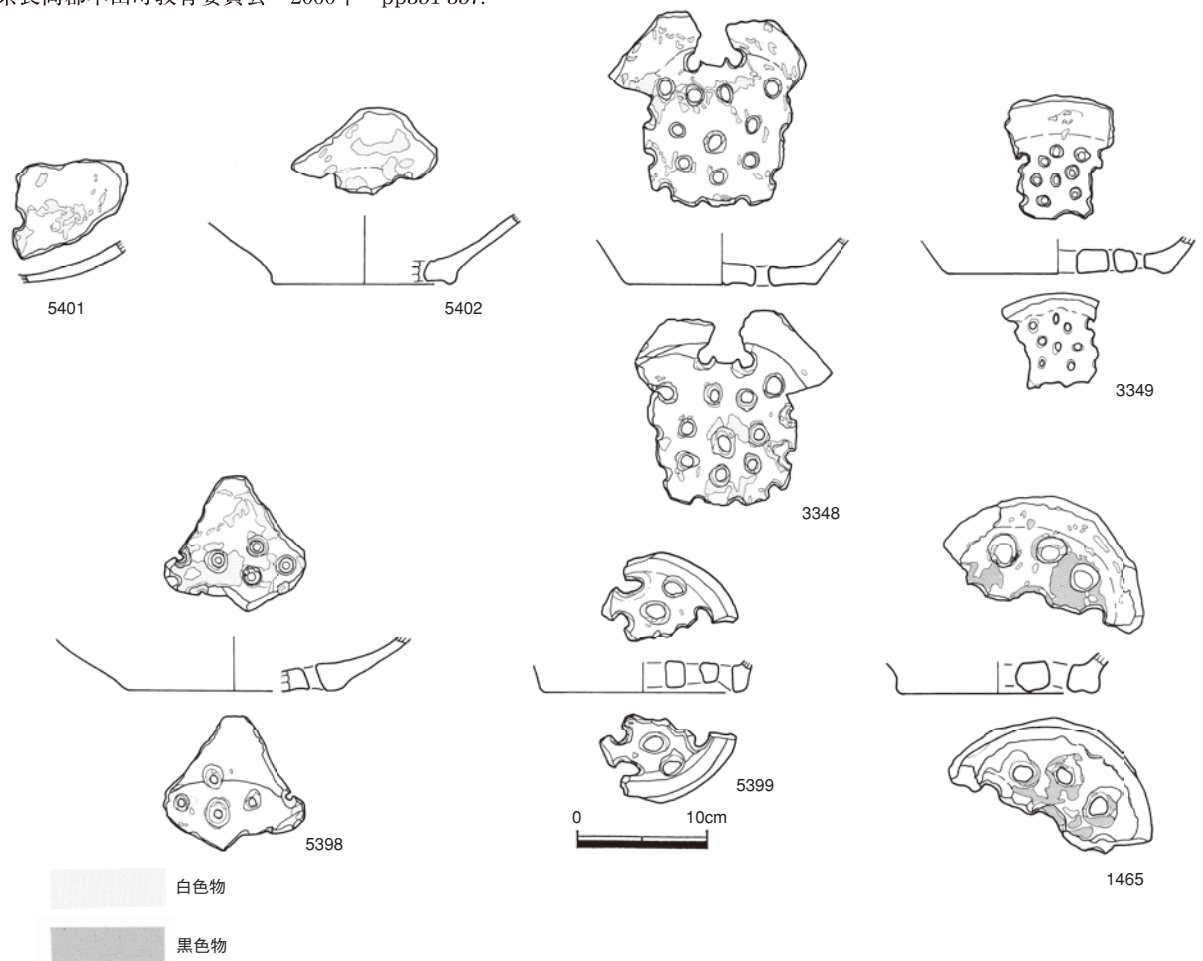
以上のように、黒色付着物の付着状況を見る限りでは土器の使用に伴う「スス」や「コゲ」の可能性が高いと予想されたが、今回のように微量の煤が表面に付着している状況ではそれらの有機化合物としての特性を把握するに至らなかった。今後は、まず炭素などの付着状況を電子線マイクロアナライザー (EPMA) などを用いて観察するなど、炭質成分の有無を調査することが望まれる。状況によっては、顕微FT-IR (フーリエ変換赤外分光法) を利用した微小領域での特性調査も有益と考える。

《引用文献》

山田富貴子「赤外線吸収スペクトル法」『機器分析のてびき第1集』化学同人 1986年 pp1-18.

パリノ・サーヴェイ株式会社「鶴来が元遺跡自然科学分析調査報告」『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書VI-小松町編I 鶴来が元遺跡』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 1994年 pp124-135

パリノ・サーヴェイ株式会社「松ノ木遺跡の自然科学調査」『本山町埋蔵文化財調査報告書第11集 松ノ木遺跡V』高知県長岡郡本山町教育委員会 2000年 pp351-357.



第379図 白色物・黒色物付着土器

荒川遺跡出土の赤色物質付着土器の調査

(財) 徳島県埋蔵文化財センター

植地岳彦

はじめに

荒川遺跡出土資料に赤色物質の付着が認められるものが確認された。その赤色物質について蛍光X線分析法による材質調査を実施したので報告する。

今回の調査対象は、縄文土器に付着する赤色物質である。これまでに徳島県埋蔵文化財センターでは、表面に赤色顔料が塗彩された縄文土器として、徳島市矢野遺跡出土資料、徳島市庄遺跡出土資料について材質調査を実施した。その結果、矢野遺跡ではほとんどが赤色顔料のベンガラで、水銀朱が使用されたものも少数確認された。庄遺跡では水銀朱であった。水銀朱は硫化水銀 (HgS)、ベンガラは酸化第二鉄 (Fe₂O₃) からなり、両者は元素分析することで識別することができる。ただFeは土器中にも多く含まれることからFeを検出しただけでベンガラを特定することは難しく、付着状況や赤色部分と赤色でない部分のスペクトル形状の比較によって判断する必要がある。HgSは通常土器などに含まれるものではないので、赤色でHgが検出されれば水銀朱の存在を特定することができる。

1. 調査方法

分析条件

分析装置	エネルギー分散型蛍光X線分析計SEA2010L	(セイコーインスツルメンツ株式会社製)
管電圧	50kV	
照射径	10mm	
測定時間	100秒	
測定室	大気	

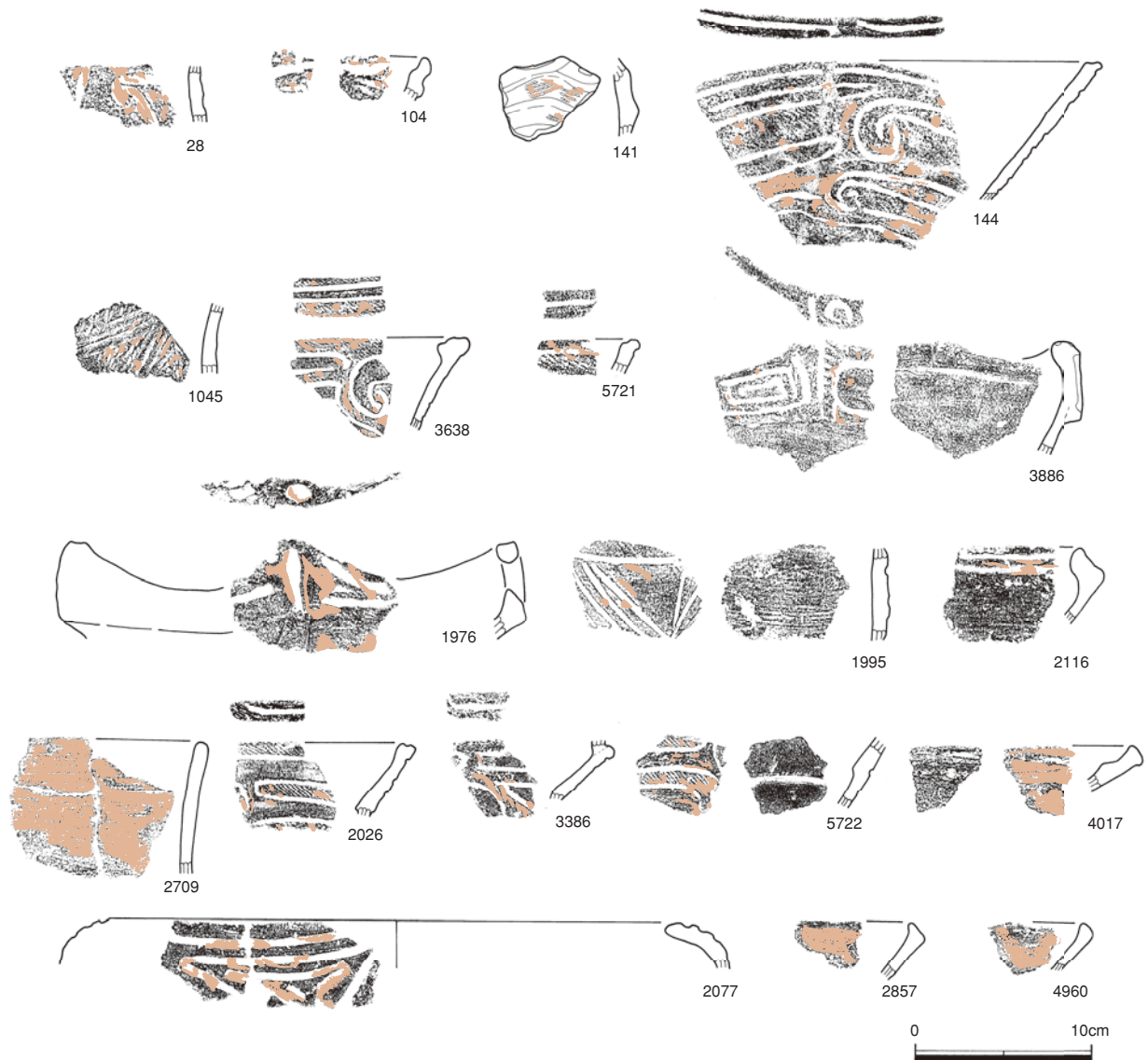
2. 調査結果

(1) Hgが検出された資料

調査対象資料中で、104の1点にHgが検出された。赤色部分でHgが強く検出されていることから赤色物質は水銀朱である。沈線内の他ひび割れの奥まった部分、赤色が視認できない部分からも若干検出されることから、実際の付着範囲はもっと広いと推定される。

(2) Feが強く検出された資料

4017、2857、4960、144、1976、2709、番号なし(未実測)の赤色部分で強くFeを検出した。2709を除いて赤色物質が付着しない部分と比較するとその差は明らかで、赤色はFeに由来することが確認できる。2709は赤色物質が満遍なく付着しており、付着しない部分との有意な差を見つけ出すことができないが、Feのピークも他の資料と比較すれば強いと言える。肉眼観察でも赤色物質がある程度の厚みを持っていることが確認できることから、赤色顔料のベンガラで彩られた縄文土器の破片と考えて良いだろう。



第380図 赤色物質付着土器

(3) Feがやや強く検出された資料

5721、3386、1045、5722、1955の赤色部分では、赤色部分でない部分と比較して、やや強めにFeが検出された。この赤色はFeに由来するものと考えられるが、赤色の遺存状態は良いとは言えず、資料表面の奥まった部分に残存している状態である。赤彩に用いられたベンガラが剥離を免れて遺存したものと思われる。1955は外面全体が茶色がかっているのもともとも鉄分の多い土を土器表面に使用した可能性もある。

(4) Feが特徴的に検出されなかった資料

3886、3638、28、2077、2116、141では、赤色物質の遺存量が少なく、資料形状の理由で測定が困難であったこともあり、赤色部分と赤色でない部分でFeの有意な差を認めることができない。

3. まとめ

今回の調査で、縄文土器に付着する赤色物質に水銀朱とベンガラが含まれることが明らかになった。水銀朱付着土器は1点確認されたが、細片で付着量も少なく、意図的に赤色塗彩された遺存か、水銀朱の容器等で意図されない付着とその遺存かを明確に判断することは難しい。

ベンガラ付着土器については、彩度も高く、小片とはいえ全面的にもしくは部分的に区画されて塗彩されている。縄文土器への彩色例として認識できる。

ただ、小破片であること、包含層出土資料であることなど、考古資料としての情報は質の高いものとは言えない。また包含層を中心とした荒川遺跡出土縄文土器の全量に対して、赤彩が確認された資料数は微量であることから、赤彩の事実以上を類推することは難しい。それよりも、ベンガラで赤彩された縄文土器は、稀とはいえ徳島県内の広い範囲で確認される可能性が示されたこと、赤色物質として水銀朱も使用されていることなど、赤色顔料にまつわる包括的な事例として評価されるだろう。



写真2

写真2 Hgが検出された縄文土器 (104)

写真3 ベンガラ塗彩の縄文土器 (4017)

写真4 口縁端部が赤彩されている (4017)



写真3



写真4



写真5



写真9



写真6



写真10



写真7



写真11



写真8



写真12

写真5 ベンガラ塗彩 (2857外面)

写真6 ベンガラ塗彩 (2857内面)

写真7 ベンガラ付着の様子 (1976)

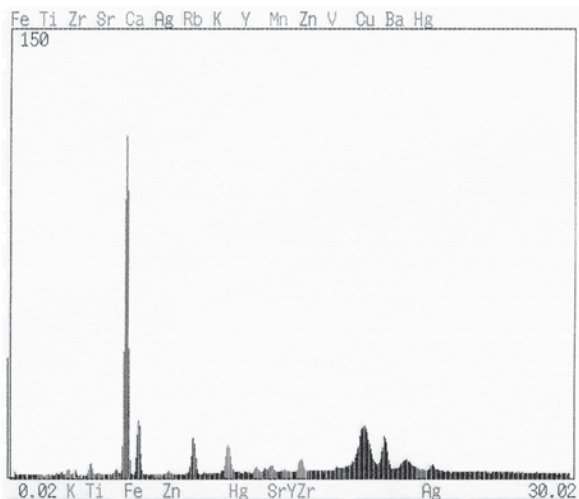
写真8 ベンガラ付着の様子 (2709)

写真 9 外面の一部に赤彩が見られる (144)

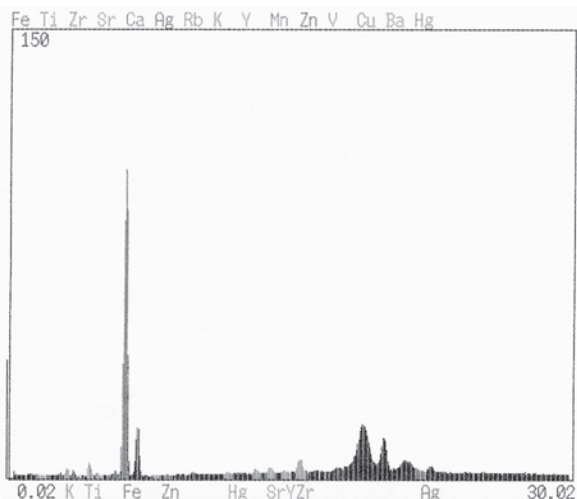
写真10 144の拡大写真

写真11 ベンガラ付着の様子 (4960)

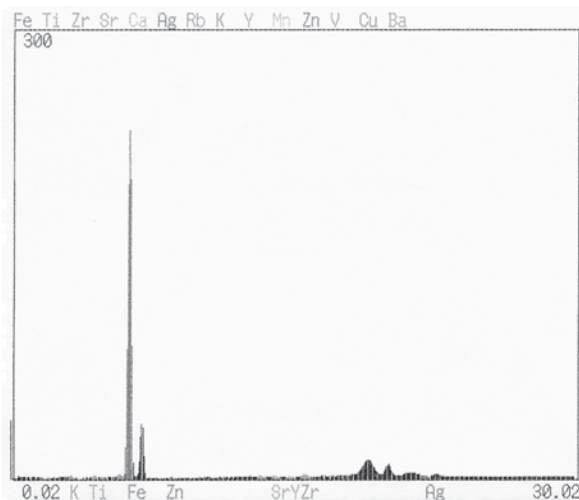
写真12 やや赤茶色い土器 (1955)



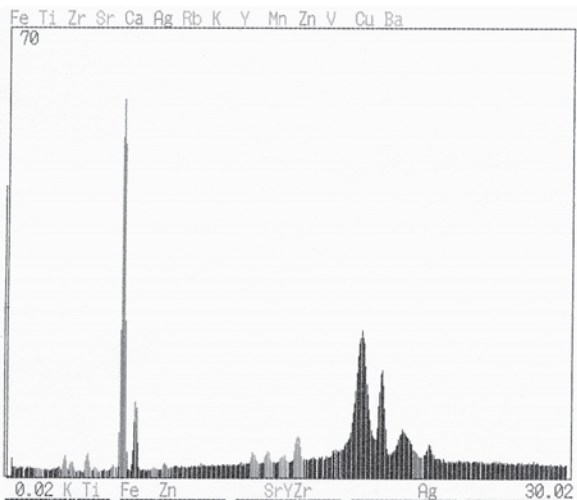
スペクトル1 (104) 赤色が確認できる部分でHgが検出された



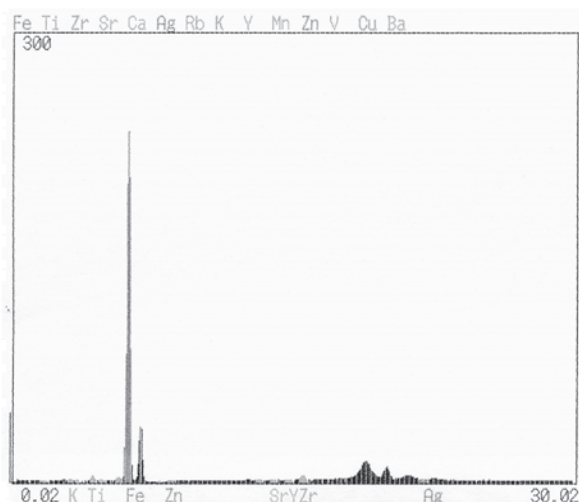
スペクトル2 (104) 微弱だが、肉眼で赤色が確認できない部分でもHgが検出された。



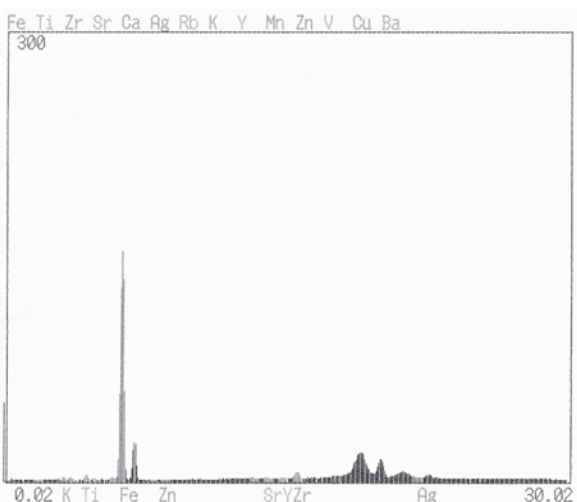
スペクトル3 (4017) 赤色が確認できる部分。Feが非常に強く検出される。



スペクトル4 (4017) 赤色が確認できない部分。3と比べてFeが弱い。



スペクトル5 (104) 赤色が確認できる部分。Feが非常に強く検出される。



スペクトル6 (1976) 赤色が確認できない部分。5と比べてFeが弱い。

第381図 スペクトル図

荒川遺跡出土ガラス製品の調査

(財)徳島県埋蔵文化財センター 植地岳彦

はじめに

荒川遺跡出土のガラス製品について、材質等の調査を実施したので報告する。

1. 調査方法

(1) 蛍光X線分析法による定性分析

蛍光X線分析で得られたスペクトルによる定性分析を実施する。また検出された元素のピークの強弱の相対的な比較から、含有の程度を推定する。

分析条件

分析装置 エネルギー分散型蛍光X線分析計SEA2010L

(セイコーインスツルメンツ株式会社製、徳島県立埋蔵文化財総合センター設置)

管電圧 15kV (10keV以下のスペクトル…減圧状態で、主にNa~Caの軽元素分析用)
50kV (38.45keVまでスペクトル)

照射径 10mm

電流 255mA (15kV時), 63mA (50kV時)

測定時間 800秒 (50kV, 15kVで各300秒)

測定室 真空 (減圧状態)

その他 試料は孔にフロロカーボン製の釣り糸を通し測定位置に固定した。釣り糸のみの測定では、非常に微弱なピークを検出するが、ガラス製品の測定値へはほとんど影響しないと思われる。

(2) マイクロスコープによる拡大観察

徳島県立博物館に設置されているマイクロスコープVH-8000 (株式会社キーエンス製) で資料表面および内部状況の拡大観察と写真撮影を実施する。

(3) X線透過写真による内部調査

2. 調査結果 (表1)

試料は色調によって5種類に分類される。それぞれの色調ごとの特徴と材質及び着色の因子について検討する。

(1) 濃緑青色 (No.10)

全ての試料からNa、Al、Si、Ca、Kを検出し、AlがCaよりも強く検出されたことから、アルミナを多く含むタイプのソーダ石灰ガラスと思われる。着色にはCu、Fe、Mnの関与が認められ、Cuが強く検出されたことが特徴的である。また、わずかにPb、Sn、Baが検出された。

表面は滑らかで、透明感も高い。青緑色 (No.16、No.17) と比べると暗い色調である。Na、Al、Ca、Kを検出したことからソーダ石灰ガラスである。

(2) 青色 (No.11、No.12、No.13、No.14、No.15、No.19)

全ての試料からNa、Al、Si、Ca、Kを検出し、CaがAlよりも強く検出されたことから、アルミナ分をあまり含まないタイプのソーダ石灰ガラスと思われる。着色にはFe、Cu、Mn、Coの関与が認められ、Coの検出とFeが強く検出されたことが特徴である。青紺色のグループと比較するとCoはやや強く検出され、Pbは弱く検出されている。これ以外の部分では青色のグループと青紺色のグループは大変よく似たスペクトルを示しており、Co、Pbの差が色調や質感の差に影響している可能性がある。

表面は、側面では中心孔に平行する浅い溝が多く、木口では中心孔と同心円状の浅い溝が多数見られる。透明感は低く感じられるが、表面の凹凸が影響していると考えられ、凹凸の少ない部分では内部の気泡等が観察できるため、実際の透明度は比較的高いと思われる。

(3) 青緑色 (No.16、No.17)

全ての試料からNa、Al、Si、Ca、Kを検出し、AlがCaよりも強く検出されたことから、アルミナを多く含むタイプのソーダ石灰ガラスと思われる。着色にはFe、Cuの関与が認められ、Fe、Cu共に強く検出されたことが特徴的である。非常に微弱であるがPbとBaが検出されていることも特徴としてあげられる。

表面は滑らかで、透明感も高い。濃緑青色 (No.10) と比べると、明るい色調である。Na、Al、Ca、Kを検出したことからソーダ石灰ガラスである。

(4) 青紺色 (No.20、No.21、No.22、No.23、No.24、No.25、No.26、No.27、No.28)

全ての試料からNa、Al、Si、Ca、Kを検出し、CaがAlよりも強く検出されたことから、アルミナ分をあまり含まないタイプのソーダ石灰ガラスと思われる。着色にはFe、Cu、Mn、Coの関与が認められ、Coの検出とFeが強く検出されたことが特徴である。またPbを少し強く検出していることも特徴といえる。表面は、側面では半球形のくぼみが多数あるものと、比較的滑らかなものがある。木口では中心孔と同心円状の浅い溝が多数見られる。透明感は低く感じられるが、表面の凹凸が影響していると考えられ、凹凸の少ない部分では内部の気泡等が観察できるため、実際の透明度は比較的高いと思われる。

(5) 緑色 (No.29)

全ての試料からNa、Al、Si、Ca、Kを検出し、AlがCaよりも強く検出されたことから、アルミナを多く含むタイプのソーダ石灰ガラスと思われる。着色にはFe、Cu、Mnの関与が認められ、Feが強く検出されたことが特徴である。また、Pb、Snを少し強く、Baを非常に弱く検出していることも特徴である。

表面は少し凹凸があり、不透明で内部の状態は外観からは観察できない。

3. まとめ

(1) ガラス玉の材質

荒川遺跡で出土したガラス玉は全てアルカリ珪酸塩ガラスのソーダ石灰ガラスであった。ソーダ石灰ガラスはアルミナの含有量に差があることが知られている。本調査では定量分析に至らず断定はできないが、スペクトルのピーク差によって、荒川遺跡出土資料でもアルミナが多いタイプの色調 (濃緑青色、青緑色、緑色) と少ないタイプ (青色、青紺色) に分かれる。また全ての資料から、Pbが検出されるがいずれも微弱であった。その中でも強弱があり、強めのもの (青紺色、

緑色)と弱めのもの(濃緑青色、青色、青緑色)に分かれる。

色調については、青系統色はFe、Mn、Coによる着色が特徴である。Coは青色の方が青紺色よりも強く検出される。両者はPbのピークにも差が見られるが、その他の元素のピークは類似しており、色調の差はCoとPbの差による可能性が高い。濃緑青色、青緑色ではFeとCuのピークが高いことが特徴である。

濃緑青色はCuのピークが高く、青緑色はFeが高い。KやCaの差もあるが、高アルミナ含有タイプであることは共通しており、色調差はCuとFe、それにMnの含有量差によると推定される。緑色はFeのピークが特徴的でCu、Mnの影響も考えられる。

(2) 製作技法など

拡大観察やX線写真によれば、大半の資料で内部に含まれる大小の気泡や不純物が確認できる。透明度が高い資料では、微細気泡が孔に平行して直列に並ぶものや孔に平行して貫通する空洞を持つものが確認でき、これらは引き延ばし技法で制作されたと推定される。

表面の観察では、木口面で孔を中心として同心円を描くような溝が観察される資料がある。X線画像でも、No.20、No.25で同様の線が観察される。このような資料では、側面部も表面の凹凸(孔に平行する多数の筋やランダムな半球状くぼみ)の影響で内部観察が困難で、かろうじて大小の気泡を確認することができるが、その方向性までは特定できない。形態としては側面と木口の境が滑らかで全体的に丸みを帯びる形状のものである。一方同色同材質の資料で、円筒形で側面、木口面の境がはっきりしているNo.25、No.26は、表面が滑らかで内部観察が容易である。これらは気泡の状態から引き延ばし技法で制作されたと推定できる。先に述べたようにNo.25では木口面で同心円を描く溝がX線で確認されるなど、前者の共通する特徴も示している。

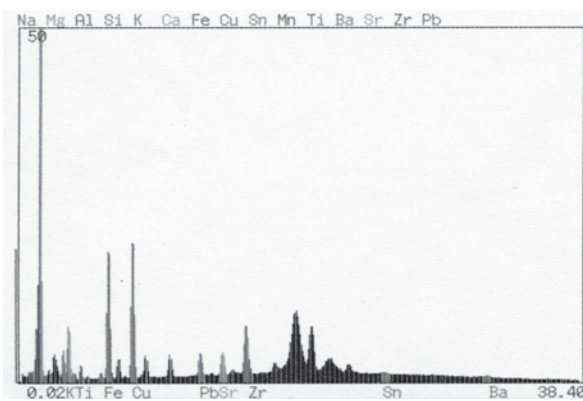
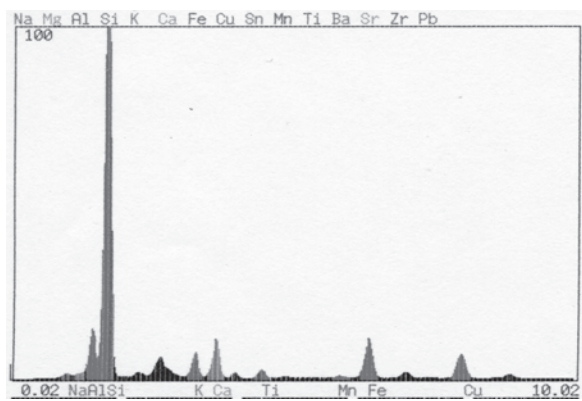
最後に本調査にあたって、デジタルマイクロスコープでの観察、写真撮影においては魚島純一氏に指導と協力をいただいた。記して感謝します。

参考文献

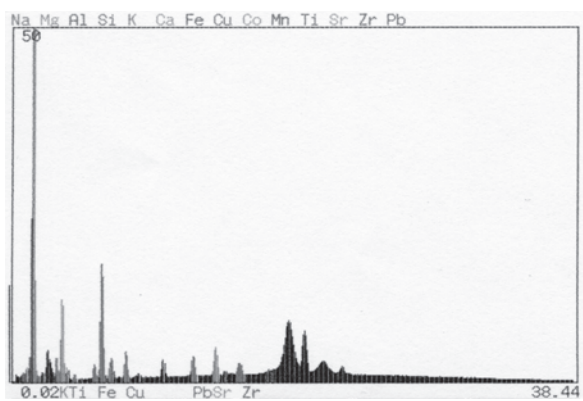
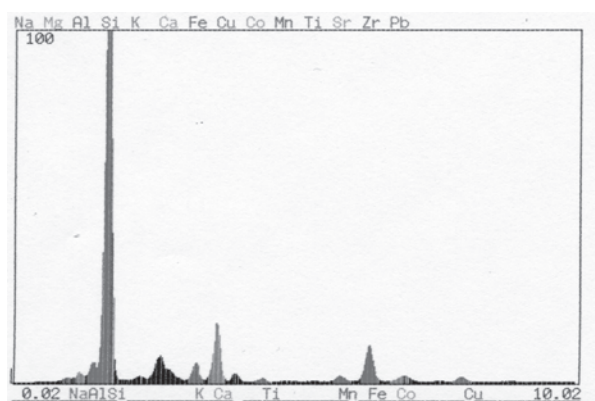
肥塚隆保「古代珪酸塩ガラスの研究—弥生～奈良時代のガラス材質の変遷—」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集 1995

旧遺物番号 掲載番号	ガラスの材質分類	Pb、Sn、Ba の状態	色系統	着色剤	透明度 (透明感)	表面の状態
10 309	ソーダ石灰ガラス	Pb弱、Sn弱、 Ba弱	濃緑青色	Cu、Fe、Mn	高	微細な傷
11 313	ソーダ石灰ガラス	Pb弱	青色	Fe(強)、 Cu、Mn、Co	低	側面 中心孔に平行する筋 木口 中心孔と同心円状の筋
12 310	ソーダ石灰ガラス	Pb弱	青色	Fe(強)、 Cu、Mn、Co	中高	微細な傷
13 312	ソーダ石灰ガラス	Pb弱	青色	Fe(強)、 Cu、Mn、Co	低	側面 中心孔に平行する筋 木口 中心孔と同心円状の筋
14 311	ソーダ石灰ガラス	Pb弱	青色	Fe(強)、 Cu、Mn、Co	低	側面 中心孔に平行する筋 木口 中心孔と同心円状の筋
15 308	ソーダ石灰ガラス	Pb弱	青色	Fe(強)、 Cu、Mn、Co	低	側面 中心孔に平行する筋 木口 中心孔と同心円状の筋
16 315	ソーダ石灰ガラス	Pb弱、Ba弱	青緑色	Fe、Cu	高	微細な傷
17 314	ソーダ石灰ガラス	Pb弱、Ba弱	青緑色	Fe、Cu	高	微細な傷
19 279	ソーダ石灰ガラス	Pb弱	青色	Fe(強)、 Cu、Mn、Co	低	側面 中心孔に平行する筋 木口 中心孔と同心円状の筋
20 285	ソーダ石灰ガラス	Pb中、Sn弱	青紺色	Fe(強)、Cu、 Mn、Co(弱)	低	側面 中心孔に平行する筋 木口 中心孔と同心円状の筋
21 280	ソーダ石灰ガラス	Pb中、Sn弱	青紺色	Fe(強)、Cu、 Mn、Co(弱)	低	側面 中心孔に平行する筋 木口 中心孔と同心円状の筋
22 283	ソーダ石灰ガラス	Pb中、Sn弱	青紺色	Fe(強)、Cu、 Mn、Co(弱)	低	側面 中心孔に平行する筋 木口 中心孔と同心円状の筋
23 290	ソーダ石灰ガラス	Pb中、Sn弱	青紺色	Fe(強)、Cu、 Mn、Co(弱)	低	側面 中心孔に平行する筋 木口 中心孔と同心円状の筋
24 284	ソーダ石灰ガラス	Pb中、Sn弱	青紺色	Fe(強)、Cu、 Mn、Co(弱)	低	側面 中心孔に平行する筋 木口 中心孔と同心円状の筋
24 284	ソーダ石灰ガラス	Pb中、Sn弱	青紺色	Fe(強)、Cu、 Mn、Co(弱)	低	側面 中心孔に平行する筋 木口 中心孔と同心円状の筋
25 289	ソーダ石灰ガラス	Pb中、Sn弱	青紺色	Fe(強)、Cu、 Mn、Co(弱)	低	微細な傷
27 286	ソーダ石灰ガラス	Pb中、Sn弱	青紺色	Fe(強)、Cu、 Mn、Co(弱)	低	側面 中心孔に平行する筋 木口 中心孔と同心円状の筋
28 281	ソーダ石灰ガラス	Pb中、Sn弱	青紺色	Fe(強)、Cu、 Mn、Co(弱)	低	側面 中心孔に平行する筋 木口 中心孔と同心円状の筋
29 291	ソーダ石灰ガラス	Pb弱、Sn弱、 Ba弱	緑色	Fe(強)、 Cu、Mn、Co	半透明	微細な傷

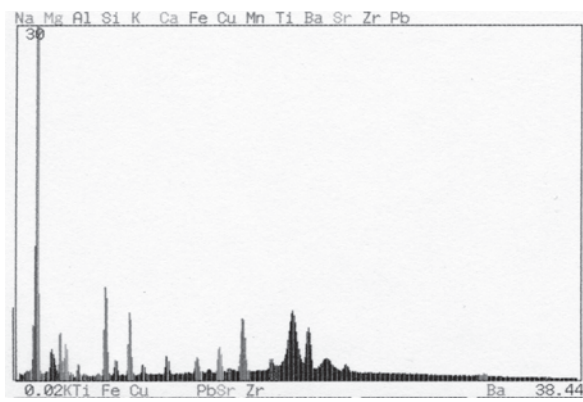
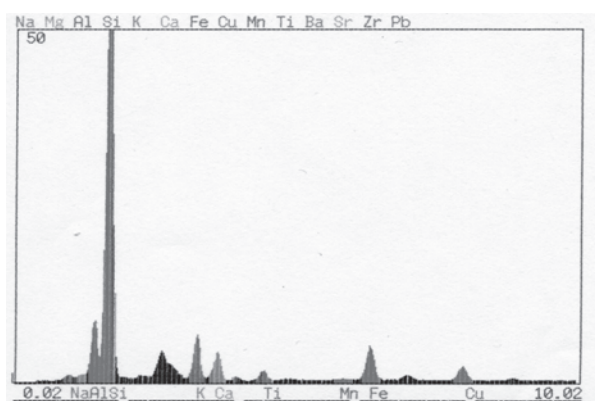
第5表 調査結果一覧



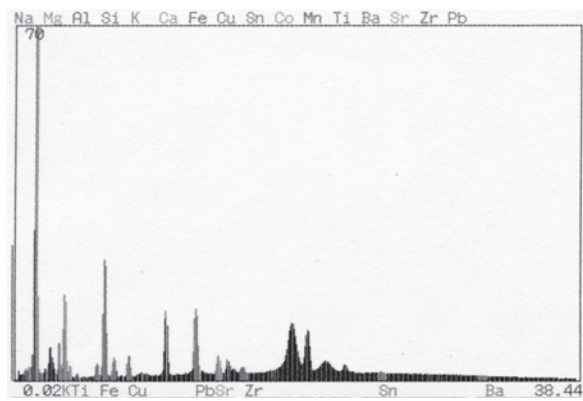
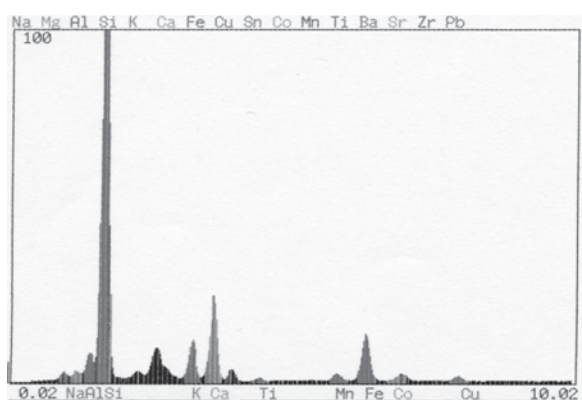
第382図 濃緑青色の蛍光X線スペクトル



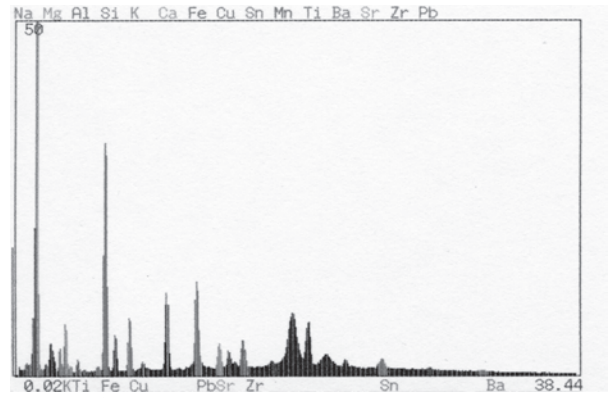
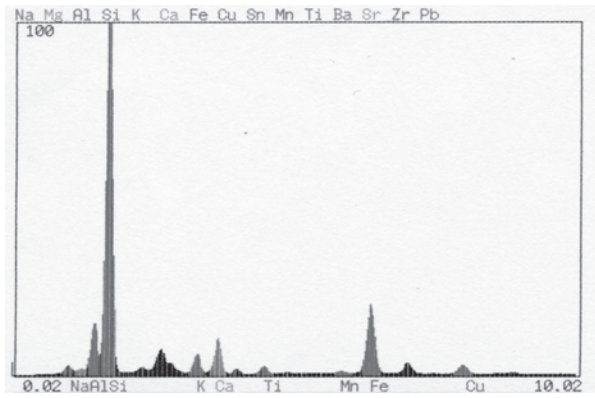
第383図 青色の蛍光X線スペクトル



第384図 緑青色の蛍光X線スペクトル



第385図 青紺色の蛍光X線スペクトル



第386図 濃緑青色の蛍光X線スペクトル

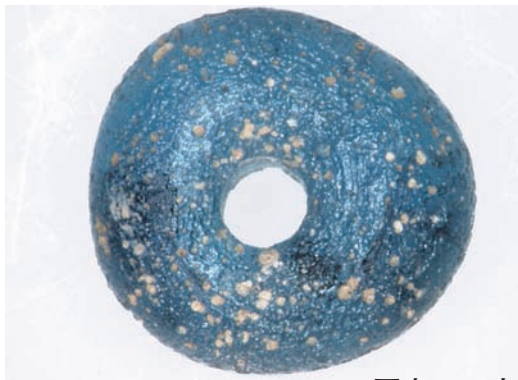


写真13 青色のガラス玉 (No.19)
内部の気泡列が観察できる。

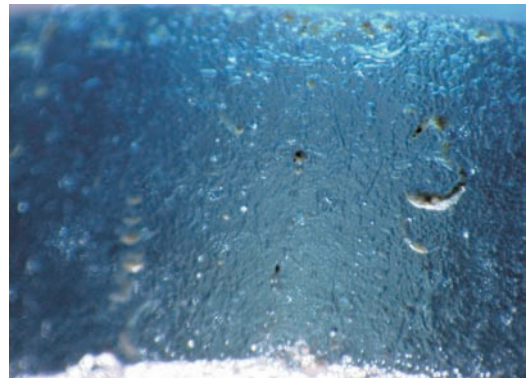
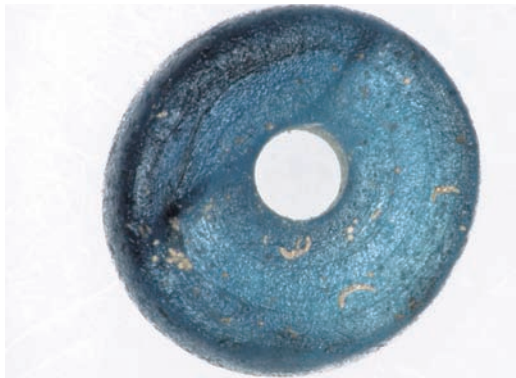


写真14 青紺色のガラス玉 (No.25)
表面に半球状の凹凸が多数見られ内部観察は困難だが、気泡列も確認できる。

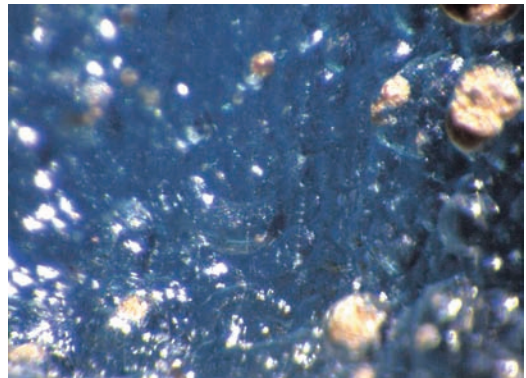
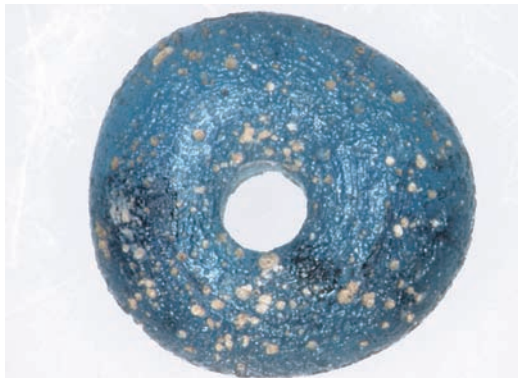


写真15 青紺色のガラス玉 (No.20)
表面に半球状の凹凸が多数見られ内部観察は困難だが、気泡列も確認できる。

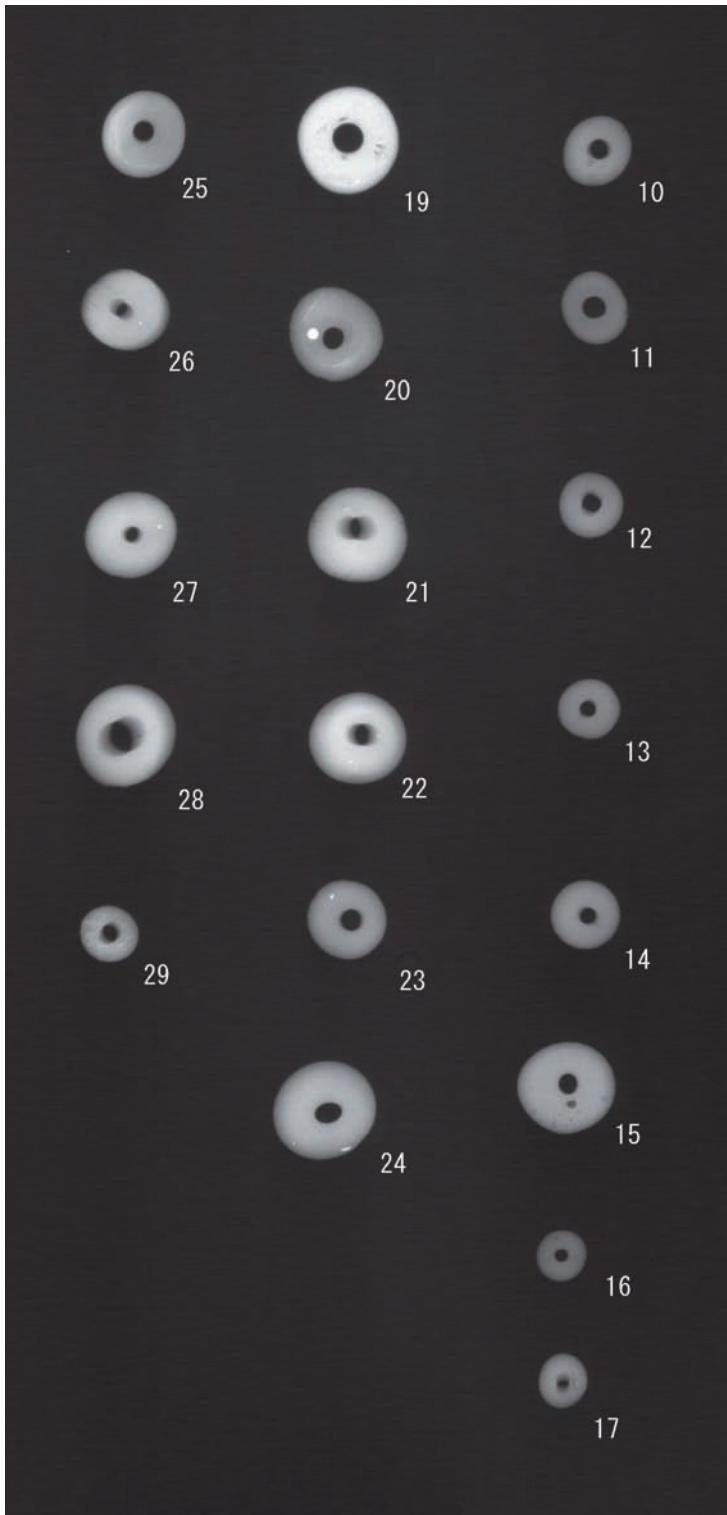


写真16 X線画像 木口面

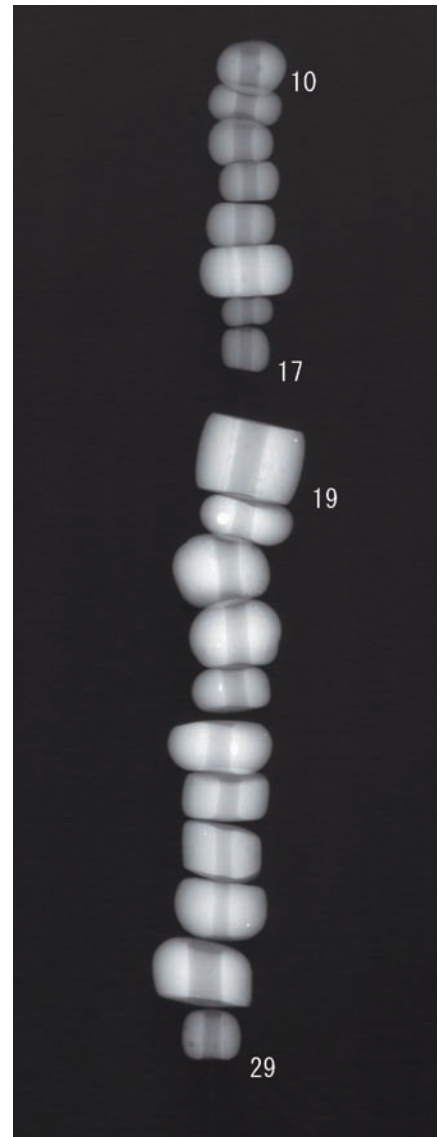


写真17 X線画像 側面

